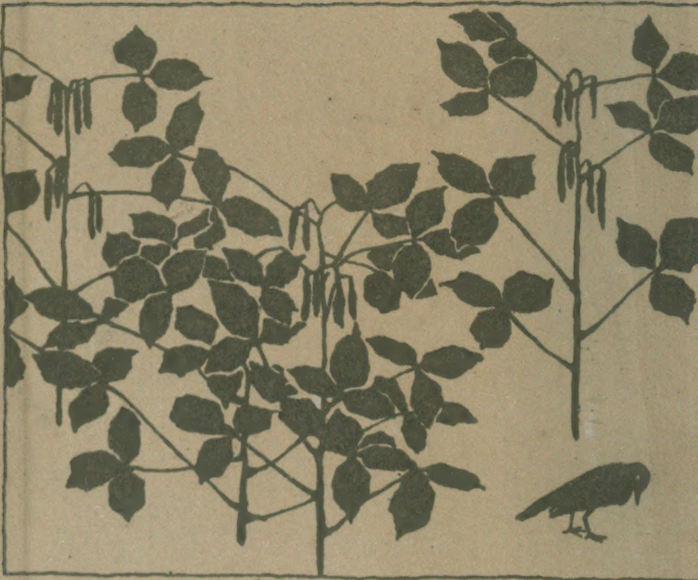
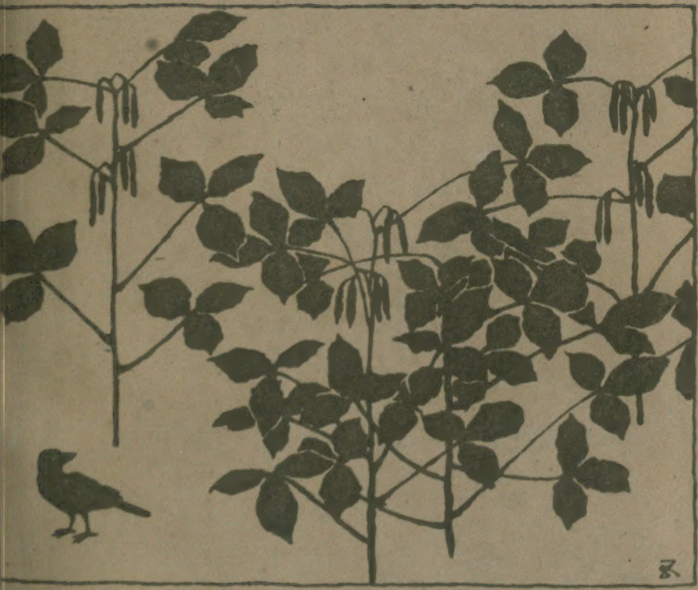




大正三年五月十七日印刷
大正三年五月二十日發行

有朋堂文庫
源氏物語二
（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

ふ心のうちぞ幼かりける。常よりも御さしいらへ無ければ、すさまじく、強ひて聞ゆべき事にもあらねば、ひき忍びて、例の書く、(一)

侍従　一日はつれなし顔をなむ、めざましうと許し聞えざりしを、見ずもあらぬや如何に。(二)あなかけ〳〵しや。

と、はやりかに走り書きて、

侍従　いまさらにいろにないでそ山櫻およばぬ枝にこゝろかけきと(三)かひなき事を。

とあり。

(一)小侍従が返事を書く

(二)蹴鞠の日には君が何くはぬ顔をして來られしを目ざましく思ひて居たりしに、見ずもあらず見もせぬと仰せらるゝは解し難し

(三)及ばぬ女三に心をかけたりといふ事を今になりて人に知らせ給ふな

など書きて、

柏木よそに見てをらぬ歎きはしげれどもなごり戀しき花の夕かげ

とあれど、(一)(二)一日の心も知らねば、たゞ世の常のながめにこそはと思ふ。(三)御前に人しげからぬ程なれば、この文をもて參りて、侍従(四)「この人の、かくのみ忘れぬものに、(五)ことゝひものし給ふこそ煩はしく侍れ。(六)心苦しげなる有樣も、見給へあまる心もやそひ侍るらむと、自らの心ながら知りがたくなむ」と、うち笑ひて聞ゆれば、女三「いとうたてある事をも言ふかな」と、何心もなげに宣ひて、文ひろげたるを御覧ず。(七)「見もせぬ」といひたる所を、あさましかりし(八)御簾のつまを思し合せらるゝに、御面赤みて、(九)大臣の、さばかり、ことの次ごとに、源(一〇)「大將に見え給ふな。(一一)いはけなき御有樣なめれば、おのづからとりはづして(一二)見奉るやうもありなむ」と、いましめ聞え給ふを(一三)思し出づるに、(一四)大將のさる事のありしと語り聞えたらむ時、いかにあばめ給はむと、人の見奉りけむ事をば思さで、まづ(一五)憚り聞え給

(一)女三を垣間見たるのみにて近づき得ざれば、彌〻嘆は增れども猶其日の事のみ戀しく思はる
(二)小侍従は垣間見の一條を知らず歌の意がよくわからぬ故
(三)女三の
(四)柏木が
(五)手紙をよこされるのが
(六)柏木の切なる戀には打棄て置かれず、媒をする氣にもなりそうにて
(七)文の「見ずもあらず見もせぬ」の歌を引きたる所
(八)御簾のつまが猫の綱の爲に上に揚りし時の事
(九)源があれ位機會のある每に
(一〇)夕霧に見らるゝなる故
(一一)女三は心が幼稚なる故
(一二)夕霧が
(一三)女三が
(一四)女三の心、夕霧が斯く〳〵て女三を見たりと源に話す事もあらば源が如何に叱るならんと
(一五)源を怖がる

(廿三) 柏木小侍從を介して文を女三宮に贈る

（一）柏木
（二）欠頭中の家
（三）わが心がらで
（四）我程の地位器量で
（五）柏木の心
（六）せめてあの蹴鞠の時位にでも
（七）女三の
（八）何をしても人の目に立たぬ身分の人は
（九）女三位の身分の人は滅多に出歩かぬ故隙見する事も出來ず
（一〇）思の晴らし樣なく
（一一）柏木の心
（一二）「御垣が原」は禁中なり、こゝは六條院をいふ
（一三）侍りしに
（一四）女三が我を見てどの位輕蔑の心を起し給ひけん
（一五）「見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなく今日やながめくらさん」

（一）かんの君は、猶おほいとのの東の對に、獨住にてぞものし給ひける。思ふ心ありて、年頃（二）かゝる住居をするに、（三）人やりならずさう〴〵しく、心細きをり〳〵あれど、（四）我が身かばかりにて、などか思ふ事かなはざらむ、とのみ心おごりするに、この夕より頭痛く、物おもはしくて、（五）如何ならむをりにか、（六）また然ばかりにてもほのかなる（七）御有樣をだに見む、（八）ともかくもかき紛れたるきはの人こそ、假初にもたはやすき物忌、方違のうつろひも輕々しきに、（九）おのづから、とかく物の隙を覗ひつくるやうもあれ、など、（一〇）思ひやる方なく、（一一）深き窓のうちに、何ばかりのことにつけてか、かく深き心ありけりとだに知らせ奉るべき、と胸いたくいぶせければ、小侍從がり、例の文やりたまふ。

柏木　一日の風にさそはれて、（一二）御垣が原をわけ入りて（一三）はべしに、いとゞいかに見（一四）おとし給ひけむ。その夕より、みだり心地かきくらし、（一五）あやなく今日をながめくらし侍る。

(一)飛んでもない事
(二)紫は普通の女の樣でなく子どもの時分から育てた故睦まじさも尋常でないといふ丈の事であらう
(三)喧しいやめ給へ、そんな事を言つても實情は分つて居る
(四)女三が氣の毒な場合が屢あるではないか
(五)女三は一通ならず父帝に寵愛せられし姫君なるに、其を疎末にするとはけしからぬ事ぢや
(六)鶯を源に、櫻を女三にたとへたり
(七)夕霧の心、つまらぬ心配をしたものぢや、察しの通り女三に戀して居ると見える
(八)紫を本妻として心を移さぬ源もまた女三をはじめ他の美人達を顧みぬといふ筈はない
(九)さう一筋に物を言つたものではない
(一〇)柏木に女三の噂をさせずに仕舞ひたり

もあらで、具し給ひにたらむこそ心苦しけれ」と、あいなく言へば、夕「たい〳〵(一)しき事、いかでか然はあらむ。此方は、(二)樣かはりておふしたて給へる睦の、けぢめばかりにこそあゝべかゝめれ。宮をば方々につけて、いとやむごとなく思ひ聞え給へるものを」と語り給へば、柏木「いで、(三)あなかま給へ。皆聞きて侍る、(四)いといとほしげなる折々あゝなるをや。さるは世に(五)おしなべたらぬ人の御おぼえを、ありがたきわざなりや」と、いとほしがる。

柏木「いかなれば花に木づたふ鶯の(六)さくらをわきてねぐらとはせぬ

春の鳥の、櫻ひとつにとまらぬ心よ。あやしと覺ゆる事ぞかし」と、口ずさびに言へば、いで、(七)あなあぢきなの物扱ひや、さればよ、と思ふ。

夕「みやま木にねぐらさだむるはこ鳥も(八)いかでか花の色にあくべき

理なきこと、(九)ひた趣きにのみやは」と答へて、煩はしければ、(一〇)ことに言はせずなりぬ。異事に言ひ紛らはして、おの〳〵別れぬ。

か。何事も人に(一)異なるけぢめをば、しるし傳ふべきなり。家の傳などに、かき留め入れたらむこそ、興はあらめ」など戯れ給ふ御さまの、(二)匂ひやかに淸らなるを見奉るにも、(三)かゝる人にならびて、いかばかりの事にか、心をうつす人は物し給はむ、何事につけてか、(四)哀と見許し給ふばかりは、なびかし聞ゆべき、と思ひめぐらすに、いとこよなく、(五)御あたりはるかなるべき身の程も、思ひ知らるれば、胸のみふたがりてまかで給ひぬ。

(六)大將の君ひとつ車にて、道のほど物語し給ふ。柏木「猶この頃の徒然には、この院に參りて紛らはすべきなりけり。今日のやうならむ暇の日待ちつけて、花のをりすぐさず參れ、(七)と宣ひつるを、春惜みがてら、月の内に、小弓持たせて參り給へ」と語らひ契る。おの〳〵別るゝ道の程物語し給うて、(八)宮の御事のなほ言はまほしければ、柏木(九)「院には猶この對にのみ物せさせ給ふなゝめりな。(一〇)かの御覺の異なるなゝめりかし。この宮いかに思すらむ。(一一)帝の竝なくならはし奉り給へるに、さし

(一)人に勝れた點は何でも書き傳へるがよし
(二)君の家の系圖に君が鞠の上手なる趣を記入しおかば面白かるべし
(三)柏木の心、源を夫に持ちては假令どんな事があつても誰が愛を他人に移すものか
(四)何として我が切なる戀を哀と思ふ樣に女三の心を取込んだものであらう
(五)女三には到底近づきがたき我が身分が分りて
(六)夕霧柏木と同車にて
(七)源が
(八)女三
(九)源は紫の方にのみ居給ふと見える
(一〇)紫が特別の御氣に入りと見える女三の思はくはどうであらう
(一一)朱雀の寵愛は無雙なりしに、嫁入後はさ程の寵愛を受けられぬは氣の毒也

御簾のすきかげ(一)、思ひ出づる事やあらむと思ひ給ふ。(二)いと端近なりつる有樣を(三)、かつは輕々しと思ふ(四)らむかし、いでや此方(五)の御有樣の、さはあるまじかンめるものをと思ふに、(六)かゝればこそ世のおぼえの程よりは、内々の御志ぬるきやうにはありけれと、思ひ合せて、なほ(七)内外の用意多からず、いはけなきは、らうたき樣なれど、うしろめたき樣なりや、と思ひ貶さる。(八)宰相の君は、(九)よろづの罪をもをさをさたどられず、覺えぬ物の隙より、ほのかにそれと(一〇)見奉りつるにも、我が昔よりの志のしるしあるべきにやと、契嬉しき心地して、飽かずのみ覺ゆ。院は昔物語しいで給ひて、源「太政大臣の、萬の事に(一一)たちならびて、勝負のさだめし給ひし中に、鞠なむえ及ばず(一二)なりにし。はかなき事は(一三)、傳へあるまじけれど、ものの筋は猶こよなかりけり。いと目も及ばず、かしこうこそ見えつれ」と宣へば、うちほゝゑみて、柏木「はかゞしき(一四)方にはぬるく侍る家の風の、さしも吹き傳へ侍らむに、後の世のため異なる事なくこそ侍りぬべけれ」と申し給へば、源「いかで

(一)女三の姿
(二)夕霧の心
(三)女三の
(四)柏木が
(五)紫ならば中々あの樣な不謹愼な擧動はあるまじきにと
(六)夕霧の心、是だから原の女三に對する愛情が世間で思ふ程では無いのぢやわいと
(七)すべてにつけて注意足らず、子供らしき女は可愛き樣なれど不安心なものぢやと
(八)柏木、參議(宰相)兼右衞門督也
(九)女三の種々の缺點を考へる心の餘地がなく
(一〇)女三を
(一一)我と對抗して
(一二)我が頭中には及ばざりき
(一三)鞠の如き小藝は別に傳授もあるまじけれど上手な人の子供は違つたものぢや
(一四)實用の材幹に乏しき私の家の遺傳を受けたらば、我の身にとりて後世に傳ふべき事は何もあるまじ

らず打ち歎かる。ましてさばかり心をしめたる衞門督は、(一)胸つとふたがりて、誰(二)ばかりにかはあらむ、こゝらの中にしるき袿姿よりも、人に紛るべくもあらざりつる御けはひなど、(三)心にかゝりて覺ゆ。さらぬ顏にもてなしたれど、(四)まさに目とゞめじやと、大將はいとほしく思さる。理なき心地のなぐさめに、(五)猫を招きよせて、かき抱きたれば、いとかうばしくて、らうたげに打ち鳴くも、なつかしく思ひよそへらるゝぞ、好々しきや。

大臣御覽じおこせて、「上達部の座、(六)いと輕々しや。此方にこそ」とて、對の南面に入り給へれば、皆そなたに參り給ひぬ。(七)宮も居直り給ひて、御物語し給ふ。つぎつぎの殿上人は、簀子に圓座召して、わざとなく、(八)椿餅、梨、柑子樣のものども、さまざまに、箱の蓋どもにとり雜ぜつゝあるを、若き人々そぼれ(九)とり食ふ。さるべき干物(一〇)ばかりして、御土器まゐる。衞門督は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつけてながめやる。大將は、(一一)心知りに、怪しかりつる

(一)女三に熱心なる柏木は
(二)あれは誰ならん
(三)袿姿で大概女三とは推測せらるれど、其よりもどうしても女三としか思はれぬ容姿が氣にかゝる
(四)柏木が見ぬ振はして居たれど注意して見たに違なしと
(五)柏木が
(六)夕霧柏木等の居所が餘り端近なり
(七)螢
(八)椿の葉にて包みたる餅、鞠場にて用ふる菓子なりとぞ
(九)打解けて取合ふ
(一〇)乾魚を肴にして酒を饗す
(一一)柏木の心中を察して

東のそばなれば、紛れ所もなく顯に見入れらる。紅梅にやあらむ、濃き薄きす(一)ぎすぎに、數多重なりたるけぢめ花やかに、草紙(二)のつまのやうに見えて、櫻の織物の細長なるべし。御髪の、すそまでけざやかに見ゆるは、絲をよりかけたるやうに靡きて、すそ(三)のふさやかにそがれたる、いと美しげにて、七八寸ばかりぞ餘(四)り給へる。御衣(五)の裾がちに、いと細くさゝやかにて、姿つき髪のかゝり給へるそばめ、言ひ知らずあてにらうたげなり。夕かげなれば、さやかならず、奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。鞠に身を(六)なぐる若公達の、花のちるを惜みもあへぬ氣色どもを見るとて、人々(七)あらはを、ふともえ見つけぬなるべし。猫のいたく啼けば、見(八)返り給へる面もちもてなしなど、いとおいらかにて、若く美しの人やと、ふと見えたり。大將いとかたはらいたけれど、這(九)ひ寄らむもなか〳〵いと輕々しければ、唯心(一〇)を得させて、うちしはぶき給へるにぞ、やをらひき入り給ふ。さるは我が(一一)心地にも、いと飽かぬ心地し給へど、猫の綱(一二)ゆるしつれば、心にもあ

(一)次々に、次第に
(二)册子の小口の樣に、此頃の册子は色々の色の紙を重ねて綴ぢ合せたるが多し
(三)髮先
(四)背丈よりも
(五)着物の裾が賑しく見えて身體は細く小さく見ゆる也
(六)身を忘るゝ
(七)侍女等も女三の斯迄あらはに見ゆるに氣がつかぬなるべし
(八)女三が
(九)自分で簾を直しに行くも輕々しき擧動故
(一〇)注意の爲にせきをしたのでそろりと女三が隱れたり
(一一)夕霧自身の
(一二)引懸りたる綱をゆるめたれば





（一）中段
（二）「春風は花のあたりをよぎて吹け心づからやうつろふと見ん」
（三）女三
（四）女三方の癖として例の如く取締りなき様子にて
（五）侍女等の衣裳の端々が簾の外へ
（六）古旅行の時難所にかゝる時は山川の神にぬさを手向けて無事を祈りし也
（七）引きあふ
（八）侍女等
（九）女三也

花の雪のやうに降りかゝれば、打ち見上げて、しをれたる枝少し押し折りて、御階の中のしな（一）の程に居給ひぬ。かんの君つゞきて、柏木「花亂りがはしく散るめりや。櫻（二）はよぎてこそ」など宣ひつゝ、宮（三）の御前の方を後目に見れば、例（四）のことにをさまらぬけはひどもして、色々こぼれ出でたる御簾（五）のつま〲すきかげなど、春の手向（六）の幣袋にやと覺ゆ。御几帳どもしどけなく引き遣りつゝ、人げ近く世づきてぞ見ゆるに、唐猫のいと小くをかしげなるを、少し大なる猫の追ひ續きて、俄に御簾のつまより走り出づるに、人々おびえ騒ぎて、そよ〱と身じろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしましき心地す。猫はまだよく人にもなつかぬにや、綱いと長くつきたりけるを、物にひきかけ纒れにけるを、逃げむとひこじ（七）ろふ程に、御簾のそばいと顯に引き揚げられたるを、頓にひきなほす人もなし。この柱のもとにありつる人々（八）も、心あわたゞしげにて、物怖したるけはひどもなり。几帳の際少し入りたる程に、袿姿にて立ち給へる人（九）あり。端より西の二の間の

(一)蹴鞠は餘り品もよからず騷がしき遊なれど、場所柄人柄で優美に見ゆる
(二)芽出しの柳なるべし、鞠場には柳を植う
(三)鞠は小技なれど
(四)柏木
(五)柏木の樣子
(六)蹴鞠に熱心なるを
(七)源も女三も
(八)蹴鞠の番數
(九)冠の紐が少しゆるみたる也
(一〇)身分を考へれば餘り戲れ過ぎる樣に思はれもするが

給ひて、えならぬ花の影にさまよひ給ふ夕ばえ、いと淸げなり。をさ〳〵、(一)樣よく靜ならぬ亂れごとなゝめれど、所がら人がらなりけり。故ある庭の木立のいたく霞籠めたるに、いろ〳〵のひも解きわたる花の木ども、(二)わづかなる萠黄の陰に、(三)かくはかなき事なれど、善き惡しきけぢめあるをいどみつゝ、我も劣らじと思ひ顏なる中に、(四)衞門督の假初に立ちまじり給へる足もとに、竝ぶ人なかりけり。(五)容貌いと淸げに、なまめきたる樣したる人の、用意いたくして、さすがに亂りがはしき、をかしく見ゆ。御階の間にあたれる櫻の陰によりて、人々、花の上も忘れて(六)心に入れたるを、(七)大臣も宮も、隅の勾欄に出でて御覽ず。いと勞ある心ばへども見えて、(八)數多くなり行くに、上﨟も亂れて、(九)冠の額少しくつろぎたり。大將の君も、御位の程思ふこそ、例ならぬ亂りがはしさかなと覺ゆれ。見る目は人より(一〇)けに若くをかしげにて、櫻の直衣のやゝ萎えたるに、指貫の裾つかた、少しふくみて、氣色ばかりひきあげ給へる、輕々しくも見えず。物淸げなるうちとけ姿に、

(一)蹴鞠は行儀の惡い遊ではあるが
(二)夕霧を呼びにやりたれば
(三)携帶して來たか
(四)此方へ來て蹴鞠を致すべし
(五)明石姫君
(六)内裏へ
(七)人離れて靜かなり
(八)「はれて」一本「はなれて」とある由、古注にいへり、あちこちより流れ來る遣水の會する所より遠ざかりての意なるべし
(九)鞠場
(一〇)いづれも柏木の兄弟
(一一)年とりたる人も未成年なるも
(一二)丁度よい日
(一三)辨官は太政官にての利役なれば體裁振りて常は鞠遊びなどはせぬ也
(一四)辨官さへ我慢しかねて仲間入する今日なれば
(一五)我程の年輩になりては
(一六)蹴鞠の樣子は輕々しくて老成人の遊には適せずと也
(一七)夕霧も柏木も

せ給ふ。大將の君は、丑寅の町に、人々數多して、鞠もてあそばして見給ふと聞しめして、源「(一)みだりがはしき事の、さすがに目さめてかど〱しきぞかし。いづら此方に」とて(二)御消息あれば、參り給へり。若君達めく人々多かりけり。源「(三)鞠持たせ給へりや、誰々か物しつる」と宣ふ。夕「これかれ侍りつ。(四)此方へまかでむや」と宣ひて、寢殿の東面、桐壺は(五)若宮具し奉りて、(六)參り給ひにし頃なれば、此方は(七)隱ろへたりけり。遣水などのゆきあひはれて、(八)よしあるかゝりの(九)程を尋ねて立ち出づ。太政大臣殿の君達、(一〇)頭辨、兵衛佐、大夫の君など、(一一)過したるもまだかたなりなるも樣々に、人より勝りてのみ物し給ふ。やう〱暮れかゝるに、風(一二)吹かずかしこき日なりと興じて、(一三)辨の君もえしづめず立ちまじれば、大臣、源「(一四)辨官もえをさめあへざめるを、上達部なりとも、若き衞府司たちは、などか亂れ給はざらむ。(一五)かばかりの齢にては、怪しく見過す、口惜しく覺えしわざなり。さるはいと(一六)輕々なりや、この事のさまよ」など宣ふに、(一七)大將もかんの君も、皆おり

しく胸いたき心地すれば、猶え思ひ離れず。そのをりより語らひつきにける女房(一)のたよりに、御有様(二)なども聞きつたふるを、慰に思ふぞはかなかりける。「對の上(三)の御けはひには、猶おされ給ひてなむ」と、世の人もまねび傳ふるを聞きては、辱(四)くとも、さるもの(五)は思はせ奉らざらまし、げに類(六)なき御身にこそ當らざらめと、常にこの小侍從といふ御ちぬし(七)をも、いひ勵まして、世の中定なきを、大(八)臣の君もとより本意ありて、思しおきてたる方に赴き給はばと、たゆみなく思ひありきけり。

三月ばかりの空うらゝかなる日、六條院に、兵部卿宮(九)、衛門督(一〇)など參り給へり。大臣出で給ひて、御物語などし給ふ。源「靜なる住居は、この頃こそいとつれ〲に紛るゝ事なかりけれ。公私に事無しや。何わざしてかは暮すべき」など宣ひて、源「今朝大將(一一)の物しつるは何方にぞ。いとさう〲しきを、例の小弓射させて見るべかりけり。好むめる若人どもも見えつるを、ねたう出でやしぬる(一二)」と問は

(一)女三方の侍女
(二)女三の
(三)常には女三も壓倒されて居らるゝと
(四)柏木の心
(五)自分が娶りたらば女三に今の如く氣をもませる事はあるまじ
(六)女三の如き貴き人の夫たるには足らぬ我なれど
(七)女三の乳母の子
(八)源が宿望たる出家を遂げ給はゞ其時こそ女三を手に入れんと
㉝　六條院の蹴鞠の會、柏木女三宮を垣間見る
(九)螢
(一〇)柏木
(一一)夕霧が來りしが何處に居るぞ
(一二)生憎往つて仕舞つたかしら

（一）紫の本領として
（二）凌がず
（三）自分の威嚴をもおとさず
（四）曾て野分の折に見し紫の面影
（五）雲井雁も情は深いが
（六）手に入れてもう大丈夫と思ふと氣が緩みて
（七）源の妻妾たちの
（八）女三は身分を考へれば非常に高貴な人なるに
（九）源は特に寵愛もせず上べばかりちやほやするのぢやと合點して居る故
（一〇）別にけしからぬ了簡を起す譯ではなけれど
（一一）柏木
（一二）朱雀院
（一三）女三を朱雀が
（一四）女三の嫁入先につきて色々の相談ありし時分から女三に懸想し
（一五）他人に取られたるは

なく、しづやかなるを本として（一）、さすがに心美しう、人をも消たず（二）、身をもや（三）むごとなく、心にくゝもてなし添へ給へる事と、（四）見し面影も忘れ難くのみなむ思ひ出でられける。（五）我が御北の方も、哀と思す方こそ深けれ、いふかひあり、勝れたるらう〳〵じさなども、物し給はぬ人なり。（六）おだしきものに、今はと見馴るゝに、心ゆるびて、猶かくさま〴〵に集ひ（七）給へる御有樣どもの、とり〴〵にをかしきを、心ひとつに思ひ離れ難きを、ましてこの宮は（八）、人の御程を思ふにも、限なく心ことなる御程に、（九）取りわきたる御氣色にしもあらず、人目の限ばかりにこそと見奉り知るに、（一〇）わざとおほけなき心にしもあらねど、見奉る折ありなむやと、ゆかしく思ひ聞え給ひけり。（一一）衛門のかんの君も、（一二）院に常に參り、親しくさぶらひ馴れ給ひし人なれば、（一三）この宮を父帝のかしづきあがめ奉り給ひし御心おきてなど、くはしく見奉り置きて、（一四）さま〴〵の御定ありし頃ほひより聞え寄り、院にもめざましとは思し宣はせずと聞きしを、（一五）かくことざまになり給へるは、いと口惜

しづき奉り給へれど、をさ〳〵けざやかに物深くは見えず。女房なども大人大人しきは少く、若やかなるかたち(一)人の、ひたぶるに打ち花やぎ、ざればめるはいと多く、數知らぬまで集ひさぶらひつゝ、物思ひなげなる御あたりとはいひながら、何事ものどやかに心しづめたるは、心の中のあらはにしも見えぬわざなれば、身に(二)人知れぬ思ひ添ひたらむも、又實に心地ゆきげに、とどこほり無かるべきにしも打ちまじれば、かたへの人にひかれつゝ、同じけはひもてなしになだらかなるを、唯旦暮は、いはけたる御遊戲に心入れたる童のありさまなど、院(三)はいと目につかず見給ふ事どもあれど、ひとつさまに世の中を思し宣はぬ(四)御本性なれば、かゝる方をもまかせて、さこそはあらまほしからめと、御覽じ許しつゝ、(五)いましめとゝのへさせ給はず。(六)正身の御有樣ばかりをば、いとよく教へ聞え給ふに、(七)少しもてつけ給へり。かやうの事を、大將(八)の君も、げにこそ有難(九)き世なりけれ、紫の御用意氣色の、こゝらの年經ぬれど、(一〇)ともかくももり出で見え聞えたる所

(一)器量よしの
(二)沈着なる人は腹の中がわからぬもので心配のある人も女三の侍女達の中にもあるべきが、其等も心配のなき人等の中に交れば其にひかれて同じ儀に氣樂らしくして居る故
(三)源は氣に入らぬ事もあれど
(四)世の中を杓子定規で解釋する事はせぬ人故
(五)叱つて直させもせず
(六)女三にだけは身の持方をよく教訓する也
(七)女三が少しは氣をつける也
(八)夕霧、以下夕霧の心
(九)完全な女は
(一〇)善しとも惡しとも目にたゝず

御志のみまさるめるかな、げにはた、人より殊に、かく(一)しも具し給へる有樣の、理と見え給へるこそめでたけれ。宮(二)の御方、うはべの御かしづきのみめでたくて、渡り(三)給ふこともえ斜ならざゝめるは、忝きわざなゝめりかし、同じ(四)筋にはおはすれど、今一(五)きはは心苦しく」と後うごち聞え給ふにつけても、我が(六)宿世はいとたけくぞ覺え給ひける。やむ(七)ごとなきだに、思す樣にもあらざゝめる世に、まして立ち(八)交るべき覺にしあらねば、すべて今は恨めしき節もなし。唯かのたえ籠りにたる山住(九)を、思ひやるのみぞ哀に覺束なき。尼君も、唯福地(一〇)の園に種まきてと樣なりし、一言を打賴みて、後の世を思ひやりつゝ眺め居給へり。

大將(一一)の君は、この姬君(一二)の御事を思ひ及ばぬにしもあらざりしかば、目(一三)に近くおはしますを、いとたゞにも覺えず、大方の御かしづき(一四)につけて、此方(一五)には然りぬべきをりをりに參り馴れ、おのづから御けはひ有樣も見聞き給ふに、いと若くおほどき給へる一すぢにて、上の儀式はいかめしく、世の例にしつばかり、もてか(一六)

(一)紫の有樣があの樣に揃つて居るので源の御寵愛も道理と思はれる
(二)女三
(三)源が女三方へ行く事さへ容易ならぬは
(四)女三も紫も共に皇孫なれど、女三は身分高き人故一層お氣の毒也
(五)下の「は」は衍文歟
(六)明石上自身の運のよきを思ふ
(七)高貴の婦人さへ源には愛せられぬのに
(八)自分は高貴の人の間に伍すべき身分でもなければ
(九)入道の
(一〇)善根を施して後の世に極樂に生れ其處にて再會せんといふ意味の入道の文言を力にして
(一一)夕霧
(一二)女三
㊟ 夕霧の女三に對する感情、柏木の女三に對する戀
(一三)六條院に女三が
(一四)世話をやくに托して
(一五)女三方
(一六)源が

（一）紫の
（二）紫の志の有難きことを言ひくらして居る
（三）我をけしからん奴と紫が思ひ居らるゝならば斯く姫君に近づく事は出來ぬ筈なるに
（四）私を人がましく取扱はるゝ故却て恥かしい位
（五）失態なく暮して行かるゝは偏に紫の御かげ
（六）明石上に對してする親切ではあるまい、姫君に紫自身附添ひ居る譯に行かぬ故其役を明石上に讓つたのであらう
（七）明石上も取仕切りて親顏をせぬ故萬事穩かにて我も安心なり
（八）「めやすかなれば」の誤なるべし
（九）人と交るにつけて
（一〇）然るに幸に上述の如く紫も明石上も批難すべき點がなき故
（一一）明石上の心
（一二）紫方へ源が
（一三）紫に對する源の寵が益深くなる事故

の御後見をも、同じ心にて物し給へ」など、忍びやかに宣ふ。明石上「宣はせねど、いとあり難き（一）御氣色を見奉るまゝに、日暮の（二）ことぐさに聞え侍る。（三）めざましきものになど思し許さざらむに、かうまで御覽じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまで、（四）數まへ宣はすれば、かへりては眩ゆくさへなむ。數ならぬ身の、さすがに消えぬは、世の聞耳もいと苦しく、つゝましく思う給へらるゝを、（五）罪なきさまに、もてかくされ奉りつゝのみこそ」と聞え給へば、源「（六）その御爲には、何の志かはあらむ。唯この御有樣を、打添ひてもえ見奉らぬ覺束なさに、讓り聞えらるゝなゝめり。（七）それも又、とりもちて掲焉になどあらぬ御もてなしどもに、萬の事なのめに（八）目安くなれば、いとなむ思ひなく嬉しき。はかなき事にても、物の心得ずひがひがしき人は、（九）たち交らふにつけて、人の爲さへ辛きことありかし。（一〇）然なほし所なく、誰も物し給ふめれば、心安くなむ」と宣ふにつけても、（一一）さりや、よくこそ卑下しにけれなど思ひ續け給ふ。（一二）對へ渡り給ひぬ。明石上「（一三）さもいとやむごとなき

(一) 繼母繼母中惡しき事もあれど、何方か一方が良き人なる時は中の直る事あり
(二) 人を疎む心
(三) 思ひやりなき
(四) 廣く經驗した譯ではないが
(五) 自分の力にし
(六) 紫上
(七) 取締りなくて
(八) 紫以外の女の價打が大抵わかつた樣に思はる
(九) 明石上に對していふ
(一〇) 紫上と
(一一) 明石姫君の

ひ寄らずうらなからむ爲は、引き返し哀に、いかでかゝるにはと、罪得がましきにも、思ひなほる事もあるべし。おほろげの昔の世のあだならぬ人は、違ふ(一)ふしぶしもあれど、ひとり〳〵罪なき時には、おのづからもてなほす例どもあるべかゝめり。さしもあるまじき事に、かど〳〵しく癖をつけ、愛敬なく(二)人をもてはなる心あるは、いと打解けがたく、(三)思ひぐまなきわざになむあるべき。(四)多くはあらねど、人の心の、とあるさまかゝる趣を見るに、故由といひ、さま〴〵に口惜しからぬ際の、心ばせあるべかゝめり。皆おの〳〵得たる方ありて、取る所なくもあらねど、又とりたてて、(五)我が後見に思ひ、まめ〳〵しく選び思はむには、あり難きわざになむ。たゞ誠に心のくせなく善き事は、(六)この對をのみなむ、これをぞおいらかなる人といふべかりけるとなむ思ひ侍る。よしとて、又あまり(七)ひたゝけて頼もしげなきも、いと口惜しや」とばかり宣ふに、(八)かたへの人は思ひやられぬかし。「(九)そこにこそ少し物の心得て物し給ふめるを、いとよく(一〇)睦びかはして、(一一)こ

我ながらも、さるまじき振舞を、かりにてもするかなと思ひし事は、この君の生れ給ひし時に、(一)契深く思ひ知りにしかど、目の前に見えぬ彼方の(二)ことは、覺束なくこそ思ひ渡りつれ、さらばかゝる頼ありて、あながちには望(三)みしなりけり、(四)横様にいみじきめを見、漂ひしも、(五)この人一人の爲にこそありけれ、いかなる願をか、心に起しけむ、とゆかしければ、心の内に(六)をがみてとり給ひつ。(七)源「これはまた具して奉るべきもの侍り。今又聞え知らせ侍らむ」と、女御には聞え給ふ。そのついでに、源「今はかく古の事をもたどり知り給ひぬれど、(八)彼方の御心ばへを疎に思しなすな。もとよりさるべき中、えさらぬ睦びよりも、(一〇)横ざまの人のなげの哀をもかけ、一事の心よせある(九)は、おぼろけの事にもあらず。まして、(一一)こゝになど侍ひ馴れ給ふをみる〳〵も、初の志かはらず、深く懇に思ひ聞えたるを。古の世のたとひにも、(一二)さこそはうはべには育みけなれなど、らう〳〵じきたどりあらむも賢きやうなれど、猶(一三)あやまりても、我がため下の心歪みたらむ人を、さも思

(一)入道のあの如き振舞あるも明石姫君の生るべき因縁ある故也とは其時合點したりしかど
(二)未來の事は
(三)源を聟にせんことを
(四)須磨に退去の事
(五)明石姫君
(六)入道の文を
(七)外に之に添へて御目にかくべき物あり、源自身の願文をいふ
(八)紫上の
(九)當然情をかくべき骨肉の情よりも
(一〇)他人の一寸とした情ある一事につきての親切は仇疎かに思ふべからず
(一一)明石上が姫君に近づく様になりても相變らず
(一二)繼子が繼母を誹りて表面は我を大事にしてくれども内心は知れたものでないなどと巧者らしく邪推する者もあるが共も利口な様ではあれど
(一三)間違にもせよ内心は邪見な繼母を子の方では悟らずに慕つて行つたらば、母も思返して斯くまで慕ふものをと邪見にするのが空恐しくなりて心が直る事もあるべし

世の中の有様を、とかく思ひ知り行くまゝに、怪しく戀しく思ひ出でらるゝ人の(一)御有様なれば、深き(二)契の中らひは、いかに哀ならむ」など宣ふ序に、この夢がたりも思し(三)合することもやと思ひて、明石上「いと怪しき梵字とかいふやうなる跡(四)にはべるめれど、御覽じ留むべきふしもや交り侍るとてなむ。(五)今はとて別れ侍りにしかど、なほこそ哀は殘り侍るものなりけれ」とて、樣よく打ち泣き給ふ。取り給ひて、源「いと畏く、(六)猶ほれ〴〵しからずこそあるべけれ。手などもすべて何事も、わざと有識にしつべかりける人の、(七)唯この世ふる方の心おきてこそ少かりけれ。(八)かの先祖の大臣は、いと賢くありがたき志を盡して、おほやけに仕うまつり給ひける程に、ものゝ違目ありて、その報に、かく末は無きなり、など人いふめりしを、女子の方につけたれど、かくていと次なしといふべきにはあらぬも、そこらの(九)行のしるしにこそはあらめ」など、涙おしのごひ給ひつゝ、この夢の(一〇)わたりに目とゞめ給ふ。(一一)怪しくひが〴〵しく、すゞろに高き志ありと人もとがめ、また

(一)入道をいふ
(二)夫婦の中は
(三)源が思合する事もあらんかと
(四)筆跡
(五)思切つて別れては來たものの
(六)今でも入道が耄碌はせぬと見える
(七)處世の道には疎かりき
(八)入道の祖先の
(九)女ではあるがとにかく明石上が女御の母として榮え入道の子孫衰へたりとは言ふべからず、是も入道が修行の効なるべし
(一〇)夢の事を書きたる處に
(一一)源の心

るを、(一)御心にも知らせ奉るべきをりあらば、御覧じ置くべくやとて侍るを、たゞ今ついでなくて、何にかはあけさせ給はむ」と聞え給ふに、げに哀なるべき有樣ぞかしと思して、源「いかに行ひまして住み給ひにたらむ。命長くて、こゝらの年頃つとむるつみ(二)もこよなからむかし。世の中に(三)よしあり賢しき方々の人とて見るにも、(四)この世に染みたる程の濁深きにやあらむ、(五)かしこき方こそあれ、いと限りありつゝ及ば(六)ざりけりや。さも至深く、さすがに氣色ありし人の有樣(七)かな。聖だちこの世離れ顏にもあらぬものから、下の心は、皆(八)あらぬ世にかよひ住み渡るとこそ見えしか。まして今は心苦しきほだしもなく、思ひ離れにたらむをや。(九)かやすき身ならば、忍びていと逢はまほしくこそ」と宣ふ。明石上「今はかの侍りし所をもすてて、鳥の音聞えぬ山にとなむ聞き侍る」と聞ゆれば、源「さらばその(一〇)遺言ななりな。消息は通はし給ふや。尼君いかに思ひ給ふらむ。親子の中よりも、(一一)又然るさまの契はことにこそ添ふべけれ」とて、打ち涙ぐみ給へり。源「年のつもりに、

(一)源に知らせ奉るべき機會あらば御覧にも入れようかとて斯くの如くしてある譯なるが
(二)「つみ」は罪か積か、いづれにしても穩ならず
(三)立派な人と仰がるゝ人々を見ても
(四)現世の慾にひかさるる煩惱の深き故か
(五)俗才などこそは勝れて居れど
(六)入道には
(七)入道の
(八)あの世に
(九)儘になる身なら
(一〇)其文は
(一一)夫婦の中は

にだに、彼方にて見奉り給はむこそよく侍らめ。まして男は、(一)限なしと聞えさすれど、心やすく覺え給ふを、戲にても、かやうに隔てがましき事、なさかしがり聞えさせ給ひそ」と聞え給ふ。打笑ひて、源「(二)御中どもに任せて、見放ち聞ゆべきなゝなりな。(三)隔てて今は誰も〳〵さし放ち、さかしらなど宣ふこそをさなけれ。まづはかやうに(四)這ひ隠れて、つれなくいひ貶し給ふめりかし」とて、御几帳をひきやり給へれば、母屋の柱によりかゝりて、いと淸げに、心恥かしげなる樣しても(五)のし給ふ。ありつる箱も、惑ひかくさむも樣あしければ、(六)さておはするを、源「なぞの箱ぞ。深き心あらむ懸想人の、長歌詠みて封じこめたる心地こそすれ」と宣へば、明石上「あなうたてや。(七)今めかしくなりかへらせ給ふめる御心ならひに、聞き知らぬやうなる御すさび言ともこそ、時々出で來れ」とて、ほゝゑみ給へれど、物哀なりける御氣色どもしるければ、(八)怪しと打傾き給へるさまなれば、煩はしくて、明石上「かの明石の岩屋より、(九)忍びて侍りし御祈の卷數、(一〇)又まだしき願などの侍りけ

(一)如何に高貴な御身分でも何處へ行かるゝも仔細なき事なれば
(二)お前達に任せて構はずに置くのがよいのぢやな
(三)今では皆で我をのけ物にして惡くいふとは子供らしい事ぢや
(四)明石上が几帳にかくれ居るをいふ
(五)明石上が
(六)其儘にして居るを
(七)若がへりなされる御心のくせで、飛んでもない御冗談ばかり時々おつしやる
(八)源が不審を立てゝ居る樣子故
(九)從來入道が竊に祈禱の爲に修行させし讀經の次第をかきたる書附
(一〇)まだ果さぬ願

て聞きおはす。かく睦(一)まじかるべき御前にも、常に打解けぬさまし給ひて、わりなく物づつみし給へるさまなり。この文の詞いとうたてこはく(二)、にくげなる様を、陸奥紙にて、年經にければ、黄ばみ厚肥えたる五六枚、さすがに香にいと深くしみたるに書き給へり。いと哀(三)と思して、御額髪のやう〱濡れゆく御そばめ、あてになまめかし。

院(四)は、姫宮(五)の御方におはしけるを、中の御障子よりふと渡り給へれば、えしも引き隱さで、御几帳を少しひきよせて、自ら(六)はは隱れ給へり。源「若宮(七)は驚き給へりや。時の間も戀しきわざなりけり」と聞え給へば、御息所(八)はいらへも聞え給はねば、御方、明石上「對(九)に渡し聞え給ひつ」と聞え給ふ。源「いと怪しや(一〇)。彼方にこの宮を領じ奉りて、懷を更に放たずもて扱ひつゝ、人やり(一一)ならず衣も皆ぬらして、脱ぎかへ勝なゝめる。輕々しく(一二)、などかく渡し奉り給ふ。此方に渡りてこそ見奉り給はめ」と宣へば、明石上「いとうたて思ひぐまなき(一三)御事かな。女(一四)におはしまさむ

(一)明石上は打解くべき筈の實の娘の前でも慇懃に構へて
(二)堅くるしく
(三)姫君が
(四)源氏
(五)女三宮
(六)明石上
(七)皇子は御目ざめか
(八)明石姫君
(九)紫上方
(一〇)紫が皇子を占領して仕舞つて
(一一)心がらで小便をしかけられて著物をよごして
(一二)なぜ紫の方へ皇子をやるのだ、紫が此方へ來て見奉るがよい
(一三)思遣のない事をおつしやる
(一四)皇子が女であるにしても紫の方へ置かるゝのが至當

(一)何事をも御心と思し數まへざらむこなた、ともかくもはかなくなり侍りなば、必ずしも(二)今はのとぢめを御覽ぜらるべき身にも侍らねば、なほ(三)現心うせず侍る世になむ、はかなき事をも、聞えさせおくべく侍りけると思ひ侍りて、(四)むづかしく怪しき跡なれど、これも御覽ぜよ。この御願文は、近き御厨子などに置かせ給ひて、必ず然るべからむ折に御覽じて、(五)このうちの事どもはせさせ給へ。疎き人にはな漏させ給ひそ。(六)かばかりと見奉り置きつれば、自らも世をそむき侍りなむと、思う給へなり行けば、よろづ心のどかにも覺え侍らず。(七)對の上の御心、おろかに思ひ聞えさせ給ふな。いとありがたく物し給ふ、深き御氣色を見侍れば、(八)身にはこよなくまさりて、長き御世にもあらなむとぞ思ひ侍る。もとより御身に添ひ聞えさせむにつけても、つゝましき身の程に侍れば、(九)ゆづり聞えそめ侍りにしを、(一〇)いとかうしも物し給はじとなむ、年頃はなほ世の常に思う給へ渡り侍りつる。今は來し方行くさき、後安く思ひなりにて侍り」など、いと多く聞え給ふ。(一一)涙ぐみ

(一)御身が萬事心の儘に取捌く事の出來る身になる前に私が若し死ぬ様の事あらば
(二)必ず臨終に御目にかかれる身分でもなければ
(三)正氣で居る中に
(四)面倒くさい變な手紙なれど
(五)願文に書いてある丈の事は果し給へ
(六)もう御身の生先も見届けたれば出家もしたしと思ふ故何となく氣ぜわし
(七)紫上の情
(八)我身よりも紫を長生させたく思ふ
(九)御身を紫に
(一〇)是程大事にして下さるとは思はず、紫を通常の養母の様に思ひ居たり
(一一)姫君が

宣へば、またうち笑みて、尼君「いでや、さればこそ、樣々例なき宿世にこそ侍れ」とて喜ぶ。この文箱は持たせて(一)參う上り給ひぬ。

宮(二)より疾く參り給ふべき由のみあれば、紫「かく思したる理なり。珍らしき事(三)さへ添ひて、いかに心もとなく思さるらむ」と、紫の上も宣ひて、若宮(四)忍びて參らせ奉らむの御心づかひし給ふ。御息所(五)は、御いとま(六)の心安からぬに懲り給ひて、かゝる序にしばしあらまほしく(七)思したり。程なき(八)御身に、さる怖ろしきことをし給へれば、少し面痩せほそりて、いみじくなまめかしき御樣し給へり。「かくため(九)らひ難くおはする程、つくろひ給ひてこそは」など、御方(一〇)などは心苦しがり聞え給ふを、大臣(一一)は、「かやうに面痩せて見え奉り給はむも、なかなか哀なるべきわざなり」など宣ふ。對の上(一二)などの渡り給ひぬる夕つ方、しめやかなるに、御方、御前に參り給ひて、この文箱(一三)聞え知らせ給ふ。明石上「思ふさま(一四)に叶ひはてさせ給ふまでは、とり隱して置きて侍るべけれど、世の中定め難ければ、後めたさ(一五)になむ。

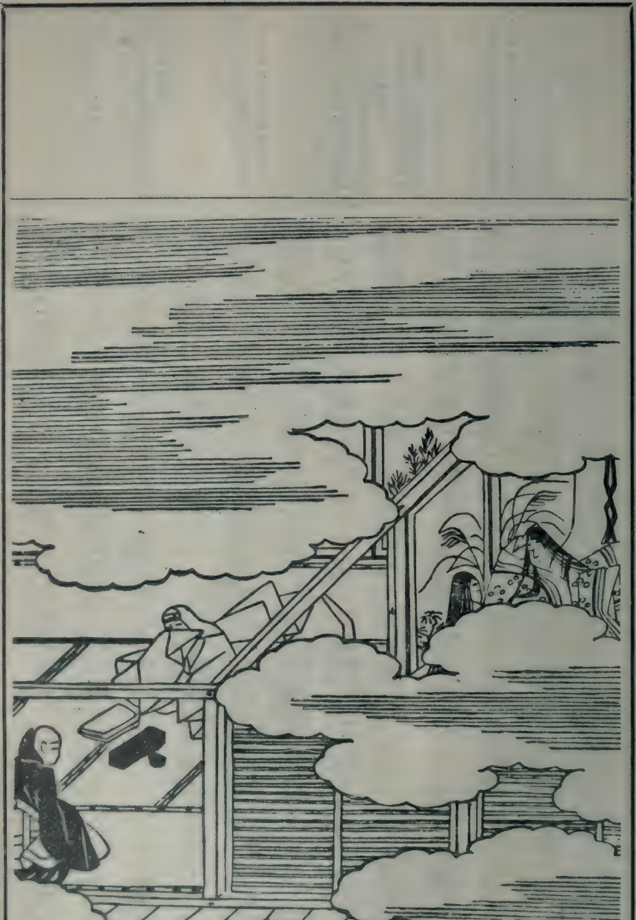
(一)明石上が携へて明石姫君の方へ行きたる也
廿明石上、姫君に入道の文を示す、源氏其文を見て姫君に教訓す
(二)東宮より明石姫君を召す也
(三)皇子を生みたるをいふ
(四)皇子
(五)明石姫君
(六)御暇が容易に出ぬに懲りて
(七)里に居たく
(八)入内してまだいくらも立たぬ身で産をした事故
(九)我慢してつとめる事のむつかしき間暫時養生して後參る方がよしと
(一〇)明石上
(一一)源氏
(一二)紫が自分の殿へ行きて明石姫君の方が靜なる夕方
(一三)入道の文を明石姫君に示す
(一四)皇子が東宮にもなり姫君が中宮にもなる迄は
(一五)氣遣故今御覽に入れる

哀にうち顰み給ふ。御方もいみじく泣きて、明石上「人(一)に勝れむ行くさきのことも覺えずや。數ならぬ身には、何事も(二)けざやかにかひあるべきにもあらぬものから、哀なる有樣に、覺束なくてやみなむのみこそ口惜しけれ。よろづのこと、さるべ(三)き人の御爲とこそ覺え侍れ。さて絶え籠り給ひなば、世の中も定なきに、やがて消え給ひなば、かひなくなむ」とて、終夜哀なる事どもを言ひつゝ明したまふ。明石上「昨日も大臣(四)の君の、彼方にありと見置き給ひてしを、俄に這ひ隱れたら(五)むも、輕々しき樣なるべし。身一は、何ばかりも思ひ憚り侍らず。かくそひ(六)給ふ御爲などのいとほしきになむ、心に任せて身をももてなしにくかるべき」とて、曉に歸り渡り給ひぬ。尼君「若宮(七)はいかゞおはします。いかでか見奉るべき」とても泣きぬ。明石上「今見奉り給ひてむ。女御(八)の君もいと哀になむ、思し出でつゝ聞えさせ給ふめる。院(九)も、事のついでに、もし世の中思ふやうならば、ゆゝしき豫言なれど、尼君その程までながらへ給はなむと宣(一〇)ふめりき。如何に思すことにかあらむ」と

(一)我身の將來の榮華も嬉しくもなし
(二)表立ちて明石姫君の母として崇められる譯にもゆかねど
(三)父入道をさすなるべし
(四)源が我が彼方に居ることを知つて居らるゝに
(五)尼君の方に居るをいふ
(六)我に添ひ居る尼君の爲を思ふ故勝手な身持も出來ぬ
(七)明石姫君
(八)明石姫君も尼君を思出しては噂せられる
(九)源氏
(一〇)明石姫君腹の皇子が皇太子に立つ樣の事もあらば

(一)明石上の爲には
(二)つまらぬ身分の自分ではあれど
(三)夫の入道と生別れすべしとは思も寄らず
(四)明石上が源氏に迎へ取らるゝ樣になりて再び我も都に歸りて
(五)入道との生別をいふ
(六)俗人たりし時から、以下入道の人となりをいふ
(七)入道と我とは若き中より夫婦の語らひをして
(八)入道と尼とお互だけは

なき夢に頼をかけて、心高くものし給ふなりけりと、かつ〴〵思ひ合せ給ふ。尼君久しくためらひて、尼君「君の(一)御徳には、嬉しくおもだたしきことをも、身にあまりてならびなく思ひ侍り。哀にいぶせき思ひもすぐれてこそ侍りけれ。(二)数ならぬ方にても、ながらへし都を捨て、彼處にしづみ居しをだに、世の人に違ひたる宿世にもあるかなと思ひ侍りしかど、(三)生ける世に行き離れ、隔たるべき中の契とは思ひかけず、同じ蓮に住むべき後の世の頼をさへかけて、年月を過しきて、俄にかく(四)覺えぬ御事出できて、背きにし世に立ち返りて侍る、かひある御事を見奉り喜ぶものから、片つ方には、(五)覺束なく悲しきことの打添ひて絶えぬを、つひにかく逢見ず隔てながら、この世を別れぬるなむ口惜しく覺え侍る。(六)世に經し時だに、人に似ぬ心ばへにより、世をもてひがむる樣なりしを、(七)若きどち頼みならひておの〳〵(八)はまたなく契りおきてければ、互にいと深くこそ頼み侍りしか。いかなれば、かく耳に近き程ながら、かくて別れぬらむ」といひつゞけて、いと



(一)幼時入道に随ひて京より播磨に行きし也
(二)釋迦は常在靈鷲山とて死後も不相變靈鷲山にありといふことは信じて居ながらも、釋尊入滅の時は弟子ども悲に堪へざりしに
(三)經文に釋尊の入滅を形容して薪盡火滅といへり
(四)明石上
(五)尼君より通知したれば
(六)よく〳〵の事でなければ
(七)入道の文に一方ならぬ事がありと聞きて
(八)尼君が
(九)涙を
(一〇)明石上が我身の將來を頼もしく思ひて
(一一)以下明石上の心、入道が頑固なばかりに我をなまじ源氏などに逢はせて其爲につまらぬ目にあはせると源に分れて暫時の間は氣が氣でなかりしが、其も此手紙で見ればかの夢を信じての事なりしよと合點が行きたり

など、この大德も、童(一)にて京より下りたりし人の、老法師になりて留れる、いと哀に心ぼそしと思へり。佛の御弟子のさかしき聖だに、鷲(二)の峯をばたど〳〵しからず頼み聞えながら、なほ薪(三)盡きける世のまどひは深かりけるを、まして尼君の悲しと思ひ給へる事限なし。大方(四)は、南の大殿におはするを、「かゝる御消息なむある」とありければ(五)、忍びて渡り給へり。重々しく身をもてなして、おぼろげな(六)らでは、通ひあひ見給ふ事も難きを、哀(七)なる事なむと聞きて、覺束なければ、打忍びてものし給へるに、いといみじく悲しげなる氣色にて居(八)給へり。火近く取りよせて、この文を見給ふに、げに(九)せきとめむ方ぞなかりける。餘所の人は、何とも目とゞむまじき事の、まづ昔來し方のこと思ひ出で、戀しと思ひ渡り給ふ心には、逢ひ見で過ぎはてぬるにこそはと見給ふに、いみじく言ふかひなし。涙をえせきとめず、この夢語を、かつは行く先頼(一〇)もしく、さらば(一一)僻心にて、我身をさしもあるまじき様に、あくがらし給ふと、中頃思ひたゞよはれしことは、かくはか

（一）其方は此先なほ子孫の榮華をも待ちて見聞し給へ
（二）淨土
（三）人跡絶えたる
（四）悲は其時に盡きたるに非ずして今再び悲しき目にあひたり
（五）分ち與へ給ひて
（六）尼君明石上等の分として

ひなき身をば、熊狼にも施し侍りなむ。（一）そこにはなほ思ひしやうなる御世を待ち出で給へ。（二）あきらかなる所にて、又對面はありなむ。

とのみあり。尼君この文を見て、かの使の大徳に問へば、僧「この御文書き給ひて、三日といふになむ、かの（三）絶えたる峯にうつろひ給ひにし。某らも、かの御おくりに、麓まではさぶらひしかど、皆かへし給ひて、僧一人童二人なむ、御供にさぶらはせ給ふ。今はと世を背き給ひしをりを、悲しきとぢめと思う給へしかど、（四）のこり侍りけり。年頃行のひま〳〵に、寄り臥しながら、かきならし給ひし琴の御琴、琵琶とりよせ給ひて、かい調べ給ひつゝ、佛にまかり申し給ひてなむ、御堂に施入し給ひし。さらぬ物どもも、多くは奉り給ひて、その殘をなむ、御弟子ども六十餘人なむ、親しきかぎりさぶらひける、ほどにつけて皆（五）處分し給ひて、猶し殘をなむ、（六）京の御料とて送り奉り給へる。今はとてかき籠り、さる遙けき山の雲霞にまじり給ひにし、空しき御跡にとまりて、悲び思ふ人々なむ多く侍る」

る程、その夕まで、水草清き山の末にて、つとめ侍らむとてなむまかり入りぬる。

ひかりいでむ曉ちかくなりにけり今ぞ見し世のゆめがたりする(一)

とて月日かきたり。

入道命終らむ月日も、更にな知ろしめしそ(二)。古より人のそめ置きける藤の衣(三)にも、何かやつれたまふ。たゞ我が身(四)は變化のものと思しなして、老法師(五)のためには功德をつくり給へ。この世の樂に添へても、後の世を忘れ給ふな。願侍る(六)所にだにいたり侍りなば、必ず又對面は侍りなむ。娑婆の外の岸(七)にいたりて、疾くあひ見むことを思せ。

さてかの社に立て集めたる願文どもを、大なる沈の箱に、封じ籠めて奉り給へり。尼君(八)にはことゞゝ(九)にも書かず。たゞ、

入道この月の十四日になむ、草の庵まかり離れて、ふかき山に入り侍りぬる。か

(一)姫君出世して宿望の達せらるべき時も近くなりたれば、年來祕し來りし夢の語をするぞと也
(二)構ふな
(三)古來の習慣なる喪服をも我が爲には著給ふな
(四)明石上自ら自分を明石入道の子に非ず化生の者なりと思ひて
(五)入道
(六)極樂に往生せば又そこにて對面すべし
(七)彼岸卽ち後世
(八)住吉明神
(九)別段に手紙もなく

(一)未來に希望を生じたれど
(二)夢に見たる如き立派な運のむいて來る譯はないと
(三)明石上が
(四)漢籍
(五)佛典
(六)出家もしたる譯也
(七)播磨守になり下りて老後再び都には歸らじと思切りて
(八)明石姬君
(九)神佛に祈りし其の願ほどきを目出たくすべき時節到來して
(一〇)明石姬君
(一一)願をはたし
(一二)姬君につきての願が近く目前に成就したれば
(一三)九品の淨土に生るべき未來の望の叶ふ事も疑なくなりたれば
(一四)佛の來迎を

して漕ぎ行く、となむ見侍りし。夢さめて朝より、數ならぬ身に賴む所出で(一)來ながら、何事につけてか、さる嚴しき事をば待ち出でむと、(二)心の中に思ひ侍りしを、その頃より孕まれ給ひにしこなた、(三)俗の方の文を見侍りしにも、(四)また內敎の心を尋ぬる中にも、(五)夢を信ずべき事多く侍りしかば、賤しき懷のうちにも、辱く思ひいたづき奉りしかど、力及ばぬ身に思ひ給へかねてなむ、かゝる道におもむき侍りにし。(六)又この國の事に(七)しづみ侍りて、老の波更に立ち返らじと思ひとぢめて、この浦に年頃侍りしほども、若君を賴むことに思(八)ひ聞え侍りしかばなむ、心ひとつに多くの願を立てはべりし。そのかへり申(九)たひらかに、思のごと時に逢ひ給ふ。若君國の母となり給ひて、(一〇)願滿ち給はむ世に、住吉の御社をはじめ、はたし申し給へ。(一一)更に何事をか疑ひ侍らむ。このひとつの思、(一二)近き世にかなひ侍りぬれば、遙に西の方、十萬億の國隔てたる、九品の上の望は(一三)疑なくなり侍りぬれば、今は唯むかふる蓮を(一四)待ち侍

(一)生活して居れども
(二)生きながら他界に生れかはりし樣に思ひて
(三)便りもせず
(四)經文ばかり見つけて居る故也
(五)人傳に
(六)明石姫君
(七)明石上の事を
(八)極樂淨土の蓮の上に往生せん願は跡廻しにして
(九)明石上
(一〇)佛說にて世界四大洲の眞中に聳ゆる高山

ひける。思ひ離るゝ世のとぢめに、文書きて、御方に奉れ給へり。

入道この年頃は、おなじ世の中のうちに、(一)めぐらひ侍りつれど、何かは、(二)かくながら身をかへたるやうに思ひたまへなしつゝ、させる事なき限は、(三)聞えうけたまはらず。(四)假字文見給ふるは目の暇いりて、念佛も懈怠するやうに、益なうてなむ、御消息も奉らぬを、(五)つてに承れば、(六)若君は東宮に參り給ひて、男宮生れ給へるよしをなむ、深く悅び申し侍る。その故は、自らかくつたなき山伏の身に、今更にこの世の榮を思ふにも侍らず。過ぎにし方の年頃、心ぎたなく、六時のつとめにも、たゞ(七)御事を心にかけて、(八)蓮の上の露の願をばさし置きてなむ念じ奉りし。(九)我がおもと產れ給はむとせしその年の、二月のその夜の夢に見しやう、自ら(一〇)須彌の山を、右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世をてらす、自らは山の下の蔭に隱れて、その光にあたらず、山をば、廣き海に浮べ置きて、小さき船に乘りて、西の方をさ

にて、あまがつ(一)など、御手づから造りそよくり(二)おはするも、いと若々し。旦暮この御かしづきにて過し給ふ。かの古代の尼君は、若宮をえ心のとがに見奉らぬなむ、飽かずおぼえける。なか〳〵、見奉りそめて戀ひ聞ゆるにぞ、命もえ堪ふまじかりける。

かの明石にも、かゝる御事傳へ聞きて、さる聖心地にも、いと嬉しと覺えければ、(三)入道「今なむ(四)この世の境を心安くゆき離るべき」と弟子どもに言ひて、この家をば寺になして、あたりの田などやうの物は、(五)皆その寺の事にしおきて、(六)この國の奥の郡に、人も通ひ難く深き山あるを、年頃も占めおきながら、(七)あしこに籠りなむ後又人には見え知らるべきにもあらずと思ひて、(八)唯少し覺束なき事の殘りければ、今までながらへけるを、今は(九)さりともと、佛神を頼み申してなむ移ろひ(一〇)ける。この近き年頃となりては、京に異なる事なくて、(一一)人も通はし奉らざりつ。(一二)これよりくだし給ふ人ばかりにつけてなむ、一行にても、尼君にさるべき折ふしの事も通

(一)赤兒の側に守に置く人形
(二)持扱ふ形
㊟明石入道隱遁に臨みて文を京に贈る
(三)入道
(四)現世を安心して出離する事が出來ると
(五)寺の財產にして
(六)播磨國の
(七)始終は此山に籠る積なれど、一旦こゝに籠りたる以上は再び人に顏を合すまいと思ひて
(八)姫君の腹に皇子の生るゝを待ちし也
(九)もう斷うなれば心殘りなしと思ひて
(一〇)山奧へ
(一一)入道より使を京へ上せず
(一二)京より使の來るに托して

(一)帝より表向でせらるるには優りて
(二)産養を
(三)省略せず
(四)源氏
(五)夕霧は澤山子を設けながら
(六)赤兒が成長する
(七)俄に氣心の知れぬを召使ふことはせず
(八)明石上
(九)大樣ではあれど
(一〇)憎らしく尊大ぶらぬを
(一一)紫上
(一二)互に見知りあひて
(一三)從來はあれ程明石上を嫉みしかども
(一四)此赤兒のお蔭で
(一五)紫は子供好にて

方よりも、(一)公事にはたちまさり、嚴しくせさせ給ふ。次々の御子達、大臣の家家、その頃のいとなみにて、我も〳〵と淸らを盡して(二)仕うまつり給ふ。大臣の君も、この程の事どもは、例のやうにも(三)ことそがせ給はで、世になく響きこちたき程に、うち〳〵のなまめかしく細なるみやびの、まねび傳ふべき節は、目もとまらずなりにけり。(四)大臣の君も、若宮を程なく抱き奉り給ひて、源「(五)大將の數多設けたゞなるを、今まで見せぬが怨めしきに、かくらうたき人をぞ得奉りたる」と、うつくしみ聞え給ふは理なりや。日々に、物をひき延ぶるやうに(六)およずけ給ふ。御乳母など、(七)心知らぬは頓に召さで、さぶらふ中に、品心勝れたるかぎりを選りて、仕う奉らせ給ふ。(八)御方の御心おきての、らう〳〵じく氣高く、(九)おほどかなるものの、さるべき方には卑下して、(一〇)憎らかにもうけばらぬなどを、褒めぬ人なし。(一一)對の上はまほならねど、(一二)見えかはし給ひて、(一三)さばかり許しなく思したりしかど、今は(一四)宮の御德に、いと睦まじくやむごとなく思しなりにけり。(一五)兒うつくしみし給ふ御心

見えたれど、儀式(一)なきやうなれば、渡り給ひなむとす。對の上(二)も渡り給へり。白(三)き御裝束し給ひて、人の親めきて、若宮をつと抱き居給へるさま、いとをかし。自(四)らかゝること知り給はず、人の上にても見ならひ給はねば、いと珍らかに美しと思ひ給へり。(五)むづかしげにおはする程を、絶えず抱きとり給へば、實の祖母君(六)は、唯まかせ奉りて、御湯殿のあつかひなどを仕うまつり給ふ。東宮の宣旨なる典侍ぞ仕うまつる。(七)御迎湯(八)におりたち給へるも、いと哀れに、内々(九)の事もほの知りたるに、少し(一〇)かたほならばいとほしからましを、あさましく(一一)け高く、げにかゝる(一二)契特にものし給ひける人かなと見聞ゆ。この程の儀式などもまねびたてむに、いと更なりや。

六日といふに、例の(一三)大殿に渡り給ひぬ。七日の夜、内裏よりも御産養のことあり。朱雀院の、かく世を捨てておはします御かはりにや、藏人所より、頭辨、宣旨うけたまはりて、珍らかなるさまに仕うまつれり。祿のきぬなど、又中宮の御

(一)餘り尾籠がましき故姫君自身の殿へ引移らんとす
(二)紫上も姫君の方へ來り
(三)姫君が
(四)紫自身は産をしたる事なく
(五)赤兒のまだ世話のやける中から始終紫上が抱く故
(六)明石上
(七)赤兒に湯をつかはせる也
(八)湯をつかはする時の相手を明石上が自らする也
(九)明石上と姫君と母子なる事を薄々と典侍が知り居る事故
(一〇)明石上の人柄が惡くては姫君の爲に氣の毒なるべきに
(一一)明石上の樣
(一二)斯る人を娘に持つ人ほどあると典侍が思ふ
(一三)明石姫君自身の殿

尼君「老の波かひある浦に立ちいでてしほたるゝあまをたれかとがめむ(一)

昔の世にも、かやうなる古人は、罪ゆるされてなむ侍りける」ときこゆ。御硯なる紙に、

姫君　しほたるゝあまを浪路のしるべにてたづねも見ばや濱のとまやを(二)

御方もえ忍び給はで、うち泣き給ひぬ。

明石上　世を捨ててあかしの浦にすむ人もこゝろのやみははるけしもせじ(三)

など聞え紛らはし給ふ。別れけむ曉の事も(四)、夢の中に思し出でられぬを(五)、口惜しくもありけるかなと思す。

三月の十餘日のほどに、平に生れ給ひぬ。かねてはおどろ〳〵しく思し騒ぎしか(六)ど、痛く惱み給ふ事もなくて、男御子にさへおはすれば、限なく思すさまにて(七)、大(八)臣も御心おちゐ給ひぬ。此方はかくれの方にて(九)、唯氣近き程なるに、厳しき御産養などのうち頻り、ひゞき裝ほしき有様、げに「かひある浦」(一〇)と、尼君のためには

(一)年寄の生甲斐ある時に逢ひて昔を思ひて泣き居る我を咎めずともよからう
(二)御身の物語を使にして明石の浦へも入道を尋ね行きて見たし
(三)明石入道も假令浮世をすてゝは居ても矢張わが子孫の事は氣にかゝるならん
(四)入道に
(五)姫君がどう考へても思ひ出されぬを
⑳　明石姫君皇子を生む、産養、紫上明石上と睦む
(六)非常に心配したれど
(七)何處までも願つたり叶つたりで
(八)源氏
(九)姫君の居る明石上の方は奥の方にて尼君明石上などの居間も近きに
(一〇)尼君の歌の詞

(一)奴は昔話でもしたるならんと、と胸を突いて
(二)尼君の話には間違がありしならんと姫君に向ひて言ふ也
(三)別世界の事の樣なる
(四)姫君を
(五)姫君の樣子
(六)明石上の心に勿體なき樣に思はるゝに
(七)以下明石上の心、尼君が氣の毒な話をして聞かせたので
(八)后にもなりての上に昔話はして聞かせんと思ひ居しに
(九)我身分も輕蔑される程賤しくもあらねど
(一〇)祈禱僧等が
(一一)此樣な物ばかりでも食し給へ
(一二)明石上が尼君に目まぜすれども

でたるさまなれば、胸打ちつぶれて(一)、明石上「古代(二)の僻事どもや侍りつらむ。よくこ(三)の世の外のやうなる僻おぼえどもにとり雜ぜつゝ、怪しき昔の事ども出でまうで來つらむはや。夢の心地こそし侍れ」と、うちほゝゑみて見奉り(四)給へば、いとな(五)まめかしく淸らにて、例よりもいたく靜まり、物思したるさまに見え給ふ。我が子とも覺え給はず、かたじけなきに(六)、(七)いとほしき事どもを聞え給ひて、思し亂るるにや、(八)今はかばかりと御位を極め給はむ世に聞えも知らせむとこそ思へ、口惜(九)しく思し捨つべきにはあらねど、いといとほしく心劣し給ふらむ、とおぼゆ。御加持はてて(一〇)まかでぬるに、御菓子など近くまかなひなし、明石上「これ(一一)ばかりをだに」と、いと心苦しげに思ひて聞え給ふ。尼君は、いとめでたううつくしく見奉るまゝにも、涙はえとゞめず。顏は笑みて、口つきなどは見苦しくひろごりたれど、まみのわたり打ちしぐれて顰み居たり。あなかたはらいたと、目(一二)くはすれど、聞きも入れず。

とより斯く少し(一)おぼえ下れる筋と知りながら、(二)生れ給ひけむ程などをば、さる世離れたるさかひにてなども、知り給はざりけり。(三)いとあまりおほどき給へるけにこそは。怪しくおぼ〳〵しかりける事なりや。(四)かの入道の、今は仙人の世にも住まぬやうにて居たゞなるを聞き給ふも心苦しくなど、かた〴〵に(五)思ひ亂れ給ひぬ。いと物哀に(六)眺めておはするに、(七)御方參り給ひて、日中の御加持に、此方彼方より(八)參りつどひ、物騷しくのゝしるに、(九)御前にことに人も侍はず。尼君所えて、いと近くさぶらひ給ふ。明石上「あな見苦しや。(一〇)短き御几帳ひきよせてこそ侍ひ給はめ。風など騷しくて、(一一)自らほころびの際もあらむに(一二)醫師などやうの樣して、いとさかり過ぎ給へりや」など、なまかたはらいたく思ひ給へり。(一三)由めきそして振舞ふとは覺ゆめれども、(一四)もう〳〵に耳もおぼ〳〵しかりければ、尼君(一五)「あゝ」と傾きて居たり。さるは(一六)いとさ言ふばかりにもあらずかし。六十五六のほどなり。尼姿(一七)いとかはらかに、あてなる樣して、目つやゝかに泣きはれたる氣色の、怪しく昔思ひ出

(一)輕き生れの人とは承知して居れど
(二)自分の
(三)是は姫君が餘り大樣なる故なるべし
(四)明石入道
(五)明石姫君が
(六)明石姫君が
(七)明石上
(八)祈禱の僧等が
(九)姫君の
(一〇)そこに居るならば小さ几帳を側に立てゝ居らるゝがよし
(一一)物の隙間から人も自然見るべきに
(一二)醫者などの居る樣な風して、年寄のくせに其樣にして居らるゝ事よ
(一三)由めき過して、尼君が
(一四)聾疎して耳も遠き故
(一五)首を傾けて聞き居る體
(一六)それ程ひどい高年にも非ず
(一七)さつぱりと

へず、參りては、いと涙がちに、古めかしき事どもを、わなゝき出でつゝ語り聞ゆ。初つかたは、怪(一)しくむづかしき人かなと、(二)打ちまもり給ひしかど、かゝる人ありとばかりは、ほの聞き置き給へれば、なつかしくもてなし給へり。(三)生れ給ひし程の事、大臣の君の、かの浦におはしましたりし有樣、尼君「今はとて京へ上り給ひしに、誰も〳〵心を惑はして、今は限、(四)かばかりの契にこそはありけれ、と歎きしを、若君の(五)かくひき助け給へる御宿世の、いみじく悲しき事」と、ほろ〳〵と泣けば、(六)げに哀なりける昔の事を、かく聞かせざらましかば、(七)覺束なくても過ぎぬべかりけり、と思して、打泣き給ふ。(八)心のうちには、我身はげに、(九)うけばりていみじかるべき際にはあらざりけるを、(一〇)對の上の御もてなしに磨かれて、人の思へるさまなども、かたほにはあらぬなりけり、(一一)身をば又なきものに思ひてこそ、宮仕のほどにも、(一二)かたへの人々をば思ひけち、こよなき心驕をばしつれ。世の人は、下に言ひ出づる樣もありつらむかし、など思し知りはてぬ。(一三)母君をば、も

(一)姫君の感じ
(二)尼君を見つめ
(三)姫君が
(四)是迄の御縁ぢやわいと
(五)明石姫君が生れて我我の助になりて縁のきれぬ樣にして下されし御縁の
(六)明石姫君の心
(七)尼君が
(八)姫君の
(九)當然に今の如く榮華を極むべき身分ではなかりしに
(一〇)紫上によく取扱はれし爲に光を增して人の氣愛も勝れて居るのぢやわい
(一一)今迄は我身を無上の貴き物に思ひて
(一二)傍輩を輕蔑し
(一三)明石上

（一）源は葵上を産の爲に死なせたる經驗あれば
（二）産の事を恐しく思ふ故
（三）紫上の産をせぬは
（四）幼き明石姫君が
（五）かけ離れた所へ置くは心配なりとて
（六）明石上の郭の
（七）明石上
（八）此御産の結果によりて自分の運命の善惡も分る譯なれば
（九）明石上の母君
（一〇）耄碌人
（一一）待ちかねて
（一二）明石上
（一三）源の須磨以來の昔話などを姫君に正面から說明しては聞かせざりしに

させ給ふ。寺々社々の御祈、はた數も知らず。（一）大臣の君、ゆゝしき事を見給ひてしかば、（二）かゝる程のことを、いと恐ろしきものに思ししみたるを、（三）對の上などのさる事し給はぬは、口惜しくさう〴〵しきものから、嬉しく思さるゝに、（四）まだいとあえかなる御程に如何におはせむと、かねて思し騷ぐに、二月ばかりより、怪しく御氣色かはりて惱み給ふに、御心ども騷ぐべし。陰陽師どもも、所をかへてつゝしみ給ふべく申しければ、外のさし離れたらむは（五）覺束なしとて、（六）かの明石の御町の、中の對に渡し奉り給ふ。此方は唯おほきなる對二つ、廊どもなむ廻りてありけるに、御修法の壇間なく塗りて、いみじき驗者ども集ひてのゝしる。（七）母君、（八）この時に我が御宿世も見ゆべきわざなゝめれば、いみじき心を盡し給ふ。かの（九）大尼君も、今はこよなき（一〇）ほけ人にてぞありけむかし。この御有樣を見奉るは夢の心地して、（一一）いつしかと參り近づきなれ奉る。年頃、（一二）この母君かう添ひ侍ひ給へど、（一三）昔の事などまほにしも聞え知らせ給はざりけるを、この尼君喜びに堪

(一)夕霧
(二)源の發意にて萬事を省略して
(三)朱雀
(四)秋好
(五)夕霧が一人子なるを
(六)獨りすぐれたる樣に
(七)葵上
(八)昔は葵の勢に壓されし六條御息所の娘たる秋好が今は却て中宮として勢盛なるなどをいふ
(九)花散里
(一〇)雲井雁
(一一)源の色々の催
(一二)花散里は曾てそれに關係はせず
(一三)花散里が昔夕霧を子の樣にしたりし緣によりて斯る場合には人の數にも入りたり

㊈ 明石姬君六條院に退出、明石尼君、姬君に舊事を語る

(一四)明石姬君の御產期近づきたれば

衞府の官人の祿ども、(一)大將たまふ。(二)御心とそぎ給ひて、嚴しき事どもは、このたび留め給へれど、內裏、東宮、(三)一の院、(四)后宮、次々の御ゆかりいつくしき程、いひ知らず見え渡る事なれば、猶かゝる折にはめでたくなむ覺えける。(五)大將の唯一所おはするを、さう／＼しく榮なき心地せしかど、數多の人にすぐれ、おぼえ殊に、人がらも(六)かたはら無きやうに物し給ふにも、かの(七)母北の方の、伊勢の御息所との恨深く、挑みかはし給ひけむほどの御宿世どもの、行方見えたるなむ(八)樣々なりける。その日の御裝束どもなど、(九)此方の上なむし給ひける。祿ども大かたの事をぞ、(一〇)三條の北の方は急ぎ給ふめりし。(一一)折ふしにつけたる御いとなみ、うち／＼の物の淸らをも、(一二)此方には唯他所の事にのみ聞き渡り給ふを、何事につけてかは、かゝるもの／＼しき數にも交らひ給はまし、と覺えたるを、(一三)大將の君の御ゆかりに、いとよくかずまへられ給へり。

年かへりぬ。(一四)桐壺の御方近づき給ひぬるにより、正月朔日より、御修法不斷にせ

しくなり給ひにたれば、打添へて、今日の作法いとことなり。御馬四十疋、左右の馬寮、六衞府(一)の官人、上より次々に彈きとゝのふる程、日暮れはてぬ。例の「萬歳樂」「賀皇恩」などいふ舞、氣色ばかり舞ひて、大臣の渡り給へるに、珍らしくもてはやし給へる御遊に、皆人心をいれ給へり。琵琶は例の兵部卿宮(二)、何事にも世にかたき(三)物の上手におはして、いと二なし。御前(四)に琴の御琴、大臣和琴ひき給ふ。年頃(五)添ひ給ひにける御耳の聞きなしにや、いと優に哀におぼさるれば、琴(六)も御手をさく\/かくし給はず、いみじき音ども出づ。昔の御物語どもなど出できて、今はたゞかゝる(七)御なからひに、何方につけても、聞え通ひ給ふべき御むつびなど、心よく聞え給ひて、大御酒數多たびまゐりて、物のおもしろさも滞りなく、御醉泣どもえ留め給はず。御贈物に、勝れたる和琴一つ、好み給ふ高麗笛そへて、紫檀の箱一具に、唐の本ども、こゝの(八)草の本など入れて、御車(九)におひて奉れたまふ。(一〇)御馬どももむかへ取りて、右(一一)のつかさども、高麗の樂してのゝしる。六

(一)左右近衞府、左右兵衞府、左右衞門府
(二)螢
(三)珍しき
(四)源に
(五)源が頭中の琴を年來聞かずして珍しく聞く故
(六)源自身も伎倆をかくさずに彈く
(七)濃き親類の間柄にて
(八)日本の草書の手本
(九)頭中の歸る跡より追かけて
(一〇)左右馬寮より引來りて立て置きたる四十疋の馬を馬寮の官人が請取行く也
(一一)右馬寮の官人

(一)夕霧が源氏の賀の式場を設けて
(二)內々は帝の思召によりて行ふ儀式なれば也
(三)頭中
(四)勅によりて頭中も來會せり
(五)源氏
(六)頭中
(七)長者
(八)歌を書きたるなるべし
(九)薄絹、屛風を唐綾にて張りたるなるべしと云ふ
(一〇)帝の御書なれば也
(一一)夕霧

町に、御(一)しつらひ設け給ひて、隱ろへたるやうになし給へれど、今日は猶かたことに儀(二)式まさりて、所々の饗なども、內藏寮、穀倉院より、仕う奉らせ給へり。屯食など、おほやけ樣にて、頭中將宣旨承りて、御子達五人、左右の大臣、大納言二人、中納言三人、宰相五人、殿上人は、例の內裏、東宮、院、のこり少し。御座御調度どもなどは、(三)太政大臣委しく承りて、仕う奉らせ給へり。今日は仰(四)事ありてわたり參り給へり。(五)院もいとかしこく驚き申し給ひて、御座につき給ひぬ。母屋の御座に向へて、(六)大臣の御座あり。いと淸らにもの〳〵しく太りて、この大臣ぞ、今さかりの宿(七)德と見え給へる。主人の院は、猶いと若き源氏の君に見え給ふ。御屛風四帖に、內裏の御手書(八)かせ給へる、唐の綾の(九)うすだんに、下繪のさまなど疎ならむやは。おもしろき春秋の作繪などよりも、この御屛風の墨つぎの輝くさまは、目も及ばず、思ひなしさへ(一〇)めでたくなむありける。置物の御厨子、彈物、吹物など、藏人所よりたまはり給へり。(一一)大將の御勢も、いとかめ

厳しくなむありける。宮(一)のおはします町の寢殿に、御しつらひなどして、さきざき(二)にことに變らず、上達部の祿など、大饗(三)になずらへて、御子達には殊に女の裝束、非參議の四位、まうちきんだち(四)など、たゞの殿上人には、白き細長一襲、腰差(五)などまで次々にたまふ。御裝束(六)かぎりなく淸らを盡くして、名高き帶、御劒など、故前坊(七)の御方ざまにて、傳はり參りたるもまた哀になむ。ふるき世の一のもの(八)と名あるかぎりは、皆つどひ參る御賀になむありける。昔物語にも、物得させ(九)たるを、かしこきことには數へ續けたゝめれど、いとうるさくて、こちたき御なからひの事どもは、えぞ數へあへ侍らぬや。

内裏には、思しそめて(一〇)し事どもをむげにやはとて、中納言にぞつけさせ給ひてける。その頃の右大將、病して辭し給ひけるを、この中納言に、御賀の程よろこびくはへむと思召して、俄になさせ(一一)給ひつ。院(一二)も喜び聞えさせ給ふものから、「いとかく俄に餘るよろこびをなむ、いちはやき(一三)心地し侍る」と卑下し申し給ふ。丑寅(一四)の

(一)秋好
(二)前々の賀の時の通りに
(三)正月の二宮の大饗
(四)大夫、五位
(五)腰にさす樣にしたる卷絹
(六)源の爲に調へたる衣裳
(七)秋好の父方より
(八)古來の名器と稱せらるゝ物は
(九)賜物の事を仰山に書きたてゝあれども
◉夕霧、勅を受けて源の爲に四十の賀を行ふ
(一〇)源の賀の爲に折角用意せし事なればとて用意の品々を夕霧に讓りたり
(一一)夕霧を右大將に任じたり
(一二)源氏
(一三)夕霧の昇進早過ぎる樣に思ふ
(一四)花散里の方

ある樣のかしこまりを盡しても、え見え奉らぬを、世と共に飽かぬ心地したまふも、今年はこの御賀にことつけて、行幸などもあるべく思しおきてたれど、(一)世の中の煩ひならむこと、更にせさせ給ふまじくなむと、否び申し給ふこと度々になりぬれば、口惜しく思しとまりぬ。

十二月の二十日あまりの程に、(二)中宮まかでさせ給ひて、(三)年の殘の御祈に、奈良の京の(四)七大寺に御誦經、布四千段、この近き都の(五)四十寺に、絹四百疋をわかちて(六)せさせ給ふ。(七)ありがたき御はぐくみを思し知りながら、何事につけてかは、深き御志をも顯はし御覽ぜさせ給はむとて、(八)父宮母御息所のおはせまし御爲の志をも取り添へ思すに、(九)おほやけにも聞えかへさひ給へば、ことども多く止めさせ給ひつ。源「四十の賀といふことは、さきざきを聞き侍るにも、(一〇)殘の齢久しきためしなむ少かりけるを、この度はなほ(一一)世のひゞき止めさせ給ひて、誠に(一二)後に足らむ事を數へさせ給へ」とありけれど、(一三)おほやけざまにて、なほいと

(一)源の辭退する詞
秋好中宮、源氏の四十の賀に祈禱を行はしむ
(二)秋好退出
(三)年の暮の意歟
(四)東大、興福、元興、大安、藥師、西大、法隆
(五)定りたる事なし
(六)源の壽命長久を祈る也
(七)秋好の心、源の養育の恩を思ひながら
(八)我が亡き父母存生せられなば必ず源に報謝の志を致すべき筈なれば、其分をも我志の分に取添へてしたしと思ふに
(九)源が冷泉に對しても辭退する故、秋好もしたしと思ふことを留めたり
(一〇)賀を受くる人の餘命長き例は少き故
(一一)世間の騷ぎとなる如き祝をやめて
(一二)五十に滿ちたらば祝ひて賜はれ
(一三)朝廷よりの表向の祝に準じて

て、猶然る(一)べきにて、昔(二)より斯くたち續きたる御中らひなりけりと、めでたく思ふ。主人の院も、哀に涙ぐましく、思し出でらるゝことども多かり。夜に入りて、樂人ども罷り出づ。北(三)の政所の別當ども、人々ひきゐて、祿の唐櫃によりて、ひとつづつ取りて、つぎ〳〵賜ふ。白きものどもを品々かづきて、山ぎはより池のつゝみ過ぐる程の餘所目は、千年(四)をかねてあそぶ鶴の毛衣に思ひまがへらる。御遊始まりて、またいと面白し。御琴どもは、東宮よりぞとゝのへさせ給ひける。朱雀院より渡り參れる琵琶、琴、內裏よりたまはり給へる箏の御琴など、皆むかし覺えたるものの音どもにて、珍らしく彈きあはせ給へるに、何の折にも過ぎにし方の御有樣、內裏わたりなど思(五)し出でらる。故(六)入道の宮おはせましかば、かゝる御賀など、我(七)こそ進み仕う奉らましか、何事につけてかは、志をも見え奉りけむ、と飽かず口惜しくのみ思出で聞え給ふ。內裏(八)にも、故(九)宮のおはしまさぬことを、何事にも榮なくさう〴〵しく思さるゝに、この(一〇)院の御事をだに、例(一一)の跡

(一)然るべき因緣ありて
(二)夕霧柏木が各其親に繼ぎて人に勝れたるならんと
(三)紫上附の別當
(四)催馬樂席田、「むしろ田のいつぬき川にやすむ鶴の、千歲をかねてぞ遊びあへる」。
(五)源が
(六)藤壺、以下源の心
(七)我こそ藤壺の爲にかゝる祝をすべきなれ
(八)冷泉
(九)藤壺
(一〇)源氏
(一一)通常の天子が父帝に對する禮儀を盡す譯にはゆかぬを常に不滿足に思はるゝにつけても



のせさせ給へる、故ふかく心ことなり。後の(一)御屏風四帖は、式部卿宮なむせさせ給ひける。いみじく盡して、例の四季の繪なれど、珍らしき泉水(二)だんなど、目なれずおもしろし。北の壁にそへて、置物(三)の御厨子二具たてて、御調度ども例のことなり。南の廂に上達部、左右の大臣、式部卿宮をはじめ奉りて、次々はまして參り給はぬ人なし。舞臺の左右に、樂人の平張(四)うちて、西東に屯食(五)八十具、祿の唐櫃四十續けて立てたり。未の時ばかりに樂人まゐる。萬歳樂(六)、皇麞など舞ひて、日暮れかゝるほどに、高麗(七)の亂聲して、落蹲の舞ひ出でたるほど、なほ常の日なれぬ舞のさまなれば、舞はつるほどに、權中納言(八)、衞門督おりて、入綾(九)をほのかに舞ひて、紅葉のかげに入りぬる名殘、飽かず興ありと人々おぼしたり。いにしへの朱雀院の行幸に、青海波(一〇)のいみじかりし夕、思ひ出で給ふ人々は權中納言、衞門督の、又劣らず立ちつゞき給ひにける、世々のおほえありさま、容貌用意などもをさ〳〵劣らず、官位はやゝ進み(一一)てさへこそなど、齢の程をも數へ

(一)源の座の後の
(二)一本「泉水瀧など」とあるに從ふべし
(三)飾り物
(四)幕舍
(五)今の結飯
(六)いづれも祝の樂
(七)高麗樂
(八)夕霧と柏木
(九)引込際の舞の手
(一〇)源と頭中が青海波を舞ひし事、紅葉賀の卷にあり
(一一)當時の源よりも高しと

たなく、紅葉の蔭わけ行く野邊の程より始めて、見物なるに、かたへ(一)はきほひ集り給ふなるべし。霜がれ渡れる野原のまゝに、馬車の行きかふ音しげく響きたり。御誦經(二)我も〳〵と、御方々いかめしくせさせ給ふ。

二十三日を御としみ(三)の日にて、この院は、かく透間なく集ひ給へるうちに、我が(五)御わたくしの殿とおぼす二條院(四)にて、その御まうけはせさせ給ふ。御裝束をはじめ、大かたの事どもも、皆(六)こなたにのみし給ふを、御方々(七)も、さるべき事ども、分けつゝ望み仕う奉り給ふ。對どもは、人の局々にしたるを拂ひて、殿上人、諸大夫、院司、下人までの設、いかめしくせさせ給へり。寢殿の放出を、例のしつらひて、螺鈿の倚子立てたり。大殿の西の間に、御衣(八)の机十二たてて、夏冬(九)の御よそひ、御衾など例のごとく、紫の綾の覆ども、麗しく見えわたりて、内の心(一〇)はあらはならず。御前(一一)に置物の机二つ、唐の羅の裾濃の覆したり。插頭(一二)の臺は、沈の花足(一三)、黄金の鳥、銀の枝に居たる心ばへなど、淑景舍(一四)の御預にて、明石(一五)の御方

(一)人々の集る原因の一部分は此堂の立派さと景色の面白さとにあるべし
(二)僧への布施
(三)精進落、供養中は精進なれば供養終りて精進落の饗應ある也
(四)六條院
(五)紫が
(六)紫方にてのみ
(七)他の婦人たちも
(八)源の爲に調へたる衣裳を載する机
(九)夏冬の衣裳
(一〇)覆に覆はれて中の衣裳の好みなどは分らず
(一一)源の
(一二)作り花、老をかくす心なりといふ
(一三)插頭に添へたる飾りもの也
(一四)此臺は明石姫君の掛りにて
(一五)明石上

捨て難きさま、若やかに聞え給へば、げにいと若く心よげなる人かなと、(一)をさなき御心地には打解け給へり。さて後は、常に御文かよひなどして、をかしき遊びわざなどにつけても、疎からず(二)聞えかはし給ふ。世の中の人も、(三)あいなう、かばかりになりぬるあたりの事は、言ひ扱ふものなれば、初つ方は、(四)「對の上いかにおぼすらむ。(五)御覺いと此年頃のやうにはおはせじ。少しは劣りなむ」など言ひけるを、今少し深き御志、(六)斯くてしも勝るさまなるを、それにつけても、また安からずいふ人々あるに、かく(七)憎げなくさへ聞えかはし給へば、(八)事なほりて目安くなむありける。

神無月に、(九)對の上、(一〇)院の御賀に、嵯峨野の御堂にて、藥師佛供養し奉り給ふ。(一一)いかめしき事は、切に諫め申し給へば、忍びやかにと思しおきてたり。佛、經箱、帙簀のとゝのへ、眞の極樂思ひやらる。(一二)最勝王經、金剛般若、壽命經など、いと(一三)ゆたけき御祈なり。上達部いと多く參りたまへり。御堂のさま面白く言はむか

(一)女三の
(二)女三と紫と
(三)紫と女三との樣な關係につきてはつまらぬ噂をするが常なれば
(四)噂する人々の詞、對の上は紫
(五)源の御寵愛
(六)女三が出來て却て深くなる樣子なるを見て
(七)女三と紫と隔なく睦みあふ故
(八)世の噂も一變して聞惱き事は無くなりたり
(大)紫上源氏の四十の賀に藥師佛供養、精進落の饗宴
(九)紫上
(一〇)源の四十賀の爲に
(一一)仰々しき備は源が禁制してある故
(一二)この三部を國家鎭護の三部經といふとぞ
(一三)廣大なる

ど、いとなつかしく聞えかはし給ひて、中の戸開けて、（一）宮にも對面し給へり。いと幼げにのみ見え給へば、（二）心やすくて、おとなしく、親めきたる樣に、昔の（三）御すぢをも尋ね聞え給ふ。中納言の乳母といふ召し出でて、紫「（四）同じかざしを尋ね聞ゆれば、かたじけなけれど、（五）わかぬさまに聞えさすれど、序なくて侍りつるを、今よりは疎からず、（六）彼方などにも物し給ひて、（七）怠らむ事をば驚かしなども物し給はむなむ、嬉しかるべき」など宣へば、中納言「（八）賴もしき御かげどもに、樣々におくれ聞え給ひて、心細げにおはしますめるを、（九）かゝる御ゆるし侍るめれば、ます事なくなむ思ひ給へられける。（一〇）背き給ひにし上の御心向も、たゞかくなむ御心隔て聞え給はず、まだいはけなき御有樣をも、はぐくみ奉らせ給ふべくぞ侍るめりし。（一一）内々にもさなむ賴み聞えさせ給ひし」など聞ゆ。紫「（一二）いと辱かりし御消息の後は、（一三）いかでとのみ思ひ侍れど、何事につけても、數ならぬ身なむ口惜しかりける」と、安らかに大人びたるけはひにて、宮にも（一四）御心につき給ふべく、繪などの事、雛の

（一）女三に紫が
（二）紫が
（三）紫と女三とは從姉妹なれば一家の人々の事を語り合ふ也
（四）系統を尋ぬれば
（五）親しき間柄なれど
（六）紫の方へも來給ひて
（七）私に不行屆の事あらば注意して下さる樣ならば嬉しかるべし
（八）女三は父帝にも母女御にも別れて
（九）紫が斯く懇に仰せらるゝは此上なく辱く存じます
（一〇）御出家なされし朱雀院の御意向も斯樣に紫が隔なく幼稚なる女三の後見をして下されとの事なりし
（一一）女三も内々其樣希望して居られる
（一二）朱雀院よりの依賴狀
（一三）どうかして御賴に背かぬ樣にしたしと
（一四）氣に入る樣に

かで斯くしもありけむと思す。(一)打解けたりつる御手習を、硯のしたに(二)さし入れ給へれど、(三)見つけ給ひて、引きかへし見たまふ。手などの、いとわざとも上手と見えで、らう／＼じく美しげに書き給へり。

紫　身にちかく秋や來ぬらむ見るまゝに青葉の山もうつろひにけり

(四)とある所に、目とゞめ給ひて、

源　水鳥の青羽はいろもかはらぬをはぎのしたこそけしきことなれ

(五)など書き添へつゝすさび給ふ。ことに觸れて、(六)心苦しき御氣色の、下にはおのづから漏りつゝ見ゆるを、ことなく消ち給へるも、ありがたく哀に思さる。今宵は、何方にも御暇ありぬべければ、(七)かのしのび所に、いとわりなく出で給ひにけり。いとあるまじき事と、(八)いみじく思し返すにも、叶はざりけり。

(九)東宮の御方は、實の母君よりも、(一〇)この御方をば睦じきものに賴み聞え給へり。いと美しげに(一一)おとなび勝り給へるを、(一二)思ひ隔てず、かなしと見奉り給ふ。御物語な

(一)源が
(二)紫が
(三)源が
(四)青葉繁れる山も紅葉したるを見れば我が人に飽かるゝ時も近づきたるならん
(五)我心は少しもかはらぬに、其方の素振が此頃變になつて來たのはどうした事ぞ
(六)紫の恨めしがる心持が自ら顯るゝを強ひて何氣なくもてなすを見て源が哀に思ふ
(七)朧の處へ源が
(八)源自ら強く反省すれども行かぬ譯にゆかぬ
(九)明石姫君
(一〇)紫上
(一一)明石姫君が
(一二)紫が

ほす。(一)あまりに、何ごころなき(二)御有様を、(三)見顯されむも恥かしく味氣なけれど、さ宣はむを、心隔てむもあいなし、と思すなりけり。

(四)對には、かく出でたちなどし給ふものから、(五)我より上の人やはあるべき、身の程のものはかなき様を、見え置き奉りたるばかりこそあらめ、など思ひつゞけられて、うちながめ給ふ。(六)手習などするにも、おのづから(七)古言も、物思はしき筋のみ書かるゝを、さらばわが身には思ふ事ありけりと、みづからぞ思し知らるゝ。(八)院の渡り給ひて、宮、女御の君などの御様どもを、美しうもおはするかなと、様々見たてまつり給へる御目うつしには、(九)年頃目馴れ給へる人のおぼろげならむが、いとかく驚かるべきにもあらぬを、なほ類なくこそはと見たまふ。ありがたき事なりかし。あるべき限、氣高う恥かしげに整ひたるに添ひて、花やかに今めかしく匂ひ、なまめきたるさまぐの香も、取りあつめ、めでたき盛に見え給ふ。去年より今年はまさり、昨日より今日は珍らしく、常に目なれぬ様のし給へるを、い

(一)源の心
(二)女三の
(三)紫に
(四)紫上は女三訪問の用意はしたのもの
(五)紫の心。源の妻妾の中にて我より勝れる人はなし、只我が弱點は賤しく育ちたる幼時の事を源に知られて居るのみ
(六)むだがき
(七)古歌を書くにも物思の筋をよみたる歌のみ自然と書かるゝを見て
(八)源が紫方へ來て
(九)年來見馴れたる紫が若し大體の美人ならば何とも思はれぬ筈なるに

(一)女三にも此序を以て對面したし
(二)我が望通りなる相談をかけられる
(三)女三は
(四)女三に對してよりも明石姫君に對して紫が氣を張りて
(五)紫の容貌
(六)紫上が明石姫君に
(七)御身に對面したしといふが
(八)不似合には非ず
(九)應對の詞といふものは其場合々々で考へるものぢや
(一〇)紫と女三と中よくて暮してくれゝばよいと源が思ふ

の上こなたに渡りて、對面し給ふ序に、紫「姫宮にも中の戸あけて聞えむ。(一)かねてよりもさやうに思ひしかど、序なきにはつゝましきを、かゝる折に聞え馴れなば、心安くなむあるべき」と、大臣に聞え給へば、うち笑みて、源「思ふやうなる御語ら(二)ひにこそはあゝなれ。(三)いと幼げに物し給ふめるを、後やすく教へなし給へかし」と、ゆるし聞え給ふ。(四)宮よりも、明石の君の、恥かしげにて交らはむを思せば、御髪すましひきつくろひておはする、(五)類あらじと見え給へり。

大臣は宮の御方に渡り給ひて、源「夕つ方に、(六)かの對に侍る人の、淑景舍に對面せむとて出でたつその序に、(七)近づき聞えさせまほしげにものすめるを、ゆるして語らひ給へ。心などはいとよき人なり。まだ若々しくて、御遊がたきにもつきなか(八)らずなむ」などきこえ給ふ。女三「恥かしうこそはあらめ。何事をか聞えむ」と、おいらかに宣ふ。源「(九)人のいらへは、ことにしたがひてこそは思し出でめ。隔て置きてなもてなし給ひそ」と、こまかに教へ聞え給ふ。(一〇)御中うるはしくて過し給へとお

(一)恨むべき事あらば率直に抓るなり何なりしてあらはに恨み給へ
(二)一切の事を白状して仕舞ふ事になる
(三)女三方へも源が急には行かれず
(四)女三
(五)女三の御機嫌がむづかしき樣ならば其も氣遣なれど其樣な事はなき故
㊟明石姫君懷胎により て六條院へ退出、紫上女三宮と睦じ
(六)明石姫君
(七)從來氣安き生活に馴れし娘心地に
(八)帝が暇を許し給はぬ故
(九)懷胎也
(一〇)年若なるに懷胎したるを
(一一)暇を許されたる也
(一二)女三の居る寢殿の東座敷に明石姫君の間を設けたり
(一三)明石上
(一四)明石姫君に附添ひて
(一五)紫上明石姫君方に來りて

御氣色こそ苦しけれ。(一)唯おいらかにひきつみなどして教へ給へ。隔あるべくもならはし聞えぬを、思はずにこそなりにける御心なれ」とて、よろづに御心とり給ふほどに、何事も(二)え殘し給はずなりぬめり。(三)宮の御方にも頓にもえ渡り給はず、こしらへ聞えつゝおはします。(四)姫宮は何とも思したらぬを、御後見どもぞ安からず聞えける。(五)煩はしうなど見え給ふ氣色ならば、其方もまして心苦しかるべきを、おいらかに美しき翫び種に思ひ聞え給へり。

(六)桐壺の御方は、うちはへ得まかゝで給はず、御暇のあり難ければ、(七)心安くならひ給へる若き御心地に、いと苦しくのみ思したり。夏頃惱ましくし給ふを、頓にも(八)許し聞え給はねば、いとわりなしとおぼす。(九)珍しきさまの御心地にぞありける。まだいと(一〇)あえかなる御程に、いとゆゝしくぞ、誰も〳〵思すらむかし。辛うじて(一一)まかゝで給へり。(一二)姫宮のおはしますおとゞの東面に、御方はしつらひたり。(一三)明石の御方は、今は(一四)御身に添ひて出で入り給ふも、あらまほしき御宿世なりかし。(一五)對

いと若やかなる御振舞を、(一)心ながらも許さぬことに思しながら、(二)關守の固からぬたゆみにや、いとよく語らひ置きて出で給ふ。(三)そのかみも、人よりこよなく心とどめて、思う給へりし御志ながら、はつかにて止みにし御なからひには、いかでかは哀も少からむ。(四)いみじく忍び入り給へる、御寢くたれのさまを待ちうけて、(五)女君さばかりならむと心得給へれど、(六)おぼめかしくもてなしておはす。なか〱(七)打ちふすべなどし給へらむよりも、心苦しく、(八)などかくしも見放ち給へらむと思さるれば、ありしよりけに深き契をのみ、長き世をかけて聞え給ふ。かんの君の御事も、(九)又漏らすべきならねど、いにしへの事も知り給へれば、まほにはあらねど、源「物越にはつかなりつる對面なむ、のこりある心地する。いかで人目咎あるまじくもて隱して、(一〇)今一度も」と語らひ聞え給ふ。打笑ひて、紫「今めかしくもなりかへる御有樣かな。(一一)昔を今に改めくはへ給ふほど、中空なる身のため苦しく」とて、さすがに涙ぐみ給へるまみの、いとらうたげに見ゆるに、源「かう心安からぬ

(一)源自ら自己の行爲を不都合な事とは思ひながら
(二)今朧が獨住にて人目が少き故にや都合がよく
(三)昔も朧をば源が特別に思ひ居しにも拘はらず、其戀半ばにして遂げざりし中なれば
(四)源が我が方へ
(五)紫上は朧に逢ひて來しならんと悟りたれど
(六)分らぬ振して
(七)なまじ悋氣するよりも源が氣の毒にて
(八)なぜ此樣に紫がかまはぬならんと
(九)人に咄すべきではなけれど、紫は昔の關係も知り居る事なれば
(一〇)もう一度逢ひたし
(一一)昔にかへりて浮氣をなされたらば私こそ便なき身になりて苦しかるべし



るは、まして尋常ならず覺ゆれば(一)、さる方にてもなどか見奉り過し給はざらむ、(三)御宮仕にも限ありて、際ことに離れ給ふ(二)事も無かりしを、故宮のよろづに心を盡し給ひ、よからぬ世の騷に、輕々しき御名さへ響きて、やみにしよ、など思ひ出でらる。(四)名殘おほく殘りぬらむ御物語のとぢめは、げに殘りあらせまほしきわざなゝめるを、御身を心にえ任せさせ給ふまじく、こゝらの人目もいと恐ろしくつゝましければ、やう〳〵さしあがり(五)行くに、心あわたゞしくて、廊の戸に御車さしよせたり。人々も忍びてこわづくり聞ゆ。人召して、かの咲きかゝりたる花、一枝折らせ給へり。

源　しづみ(六)しも忘れぬものをこりずまに身もなげつべきやどの藤波

いといたく思し煩ひて、より居給へるを、心ぐるしう見奉る(七)。女君も、今更にいとつゝましく、さま〴〵に思ひ亂れ給へるに、(八)花のかげは猶なつかしくて、

朧月　身(九)をなげむ淵もまことの淵ならでかけじやさらにこりずまの波

(一)中納言の心に
(二)中納言の心、朧は源の情人といふ關係であつても仔細あるまい
(三)朧は宮仕はしたれども中宮や女御といふ如き飛抜けた身分でもなかりしに弘徽殿大后が世話を燒きすぎて
(四)久々の逢瀬なれば名殘は猶盡きぬ譯なれば源の躊躇するも尤にて、猶何とかして名殘を惜ませたきものなれど
(五)日が
(六)朧故に須磨退去の騷までも引起せしに、性懲もなく身を棄てゝも朧に逢ひたき心地す
(七)中納言が
(八)源をいふ
(九)身を投げんとは仰せらるれど其も眞實ならず我は昔に懲りたれば再び元の中にならんとは思はず

(一)身を嗜み來りしかども
(二)昔を思ひ出す今夜の逢瀬には
(三)源の感じ
(四)源が歸る氣になれず
(五)花宴の巻にて源氏が「扇を取られて」と謡ひし時の事
(六)源が
(七)暗に朧月夜の事をいへる也
(八)源の

もなく思し集めて、(一)いといたく過し給ひにたれど、(二)昔覺えたる御對面に、その世の事も遠からぬ心地して、え心づよくもてなし給はず。猶らう／＼じく若うなつかしくて、一方ならぬ世のつゝましさをも、哀をも思ひ亂れて、歎きがちにてものし給ふ氣色など、(三)今始めたらむよりも珍らしく哀にて、明け行くもいと口惜しくて、(四)出で給はむ空もなし。朝ぼらけのたゞならぬ空に、百千鳥の聲もいとうらゝかなり。花は皆散り過ぎて、名殘かすめる梢の淺緑なる木立、(五)むかし藤の宴し給ひし、この頃のことなりけむかし、と(六)思し出づるに、年月のつもりにける程も、その折のことかきつゞけ哀に思さる。中納言の君見奉り送るとて、妻戸押し開けたるに、立ちかへり給ひて、源「(七)この藤よ。いかに染めけむ色にか、猶えならぬ心添ふ匂にこそ。いかでかこの蔭をば立ち離るべき」と、わりなく出で難に思しやすらひたり。山際よりさし出づる日の、花やかなるにさしあひ、目も輝く心地する(八)御樣の、こよなくねび加はり給へる御けはひなどを、珍らしく程經ても見奉

なる心地もするかな。年月のつもりをも、紛なく數へらるゝ心ならひに、かくおぼめかしきは、いみじうつらくこそ」(一)と恨みきこえ給ふ。夜いたく更け行く。玉藻に遊ぶ鴦の聲々などあはれに聞えて、しめ〴〵と人目少き宮の内の有様に、さも移り行く世かなと思し(二)つゞくるに、平仲(三)がまねならねど、誠に涙もろになむ。昔に變りて、(四)おとな〴〵しくは聞え給ふものから、これ(五)をかくてやとひき動し給ふ。

源(六) 年月をなかにへだてて逢坂のさもせきがたくおつるなみだか

女、

朧月(七) 涙のみせきとめがたき清水にて行き逢ふ道ははやく絶えにき

など(八)かけはなれ聞え給へど、いにしへを思し出づるも、誰(九)により、多うはさるいみじき事もありし世の騷ぞ、と思ひ出で給ふに、げに今一度の對面は、ありもすべかりけりと思し弱る(一〇)も、もとよりづしやかなる所はおはせざりし人の、年頃はさま〴〵に世の中を思ひ知り、來し方をくやしく、公私のことに觸れつゝ、數

(一)逢はぬ月日が重なり居るに、稀に逢へば此樣に隔を嚴重にするとは
(二)源が
(三)平仲は平貞文の渾名、貞文は平安朝の有名なる好色子、此男女の許にて空泣をして誤つて墨汁を目につけたる話宇治大納言物語にあり
(四)源の言葉は大人らしけれど
(五)此唐紙の隔を此儘にて別れるのかと
(六)たまに逢ふ今夜なるに此隔を置きたる儘なるは惜し
(七)我も其は惜しけれど君に逢ふ事はもう出來ぬ事になつて居る
(八)逢ふ事は飛んでもなき事の樣には言へど
(九)源の須磨の退去も多くは我との關係に基づける事を朧が思ひ出せば
(一〇)元より重々しき處はなき朧が

れど、姫宮の御事の後は、何事も、(一)いと過ぎぬる方のやうにはあらず、少し隔つる心添ひて、見知らぬ樣にておはす。

その日は(二)寢殿へも渡り給はで、御文書きかはし給ふ。薫物などに、心を入れて暮し給ふ。よひ過して、むつまじき人の限四五人ばかり、網代車の、むかし覺えて、やつれたるにて出で給ふ。和泉の守して(三)御消息聞え給ふ。かく渡りおはしましたる由(四)さゞめき聞ゆれば、驚き給ひて、朧月「怪しく、(五)いかやうに聞えたるにか」と、むづかり給へど、和泉(六)「をかしやかにて返し奉らむに、いと便なう侍らむ」とて、あながちに思ひめぐらして入れ奉る。(七)御とぶらひなど聞え給ひて、源(八)「唯こゝもとに物ごしにても。更に昔のあるまじき心などは、殘らずなりにけるを」と、理なく聞え給へば、いたく歎く〳〵ゐざり出で給へり。(九)されぱよ、猶けぢかさは、とかつ思さる。(一〇)互におぼろげならぬ御みじろきなれば、あはれも少からず。(一一)東の對なりけり。辰巳のかたの廂にすゑ奉りて、(一二)御障子のしりはかためたれば、源「いと若やか

(一)以前の如く源に對して打解けず
(二)源が女三方へも行かず手紙の往復ばかりあり
(三)朧月夜へ訪問の事を通知す
(四)侍女等抔が
(五)和泉前司等がどう源へ返事をしたのか
(六)解し難し、誤脱あるべし眞淵は「をかしやかにて」は「かゞやかしくて」の誤ならんかといへり、「かゞやかしくて」は恥をかゝせての意也
(七)源が見舞の詞を述べて
(八)一寸出て來給へ、物を隔てゝでもよいから話がしたい
(九)源の心、果して朧の輕々しさは昔の儘ぢやわい
(一〇)今は兩人共少しの身動きも輕々しく出來ぬ身分なれば
(一一)こゝは二條院の東の對なり
(一二)源と朧との間の唐紙をあかぬ樣にしてある也

(一)以下和泉前司兄妹より源の忍び來るべき交渉を受けたる朧月夜の自語
(二)昔よりつらかりし源の心を年來恨み來りし曉の今になりて
(三)朱雀の遁世せられし悲を差置きて源との縒を復活させるでもあるまい
(四)「なき名ぞと人には言ひてありぬべし心の問はばいかゞ答へむ」
(五)源との逢瀨はけしからん事と斷る
(六)源の心、昔忍逢ふは萬々無理なりし時さへ朧が承知したりしものを
(七)出家した朱雀には氣の毒なれど
(八)どうせ一度臭かつた中の事故
(九)和泉前司を手引にして、信田の森は和泉國の名所なれば斯くいへり
(一〇)朧の許へ
(一一)紫上
(一二)末摘花
(一三)いつも末摘などを訪ふには共れ程めかす事も無いのに
(一四)紫上が感附きはしたれど

互に後安くなむ」と宣ふ。かんの君(一)「いでや世の中を思ひ知るにつけても、昔(二)よりつらき御心をこよら思ひつめつる年ごろのはてに、(三)哀に悲しき御事をさし置きて、いかなる昔語をか聞えむ。げに人は漏り聞かぬやうありとも、(四)心の問はむこそいと恥かしかるべけれ」と、打ち歎き給ひつゝ、なほ(五)更にあるまじき由をのみ聞ゆ。(六)いにしへ理なかりし世にだに、心かはし給はぬ事にしもあらざりしを、げに背き給ひぬる御爲に(七)後めたき樣にはあれど、(八)あらざりし事にもあらねば、今しもけざやかに淸まはりて、立ちにし我名、今さらに取返し給ふべきにや、と思しおこして、(九)この信田の森を道のしるべにてまうで給ふ。(一〇)女君(一一)には、東の院にものする常陸の君(一二)の、日頃煩ひて久しくなりにけるを、物騷がしき紛に訪はねば、いとほしくてなむ。晝などけざやかに渡らむも便なきを、夜の間に忍びてとなむ思ひ侍る。人にもかくとも知らせじ」と聞え給ひて、いといたく心假粧し給ふを、(一三)例はさしも見え給はぬあたりを、あやし、と見給ひて、(一四)思ひあはせ給ふこともあ

(一)朧と
(二)須磨に退居せし當時の事
(三)朧がひまな身分になりて
(四)源の心に
(五)源から朧に文をやる
(六)朧からの返事
(七)萬事取整ひたる朧の様子を見るにつけても源が其儘には置かれず
(八)源と朧との中を取持ちたる朧の侍女
(九)中納言
(一〇)朧月夜に直談すべき
(一一)よき様に言うて朧に承知させて
(一二)汝も此祕密を他人には漏さじと思へば

なれば、年頃も忘れがたく、如何ならむをりに對面あらむ、今一度逢ひ見て、その世の事も聞えまほしくのみ思し渡るを、互に世の聞耳(一)も憚り給ふべき身の程に、いとほしげなりし世の騷(二)なども、思し出でらるれば、萬につゝみ過し給ひけるを、かう長閑に(三)なり給ひて、世の中を思ひしづまり給ふらむ頃ほひの御有樣、いよいよゆかしく(四)心もとなければ、あるまじき事とは思しながら、大かたの御とぶらひにことつけて、哀なるさまに常に聞え給ふ。(五)若々しかるべき御間ならねば、御返(六)も時々につけて聞えかはし給ふ。昔よりもこよなく打具し、(七)整ひはてにたる御けはひを見給ふにも、なほ忍びがたくて、昔の中納言の君の(八)許にも、心深きことどもを常に宣ふ。(九)かの人の兄なる、和泉の前の守を召しよせて、若々しく、古にかへりて語らひ給ふ。源「人傳ならで、物ごしに(一〇)聞え知らすべき事なむある。さりぬべく聞え靡かして、いみじく忍びて參らむ。今はさやうのありきも所狹き身の程(一一)に、おぼろげならず忍ぶべき事なれば、(一二)そこにも又人には漏らし給はじと思ふに、

とあり。大臣も見給うて、「哀なる御消息を、かしこまり聞え給へ」とて、御使にも、女房して(一一)、土器さし出させ給ひて強ひさせ給ふ。御返はいかゞなど、聞えにくゝ思したれど、事々しくおもしろかるべき折の事ならねば、たゞ心を述べて、

紫(一二)　背く世のうしろめたくばさりがたきほだしをしひてかけな離れそ

などやうにぞあめりし。女の御裝束に、細長添へてかづけ給ふ。(一三)御手などのいとめでたきを、院御覽じて、何事(一四)もいと恥かしげなめるあたりに、いはけなくて見え給ふらむ事、いと心苦しうおぼしたり。

今はとて、女御更衣達(一五)など、おのがじし別れ給ふも、哀なることなむ多かりける。尚侍(一六)の君は、故后(一七)の宮のおはしましゝ、二條の宮にぞ住み給ふ。姫宮(一八)の御事を置きては、この御事をなむ顧みがちに、帝も思したりける。尼になりなむと思し(一九)たれど、かゝる(二〇)きほひには慕ふやうに心あわたゞし、と諫め(二一)給ひて、やう〳〵(二二)佛の御事など急がせ給ふ。六條の大臣は、哀に(二三)飽かずのみ思してやみにし御あたり

(一一)源氏
(一二)子にひかさるゝ御心ならば強ひて世を背き給ふにも及ぶまじ
(一三)紫の返事の
(一四)立派な人の揃ひたる六條院に幼稚な女三がまじり居る事を
⑭ 朧月夜二條の宮に移る、源氏窃に朧月夜に逢ふ
(一五)朱雀に仕へし妾達
(一六)朧月夜
(一七)弘徽殿大后
(一八)女三に次ぎては朧月夜の身の上を朱雀が心配したり
(一九)朧月夜が
(二〇)朱雀出家の際に尼になるは
(二一)朱雀が
(二二)漸次に朧の出家に關する用意をさせる
(二三)朧との關係をいふ

へる年頃よりも、對の上の御有樣ぞ猶ありがたく、我ながらもおふしたて(一)けりと思す。一夜の程あしたの間も戀しく(二)覺束なく、いとゞしき御志のまさるを、などかく覺ゆらむと、ゆゝしきまでなむ。

院(三)の帝は、月のうちに(四)御寺(五)にうつろひ給ひぬ。この院(六)に、哀なる御消息ども聞え給ふ。姫宮(七)の御ことは更なり、煩はしく(八)いかに聞く所やなど、憚り給ふ事なくて、ともかくも、たゞ御心にかけてもてなし給ふべくぞ、たび〳〵聞え給ひける。されど哀にうしろめたく、幼く(九)おはするを思ひ聞え給ひけり。紫の上にも、御消息ことにあり。

朱雀 幼き人(一〇)の、心なき樣にて、うつろひ(一一)ものずらむを、罪なく思し許して後見給へ。尋ね(一二)給ふべき故もやあらむとぞ。

そむき(一三)にしこの世にのこる心こそ入るやまみちのほだしなりけれ

闇(一四)をえはるけで聞ゆるも、をこがましくや。

(一)うまく仕立てたものぢやと思ふ
(二)紫を
⑫ 朱雀院西山に移る、六條院へ消息
(三)朱雀
(四)二月中に
(五)西山の寺
(六)六條院へ朱雀より
(七)女三の事を頼み來るは勿論の事
(八)我に對して憚る樣の事はせず其方の思ふ存分に女三を扱ひてくれよと
(九)女三の幼稚なるを氣遣へり
(一〇)女三をいふ
(一一)六條院へ引取られたるを
(一二)女三と紫とは從姉妹なるをいふ
(一三)出家しても我子に惹かされる心が邪魔になる
(一四)子故の闇を自ら解脫することを得ずして斯くだく〳〵しく頼むも愚痴らしかるべし

(一)衣物ばかりで身體はなき樣に見える
(二)朱雀、以下源の心
(三)男らしき方の才能には乏しき樣に人に思はるれども
(四)なぜ此樣に女三を大樣に育てたるらん
(五)女三は朱雀の秘藏子なりと聞きしに
(六)源の言ふなりに
(七)捨てる事は出來ぬ樣に愛らしく見ゆ
(八)以下源の心、若い時分ならば女三に對して見ざめがすべき筈なれど
(九)勘辨して
(一〇)水際立ちて優れたる女はないものぢや
(一一)多くの女が皆其々に長短がある
(一二)女三も他人から見れば申分のない女ぢや
(一三)不斷一所に暮したる今迄よりも、女三といふ物が出來てからひとしほ紫を讚美する心深く

とらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどの事々しく、よだけく麗しきに、自らは何心もなく物はかなき御程にて、いと御衣がちに(一)、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもし給はず、たゞ兒の面嫌せぬ心地して、心やすく美しきさまし給へり。(二)院の帝は、雄々しくすくよかなる方の御才などこそ、心もとなくおはしますと、世人思ひためれ(三)、をかしきすぢ、なまめきゆゑ〴〵しき方は、人に優り給へるを、などてかくおいらかに生ふしたて給ひけむ(四)、さるはいと御心留め給へる御子と聞きしを(五)、と思ふも、なまくち惜しけれど、憎からず見奉り給ふ。たゞ聞(六)え給ふまゝに、なよ〳〵と靡き給ひて、御いらへなどをも、覺え給ひけることは、いはけなく打ち宣ひ出でて、え見はなたず見え給ふ(七)。昔の心ならましかば(八)、うたて心劣せましを、今は世の中を、皆さま〴〵に思ひなだらめて(九)、とあるもかゝるも、きは離るゝ事は難きものなりけり(一〇)、とり〴〵にこそ多うはありけれ(一一)、餘所(一二)の思は、いとあらまほしき程なりかし、とおほすに、さし並び(一三)目かれず見奉り給

（一）源が
（二）源の心
（三）紫には
（四）紫に隔をおく譯では無けれど、餘りつまらぬ女三の文を他の人に迄見せたらば女三の身分に對して氣の毒なり
（五）紫が
（六）一部分
（七）紫が
（八）源が來ぬに便りなき我身はやがてとりつく島もなく消える事であらう
（九）源の心、あれ位の年輩になれば斯う幼稚ではない筈と
（一〇）女三ならぬ外の女ならば手紙の趣を斯樣斯樣と紫に話すのであるが
（一一）紫に對していふ
（一二）源が女三へ
（一三）粧を凝らしたる源の樣子
（一四）女三方の
（一五）聟君の源こそ立派な方ではあるが、紫を始め外に婦人達の多き事故女三に取つて目ざましき事が遂には出來すべしと
（一六）女三

あざやかに押包まれたるを、胸（一）つぶれて、御手（二）のいと若きを、しばし（三）見せ奉らであらばや、隔（四）つとはなけれど、淡々しきやうならむは、人の御程かたじけなし、と思すに、ひき隠し給はむも心（五）おき給ふべければ、かたそば（六）ひろげ給へるを、し（七）り目に見おこせて添ひ臥し給へり。

女三（八）はかなくてうはのそらにぞ消えぬべき風にたゞよふ春のあわ雪

御手、げにいと若く幼げなり。さ（九）ばかりの程になりぬる人はいと斯くはおはせぬものを、と目とまれど、見ぬやうに紛らはして止み給ひぬ。他人（一〇）の上ならば、さこそあれなどは、忍びて聞え給ふべけれど、いとほしくてたゞ、「心（一一）安くを思ひなし給へ」とのみ聞え給ふ。今日は、宮の御方に晝（一二）渡り給ふ。心ことに打ち（一三）けさうじ給へる御有樣、今見奉る女房（一四）などは、まして見るかひありと思ひ聞ゆらむかし。御乳母などやうの、老いしらへる人々ぞ、いで（一五）やこの御有樣一所こそめでたけれ、めざましき事はありなむかし、と打ちまぜて思ふもありけり。女宮（一六）は、い

り起きさせ給ひて、宮(一)の御方に御文奉れたまふ。殊に恥(二)かしげもなき御樣なれど、御筆などひきつくろひて、白き紙に、

源(三)なかみちをへだつる程はなけれども心みだるゝ今朝のあわゆき

梅につけ給へり。人召して、源「西の渡殿より奉らせよ」と宣ふ。やがて見(四)出して、端近くおはします。白き御衣どもを著給ひて、花をまさぐり給ひつゝ、友待つ雪のほのかに殘れる上に、打散りそふ空をながめ給へり。鶯の若やかに、近き紅梅の末にうち鳴きたるを、源「袖こそ匂(五)へ」と花をひき隱して、御簾押し上げて眺め給へる樣、夢にも、かゝる人の親にて、重き位と見え給はず、若うなまめかしき御樣なり。御返少し程經る心地すれば、入り給ひて、女君に花を見せ奉り給ふ。源「花といはば、かくこそ匂はまほしけれな。櫻(六)にうつしてば、又塵ばかりも心わく方なくやあらまし」など宣ふ。源「これも數多にうつろはぬ程、目とまるにやあらむ。花の盛にならべて見ばや」など宣(七)ふに、御かへりあり。紅の薄樣に、

(一)女三方

(二)女三の幼稚なるをいふ

(三)通ふに路遠き處ならば雪の降るを厭ふも尤也是は其程遠き處ではなけれど矢張今朝の雪には心が亂るゝと也

(四)源が其儘外を眺め居る也、女三の返事を紫に見せずに見ん爲なるべし

(五)折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯の鳴く

(六)此梅の匂を櫻にもたせたらば、それこそ花中の第一等にて外の花に目もくれる氣にはなるまい

(七)梅の時分は外に花もなく氣の散らぬ故梅が特によく見えるのかも知れぬ

(一)紫の
(二)紫が涙に少し濡れたる衣の袖をかくして
(三)源の心、無上の貴人でも此樣な女は無いと女三と比較して彌々紫に感心する
(古) 女三宮と紫上とに對する源氏の感
(四)紫の打解けぬを源が恨みて
(五)源が女三方へ
(六)女三方
(七)病氣して
(八)我儘の出來る紫の方に
(九)女三の乳母
(一〇)趣のない
(一一)源の心、院は朱雀
(一二)當分だけも我慢して女三へ通はんと思へど出來ぬが
(一三)紫上
(一四)紫方に

こそあゝめれ。さるは罪もなしや」とて、(一)御衣ひきやりなどし給ふに、(二)少し濡れたる御單衣の袖をひき隱して、うらもなくなつかしきものから、打解けてはたあらぬ御用意など、いと恥かしげにをかし。(三)限なき人と聞ゆれど難かゝめる世を、と思しくらべらる。

萬いにしへの事を思し出でつゝ、(四)解け難き御氣色を恨み聞え給ひて、その日は暮したまへれば、(五)えわたり給はで、(六)寢殿には御消息をぞ聞え給ふ。

源 今朝の雪に(七)心地あやまりて、いと惱ましく侍れば、(八)心やすき方にためらひ侍る。

とあり。(九)御乳母、「然聞えさせ侍りぬ」とばかり、言葉に聞えたり。(一〇)特なることなの御返やとおぼす。(一一)院に聞召さむこともいとほし、(一二)この頃ばかりつくろはむと思せど、えさもあらぬを、さは思ひしことぞかし、あな苦し、と自ら思ひつゞけ給ふ。(一三)女君も、思ひやりなき御心かなと、苦しがり給ふ。今朝は例のやうに(一四)大殿籠

思しなほす。風打吹きたる夜のけはひ冷やかにて、ふとも寢入られ給はぬを、近く侍ふ人々怪しとや聞かむと、うちも身じろき給はぬも、なほいと苦しげなり。夜深き鷄の聲の聞えたるも物哀なり。

わざと(一)つらしとにはあらねど、かやうに思ひ亂れ給ふけにや、かの(二)御夢に見え給ひければ、打驚き(三)給ひて、いかにと心騷がし給ふに、鷄の音待ちいで給へれば、夜深きも知らず顔に、急ぎ出で給ふ。(四)いといはけなき御有樣なれば、乳母達近く侍ひけり。妻戸押し開けて出で給ふを、見奉りおくる。明けぐれの空に、雪の光見えておぼつかなし。名殘までとまれる御匂、「闇はあやなし」(五)とひとりごたる。雪は所々消え殘りたるが、いと白き(六)庭の、ふと差別見えわかれぬ程なるに、源「な(七)ほ殘れる雪」と忍びやかに口ずさみ給ひつゝ、御格子(八)打ち叩き給ふも、久しくかかる事なかりつるならひに、人々も空寢をしつゝ、やゝ待たせ奉りてひきあげたり。源(九)「こよなく久しかりつるに、身も冷えにけるは、おぢ(一〇)聞ゆる心の疎ならぬに

(一)紫が強ひて源を恨む譯ではなけれど
(二)紫が源の夢に見えし故
(三)源が
(四)女三は丸で子ども故夜も乳母が近く寢て居る也
(五)「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るゝ」
(六)白き砂を敷きてある也
(七)「子城陰處猶殘雪、衙鼓聲前未有塵」白居易の庾樓曉望の詩の句
(八)紫方即ち西の對の
(九)格子をあくる間が
(一〇)お前の怒氣を恐れての事と見える



辱く心苦しき御事なゝめれば、いかで心おかれ奉らじとなむ思ふ」など宣へば、(一)中務、中將の君などやうの人々、目をくはせつゝ、「あまりなる御思ひやりかな」などいふべし。昔は、(二)たゞならぬ樣に、つかひならし給ひし人どもなれど、年頃はこの御方にさぶらひて、(三)皆心よせ聞えたるなゝめり。(四)他御方々よりも、(五)「いかに思すらむ。もとより思ひはなれたる人々は、なか〳〵心やすきを」など、(六)おもむけつゝ、訪ひ聞え給ふもあるを、(七)かく推量る人こそなか〳〵苦しけれ、世の中もいと常なきものを、(八)などてかさのみは思ひ惱まむ、などおぼす。あまり久しき(九)宵居も例ならず人や咎めむと、心の鬼に思して入り給ひぬれば、御衾まゐりぬれど、げにかたはら淋しき夜な〳〵經にけるも、猶たゞならぬ心地すれど、かの須磨の(一〇)御別の折を思し出づれば、(一一)今はとかけ離れ給ひても、(一二)たゞ同じ世の中に聞き奉らましかばと、(一三)我身までのことは打置き、あたらしく悲しかりし有樣ぞかし。さてそのまぎれに、(一四)我も人も命堪へずなりなましかば、いふかひあらまし世かは、と

(一)二人ともに元は源のかくし妾なりし女
(二)一通りの侍女としてでなく源が親しく召使ひし女等なれど
(三)紫に
(四)他の婦人たち
(五)女三が來て紫の御心中は如何ならん、素よりあきらめて居る我々は却つて氣安けれど
(六)紫に水をむけて
(七)紫の心
(八)そう心配ばかりして居てもつまらぬ
(九)起きて居るのも
(一〇)女三の嫁入以來
(一一)紫の心
(一二)源が此世に居る事さへ分つて居ればそれでよいと思ひて
(一三)自分の身の上の事は考へず
(一四)源も紫も死んで仕舞ひたらば

（一）紫が
（二）紫方の侍女等の心
（三）源の寵姫たちは多人數なれど、誰も紫には一目おきて居る故從來平和に過し來しに
（四）女三方の恣なる勢に壓倒されて其儘に過す紫でもあるまじ
（五）紫は丸で知らぬ顏をして
（六）紫と女三との中を色色と噂するを
（七）源の寵愛の女たちは數多く居れど
（八）源の
（九）源が
（一〇）女三の來られしは幸なり
（一一）我もまだ子供心の失せぬのかして女三と一緒になりて遊びたく思ふに
（一二）女三と我との間に隔ある樣に人が思ふかも知れぬ
（一三）對等の身分か其上り下の女に對してこそ嫉妬の情も自ら起るものなれど女三は一通りならぬ朱雀院の御頼の事なれば

後めたうぞ思しなりぬる。さこそつれなく（一）紛らはし給へど、（二）さぶらふ人々も、思はずなる世なりや、（三）數多ものし給ふやうなれど、何方も皆此方の御けはひには、方さり憚るさまにて過し給へばこそ、事なくなだらかにもあれ、（四）おしたちて斯ばかりなる有樣に、けたれても過し給はじ。又さりとて、はかなきにつけても、安からぬことのあらむ折々、必ず煩はしき事ども出來なむかし、など己がじし打語らひ歎かしげなるを、（五）つゆも見知らぬやうに、いとけはひをかしく物語などし給ひつゝ、夜更くるまでおはす。かう人（六）のたゞならず言ひ思ひたるも、聞きにくしと思して、紫斯く（七）これかれ數多物し給ふめれど、（八）御心にかなひて、今めかしく勝れたる際にもあらずと、（九）目なれてさう〳〵しく思したりつるに、（一〇）この宮のかく渡り給へるこそめやすけれ。（一一）なほ童心のうせぬにやあらむ、我もむつび聞えて有らまほしきを、あいなく隔（一二）ある樣に、人々やとりなさむとすらむ。（一三）ひとしき程、劣りざまなど思ふ人にこそ、たゞならず耳だつ事も、おのづから出來るわざなれ。

(一)源が
(二)源との中は何時迄もかはらぬ事と常にして居たるが悔し
(三)古歌
(四)源が
(五)命は限あるもの故絶ゆる事あるべけれど、我我二人の中は尋常一樣の契にはあらぬ故絶ゆる事はあるまじ
(六)源が女三へ
(七)紫が催促する故
(八)紫が見送る心の中は
(九)紫の心、多年此樣な事がありはせぬかと心配せしに、源がもう其方は大丈夫といふ位に堅くなりし故
(一〇)もう彌〻大丈夫なちんと油斷した今になつて
(一一)人に聞かれても一通りならぬ
(一二)安心は出來ぬ世の有樣なれば行末も氣掛りなりと紫が思ふ

ゐみて、紫「自らの御心ながらだに、え定め給ふまじかゝなるを、まして理も何も、何處にとまるべきにか」と、いふがひなげにとりなし給へば、恥かしうさへ覺え(一)給ひて、頬杖をつき給ひてより臥し給へれば、硯を引きよせて、

紫 めに近くうつればかはる世の中を行くすゑ(二)とほくたのみけるかな

ふること(三)など書きまぜ給ふを、取りて見給ひて、(四)はかなき事なれど、げにと理にて、

源 命(五)こそたゆとも絶えめさだめなき世のつねならぬなかのちぎりを

頓にもえ渡り(六)給はぬを、いとかたはらいたきわざかなと、そゝのかし聞え給へば、(七)なよゝかにをかしき程に、えならず匂ひて渡り給ふを、見出し給ふもいとたゞに(八)はあらずかし。(九)年頃さもやあらむと思ひし事どもも、今はとのみもてはなれ給ひつゝ、(一〇)さらば斯うにこそはと打解けゆく末に、あり〳〵て、かく世の聞耳も斜な(一一)らぬことの出來ぬるよ。(一二)思ひ定むべき世の有樣にもあらざりければ、今より後も

けなき氣色して、(一)ひたみちに若び給へり。かの(二)紫のゆかり尋ね取り給へりし折思し出づるに、(三)彼はざれていふかひありしを、此はいとはけなくのみ見え給へば、(四)よかゝめり、憎げにおしたちたる事などは有るまじかゝめり、と思すものから、いとあまり物の榮なき御樣かな、と見奉り給ふ。

三日が程は、(五)夜がれなく渡り給ふを、(六)年頃さもならひ給はぬ心地に、忍ぶれどなほ物哀なり。(七)御衣どもなど、いよ〳〵たきしめさせ給ふものから、(八)打眺めてものし給ふ氣色、いみじくらうたげにをかし。(九)などて、萬の事ありとも、(一〇)又人をば竝べて見るべきぞ。あだ〳〵しく心弱くなり來にける我がおこたりに、(一一)かゝることも出でくるぞかし。若けれど、(一二)中納言をばえ思しかけずなりぬめりしを、と我ながらつらく思し續けらるゝに、涙ぐまれて、源「今宵ばかりは、理と許し給ひてむな。これより後のとだえあらむこそ、身ながらも心づきなかるべけれ。又さりとて、(一三)かの院に聞召さむ事よ」と思ひ亂れ給へる御心の中苦しげなり。少しほゝ

(一)一向に子供らしい
(二)紫を迎へ取りし時の事を源が思ひ出して比較して見るに
(三)紫は
(四)源の心、是なら安心ぢや、女三が憎々しく我儘を振舞ふ事などはあるまいと
(五)毎夜源が女三方へ行くを見て
(六)其樣な事には出逢ひつけぬ紫の心には
(七)紫が世話をやきて源の衣裳に香を燒きしめさする也
(八)紫が
(九)源の心
(一〇)紫以外に又本妻を設ける必要はなし
(一一)女三を引受ける事にも成つたのぢや
(一二)夕霧は物堅き故朱雀も聟にとは思ひ寄らざりしに
(一三)餘り女三を粗末にしたらば朱雀が聞いて感情を惡くすべし

送に、上達部など數多參り給ふ。かの家司望み給ひし大納言（一）も、安からず思ひながら侍ひ給ふ。御車寄せたる所に、（二）院わたり給ひて、おろし奉り給ふ程なども、（三）例には違ひたる事どもなり。（四）たゞ人におはすれば、（五）よろづの事限ありて、内裏まゐりにも似ず、（六）婿の大君といはむにも事違ひて、めづらしき御中のあはひどもになむ。

三日が程は、（七）かの院よりも、主人の院方よりも、嚴しく珍らしきみやびを盡し給ふ。（八）對の上もことに觸れて（九）たゞにも思されぬ世の有樣なり。げに、（一〇）斯かるにつけても、こよなく人に劣り消たるゝ事もあるまじけれど、（一一）又竝ぶ人なくならひ給ひて、（一二）花やかにおひさき遠く、侮りにくきけはひにて、（一三）うつろひ給へるに、なまはしたなく（一四）思さるれど、（一五）つれなくのみもてなして、（一六）御わたりの程も、もろ心にはかなき事もしいで給ひて、いとらうたげなる（一七）御有樣を、いとゞあり難しと（一八）思ひ聞え給ふ。（一九）姫宮は、げにまだいとちひさく、（二〇）かたなりにおはする中にも、いといは

（一）藤大納言
（二）源氏
（三）源は太上皇なれば自ら女を迎ふる事は定例に非ざるを、自ら卑下して斯くせるゝ也
（四）源が
（五）儀式の萬事が
（六）催馬樂の吾家の詞をとる、「吾家はとばり帳をもかけたれば大君來ませ婿にせん云々」
（七）朱雀院
（八）紫上
（九）平氣でも居られぬ
（一〇）記者の評、女三が來たりとて紫が其に壓倒される事もあるまじけれど
（一一）從來紫が
（一二）此度新に女三が
（一三）源に嫁し來れるを見て
（一四）紫が
（一五）平氣を裝ひて
（一六）女三引移の際にも源と一偕になりて色々の用意をして
（一七）紫の
（一八）源が紫を
（一九）女三
（二〇）まだ未成人といふ年배の中にも殊に女三は

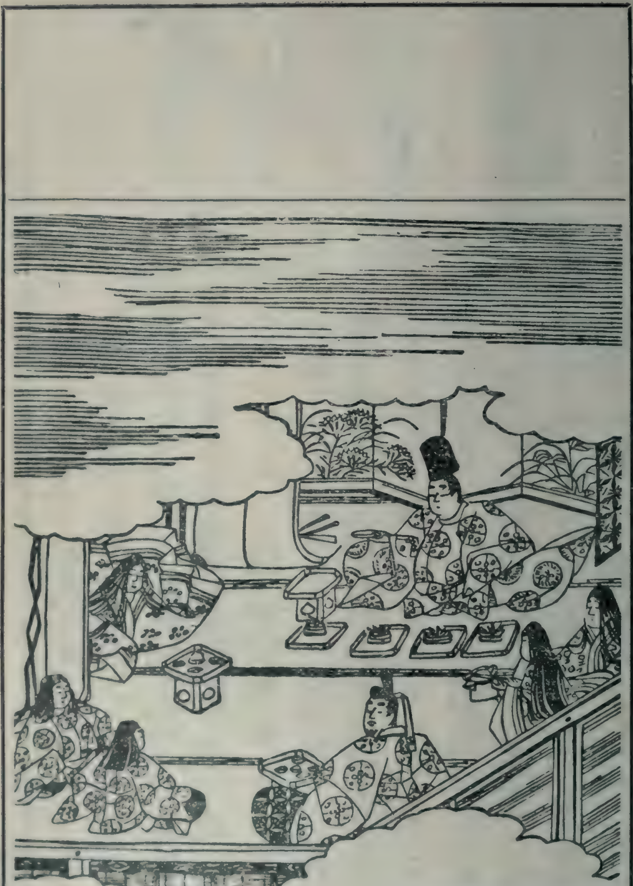
(一)源より
(二)自分の老が思ひ知られて也
(三)段々年が寄るか否かを前と見比べてくれよ
(四)前の玉鬘との關係
(五)懇に物語もせずに玉鬘が急ぎ歸るを
(六)頭中には只一通りの父としての親みのみにて
(七)源の
(八)身がかたまるにつけても
● 女三宮源氏に嫁す、紫上の感情、侍女等の同情
(九)女三宮
(一〇)源方
(一一)寢殿の內也
(一二)女三の
(一三)女三附の
(一四)女御入內の儀式に准じて
(一五)朱雀院

たまふ。御贈物(一)などありけり。源「かう世を捨つるやうにて明し暮すほどに、年月の行方も知らず顔なるを、かう數へ知らせ給へるにつけては、心(二)ぼそくなむ。時々は老(三)いや勝ると、見給ひくらべよかし。かく古めかしき身の所せさに、思ふに從ひて對面なきもいと口惜しくなむ」など聞え給ひて、哀にもをかしくも、思(四)ひいで聞え給ふ事なきにしもあらねば、なか(五)なかほのかにてかく急ぎ渡り給ふを、いと飽かず口惜しくぞ思されける。かんの君も、誠(六)の親をばさるべき契ばかりに思ひ聞え給ひて、あ(七)りがたくこまやかなりし御心ばへを、年月にそへて、かく世に住(八)みはて給ふにつけても、疎ならず思ひ聞え給ひけり。

かくて二月の十餘日に、朱雀院の姫宮(九)、六條院に渡り給ふ。(一〇)この院にも御心まうけ世の常ならず。若菜參りし西(一一)の放出に、御帳(一二)たてて、そなたの一二の對、渡殿かけて、女房(一三)の局々まで、細にしつらひ磨かせ給へり。內裏(一四)に參り給ふ人の作法をまねびて、(一五)かの院よりも、御調度など運ばる。渡り給ふ儀式いへば更なり。御

(一)低き調子にしらべ
(二)柏木は
(三)快活に
(四)貴重なる書籍樂器等を納め置く殿
(五)桐壺帝
(六)朱雀院同胞の皇女
(七)源の四十の賀に華麗をつくさん爲に
(八)源が
(九)螢
(一〇)源の承諾を得て自分に配當せられたる琴を源に讓る
(一一)源が彈かぬ譯にもゆかず
(一二)呂の聲をいふとぞ
(一三)催馬樂青柳「青柳を片絲によりてをけや鶯の縫ふてふ笠はをけや梅の花笠や」
(一四)公の儀式は定例ありて事限りあるを以て也

張りて、いたうくだして(一)調べ、響多く合せてぞかきならし給ふ。これは(二)、いとわ(三)らゝかにのぼる音の、なつかしく愛敬づきたるを、いと斯うしもは聞えざりしをと、御子達も驚き給ふ。琴は、兵部卿宮ひき給ふ。この御琴は、宜陽殿(四)の御物にて、代々に第一の名ありし御琴を、故院(五)の末つ方、一品(六)の宮の好み給ふことにて、賜はり給へりけるを、この(七)折の清らを盡し給はむとするため、大臣の申し賜はりたまへる御つたへ〴〵を思すに、いと哀に、昔のことも(八)戀しく思し出でらる。御子(九)も、醉泣え留め給はず、御氣色(一〇)とり給ひて、琴は御前にゆづり聞えさせ給ふ。物の哀に、え過し(一一)給はで、珍らしきもの一つばかり彈き給ふに、事々しからねど、限なくおもしろき夜の御遊なり。唱歌の人々御階に召して、勝れたる聲のかぎり出して、かへり聲(一二)になる。夜の更け行くまゝに、物の調どもなつかしく變りて、青柳(一三)遊び給ふ程、げにねぐらの鶯も驚きぬべく、いみじく面白し。私事(一四)の様にしなし給ひて、祿など、いと警策に設けられたりけり。曉に、かんの君かへり



(一)御病氣まだ御全快ならぬ故
(二)頭中
(三)樂器を配當する
(四)頭中程の名人の彈き馴れたる名器なれば、他人は今夕之を彈くことを憚る故
(五)柏木に彈けと源が責むる也
(六)名人の子といひても此樣に父の長所を受け繼ぐことは出來にくきものぞと
(七)調子を譜にうつしてある唐土傳來の樂は習ふにも習ひよけれど
(八)柏木の彈く和琴は
(九)他のすべての樂器の音が柏木の和琴によりて調節せられたるは
(一〇)頭中は何時も

御前には、沈の懸盤四つ、御杯どもなつかしく、今めきたる程にせられたり。朱雀院の御藥(一)のこと、猶たひらぎはて給はぬにより、樂人などは召さず。御笛など、太政大臣の、その方はとゝのへ給ひて、頭中「世中に、この御賀より、また珍らし(二)く淸らを盡すべき事あらじ」と宣ひて、勝れたる音のかぎりを、かねてより思し設けたりければ、忍びやかに御遊あり。とり〴〵に(三)奉る中に、和琴は、かの大臣の第一に祕し給ひける御琴なり。(四)さるものの上手の、心を留めてひき鳴し給へる音、いとならびなきを、他人は搔きたてにくゝし給へば、(五)右衞門督のかたく辭ぶるを責めたまへば、げにいと面白く、をさ〳〵劣るまじく彈く。何事も、(六)上手の嗣といひながら、斯くしもえ繼がぬわざぞかしと、心にくゝ哀に人々おぼす。(七)調に從ひておとある手ども、定れる唐土のつたへどもは、なか〳〵尋ね知るべき方あらはなるを、(八)心にまかせて、唯かき合せたるすがゝきに、(九)よろづの物の音調へられたるは、妙におもしろく怪しきまでひゞく。(一〇)父大臣は、琴の緒もいと緩に

を」と聞えたまふ。かんの君も、いとよくねび勝り、もの〳〵しき氣さへ添ひて、見るかひある樣し給へり。

玉　(一)若葉さすのべの小松をひきつれてもとの岩根をいのる今日かな

と、せめておとなび聞え給ふ。(二)沈の折敷四つして、御若菜、(三)樣ばかりまゐれり。御土器取り給ひて、

源　(四)小松原すゑのよはひにひかれてや野邊のわかなも年をつむべき

など聞えかはし給ひて、上達部あまた南の廂に著き給ふ。(五)式部卿宮は參りにくゝ思しけれど、御消息ありけるに、かく親しき御中らひにて、(六)心あるやうならむも便なくて、日たけてぞ渡り給へる。(七)大將のしたり顏にて、かゝる御中らひに、うけばりてものし給ふも、(八)げに心やましげなるわざなゝめれど、(九)御孫の君達は、何方につけても、おり立ちて雜役し給ふ。(一〇)籠物四十枝、折櫃物四十、(一一)中納言をはじめ奉りて、(一二)さるべき限とり續き給へり。御土器くだり、若菜の御羹まゐる。

(一)小松は玉鬘の子ども、岩根は源、いのるは繁榮を祈る也
(二)沈は沈香の木、四つは四十の賀に因む
(三)形式だけに
(四)生先遠き孫どもにあやかりて我も此先長生すべし
(五)紫の父、眞木柱の祖父
(六)意地惡く缺席する樣に思はれるのも嫌で
(七)髯黑
(八)式部卿宮の感じ
(九)式部卿宮の孫、髯黑の子
(一〇)籠詰の進物
(一一)夕霧
(一二)然るべき人々列をなして源の前に進獻する也

殊更にことゞしからぬ程なり。人々參りなどし給ひて、(一)御座に出で給ふとて、かんの君に御對面あり。(二)御心の中には、いにしへ思し出づる事ども樣々なりけむかし。(三)いと若く淸らにて、かく御賀などいふことは、(四)ひが數へにやと覺ゆるさまのなまめかしく、人の親げなくおはしますを、珍らしく年月へだてて見奉り給へば、(五)いと恥かしけれど、猶けざやかなる隔もなくて、御物語聞えかはし給ふ。(六)幼き君もいと美しくて物し給ふ。かんの君は、(七)打續きても御覽ぜられじと宣ひけるを、(八)大將の、かゝる序にだに御覽ぜさせむとて、二人同じやうに、振分髮の何心なき直衣姿どもにておはす。源「過ぐる齢も、みづからの心にはことに思ひも咎められず、たゞ昔ながらの若々しき有樣にて、(九)改むる方もなきを、かゝる(一〇)末々のもよほしになむ、なまはしたなきまで(一一)思ひ知らるゝ折も侍りける。(一二)中納言のいつしかと設けたゝなるを、疎々しく思ひ隔てて、まだ見せずかし。(一三)人より殊に數へとり給ひける、今日の子の日こそなほうれたけれ。しばしは老を忘れても侍るべき

(一)源が著席する前に
(二)源の
(三)源が
(四)四十杯とは勘定違かと思はれる容貌
(五)玉鬘が
(六)玉鬘の子ども
(七)引續き二人迄も生みたる子を御覽に入れたくなしと(恥かしければ也)
(八)鬚黒
(九)自分では一向氣にならず
(一〇)孫ども
(一一)自分の年寄りたる事が
(一二)夕霧が何時の間にか多く子を設けたれど、妙に氣を置いてまだ孫を我に見せてくれぬ
(一三)玉鬘が人に先だちて今日の賀をしてくれるにつけても、自分の老が思ひ知られて迷惑なり

さひ申し給ふ。

正月廿三日子の日なるに、左大將殿の北の方(一)、若菜(二)まゐり給ふ。かねて氣色も漏し給はで、いといたく忍びて思し設けたりければ、俄にて、え(三)諫め返し聞え給はず。忍びたれど、さばかりの御勢なれば、(四)渡り給ふ儀式など、いとひゞき殊なり。

南(五)の大殿の西の放出に(六)御座よそふ。屛風壁代(七)よりはじめ、新しく拂ひしつらはれたり。うるはしく(八)倚子などは建てず、御地敷(九)四十枚、御茵脇息など、すべてその御具ども、いと淸らにせさせ給へり。螺鈿の御厨子二具に、御衣箱四つすゑて、夏冬の御裝束、香壺、藥の箱、御硯、泔器(一〇)、かゝげ(一一)の箱などやうのもの、うちうち淸らを盡し給へり。御かざし(一二)の臺には、沈紫檀を作り、めづらしき(一三)あやめを盡し、同じき金をも、色づかひなしたる、心ばへあり今めかしく、かんの君(一四)、物のみやび深く、かどめき(一五)給へる人にて、目馴れぬ樣にしなし給へり。大方(一六)の事をば、

(一)玉鬘
(二)四十の賀の祝儀として源に贈る
(三)源が斷る譯にゆかず
(四)玉鬘の源を訪問する時の行裝
(五)六條院の
(六)源の
(七)白き引幕
(八)儀式ばりて
(九)緣附の筵、四十枚は源の年を表せる也
(一〇)髮洗の道具
(一一)髮揚の道具の箱
(一二)頭にかざすべき作り花
(一三)美しさを盡し
(一四)玉鬘
(一五)才覺ある女なれば
(一六)大體には事々しからぬ樣にして細かき處に念を入れたり

どちの心よりおこれる懸想にもあらず、せかるべき方なきものから、をこがまし
く思ひ結ぼほるゝさま、世の人に漏り聞えじ。(一)式部卿宮の大北の方(二)、常にうけは(三)
しげなる事どもを宣ひ出でつゝ、あぢきなき(四)大將の御事にてさへ、怪しく恨みそ
ねみ給ふなるを、かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひあはせ給はむなど、(六)お
いらかなる人の御心(五)といへど、いかでかはかばかりの隈はなからむ。今はさりと(七)
もとのみ、我身を思ひあがり、うらなくて過しける世の、人笑へならむ事を、下
には思ひつゞけ給へど、いとおいらかにのみもてなし給へり。
年もかへりぬ。朱雀院には、姫宮(八)、六條院にうつろひ給はむ御いそぎをし給ふ。
(九)聞え給ひつる人々いと口惜しく思し歎く。内裏にも御心ばへありて(一〇)聞え給ひける
程に、かゝる御定を聞し召して、思しとまりにけり。さるは、(一一)今年ぞ四十になり
給ひければ、御賀の事おほやけにも聞召し過さず。(一二)世の中のいとなみにて、かね
てより響くを、事の煩多く厳しきことは、昔より好み給はぬ御心にて、皆かへ(一三)

(一)止めだての仕様はないが、其に附いて自分がむしやくしやして居る樣な樣子は見せたくなし
(二)紫の繼母
(三)紫を詛ふ樣な事を言ひて
(四)髭黑に玉鬘を嫁したる事をさへ
(五)女三の事を聞いたら嘸それ見た事かと思ふならんなどと
(六)おとなしい紫でも
(七)大丈夫と安心して自分を買ひかぶりのんきに過し來りし今迄が
● 源氏の四十の賀、玉鬘祝の爲に源氏を訪ふ
(八)女三宮
(九)女三に懸想せし人々
(一〇)女三に氣がありて
(一一)源が
(一二)世間一統の騒にて
(一三)源が辭退したり

ぼして、心安からぬ御心ざまなれば、いかゞ思さむとおぼすに、いとつれなくて、紫「哀なる御讓にこそはあゝなれ。(一)こゝには、いかなる心置き奉るべきにか。め(二)ざましく、かくてはなど咎めらるまじくは、心安くても侍りなむを、(三)かの母女御の御方樣にても、疎からず思し數まへてむや」と、卑下し給ふを、源「餘りかう打解け給ふ御ゆるしも、如何なればと、うしろめたくこそあれ。誠は、(四)然だにおぼし許して、我も人も心得て、なだらかにもてなし過し給はば、いよ〳〵あはれになむ。(五)ひがごと聞えなどせむ人のこと聞き入れ給ふな。すべて世の人の口といふものなむ、誰が言ひ出づる事ともなく、おのづから(六)人の中らひなど、打ちほゝゆがみ、思はずなる事出で來るものなゝめるを、心ひとつに(七)靜めて、有樣に隨ふなむよき。(八)まだきに騷ぎて、あいなき物恨し給ふな」と、いとよく敎へ聞え給ふ。(九)心のうちにも、(一〇)かく空より出で來にたるやうなることにて、のがれ給ふかたなきを、にくげにも聞えなさじ、(一一)我が心に憚り給ひ、諫むることに隨ひ給ふべき、おのが

(一)私が氣を置くとはどの樣な事か
(二)無禮な奴と女三から咎められさへせねば
(三)女三の母女御も私を人がましく思召して親しくして下さるかしら
(四)其樣に寛大にして女三と其方と互によく呑込んで穩かに暮してくれたなら
(五)人がつまらぬ讒訴をしても其を信ずるな
(六)人の中などにつきて實情を曲げて噂をし不慮に不和を釀す事もあるものなれば
(七)篤と思案して實際の事情に隨ひて所置して行くがよし
(八)早まつた騷ぎをして
(九)紫の
(一〇)女三の事は降つて湧いた事の樣で源も辭退したくても出來ぬ事故、其を嫉む樣な素振は見せまじ
(一一)通常の戀ならば源も紫の思はくを憚り諫むれば從ひもすべけれど、是は其樣な相對づくの戀にはあらず

(一)朱雀
(二)我に賴まれし故
(三)斷り得ずして承知したるを
(四)女三を源の本妻にする抔と仰山に
(五)新に女を娶るなどいふ事は
(六)人を以ての朱雀からの申込に對しては
(七)木で鼻をくゝつた樣に斷ることも出來ず
(八)朱雀の御引越と同時に女三を引取る事になるべし
(九)其方が
(一〇)どの樣な事がありとも其方に對しては從來と少しも變る事はない筈故別に氣を置くな
(一一)女三には氣の毒
(一二)女三に對しても見つともなくない樣に待遇すべし
(一三)紫は源の一時の戯にする事をもけしからん事として嫉妬するが持前故、今の話を聞いて如何思ふならんと源が心配したるに平氣な顏で

ひつ。

又の日雪打降り、空の氣色も物哀に、過ぎにし方行く先の御物語聞えかはし給ふ。源(一)「院の賴もしげなくなり給ひにたる、御とぶらひに參りて、哀なる事どものありつるかな。女三の宮の御事を、いと捨て難げにおぼして、しかぐ\なむ(二)宣はせつけしかば、心苦しくて、(三)え聞え辭びずなりにしを、(四)事々しくぞ人は言ひなさむかし。今は(五)さやうのことも初々しく、すさまじく思ひなりにたれば、(六)人傳に氣色ばませ給ひしには、とかく遁れ聞えしを、對面のついでに、心深きさまなる事どもを宣ひつゞけしには、(七)えすく／＼しくもかへさひ申さでなむ。(八)深き御山住にうつろひ給はむ程にこそは、わたし奉らめ。(九)あぢきなくや思さるべき。(一〇)いみじき事ありとも、御ためある世に變ることは更にあるまじきを、心なおき給ひそよ。(一一)かの御爲こそ心苦しからめ。(一二)それもかたはならずもてなしてむ。誰も／＼のどかにて過し給はば」など聞え給ふ。(一三)はかなき御すさびごとをだに、目覺しきものにお

(一)風が重くなりて
(二)女三の身分の相談が定りたるを
九 源氏、女三宮の事を紫上に語る、紫上の覺悟
(三)女三を源へといふ評定を
(四)紫の心、其樣な事はあるまじ
(五)槿を源が熱心に懸想する樣なりしかど
(六)源に
(七)源の心、女三の一件を紫がどう思ふならん
(八)我が紫に對する情は
(九)女三を貰へば紫に對する愛は彌深くなるべし
(一〇)我が了簡を見定め得ぬ間は紫がどの位疑ふならん
(一一)源と紫と
(一二)暫時の間でも隔のあるのは氣がかりなれど

事どもあれど、うるさければ書かず。夜更けてかへり給ふ。祿どもつぎ〳〵に賜ふ。別當大納言も御送に參り給ふ。あるじの院は、今日の雪にいとゞ(一)御風くはゝりて、かき亂り惱ましくおぼさるれど、(二)この宮の御事聞え定めつるを、心安くおぼしけり。

六條院は、なま心苦しう、さま〴〵おぼし亂る。紫の上も、(三)かゝる御定など、かねてもほの聞き給ひけれど、(四)さしもあらじ、(五)前齋院をも懇に聞え給ふやうなりしかど、わざとも思し遂げずなりにしを、など思して、然る事やあるとも(六)問ひ聞え給はず、何心もなくておはするに、いとほしく、(七)この事をいかに思さむ。(八)我が心はつゆも變るまじく、(九)さる事あらむにつけては、なか〳〵いとゞ深さこそまさらめ、(一〇)見定め給はざらむ程、いかに思ひ疑ひ給はむなど、安からずおぼさる。今の年頃となりては、まして(一一)互にへだて聞え給ふことなく、あはれなる御中なれば、(一二)しばし心に隔て殘したることあらむもいぶせきを、その夜は打ち休みてあかし給

りて、さま〴〵に思ひ煩ひ侍る程に、病は重りゆく。又とりかへすべきにもあらぬ月日の過ぎ行けば、心あわたゞしくなむ。かたはらいたき譲なれど、(一)このいはけなき内親王ひとり、とりわきて育み思して、さるべきよすがをも、御心に思し定めて預け給へ、と聞えまほしきを、權中納言など(二)の一人ものしつる程に、進み寄るべくこそありけれ。太政大臣に先ぜられて(三)、ねたく覺え侍る」と聞え給ふ。

源「中納言の朝臣、(四)まめやかなる方は、いとよく仕う奉りぬべく侍るを、何事もまだ淺くて、(五)たどり少くこそ侍らめ。かたじけなくとも、(六)深き心にて後見聞えさせ侍らむに、おはします御かげに變りては思されじを、たゞ行く先短くて、仕う奉りさす事や侍らむと、疑はしき方のみなむ、心苦しく侍るべき」と、うけひき申し給ひつ。夜に入りぬれば、主人の院方も、客人の上達部達も、皆御前にて御饗應の事、精進物にて、(七)うるはしからずなまめかしくせさせ給へり。院の御前に、(八)淺香の懸盤(九)に御鉢など、昔に變りて參るを、人々涙おしのごひ給ふ。哀なるすぢの

(一)頑是のない女三を其方に引取りて
(二)聟をも其方の分別で定めてくれよと言ひたいのであるが
(三)夕霧の獨身時代に此方から申込むべきであつた
(四)律義な方は隨分あてにもなれど
(五)思慮足らざるべし
(六)私がよく注意して御世話申上げたらば女三も貴方と敢て變つた樣にも思はれまじ
(七)儀式ばらず
(八)沈香の木の若きもの
(九)出家なれば食事に鉢を用ふる也

（一）朱雀の仰せ置かるゝ事ならば
（二）東宮が
（三）女三の將來を
（四）東宮即位の後は
（五）一女子たる女三の爲にどれ程際立ちて好意を表する譯にもゆかぬ
（六）常然世話せねばならぬ樣な緣を結び即ち夫婦となり
（七）捨置かれず世話する者のあるのが安心
（八）御逝去後まで女三の事が心殘りがする樣ならば
（九）夫
（一〇）父帝の在位中でさへ内親王を嫁せしむるには隨分人選に骨が折れた例が多し

のまうけの君と、天の下のたのみ所に仰ぎ聞えさするを、まして（一）この御事と聞え置かせ給はむことは、一事として疎に輕め（二）申し給ふべきには侍らねば、更に行く（三）先の事思し惱むべきにも侍らねど、げに事限あれば、おほやけとなり給ひ、（四）世の政御心にかなふべしとは言ひながら、女の（五）御爲に、何ばかりのけざやかなる御心よせあるべきにも侍らざりけり。すべて女の御爲には、さまぐ〵誠の御後見とすべきものは、猶（六）さるべき筋に契をかはし、えさらぬ（七）ことにはぐくみ聞ゆる御まもりめ侍るなむ、後安かるべきことに侍るを、なほしひて（八）後の世の御疑殘るべくば、よろしきに思し選びて、忍びて然るべき（九）御あづかりを定め置かせ給ふべきになむ侍る」など、奏し給ふ。朱雀「さやうに思ひ寄る事侍れど、それも難きことになむありける。古の例を聞き侍るにも、世（一〇）をたもつ盛の御子にだに、人を選びて、さるさまのことをし給へる類多かりけり。ましてかく、今はと此世を離るゝ際にて、事々しく思ふべきにもあらねど、又しか捨つる中にも、捨てがたき事あ

(一)死期を
(二)油斷して出家遁世の志の一端をも遂げずに死にては殘念なりと思ひ立ちて實行せり
(三)佛勤に身を委ねたき志も
(四)山に籠る迄はなくとも此處に居附の儘にて出家して閑散になりて念佛でも申さんと思ふ
(五)只出家の志を遂げん爲に生き留り居るとは知つて居ながら、今迄佛勤もせぬ怠をでも取返したく思へば心安からず
(六)別に賴みおく引受人なき女三をば
(七)女三の事を言ひ出したくはありながら露骨には言ひ出し得ぬ
(八)源が
(九)源の心にも女三をゆかしく思はぬにも非ざれば
(一〇)皇女の御身は

物心細く思さるゝに、え心強からず、打ちしほたれ給ひつゝ、いにしへ今の御物語、いと弱げに聞えさせ給ひて、朱雀「(一)今日か明日かと覺え侍りつゝ、さすがに程經ぬるを、(二)打ちたゆみて深き本意のはしにても遂げずなりなむ事、と思ひおこしてなむ。かくても殘りの齡なくば、(三)おこなひの志も叶ふまじけれど、(四)まづ假にてものどめおきて、念佛をだにと思ひ侍る。はかぐ\しからぬ身にても、世にながらふる事、(五)唯この志にひきとゞめられたると、思ひ給へ知られぬにしもあらぬを、今までつとめなき怠をだに、安からずなむ」とて思しおきてたる樣など、委しく宣はする序に、朱雀「女御子たちを數多うち捨て侍るなむ心苦しき。中にも、又思ひ讓る人なきをば、取りわきて後めたく見煩ひ侍る」とて、(七)まほにはあらぬ御(六)氣色を、(八)心苦しく見奉り給ふ。(九)御心のうちにも、さすがにゆかしき御有樣なれば、思し過しがたくて、源「げにたゞ人よりも、(一〇)かゝる筋は、私樣の御後見なきは、口惜しげなるわざになむ侍りける。東宮かくておはしませば、いとかしこき末の世

(一)世間の源に對する尊敬は非常なれど
(二)わざと儀式を畧して
(三)氣を張つて
(四)儀式ばらず
(五)朱雀の御居間に源の席を設けて
(六)朱雀の僧形を源が
(七)涙とゞめ難く
(八)直に言ひ出し得ず
(九)出家の志深かりしに
(一〇)御出家の御姿を見るまで
(一一)私如き數ならぬ身では出家は何でもない事と思ひて決行せんかと思ひ立つ折もあれど

どこそ、皆同じごとおりゐの帝とひとしく定り給へれど、誠の太上天皇の儀式には、うけばり給はず。(一)世のもてなし思ひ聞えたる樣などは心ことなれど、(二)殊更にそぎたまひて、例のこと〴〵しからぬ御車に奉りて、上達部など、さるべき限、車にてぞ仕う奉り給へる。院にはいみじく待ち悅び聞えさせ給ひて、苦しき御心地を(三)おぼし强りて、御對面あり。(四)うるはしき樣ならず、唯(五)おはします方に、御座よそひくはへて入れ奉り給ふ。(六)かはり給へる御有樣見奉り給ふに、來し方行くさきかきくれて、悲しくとゞめがたく思さるれば、(八)とみにもえためらひ給はず。源「故院におくれ奉りし(七)頃ほひより、世の常なく思ひ給へられしかば、この(九)方の本意深く進み侍りにしを、心弱く思う給へたゆたふ事のみ侍りつゝ、つひにかく(一〇)見奉りなし侍るまで、おくれ奉りぬる心のぬるさは、恥かしく思う給へらるゝかな。身に(一一)とりては、事にもあるまじく思う給へたち侍るをり〳〵あるを、更にいと忍びがたき事多かりぬべきわざにこそ侍りけれ」と、慰めがたく思したり。院も

ぐして、遂に御髪おろし給ふ。(一)(二)よろしき程の人の上にてだに、今はとて樣かはるは悲しげなるわざなれば、ましていと哀げに御方々(三)もおぼし惑ふ。(四)内侍のかんの君は、つと侍ひ給ひて、いみじく思し入りたるを、(五)こしらへかね給ひて、朱雀「(六)子を思ふ道は限ありけり。かく思ひしみ給へる別の堪へ難くもあるかな」とて、御心亂れぬべけれど、あながちに御脇息にかゝり給ひて、(七)山の座主より初めて、御いむ(八)ことの阿闍梨三人さぶらひて、法服など奉る程、この世を別れ給ふ御作法、いみじく悲し。今日は、世を思ひすましたる僧達などだに、涙もえとゞめねば、まして女宮達、女御、更衣、こゝらの男女、上下ゆすり滿ちて泣きどよむに、いと心あわたゞしう、(九)斯からで靜やかなる所に、やがて籠るべく思しまうけける本意たがひて思召さるゝも、たゞこの幼き宮にひかされて、とおぼし宣はす。内裏より初め奉りて、御とぶらひの繁さいと更なり。

六條院も、(一〇)少し御心地よろしくと聞き奉らせ給ひて、參り給ふ。(一一)御賜りの御封な

(一)朱雀が
(二)一通りの身分のものでも
(三)朱雀の女御更衣等
(四)朧月夜は朱雀に附ききりで
(五)朱雀がもて餘して
(六)子に別れる方は思ひ切りよいが
(七)比叡山
(八)御受戒の事を奉仕する僧
(九)朱雀が斯く賑はしからぬ處に閑籠る積なりし趣意がとほらぬ心持するも、畢竟女三宮にひかされての事と
(一〇)御出家の後朱雀の病氣やゝ輕快の由を聞きて
(一一)源の受くる封祿は即位ありし太上皇と同樣なれど



いとこちたし。贈物ども、人々の祿、尊者(一)の大臣の御引出物など、かの院よりぞ(二)奉らせ給ひける。中宮(三)よりも、御裝束、櫛の箱、心ことに調ぜさせ給ひて、かの昔(四)の御髮上の具、故あるさまに改めくはへて、流石(五)にもとの心ばへも失はず、それと見せて、その日の夕つ方奉らせ給ふ。宮の權亮(六)、院の殿上にも侍ふを御使にて、姫宮の御方に參らすべく宣はせつれど、かゝる言ぞ中にありける。

秋好 さしながらむかしを今につたふれば玉のをぐしぞ神さびにける

院御覽じつけて(七)、哀におぼし出でらるゝ事どもありけり。あえもの(八)怪しうはあらじと、讓り聞え給へる程、げにおもだたしきかんざしなれば、御返も、昔のあはれをばさし措きて、

朱雀 さしつぎに見るものにもが萬世をつげのをぐしの神さぶるまで

とぞ喜び(九)聞え給へる。

(一〇)御心地いと苦しきを念じつゝ、おぼし起して、この御いそぎ果てぬれば、三日す

(一)正客
(二)源氏より
(三)秋好
(四)秋好入内の時朱雀より贈られし髮上の道具を趣味ある樣に直し又は附け加へて
(五)先の俤をも殘して其の舊物たる事を示し
(六)中宮權亮にて朱雀院へも常に出仕する人を使として
(七)昔頂戴したるを其儘取置きたるもの故此通り古くなり居れり
(八)秋好は運よくて中宮にもなりたる人故、あやかりても宜しからんとて此髮上の道具をも贈られし處は
(九)此櫛の古くなるまでに女三が繁昌して君の如く運よくありたし
❻ 朱雀院出家、源氏の訪問、源氏女三宮を娶らん事を約す
(一〇)朱雀が

㊆ 女三宮裳著の祝

べし。

年も暮れぬ。朱雀院には、御心地なほおこたる様にもおはしまさねば、萬あわただしくおぼし立ちて、(一)御裳著の事おぼし急ぐさま、來し方行くさき有り難げなるまで、いつくしくのゝしる。御しつらひは、柏殿(二)の西面に、御帳御几帳よりはじめて、(三)こゝの綾錦は交ぜさせ給はず、唐土の后の飾を思しやりて、麗しくことごとしく、輝くばかり調へさせ給へり。御腰結には、(四)太政大臣を、かねてより聞えさせ給へりければ、事々しくおはする人にて、參りにくゝ思しけれど、院の御言を、昔より背き申し給はねば、參り給ふ。今二所(五)の大臣達、その殘の上達部などは、わりなき障あるも、あながちに(六)ためらひ助けつゝ參り給ふ。親王達八人、殿上人はた更にもいはず、内裏東宮の殘らず參り集ひて、いかめしき御いそぎの響なり。(七)院の御事この度こそとぢめなれと、帝東宮を初め奉りて、心苦しく聞召しつゝ、藏人所、納殿の(八)唐物ども、多く奉らせ給へり。六條院よりも、御とぶらひ

(一)女三の
(二)朱雀院中の御殿、かやにて造れる殿なりといふ
(三)和製の
(四)頭中を頼み置きたれば
(五)左右大臣
(六)用事をのばして
(七)朱雀院の催しは此度限なるべしと
(八)舶來品

も思し寄らむに、などかこよなからむ。されど、(一)いと痛くまめだちて、思ふ人定りにてぞあらめれば、それに憚らせ給ふにやあらむ」など宣ひて、(二)自らは思し離れたる樣なるを、辨は、(三)おぼろけの御定にもあらぬを、かく宣へば、いとほしくも口惜しくも思ひて、(四)內々おぼし立ちにたる樣など、委しく聞ゆれば、さすがに打笑みつゝ、源「(五)いとかなしくし奉り給ふ御子なゝめれば、あながちに斯く、(六)來し方行く先のたどりも深きなゝめりかしな。たゞ內裏にこそ奉り給はめ。(七)やむごとなき先の人々おはすといふ事は、由なきことなり。それに障るべきことにもあらず。必ず、(八)さりとて、末の人疎なるやうもなし。(九)故院の御時に、(一〇)大后の、坊の始の女御にて、いきまき給ひしかど、むげの末に參り給へりし、(一一)入道宮に、しばしは壓され給ひにきかし。(一二)この御子の御母女御こそは、(一三)かの宮の御姉妹にものし給ひけめ。容貌も、(一四)さしつぎには、いとよしと言はれ給ひし人なりしかば、何方につけても、この姬宮(一五)おしなべての際には、よもおはせじを」など、(一六)いぶかしくは思ひ聞え給ふ

(一)夕霧は馬鹿堅くて
(二)自分が妻に娶る事は
(三)朱雀の申込は一通りの相談位では無いに
(四)朱雀の
(五)女三は御秘藏子故
(六)遠き將來までの御心配も
(七)立派な古參の女御達があるとて其に憚るはつまらぬ事
(八)古參の人が居たとて必ず新參が疎末にせられる譯もなし
(九)桐壺帝
(一〇)弘徽殿大后が桐壺東宮に立たれし頃第一に入内せし女御にて威張りたりしかど
(一一)藤壺
(一二)女三の母の源氏宮
(一三)藤壺の
(一四)藤壺に次ぎては
(一五)女三は普通の器量ではないに相違なし
(一六)氣にはかゝる

(一)朱雀が氣乘りがして
(二)左中辨を以て不取敢源へ申込あり
(三)女三
(四)朱雀が生先がなしとて我も何程長く生き殘るべき身でもなきに、女三を引受くるでもあるまじ
(五)物が順よく行つて暫時自分が朱雀の跡に殘る事もあらば
(六)一通の關係ではどの宮をも構はぬといふ譯はないが
(七)特別に世話したしと
(八)妻として引受ける事は、朱雀に續きて我が死ぬ時に女三の爲にも氣の毒なり自分にも羈絆なるべし
(九)夕霧
(一〇)女三の聟とせられても不都合なし

るを、待ち聞かせ給ひても、朱雀「げに然ることなり。いとよく思し宣はせたり」と、いよ〳〵御心だたせ(一)給ひて、まづかの辨(二)してぞ、かつ〳〵案内傳へ聞えさせ給ひける。この宮(三)の御事、かく思し煩ふ樣は、さき〴〵も皆聞き置き給へれば、源「心苦しき御事にもあゝなるかな。然はありとも、院の(四)御世の殘り少しとて、こゝにも又いくばく立ち後れ奉るべしとてか、その御後見の事をば受けとり聞えむ。げに次第(五)をあやまたぬにて、今しばしの程も殘りとまる限あらば、大方につけては(六)、いづれの御子達をも、餘所に聞き放ち奉るべきにもあらねど、又かく取分きて聞きおき奉りてむをば、殊に(七)こそ後見聞えめと思ふを、それだにいと不定なる世の定なさなりや」と宣ひて、源「まして、ひとへに(八)賴まれ奉るべき筋に、睦び馴れ聞えむことは、いとなか〳〵に、打ち續き世を去らむきざみ心苦しく、自らのためにも、淺からぬ覊絆になむあるべき。中納言(九)などは、年若く輕々しきやうなれど、行く先遠くて、人柄も、遂におほやけの御後見ともなりぬべき生先なゝめれば、さ(一〇)

に、人(一)づてにもあらず、然ばかりおもむけさせ給へりし御氣色を見奉りてしかば、おのづから便につけて、漏(二)し聞し召さする事もあらば、よもて離れてはあらじかしと、心ときめきもしつべけれど、女君(三)の今はと打解けて賴み給へるを、年頃つらきにもことつけつべかりし程だに、外樣の心もなくて過してしを、あやにく(四)に、今(五)更に立ちかへり、俄にものをや思はせ聞えむ、斜(六)ならず、やむごとなき方にかゝづらひなば、何事も思ふまゝならで、左右に安からずば、我が身も苦しくこそはあらめなど、もとよりすき〴〵しからぬ心なれば、思ひしづめつゝ打出でねど、流石に外(七)樣に定りはて給はむも、いかにぞや覺えて、耳は留りけり。

東宮にも、かゝる事ども聞し召して、東宮「さ(八)しあたりたる只今のことよりも、後の世の例ともなるべき事なるを、よく思しめし廻らすべきことなり。人柄よろしとても、たゞ人は限あるを、なほ然(九)おぼし立つことならば、かの六條院にこそ、親ざまに讓り聞えさせ給はめ」となむ、わざとの御消息にはあらねど、御氣色ありけ

(一)朱雀が直接にあれ程水をむけられたるを知り居る故
(二)夕霧から希望の旨を上奏したらば成らぬとは仰せられまいと思へば、胸の躍る心持もすべけれど
(三)雲井雁が我を力にして居るのに、以下夕霧の心
(四)雲井雁との調和のならざりし時分は雲井が肯かぬを口實に外の女に乘替へるも自由なりしに、其時さへ浮氣はせざりしに
(五)今になりて雲井に心配させるでもない
(六)女三如き高貴の女を妻にしては
(七)女三が人の物ときまつて仕舞ふも不滿足にて
㊅東宮、女三を源氏に嫁せしめん事を勸む、朱雀の安心、申込、源氏の不承諾
(八)目前の罪の善惡はとにかく、皇女を平人に嫁するは例にもなる事なれば
(九)女三を縁附ける決心ならば

(一)朱雀の内々の相談が世間に聞えて
㊄候補者の樣々
(二)頭中
(三)皇女でなくては妻にはせぬと
(四)女三の聟撰びの話がはじまりたる時に
(五)柏木に下されたしと願ひて許されたらば
(六)尚侍の姉なる頭中の北方を以て
(七)尚侍が柏木の爲に
(八)螢
(九)玉鬘を手に入れそこなひたれば、なまじなる女を娶りては玉鬘に聞かれて恥かしと思ふ處もあり、つまらぬ女は嫌なりとえり嫌ひし來りたる事故、女三に對して心の動くは當然にて
(一〇)朱雀院の
(一一)女三を傾るを緣にして今後も御愛顧を願ひたしと
(一二)夕霧

も聞えなやまし給ふ人もなし。怪しく、内々に宣はする御さゝめき言どもの、自ら事ひろごりて、心を盡す人々多かりけり。(一)

太政大臣も、(二)思へるを、頭中「この衞門督の、今まで一人のみありて、(三)御子達ならずは得じと思へるを、(四)かゝる御定ども出で來たゝなる折に、(五)さやうにもおもむけ奉りて、召し寄せられたらむ時、いかばかり、我がためにも面目ありて嬉しからむ」と思し宣ひて、内侍のかんの君には、(六)かの姉の北の方して、傳へ申し給ふなりけり。(七)よろづ限なき言の葉を盡して奏せさせ給ひ、御氣色たまはらせ給ふ。(八)兵部卿宮は、(九)左大將の北の方を聞えはづし給ひて、聞き給はむ所もあり、かたほならむことはと、えり過し給ふに、いかゞは御心の動かざらむ、限なくおぼし入られたり。藤大納言は、年頃(一〇)院の別當にて、親しく仕う奉りて侍ひなれにたるを、御山籠し給ひなむ後、より所なく心細かるべきを、(一一)此宮の御後見にことよせて、かへりみさせ給ふべく、御氣色切に賜はり給ふなるべし。(一二)權中納言も、かゝる事どもを聞き給ふ

(一)螢の如き人物は
(二)藤大納言が女三をほしがる、「家司望む」とは聟になりたがるを大納言の身分やゝ低き故に謙遜していふ也
(三)藤大納言は
(四)並々の身分の男を聟にするは
(五)聟を撰ぶには萬事人に勝れたりと思はれる者を取るに定つて居る
(六)此上なく大事にする男を上しとして其に極めるのは
(七)柏木が内々女三に心ある由
(八)柏木の母の妹
(九)多くの候補者の中で柏木丈は今少し官位昇進せば遣りてもよしと思はるゝが
(一〇)高き身分の女を妻にせんとする心深く
(一一)女三の聟と定めるには限ありて矢張不足也

いたくなよび由めく程に、重き方おくれて、少し輕びたる覺や進みにたらむ。なほさる(一)人はいと頼もしげなくなむある。又大納言の(二)朝臣の、家司望むなる、さる(三)かたに、物まめやかなるべき事にはあゝなれど、流石にいかにぞや、さやうに(四)おしなべたる際は、猶目醒しくなむあるべき。昔も、(五)かやうなる選には、何事も人にことなる覺あるに、事よりてこそありけれ。たゞひとへに(六)またなく用ゐむ方ばかりを、賢きことに思ひ定めむは、いと飽かず口惜しかるべきわざになむ。右衛門(七)督の下に侘ぶなるよし、(八)倘侍のものせられし、(九)その人ばかりなむ、位など今少しものめかしき程になりなば、などかはとも思ひよりぬべきを、まだ年いと若くて、むげに輕びたる程なり、高き(一〇)志深くて、やもめにて過しつゝ、いたく靜まり思ひあがれる氣色、人には拔けて、才などもこともなく、遂には世のかためとなるべき人なれば、行末も頼もしけれど、なほ又(一一)このためにと思ひはてむには、限ぞあるや」と、よろづに思し煩ひたり。かやうにも思し寄らぬ姉宮達をば、かけて

より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心より外に人にも見え、宿世の程定められむなむ、いと輕々しく、身のもてなし有樣推量らるゝことなるを、(一)怪しく物はかなき心ざまにやと、見ゆめる御樣なるを、これかれの心にまかせて、もてなし聞ゆる、さやうなる事の世に漏り出でむ、いと憂き事なり」など、見捨て奉り給はむ後の世を、うしろめたげに思ひ聞えさせ給へれば、いよ〳〵煩はしく思ひあへ(二)り。朱雀「(三)今少しものをも思ひ知り給ふ程まで、見過ぐさむとこそは、年頃念じつるを、深き本意も遂げずなりぬべき心地のするに、思ひ催されてなむ。かの六條の大臣は、げに、さりとも(四)物の心えて、後安き方はこよ無かりなむを、(五)かた〴〵に數多ものせらるべき人々を、知るべきにもあらずかし。(六)とてもかくても人の心からなり。のどかにおち居て、大かたの世のためしとも、後安き方は並びなくものせらるゝ人なり。(七)さらではよろしかるべき人、誰ばかりかはあらむ。(八)兵部卿宮、人柄は目やすしかし。(九)同じ筋にて、こと人と辨へ貶しむべきにはあらねど、餘り

(一)女三は勝れて分別のなき女の樣に見ゆれば、側の人々の意見次第にて緣など定めたらば、前に言ふ如き失態を生ずる事もあるべし、其が心配ぢや

(二)侍女乳母等が

(三)女三がも少し分別の出る迄此儘側に置く積なりしに、其では出家の望が遂げられそうもなき故女三の身の振方をつけんと思ひ立ちし也

(四)物が分って

(五)外に多くの婦人達が居るとて其に構ふべきでは無し

(六)つまりは當人の心次第なり

(七)源を除きては適當の人はなし

(八)螢

(九)螢も源と同じ皇子にて、源に比して差別を立つべきにはあらねども

(一)世間で許さぬ事は出來ぬものと極めて居たらうが

(二)心配さはどちらにしても同じ事也

(三)親兄弟などの仕向通りにして居れば、運惡く落ぶれても自分の咎にはならず

(四)親兄弟に許されぬ野合の夫を持ちたるは末になりて仕合よくなれば是でもよかつたと思はるれど、一寸聞いては女として此上なき疵と思はる

(五)卑しき平人の間にても左樣の振舞は嫌ふべき事也

(六)どちらにしても當人次第の事なるを、樣々ながら夫を持たせられ緣を定められる杯は其女の身の持樣の輕々しさが思ひ遣らるゝ譯なるに

てて世の中に過さむことも、昔は人の心平かにて、世に許さるまじき程のことをば、思ひ及ばぬものと習ひたりけむ、今の世には、(一)好き〴〵しく亂りがはしき事も、類に觸れて聞ゆめりかし。昨日まで高き親の家に崇められ傅かれし人の女の、今日はなほ〳〵しく下れる際のすきものどもに名を立ち欺かれて、なき親の面をふせ、影を恥かしむる類多く聞ゆる、言ひもて行けば皆同じことなり。程々につけて、宿世などいふなることは、知り難きわざなれば、萬に(二)うしろめたくなむ。總て惡しくも善くも、さるべき人の心に許し置きたるまゝにて世の中を過すは、宿世にて、後の世に衰(三)あるときも、自らの過にはならず。ありへてこよなき幸あり、めやすき事になる折は、かくてしも惡しからざりけりと(四)見ゆれど、なほ忽にふと打聞きつけたるほどは、親に知られず、さるべき人も許さぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはます事なき疵と覺ゆるわざなる。(五)なほ〳〵しきたゞ人の中らひにてだに、あはつけく心づきなき事なり。(六)自らの心

つ、ありがたき御心樣にものし給ふなれど、(一)たゞ人だに、又かゝづらひ思ふ人立竝びたる事は、人の飽かぬことにし侍るめるを、めざましきこともや侍らむ。(二)御後見望み給ふ人々は、數多ものし給ふめり。よく思召し定めてこそよく侍らめ。(三)限なき人と聞ゆれど、今の世のやうとては、皆朗らかにあるべかしくて、世の中を御心と過し給ひつべきも、おはしますべかめるを、(四)姫宮はあさましく覺束なく、心もとなくのみ見えさせ給ふに、さぶらふ人々は、(五)仕う奉る限こそ侍らめ。(六)大方の御心おきてにしたがひ聞えて、さかしき下人も靡き侍ふこそ、便あることには侍らめ。(七)取り立てたる御後見ものし給はざらむは、なほ心細きわざになむ侍るべき」と聞ゆ。朱雀「(八)然思ひたどるによりなむ、(九)御子達の世づきたる有樣は、うたてあは〱しき樣にもあり、(一〇)又高き際といへども、女は男に見ゆるにつれてこそ、悔しげなる事も、めざましき思も、自から打交るものなゝめれと、且は心苦しく思ひ亂るゝを、(一一)又然るべき人に立ちおくれて、賴む陰どもに別れぬる後、(一二)心を立

(一)平人でも本妻の外多くの妻などあるは嫌がる譯なれば、女三が源へ行かれては隨分癪に觸ることもあるべし
(二)女三をほしがる人は
(三)貴人と雖も當世は皆世事に通じて我心から分別して世を渡る人もあるに
(四)女三は何事にも非常に大樣にて
(五)いくら御世話をやいても限がありて
(六)心利きたる下人も大體の主人の差圖に隨ひてこそ仕へよき事なり
(七)女三にしつかりした後見のなきは
(八)其樣思へばこそ、此句「心苦しく思ひ亂るゝ」をにかゝる
(九)皇女の夫を持つは氣にくはず、重味のない樣にもあり
(一〇)身分高き人も
(一一)父母などに死なれて
(一二)自分の思ひ通りにして獨身で通す事も

し(一)さやうにおはします樣もあらば、(二)いみじき人と聞ゆとも、立ち竝びておしたち給ふことはえあらじ、とこそは推量らるれど、なほ如何と(三)憚らるゝ事ありてなむ覺ゆる。さるは、(四)この世の榮末の世に過ぎて、身に心もとなきことはなきを、女のすぢにてなむ、(五)人のもどきをも負ひ、我が心にも飽かぬ事もある、となむ常に内々の(六)すさびごとにも思し宣はすなるに、げに己等が見奉るにも、然なむおはします。(七)方々につけて御陰に隱し給へる人、(八)皆その人ならず立ち下れるきはにには物し給はねど、限あるたゞ人どもにて、院の御有樣に竝ぶべきおぼえ具したるやはおはすめる。それに、同じくば、(九)げに然もおはしまさば、いかにたぐひたる御間ならむ」と語らふを、乳母又ことの次に、乳母「(一〇)云々なむ某の朝臣にほのめかし侍りしかば、(一一)かの院には必ずうけひき申させ給ひてむ、(一二)年頃の御本意かなひておぼしぬべき事なるを、此方の御ゆるし誠にありぬべくば傳へ聞えむ、となむ申し侍りし。いかなるべき事にか侍らむ。(一三)程々につけて、人のきは〴〵思しわきまへつ

(一)女三が源に預けられたらば
(二)いくら緊でも競爭して女三を壓倒する樣な事はあるまじと
(三)自分の榮華が身に餘りて心配な點がある
(四)以下「飽かぬ事もある」迄源の詞を辨が眞似る也
(五)非難を受け
(六)冗談
(七)色々の縁で御保護を加へらるゝ婦人達
(八)不相應と思はるゝ程下等な人々ではなけれど何れも平人で源と立竝ぶ程の身分の人はなし
(九)女三が源に嫁せられたらば如何ばかり似合はしからん
(一〇)斯樣々々と左中辨に話したるに、朱雀に申上ぐる也
(一一)六條院、以下左中辨の詞を乳母が眞似る也
(一二)源のかねての望を滿足せらるべき筋なれば眞に其御積ならば橋わたしを仕らんと
(一三)源は人に應じて其身分々々を考へ相當に待遇せられて

につけて心よせ奉り、何事につけても御後見し給ふ人あるは頼もしげなり。(一)上を措き奉りて、また眞心に思ひ聞え給ふべき人もなければ、(二)おのれは仕うまつるとても、何ばかりの宮仕にかあらむ。(三)我心ひとつにしもあらで、自から思の外の事もおはしまし、輕々しき聞もあらむときには、如何樣にかは煩しからむ。(四)御覽ずる世に、ともかくもこの御事定りたらば、仕う奉りよくなむあるべき。(五)かしこきすぢと聞ゆれど、女はいと宿世定めがたくおはしますものなれば、萬に歎かしく、かく數多(六)の御中に、取りわききこえさせ給ふにつけても、人の嫉あゝべかめるを、(七)いかで塵もすゑ奉らじ」と語らふに、辨、左中辨(八)「いかなるべき御事にかあらむ、院は、怪しきまで御心ながく、假にても見そめ給へる人は、御心とゞめたるをも、又さしも深からざりけるをも、方々につけて尋ね取り給ひつゝ、數多つどへ聞え給へれど、(九)やむごとなく思したるは、限ありて、一方なゝめれば、それ(一〇)に事よりて、かひなげなる住居し給ふ方々こそは多かめるを、御宿世ありて、若

(一)女三は朱雀の外には眞底から思つてくれる人もなき故
(二)自分位が附添ひ居ても何の役にも立たぬ
(三)外にも侍女等もある事故其等の手から若し間違でも出來て浮名を流す樣の事ありては
(四)朱雀の御存生中に女三の御身分が極りたらば
(五)貴い身分の人でも
(六)多くの皇女の中特に女三を朱雀が愛せらるゝにつけても
(七)どうかして少しの疵も附けたくない
(八)どういふ譯か知らぬが一體源は
(九)源の特に寵愛あるは何というても只紫一人らしければ
(一〇)榮華は紫の方にのみ集りて他の婦人達は有りがひもなきが多きに

給ふなれ」と申す。朱雀「いで、その（一）古りせぬあだけこそは、いと後めたけれ」とは宣はすれど、げに（二）数多のなかにかゝづらひて、めざましかるべき思はありとも、なほやがて親ざま（三）に定めたるにて、さもや讓り置き聞えましなども思し召すべし。朱雀「まことに、少（四）しも世づきてあらせむと思はむ女子持たらば、同じくばかの人のあたりにこそは、觸ればはせまほしけれ。幾許ならぬこの世の間は、さばかり（五）心ゆく有樣にてこそ、過さまほしけれ。われ女ならば、同じ兄弟なりとも、必ず睦（六）び寄りなまし。若かりし時など、然なむ覺えし。まして女の（七）あざむかれむは、いと理ぞや」と宣はせて、御心の中に、（八）かんの君の御事も思し出でらるべし。

この御後見（九）どもの中に、重々しき御乳母の兄、左中辨なる、（一〇）かの院の親しき人にて、年頃仕う奉るありけり。（一一）この宮にも心よせ特にて侍へば、參（一二）りたるにあひて、物語するついでに、乳母（一三）「上なむしかじか御氣色ありて聞え給ひしを、（一四）かの院に、折あらば漏し聞えさせ給へ。（一五）御子達は獨おはしますこそは例のことなれど、樣々

（一）源の相變らずなる女好きこそは
（二）朱雀の心、源の多くの妻妾達の中に交りて
（三）源を女三の親分にして引取りて貰はうかしらとも
（四）聊なりとも榮ある生活をさせたしと思ふ娘を持った者は、同じ物なら娘を源にあづけたきものなり
（五）源の樣に愉快に暮したいものぢや
（六）源に
（七）源に
（八）朧月夜
（九）女三宮の附人
（一〇）源に親しき人にて
（一一）左中辨は女三にも特別に昵近にて
（一二）左中辨が來たるに妹の乳母が逢ひて
（一三）朱雀が女三を源に預けんかと仰せられし故
（一四）源に
（一五）内親王は獨身があたり前なれど

(一)源が紫を育てた樣に
(二)秋好
(三)宮中の宮仕をさせるは却てよろしかるまじ
(四)夕霧の獨身で居た中に遠廻しに話して見るのであつた
(五)夕霧は
(六)人にすぐれて
(七)堅い人で
(八)雲井雁を思ひ込みて外の女に見かへる氣もなかりしに
(九)源こそ却て
(一〇)どの樣な女でも手を出したがる御心がやまぬ
(一一)槿

奉り、かつは又片生ならむことをば、見隱し敎へ聞えつべからむ人の、後やすからむにあづけ聞えばや」など聞え給ふ。大人しき御乳母ども召し出でて、御裳著の程の事など宣はする序に、朱雀「六條の大臣の、(一)式部卿親王の女おほし立てけむ樣に、この宮を預りてはぐくまむ人もがな。たゞ人の中にはありがたし。內裏には(二)中宮さぶらひ給ふ。次々の女御達とても、いとやむごとなき限ものせらるゝに、はかぐ\しき後見なくて、(三)さ樣の交際いとなかく\ならむ。(四)この權中納言の朝臣の一人ありつる程に、打ちかすめてこそ試みるべかりけれ。(五)若けれどいと警策(六)に、生先たのもしげなる人にぞあゝめるを」と宣はす。女房「中納言は、もとよりいとまめ人にて、(七)年頃も(八)かのわたりに心をかけて、外樣に思ひうつろふべくも侍らざりけるに、その思叶ひては、いとゞ動く方侍らじ。(九)かの院こそ、なかく\なほ、(一〇)如何なるにつけても、人をゆかしく思したる心は、絶えずものせさせ給ふなれ。その中にも、やむごとなき御願深くて、(一一)前齋院などをも、今に忘れがたくこそ聞え

ふべきにやと見ゆる匂なむ、いとゞ加はりにたる。うるはしだちて、はか〴〵しき方に見れば、嚴しくあざやかに、目も及ばぬ心地するを、(一)また打ち解けて、戯言をも言ひ亂れ遊べば、その方につけては、似るものなく愛敬づき、なつかしく美しきことのならひ無きこそ、世にありがたけれ。何事にも(二)前の世推し量られて、珍らかなる人(三)の有樣なり。宮の内におひ出でて、帝王(四)の限なくかなしき者にし給ひ、さばかり撫でかしづき、身にかへて思したりしかど、心のまゝにも驕らず卑下して、二十がうちには、納言にもならずなりにきかし。(五)一つあまりてや、宰相にて大將かけ給へりけむ。それにこれは、(六)いとこよなく進みにたゝめるは、(七)次々の子の覺のまさるなゝめりかし。まことに賢しきかたの才心もちゐなどは、(八)これもをさをさ劣るまじく、あやまりてもおよずけ勝りたるおぼえ、いと異なゝめり」などめでさせ給ふ。

(九)姫宮のいと美しげにて、若く何心なき御有樣なるを見奉り給ふにも、朱雀「(一〇)見はやし

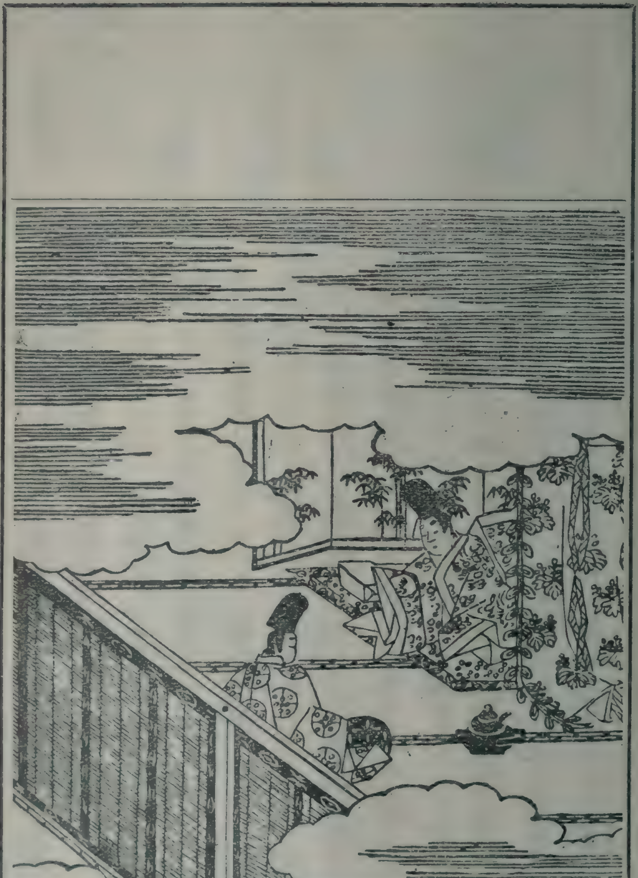
(一) 源の眞面目な場合に物をさばき行く所を見れば
(二) 源はさぞ前世に善根を積みたるならんと想像せられて
(三) 源の
(四) 桐壺帝に非常に寵愛せられ
(五) たしか廿一で參議兼近衞大將になりしと思ふ
(六) 夕霧は
(七) 源の子孫が次第に威勢の增るならん
(八) 夕霧も父に劣るまじく、惡くすると父にも勝りて老成なる樣に思はるるはえらいものぢや
㊃ 朱雀院、女三宮を源氏に嫁せしめんとす
(九) 女三
(一〇) 女三を愛してくれて足らぬ所は人にかくして教育してくれる人で安心してあづけられる人にやりたし

など、人知れず思し寄りけり。朱雀「太政大臣(一)のわたりに、今は住みつかれにたりとな。(二)年頃心得ぬさまに聞きしが、いとほしかりしを、耳やすきものから、さすがに妬く思ふことこそあれ」と、宣はする御氣色を、如何に宣はする事にかと、怪しく(三)思ひ廻らすに、この(四)姫宮をかく思しあつかひて、さるべき人あらば預けて、心安く世をも思ひ離ればや、となむ思ほし宣はすると、自ら漏れ聞き給ふ便ありければ、さやうの筋にやとは思ひ寄れど、(五)ふと心得顔にも何にかはいらへ聞えさせむ。たゞ、夕「はか〴〵しくも侍らぬ身には、(六)寄るべもさぶらひ難くのみなむ」とばかり、奏して止みぬ。女房などは、(七)のぞきて見聞えて、「いと有難くも見え給ふ容貌用意かな。あなめでた」など集りて聞ゆるを、(八)老いしらへるは、「いで、然りとも、(九)かの院のかばかりにおはせし御有樣には、えなずらひ聞え給はざンめり。(一〇)いと目もあやにこそ淸らに物し給ひしか」など、言ひしろふを聞召して、朱雀「まことに、(一一)彼はいと樣異なりし人ぞかし。今は又その世にも(一二)ねびまさりて、光るとはこれを言

(一)其方は頭中の娘を妻にしたそうな
(二)年來雲井雁との間は妙な行きがかりになり居れりと聞きて氣の毒なりしに、丸く纒まりたるは安心ながら我には殘念に思はるゝ所もある
(三)夕霧が
(四)女三を朱雀がもてあまして
(五)突然分つて居る樣な顏をして御挨拶する譯にもゆかず
(六)妻になつてくれる女もありませぬ
(七)夕霧を
(八)老いぼれたる女中は
(九)源の此位の年輩の時分とは比べ物にならぬ
(一〇)源の若盛りは
(一一)源は
(一二)源の器量が

言の君、夕「(一)過ぎ侍りにけむ方は、ともかくも思う給へわき難く侍り。(二)年まかり入り侍りて、朝廷にも仕うまつり侍る間、世の中の事を見給へまかりありく程には、大小のことにつけても、內々のさるべき(三)物語などの序にも、(四)古の憂はしき事ありてなむなど、うちかすめ申さるゝ折は侍らずなむ。(五)かく朝廷の御後見を仕う奉りさして、靜なる思ひをかなへむと、偏に籠り居し後は、何事をも知らぬ様にて、(六)故院の御遺言のごともえ仕う奉らず。(七)御位におはしましゝ世には、齢のほども、(八)身の器物も及ばず、かしこき上の人々多くて、その志を遂げて、御覽ぜらるゝ事もなかりき。今かく(九)政をさりて、靜におはします頃ほひ、心の中をも隔なく、參り承らまほしきを、さすがに何となく(一〇)所狹き身のよそほひにて、おのづから月日を過す事となむ、折々歎き申し給ふ」など奏し給ふ。(一一)二十にもまだ僅なる程なれど、いとよく整ひすぐして、容貌も盛に匂ひて、いみじく淸らなるを、(一二)御門にとゞめて、打ちまもらせ給ひつゝ、このもて煩はせ給ふ(一三)姫宮の御後見にこれをや、

(一)昔の事は私には分りませぬ、須磨の事に對する挨拶
(二)私成人の後
(三)源との
(四)昔斯く〳〵の災難に逢ひたり抔と源が遠廻しにもいふ事はなし
(五)源が宮仕をやめて今の如く閑居してからは、以下「月日を過す事」迄源の詞を夕霧が眞似て語る也
(六)桐壺の御遺言を實行もせず
(七)朱雀在位中は
(八)年も若し器量もなし上には賢才も多かりしかば
(九)源も閑散の身になり朱雀も閑居せらるゝ時に
(一〇)太上天皇に准ぜらるゝ身の窮屈さに
(一一)夕霧今年十八歲
(一二)朱雀が
(一三)女三の聟に此夕霧をせんかと



らずながら、(一)はかなき事のあやまりに、(二)心おかれ奉ることもありけむと思ふを、年頃ことにふれて、その怨殘し給へる氣色をなむ(三)漏し給はぬ。(四)さかしき人といへど、(五)身の上になりぬれば、事違ひて心動き、必ずその(六)報見え、ゆがめることなむ、古だに多かりける、如何ならむをりにか、その(七)御心ばへ縦ぶべからむと、世の人もおもむけ疑ひけるを、遂に忍び過し給ひて、東宮などにも心をよせ聞え給ふ。今はた又なく(八)親しかるべき中となり、睦びかはし給へるも、(九)限なく心には思ひながら、本性の愚なるに添へて、(一〇)子の道の闇に立ちまじり、頑なる様にやとて、なか〳〵餘所のことに聞え放ちたる様にて侍る。内裏の御事は、(一一)かの御遺言違へず、仕う奉りおきてしかば、かく末の世の明らけき君として、(一二)來し方の御面をもおこし給ふ。本意のごと、いと嬉しくなむ。この秋の行幸の後、(一三)古のことゝり添へて、ゆかしく覺束なくなむ覺え給ふ。對面に聞ゆべき事ども侍り。必ず自ら訪ひものし給ふべき由、催し申し給へ」など、うちしほたれつゝ宣はす。中納

(一)源の須磨退去當時の事をいふ
(二)源に恨まれしならんと思ふが
(三)源が
(四)已下世人の源に對する疑念を朱雀が語る也
(五)我身の事になれば公平の判斷を缺きて
(六)自分につらかりし人には復讐をし曲つた事をする例は古人にさへ多き例なれば
(七)源の復讐心があらはれるかしらと
(八)明石姫君入内せるをいふ
(九)非常に嬉しく腹では思ひ居れど
(一〇)子故の闇に獨愚になりて、なまじ口を出したらば却て譯のわからぬ世話をやく事になるかしらと遠慮して
(一一)桐壺帝の遺言通りに
(一二)我が在位中の不行屆をも取返す
(一三)昔を思ひ出して源を床しく思ふ

㊂ 夕霧、朱雀院に伺候す
(一) 女三の事を朱雀が
(二) 從來も
(三) 朱雀自身に
(四) 朱雀の在位時代に御奉公申上げし人々は
(五) 夕霧が朱雀院へ、
(六) 桐壺帝が御臨終に
(七) 源と冷泉との事を特に御遺言ありしが
(八) 我即位の後は

わざとにくしとはなくとも、まことに心とゞめて思ひ後見むとまでは思さずもやとぞ、推し量らるゝかし。

朝夕に(一)この御事を思しなげきて、年暮れ行くまゝに、御惱まことに重くなりまさらせ給ひて、御簾の外にも出でさせ給はず。(二)御物怪にて、時々惱ませ給ふこともありつれど、いと斯くうちはへ、小歇なき樣にはおはしまさざりつるを、この度はなほ限なり、と思召したり。(三)御位を去らせ給へれど、なほその世に賴みそめ奉り給へる人々は、今も懷かしくめでたき御有樣を、心やり所に(四)參り仕う奉らせ給ふかぎりは、心を盡して惜み聞え給ふ。六條院よりも、御訪らひしばしばあり。自らも參り給ふべき由聞し召して、院はいといたく喜び聞えさせ給ふ。(五)中納言の君參り給へるを、御簾の内に召し入れて、御物語細やかなり。朱雀「(六)故院の上の、今はのきざみに、あまた御遺言ありし中に、(七)この院の御事、今の內裏の御事なむ、とりわきて宣ひおきしを、(八)おほやけとなりて、事限ありければ、內々の心よせは變

はむ御心づかひなど、聞え知らせ給ふ。御年の程よりは、(二)いとよく大人びさせ給ひて、御後見どもも(一)此方彼方、輕々しからぬ中らひにものし給へば、いと後やすく思ひきこえさせ給ふ。朱雀「この世に怨殘ることも侍らず。(三)女宮達のあまた殘りとゞまる行くさきを思ひやるなむ、(四)さらぬ別にもほだしなりぬべかりける。さきざき、人の上に見聞きしにも、(五)女は心より外にあは〱しく、人に貶しめらるゝ宿世あるなむ、いと口惜しく悲しき。(六)いづれをも、(七)思ふやうならむ御世には、樣樣につけて、(八)御心とゞめておぼし尋ねよ。その中に、(九)後見などあるは、さる方にも思ひゆづり侍り。(一〇)三の宮なむ、いはけなき齡にて、(一一)たゞ一人を賴もしきものとならひて、(一二)うち捨ててむ後の世に、漂ひさすらへむ事、いと後めたく悲しく侍り」と、御目おし拭ひつゝ聞え知らせ給ふ。(一三)女御にも、心うつくしきさまに聞えつけさせ給ふ。されど、(一四)母女御の、人よりはまさりて時めき給ひしに、(一五)皆挑みかはし給ひし程、御中らひども、(一六)えうるはしからざりしかば、その名殘にて、(一七)げに今は

(一)朱雀が
(二)東宮が
(三)女三宮以下四人の姫宮達
(四)死別の際にも
(五)女といふものは不慮に人の誹を受くる事あるのが殘念なり
(六)どの姫宮をも
(七)其方が帝になりたらば
(八)注意して世話して下され
(九)女一女二女四などは夫々然るべき身寄もあれば安心して居る
(一〇)女三宮
(一一)朱雀一人を
(一二)我出家の後便なき身にならん事
(一三)承香殿にも繼娘なれど、よく世話しくれよと賴む也
(一四)女三の母藤壺が
(一五)藤壺承香殿等が各寵を爭ひし時分
(一六)中よき譯には行かざりし故
(一七)承香殿が女三を憎くは思はぬ迄も

(一)朱雀が
(二)朱雀が出家して
(三)女三が
(四)女三宮
(五)女三の方へ讓りて
(六)讓與
㊁ 東宮に女三宮の事を託す
(七)朱雀の長子
(八)朱雀が
(九)朱雀院へ
(一〇)承香殿女御
(一一)承香殿は朱雀が特に寵愛もせられざりしかど
(一二)わが生みたる皇子の東宮に立たれし
(一三)朱雀と承香殿と

御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれて悲しきものに、(一)思ひかしづき聞え給ふ。その程御年十三四ばかりにおはす。(二)今はと背きすて、山籠しなむ後の世に(三)たちとまりて、誰を頼むかげにて物し給はむとすらむと、唯この御事を後めたくおぼし歎く。西山なる御寺造りはてて、うつろはせ給はむほどの御いそぎをせさせ給ふに添へて、又(四)この宮の御裳著のことを思し急がせ給ふ。院の内にやむごとなくおほす御寶物、御調度どもをば更にもいはず、はかなき御遊物まで、少し故あるかぎりをば、たゞ(五)この御方にと渡し奉らせ給ひて、その次々をなむ、他御子達には、(六)御處分どもありける。

(七)東宮は、(八)かゝる御惱に添へて、世をそむかせ給ふべき御心づかひになむと聞かせ給ひて、(九)渡らせ給へり。(一〇)母女御も添ひ聞えさせ給ひて、參り給へり。(一一)勝れたる御覺にしもあらざりしかど、(一二)宮のかくておはします御宿世の、限なくめでたければ、(一三)年頃の御物語、細やかに聞えかはさせ給ひけり。宮にもよろづの事、世を保ち給

● 朱雀院病重し、女三宮の處置に苦心す
(一)以下朱雀院の仰の趣也
(二)母弘徽殿大后
(三)出家せねばならぬのかして
(四)出家の心支度
(五)「その中に」より「女三宮をあまたの御中にすぐれて悲しきものに云々」へつゞく也、「藤壺と」以下「その御腹の」までは女三宮の素姓を說く挿入文
(六)源氏の繼母なりし藤壺とは別人、朱雀の御妾也
(七)朱雀の東宮時代に入内して
(八)皇后中宮
(九)藤壺は血統を言ひ立てる程の家柄でもなき更衣の腹に生れたれば
(一〇)朧月夜
(一一)藤壺を
(一二)御讓位ありしかば

朱雀院の帝、ありし行幸の後、その頃ほひより、例ならず惱み渡らせ給ふ。もとよりあつしくおはします中に、此度は物心ぼそく思しめされて、(一)年頃も行の本意深きを、(二)后の宮のおはしましつる程は、よろづ憚り聞えさせ給ひて、今まで思し滯りつるを、(三)なほその方に催すにやあらむ、世に久しかるまじき心地なむするなど宣はせて、(四)さるべき御心まうけどもせさせ給ふ。御子達は東宮をおき奉りて、女宮達なむ四所おはしましける。(五)その中に、(六)藤壺と聞えしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ(七)坊と聞えさせし時參り給ひて、(八)高き位にも定まり給ふべかりし人の、とり立てたる御後見もおはせず、(九)母方もその筋となく物はかなき更衣腹にてものし給ひければ、御まじらひの程も心細げにて、大后の尚侍(一〇)を參らせ奉り給ひて、傍にならぶ人なくもてなし聞え給ひなどせし程に、けおされて、帝も御心の中に(一一)いとほしきものに思ひ聞えさせ給ひながら、(一二)おりゐさせ給ひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を怨みたるやうにて亡せ給ひにし、その

若菜上

梗概

①朱雀院病重し。出家の望。女三宮の所置に苦心す。②東宮に女三宮の事を託す。③夕霧、朱雀院に伺候す。朱雀院の懇話。④朱雀院、女三宮を源氏に嫁せしめんとす。乳母と左中辨との斡旋。朱雀の思案。⑤候補者の樣々。柏木、螢兵部卿宮、藤大納言、夕霧。⑥東宮、女三を源氏に嫁せしめんことを勸む。朱雀の決心、申込。源氏の不承諾。⑦女三宮裳著の祝。⑧朱雀院出家。源氏の訪問。源氏、女三宮を娶らん事を約す。⑨源氏、女三宮の事を紫上に語る。紫上の覺悟。⑩源氏の四十の賀。玉鬘祝の爲に源氏を訪ふ。⑪女三宮、源氏に嫁す。紫上の感情。侍女等の同情。⑫女三宮と紫上とに對する源氏の感。⑬朱雀院西山に移る。六條院へ消息。⑭朧月夜二條の宮に移る。源氏竊に朧月夜に逢ふ。⑮明石姫君懷胎によりて六條院へ退出。紫上明石姫君及女三宮に對面。紫上、女三宮と睦む。⑯紫上、源氏の四十の賀に藥師佛供養。精進落の饗宴。⑰秋好中宮、源氏の爲に祈禱を行はしむ。⑱夕霧勅を受けて源氏の爲に四十の賀を行ふ。⑲明石姫君六條院に退出。明石尼君、姫君に舊事を語る。⑳明石姫君皇子を產む。內裏以下所々よりの產養。紫上、明石上と睦む。㉑明石入道隱遁に臨みて文を京に贈る。尼君と明石上との悲。㉒明石上、姫君に入道の文を示す。源氏其文を見て姫君に敎訓す。㉓夕霧の女三宮に對する感情。柏木の女三宮に對する戀。㉔六條院の蹴鞠の會。柏木、女三宮を垣間見る。㉕柏木、小侍從を介して文を女三宮に贈る。

朱雀(一)秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝるもみぢのをりをこそ見ね

怨めしげにぞ思したるや。帝、

冷泉(二)世のつねの紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を

と聞え知らせ給ふ。御容貌(三)いよ〳〵ねびとゝのほり給ひて、たゞ(四)ひとつものと見えさせ給ふを、中納言のさぶらひ給ふが、(五)こと〴〵ならぬこそめざましかゝめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしに劣りたまはむ、あざやかに匂はしき所は、(六)添ひてさへ見ゆ。笛(七)仕う奉りたまふ、いと面白し。唱歌の殿上人、御階にさぶらふ中に、辨の少將の聲すぐれたり。(八)なほ然るべきにこそと見えたる御なからひなゝめり。

(一)今は隱居の身となれる我さへ今迄かゝる面白き折にあひし事なし
(二)今日の行幸は只の行幸にあらず、畢竟朱雀院の時の例を追ひたる也
(三)冷泉の
(四)源と
(五)これも源の子にて矢張同じやうに見ゆるはめざましき事也
(六)夕霧は身分の相違を思ひて見る故か品は劣る樣なれど水際立ちてつや〳〵しき點は寧ろ勝れて見ゆ
(七)夕霧が
(八)かく勝れたる人々の集りたるも然有るべき前世の緣と見えたる

折らせ給ひて、青海波(一)のをり思しいづ。

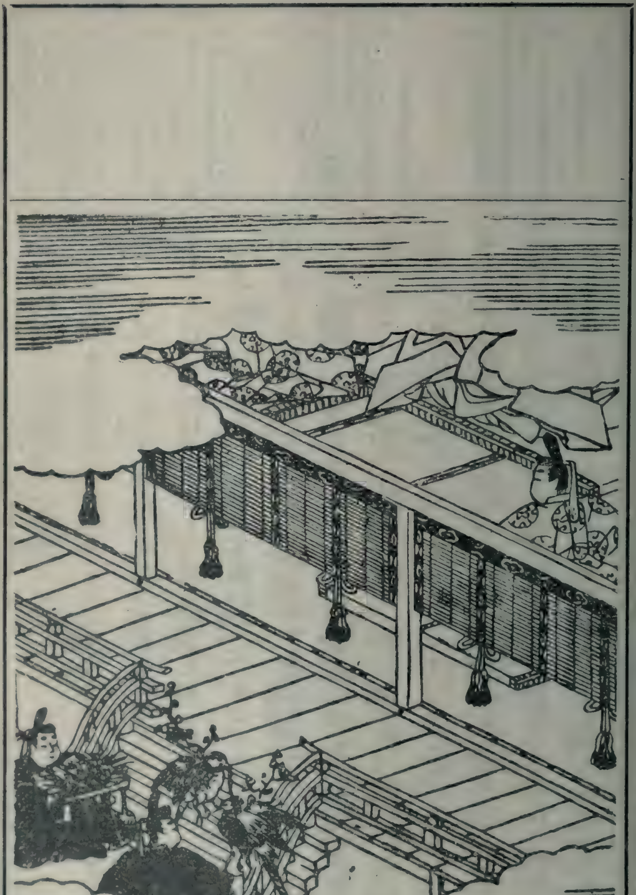
源「色(二)まさるまがきの菊もをり〳〵に袖うちかけし秋を戀ふらし

大臣、そのをりは同じ舞に立ち(三)ならび聞え給ひしを、我も人には勝れ給へる身ながら、なほこの際(四)はこよなかりける程思し知らる。時雨、折知り顏なり。

頭中「むらさき(五)の雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る

時こそありけれ」と聞え給ふ。夕風吹きしく紅葉のいろ〳〵、濃き薄き錦を敷きたる、渡殿の上見えまがふ庭の面に、容貌をかしき童の、やむごとなき家の子どもなどにて、青き(六)赤き白橡、蘇芳、葡萄染など、常のごと、例のみづら(七)に、額(八)ばかりの氣色を見せて、短き(九)ものどもをほのかに舞ひつゝ、紅葉の蔭に歸り入るほど、日の暮るゝもいとほしげなり。樂所(一〇)などおどろ〳〵しくはせず。上の御遊(一一)はじまりて、書司(一二)の御琴ども召す、物の興切なるほどに、御前(一三)に皆御琴ども參れり。宇陀(一四)の法師の變らぬ聲も、朱雀院は、いと珍らしくあはれに聞し召す。

(一)紅葉の賀に自分が青海波を舞ひし時の事
(二)今は出世なされし其方も我と共に舞を舞ひし昔を時々は思出すならん
(三)源に
(四)源の太上天皇になりたるに比べては非常の差なることを感じたり
(五)太上天皇となりて並びなく時めき給ふ君を我等は昭代の星と仰ぎ奉る、我身の及びなきをほのめかしたる也
(六)舞童の衣裳也
(七)びんづら結ひたる也
(八)天冠といふかぶり物ばかりを著て外の裝飾を省きたる也
(九)小樂を形ばかり舞ひつゝ
(一〇)奏樂所を仰山につくらず
(一一)帝以下の自らの奏樂
(一二)御手元の書籍樂器などを司る役所、女官之を司る
(一三)冷泉、朱雀、源などの
(一四)內裏に藏せられし名物の和琴の名



けれど、過ぎさせ給ふ道の興ばかりになむ。山の紅葉は何方も劣らねど、(一)西の御前は心ことなるを、中の廊の壁をくづし、中門を開きて、(二)霧の隔なくて御覽ぜさせ給ふ。(三)御座二つよそひて、主人の御座は下れるを、宣旨ありて直させ給ふ程、めでたく見えたれど、帝はなほ、(四)限ある恭しさをつくして見せ奉り給はぬことをなむ思しける。(五)池の魚を、左の少將とり、藏人所の鷹飼の、北野に獵仕う奉れる鳥一番を、右の佐捧げて、寢殿の東より御前に出でて、御階の左右に膝をつきて奏す。太政大臣仰事(六)賜ひて、(七)調じて御膳にまゐる。親王達、上達部などの御まうけも、珍らしきさまに、常の事どもをかへて、仕う奉らせ給へり。皆御醉になりて、暮れかゝる程に樂所の人召す。わざとの大樂にはあらず、なまめかしきほどに、殿上の童べ舞ひ仕う奉る。朱雀院の紅葉の賀の、(八)例の古事思し出でらる。「賀(九)王恩」といふ物を奏する程に、太政大臣の御男の十ばかりなる、切におもしろう舞ふ。内裏の帝、御衣ぬぎて賜ふ。太政大臣おりて舞踏(一〇)し給ふ。主人の院、菊を

(一)秋好方の紅葉は特別なれば
(二)邪魔になる物のなき樣にして
(三)帝と朱雀との座
(四)父子の禮を以て源氏に見ゆる事能はざるを不足に思へり
(五)鵜のとりたる魚を御覽に入るゝ也
(六)勅命によりて
(七)その魚鳥を料理して
(八)紅葉の賀の卷にあり
(九)曲の名
(一〇)我子への下され物に對して御禮を申上ぐる也、舞踏は拜禮の一種のかた

宰相乳母 いづれをも蔭とぞたのむ二葉よりねざし交せる松のすゑゞ(一)

老人ども(二)、かやうの筋に聞え集めたるを、中納言はをかしとおぼす。女君はあいなく面赤みて、苦しと聞き給ふ。

神無月の二十日あまりの程に、六條院に行幸あり。紅葉のさかりにて、興あるべき度の行幸なるに、朱雀院にも御消息ありて、院(三)さへ渡りおはしますべければ、世に珍らしくありがたき事にて、世の人も心をおどろかす。あるじの院がた(四)も、御心をつくし、目もあやなる御心まうけをせさせ給ふ。巳の時に行幸ありて、まづ馬場の殿に、左右の司(五)の御馬ひき並べて、左右の近衛(六)立ち添ひたる作法、五月の(七)節にあやめわかれず通ひたり。未くだるほどに、南の寝殿に移りおはします。道の程、反橋、渡殿には錦を敷き、あらはなるべき所には軟障(八)をひき、いつくしうしなさせ給へり。東の池に船ども浮けて、御厨子所(九)の鵜飼の長、院(一〇)の鵜飼を召しならべて、鵜をおろさせ給へり。ちひさき鮒ども食ひたり。わざとの(一一)御覧とはな

(一)夕霧夫婦は幼馴染の御中なれば我は御兩人を等しく大事に思ひて仕へ奉る

(二)他の老女等も同樣の意味の歌をよみたるを

七 冷泉院六條院へ行幸して紅葉を賞す

(三)朱雀院も六條院へ

(四)源方にても

(五)左右馬寮の

(六)競馬を行ふ也

(七)五月五日には競馬必ずあれば也、五月五日の折と全く見擬ふ位なり

(八)畫かきたる幕

(九)天子の御膳部を司る役所

(一〇)六條院御かゝへの

(一一)特に御覽に入れる爲の催ではなけれど

女君、

雲井なき人(一)はかげだに見えずつれなくて心をやれるいさらゐの水

など宣ふ程に、大臣(二)内裏よりまかで給ひけるを、紅葉(三)の色に驚かされて渡り給へり。昔(四)おはしまいし御有樣にも、をさ〳〵變ることなく、あたり〳〵いとおとなしく住ひ給へるさま、花やかなるを見給ふにつけても、いと物哀におぼさる。(五)中納言も、氣色ことに顏少し赤みて、いとど靜まりてものし給ふ。あらまほしく美しげなる御(六)あはひなれど、女(七)はまた、かゝる容貌の類もなどか無からむと見え給へり。男は、際もなく淸らにおはす。古人どもも御前に所えて、(八)神さびたる事ども聞え出づ。ありつる御手習ども(九)、散りたるを御覽じつけて、(一〇)打ちしをれ給ふ。

頭中(一一)「この水のこゝろ尋ねまほしけれど、翁は言忌して」と宣ふ。

頭中(一二)そのかみの老木はうべも朽ちぬらむ植ゑし小松も苔生ひにけり

男君の宰相の乳母、(一三)つらかりし御心も忘れねば、したり顏に、

(一)故大宮は亡くて小井の水のみ不相變の顏をして得意らしく流れて居る
(二)頭中
(三)此邸の紅葉の美しさにひかれて三條邸へ來たり
(四)故大宮の住み給ひし時分にかはらず
(五)夕霧
(六)夕霧夫婦の中
(七)雲井雁の方は此位の人は外にもあるべく見える
(八)古めかしき話
(九)前の夕霧夫婦の歌
(一〇)頭中が昔を思ひ出して
(一一)我も大宮を忍ぶ歌をよみたけれど
(一二)大宮の世を去りて久しくなりしも道理也、其子の我さへ斯く老人になりたれば
(一三)頭中の夕霧につらく當りし昔を忘れずして



しういとほしきものから、うつくしう見奉る。

大輔乳母「(一)ふた葉よりなだたる園の菊なればあさき色わく露もなかりき

(二)いかに心おかせ給へりけるにか」と、いと馴れて苦しがる。御勢まさりて、かゝる御住居も所狹ければ、(三)三條殿に渡り給ひぬ。少し荒れにたるを、いとめでたく修理しなして、(四)宮のおはしましゝ方を、改めしつらひて住み給ふ。昔おぼえて、哀に思ふさまなる御住居なり。前栽どもなど、小さき木どもなりしも、いと繁き蔭となり、(五)一叢薄も心にまかせて亂れたりける、つくろはせ給ふ。遣水の水草も掻きあらためて、いと心ゆきたる氣色なり。をかしき夕暮のほどを、(六)二所ながめ給ひて、あさましかりし世の、御をさなさの物語などし給ふに、戀しきことも多く、人の思ひけむ事も恥かしう、女君はおぼし出づ。(七)古人どもの、まかでず散らず、曹司曹司にさぶらひけるなど、まうのぼり集りて、いと嬉しと思ひあへり。男君、

(八)夕なれこそは岩もるあるじ見し人のゆくへは知るや宿の眞清水

(一)名にし負ふ源の御子息なれば、君は昔から卑かるべき者とは見え給はざりき
(二)何と思ひて其程私を恨み給ひしぞ
(三)祖母大宮の舊邸に夕霧が移りたる也
(四)大宮
(五)「君がうゑし一叢薄蟲のねのしげき宿ともなりにける哉」
(六)夕霧夫婦
(七)大宮時代の侍女
(八)宿の清水よ、汝こそ故大宮の身の上は知りたるべけれ、我に語れ

ほきなる世のいそぎなり。その秋、太上天皇に準ふる御位得給ひて、御封くはゝり、年官年爵など皆添ひ給ふ。斯からでも、世の御心に叶はぬ事なけれど、なほ珍らしかりつる昔の(一)例を改めて、院司(二)どもなどなり、樣異にいつくしくなり添ひ給へば、内裏(三)に參り給ふべきこと難かるべきをぞ、かつは思しける。かくても、なほ飽かず帝はおぼして、世の中を憚りて、位(四)をえ讓り聞え給はぬことなむ、朝夕の御なげきぐさなりける。内大臣(五)あがり給ひて、宰相(六)中將、中納言になり給ひぬ。御悅(七)に出で給ふ。光いとゞ勝り給へる、樣容貌より初めて、飽かぬことなきを、あるじ(八)の大臣も、なか〳〵(九)人におされ、すさまじき宮仕よりはとおぼしなるに、女君(一〇)の大夫の乳母、「六位宿世」(一一)とつぶやきしよひの事、物の折々におぼし(一二)出でければ、菊のいと面白く(一三)、うつろひたるを賜はせて(一四)、

「あさみどり(一五)わか葉の菊をつゆにてもこき紫のいろとかけきや

辛かりし折の一言葉こそ忘られね」と、いとにほひやかにほゝ笑みて賜へり。恥か(一六)

(一)この詞心得がたし
(二)太上天皇に準じたる故其相當の役人をおく也
(三)輕々しく參內も出來ぬを源が嘆く
(四)帝位を源に讓る事の叶はぬ事が御不足の種
(五)頭中が太政大臣になりたる也
(六)夕霧
(七)夕霧が御禮に參内す
(八)頭中、夕霧今は頭中の邸に居る故にあるじといふ也
(九)夕霧の出世を見てつまらぬ宮仕をするよりはといふ也
(一〇)雲井雁
(一一)夕霧を侮りて斯くいひしこと少女卷にあり
(一二)夕霧が
(一三)霜に色がかはりて美しきを
(一四)乳母に
(一五)わが六位なりし時汝は我が今日あるを思ひしや否や、綠は六位以下の袍の色、紫は四位已上の袍
(一六)乳母が

いどみ所にて、とりぐ\にさぶらふ(一)人々も、心をかけたるに、女房の用意有樣さへ、いみじくとゝのへなし給へり。上(二)もさるべき折節には參り給ふ。御中(三)らひあらまほしく打解け行くに、さりとて(四)さし過ぎものなれず、侮らはしかるべきもてなしはたつゆ無く、怪しうあらまほしき(五)人の御有樣心ばへなり。大臣(六)も、長からずのみ思さるゝ御世の此方にと思しつる御まゐり、かひあるさまに見奉りなし給ひて、心がらなれど、世に浮きたる樣にて見苦しかりつる宰相君も、思ひなくめやすきさまにしづまり給ひぬれば、御心おちゐはて給ひて、今は本意も遂げなむとおぼしなる。(七)對の上の御有樣の見捨て難きにも、中宮(八)おはしませば、疎ならぬ御心よせなり。(九)この御方にも、世に知られたる親ざまには、まづ思ひ聞え給ふべければ、然りともとおぼし讓りけり。(一〇)夏の御方の、時々にはなやぎ給ふまじきも、(一一)宰相のものし給へばと、皆とりぐ\に後めたからず、おぼしなり行く。

明けむ年(一二)四十になり給ふべければ、御賀(一三)のこと、おほやけよりはじめ奉りて、お

(一)姫君の侍女等を殿上人等が挑みたるに
(二)紫上
(三)紫と明石上との中
(四)明石上の態度をいふ、出すぎて紫に狎れ狎れしからず
(五)明石上の
(六)源も生先長からぬ自分の存生中にしたしと望み居し姫君の入内も上首尾に濟みたり、又心がらとは言ひながら何時迄も身の固まらざりし夕霧の身の上もすらりと極まりたれば安心してもう出家してもよしといふ氣になる
(七)紫上
(八)秋好は紫の養女分なれば
(九)明石姫君も表向はどこ迄も紫を親として立てる譯なれば
(一〇)花散里
(一一)夕霧が居るから是もよしと
㊅源氏太上天皇に准ぜらる、頭中將夕霧の昇進、夕霧三條邸に移る
(一二)源が
(一三)四十歳の祝

(一) 其紫に立並ぶ自分の運は悪くはなし
(二) 紫が宮中を下る
(三) 流石自分と紫とは段が違ふと観念する
(四) 姫の
(五) 明石上が
(六) 「嬉しきも憂きも心は一つにてわかれぬ物は涙なりけり」
(七) 父入道存生中より深く祈りし神なれば也
(八) 紫が十二分に育てあげて
(九) 姫の
(一〇) 人々の氣受
(一一) 東宮
(一二) 姫君と寵を爭ふ婦人等
(一三) 明石上
(一四) 明石姫君方を珍らしき張合ひ所にして

と思ひ知らるゝに、かうまで立ちならび聞ゆる契、疎なりやは、と思ふものから、(一)出で給ふ儀式の、いとことに(二)装ほしく、御輦車など許され給ひて、女御の御有様にことならぬを、思ひ比ぶるに、(三)さすがなる身の程なり。いと美しげに雛のやうなる(四)御有様を、夢の心地して(五)見奉るにも、涙のみとゞまらぬは、(六)「ひとつ物」とぞ見えざりける。年頃よろづに歎きし罪、さま〴〵憂き身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はれ〴〵しきにつけて、まことに(七)住吉の神も疎ならず思ひ知らる。(八)思ふさまにかしづき聞えて、心およばぬ事はたをさ〳〵無き、(九)人のらう〳〵じさなれば、大かたのよせおぼえより始め、なべてならぬ御有様容貌なるを、(一一)宮も、若き御心(一〇)地に、いと心ことに思ひ聞え給へり。(一二)いどみ給へる御方々の人などは、この(一三)母君のかくてさぶらひ給ふを、疵に言ひなしなどすれど、それに消たるべくもあらず。今めかしく並なきことをば、更にもいはず、心にくゝ由ある御けはひを、はかなき事につけても、あらまほしくもてなし聞え給へれば、殿上人なども、(一四)珍らしき

(一)明石上の心、自分が附添ひては輦より下りて歩まねばならず、其では外聞惡かるべしと思へど、其も自分の爲の外聞を厭ふにはあらず姫の疵になるべきを憚りて
(二)之も畢竟我が生きて居ればこそと
(三)源が
(四)紫は
(五)是が眞の娘ならばと
(六)紫に實子のなきを
(七)紫上
(八)明石上が
(九)紫が明石上が
(一〇)姫君が生長したるを見ても君と此六條院に棲む事の久しくなりたる事も分る、今はお互に隔のあるべき筈がない
(一一)紫と明石上と
(一二)紫の心、明石上の態度を見れば源の寵深きも道理と
(一三)紫と明石上と
(一四)明石上の心、紫が多くの女の中にて源の寵殊に厚く本妻になりたるも道理

も、(一)立ちくだり打ち歩みなど人わろかるべきを、我が爲は思ひ憚らず、唯かく磨きたて奉り給ふ玉の疵にて、(二)我がかくながらふるを、且はいみじう心苦しう思ふ。御まゐりの儀式、人の目驚くばかりのことはせじと、(三)思しつゝめど、おのづから世の常の樣にぞあらぬや。限もなくかしづきすゑ奉り給ひて、(四)上はまことに哀にうつくしく思ひ聞え給ふにつけても、人に讓るまじう、(五)誠にかゝる事もあらましかばとおぼす。大臣も宰相の君も、(六)たゞこの事一をなむ、飽かぬことかなとおぼしける。三日すぐしてぞ、(七)上はまかでさせ給ふ。たちかはり(八)參り給ふ夜、(九)御對面あり。紫「かく(一〇)おとなび給ふけぢめになむ、年月の程も知られ侍れば、疎々しきへだては、殘るまじうや」と、なつかしう宣ひて、物語などし給ふ。これを(一一)打ち解けぬるはじめなゝめり。(一二)ものなど打ち言ひたるけはひなど、宜こそは、とめざましう見給ふ。またいと氣高うさかりなる御氣色を、(一三)互にめでたしと見て、そこらの御中にも勝れたる御志にて、ならびなきさまに定り給ひけるも、いと(一四)理

㊄明石姫君入内、明石上附添ひて宮中に居る、明石姫君の榮華、源氏の安心
(一)明石姫君入内
(二)紫が附添ひ上るべき筈なれど
(三)源の心、紫が永く姫君に添ひて内裏に居ることは不可能なれば
(四)明石上
(五)明石上が姫に附添ふ事は何時かあるべき事
(六)明石上
(七)明石姫君の心にも
(八)實母に逢ひたく
(九)明石上を姫に
(一〇)まだ子供にて氣づかはしきに
(一一)注意のとゞかぬ所あるに
(一二)自分が附き切りにもして居られぬ其間、安心の出來る樣明石上を附添はしめ給へ
(一三)源が
(一四)明石上にも
(一五)明石上が
(一六)侍女等の服裝
(一七)姫の祖母
(一八)源の
(一九)どうしたら姫君を見られるだらうと
(二〇)參内の夜は紫が附添ひて

かくて(一)御まゐりには、(二)北の方添ひ給ふべきを、(三)常に長々しくはえ添ひ侍ひ給はじ。かゝるついでに、かの(四)御後見をや添へましとおぼす。上も、(五)つひにあるべき事の、かく隔たり過したまふを、(六)かの人ものしと思ひ歎かるらむ、(七)この御心にも、今はやう〳〵(八)覺束なく、哀におぼし知るらむ、かた〴〵心おかれ奉らむもあいなし、と思ひなり給ひて、紫「この折に(九)添へ奉り給へ。(一〇)まだいとあえかなる程もうしろめたきに、侍ふ人とても、若々しきのみこそ多かれ。御乳母達なども、(一一)見及ぶことの心いたる限あるを、(一二)自らはえつとさしもさぶらはざらむ程、後やすかるべう」と聞え給へば、いとよく思しよるかな(一三)と思して、然なむ(一四)とあなたにも語らひ宣ひければ、いみじく(一五)嬉しく、思ふ事かなひぬる心地して、(一六)人の裝束なにはの事も、やむごとなき御有樣に劣るまじく急ぎたつ。(一七)尼君なむ、(一八)なほこの御生先見奉らむの心深かりける。今一度見奉る世もやと、命をさへ執念うなして念じけるを、(一九)如何にしてかはと思ふも悲し。(二〇)その夜は、上そひて參り給へり。御輦車に

給ひぬ。近衛(一)づかさの使は、頭中將(二)なりけり。(三)かの大殿にて、出で立つ所よりぞ人々は參り給ひける。藤内侍(四)のすけも使なりけり。(五)おぼえことにて、内裏東宮より初め奉りて、六條院などよりも、御とぶらひども所せきまで、御心よせいとめでたし。宰相の中將、いでたちの所にさへ訪ひ給へり。打解けず哀を交し思ふ御中なれば、かくや(六)むごとなき方に定り給ひぬるを、たゞならず打思ひけり。

夕　何(七)とかや今日のかざしよかつ見つゝおぼめく迄もなりにけるかな

あさまし。

とあるを折過し給はぬばかりを、如何思ひけむ、いと物騷しく、車に乘る程なれど、

藤　かざして(八)もかつたどらるゝ草の名はかつらを折りし人や知るらむ

博士ならでは。

と聞えたり。はかなけれど、ねたきいらへと思す。なほこの内侍にぞ思(九)ひ離れずはひ紛れ給ふべき。

(一)賀茂及び春日の祭には近衛の武官を勅使に差遣さるゝ也
(二)柏木
(三)柏木が父の邸より勅使として出發する所へ人人參集し、其より源の棧敷へ來たり
(四)惟光の娘、夕霧の情人
(五)藤内侍のすけが
(六)夕霧が頭中の聟になりたるを内侍のすけが
(七)今日の祭の葵かつらを見て居ながら其名を忘るゝまでになりし事よ、葵を逢ふにかけて逢ふ事の絕えたるを歎きたる也
(八)實際身につけて居ながら我もあふひといふ名は近頃覺束なくなりたり併し君は進士及第の學者なれば御存知の筈
(九)夕霧が

して、誰も〳〵とまり給ひて、こと〴〵しき程にもあらず、御車ども二十ばかりにて、御前などもくだ〳〵しき人數多くもあらず、事そぎたるしもけはひ殊なり。(三)御祭の日、曉に(一)まうで給ひて、かへさには、(二)物御覽ずべき御棧敷におはします。方々の女房、おの〳〵車ひきつゞきて、(四)御前所占めたるほどいかめしう、(五)彼はそれと、遠目よりおどろ〳〵しき御勢なり。(六)大臣は、中宮の御母御息所の、(七)(八)車押しさげられ給へりし折の事思し出でて、源「(九)時による心驕して、さやうなる事なむ情なき事なりける。(一〇)こよなく思ひ消ちたりし人も、(一一)歎き負ふやうにて亡くなりにき」と、(一二)その程は宣ひ消ちて、「殘りとまれる人々も、(一三)中將はかくたゞ人にて、僅になり昇るめり。(一四)宮はならびなき筋にておはするも、思へばいとこそあはれなれ。すべていと定なき世なれば、何事も思ふまゝにて、生ける限りの世を過さまほしけれど、(一五)殘り給はむ末の世などの、たとしへなき衰などをさへ、思ひ憚らるれば」と打語らひ給ひて、上達部なども御棧敷に參り集ひ給へれば、そなたに出で(一六)

(一)紫が賀茂に
(二)直に祭の行列を見るべき設の棧敷へ行く
(三)紫明石姫君などの侍女等なるべし
(四)前駈の供人等が場所をとり居る所
(五)あれこそ紫上よと
(六)源氏
(七)六條御息所
(八)葵上との車爭の事
(九)時の勢にまかせて
(一〇)車爭の時大に威張った葵上も
(一一)人の恨を買ひたる爲に死にたるが如し
(一二)其時の事はわざと話をそらして言はず
(一三)葵上の子たる夕霧は
(一四)御息所の娘の秋好は
(一五)我が死後に其方が生殘りて見る蔭もなく零落せんかと心配する故今得意の時に愼りて驕るなと誡むる也
(一六)源が

(一)夕霧
(二)雲井雁へ
(三)格別情の厚き中ではなけれど、日頃夕霧にやさしき詞をかけられたる女どもは
(四)夕霧と雲井雁との中
(五)「など斯くあふごかたみになりぬらん水漏らさじと結びしものを」
(六)頭中
(七)近づきて來れば夕霧の猶、よき人柄なるを愛して
(八)此句下の「思しゆるす」にかゝる
(九)夕霧が眞面目なる性質で年來他に女をも設けず待ち居たるを
(一〇)雲井雁の大事がらるゝ樣子が
(一一)雲井雁の繼母
(一二)雲井雁の實母
圏 賀茂祭、源氏紫上を誘ふ、夕霧藤典侍と歌贈答
(一三)明石姫君入內
(一四)紫上
(一五)玉依姫の別雷神を生み給ひし處也といふ、下賀茂の御なり
(一六)六條院の婦人達を
(一七)紫と同道して其下風に立つが快からずして

臆しがちなり。

宰相(一)は、しづ心なく、いよ〳〵化粧じひきつくろひて出で給ふ、わざとならねど、なさけだち給ふ若人は、恨めしと思ふもありけり。年頃(二)のつもり取り添へて(三)、思ふやうなる御中らひ(四)なゝめれば、水(五)も漏らむやは。あるじ(六)の大臣も、いとゞしき(七)近勝を、美しきものに思して、いみじうもてかしづき聞え給ふ。負けぬる方の口惜しさはなほ思せど、罪(八)も殘るまじうぞ、まめやか(九)なる御心ざまなどの、年頃こと心なくて、念じ過し給へるなどを、ありがたう思しゆるす。女御(一〇)の御有樣などよりも、花やかにめでたくあらまほしければ、北の方(一一)、さぶらふ人々などは、心よからず思ひいふもあれど、何の苦しきことかあらむ。按察使(一二)の北の方なども、かかる方にて嬉しと思ひ聞え給ひけり。

かくて六條院(一三)の御いそぎは、廿日餘のほどなりけり。對の上(一四)、御生(一五)にまうで給ふとて、例の(一六)御方々誘ひ聞え給へど、なか〳〵(一七)さしもひき續きて、心やましきを思

(一)外に浮氣がましき事をするな
(二)頭中の性質をいふ
(三)相手になりにくき處
(四)夕霧と雲井雁とは相應の縁と源が思ふ
(五)夕霧が源の子とは見えず、源が少し年上の兄位に見える
(六)夕霧が源に生寫しと思はるゝに
(七)相違の點ありて取々に美しく見える
(八)斯く年たけても、源今年三十九歳
(九)今日は四月八日なれば誕生佛を寺より持ち來りて其儀式を行ふ也
(一〇)六條院の婦人達
(一一)朝廷と同じ樣に
(一二)宮中の儀式に擬して
(一三)帝の御前よりも
(一四)導師の僧が

けう思ひ顔に、心おごりして、(一)すき〴〵しき心ばへなどものし給ふな。(二)さここそおいらかに大きなる心おきてと見ゆれど、したの心ばへ雄々しからず癖ありて、(三)人見えにくき所つき給へる人なり」など、例の教へ聞え給ふ。(四)事うちあひ目安き御あはひと思さる。(五)御子とも見えず、少しが兄ばかりと見え給ふ。外々にては、(六)同じ顔を寫しとりたると見ゆるを、御前にては、(七)樣々あなめでたと見え給へり。大臣は、薄き御直衣、白き御衣の唐めきたるが、紋けざやかに艶々と透きたるを奉りて、(八)なほ盡きせずあてに、なまめかしうおはします。宰相殿は、少し色深き御直衣に、丁子染のこがるゝまで染める、白き綾のなつかしきを著給へる、ことさらめきて艶に見ゆ。

(九)灌佛ゐて奉りて、御導師遲く參りければ、日暮れて(一〇)御方々より童べいだし、布施など、(一一)おほやけ樣にかはらず、心々にし給へり。(一二)御前の作法をうつして、君達なども參りつどひて、なか〴〵(一三)うるはしき御前よりも、(一四)怪しう心づかひせられて

(一)咎むなよ忍にしぼる手もたゆみ今日あらはるゝ袖のしづくを

などいと馴れ顔なり。うち笑みて、頭中「手をいみじくも書きなられにけるかな」など宣ふも、(二)昔のなごりなし。(三)御かへしいと出來難げなれば、頭中「見苦しや」とて、(四)さも思し憚りぬべき事なれば、わたり給ひぬ。御使の祿、なべてならぬさまにて賜へり。中將、をかしきさまにもてなし給ふ。常に引隱しつゝ隱ろへありきし御使、今日は面もちなど人々しく振舞ふめり。(五)右近の丞なる人の、(六)むつまじく思しつかひ給ふなりけり。

六條の大臣も、(七)斯くと聞召してけり。(八)宰相、常よりも光そひて參り給へれば、うちまもり給ひて、源「今朝はいかに。(九)文などものしつや。さかしき人も、女のすぢには亂るゝ例あるを、人わろうかゝづらひ、(一〇)心いられせで過されたるなむ、少し人にぬけたりける御心と覺えける。(一一)大臣の御おきての、あまり進みて、名殘なくくづほれ給ひぬるを、世の人も言ひ出づることあらむや。さりとても、(一二)我が方た

(一)今日よりは最早前の如く忍びて其方を戀ふ事はすまじ、其心して居られよ
(二)中惡かりしけぶりは丸でなし
(三)雲井雁の
(四)雲井雁が書き澁るも尤の事なれば父が退去せり
(五)此使は
(六)夕霧が
囙　源氏夕霧を敎誡す、睦まじき夕霧夫婦の中
(七)中直りの次第を
(八)夕霧
(九)文を雲井雁へやりしか
(一〇)見つともなく雲井雁との關係を氣にかけて焦らず平氣を裝ひて今迄過し來れる處は少し人に勝れたりと感心せり
(一一)頭中の仕向が餘り降參し過ぎたるを人が誹るかも知れぬ
(一二)自慢らしく

(一)侍女等が夕霧の起きぬを持て餘すに

(二)夕霧より雲井雁への文は不相變忍びてよこすを

(三)雲井雁が今日は却つて返事し得ぬを見て

(四)心解けぬ樣なりし御樣子を見て彌〻我が不束を悟れども、諦めかねて又文を差上げる

雲井「あさき名をいひ流しける河口はいかゞもらしゝ關のあらがき

あさまし」と宣ふさま、いと見めきたり。少し打ち笑ひて、

夕「もりにけるくきだの關を河口のあさきにのみはおふせざらなむ

年月の積も、いと理なくて惱ましきに、物おぼえず」と、醉にかこちて苦しげにもてなして、明くるも知らず顏なり。(一)人々聞え煩ふを、大臣、「したり顏なる朝寢かな」と咎め給ふ。されど、明しはててぞ出で給ふ。ねくたれの御朝顏見るかひありかし。

(二)御文は、なほ忍びたりつる樣の、心づかひにてあるを、なか〳〵今日は得聞え給はぬを、物いひさがなき御達つきじろふに、大臣渡りて(三)見給ふぞ、いとわりなきや。

夕 (四)盡きせざりつる御氣色に、なか〳〵いとゞ思ひ知らるゝ身の程を、たへぬ心に又聞えぬべきにも、

りぬべけれ。宿直所譲り給ひてむや」と、中將にうれへ給ふ。大臣、「朝臣や、御(一)休所もとめよ。翁いたくゑひ進みて無禮なれば、まかり入りぬ」と云ひ捨てて入り給ひぬ。中將、(二)「花のかげの旅寢よ。(三)いかにぞや、(四)苦しきしるべにぞ侍るや」といへば、夕「(五)松に契れるに、あだなる花かは。ゆゝしや」と責め給ふ。中將は心の中に、(六)妬のわざやと思ふ所あれど、(七)人ざまの思ふさまにめでたきに、斯うもありはてなむと、心がけわたる事なれば、うしろやすく導きつ。(八)

(九)男君は、夢かと覺え給ふにも、(一〇)わが身いとゞいつかしうぞ覺え給ひけむかし。女(一一)は、いと恥かしと思ひしみて物し給ふも、ねびまされる御有樣、いとゞ飽かぬ所なくめやすし。夕「世の例にもなりぬべかりつる身を、(一二)心もてこそ斯うまでも思し許さるめれ。(一三)哀を知り給はぬも、樣ことなるわざかな」と、恨み聞え給ふ。夕「少(一四)將の進み出しつる、葦垣のおもむきは、耳とゞめ給ひつや。痛き主かなや。河口(一五)のとこそ、さしいらへまほしかりつれ」と宣へば、女いと聞きにくしとおほして、

(一)夕霧の寢所を心配せよ、我は非常に醉ひたれば御免を蒙る
(二)柏木
(三)藤の花を見に來て宿を借るをいふ
(四)御案內がしにくし
(五)松に契りて咲く藤は仇なる花と謂ふべからず、花の陰の旅寢など仇々しく言ふべからず「常盤なる松に契れる藤なれど己が頃とぞ花は咲きける」
(六)我方の負けたるを忌々しく思へど
(七)夕霧の人柄のよきに惚込みて、此人を聟にしたしと兼て思ひ込み居たる中なれば
(八)雲井雁の所へ
(九)夕霧
(一〇)顯く、自分の重々しきを感ぜしなるべし
(一一)雲井雁
(一二)我が辛抱し來りたればこそ此の如く頭中の御許を蒙る事となりし也
(一三)其方の情なしも世評立はづれて居る
(一四)少將の葦垣を謠ひし趣意は分りしか、ひどい事をいふ人ぢや
(一五)河口を返答に謠ひたくなりし、催馬樂河口「河口の關のあら垣や守れども出でて我寢ぬや忍び忍びに」



(一)今日の御許しを得る迄に思へば幾許の年月を愁ひつゝ過し來し事ならん
(二)盃を
(三)雲井雁も夕霧の光によりて今後榮ある生活を送るならん
(四)順廻りに歌を詠んだらしけれど
(五)こゝに擧げたるより上の歌もなし
(六)芽のまだ開かざる也
(七)藤の花
(八)催馬樂の曲名「葦垣まがき、かきわけて、てふ越すと、おい、越すと、はれ、てふ、越すと、誰か此事を、親にまうよこしけらしも。轟ける、此家のをとよめや、親にまうよこしけらしも」
(九)「とぶろける」を「年經にける」と書き違へたるか、又は此頃は斯く歌ひし歟、又此時特に變へて歌ひし歟
(一〇)舊怨の互に解けたるなり
(一一)歸りの途中が覺束なし、今夜泊めては下さらぬか

宰相盃を持ちながら、氣色ばかり拜し奉り給へるさま、いと由あり。

夕　いくかへり(一)露けき春をすぐしきて花のひもとく折にあふらむ

頭中將に賜へば(二)、

柏木(三)　たをやめの袖にまがへる藤の花見るひとからや色もまさらむ

つぎ／＼に皆順(四)ながるめれど、醉の紛にはかぐ／＼しからで、(五)これより勝らず。七日の夕月夜影ほのかなるに、池の鏡のどかに霞み渡れり。げに、(六)まだほのかなる梢どもの、さう／＼しき頃なるに、いといたう氣色ばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かゝれる花(七)のさま、世の常ならずおもしろし。例の辨の少將、聲いとなつかしくて、「葦垣(八)」を謠ふ。大臣、「いとけやけうも仕うまつるかな」とうち亂れ給ひて、「年經(九)にけるこの家の」とうち加へ給へる、御聲いとおもしろし。をかしき御遊にて、(一〇)物思殘らずなりぬめり。やう／＼夜更け行く程に、いたう空惱をして、「みだり心地いと堪へがたうて、(一一)まかでむ空もほと／＼しくこそ侍

も見えぬ程なるを、(一)もてあそぶに心をよせて、大御酒まゐり御遊し給ふ。大臣、ほどなく空醉をし給ひて、亂りがはしく(二)強ひ醉はし給ふを、(三)さる心していたう(四)すまひ惱めり。頭中「君は、末の世にはあまるまで、天の下の有職にものし給ふめるを、(五)齡古りぬる人思ひ捨て給ふなむつらかりける。(六)文籍にも家禮といふことあるべくや。(七)なにがしの教も、よく思し知るらむと思ひ給ふるを、(八)いたう心惱まし給ふと、恨み聞ゆべくなむ」など宣ひて、醉泣にや、をかしき程に氣色ばみ給ふ。夕「いかでか。(九)昔を思ひ給へ出づる御かはりどもには、身を捨つる樣にもとこそ、思ひ給へ知り侍るを、(一〇)いかに御覽じなすことにかは侍らむ。もとより疏なる心のおこたりにこそ」と、かしこまり聞え給ふ。(一一)御時よくさうどきて、頭中「(一二)藤のうら葉の」と打ち誦じ給へる、御氣色をたまはりて、(一三)頭中將、花の色濃く殊に房長きを折りて、客人の御盃に加ふ。(一四)取りてもて惱むに、大臣、

(一五)紫にかごとはかけむ藤のはなまつよりすぎてうれたけれども

(一)藤を賞玩するに心を専らにして
(二)夕霧に酒を強ひて
(三)夕霧も覺悟し居りて
(四)辭退し
(五)老人の我を嫌ひなさるのが恨ぢや
(六)書物にも高貴の人も父子の禮は恭しくすることとある樣也、頭中は舅なれば父に準じてもよからんといふ義なるべし、舊註には史記の「高祖五日一朝太公如家人父子禮」を引けり
(七)儒教の教
(八)よく我に氣をもませなさる事よと
(九)葵上や大宮などの關係を思ひて此人々に仕ふる代りと思へば身を捨て仕へ奉りてもよい筈と心得て居るに
(一〇)左樣に仰せらるゝは何と思召しての事ならん
(一一)頭中が場合よくさざめき立ちて
(一二)「春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はゞ我も頼まん」
(一三)柏木
(一四)夕霧が
(一五)其方より言出さるるを待ち居りしに、負けて此方より降參したるは忌々しけれども既に娘を許す以上は堪忍すべし

ろかならず。御(一)かうぶりなどし給ひて出で給ふとて、北の方、若き女房などに、頭中「のぞきて見給へ。(二)いと警策(三)にねびまさる人なり。用意などいとしづかに、ものものしや。あざやかにぬけ出で(四)およずけたる方は、父大臣にも優り樣にこそあンめれ。かれ(五)は唯いと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地ぞし給ふ。おほやけざま(六)は、少したはれて、あざれたる方なりし、理ぞかし。(七)これは才の際もまさり、心もちゐ雄々しく、すくよかに足ひたり(八)と、世に覺えたンめり」など宣ひて、ひきつくろひてぞ對面し給ふ。物まめやかにうべく(九)しき御物語は少しばかりにて、花の興に移り給ひぬ。頭中「春の花いづれとなく、皆開け出づる色ごとに、目驚かぬはなきを、心短く打ち捨てて散りぬるが、怨めしう覺ゆるころほひ、この(一〇)花のひとり立ち後れて、夏に咲きかゝるほどなむ、怪しく心にくゝ哀におほえ侍る。色もはた、懐かしき由縁にもしつべし」とて、打ちほゝゑみ給へる、氣色ありて匂淸げなり。月は(一一)さし出でぬれど、花の色さだかに

(一)冠を著て改まりて對面する也
(二)夕霧を
(三)すぐれて
(四)落著きのある所は
(五)源は
(六)役人としてはやゝ眞面目を缺きて洒落すぎたる方なりしが、それも尤も
(七)夕霧
(八)缺點なしと人に思はれて居る
(九)鹿爪らしき話
(一〇)藤の花
(一一)宵なれば也

(一)頭中の方から折れて出て來れば
(二)興か孝か、いづれにしても穩ならず
(三)其れ程深い意味ありての招待にはあるまじ
(四)夕霧が内々は心配でたまらず
(五)其の二藍の直衣では色が濃すぎて下品也
(六)其方は最早參議兼中將なれば相當にめかして行くがよい
(七)著料の直衣のすばらしいのに
(八)夕霧が
(九)頭中の方で氣を揉んで居る時分になりて
(一〇)柏木
(一一)列席の人々
(一二)夕霧が
(一三)頭中が命じて特に夕霧の座を設けさせなどする

くなむとて御覽ぜさせ給ふ。源「思ふやうありてものし給へるにやあらむ。さも進み物し給はばこそは、過ぎにし方のけうなかりし(二)恨も解けめ」と宣ふ。御心(一)おごり、こよなう妬げなり。夕(三)「さしも侍らじ。對の前の藤、常よりもおもしろく咲きて侍るなるを、靜なる頃ほひなれば、遊せむなどにや侍らむ」と申し給ふ。源「わざと使さゝれたりけるを、早う物し給へ」と許し給ふ。如何ならむと、(四)下には苦しく、たゞならず。源「(五)直衣こそあまり濃くて輕びたゝめれ。非參議のほど、何となき若人こそ、二藍はよけれ、(六)ひきつくろはれむや」とて、(七)我が御料の心ことなるに、えならぬ御衣ども具して、御供にもたせて奉れ給ふ。

(八)我が御方にて、心遣ひいみじくけさうして、たそがれも過ぎ、(九)心やましき程にまうで給へり。あるじの君達、中將をはじめて、(一〇)七八人うちつれて迎へ入れ奉る。(一一)いづれともなくをかしき容貌どもなれど、(一二)なほ人に勝れて、鮮やかに淸らなるものから、懷かしう由づき恥かしげなり。(一三)大臣御座ひき繕はせなどし給ふ御用意お

(一)こゝらの年頃の思のしるしにや、(二)かの大臣も、名殘なくおぼし弱りつゝ、(三)はかなき序のわざとはなくて流石につきぐ\しからむを思すに、四月の朔日ごろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲きみだれて、世の常の色ならず。たゞに見過さむこと惜しき盛なるに、遊などし給ひて、暮れ行く程のいとゞ色まされるに、(四)頭中將して御消息あり。(五)(六)「一日の花のかげの對面の、飽かず覺え侍りしを、御暇あらば、立寄り給ひなむや」とあり。御文には、

頭中 わが宿の藤のいろ濃きたそがれに(七)尋ねやは來ぬはるのなごりを

げにいとおもしろき枝につけ給へり。(八)待ちつけ給へるも、心ときめきせられて、かしこまり聞え給ふ。

夕 (九)なかぐ\にをりやまどはむ藤の花たそがれ時のたどぐ\しくば

と聞えて、夕「口惜しくこそ臆しにけれ。(一〇)取りなほし給へよ」と聞え給ふ。柏木「(一一)御供にこそ」と宣へば、夕「煩はしき隨身は否」とてかへし給ふ。(一二)大臣の御前にて、か

㊀ 藤の宴に託して頭中將夕霧を招く、夕霧久し振にて雲井雁に逢ふ

(一)夕霧の
(二)頭中も全く往生して
(三)餘りつまらぬ序でもなく餘り改まりもせぬ序を以て夕霧を招きたしと考ふるに
(四)柏木
(五)父の傳言を柏木の述ぶる也
(六)法會の時の面會
(七)四月の初なれば春の名殘を尋ねよといひて下に雲井雁の事を含めたり
(八)招を受けたる夕霧も是は頭中の下心ありての事ならんと胸をどきつかせて
(九)夕霧との緣を許されたる樣なれど、まだはつきりせぬ内は御招きに預りて却てどうしてよいか途方にくれる
(一〇)甘く取繕ひて御取次ありたし
(一一)御同道致したし
(一二)夕霧が源の前へ頭中の文を持ち行きて

給へり。宰相の君は、まして萬をとりもちて、哀にいとなみ仕う奉り給ふ。夕かけて皆かへり給ふほど、花は皆散りみだれ、霞たど〳〵しきに、大臣、昔おぼし出でて、なまめかしう嘯きながめ給ふ。宰相も哀なる夕の氣色に、いとゞうちしめりて、「雨氣なり」と人々の騷ぐに、なほながめ入りて居給へり。(一)心ときめきに見給ふことやありけむ、(二)袖をひきよせて、頭中(三)「などか、いとこよなくは勘じ給へる。(四)今日の御法の會にも尋ねおぼさば、罪を許し給ひてよや。(五)殘少くなり行く末の世に、思ひ捨て給へるも、うらみ聞ゆべく」など宣へば、うち畏まりて、夕(六)「過ぎにし御おもむけも、頼み聞えさすべきさまに、承りおくこと侍りしかど、許なき御氣色に、(七)憚りつゝ」など聞え給ふ。心あわたゞしき雨風に、皆ちり〴〵に競ひかへり給ひぬ。(八)君、(九)いかに思ひて例ならず氣色ばみ給ひつらむなど、(一〇)世と共に心をかけたる御あたりなれば、(一一)はかなきことなれど耳にとまりて、とやかくやと思ひ明し給ふ。

(一)夕霧の樣子を見て頭中がと胸を突きたる事がありしと見えて
(二)夕霧の
(三)なぜ我を非常に嫌ひなさる
(四)今日の法事に參會せらるゝ位ならば
(五)我が老境に入りてから我を嫌はるゝも
(六)なき大宮の仰にも貴方を力にせよとの事なりしかど
(七)憚りて參上もせぬ
(八)夕霧
(九)頭中が
(一〇)絶えず氣にかゝる雲井雁關係の事なれば
(一一)頭中の一言はつまらぬ事なれど

(一)以下頭中の心、かの宮は中務の宮
(二)夕霧との縁談を極めて仕舞ひたらば
(三)又更に雲井雁の聟を選定する間
(四)夕霧と雲井雁との最初からの關係
(五)矢張降參して元のさやに納めるがよし
(六)源と頭中との中は
(七)頭中の心、仰山らしく復縁の事を持出すも馬鹿らしく思はるべし
(八)頭中の母
(九)頭中が
(一〇)夕霧
(一一)夕霧の
(一二)頭中
(一三)夕霧が
(一四)僧への布施

思し煩ひて、(一)かの宮にもさやうに(二)思ひ立ちはて給ひなば、(三)又とかく改め思ひかゝづらはむ程、人のためも苦しく、我が御方ざまにも人笑はれに、おのづから輕々しき事やまじらむ、忍ぶとすれど、(四)うち〳〵の事あやまりも、世に漏りにたるべし、とかく紛らはして、(五)なほ負けぬべきなゝめり、と思しなりぬ。(六)上はつれなくて、怨解けぬ御中なれば、ゆくりなく言ひよらむもいかゞ、と思し憚りて、(七)事々しくもてなさむも、人の思はむ所をこなり、如何なる序してかはほのめかすべき、など思すに、三月二十日(八)おほい殿の大宮の御忌日にて、極樂寺に(九)まうで給へり。君達みなひきつれ、勢あらまほしく、上達部などもあまた參り集ひ給へるに、(一〇)宰相中將、をさ〳〵けはひ劣らず、よそほしくて、容貌など、たゞ今いみじき盛にねび行きて、取り集めめでたき人(一一)の御有樣なり。この大臣(一二)をばつらしと(一三)思ひ聞え給ひしより、見え奉るも心づかひせられて、いといたう用意し、もてしづめてものし給ふを、大臣も常よりは目とゞめ給ふ。(一四)御誦經などは、六條院よりもせさせ

藤裏葉（ふぢのうらは）

梗概

㊀ 夕霧、雲井雁、箇々の煩悶。大宮の法會に頭中將、夕霧を誘ふ。㊁ 藤の宴に託して頭中將夕霧を招く。夕霧久し振にて雲井雁に逢ふ。㊂ 源氏、夕霧を教誡す。睦まじき夕霧夫婦の中。㊃ 賀茂祭。源氏、紫上を戒む。夕霧、藤典侍と歌贈答。㊄ 明石姫君入內。明石上附添ひて宮中に居る。姫君の榮華。源氏の安心。㊅ 源氏、太上天皇に準ぜらる。頭中將太政大臣になる。夕霧中納言になり、三條邸に移る。㊆ 冷泉六條院に行幸して紅葉を賞す。

(一)御いそぎの程にも、(二)宰相中將はながめがちにて、(三)ほれ〴〵しき心地するを、かつは怪しく、(四)我が心ながら執念きぞかし、あながちに斯う思ふことならば、(五)關守の、うちも寢ぬべき氣色に思ひ弱り給ふなるを聞きながら、同じくば人わろからぬ樣に見はてむ、と念ずるも、苦しく思ひ亂れ給ふ。(六)女君も、(七)大臣のかすめ給ひし事のすぢを、若しさもあらば、(八)何の名殘かは、と歎かしうて、怪しく背き〴〵に、さすがなる御諸戀なり。(九)大臣も、さこそ心强がり給ひしかど、(一〇)たけからぬに

㊀ 夕霧、雲井雁、箇々の煩悶、大宮の法會に頭中將、夕霧を誘ふ

(一) 明石姫君入內の準備
(二) 夕霧
(三) ぼんやりしたる
(四) 夕霧の心
(五) 頭中がやう〳〵夕霧に許す積になれりと聞きながら、「人知れぬわが通路の關守はよひ〳〵毎に打ちも寢ならむ」
(六) 雲井雁
(七) 父の噂の夕霧の緣談を
(八) 夕霧が丸で我を忘れて仕舞ふならんと
(九) 頭中
(一〇) 心强くしても張合なきに煩悶して

（一）其方は次第に世間並の女の如くつれなくなり行くに、其を何時までも慕ひ居る我は變人といふべきならん
（二）中務宮の方の縁談を丸でけぶりにも出さず何くはぬ顏して居る憎らしさよと
（三）忘れ難しといはるゝ我を忘れて中務宮の方へ關係せらるゝは矢張世間並の輕き脚心といふべし
（四）夕霧が變に思ひて

夕（一）つれなさはうき世のつねになり行くを忘れぬ人やひとにことなる

とあり。（二）氣色ばかりもかすめぬつれなさよと、思ひ續け給ふは憂けれど、

雲井（三）かぎりとて忘れがたきを忘るゝもこや世になびくこゝろなるらむ

とあるを、（四）怪しと、打置かれず、傾きつゝ見居給へるとぞ。

(一)わざと大樣に構へて
(二)夕霧より雲井雁へ
(三)「僞と思ふものから今更に誰がまことをか我は賴まん」
(四)雲井雁が
(五)雲井雁の如きおぼこ娘は
(六)源の承諾を得て己の娘を夕霧に嫁せんと相談して居る
(七)斯樣々々の噂がある
(八)源が曾て自分が口をきゝて扱ひたる時、此方で不承知なりしを憤りて外へ緣組を持つて行く積なるべし
(九)今更いくぢなく此方から降參して行くも外聞惡し
(一〇)頭中の心
(一一)矢張此方から進みて夕霧の機嫌をとりて雲井雁との緣をまとめたものであらうか
(一二)雲井雁が
(一三)雲井雁の心
(一四)父が我が淚を見て何と思はれしならん

う、憂き身とおぼし沈めど、上は(一)つれなくおほどかにて、ながめ過し給ふ。御文(二)は、思ひあまり給ふをり〳〵、哀に心深きさまに聞え給ふ。「誰(三)がまことをか」と(四)思ひながら、世なれたる人こそ、あながちに人の心をも疑ふなれ、哀(五)と見給ふふし多かり。「中務の宮なむ、大殿(六)にも御けしき賜はりて、さもやと思しかはしたゞなる」と人の聞えければ、大臣はひきかへし御胸塞がるべし。しのびて、頭中「さ(七)る事をこそ聞きしか。情なき人の御心にもありけるかな。(八)大臣の、口入れ給ひしにしうねかりきとて、引き違へ給ふなるべし。(九)心弱く靡きても人笑へならまし事」など、涙を浮けて宣へば、姫君、いと恥かしきにも、そこはかとなく涙のこぼるれば、はしたなくて背き給へる、らうたげさ限なし。(一〇)いかにせまし、なほや進み(一一)出でて、氣色をとらまし、など思し亂れて立ち給ひぬる名残も、やがて端近うな(一二)がめ給ふ。(一三)怪しく心おくれても進み出づる涙かな、(一四)いかに思しつらむ、など萬に思ひ居給へるほどに、御文あり。さすがにぞ見給ふ。細やかにて、

(一)好色の訪をうけて
(二)其方は今身分の輕きにまかせて放埒の行をするな
(三)自分の浮氣を制する種になる程に氣に入りたる女のなき時
(四)思ふべからざる事を思ひて
(五)見立違ひをして婚したる女が
(六)勘辨する了簡を持ちならひて
(七)親の了簡が殊勝ならばそれに勘辨し
(八)其女が親なくて萬事便なくとも、人柄がしほらしくば其廉で我慢して連添ひ給へ
(九)父の教に隨ひて夕霧が
(一〇)雲井雁以外の女に懸想するは
(一一)我から罪を造る樣に
(一二)雲井雁
(一三)父頭中

もまかせず所せく、いさゝかの事のあやまりもあらば輕々しき譏をや負はむとつつみしだに、なほすきゞしき(一)咎を負ひて、世にはしたなめられき。位あさく(二)何となき身の程、打解け、心のまゝなる振舞などものせらるな。心おのづから驕りぬれば、(三)思ひしづむべきくさはひなき時、女の事にてなむ、かしこき人、昔も亂るゝ例ありける。(四)さるまじき事に心をつけて、人の名をも立て、自らも恨を負ふなむ、終のほだしとなりける。(五)とりあやまりつゝ見む人の、我が心にかなはず、忍ばむ事難きふしありとも、(六)なほ思ひかへさむ心をならひて、(七)もしは親の心にゆづり、(八)もしは親なくて世の中かたほにありとも、人がら心苦しくなどあらむ人をば、それを片かどによせても見給へ。我がため人のため、遂によかるべき心ぞ深うあるべき」など、のどやかに徒然なるをりは、かゝる心づかひをのみ教へ給ふ。かやうなる(九)御いさめにつきて、戯にても(一〇)外ざまの心を思ひかゝるは、哀に(一一)人やりならず覺え給ふ。(一二)女も、常よりことに、(一三)大臣の思ひ歎き給へる御氣色に、恥かし

かく少したわ(一)み給へる御氣色を、宰相の君は聞き給へど、しばしつらかりし御心を憂しと思へば、つれな(二)くもてなし靜めて、さすがに外(三)ざまの心はつかふべくも覺えず、心づから戯れにくき折多かれど、あさみどり(四)聞えごちし御乳母どもに、納言にのぼりて見えむの御心深かるべし。大臣(五)は、怪しく浮きたるさまかなとおぼし惱みて、源「かの(六)わたりの事思ひ絶えにたらば、右の大臣、中務の宮などの、氣色ばみ(七)言はせ給ふめるを、いづくも思ひ定められよ」と宣へど、物も聞え給はず、かしこまりたる樣にて侍ひ給ふ。源「(八)かやうの事は、かしこき御敎にだに、隨ふべくも覺えざりしかば、言交ぜま憂けれども、今思ひあはするには、かの御敎こそ長き例にはありけれ。つれ(九)〴〵とものすれば、思ふ心あるにやと、世の人も推し量るらむを、宿世(一〇)のひく方にて、なほ〳〵しき事にあり〳〵て靡く、いとしりびに(一一)人わろき事ぞや。(一二)いみじう思ひのぼれど、心にしもかなはず、限あるものから、すき〴〵しき心つかはるな。いは(一三)けなくより、宮の内よりおひ出でて、身を心に

(一)頭中の折れた樣子を夕霧が聞いても
(二)わざと平氣に構へて
(三)別の女に懸想する氣にはならず
(四)夕霧の六位なるを侮りし
(五)源氏
(六)雲井雁を思ひ切りたらば
(七)夕霧を聟にしたしと
(八)女の事に附ては我も昔父の敎訓に隨ひかねし事故口を出しにくけれど
(九)其方が獨身で居る故何か思ふ仔細ありての事ならんと
(一〇)長く極めずに置いた揚句緣ありてつまらぬ女に極めて仕舞ふは甚だ尻よわにて外聞惡き事也
(一一)始つよくて後よわくなる事をいふとぞ
(一二)望を高く持ちても其通にならぬに無暗に擇り嫌ひをするな
(一三)以下源自身の身の上をいふ

(一)書の上手と思はるゝ
(二)相當の品を見はからひて
(三)明石姫君の手本を入れたる箱には拙き書の分は入れず
(四)これも明石姫君の料なり
(五)姫君が今少し物が分つてから讓り與へんと
㊆頭中將、夕霧と雲井雁との關係につきて煩悶す、源氏夕霧を訓誡す
(六)頭中
(七)明石姫君入内の準備を
(八)雲井雁
(九)娘のふさぎ込み居るは親の身には非常なる悲歎の種なるに
(一〇)夕霧の態度は不相變寄らずさはらずなれば
(一一)頭中の方から降參して行くも外聞惡く
(一二)夕霧の懇望した時分に其に從ひたらばよかりしに
(一三)人ばかり惡くも言へず

(一)手書くと覺えたる、上中下の人々にも、(二)さるべき物ども思しはからひて、尋ねてかゝせ給ふ。(三)この御箱には、立ちくだれるをばまぜ給はず。わざと人の程、品わかせ給ひつゝ、册子卷物皆かゝせ奉り、よろづに珍らかなる御寶物ども、他のみかどまでありがたげなる中に、この本どもなむ、ゆかしと心動き給ふ若人世に多かりける。(四)御繪どもとゝのへさせ給ふ中に、かの須磨の日記は、末にも傳へ知らせむとおぼせど、(五)今少し世をも思し知りなむにと思しかへして、まだとり出で給はず。

(六)内の大臣は、(七)この御いそぎを、人の上にて聞き給ふも、いみじう心もとなくさうざうしと思す。(八)姫君の御有樣、盛にとゝのひて、あたらしう美しげなり。(九)徒然とうちしめり給へるほど、いみじき御歎きぐさなるに、(一〇)かの人の御氣色はた、同じやうになだらかなれば、(一一)心弱く進みよらむも人わらはれに、(一二)人の懇なりしきざみに、靡きなましかば、など人知れず思し歎きて、(一三)一方に罪をもえおほせ給はず。

は暇(一)いりぬべき物かな」と、興じめで給ふ。何事も物好し、艶がりおはする親王(二)さにて、いといみじうめで聞え給ふ。今日はまた、手の事どもを宣ひくらして、さまざまの續紙の本(三)ども、えり出させ給へる序に、御子(四)の侍從して、宮(五)に侍ふ本どもとりに遣はす。嵯峨の帝の、(六)古萬葉集をえらび書かせ給へる四卷、延喜の帝の、古今和歌集を、唐の淺縹の紙をつぎて、おなじ色の濃き紋(七)の、唐の綺の表紙、同じき玉の軸、緂(八)のからくみの紐など、なまめかしうて、卷ごとに御手の筋をかへつゝ、いみじう書き盡くさせ給へる、(九)大殿油みじかくまゐりて御覽ずるに、「盡(一〇)きせぬものかな。この頃の人は、たゞ(一一)かたそばを氣色ばむにこそありけれ」などめで給ふ。やがてこれ(一二)はとゞめ奉り給ふ。「女子(一三)などを持て侍らましにだに、をさをさ見はやすまじきには、傳ふまじきを、(一四)まして朽ちぬべきを」など聞えて奉れ給ふ。侍從に、唐(一五)の本などのいとわざとがましき、(一六)沈の箱に入れて、いみじき高麗笛そへて奉(一七)れ給ふ。又この頃は、たゞ假字の(一八)さだめをし給ひて、世の中に

(一)暇の入るべき
(二)螢が
(三)手本
(四)螢の子
(五)螢の自邸にある手本
(六)普通の萬葉集也、古今集を當萬葉集といふに對したる名
(七)模樣
(八)靑黃色
(九)あかりを低くして
(一〇)古き書を見れば興味無盡也
(一一)古人の書のほんの一部分のよい處を眞似するに止るのぢやわい
(一二)螢邸より取寄せたる手本を螢が源に贈る
(一三)我に娘があつても之を鑒賞する事の出來ぬ者には讓る可らざる品物なるに
(一四)況や我には丸で女子なければ持ち居ても持腐れになる
(一五)唐人の書きたる手本
(一六)事々しく立派なるを
(一七)源より答禮として
(一八)批評

花やかならで、なまめきたるに(一)、おほどかなる女手のうるはしう、心とゞめて書き給へる、譬ふべきかたなし。見給ふ人(二)の涙さへ、水茎にながれ添ふ心地して、飽く世あるまじきに、又こゝ(三)の紙屋の色紙の、色あひ花やかなるに、亂れたる草(四)の歌を、筆に任せて亂れかき給へるさま、見所かぎりなし。しどろもどろ(五)に愛敬づき、見まほしければ、更に殘ども(六)に目も見やり給はず。

左衞門督のは、事々しう(七)かしこげなる筋をのみ、好みて書きたれど、筆(八)のおきてすまぬ心地して、いたはり(九)加へたる氣色なり。歌なども、ことさらめきて、選り書きたり。女(一〇)のは、まほにもとり出で給はず。齋院のなどは、まして取う出たまはざりけり。葦手の册子どもぞ、心々にはかなうをかしき。宰相(一一)中將のは、水の勢ゆたかに書きなし、そゝけたる葦の生ひざまなど、難波(一二)の浦に通ひて、此(一三)方彼方ゆきまじりて、いたうすみたる所あり。又いと嚴しう、ひきかへて(一四)、文字やう、石などのたゝずまひ、好みかき給へる枚もあめり。「目も及ばず。これ

(一)優美なる
(二)螢の感涙
(三)日本の
(四)草書の歌
(五)變化極りなく
(六)餘所より書きてよこしたる分には螢が目をかけぬ
(七)上手らしき風をのみ
(八)筆法が垢ぬけせぬ様に思はれて
(九)氣をつけて書いた様子也
(一〇)女に書かせたる分は
(一一)夕霧の書きたるは
(一二)難波の浦は葦の名所なり、「通ひて」は「似て」
(一三)葦の葉が文字を組立つる工合の自由自在なるをいふ歟
(一四)趣をかへて

(一)簾內
(二)禮儀を守りて端しくしあへるも
(三)源より書を依賴したりし册子
(四)源が
(五)一部分に
(六)あかぬけたる
(七)僻したる古歌
(八)一首の歌を三行に
(九)斯程上手に書かるゝならんとは思はざりき
(一〇)是ではとても及ばぬ故我は筆を擲つべし
(一一)歷々の上手の書かるゝ中に交りて靦面なく書く我なれば、いくら何でも拙い筈はないと思ふ
(一二)源の書きたる
(一三)螢が

て、やがて待ち取り入れ奉り給ふ。この宮もいと淸げにて、御階、樣よく歩みのぼり給ふほど、内(一)にも人々のぞきて見奉る。うち畏まりて、互にうるはしだち給(二)へるも、いと淸らなり。源「徒然に籠り侍るも、苦しきまで思う給へらるゝ頃ののどけきに、折よく渡らせ給へる」と、悅び聞え給ふ。かの御册子(三)もたせて渡り給へるなりけり。やがて御覽(四)ずれば、勝れてしもあらぬ御手を、たゞかたかど(五)に、いといたう筆すみたる(六)氣色ありて、書きなし給へり。歌もことさらめき、そばみた(七)る古言どもをえりて、たゞ三(八)くだりばかりに、文字ずくなに好ましくぞかき給へる。大臣御覽じおどろきぬ。源「(九)かうまでは思ひ給へずこそありつれ(一〇)。更に筆抛げ棄つべしや」と、ねたがり給ふ。螢「(一一)かゝる御中に面無くくだす筆のほど、さりともとなむ思う給ふる」など、戯れ給ふ。書き(一二)給へる册子どもも、かくし給ふべきならねば取う出給ひて、互に御覽ず。唐の紙のいとすくみたるに、草にかき給へる、勝れてめでたしと見(一三)給ふに、高麗の紙の膚こまかに、和うなつかしきが、色などは



麗の紙の薄樣だちたるが、せめてなまめかしきを、源「この物好する若き人々試みむ」とて、(一)宰相中將、式部卿の宮の兵衞督、內の大殿の(二)頭中將などに、源「(三)葦手歌繪を、思ひ〳〵に書け」と宣へば、皆心々に挑むべかめり。例の寢殿に離れおはしまして書き(四)給ふ。花盛過ぎて、淺緣なる空うらゝかなるに、古き事どもなど思ひすまし給ひて、御心の行くかぎり、(五)草のもたどのも、女手をいみじう書きつくし給ふ。御前に人しげからず。女房二三人ばかり、墨などすらせ給ひて、故あるふるき集の歌など、(六)いかにぞやなど選り出で給ふに、くちをしからぬかぎりさぶらふ。御簾あげわたして、脇息の上に冊子うちおき、端近くうち亂れて、筆のしりくはへて、思ひめぐらし給へる樣、飽く世なくめでたし。(七)白き赤きなど、掲焉なる枚は、筆とりなほし、用意し給へるさまさへ、見知らむ人はげにめでぬべき御有樣なり。

(八)兵部卿宮渡り給ふと聞ゆれば、驚きて御直衣奉り、御褥まゐり添へさせ給ひ

(一)夕霧
(二)柏木
(三)葦手は歌などを文字をくづして葦の亂生せる樣に書きたるもの、歌繪は和歌の意を畫にかき、てにをはの文字抔を畫中に加へたるもの
(四)源が
(五)漢字の草字も假名も
(六)此歌は如何などと源が相談するに相手とするに足るべき人々ばかり
(七)色々の紙をまぜて綴ぢたる冊子の中白紙赤紙などは文字が目立つ故

❻螢兵部卿宮、六條院を訪ひて人々の書を評す

(八)螢

(一)六條御息所の靈も機嫌を直したるならん
(二)秋好の書は
(三)強き所なきなるべし
(四)故藤壺
(五)朧月夜
(六)しやれすぎて癖がある
(七)書の上手といふべきは朧月夜と槿と紫となるべし
(八)三人の中に入るは恥かしかるべし
(九)謙遜し過ぐるな
(一〇)和かき書風
(一一)其方の書は漢字の上手なる割には假名には調はぬ文字がある
(一二)螢
(一三)書かせん
(一四)我も册子二帖だけは書かん、螢が氣を張つて書いても我も其位に出來ぬ事はない
(一五)方々の人達に特別の依賴ある故
(一六)辭退するもあれば更に懇に賴む

深うおはせしかば、(一)なき御影にも見なほし給ふらむ。(二)宮の御手は、こまかにをかしげなれど、(三)かどや後れたらむ」と、うちさゞめきて聞え給ふ。源「(四)故入道の宮の御手は、いと氣色深うなまめきたる筋はありしかど、弱き所ありて、匂ぞすくなかりし。(五)院の尚侍こそ、今の世の上手におはすれど、(六)あまりそぼれて癖ぞ添ひたゝめる。さはありとも、(七)かの君と前齋院と、こゝにとこそは書き給はめ」と、許し聞え給へば、紫「(八)この數にはまばゆくや」と聞え給へば、源「(九)いたうな過し給ひそ。(一〇)にごやかなる方のなつかしさは、殊なるものを。(一一)眞字のすゝみたるほどに、假字はしどけなき文字こそまじるめれ」とて、まだ書かぬ册子ども綴りくはへ、表紙紐などいみじうせさせ給ふ。源「(一二)兵部卿の宮、左衞門督などに(一三)ものせむ。(一四)自らひとよろひはかくべし。氣色ばみいますかりとも、え書きならべじや」と、我ぼめをし給ふ。墨筆ならびなく選り出でて、(一五)例のところ〴〵に、たゞならぬ御消息あれば、人々難きことに思して、(一六)あるはかへさひ申し給ふもあれば、まめやかに聞え給ふ。高

心もとながらせ給へば、四月にと定めさせ給ふ。御調度どもも、もとあるよりも整へて、御自ら(一)も、物のしたかた繪樣などをも御覽じ入れつゝ、勝れたる道々の上手ども召し集めて、こまかに磨き整へさせ給ふ。册子の箱どもに入るべき册子どもの、やがて本(二)にもし給ふべきを撰らせ給ふ。いにしへの上なき際の御手どもの、世に名を殘し給へる類のも、いと多くさぶらふ。源「よろづの事、昔には劣りざまに、淺くなり行く世の末なれど、假字のみなむ今の世はいと(三)きはなくなりたる。(四)ふるき跡は、定まれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなむありける。妙にをかしきことは、(五)外よりてこそ書き出づる人々ありけれど、女手を心に入れて習ひしさかりに、(七)こともなき手本おほく集へたりし中に、中宮(六)の母御息所(八)の、心にも入れず走り書い給へりし一行ばかり、(九)わざとならぬをえて、際ことに覺えしはや。(一〇)さてあるまじき御名をもたて聞えてしぞかし。(一一)悔しき事に思ひしみ給へりしかど、さしもあらざりけり。(一二)宮にかく後見仕うまつることを、心

(一)源自身も道具の圖案などを詮議して
(二)姫君の手本
(三)非常に上手になりたり
(四)古人の筆跡は法がきまりて居る樣なれど自由ならず、どの人の書も一定して居る
(五)後世になりてこそ
(六)自分が假名を熱心に習ひし盛に
(七)よき手本
(八)六條御息所
(九)わざ〳〵手本にかきたるにはあらざるを得て格別に感心したり
(一〇)其が爲に不都合な浮名も立てられし也
(一一)其方はそれを深く悔しがりたれども、實際は其程でもなかつたのである
(一二)我が秋好の世話をやくを

母君の、かゝる折だにえ見奉らぬを、いみじと思へりしも、心苦しうて、まう(一)上らせやせましと思せど、人の物言をつゝみて過し給ひつ。かゝる所の儀式は、(二)(三)よろしきにだに、いと事多くうるさきを、片端ばかり、例のしどけなくまねばむもなか〳〵にや、とてこまかに書かず。

東宮の御元服は、廿餘日のほどになむありける。いとおとなしくおはしませば、人の女ども競ひ參らすべきことを、心ざしおぼすなれど、この(四)殿の思しきざす様のいと殊なれば、なか〳〵(五)にてや交らはむと、左の大臣、左大將なども、おぼしとどまるなるを、聞しめして、源「いと忿々(六)しき事なり。宮仕のすぢは、數多ある中に、少しの差別を挑まむこそ本意ならめ。(七)そこらの警策の姫君達の、引き籠められなば、世に榮あらじ」と宣ひて、御參延(八)びぬ。(九)次々にもとしづめ給ひけるを、かかるよし所々に聞き給ひて、左大臣殿の三の君參り給ひぬ。麗景殿と聞ゆ。

(一〇)この御方は、昔の(一一)御とのゐ所淑景舍を改めしつらひて、御參延びぬるを、宮(一二)にも

(一)明石上
(二)明石上を呼ばうかしらと
(三)尋常一樣の身分の所のでさへ
㊃ 東宮元服、麗景殿女御入内
(四)源氏の明石姫君を東宮に奉るべき支度專ちなれば
(五)其中へ娘を差上げても却て惡からんと
(六)それは不都合
(七)折角澤山ある勝れた姫君達が宮仕に出されねば
(八)明石姫君の
(九)明石姫君の入内すぎてからにせんと引きしろひ居たる他の人々が
㊄ 明石姫君の入内につきて道具の準備、人々に誂へて冊子に文字を書かしむ、文字の評論
(一〇)明石姫君
(一一)源の
(一二)東宮

源「めづらしと故郷人（一）も待ちぞ見む（二）はなのにしきを著てかへるきみ

（三）又なきことゝ思さるらむ」とあれば、いといたう（四）辛がりたまふ。次々の君達にも、事々しからぬさまに、細長小袿などかづけさせ給ふ。

かくて西（五）のおとゞに、戌の時にわたり給ふ。宮（六）のおはします西の放出をしつらひて、御髪上（七）の内侍なども、やがてこなたに参れり。上（八）も、この序に、中宮に御對面あり。御方々の女房、（九）おしあはせたる、數しらず見えたり。子の時に御裳奉る。大殿油ほのかなれど、御けはひ（一〇）いとめでたしと、宮は見奉れ給ふ。大臣「おぼし（一一）棄つまじきを頼にて、なめげなる（一二）姿を、進み御覽ぜられ侍るなり。後（一三）の世のためしにやと、心せばく忍び思ひ給ふる」など聞え給ふ。宮、「いかなる（一四）べき事とも思う給へわき侍らざりつるを、かう事々しくとりなさせ給ふになむ、なか（一五）〳〵心おかれぬべく」と、宣ひ消つ程の御けはひ、いと若く愛敬づきたるに、大臣も、思（一六）すさまにをかしき御けはひども、さしつどひ給へるを、あはひめでたく思さる。

（一）宿に待ち居らるゝ人も
（二）自分の贈物を戲れて花の錦と誇りかにいへる也
（三）此樣な美しき衣を著て歸るははじめてなるべし
（四）螢が
㊂　明石姫君裳著の式
（五）秋好の御方へ源が
（六）秋好
（七）明石姫君の理髮を司る内侍
（八）紫上
（九）一所によせたる
（一〇）姫君の容貌の美しきを秋好が讃めたり
（一一）秋好にいふ也
（一二）姫君の失禮な姿を此方から求めて御目にかけたる也
（一三）中宮に腰結の役を務めて頂く杯は珍しき事にて、後世の例にもなるべきかと思へば小さき胸に有難くてならぬ
（一四）何の氣もなくした事なるに
（一五）却つて恐縮する
（一六）思ひ通りの美人達が斯く一門に集れるを

（一）千代も經ぬべし」ときこえ給へば、

源 色も香もうつるばかりにこの春は花さく宿をかれずもあらなむ（二）

頭中將にたまへば、（三）とりて宰相中將にさす。

柏 うぐひすのねぐらの枝もなびくまでなほふきとほせ夜はの笛竹（四）

宰相中將、

夕「心ありて（五）風のよぐめる花の木にとりあへぬまで吹きやよるべき

情なく」と皆うち笑ひ給ふ。辨少將、

（六）かすみだに月と花とをへだてずばねぐらの鳥もほころびなまし

まことに明けがたになりてぞ、宮かへり給ふ。御贈物に、（七）みづからの御料の御直衣の御よそひ一領、（八）手ふれ給はぬ薫物二壺そへて、御車に奉らせたまふ。宮、

螢（九）花の香をえならぬ袖にうつしてもことあやまりと妹やとがめむ

とあれば、源「（一〇）いと屈したりや」と笑ひ給ふ。（一一）御車かくるほどに追ひて、

（一）いつ迄か野邊に心のあくがれん花し散らずば千代も經ぬべし」
（二）我宿を絶えず訪問し給へ
（三）盃を
（四）夕霧の笛をはめたる也
（五）風さへよけて吹く花のあたりにてむやみに吹き寄るべきに非ず
（六）霞さへなくば鳥は夜のあけたりと思ひて囀り出すならん
（七）源の著料なり
（八）まだ試みもせぬ
（九）このよき香をこのよき衣の袖に焚きしめたらば如何なる不埒をしたるぞと女どもが穿鑿すべし
（一〇）悋氣を恐れてひどくしよげるではないか
（一一）牛を車につける時に

(一)六條院中の藏人の詰所也
(二)試演
(三)裝置
(四)柏木
(五)參上の由を畏りたるのみにて其儘退出するを
(六)源氏
(七)夕霧
(八)催馬樂の曲名
(九)助聲
(一〇)酒盃
(一一)只さへこのよき匂する花のあたりなるに、このよき歌をきゝてはいよいよたまらぬ

出でぬれば、大御酒など參り給ひて、昔の物語などし給ふ。霞める月の影こゝろにくきを、雨の名殘の風少し吹きて、花の香なつかしきに、大殿のあたりいひしらず匂滿ちて、人の御心地いと艶なり。

(一)藏人所のかたにも、明日の御遊の(二)うちならしに、御琴どもの(三)裝束などして、殿上人など數多參りて、をかしき笛の音ども聞ゆ。內のおほいとのの(四)頭中將、辨少將なども、(五)見參ばかりにてまかづるを、とどめさせ給ひて、御琴ども召す。宮の御前に琵琶、(六)大臣に箏の御琴參りて、頭中將和琴たまはりて、花やかに搔きたてたる程、いとおもしろく聞ゆ。(七)宰相中將橫笛ふき給ふ。折にあひたる調子、雲井にとほるばかり吹きたてたり。辨少將拍子とりて、(八)「梅枝」いだしたる程いとをかし。童にて、塞韻の折、「高砂」うたひし君なり。宮も大臣も(九)さしいらへし給ひて、事々しからぬものから、をかしき夜の御あそびなり。(一〇)御土器まゐるに、宮、

聲(一一)「うぐひすの聲にやいとどあくがれむ心しめつるはなのあたりに

(一)何れが特に優れたりともなき中に
(二)槿
(三)合せ香の名
(四)おちつきたる
(五)合せ香の名
(六)源の自製のは
(七)紫の造れる分は
(八)合せ香の名
(九)鋭きなるべし
(一〇)時恰も春なれば此頃の風に薫らせんには是が第一
(一一)花散里
(一二)人がましく雜るでもないと
(一三)合せ香の名
(一四)明石上
(一五)時節々々で香の法は定まつて居るので、同じ法のを造りて人に負くるのもつまらぬと思ひて
(一六)源公忠
(一七)合せ香の名
(一八)どれも取得のある樣に螢が批判したるを

へる、深さ淺さをかぎあはせ給へるに　いと興ある事おほかり。更にいづれとも(一)なき中に、齋院(二)の御黑方(三)、さいへども、心にくゝしづやか(四)なる匂ことなり。侍從(五)は、大臣(六)の御は、勝れてなまめかしうなつかしき香なりと定め給ふ。對(七)の上の御は、三種ある中に、梅花(八)はなやかに今めかしう、少しはやき(九)心しらひを添へて、めづらしき香加はれり。螢「この頃の風(一〇)にたぐへむには、更にこれにまさる匂あらじ、とめで給ふ。夏の御方(一一)には、人々の香、心々に挑み給ふなる中に、數々にも(一二)立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消え給へる御心にて、たゞ荷葉(一三)を一種合せ給へり。樣かはりしめやかなる香して、哀になつかし。冬の御方(一四)にも、時々(一五)によれる匂のさだまれるに、消たれむもあいなしと思して、薰衣香の法の勝れたるは、前の朱雀院のをうつさせ給ひて、公忠(一六)の朝臣のことに選び仕うまつれりし、百步の方(一七)なども思ひえて、世に似ずなまめかしきを取り集めたる、心おきて勝れたりと、いづ(一八)れをも無德ならず定め給ふを、源「心ぎたなき判者なゝめり」ときらひ給ふ。月さし

しき程に馴れ聞え通へど、恥かしき所の深うおはする(一)宮なれば、(二)何事も尋常にて見せ奉らむ、辱くてなむ」など、聞え給ふ。螢「(三)あえものも、げに必ず思しよるべき事なりけり」と、(四)ことわり申したまふ。このついでに、御方々の(五)あはせ給ふども、おの〲(六)御使して、「この夕暮のしめりに試みむ」と聞え給へれば、様々をかしうなして奉れ給へり。源「(七)これわかせ給へ。(八)誰にか見せむ」と聞え給ひて、御火取ども召して試みさせ給ふ。螢「(九)知る人にもあらずや」と卑下し給へど、(一〇)言ひ知らぬ匂どもの進み後れたるが、一種などが、いさゝかの咎をわき給うて、あながちに劣優の差別をおき給ふ。かのわが御二種のは今ぞ取う出させ給ふ。(一一)右近の陣の御溝水の邊になずらへて、西の渡殿の下より出づる、汀近ううづませ給へるを、惟光の宰相の子の兵衛尉、ほりて參れり。宰相中將取りて傳へ參らせ給ふ。宮、「いと苦しき判者にもあたりて侍るかな。いとけぶたしや」となやみ給ふ。(一二)おなじ法こそは、いづくにも散りつゝ廣ごるべかめるを、人々の心々に合せ給

(一)秋好が
(二)萬事の用意が餘り平凡では氣の毒と思ひて色色支度に氣をもみたり
(三)中宮になられたる高運にあやかる點からいひても秋好に頼まんと考へられたるは至當也
(四)批評する
(五)造りたる合せ香
(六)源から使をやりて
(七)此等の香の優劣を判じ給へ
(八)君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」
(九)我は知る人ぞ知ると思はるゝ共知る人では無し
(一〇)種々の材料の中多過ぎ又は少過ぎるのが一種位ある僅の缺點を辨へて
(一一)香を土中に埋むるは香をよくせん爲也、御溝水の邊に埋むるは仁明天皇の御時の例也とぞ
(一二)合せ香の處法



（一）散りたる花の如き私どもの合せたる薫物はどうせよくはなけれど、姫君が用ひられたらば深く薫ることもあるべし
（二）かすかに書きたる歌を
（三）夕霧が權よりの使を引留めて
（四）源の返事
（五）紅梅がさねの薄葉にて
（六）中の文句が嘘と想像さるゝ
（七）どの樣な祕密があるのか
（八）祕密のある樣に思はるゝは迷惑
（九）人に悟られては惡いとは思ひつゝも其方に對する執心はいよ〳〵增る、中々其方を散りたる花抔とは思はぬ、權に對する返歌也
（一〇）姫君の爲にかく薫物などにて大騷ぎするは餘り事好みの樣なれど
（一一）一人娘の事であれば斯くあるが當然と思ひてする事也
（一二）姫君も器量もよくなき故他人を賴むは氣恥かしければ、秋好に下つて貰つて腰結の役をしてもらはんと思ふ

に、

權（一）花の香は散りにし枝にとまらねどうつらむ袖にあさくしまめや

（二）ほのかなるを御覽じつけて、宮はことごとしう誦じ給ふ。（三）宰相中將、御使尋ねとゞめさせ給ひて、いたう醉はし給ふ。紅梅襲の唐の細長そへたる、女の裝束かづけ給ふ。（四）御かへりもその色の紙にて、御前の花を折らせてつけさせ給ふ。宮、螢「（六）うちの事思ひやらるゝ（五）御文かな。（七）何事のかくろへあるにか、深くかくし給ふ」と怨みて、いとゆかしと思したり。源「何事かは侍らむ。（八）くまぐ\しく思したることそ苦しけれ」とて、御硯のついでに、

源（九）はなのえにいとゞ心をしむるかな人のとがめむ香をばつゝめど

とやありつらむ。源「（一〇）まめやかにはすきぐ\しき樣なれど、（一一）又もなかめる人のうへにて、これこそは理のいとなみなゝめれど、思う給へなしてなむ。（一二）いとみにくければ、疎き人にはかたはら痛さに、中宮まかでさせ奉りてと思ひ給ふる。親

目なれぬ樣に、今めかしう、樣かへさせ給へるに、所々(一)の心を盡し給へらむ匂どもの、勝れたらむどもを、かぎあはせて入れむと思すなりけり。

二月の十日、雨少しふりて、御前近き紅梅さかりに、色も香も似るものなき程に、兵部卿(二)の宮わたり給へり。御いそぎ(三)の今日明日になりにけること、とぶらひ聞え給ふ。昔より取り(四)わきたる御中なれば、隔なく、その事かの事となく聞え合せ給ひて、花をめでつゝおはするほどに、前齋院(五)よりとて、散りすぎたる梅の枝につけたる、御文もて參れり。宮、聞召す事もあれば、螢「如何なる御消息のすゝみ參(七)れるにか」とて、をかしと思し(六)たれば、ほゝ笑みて、源「いと馴れ〳〵(八)しき事聞えつけたりしを、まめやかに急ぎ物し給へるなめり」とて、御文は引きかくし給ひつ。沈(九)の箱に、瑠璃の坏二つすゑて、大に(一〇)まろかしつゝ入れ給へり。心葉(一一)、紺瑠璃(一二)には五葉の枝、白き(一三)には梅をえりて(一四)、同じくひき結びたる絲のさまも、なよびかになまめかしうぞし給へる。螢「艶なるもののさまかな」とて、御目とめ給へる

(一)合せ香の調製方を源に賴まれたる人々が
㊁螢兵部卿宮、六條院を訪ひて多くの合せ香を批評す、終夜の音樂の遊
(二)螢兵部卿が源方へ
(三)明石姫君裳著の備
(四)特別の中よしなれば
(五)槿齋院
(六)槿には源が懸想せりと兼て聞込みし事もある故
(七)槿の方から進んでよこされしか
(八)馴れ〳〵しき用を賴みたるに、薰物調製の事
(九)よこしたる薰物の樣也
(一〇)香を大きく丸めて
(一一)飾りの作り枝
(一二)紺瑠璃色の坏には
(一三)白き坏には
(一四)擇びてつけて

どの端どもに、故院の御世の初つかた、高麗人の奉れりける、綾緋金錦どもなど、今の世のものに似ず、なほさまぐ〱御覽じあてつゝぞさせ給ひて、(一)この度の綾羅などは人々に賜はす。香どもは、(二)昔今の取りならべさせ給ひて、御かたがたに配り奉らせ給ふ。(三)二種づつ合せさせ給へと、聞えさせ給へり。おくり物、上達部の祿など、世になきさまに、(四)内にも外にも繁くいとなみ給ふに添へて、かたがたにえり整へて、(五)鐵臼の音耳かしがましき頃なり。大臣は寢殿に離れおはしまして、(六)承和の御いましめの二つの法を、いかでか御耳には傳へ給ひけむ、心にしめて合せ給ふ。(七)上は、東の中の(八)放出に、(九)御しつらひ殊に深うしなさせ給ひて、(一〇)八條の式部卿の御法を傳へて、互にいどみ合せ給ふほど、いみじう祕したまへば、匂の深さ淺さも、勝負のさだめあるべしと、(一一)大臣宣ふ。人の御親けなき御あらそひ心なり。いづかたにも、御前に侍ふ人あまたならず。(一二)御調度どもも、そこらの淸らを盡したまへる中にも、かうごの御箱ども(一三)の樣、壺の姿、火取の心ばへも、

(一)此今大貳より進上の品は
(二)昔のと今のと
(三)二種の合せ香をつくりくれよと
(四)六條院にても其他の邸にても
(五)合せ香の材料を細に舂く音
(六)仁明天皇御祕傳の香の調合法をどうして傳授し置かれしものか
(七)紫上
(八)別棟にして造れる殿
(九)奥深く立籠りて薫物を合するは其法を祕する故也
(一〇)仁明天皇の皇子本康親王、薫物調合の名人
(一一)源氏
(一二)親らしからぬ
(一三)香の壺を入るゝ筥

梅枝

梗槩

㊀明石姫君裳著及入内の用意に、源氏人々に賴みて薫物を調製す。㊁螢兵部卿宮、六條院を訪ひて多くの合せ香を批評す。終夜の音樂の遊。㊂明石姫君裳著の式。㊃東宮元服、麗景殿女御入内。㊄明石姫君の入内につきて道具の準備。人々に誂へて册子に文字を書かしむ。㊅螢兵部卿宮、六條院を訪ひて人々の書を評す。㊆頭中將、夕霧と雲井雁との關係につきて煩悶す。源氏夕霧を訓戒す。

御(一)裳著のことおぼし急ぐ御心(二)おきて、世の常ならず。東宮もおなじ二月に、御かうぶり(三)の事あるべければ、やがて御參り(四)もうち續くべきにや。正月の晦日なれば、公私のどやかなる頃ほひに、薫物合せ(五)給ふ。大貳(六)の奉れる香ども御覽ずるに、なほ古のには劣りてやあらむと思して、二條院の御倉あけさせ給ひて、唐(七)の物ども取り渡させ給ひて、御覽じ比ぶるに、源「錦綾なども、なほ古きものこそ懷かしうこまやかにはありけれ」とて、近き(八)御しつらひのものの覆、敷物、褥な

㊀ 明石姫君裳著及入内の用意に、源氏人々に賴みて薫物を調製す

(一)明石姫の

(二)源の

(三)元服

(四)明石姫君が女御として東宮へ參る事

(五)裳著の時に用ふべき香を源が造る

(六)太宰大貳が唐船の博多に持來れる品を奉れる也

(七)舶來の香を手元に取寄せ

(八)近々あるべき姫君參内の用意の道具の覆

（一）假令雲井雁が常にならずして途方にくれても我は嫌な人にかゝり合ふは嫌なり
（二）近江君をはしたなしと思へり

夕よるべなみ風のさわがす船人もおもはぬかたにいそづたひせず（一）

とて、（二）はしたなかゝめりとや。

（一）夕霧
（二）つき切りて居たれば
（三）人々がうるさがりて
（四）むやみな事を言出さねばよいがと人々互に膝などつき合ひて見居るに
（五）夕霧の様な珍らしき眞面目男を
（六）人々の褒むるはこの人ぢや〳〵
（七）雲井雁の縁がまだどうきまるか分らぬならば、寧ろ自分に乘りかへてくれよ
（八）「堀江こぐ棚無し小舟こぎかへり同じ人にや戀ひわたりなん」
（九）夕霧の心、弘徽殿方にはかゝる頓狂な人は無き筈なるに
（一〇）かねて噂の近江君であつたわいと

殿上人あまた、覺ことなるかぎり、この女御の御方に參りて、物の音などしらべ、なつかしきほどの拍子うち加へて遊ぶ、秋の夕のたゞならぬに、宰相中將（一）も寄りおはして、例ならず亂れて物など宣ふを、人々珍しがりて、人々「なほ人より殊にも」とめづるに、この近江の君、人々の中を押分けて出で居給ふ。人々「あなうたてや。こは何ぞ」と引入るれば、いとさがなげに睨みて、はり居たれば（二）、煩はしく（三）て、「あうなき事や宣ひ出でむ」（四）とつきかはすに、この世に目馴れぬまめ人をしも（五）、近江「これぞなく〳〵」（六）とめでて、さゞめきさわぐ聲いとしるし。人々いと苦しと思ふに、聲いと爽にて、

近江「おきつ船よるべ浪路にたゞよはば棹さしよらむとまりをしへよ（七）

棚無し小船（八）漕ぎかへり、同じ人をや。あなわるや」といふを、いと怪しう、この御（九）方には、かう用意なきこと聞えぬものを、と思ひますに、この聞く人なりけり（一〇）と、をかしうて、

にめでたしと、もてかしづき給ふ事限なし。その程のありさまは、言はずとも思ひやりつべき事ぞかし。父大臣も、おのづから思ふやうなる御宿世と思したり。わざとかしづき給ふ君達にも、御容貌などは劣り給はず。(一)(二)頭中將も、このかんの君をいとなつかしき兄弟にて、むつび聞え給ふものから、(三)さすがなる氣色うちまぜつゝ、(四)宮仕にかひありて物し給はましものをと、この若君の美しさにつけても、柏「今まで御子たちのおはせぬ(五)御歎を見奉るに、(六)いかに面目あらまし」と、あまりごとをぞ思ひて宣ふ。(七)公事はあるべきさまに知り給ひなどしつゝ、(八)參り給ふことぞ、やがて斯くてやみぬべかめる。(九)さてもありぬべき事なりかし。

まことや、かの(一〇)内の大殿の御女の、尚侍のぞみし君も、さる者のくせなれば、色めかしうさまよふ心さへ添ひて、(一一)もて煩ひ給ふ。(一二)女御も、(一三)遂におは〱しき事こその君ぞひき出でむと、ともすれば御胸つぶし給へど、(一四)大臣の、「今はな交らひそ」と、制し宣ふをだに聞き入れず、交らひ出でてものし給ふ。如何なる折にかありけむ、

(一)玉鬘の器量は特に頭中の大事にする弘徽殿女御などにも劣らず
(二)柏木
(三)前に懸想したる事ある故自ら其名殘のあるなるべし
(四)同じ子を持つなら帝に宮仕して持つたらよかりしならんにと
(五)冷泉の
(六)玉鬘が帝の御子を生みたるならば面目如何ばかりならんと
(七)玉鬘が尚侍の職掌に關する事務は取扱ひて
(八)參内だけは此儘せぬ事になりそうな事也
(九)それは其でもよさそうな事
十 近江君夕霧に懸想して歌を詠みかく
(一〇)頭中の娘近江君
(一一)父大臣が
(一二)弘徽殿女御
(一三)仕掛には近江君が不都合を仕出すならんと
(一四)近江君は父が是から人中へ出ぬなと叱るもかまはず

れ。珍しう」と笑ひ給ふ。心の中には、(一)かく領じたるを、いと憎しと思す。

(二)かのもとの北の方は、月日隔たるまゝに、あさましと物を思ひ沈み、いよ〱(三)ほけ痴れて物し給ふ。大將殿は、(四)大かたのとぶらひ、何事をも委しう思しおきて、君達をばかはらず思ひかしづき給へば、(五)えしもかけ離れ給はず、まめやかなる方のたのみは、同じごとにてなむ物し給ひける。(六)姫君をぞ、堪へがたく戀ひ聞え給へど、(七)絶えて見せ奉り給はず。(八)若い御心のうちに、この父君を、誰も〱ゆるしなう恨み聞えて、いよ〱隔て給ふ事のみまされば、心ぼそく悲しきに、(九)男君達は常に參り馴れつゝ、(一〇)かんの君の御有樣などをも、自ら事にふれて打語りて、君達「まろらをもらうたく(一一)懷かしうなむし給ふ。旦暮をかしき事を好みて、物し給ふ」などいふに、(一二)羨しう、(一三)かやうにても安らかにふるまふ身ならざりけむを歎き給ふ。怪しう、男女につけつゝ、人に物を思はするかんの君にぞおはしける。

その年の十一月に、いとをかしき兒をさへ(一四)抱き出で給へれば、大將も、思ふやう

(一)玉鬘を髯黒が我物顔なる仕方
(二)髯黒の舊の北の方
(三)ぼんやりして
(四)一通りの世話は何によらず手を屆かせて子どもを相變らず大事にする故
(五)北方の方でも丸で音信不通にも出來ず、經濟向の世話には相變らずなつて居る
(六)眞木柱を髯黒が
(七)北方が逢はせず
(八)眞木柱の、此句は句を隔てゝ「心細く悲しきに」へかゝる
(九)男の子どもの方は常に父髯黒方へ出入りて
(一〇)玉鬘
(一一)玉鬘が
(一二)眞木柱が
(一三)玉鬘の樣に
㊈ 玉鬘男子を生む
(一四)玉鬘が生みたれば

らむを、口惜しく思ひ給ふる。

など、親めき書き給ひて、

源「おなじ(一)巣にかへりしかひの見えぬかないかなる人か手ににぎるらむ

(二)などかさしもなど、心やましうなむ。

などあるを、大将も見給ひて、うち笑ひて、髭黒「女は、まことの親の御あたりにも、容易くうち渡り見え奉り給はむこと、序なくてあるべき事にあらず。まして、何ぞこの大臣の、をり〳〵(三)思ひはなたず怨言はし給ふ」と、つぶやくも憎しと聞き(四)給ふ。玉「御かへり、こゝには(五)え聞えじ」と、書きにくゝ思いたれば、髭黒「まろ聞えむ」と代るもかたはらいたしや。

髭黒「巣(六)がくれて数にもあらぬかりの子をいづ方にかはとりかへすべき

(七)よろしからぬ御氣色に驚きてすきぐ〳〵しや。

と聞え給へり。源「この大将の、かゝるはかなし言いひたるも、まだこそ聞かざりつ

(一)親鳥が卵からかへしたる雛が一つ見えぬは誰の手に取られたのであらう

(二)そう其方を取籠めてばかり置かずともよさそうなものと

(三)心にかけて

(四)玉鬘が

(五)我には出來ぬ

(六)玉鬘は素より巣隱れて數にもあらぬ子即ち源の子といふ數には入らぬ身故、隱し置くといふ譯にはあらねど其方へ參らせもせぬ也

(七)源が私(髭黒)を怒つて居らるゝ樣子なるに驚きて斯く辯解がましき事を申上ぐるも結句すきがましき擧動なり

かた〴〵につけて思ひしみ給へる御事ぞ、忘られざりける。

三月になりて、六條殿の御前の、藤山吹のおもしろき夕ばえを(一)見給ふにつけても、まづ見るかひありて居給へりし(二)御様のみ思し出でらるれば、(三)春の御前をうちすてて、(四)こなたに渡りて御覧ず。呉竹のませに、わざとなう咲きかゝりたる匂、いとおもしろし。源「(五)色に衣を」など宣ひて、

源「(六)おもはずに堰手のなか道へだつともいはでぞこふるやまぶきの花

(七)顔に見えつ」など宣ふも、聞く人なし。かく流石にもてはなれたる(八)事は、この度ぞ思しける。げに怪しき御心のすさびなりや。(九)かりの子のいと多かゝなるを御覧じて、柑子橘などやうに紛らはして、わざとならず奉り(一〇)給ふ。御文は、あまり人もぞ目立つるなど思して、すくよかにて、

源「覺束なき月日も重りぬるを、思はずなる御もてなしなりと恨み聞ゆるも、御(一一)心ひとつにのみはあるまじう聞き侍れば、ことなる序ならでは、對面の難か

(一)源が
(二)玉鬘の
(三)紫の方
(四)玉鬘の居たりし西の對
(五)「思ふとも戀ふとも言はじ山吹の色に衣を染めてこそ著め」
(六)不慮に隔りて戀しとも口に出さずして心にのみ戀ひ居る
(七)「夕されば野べに鳴くてふ顔鳥の顔に見えつゝ忘られなくに」
(八)玉鬘をあきらめた樣な事は
(九)此頃の雁の子といへるは鴨の卵なりといふ、邸内に飼へる鳥の生みたるなるべし
(一〇)玉鬘へ
(一一)大分無沙汰をなさるが聞えぬ御仕方とは思へど、其も髭黒に妨げらるゝ故でもある樣に聞き居れば

(一)源が
(二)涙の溢るゝ樣に、涙を軒の雫の緣にて玉水といへる也
(三)朧月夜
(四)類なく
(五)源の心、色好する人は心がらにて心配が絕えぬものぢや
(六)煩悶をさましかねて
(七)源自身が
(八)玉鬘の
(九)和琴
(一〇)風俗歌「をしたかべ鴨さへ來居る原の池の玉藻は眞根な刈りそや生ひもつぐがねや〳〵ま根な刈りそや」
(一一)玉鬘の
(一二)「立ちて思ひ居てもぞ思ふ紅の赤裳垂れ引きいにし姿を」
(一三)冷泉の
(一四)玉鬘が
(一五)文の贈答など
(一六)源の比類なかりし心むけを

と悲しく書きなし給ひけり。(一)引き廣げて、(二)玉水の溢るゝやうに思さるゝを、人も見ばうたてあるべしと、つれなくもてなし給へど、胸に滿つ心地して、かの昔の(三)かんの君を、朱雀院の后の、切に取籠め給ひし折など思し出づれど、さしあたりたる事なればにや、これは(四)世づかずぞ哀なりける。(五)好いたる人は、心から安かるまじきわざなりけり、今は何につけてか心をも亂らまし、似げなき戀のつまなりやと、(六)さまし侘び給ひて、(七)御琴かき鳴して、(八)なつかしう彈きならし給ひし爪音、思ひ出でられ給ふ。(九)あづまの調をすがかきて、(一〇)「玉藻はな刈りそ」と、謠ひすさび給ふも、戀しき人に見せたらば、哀過すまじき御樣なり。內裏にも、ほのかに御覽ぜし(一一)御容貌有樣を、御心にかけたまひて、(一二)「赤裳たれ引きいにしすがたを」と、憎げなる古言なれど、御言種になりてなむ、ながめさせ給ひける。(一三)御文は忍び〳〵にありけり。身を憂きものに思ひしみ給ひて、かやうの(一五)すさび事をも、あいなく思しければ、(一四)心とけたる御答も聞え給はず。猶(一六)かのありがたかりし御心おきてを、

源　かきたれてのどけきころの春雨に(一)ふるさと人をいかにしのぶや

徒然にそへても、恨めしう思ひ出でらるゝこと多う侍るを、いかでか聞ゆべからむ。

などあり。人間に忍びて(二)見せ奉れば、うち泣きて、我が心にも、程經るまゝに思ひ出でられ給ふ(三)御樣を、(四)まほに、「戀しや、いかで見たてまつらむ」などはえ宣はぬ親にて、げにいかでかは對面もあらむとあはれなり。時々(五)むづかしかりし御氣色を、心づきなう思ひ聞えしなどは、(六)この人にも知らせ給はぬことなれば、(七)心ひとつに思し續くれど、右近はほの氣色見けり。(八)如何なりける事ならむとは、今に心得難く思ひける。御かへり、玉「聞ゆるも恥かしけれど、おぼつかなくやは」とて書き給ふ。

玉　ながめする軒のしづくに袖ぬれて(九)うたかた人をしのばざらめや

(一〇)程ふる頃は、げにことなる徒然もまさり侍りけり。あなかしこ。

(一)我を思ひ出すや如何
(二)右近が玉鬘に
(三)源の
(四)押切つて逢ひたい見たいとは言ふ事の出來ぬ實ならぬ親の事にて
(五)源の懸想
(六)右近にも
(七)玉鬘が
(八)玉鬘と源との關係は實際どうあるのかしらと
(九)君を戀ひ思はぬといふ譯はない
(一〇)久しく御目にかゝらねば

の宮にも、さこそ猛う宣ひしか、いみじう思し佗ぶれど、絶えて音づれず、思ふ事(一)かなひぬる御かしづきに、日暮いとなみて過し給ふ。

二月にもなりぬ。大殿(二)は、さてもつれなきわざ(三)なりや。いと斯う(四)きは〴〵しうとしも思はで、たゆめられたる妬さを、人わろく、すべて御心にかゝらぬ折なく、戀(五)しう思ひ出でられ給ふ。宿世(六)などいふものおろかならぬことなれど、我があまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかしと、起臥面影にぞ見えたまふ。大將の、をかしやかにわらゝかなる氣もなき人に添ひ居たらむに、はかなき戲事(七)もつゝましう、あいなくおぼされて、念じ給ふを、雨いたう降りて、いとのどやかなる頃、かやうのつれ〴〵(八)も紛らはし所に渡り給ひて、語らひ給ひし樣などの、いみじう戀しければ、御文奉りたまふ。右近がもとに忍びて遣す(九)も、かつ(一〇)は思はむことをおぼすに、何事もえつゞけ給はで、たゞ(一一)思はせたる事どもぞありける。

(一)式部卿宮も強い事は言つたものゝ甚だ弱り居れども髭黑が音信もせず

㊇源氏、玉鬘を慕ふ

(二)源氏

(三)髭黑の仕方をいふ

(四)斯迄きつぱりと引取つて仕舞はうとは思はずして

(五)玉鬘を

(六)源の心、前世の契といふ事もあれど自分が餘りぐず〳〵して居し爲に心から此物思はするのぢやと

(七)髭黑の如き面白味も愛想もなき男に添ひ居る玉鬘へ冗談めきたる手紙をやるのも遠慮に思ひて

(八)退屈のさまし所として玉鬘の許へ行きて

(九)玉鬘への文を

(一〇)右近の手前も遠慮なれば書きたき事も書かず

(一一)あらはに書かずに相手にそれと悟らせる

（一）我は他の女御達に比ぶべき色香はなき身なれども音信を賜はれかし
（二）冷泉が歸り給へり
（三）玉鬘を髭黒の自邸に引取らん了簡なりしが、前から其通りに言ひては故障あるべければ
（四）ふとした引風
（五）他家にて養生するは氣遣なれば自邸へ歸るべし
（六）玉鬘を自邸へ
（七）頭中
（八）其位の事を
（九）御勝手次第
（一〇）もとより我が差圖はてきぬ事なれば
（一一）其を言ふ筈はない
（一二）「須磨の蜑の鹽やく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」の意
（一三）髭黒は盜んで來た女の樣に思つて
（一四）冷泉が玉鬘の所へ
（一五）髭黒が
（一六）玉鬘が
（一七）卑しき

玉（一）かばかりは風にもつてよ花の枝に立ちならぶべき匂なくとも

流石にかけ離れぬけはひを、哀とおぼしつゝ、顧みがちにて（二）渡らせ給ひぬ。やがて今宵（三）かの殿にと思しまうけたるを、かねては許されあるまじきにより、漏し聞え給はで、髭黒「俄にいと（四）みだり風の惱ましきを、心やすき所にうち休み侍らむほど、（五）餘所々々にてはいと覺束なく侍らむを」と、おいらかに申しない給ひて、やがて（六）渡し奉り給ふ。父大臣、俄なるを、儀式なき樣にやとおぼせど、あながちに（八）さばかりの事を言ひ妨げむも（七）人の心おくべし、とおぼせば、頭中「（九）ともかくも。（一〇）もとより進退ならぬ人の御事なれば」とぞ、聞え給ひける。六條殿ぞ、いとゆくりなく本意なしとおぼせど、（一一）などか然はあらむ。女も「（一二）鹽やく煙」のなびきける方を、あさましと思せど、（一三）盜みもて行きたらましと思しなずらへて、いと嬉しく心地おちるぬ。（一四）かの入り居させ給へりし事を、いみじう（一五）怨じ聞えさせ給ふも、（一六）心づきなく、（一七）なほ〳〵しき心地して、世には心解けぬ御もてなし、いよ〳〵氣色あし。か

より先に進みにし志の人におくれて、氣色とり隨ふよ。(一)昔の某がためしも、引き出でつべき心地なむする」とて、誠にいと口惜しと思召したり。(二)聞しめしょにも、こよなき近勝を、初よりさる御心なからむにてだにも、御覽じ過すまじきを、まいていと妬う飽かず思さるれど、ひたぶるに(三)淺き方に思ひ疎まれじとて、いみじう心深きさまに宣ひ契りてなつけ給ふも、かたじけなう、(四)我はわれと思ふものをと(五)おぼす。御輦車よせて、此方彼方の御かしづき人ども心もとながり、大將もいと物むづかしう立添ひさわぎ給ふまで、(六)えおはしましはなれず。冷泉「かういと嚴しき近きまもりこそむづかしけれ」と憎ませ給ふ。

冷泉(七)九重にかすみへだてば梅の花たゞかばかりもにほひ來じとや

(八)異なる事なきことなれども、御有樣けはひを見奉るほどは、をかしくもありけむ。冷泉「(九)野をなつかしみ明いつべき夜を、惜むべかゝめる(一〇)人も、身をつみて心苦しうなむ。いかでか聞ゆべき」と思しなやむも、いとかたじけなしと見奉る。

(一)平貞文、女を時平にとられし時の歌、「昔せしわがかね言の悲しきはいかに契りし名殘なるらん」
(二)側で見れば昔よりも抜群な玉鬘の器量では從來懸想心なき身でも只は置かれぬに
(三)玉鬘に嫌はれまいと冷泉が
(四)前の貞文に對する女の返歌、「現にて誰契りけん定めなき夢路に迷ふ我は我かは」
(五)玉鬘が
(六)冷泉が附纏ひて
(七)今宮中を出離れたら此度位の參内もせぬ積か、かばかり―香許、斯許
(八)よい歌でもないが
(九)此儘玉鬘に離るゝに忍びぬ夜なるに、「春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寢にける」
(一〇)髭黒



心にや。

玉「(一)いかならむ色とも知らぬむらさきを心してこそ人はそめけれ

(二)今よりなむ思う給へ知るべき」と聞え給へば、うち笑みて、冷泉「その今よりそめ給はむこそかひなかゝべいことなれ。(三)憂ふべき人あらば、理聞かまほしくなむ」と、いたう恨みさせ給ふ御氣色の、まめやかに煩はしければ、いとうたてもあるかなと(四)おぼして、(五)をかしき樣をも見え奉らじ、むづかしき世の癖なりけりと思ふに、まめだちて侍ひ給へば、(六)え思すさまなる亂れごともうち出でさせ給はで、やうやうこそは目馴れめと思しけり。(七)大將はかく渡らせ給へるを聞き給ひて、いとゞ靜心なければ、(八)急ぎ惑はしたまふ。(九)自らも、似げなきことも出で來ぬべき身なりけりと心憂きに、えのどめ給はず、(一〇)罷出させ給ふべきさま、つき〲しきことつけども作り出でて、父大臣など、かしこくたばかり給ひてなむ、御暇ゆるされたまひける。冷泉「(一一)さらば物懲して、また出したてぬ人もぞある。いとこそからけれ。(一二)人

(一)我が昇位は左樣なる御志よりの事なりしを我は心づかざりし
(二)今後は其積にて仕へ奉るべし
(三)聞いて貰ふ人あらば其人に語りて、何と判斷するか聞きて見たし
(四)玉鬘が
(五)今後は帝に打解けまじ、冷泉も源も直に召を出したがるとは嫌な世の習ぢやわい
(六)冷泉が
(七)髯黑は冷泉の玉鬘を訪はるゝを聞きて
(八)玉鬘に退出を迫る
(九)玉鬘も長く宮中に居たら飛でもない間違が出來そうなるを心配して猶豫も出來ず
(一〇)退出するに相當な理由をつけて頭中などが甘く計らひて
(一一)然らば退出せよ、留めだてしたら髯黑が懲々して二度と參內させまい
(一二)第一に玉鬘に懸想したる身でありながら、先をこされて髯黑に氣象をする馬鹿々々しさよ

さへづる聲も耳とゞめられてなむ。

とあり。いとほしう(一)おもて赤みて、(二)聞えむ方なく思ひ居給へるに、(三)上わたらせ給ふ。月のあかきに、(四)御容貌はいふよしなく淸らにて、たゞかの(五)大臣の御けはひに違ふ所なくおはします。(六)かゝる人は又もおはしましけり、と見奉り給ふ。(七)かの御心ばへは、淺からぬも、うたて物思くはゝりしを、これはなどかはさしも覺えさせ給はむ。(八)いとなつかしげに、(九)思ひし事の違ひたる恨を宣はするに、面おかむ方なくぞ覺え給ふや。(一〇)顏をもてかくして、御いらへも聞え給はねば、冷泉「怪しう覺束なきわざかな。(一一)よろこびなども、思ひ知り給ふらむと思ふ事あるを、聞き入れ給はぬ樣にのみあるは、(一二)かゝる御癖なりけり」と宣はせて、

冷泉「(一三)などてかくはひあひがたき紫をこゝろにふかく思ひそめけむ

(一四)濃くなりはつまじきにや」と仰せらるゝさま、いと若く淸らに恥かしきを、(一五)違ひ給へる所やはあると、(一六)思ひ慰めて聞え給ふ。宮仕の勞もなくて今年加階したまへる

(一)玉鬘が
(二)返事の仕様がなく
(三)冷泉が玉鬘方へ
(四)冷泉の
(五)源の
(六)玉鬘の心
(七)源の親切は淺からねども懸想心が邪險なりしに、冷泉に對しては厭な心持は起らず
(八)冷泉が
(九)玉鬘が宮仕すべしと豫期し居たるに番狂はせになりたる恨を
(一〇)玉鬘が
(一一)此度參內して從三位に陞叙せられたる事、次の冷泉の歌にて知らる、之を謂へるなるべし
(一二)返事をせぬのが癖と見える、前にも冷泉の文に返事せざりし事ある也
(一三)斯く迄逢ひ難き君を何故に懸想しはじめしならん、紫は三位の相當の服色、紫を染むるには灰を用ふ、はひあひ―這ひ逢ひ、灰合ひ
(一四)我と君との契は到底薄いのかしら
(一五)源に
(一六)下歌のの注也

て、限ある御饗などの事どももしたる樣、殊に用意ありてなむ、大將殿せさせ給へりける。宿直所(一)に居給ひて、日一日聞え暮し給ふことは、(二)髭黒「夜さり罷出させ奉りてむ。(三)かゝる序にと思しうつるらむ。御宮仕なむ安からぬ」とのみ、同じ事をせめ聞え給へど、(四)御かへりなし。さぶらふ人々ぞ、(五)「大臣の、心あわたゞしき程ならで、稀〳〵の御まゐりなれば、御心ゆかせ給ふばかり、許されありてを罷出させ給へ、と聞えさせ給ひしかば、今宵はあまりすが〳〵しうや」と聞えたるを、いとつらしと思ひて、(六)髭黒「さばかり聞えしものを、さも心にかなはぬ世かな」とうち歎き居給へり。(七)兵部卿の宮、御前の御あそびに侍ひ給ひて、靜心無く、(八)この御局のあたり思ひやられ給へば、念じあまりて聞え給へり。(九)大將はつかさの御曹司(一〇)にぞおはしける、(一一)それよりとて取入れたれば、しぶ〳〵に見給ふ。(一二)

螢　深山木(一三)に羽うちかはしゐる鳥のまたなくねたき春にもあるかな

(一)玉鬘宮中に居る故髭黒も宮中の宿直所に居る也
(二)玉鬘に
(三)此序に此儘内裏に留まらんなどといふ氣が出られては大變
(四)玉鬘返事せず
(五)源からも餘りあわてて退出せず帝の御滿足ある程宮中に居て御許が出てから下り給へと仰ありし事なれば、今夜の退出は餘りさつぱり過ぎると玉鬘附の女中より返事したるを
(六)あの位言つて聞かせたのに
(七)螢が冷泉帝の御前に居ながら
(八)玉鬘の
(九)玉鬘へ手紙を贈る
(一〇)自分の役所の詰所
(一一)髭黒よりの手紙と稱して
(一二)玉鬘が
(一三)君が髭黒と睦まじくして居らるゝを我は妬ましきに堪へず

はまだ若くおはしませど、すべていと今めかし。御前、中宮の御方、朱雀院とに參りて、夜いたう更けにければ、六條院には、この度は所せしと省き給ふ。朱雀院(一)より歸り參りて、東宮の御方々めぐる程に夜明けぬ。ほの〴〵とをかしき朝ぼらけに、いたく醉ひ亂れたる樣して、「竹河」(二)謠ひけるほどを見れば、内の大殿の(三)君達、四五人ばかり、殿上人の中に聲すぐれ、容貌きよげにて打ち續き給へる、いとめでたし。童なる八郎君は、(四)むかひばらにて、いみじうかしづき給ふが、いと美しうて、(五)大將殿の太郎君と立ちならびたるを、かんの君も餘所人と見給はねば、御目とまりけり。(六)やむごとなく交らひ馴れ給へる御方々よりも、この御局の(七)袖ぐち、大方のけはひ今めかしう、同じものの色あひ重なりなれど、物よりことに花やかなり。正身(八)も女房たちも、かやうに御心をやりて暫しは過い給はましをと思ひあへり。(九)皆同じごとかづけ渡すなかに、綿のさまも匂ことに、らう〳〵じうしない給ひて、(一〇)此方は水驛なりけれど、けはひ賑はゝしく人々心げさうし添へ

(一) 男踏歌の連中が
(二) 踏歌にうたふ催馬樂の曲
(三) 頭中の子どもは
(四) 今の本妻の腹
(五) 鬚黒
(六) 宮中の生活になれたる方々
(七) 玉鬘の御局の女中達の
(八) 玉鬘
(九) どこでも同樣に男踏歌の人々に下され物ある中にも玉鬘方は
(一〇) 玉鬘方は饗膳を出す番に當らず、ほんの息つぎの飲食を供するに過ぎざりしが

聞えつるを、内裏にも、なめく心ある樣に聞しめし、人々も思す所あらむ、(一)おほやけ人を頼みたる人はなくやはある、と思ひかへして、年かへりて(二)參らせ奉り給ふ。男踏歌ありければ、やがてその程に、儀式いといかめしう二なくて參り給ふ。かた〲の大臣たち、この大將の御勢さへさしあひ、(三)宰相中將、懇に心しらひ聞え給ふ。(四)せうとの君達も、かゝる折にとつどひ、追從し寄りて、かしづき給ふ樣いとめでたし。承香殿の東面に御局したり。(五)西に宮の女御はおはしければ、馬道ばかりの隔なるに、御心のうちは遙に隔たりけむかし。御方々いづれとなく挑みかはし給ひて、内裏邊心にくゝをかしき頃ほひなり。殊に(六)みだりがはしき更衣達、數多も侍ひ給はず。(七)中宮、弘徽殿の女御、この宮の女御、左の大殿の女御など侍ひ給ふ。さては中納言、宰相の女二人ばかりぞ侍ひ給ひける。踏歌は方々に里人參る。樣異に賑はゝしき見物なれば、誰も〳〵淸らをつくし、袖口のかさなりこちたく整へ給ふ。(八)東宮の女御も、いと花やかにもてなし給ひて、宮

(一)官女を妻にして居る者もない譯では無しと
(二)玉鬘を參内せしむ
(三)夕霧
(四)柏木等
(五)式部卿宮の女御
(六)ごた〲した身分ひくき更衣などは碌になく
(七)秋好
(八)承香殿女御、鬚黑の妹、東宮の御母

(一)玉鬘へ行く髯黒を
(二)髯黒が
(三)玉鬘
(四)北方の
(五)是より後髯黒が北方へ音信せず、先日行きし時の不あしらひをよい口實にして居るらしきを
(六)式部卿宮
(七)紫上
(八)髯黒の爲に自分迄が恨まるゝ種になるが迷惑なり
(九)難議な譯ぢや
(一〇)自分一了簡で扱ふ事もならぬ玉鬘の爲に、冷泉に痛くない腹をさぐられる
(一一)螢
(一二)螢は
(一三)事情が分りて
(一四)我が咎になる事もなからんと思ふ
㊆玉鬘參內、男踏歌、玉鬘退出して髯黒の邸に入る、帝の玉鬘に對する情
(一五)いよ〳〵惡しきを見て
(一六)髯黒
(一七)以下髯黒の心、玉鬘の參內も沙汰やみになりて
(一八)髯黒が參內を妨げたるを冷泉も何か意趣あつてした事の樣に思召し

めて、いと心細げに見送り(一)たる樣なども、いと哀なるに、物思加はりぬる心地(二)すれど、(三)女君の御樣の見るかひありてめでたきに、ひが〳〵しき御樣を(四)思ひくらぶるもこよなくて、よろづを慰め給ふ。(五)打ち絶えて音づれもせず、はしたなかりしに、ことつけ顏なるを、宮(六)にはいみじうめざましがり歎き給ふ。春(七)のうへも聞き給ひて、紫(八)「こゝにさへ恨みらるゝ故になるが苦しきこと」と歎き給ふを、大臣の君、いとほしと思して、源(九)「かたき事なり。(一〇)おのが心ひとつにもあらぬ人のゆかりに、內裏にも心おきたる樣に思したンなり。(一一)兵部卿の宮なども怨じ給ふと聞きしを、さいへど、(一二)思ひやり深うおはする人にて、(一三)聞きあきらめ恨み解け給ひにたンなり。おのづから人のなからひは、忍ぶる事と思へど、隱なきものなれば、(一四)こゝにおふべき罪もなしとなむ思ひ侍る」と宣ふ。

かゝる事どものさわぎに、かんの君の御氣色、(一五)いよ〳〵晴間なきを、(一六)大將はいとほしと思ひあつかひ聞えて、(一七)この參り給はむとありし事も絶えきれて、(一八)さまたげ

(一)だしぬけに里に歸つて仕舞ふなどとは餘り若若しい仕打
(二)子どももある事故
(三)穩かに髭黒の仕方を見て居て、あれならば出て行くも尤と人に分らせて後にこそ里に歸るが至當
(四)眞木柱だけにでも逢ひたしと髭黒がいへど
(五)後に籐中納言
(六)後に左大辨
(七)似て居る故
(八)式部卿宮にも逢ひたしと髭黒が乞へども
(九)髭黒が
(一〇)二人の男の子を髭黒が連れ歸りたる也
(一一)玉鬘の處迄連れ行く譯にはゆかぬ故自邸に留め置きて
(一二)子どもが

はめ」と諫め申し給ふ、理なり。髭黒「(一)いとわか／＼しき心地もし侍るかな。(二)思ほし捨つまじき人々も侍ればと、長閑に思ひ侍りける心の怠を、返す／＼きこえてもやる方なし。今は唯(三)なだらかに御覽じ許して、罪さり所なう、世人にもことわらせてこそ、かやうにもてない給はめ」など、聞え煩ひておはす。(四)姫君をだに見奉らむと聞え給へれど、出し奉るべくもあらず。男君達、(五)十なるは殿上し給ふ。いとうつくし。人にほめられて、容貌などようはあらねど、いとらう／＼じう、物の心やう／＼知り給へり。(六)次の君は、八つばかりにて、いとらうたげにて、姫君にも(七)おぼえたれば、かき撫でつゝ、髭黒「あこをこそは、戀しき御かたみにも見るべかゝめれ」など、うち泣きて語らひ給ふ。(八)宮にも御氣色賜はらせ給へど、式部「風おこりてためらひ侍る程にて」とあれば、はしたなくて(九)出で給ひぬ。

(一〇)この君達をば車に乗せて、かたらひおはす。(一一)六條殿には、え率ておはせねば、殿にとゞめて、髭黒「猶こゝにあれ、來て見むにも心安かるべく」と宣ふ。(一二)うちなが

づきなう思し知らるれば、見もやり給はず。
(一)宮にうらみ聞えむとて、まうで給ふまゝに、まづ殿(二)におはしたれば、木工の君など出で來て、ありしさま語りきこゆ。姫君の御有樣(三)聞き給ひて、雄々しく念じ給へど、ほろ〳〵とこぼるゝ御氣色、いとあはれなり。鬚黑「さても世(四)の人に似ず、怪しきことどもを見すぐす、こゝらの年頃の志を、見知り給はずもありけるかな。(五)いと思のまゝならむ人は、今までも立ちとまるべくやはある。よし、かの正身は、とてもかくてもいたづら人と見え給へば、同じことなり。幼き人々も、いかやうにもてなし給はむとすらむ」と、打歎きつゝ、かの眞木柱を見給ふに、御手も幼けれど、(六)心ばへの哀に戀しきまゝに、道すがら涙おし拭ひつゝまう(七)で給へれば、(八)對面し給ふべくもあらず。式部(九)「何かたゞ、時にうつる心の、今始めて變り給ふにもあらず。年頃思(一〇)ひうかれ給ふさま聞き渡りても、久しくなりぬるを、いづ(一一)くを又思ひ直るべき折とか待たむ。(一二)いとゞひが〳〵しき樣をのみこそ見えはて給

(一)鬚黑が式部卿宮に恨を言はんとて
(二)鬚黑の自邸に
(三)鬚黑が
(四)普通の人と替りて辛抱強く狂人を守り來りし我年來の情が北方には分らなかつたか
(五)我儘な男なら疾に離別して仕舞つて居る筈
(六)歌の趣意が
(七)式部卿邸へ
(八)北方が鬚黑に逢はんともせず
(九)我娘の北方を論す詞、鬚黑が人の襟元につく輕薄は今始つた譯でもなし
(一〇)玉鬘にこがれて居た樣子は前々から聞いて居た
(一一)「いづく」は「いつ」の誤なるべし
(一二)永く關係して居れば居る程鬚黑が非道の取扱をし盡すべし

もありしか。それをこの世の面目にて止みぬべきなゝめり」と宣ふに、いよ〳〵腹立ちて、まが〳〵しき事などを言ひちらし給ふ。この大北の方ぞさがな者なりける。

(一)大將の君、かく渡り給ひにけるを聞きて、怪しう、(二)若々しき中らひのやうに、(三)ふすべ顏にてものし給ひけるかな。(四)正身は、然ひきゝりに、きは〴〵しき心もなきものを、宮のかく輕々しうおはすると思ひて、(五)君達もあり、人目もいとほしきに思ひみだれて、かんの君に、「かく怪しきことなむ侍るなる。(六)なか〳〵心やすくは思ひ給へなせど、(七)さて片隅にかくろへてもありぬべき人の心やすさを、おだしう思ひ給へつるに、俄にかの(八)宮の物し給ふならむ。(九)人の聞き見る事も情なきを、打ちほのめきて參り來なむ」とて出で給ふ。よき上の御衣、柳の下襲、青鈍の綺の指貫著給ひて、引きつくろひ給へる、いとものものし。(一〇)などかは似げなからむと、人々は見奉るを、かんの君は、かゝる事どもを聞き給ふにつけても、身の心

㊅ 髯黑、式部卿宮を訪ひ悄々として歸る
(一)髯黑
(二)髯黑の心
(三)嫉妬顏に出て行つた事ぢや
(四)北方自身は其程きつぱりと角を立てゝする積もないに、父宮の了簡で斯の如き輕擧をする也と思ひて
(五)子どももある事也
(六)北方が去つて却つて氣樂とは思へど
(七)其儘家の隅に居てもよさそうな北方の了簡を見て安心して居たるに
(八)父が引取りたるならん
(九)棄て置きては餘り薄情らしき故一寸顏を出して來ん
(一〇)玉鬘の夫として恥しからずと

（一）式部卿宮の娘冷泉の女御として入内せる事少女卷にあり
（二）須磨退去の時式部卿宮が世間を憚りて源に音信せざりし恨
（三）式部卿宮が
（四）其樣な筈はない、母宮の常時の感情をいへる也
（五）紫上を大事がるなら其縁者をも大切にすべきであると思ひて源の仕方が合點ゆかざりしに
（六）玉鬘を大事にして
（七）自分が先へ弄んだ其あとを氣の毒さに、側目もふらず大事がる律義者にやらんとて髯黑を引附けてちやほやするとは腹が立つ
（八）源氏
（九）源の如き利口な人はかねて巧みて
（一〇）平氣な顔をして居ながら源は須磨退去の時の返報は善惡ともに多くの人に對してして居る
（一一）紫の縁者と思へばこそ曾て吾が五十の賀をしてくれて世の噂にも上り家の面目にもなりし也

めでたきよすがと思ひ聞え給へれど、いかばかりの昔の仇敵にかおはしけむとこそは思ほゆれ。（一）女御をも、事に觸れ、はしたなくもてなし給ひしかど、それは、（二）御中の恨解けざりしほど、（三）思ひ知れとにこそはありけめ、と思し宣ひ、世の人も言ひなしゝだに、なほ（四）然やはあるべき、（五）人一人を思ひかしづき給はむ故は、邊までも匂ふ例こそあれと、心得ざりしを、ましてかく末に、漫なる（六）繼子かしづきをして、（七）おのれ古し給へるいとほしみに、實法なる人のゆるぎ所あるまじきをとて、取りよせてもてかしづき給ふは、いかゞつらからぬ」と言ひ續けのゝしり給へば、宮は、式部「あな聞きにくや。世に難つけられ給はぬ（八）大臣を、口に任せてな貶しめ給ひそ。（九）かしこき人は、思ひおき、かゝる報もがなと、思ふことこそは物せられけめ。然思はるゝ我身の不幸なるにこそはあらめ。（一〇）つれなうて、皆かの沈み給ひし世の報は、浮べ沈め、いとかしこくこそは思ひ渡い給ふめれ。おのれ一人をば、（一一）然るべきゆかりと思ひてこそは、一年も、さる世のひゞきに、家より餘る事ども

えも書きやらで泣き給ふ。母君、「いでや」とて、

北方 馴(一)れきとは思ひいづとも何により立ちとまるべきまきの柱ぞ

御前なる人々も、さまぐ\に悲しく、さしも思はぬ草木のもとさへ、戀(二)しからむことと目とゞめて、鼻すゝりあへり。木工の君は、殿(三)の御方の人にてとゞまるに、中將(四)のおもと、

「淺(五)けれど石間の水はすみはててやどもる君やかけはなるべき

思ひかけざりしことなり。かくて別れ奉らむことよ」といへば、木工、

「(六)ともかくも石間の水の結ぼほれかけとむべくも思ほえぬ世を

いでや」とてうち泣く。御車ひき出でて打ちかへり見るも、またはいかでかは見むと、はかなき梢をも目とゞめて、(七)隱るゝまでぞ顧み給ひける。(八)君が住むゆゑにはあらで、こゝら年經給へる御住處の、いかでか忍び所なくあらむ。宮(九)には待ちとり(一〇)、いみじう思したり。母北の方泣きさわぎ給ひて、母「(一一)太政大臣を、

(一)假令柱が我々を忘れずとも最早かひなし、再び立ちとまるべき由なき我々なれば
(二)離れての後は戀しかるべしと
(三)髭黑附の侍女故殘る
(四)北方附にて共に立去る也
(五)緣淺き君は殘りて北方の去らるゝとは聞えぬ事ぞ。石間の水は木工の君、君は北方
(六)我とても斯く面倒なる關係になりては此儘こゝに永く留るべしとも思はれず
(七)北方が
(八)菅原道眞の歌、「君が住む宿の梢を行く〳〵と隱るゝ迄に顧みしはや」
(九)式部卿宮邸
(一〇)北方の來るを
(一一)式部卿は源を結構な緣者と思ひ居らるれど前世のかたきぢや



かき親だに、時に(一)うつろひ人にしたがへば、疎にのみこそなりけれ。まして形のやうにて、(二)見るめの前にだに名殘なき御心は、(三)かゝり所ありてももてない給はじ」と、御乳母どもさし集ひて(四)宣ひ歎く。日も暮れ、雪降りぬべき空の氣色も、心細う見ゆる夕なりけり。「いたう(五)荒れ侍りなむ。早う」と御迎の君達そゝのかし聞えて、御目おし拭ひつゝながめおはす。姫君は、(六)殿いとかなしうし奉り給ふならひに、(七)見奉らではいかでかあらむ、(八)今なども聞えで、また逢見ぬやうもこそあれ、と思すに、俯伏し伏して、(九)え渡るまじと思したるを、北方「かく思したるなむ、いと心憂き」などこしらへ聞え給ふ。(一〇)只今も渡り給はなむと待ち聞え給へど、かく暮れなむに、まさに動き給ひなむや。常に寄り居給ふ東面の柱を、人にゆづる心地し給ふも哀にて、姫君、檜皮色の紙かさね、唯いさゝかに書きて、柱の乾破れたるはざまに、笄のさきして押入れ給ふ。

眞木　今はとて(一一)やどかれぬとも馴れ來つる眞木の柱は我をわするな

（一）後妻にひかされては先妻の子を愛せぬが常なり
（二）今からさへ先妻に少しも情のなき鬚黒の心では
（三）行々子どもの便になる樣な事はあるまじ
（四）「宣ひ」は「言ひ」などの誤なるべし
（五）天氣が
（六）父に祕藏にせられ慣れたれば
（七）姫の心、父に逢はずには居られぬ
（八）暇乞もせずに行つては再び逢はれぬといけぬと
（九）母に附いて行くまい
（一〇）鬚黒が今にも歸られればよいにと眞木柱が待ち居れど、暮方に出て來る筈がなし
（一一）此家には離るゝとも

（一）取纏め置き
（二）北方の子ども
（三）我身の不運をつくゞく覺悟したれば
（四）汝等が生先のある身で親の手元を離れて落魄するのが可愛そう也
（五）どちらにしても我に附いて來よ
（六）髯黑の手元へ始終出入りするとも髯黑が面倒を見て吳れもすまじ
（七）祖父の式部卿宮の存命中は一通りの禁中の勤は出來るにもせよ
（八）源や頭中の心次第の今の世なれば、あの人達から彼等は面白くない奴の由緣の者ぞと目星をつけられては立身もし難かるべし
（九）子どもが

なむに」などさゞめく。人々おのがじし、はかなき物どもなど、里に運びやりつつ、亂れ散るべし。御調度ども、然るべきは皆したゝめ置き（一）などするまゝに、上下泣き騷ぎたるは、いとゆゝしく見ゆ。君達（二）は何心もなくてありき給ふを、母君皆よびすゑ給ひて、北方「自らは、かく心憂き宿世（三）、今は見はてつれば、此世に跡とむべきにもあらず、ともかくもさすらへなむ。（四）生先遠うて、流石にちりぼひ給はむ有樣どもの、悲しうもあべいかな。姫君は、（五）となるともかうなるとも、おのれに添ひ給へ。なか〱男君達は、（六）えさらずまうで通ひ見え奉らむに、人の心留め給ふべくもあらず。はした無うてこそ漂はめ。（七）宮のおはせむほど、かたのやうに交らひをすとも、（八）かの大臣たちの御心にかゝれる世にて、かく心おくべきわたりと、流石に知られて、人にもなり立たむこと難し。さりとて山林に引入りつつまじらむ事、後の世までいみじきこと」と泣き給ふに、皆深き心は思ひわかねど、（九）うちひそみて泣きおはさうず。乳母等「昔物語などを見るにも、尋常の志ふ

(一)北方と髭黑と
(二)年來北方をのみ大事にかけ來りたれば
(三)いよ／＼夫婦の緣も是迄と髭黑が見限るにつけて
㊄式部卿宮髭黑の本妻を引取る
(四)式部卿宮
(五)丸で取附處のなき程に表に顯はして嫌ふものを、北方が強ひて居すわりて居るのは外聞惡し
(六)父がついて居る間は無暗に髭黑に屈從するに及ばぬ
(七)北方の心
(八)北方の迎に行くのは仰山すぎるとて
(九)どうせ斯うなる筈とは
(一〇)父宮の許へ歸られてはお客の樣で狹苦しく落着かぬ住居なるべければ、其樣な處に侍女も大勢は居られぬ
(一一)一部分の人々は宿へ下りて、正氣になられたら又歸參すべし

は、御中(一)もへだたりがちにて、ならはし給へれど、やむごとなう立並ぶ方なくて(二)ならひ給へれば、今(三)はかぎりと見給ふに、侍ふ人々もいみじう悲しと思ふ。父宮(四)聞き給ひて、「今は、然か(五)け離れて、もて出で給ふらむに、さて心強くものし給ふ、いと面無う人わらへなる事なり。己(六)があらむ世のかぎりは、ひたぶるにしも、などか隨ひくづをれ給はむ」と聞え給ひて、俄に御むかへあり。北の方、御心地少し例になりて、世の中をあさましう思ひ歎き給ふに、かくと聞え給へれば、強(七)ひて立ちとまりて、人の絶えはてむ樣を見はてて、思ひとぢめむも、今少し人わらへにこそあらめ、など思したつ。御兄の君達、兵衞督は上達部におはすれば事(八)々しとて、中將、侍從、民部大輔など、御車三つばかりしておはしたり。さこ(九)そはあべかめれど、かねて思ひつる事なれど、さし當りて今日を限と思へば、侍ふ人々もほろ／＼と泣きあへり。「年(一〇)頃ならひ給はぬ旅住に、狹くはしたくては、いかでか數多は侍はむ。かた(一一)へはおの／＼里にまかでて、靜まらせ給ひ

(一)眞木柱の火取を投げつけたる事をよみて暗に己の嫉妬をも仄めかせる也、ひとり—獨、火取

(二)玉鬘が出來て以來がらりと變つた北方に對する御所置振は、北側で見て居ても腹が立ちます

(三)氣取つて居る

(四)どうして此樣な奴に手を出したるならん、玉鬘に打込み居る髯黑の心

(五)北方の厭な事を思へば思ふほど、あの樣な女と連添ひし事を彌〻後悔する氣になる

(六)飛でもなき北方の樣子が玉鬘の方へ知れたらば玉鬘にも嫌はれてどちらつかずの身になるかも知れぬ

(七)玉鬘の有樣

(八)玉鬘以外に愛を分くる氣にならず

(九)玉鬘方に

(一〇)北方の

(一一)髯黑が傳聞して

(一二)もし北方の方へ寄りつかば

(一三)自邸に居る時も別の所に遠ざかり居て

(一四)眞木柱の姬君と名づく

木工「ひとり(一)居てこがるゝ胸の苦しきに思ひあまれるほのほとぞ見し

(二)名殘なき御もてなしは、見奉る人だにたゞにやは」と、口おほひて居たる、眉いと(三)いたし。されど、(四)いかなる心にてかやうの人に物をいひけむ、などのみぞ覺え給ひける。情なきことよ。

髯黑「うき(五)ことを思ひさわげばさまぐ\にくゆる煙ぞいとゞ立ちそふ

いとこと(六)の外なる事どもの、もし聞えあらば、中間になりぬべき身なゝめり」と、打歎きて出で給ひぬ。一夜ばかりの隔だに、又珍しうをかしさ勝りて覺え給ふ(七)有樣に、いとゞ(八)心を分くべくもあらず覺えて、心憂ければ、久しう(九)籠り居給へり。修法などしさわげど、(一〇)御物怪こちたくおこりて罵る(一一)を聞き給へば、(一二)あるまじき疵もつき、恥がましき事必ずありなむと、怖ろしうて寄りつき給はず。(一三)殿に渡り給ふ時も、他方に離れ居給ひて、君達ばかりをぞ、呼びはなちて見奉り給ふ。女一(一四)所、十二三ばかりにて、またつぎ／＼男二人なむおはしける。近き年頃となりて

と白き薄樣に、(一)づしやかに書い給へれど、殊にをかしき所もなし。手はいと淸げなり。(二)才かしこくなどぞ物し給ひける。(三)かんの君、(四)夜がれを何とも思されぬに、かく心ときめきし給へるを見も入れ給はねば、御かへりなし。男胸つぶれて、思ひくらし給ふ。(五)北の方はなほいと苦しげにし給へば、御修法など始めさせ給ふ。(六)心のうちにも、この頃ばかりだに、事なく現心にあらせ給へ、と念じ給ふ。(七)まことの心ばへの哀なるを見知らずば、かうまで思ひ過すべうも無き、けうとさかな、と思ひ居給へり。暮るれば例の(八)急ぎ出で給ふ。(九)御裝束の事なども、めやすくもしなし給はず、世に怪しう、(一〇)うちあはぬ樣にのみむづかり給ふを、(一一)鮮やかなる御直衣なども、え取りあへ給はで、いと見ぐるし。よべのは燒けとほりて、疎ましげに焦れたる匂なども異樣なり。御衣どもにうつり香もしみたり。(一二)ふすべられける程あらはに、人もうんじ給ひぬべければ、脫ぎかへて、(一三)御湯殿など、いたう繕ひ給ふ。木工の君、(一四)御薰物しつゝ聞ゆ。

(一)重々しく
(二)髯黑の人物をいふ
(三)玉鬘
(四)自分は髯黑の來ぬを何とも思はぬに、髯黑の方では氣を揉みて手紙をよこす、其手紙を玉鬘はろくに見もせねば返事もせず
(五)髯黑の本妻
(六)髯黑の
(七)正氣の時の氣立が分つて居れば此樣に心配する氣にもなれぬ北方のいやな狂態
(八)玉鬘方へ
(九)北方が日頃髯黑の衣裳の世話もやかず
(一〇)調子があはず
(一一)今日も新らしき直衣なども間にあはず
(一二)之を著て行きては嫉妬されたのが丸出しで玉鬘にも厭きられる譯故
(一三)入浴などしてしきりにめかす
(一四)衣にたき込むる也



すれば、(一)淸らを盡し給ふわたりに、さながらまうで給ふべきにあらず。心違とはいひながら、なほ珍らしう(二)見知らぬ人の御有樣なりやと、爪彈せられ、疎ましうなりて、(三)哀と思ひつる心も殘らねど、(四)この頃荒だてては、いみじき事出で來なむ、と思ひ疎みて、夜中になりぬれど、僧など召して、加持まゐりさわぐ。(五)呼ひのゝしり給ふ聲など、(六)思ひ疎み給はむに理なり。夜一夜いみじう(七)打たれ引かれ泣きまどひ明し給ひて、少しうち休み給へる程に、(八)かしこへ御文奉れ給ふ。

髭黑よべ俄に消え入る人の侍りしにより、雪の氣色も(九)ふり出で難く、やすらひ侍りしに、身さへ冷えてなむ。(一〇)御心をばさるものにて、人いかに取りなし侍りけむ。

と、きすぐに書き給へり。

髭黑心さへ空にみだれし雪もよにひとりさえつるかたしきの袖

堪へがたくこそ。

(一)華美を極めたる玉鬘の處へ此儘では行かれず
(二)ついぞ見た事もなき北方の樣よと
(三)愛想もつきたれど
(四)今の場合に事を荒立てゝは
(五)北方がわめき立てる聲
(六)髭黑が愛想をつかすも道理
(七)北方が祈禱の僧に打たれつ引かれつ
(八)玉鬘へ
(九)わざ〳〵出かけにくく
(一〇)其方の思はくは勿論、側の人々も何と我を評したるならん

束に、容貌も、かのならびなき（一）御光にこそ壓されど、いとあざやかに雄々しき樣して、たゞ人と見えず、心はづかしげなり。侍（二）に人々聲して、「雪すこし間あり。夜は更けぬらむかし」など、流石にまほにはあらで（三）、そゝのかし聞えて、聲づくりあへり。中將、木工など、「あはれの世や」などうち歎きつゝ、語らひて臥したるに、正身（四）はいみじう思ひ靜めて、らうたげに寄り臥し給へりと見ゆる程に、俄（五）に起きあがりて、大なる籠（六）の下なりつる火取を取り寄せて、殿（七）の後に寄りて、さと沃（八）かけ給ふほど、人のやゝみ（九）あふる程もなう、あさましきに、あきれてものし給ふ。さる細かなる灰の、目鼻にも入りて、おほほれ（一〇）て物も覺えず。拂ひすて給へど、立ち滿（一一）ちたれば、御衣ども脫ぎ給ひつ。現心（一二）にて斯くし給ふぞと思はば、又顧すべくもあらずあさましけれど、例の御物怪の、人に疎ませむとするわざと、御前なる人々も、いとほしう見奉る。立ちさわぎて、御衣ども奉り換へなどすれど、そこらの灰の、御鬢のわたりまでも立ちのぼり、萬の所に滿ちたる心地

（一）源には及ばねども
（二）供人の詰所
（三）露骨には言はず
（四）北方
（五）狂人の樣
（六）伏籠、衣裳をかけて香を焚きしむる爲の籠
（七）鬚黑
（八）そゝぎかけ
（九）見とがめる間もなく
（一〇）ぼんやりして
（一一）灰が
（一二）正氣でするとと思へば二度と振向いて見る氣にもならねど

(一)自分の了簡を知らずして人が様々噂をし、源や頭中があちらでもこちらでも其噂に氣をもみなさるが氣の毒さに玉鬘への無沙汰を憚る也
(二)玉鬘を引取りたらば
(三)其方が正氣の時は他の女に愛を移す了簡もなくなつて
(四)本心から留るのでなければ
(五)側に居なくとも
(六)北方が世話して鬚黒の衣に香を焚きしめさせる
(七)北方自身は
(八)ちと嫌氣がさせど
(九)此様な女房をよく辛抱して持つて居たものぢやと思ふ迄全く玉鬘に愛を移したるは輕率すぎるとは思へども
(一〇)玉鬘に對する
(一一)香を焚きしめ居たり
(一二)以下鬚黒の風采

(一)心の程を知らで、とかく人の言ひなし、大臣たちも左右に聞きおぼさむことを憚りてなむ、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめてなほ見はて給へ。こゝになど渡してば、(二)心やすく侍りなむ。かく世の常なる御氣色見え給ふ時は、外ざまにわくる心も失せてなむ、哀に思ひ聞ゆる(三)」など語ひ給へば、北方「立ちとまり給ひても、(四)御心の外ならむは、なかなか苦しうこそあるべけれ。餘所にても、(五)思ひだにおこせ給はば、袖の氷も解けなむかし」など、なごやかに言ひ居給へり。御火取めして、いよいよ焚きしめさせ(六)奉り給ふ。(七)自らは、なえたる御衣どもに、うちとけたる御姿、いとど細うかよわげなり。しめりておはする、いと心ぐるし。御目のいたう泣き腫れたるぞ、少しものしけれど、(八)いと哀と見るときは、罪なうおぼして、いかで(九)過しつる年月ぞと、名殘なううつろふ心のいと輕きぞや、とは思ふ思ふ、なほ心げさう(一〇)は進みて、そら歎きをうちしつゝなほ裝束し給ひて、ちひさき火取とりよせて、袖に引き入れてしめ居給へり。(一一)(一二)なつかしき程になえたる御裝

ひにや、苦しきことも出でこむ。大殿(一)の北の方の知り給ふことにも侍らず。(二)いつき女のやうにて物し給へば、かく思ひおとされたる人の上までは知り給ひなむや。人の御親げなくこそ物し給ふべかめれ。(三)かゝる事の聞えあらば、いと苦しかるべきこと」など、日一日入り居て語らひ申し給ふ。

暮れぬれば、心も空に浮きたちて、(四)いかで出でなむと思すに、雪かきたれて降る。かゝる空に(五)ふり出でむも、人目いとほしう、(六)この御氣色も、にくげにふすべ恨みなどし給はば、なかなかことつけて、我もむかひ火つくりてあるべきを、(七)いとおいらかにつれなうもてなし給へる樣の、いと心苦しければ、いかにせむと思ひ亂れつゝ、格子なども(八)さながら、端近う(九)打ちながめて居給へり。北の方けしきを見て、北方「あやにくなゝめる雪を、(一〇)いかで分け給はむとすらむ。夜も更けぬめりや」とそゝのかし給ふ。(一一)今はかぎり、とゞむともと、思ひめぐらし給へる氣色、いとあはれなり。髭黒「(一二)かゝるには、いかでか」と宣ふものから、髭黒「(一三)なほこの頃ばかり。

（一）紫上
（二）紫はお姫様の様に大事にされて居る身故、我我如き者の事迄心配はせじ
（三）紫上のさしがねなりなどいふ噂が聞えたらば
㊃　髭黒本妻に火取を投げつけらる
（四）早く此處を出て玉鬘の方へ行かんと髭黒が思ふに
（五）わざわざ出かけるも
（六）北方が憎々しく嫉妬などもせば、却て其を口實に此方からも逆ねぢをくはせるのに
（七）北方がおとなしく平氣な顏をして居るのが氣の毒で
（八）戸締りもせず
（　）髭黒が
（一〇）どうして玉鬘へはいらつしやる
（一一）とめても無駄ぢやと北方が考へて居る樣子
（一二）此雪では
（一三）玉鬘へ繁く通ふは此當座だけぢや

むと思ひ侍るなり。(一)太政大臣の、さる世にたぐひなき御おぼえをば、さらにも聞えず、(二)心はづかしういたり深うおはすめる御あたりに、にくげなる事漏り聞えば、いとなむいとほしう辱かるべき。なだらかにて(三)御中よくてものし給へ。(四)宮に渡り給へりとも、忘るゝことは侍らじ。とてもかうても、今さらに志の隔たることはあるまじけれど、(五)世のきこえ人わらへに、まろがためにも輕々しうなむ侍るべきを、年頃の契たがへず、互に後見むと思せ」と、こしらへ聞え給へば、北方(六)「人の御つらさは、ともかくも知り聞えず。(七)世の人にも似ぬ身の憂きをなむ、宮にも思し歎きて、今さらに(八)人わらへなることと、御心を亂り給ふなれば、いとほしう、(九)いかでか見え奉らむとなむ思ふ。(一〇)大殿の北の方と聞ゆるも、こと人にやは物し給ふ。(一一)かれは、知らぬさまにておひ出で給へる人の、末の世にかく人の親だちてもてない給ふつらさをなむ、思ほし宣ふなれど、こゝにはともかくも思はずや。もてない給はむさまを見るばかり」と宣へば、(一二)髭黒いとよう宣ふを、(一三)例の御心たが

(一)源氏の勢力は言ふに及ばず
(二)源は萬事に心深く恥かしき人なれば、其人の耳に北方が嫉妬するなどいふ噂が聞えたらば
(三)玉鬘と
(四)假令其方が里へ歸りたりとも我は其方を忘れはせぬ
(五)其方の心むけが惡くては外聞惡く、私の爲にも恥を招く事なれば
(六)髭黒のしむけを別につらしとは思はず
(七)狂氣せる我身の
(八)髭黒に捨てられては外聞惡しと
(九)里に歸りて父に合せる顔が無い
(一〇)紫も他人ではなし。姉妹なればさ言ふ也
(一一)紫は父には知られずして育ちたる身で、父とは年來疎遠でありながら玉鬘を我娘らしく取扱ひて髭黒に取持つが恨めしと父は言はるれど我は何とも思はず
(一二)中々分つた事をいふが
(一三)氣が狂つたら

(一)髭黒が新に玉鬘を寵愛するを
(二)正氣に返つて居る時で
(三)父式部卿宮を迄批難せらるゝは
(四)君の其御詞は今迄聞き馴れて居る故別に何とも思はぬ
(五)北方の樣
(六)淸らかにて
(七)どこにはなやかな處があらうぞ
(八)父式部卿宮を惡くいふ譯ではない
(九)人聞の惡い事をいふな
(一〇)玉鬘の住居
(一一)自分が
(一二)玉鬘を自邸に引取らうと思ふ

(一)安からずつらしと思ひ聞えたるを、北の方は(二)現心ものし給ふ程にて、いと懐かしう打泣きて居給へり。北方「自らを、耄けたりひが〳〵しと宣ひ恥しむるは、理なる事になむ。(三)宮の御事をさへ取りまぜ宣ふぞ、漏り聞き給はむはいとほしう、憂き身のゆかり輕々しきやうなる。(四)耳なれにて侍れば、今始めていかにも物を思ひ侍らず」とて、打背き給へる、らうたげなり。(五)いとさゝやかなる人の、常の御なやみに瘠せ衰へ、ひはづにて、髪いと(六)けうらにて長かりけるが、分けとりたるやうに落ち細りて、梳ることもをさ〳〵し給はず、涙にまろかれたるは、いと哀なり。こまかに匂へる所はなくて、父宮に似奉りて、なまめいたる容貌し給へるを、もてやつし給へれば、(七)いづこの花やかなるけはひかあらむ。髭黒「(八)宮の御事を輕くはいかゞ聞ゆる。おそろしう、(九)人聞かたはにな宣ひなしそ」と、こしらへて、髭黒「(一〇)かの通ひ侍る所のいとまばゆき玉の臺に、(一一)うひ〳〵しうきすぐなる樣にて出で入るほども、かた〴〵に人目たつらむと、かたはら痛ければ、心やすく(一二)うつろはして

ひきかふるものならねば、(一)心にはいと哀と思ひ聞え給ふ。髭黒「(二)昨日今日のいとあさはかなる人の御なからひだに、よろしき際になれば、皆思ひのどむる方ありてこそ見はつなれ。(三)いと身も苦しげにもてなし給へれば、(四)聞ゆべきことも打出で聞えにくゝなむ。(五)年頃契り聞ゆることにはあらずや、(六)世の人にも似ぬ御有様を、見奉りはてむとこそは、こゝら思ひしづめつゝ過し來るに、(七)えさしもありはつまじき御心おきてに、おぼし疎むな。幼き人々も侍れば、(八)とざまかうざまにつけて疎にはあらじ、と聞えわたるを、(九)女の御心の亂りがはしきまゝに、かく恨みわたり給ふ。(一〇)一わたり見定め給はぬほど、さもありぬべき事なれど、任せてこそ今しばし御覽じはてめ。(一一)宮の聞しめしうとみて、さわやかにふと渡し奉りてむと思し宣ふなむ、かへりていと輕々しき。(一二)まことに思しおきつる事にやあらむ。暫し勘事し給ふべきにやあらむ」と、打笑ひて宣へる、(一三)いとねたげに心やまし。(一四)御召人だちて、仕う奉りなれたる木工の君、中將のおもとなどいふ人々だに、程につけつゝ、

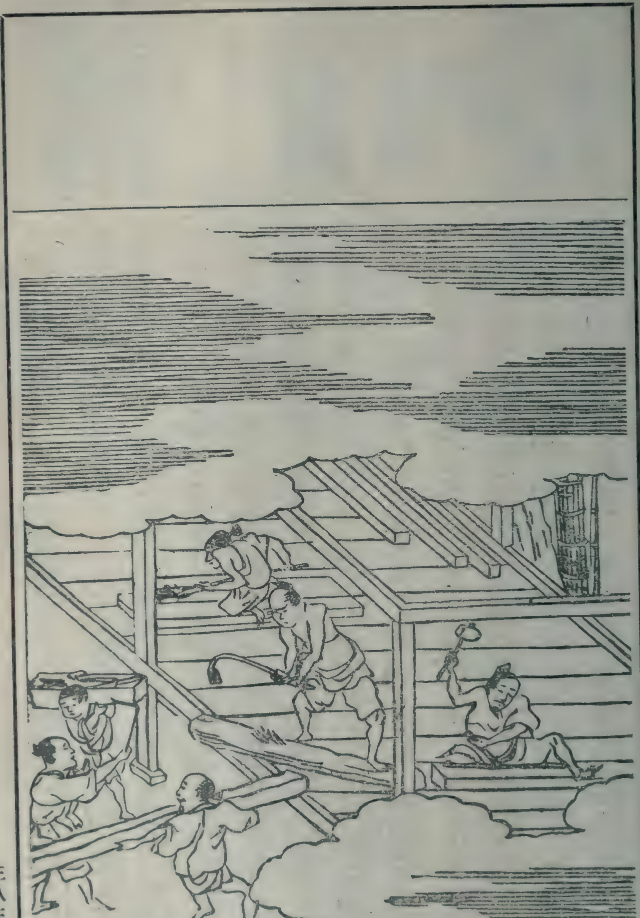
(一)髭黒の
(二)かりそめの契の中でも、身分ある人は勘辨に勘辨を加へて然る後に離別もするが常也
(三)其方は一筋に思ひつめて居る故
(四)言ふべき事も言ひ出しにくい
(五)下に言ふ事は
(六)其方は狂人なれども末始終面倒を見てやらう
(七)其方は長く連添ふ譯には行かぬ樣な心立で我を嫌ふ
(八)假令どうならうとも
(九)埒もない女心で
(一〇)我が了簡のわからぬ内は其も尤なれど
(一一)其方の父君が評判を聞いて我を嫌うてすつぱりと其方を引取つて仕舞はうとなさるは
(一二)眞から離緣せんと思ふのか、又暫時の懲らしめになさるのかしら
(一三)北方の感
(一四)髭黒の妾の樣にして

(一)新に愛を移したる玉鬘が
(二)自分も疑ひ人もしか推量したりし源との中さへ潔白なりしを感心して
(三)愛情の增すも
(四)北方の父
(五)玉鬘を引取りて大事にする其わきに、北方が見つともなく附いて居るも外聞惡し
(六)自分存命中は世間體惡く髭黑に屈從して居ずともよい
(七)北方を引取らんと
(八)北方の心
(九)緣づきて年經たる身にて
(一〇)狂亂して
(一一)北方の性質をいふ
(一二)狂女の住所の樣也
(一三)引籠りがちに
(一四)華麗なる玉鬘の生活に馴れたる目で見ては
(一五)北方に對する積年の愛は

のとは、又竝ぶ人なく思ひ聞え給へるを、(一)珍らしうも御心うつるかたの、斜にだにあらず、人に勝れ給へる御有樣よりも、(二)かの疑ひおきて、皆人の推し量りしことさへ、心淸くてすぐい給ひけるなどを、ありがたう哀と(三)思ひまし聞え給ふも、理になむ。(四)式部卿の宮聞しめして、「今は然、(五)今めかしき人をわたして、もてかしづかむ片隅に、人わろくてそひ物し給はむも、人聞やさしかるべし。(六)己があらむこなたは、いと人わらへなる樣に、隨ひ靡かでも、物し給ひなむ」と宣ひて、宮の東の對を拂ひしつらひて、(七)渡し奉らむと思し宣ふを、(八)親の御あたりといひながら、(九)今はかばかりの身にて、立ちかへり見え奉らむ事、と思ひ亂れ給ふに、いとゞ御心地も(一〇)あやまりて、うちはへ臥し煩ひ給ふ。(一一)本性はいと靜に心よく、兒めき給へる人の、時々心あやまりして、人に疎まれぬべきことなむ打ちまじり給ひける。(一二)住居などの怪しうしどけなく、物の淸らもなくやつして、(一三)いとうもれいたくもてなし給へるを、(一四)玉を磨ける目うつしに、心もとまらねど、(一五)年頃の志

㊂ 髭黑の玉鬘を迎ふる準備、狂氣せる髭黑の本妻、髭黑本妻を論す
(一)入内させて追附け我邸へ連れ下らんと思ひて
(二)暫時の入内を髭黑が承知せり
(三)髭黑が
(四)本妻
(五)氣弱く人情に脆き心立の人こそ如何なる場合にも他人の爲に斟酌もすれど
(六)髭黑は一徹者故
(七)本妻
(八)身分
(九)狂氣したる也
(一〇)夫婦の中も疎隔して
(一一)髭黑が本妻をとにかく大事にしたりしに

内裏へ參り給はむことを、安からぬことに大將おほせど、その序に、やがて罷出(一)させ奉らむの御心つき給ひて、たゞ(二)あからさまの程を免し聞え給ふ。かく忍びかくろへ給ふ御ふるまひも、ならひ給はぬ心地に苦し(三)ければ、わが殿の内修理しつらひて、年頃は荒らし埋もれ、打ち捨て給へりつる御しつらひ、よろづの儀式を改め急ぎ給ふ。(四)北の方の思しなげくらむ御心も知り給はず、かなしうし給ひし君達をも、目にもとめ給はず。(五)なよびかに、情々しき心打ちまじりたる人こそ、とざまかうざまにつけても、人のため恥がましからむ事をば、推し量り思ふ所もありけれ、ひた(六)おもむきに進み給へる御心にて、人の御心動きぬべきこと多かり。(七)女君、人に劣り給ふべきことなし。(八)人の御ほども、然るやむごとなき父親王の、いみじうかしづき奉り給へるおぼえ、世に輕からず。御容貌などもいとようおはしけるを、あやしう執念き御物怪に煩ひ給ひて、この年頃(九)人には似給はず、現心なきをり／＼多く物し給ひて、御中(一〇)もあくがれて程經にけれど、やむごとなき(一一)も



（一）男に手をとられて三途川をわたる杯といふむつかしき事の無きうちに、我が歎く涙の川水に浮びて水の泡と消えてなくなりたし
（二）三途川は誰も必ず渡らねばならぬに、其を渡らぬ前に消えて仕舞ひたしとは餘り分らぬ話
（三）三途川の渡り瀬は外に廻り路なき處なれば
（四）其方にも覺えがあらうが
（五）疾くに手に入れらるべかりし玉鬘を、今まで其儘におきたる自分の馬鹿さ加減も
（六）鬚黑の樣に無理なわざはせぬ自分の安心な所
（七）いくら何でも其方も分つて居るならんと
（八）源が氣の毒に思ひて
（九）帝が玉鬘の入内を待遠がらるゝも氣の毒故
（一〇）其方を一寸參内せしめん
（一一）彌々鬚黑の妻ときまつては
（一二）先づ宮仕せしめて後に緣を定めんとせし我が素志には違へど
（一三）玉鬘が
（一四）玉鬘の
（一五）源が存分にはしやらつかず
（一六）鬚黑方に

玉「（一）みつせ川わたらぬさきにいかでなほ涙のみをのあわと消えなむ

源「（二）心幼の御きえ所や。さても、（三）かの瀬はよぎ路なかゝなるを、御手のさきばかりは、引き扶け聞えてむや」と、ほゝゑみ給ひて、源「まめやかには、（四）思し知ることもあらむかし。（五）世に無き痴々しさも、（六）又うしろやすさの、この世に類なきほどを、（七）さりともとなむ頼もしき」と聞え給ふを、いとわりなう聞き苦しとおぼいたれば、（八）いとほしうて宣ひ紛はしつゝ、源「（九）内裏に宣はすることなむいとほしきを、なほ（一〇）あからさまに參らせ奉らむ。（一一）おのがものと領じはてては、さやうの御交際も難げなゝめる世なゝめり。（一二）思ひそめ聞えし心は違ふさまなゝめれど、二條の大臣は心ゆき給ふなれば、心やすくなむ」などこまかに聞え給ふ。哀にもはづかしくも、聞え給ふ事おほかれど、（一三）たゞ涙にまつはれておはす。いとかう（一四）思したる樣の心苦しければ、（一五）思すさまにも亂れ給はず。唯あるべきやう、御心づかひを敎へ聞え給ふ。（一六）かしこに渡り給はむことを、頓にも許し聞え給ふまじき御氣色なり。

ひし事なれば、なほおぼしも絶えず。大將のおはせぬ晝つかた渡り(一)給へり。女君、怪しう惱ましげにのみもてない給ひて、健かなるをりもなくしをれ給へるを、かく渡り(二)給へれば、少し起きあがり給ひて、御几帳にはた隱れておはす。殿も、用意ことに、少しけゝしき(三)樣にもてない給ひて、大方の事どもなど聞え給ふ。すく(四)よかなる世の常の人にならひては、まして言ふかたなき御けはひ有樣を見知り給ふにも、思の外なる身の、置き所なく恥かしきにも、涙ぞこぼれける。やう〳〵こまやかなる御物語になりて、近き御脇息に倚りかゝりて(五)、少しのぞきつゝ聞え給ふ。いとをかしげに面痩せ給へるさまの(六)、見まほしう、らうたいことの添ひ給へるにつけても、餘所(七)に見放つも餘りなる心のすさびぞかしと、くちをし。

源「おりたちて(八)汲みは見ねどもわたり川人のせとはた契らざりしを

思の外なりや」とて、鼻うちかみ給ふけはひ、なつかしう哀なり。女は顏をかくして、

(一) 源が玉鬘方へ

(二) 源が

(三) 隔ある樣に

(四) 玉鬘が此頃は生眞面目なる鬚黑といふ平凡な男の側にのみ居てたまに源に對すると一層源が見まさりするを見るにつけても

(五) 源が

(六) 玉鬘の

(七) 源の心

(八) 君と語らひし事はなけれど君を人の物にして仕舞ふ積もなかりしに。死後女が三途川を渡る時は最初に夫婦になりし男が手をひきて渡すといふ俗説ある也

まいていみじう口惜しとおぼす。兵衛督は、(一)妹の北(二)の方の御事をさへ、人わらへに思ひ歎きて、(三)とりかさね物思ほしけれど、をこがましう恨みよりても今はかひなし、と思ひかへす。大將は、(四)名に立てるまめ人の、年頃いさゝか亂れたる振舞なくて過し給へる名殘なく、心ゆきて、(五)あらざりし樣に好ましう、宵曉の打ち忍び給へる出入も艶にしなし給へるを、をかしと人々見奉る。(六)女は、(七)わらゝかに賑はしくもてなし給ふ本性も、もて隱して、いといたう思ひ結ほれ、(八)心もておらぬ樣はしるき事なれど、(九)大臣のおぼすらむ事、(一〇)宮の御心ざまの心ふかう、情々しうおはせしなどを思ひ出で給ふに、恥かしう口惜しうのみおもほすに、(一一)物心づきなき御氣色絶えず。(一二)殿も、いとほしう(一三)人々も思ひ疑ひける筋を、心淸くあらはし給ひて、(一四)我心ながら、うちつけにねぢけたる事は好まずかしと、昔よりの事も思しいでて、紫の上にも、源「思し疑ひたりしよ」などきこえ給ふ。(一五)今更に人の心のくせもこそとおぼしながら、(一六)物の苦しうおぼされし時、さてもやと思しより給

(一)式部卿宮の子
(二)鬚黑の本妻
(三)我戀の叶はぬと妹の不幸と
(四)有名なる眞面目男
(五)打つて變つて色めかしく
(六)玉鬘
(七)氣さくに
(八)自分が鬚黑に逢ふは心ならずする事なる由は源などにも分つて居る筈ながら
(九)源氏
(一〇)螢兵部卿宮
(一一)玉鬘の鬚黑を厭ふそぶり
(一二)源氏
(一三)源と玉鬘との關係を人に疑はれしが、其潔白をこゝであらはして
(一四)我ながら筋違なる戀路は好まぬ我ぢやわいと
(一五)玉鬘の緣が斷くきまつて仕舞つても矢張遇つたらば又戀情が再燃せぬとも限らぬと源自ら危ぶみながら
(一六)玉鬘が戀しくてたまらぬ時には、此儘我物にして仕舞はんかと迄思ひし事なれば

てなさまし」など、忍びて宣ひけり。げに、(一)帝も聞ゆとも、人におぼしおとし、はかなき程に見え奉り給ひて、ものものしくもてなし給はずば、あはつけき樣にもあゞべかりけり。三日(二)の夜の御消息ども、聞えかはし給ひける氣色を傳へ聞き給ひてなむ、(三)この大臣の君の御心を、あはれに辱く、ありがたしとは思ひ(四)聞え給ひける。かう忍び給ふ御中(五)らひのことなれど、おのづから、人のをかしきことに語り傳へつゝ、つぎつぎに聞き洩しつゝ、ありがたき世語にぞさゞめきける。内裏にも聞しめしてけり。帝(六)「口惜しう宿世ことなりける人なれど、然おぼしゝ本意もあるを、宮仕など、かけかけしきすぢならばこそ思ひ絶え給はめ」など宣はせけり。

霜月になりぬ。神事などしげく、内侍所にも事多かる頃にて、女官ども內侍なども參り(七)つゝ、今めかしう人騷がしきに、大將殿(八)、晝もいと隱ろへたる樣にもてなして、籠り(九)おはするを、いと心づきなく、かんの君(一〇)はおぼしけり。宮(一一)などは、

(一)以下記者の評、いくら帝に仕へても人程に寵遇もなく輕く扱はれては宮仕に出たのが輕率であつたと後悔もすべき譯なり
(二)婚禮の後三日目の祝の事につきての相談
(三)源氏
(四)頭中が
(五)髭黑と玉鬘との中が
(六)玉鬘が髭黑に極まつて仕舞ひたるは惜しき事なれど、一旦尚侍になりたる上は宮仕するがよし、御妾としての宮仕ならば中止も尤もなれども
㊁ 髭黑の熱情、玉鬘の悔恨、源氏玉鬘を訪ひて入内を勸む
(七)玉鬘尚侍なれば女官等が玉鬘の方へ來る也
(八)髭黑
(九)玉鬘方に
(一〇)玉鬘
(一一)螢兵部卿

ぶれて、石山の佛をも、辨のおもとをも、ならべて頂かまほしく思へど、女君の(一)深くものしと思し疎みにければ、(二)え交らはで籠り居にけり。げに(三)そこら心苦しげなる事どもを、とりどりに見しかど、(四)心淺き人のためにぞ、寺の驗も顯れけむ。大臣(五)も御心行かず口惜しう思せど、いふかひなきことにて、(六)誰もかく許しそめ給へることなれば、引き返し許さぬ氣色を見せむも、人のためいとほしう、あいなしと思して、儀式いと二なく(七)もてかしづき給ふ。いつしかと、(八)わが殿に渡い奉らむことを思ひ急ぎ給へど、輕々しく(九)ふとうちとけ渡り給はむに、彼處に待ち取りて、能くしも思ふまじき人(一〇)のものし給ふなるがいとほしさに託け給ひて、源「なほ心のどかに、(一一)なだらかなる樣にて、音なく、何方にも人の譏恨なかるべくを、もてなし給へ」とぞ聞え給ふ。父大臣は、「なかなか(一二)目安かゝめり。(一三)殊にこまかなる後見なき人の、なまほの好いたる宮仕に出で立ちて、苦しげにやあらむ、とぞ後めたかりし。志(一四)はありながら、女御(一五)かくて物し給ふをおきて、いかども

(一)玉鬘が髭黒を手引したる辨のお許を深く怒りて疎んじたる故
(二)辨のお許が
(三)玉鬘を戀したる男は多かりしかども
(四)朴直なる髭黒の願を佛が叶へたるものと見ゆ
(五)源も髭黒が玉鬘を手に入れたるを不滿足に思ひて
(六)實父の承諾せるをいふ
(七)髭黒を源が
(八)玉鬘を自邸に引取らん事を髭黒が計畫すれども
(九)玉鬘がよい氣になつて引取られて行つたらば
(一〇)本妻
(一一)目にたゝぬ樣にして
(一二)玉鬘の身のをさまりには、入内よりも髭黒の妻になりたる方無事なるべし
(一三)玉鬘がよき後楯もなき身でありながら
(一四)玉鬘を大事に思はぬでは無けれど
(一五)我が娘の弘徽殿女御

眞木柱

梗槩

㊀ 髯黑、玉鬘と婚す。源氏の澁々の承引、頭中將の滿足。㊁ 髯黑の熱情。玉鬘の悔恨。源氏玉鬘を訪ひて入内を勸む。㊂ 髯黑の玉鬘を迎ふる準備。狂氣せる髯黑の本妻。髯黑、本妻を諭す。㊃ 髯黑、本妻に火取を投附けらる。髯黑、玉鬘の許に留まりて歸らず。㊄ 式部卿宮、髯黑の本妻を引取る。眞木柱の姫君、家を出づるに臨みて柱に歌を題す。本妻の母君、源氏を怨む。㊅ 髯黑、式部卿宮を訪ひ快々として歸る。源氏夫妻の迷惑。㊆ 玉鬘參内。男踏歌。冷泉帝の玉鬘に對する情、玉鬘退出して髯黑の邸に入る。㊇ 源氏、玉鬘を慕ふ。㊈ 玉鬘、男子を生む。㊉ 近江君、夕霧に懸想して歌をよみかく。

㊀

源「(一)内裏に聞しめさむことも畏し。しばし人にあまねく漏さじ」と諫め聞え給へど、(二)さしもえつゝみあへ給はず。(三)程ふれど、(四)いさゝかうちとけたる御氣色もなく、(五)思はずにうき宿世なりけりと、思ひ入り給へる樣のたゆみなきを、いみじうつらしと思へど、(六)おぼろげならぬ契の程、哀にうれしく思ひ、見るまゝにめでたく、思ふさまなる(七)御容貌有樣を、(八)餘所のものに見はてて止みなましよと、思ふだに胸つ

㊀ 髯黑玉鬘と婚す、源氏の澁々の承引、頭中將の滿足
(一)玉鬘が髯黑に逢ひたる事を帝に聞かれては恐縮なり、此詞にて玉鬘が既に髯黑に逢ひたる事を知らせたり
(二)髯黑が
(三)逢ひてから
(四)玉鬘が髯黑に對して
(五)玉鬘の心
(六)髯黑が
(七)玉鬘の
(八)入内して仕舞ひたらば

ふ君なれば、自らいとよく物の案内も聞きて、いみじくぞ思ひ侘びける。いと多く恨みつゞけて、

左兵衛　忘れなむと思ふも物の悲しきを如何様にしていかさまにせむ

紙の色、墨つき、しめたる匂もさまぐ\なるを、人々も皆、「(一)おぼし絶えぬべかめるこそ、さうぐ\しけれ」などいふ。宮の御かへりをぞ、(二)如何おぼすらむ、たゞい(三)さゝかにて、

玉(四)　こゝろもて日影にむかふあふひだに朝おく霜をおのれやはけつ

とほのかなるを、いと珍らしと(五)見給ふに、(六)自らは哀を知りぬべき御けしきにかけ給へれば、露ばかりなれど、いと嬉しかりけり。かやうに何となけれど、さまざまなる人々の、(七)御わびごとも多かり。女の御心ばへは、(八)この君をなむ本にすべきと、(九)大臣たち定め聞え給ひけりとや。

(一)玉鬘入内あらば斯かる人々が皆思ひ切りて斯く風流なる文使の來る事もあるまじければ寂しかるべし
(二)玉鬘がどう思ひたるか
(三)短文にて
(四)我から進みて日に向ふ向日葵さへ向日葵の方から霜を消す事はせぬ、況や心ならず入内する我が帝寵によりて君を忘るるなどの事あらんや
(五)螢が
(六)玉鬘の返歌が、據なく入内はすれど螢の情を知らぬではなき様な意味を含める故
(七)愚痴を訴へて來る手紙
(八)玉鬘を手本にすべしと
(九)源と頭中



㊄ 懸想文玉鬘の許に集る

御もとにもせめ給ふ。

九月にもなりぬ。初霜むすぼほれ、艶なる朝に、例のとりぐ\なる御後見どもの、引きそばみつゝもてまゐる御文どもを、見給ふこともなくて、讀み聞ゆるばかりを聞き給ふ。大將殿のには、

髭黒（一）なほ頼みこしも過ぎゆく空の氣色こそ、心づくしに。

（二）かずならばいとひもせまし九月に命をかくるほどぞはかなき

（三）月たゝばとあるさだめを、いと能く聞き給ふなゝめり。兵部卿の宮は、

螢　いふかひなき世は、聞えむかたなきを、

朝日さすひかりを見ても玉笹の葉分の霜をけたずもあらなむ

（四）思しだに知らば、慰むかたもありぬべくなむ。

とて、いとかじけたる下折（五）の、霜もおとさずもてまゐれる、御使さへぞうちあひ（六）たるや。式部卿の宮の左兵衛督は、殿の上（七）の御兄弟ぞかし、親しく參りなど給

（一）九月は忌む月故入内はあらじと安心せしに、此月も最早過ぎ去るべければ心配なり
（二）玉鬘を手に入れる望ある人がましき身ならば九月を厭ふ筈なれど、其九月だからと安心して居るとは扨もつまらぬ我身哉
（三）來月にならば入内すべしとの豫定を
（四）宮仕して帝の寵を受けたりとも私を忘れ給ふ事なかれ
（五）下折れしたる笹の枝の
（六）其に相應した人柄の使なり
（七）紫上

(一)しだかたなるを、(二)などかはあらむと思しながら、(三)かの大臣の斯くし給へることを、いかゞは聞えかへすべからむ。(四)さる様あることにこそと、心得給へるすぢさへあれば、まかせ聞え給へり。(五)この大將は、(六)春宮の女御の御兄弟にぞおはしける。(七)おとゞたちを措き奉りて、さしつぎの御おぼえ、いとやむごとなき君なり。年卅二三のほどにものし給ふ。北の方は紫の上の御姉ぞかし。式部卿の宮の(八)御大君よ。(九)年のほど三つ四つがこのかみは、殊なるかたはにもあらぬを、人がらやいかゞおはしましけむ、(一〇)嫗とつけて心にも入れず、いかで背きなむと思へり。その筋により、六條の大臣は、(一一)大將の御事は、似げなくいとほしからむと思したるなゝめり。色めかしくうち亂れたる所なき様ながら、いみじくぞ心をつくしありき給ひける。かの(一二)大臣も、もてはなれても思したらざンなり。(一三)女は宮仕を物うげに覺えたンなりと、内々のけしきも、(一四)さる委しきたよりしあれば、漏り聞きて、髭黒「たゞ(一五)大殿の御おもむけの異なるにこそはあンなれ。實の親の御心だに違はずば」と、(一六)この辨の

(一)候補者
(二)玉鬘の夫にして差支なしと頭中は思へども
(三)源の入内せしむるを妨ぐる譯にはゆかぬ
(四)源の心に何か一物ありての事と見當がつき居る故、玉鬘の事は一切源まかせ也
(五)髭黒
(六)承香殿女御
(七)源と頭中とを除きては其に次ぎて世に重ぜらるゝ人也
(八)長女
(九)三四位夫よりは年上なるが、其は別に疵といふ程でもないが
(一〇)髭黒が眞木柱を婆さんと名をつけて嫌ひ居り離縁したく思へり
(一一)髭黒を聟にするは
(一二)實父も髭黒を聟にする事は不承知らしくもなし
(一三)玉鬘
(一四)柏木より聞居る故
(一五)源だけに異存があるのぢや
(一六)玉鬘方の侍女

よと恨むるも、人やりならず。

(一)玉まどひける道をば知らでいもせ山たど〳〵しくぞ誰もふみ見し

取次「(二)何方の故と(三)なむえ思しわかざゝめりし。何事も、わりなきまで、大方の世を憚らせ給ふめれば、(四)え聞えさせ給はぬになむ。(五)自らかくのみも侍らじ」と聞ゆるも、然ることなれば、柏「よし長居し侍らむも、すさまじき程なり。(六)やう〳〵勞つもりてこそは、恪勤をも」とて立ち給ふ。月隈なくさしあがりて、空の氣色も艶なるに、いとあてやかに淸げなる(七)容貌して、御直衣の姿、このましう花やかにて、いとをかし。(八)宰相の中將のけはひ有樣には、えならび給はねど、これもをかしかめるは、(九)いかでかゝる御中らひなりけむと、若き人々は、例の、さるまじき事をもとりたてゝ賞であへり。

(一〇)大將は、この中將と(一一)同じ右のすけなれば、常に呼び(一二)とりつゝ、懇にかた(一三)らひ、大臣にも申させ給ひけり。人がらもいとよく、おほやけの御後見となるべかゝめる

(一)「まどひけるよ」と歌よりつゞく也
(二)我は君の文を懸想の意ありとは思はず、ぼんやりして見て居たり
(三)前々の御文を何の意味とも玉鬘は解せざりき
(四)御返事をなされぬなり
(五)其内には又斯うばかりでもあるまじ
(六)玉鬘への御奉公を積みてこそ恪勤の功によりて御覽のめでたくなる事もあるべし
(七)柏木が
(八)夕霧
(九)どうして斯うどなたもどなたも美しいのであらうと
㊃髭黑、熱心に玉鬘に懸想す
(一〇)髭黑
(一一)髭黑は右大將、柏木は右中將也
(一二)柏木を
(一三)玉鬘懸想の事を

(一)柏木の
(二)尚侍として入内する時の樣子
(三)其方を訪問せず文通もせぬ事を
(四)兄妹と分りたればもはや氣恥しき文は上げられぬ
(五)他人としても兄妹としても私の志を知らん顔なさるゝ筈はなしと
(六)奥の方に
(七)此樣な待遇を受けるといふ事が又とあらうか
(八)此趣を取次の女が玉鬘に申上ぐ
(九)兄妹と分りたりとて俄に親しくするは餘り現金なる樣に人に思はれるかと
(一〇)年來心にこめて居る事を語らずに居るのは
(一一)柏木が心にこめて何にも言はず
(一二)元をたゞせば兄妹なれば思ひ切らねばならぬを知らずして、文などを贈りたる悔しさよ

(一)用意など人には劣り給はず、いとめやすし。頭中傳言(二)「參り給はむほどの案内、委しきさまもえ聞かぬを、うち〱に宣はむなむよからむ。何事も人目に憚りて、え參(三)りこず、聞えぬことをなむ、なか〱いぶせく思したる」など、語り聞え給ふついでに、柏(四)「いでやをこがましき事も、えぞ聞えさせぬや。(五)何方につけても、哀をば御覽じ過すべくやはありけると、いよ〱怨めしさも添ひ侍るかな。まづは今宵などの御もてなしよ。(六)北面だつかたに召し入れて、君達こそめざましくも思しめさめ、下仕などやうの人々とだに、うち語らはばや。(七)又かゝる樣はあらじかし。樣樣に珍らしき世なりかし」と、うち傾きつゝ、恨み續けたるもをかしければ、(八)斯くなむときこゆ。玉(九)「げに人聞を、うちつけなるやうにやと憚り侍る程に、(一〇)年頃のうもれ痛さをも、あきらめ侍らぬは、いとなか〱なる事多くなむ」と、唯すくよかに聞えなし給ふに、まばゆくて、(一一)萬おしこめたり。

柏(一二)いもせ山ふかき道をばたづねずてをだえの橋にふみまどひける

(一)父の使として柏木が玉鬘を訪ひ來れり
(二)表立ちて兄弟の交をせず
(三)柏木が
(四)以前は柏木を構ひつけざりしに、今は打つてかはりて簾前に席を設けてもてなす
(五)玉鬘自身に應對せん事は
(六)私はつまらぬ者なれども切つても切れぬ兄弟なるに
(七)兄弟は
(八)玉鬘が自身應對せぬを胸惡く思へり
(九)年來の身の上話をもしたれど
(一〇)兄弟ならば無禮をも許して咎めざる筈なれば
(一一)其惱て居る側へ入れてくれてもよさそうなもの
(一二)斯う申上げるのが此方が氣のきかぬのぢや

る御心かなと、人々はをかしがるに、殿の御使(一)にておはしたり。猶(二)もていでず、忍びやかに御消息なども聞えかはし給ひければ、月のあかき夜、桂の陰に隱れてもの(三)し給へり。見聞き(四)入るべくもあらざりしを、名殘なく南の御簾の前にすゑ奉る。自ら(五)聞え給はむことはしも、なほつゝましければ、宰相の君していらへ聞え給ふ。柏「なにがしを撰びて奉り給へるは、人傳ならぬ御消息にこそ侍らめ。かく物遠くては、いかゞ聞えさすべからむ。自らこそ(六)數にも侍らねど、絶えぬたとひも侍るなるを、如何にぞや、古代のことなれど、頼もしく(七)ぞ思ひ給へける」とて、ものしと(八)思ひ給へり。玉「げに年頃(九)のつもりも取り添へて、聞えまほしけれど、日頃怪しくなやましう侍れば、起きあがりなどもえし侍らでなむ。かくまで咎め給ふも、なか〳〵(一〇)疎々しき心地なむし侍りける」と、いとまめだちて聞え出し給へり。柏「惱ましく(一一)おぼさるらむ御几帳のもとをば、許させ給ふまじくや。よし〳〵、げに聞え(一二)さするも心地なかりけり」とて、大臣の御消息ども忍びやかに聞え給ふ。

（一）頭中に
（二）玉鬘を宮仕に出すにしても源が窃に猶思ひ切れぬ胸のもやくやをよくも察したものぢやと
㊂ 柏木父の使として玉鬘を訪ふ
（三）玉鬘が
（四）來月は九月にて婚姻を忌む月なれば
（五）源が
（六）玉鬘に懸想する人々は
（七）宮仕の事のきまらぬ中に望を遂げんと
（八）夕霧
（九）懸想の心を明したる事
（一〇）玉鬘が
（一一）一通りに玉鬘の世話をする風を示して
（一二）懸想の心を顯はして
（一三）玉鬘の
（一四）彌宮仕に出る樣ならば是非世話をしたしと
（一五）柏木
（一六）現金なる

けたらまし。かの大臣に、（一）いかでかく心清きさまを、知らせ奉らむ、とおぼすにぞ、げに宮仕（二）の筋にて、けざやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひ寄り給ひけるかな、とむくつけく思さる、

かくて御服（三）など脱ぎ給ひて、月立たば（四）なほ參り給はむこと忌あるべし、十月ばかりに、と思し（五）宣ふを、内裏にも心もとなく聞しめし、（六）聞え給ふ人々は、誰もくいと口惜しくて、この（七）御まゐりのさきにと、心よせのよすがくに責め侘びたまへど、吉野の瀧をせかむよりも難きことなれば、いとわりなし、と各答ふ。中將（八）も、（九）なかくなる事をうち出でて、（一〇）いかに思すらむ、と苦しきまゝに、かけり歩きて、いと懇に、（一一）大方の御後見を思ひあつかひたるさまにて、追從しありき給ふ。たはやすく、輕らかに（一二）打ちいでて聞えかゝり給はず、めやすくもてしづめ給へり。實の（一三）御兄弟の君達は、え寄り來ず、（一四）宮仕の程の御後見をと、おのく心もとなくぞ思ひける。（一五）頭中將、心を盡しわびしことは、かき絶えにたるを、うちつけな（一六）

(一)頭中が得心のゆく樣にすべし
(二)儒教の三從の教、「幼則從父兄、嫁則從夫、夫死從子」
(三)源の心に任せて玉鬘を取扱はん事は
(四)頭中が內々で下の如く言はるゝ
(五)源方には身分高き妻妾達が年來居る故玉鬘を寵愛はしながら其等と同等に取扱ふ譯にはゆかず
(六)詮方なさに半は捨てる氣で頭中へ引渡し普通の宮仕をさせ置きて、實際は自分の處へ引留めて置かんと源がたくみたるは巧妙なやり方なりと
(七)證據明白になるべし
(八)隨分よく氣をまはしたものぢや
(九)夕霧の心には
(一〇)源氏
(一一)以下源の心
(一二)推量通りになる事あらば

氣色ばみたりけるにも、答へ給ひける」と聞え給へば、うち笑ひて、源「かた〴〵いと似げなきことかな。なほ宮仕をも何事をも、(一)御心ゆるして、かくなむと思されむ樣にぞ從ふべき。(二)女は三に從ふものにこそあなれど、序をたがへて、(三)おのが心に任せむ事は、あるまじきことなり」と宣ふ。夕(四)「內々にも、(五)やむごとなき此彼、年頃をへてものし給へば、えその筋の人數には物し給はで、(六)すてがてらにかく讓りつけ、おほぞうの宮仕のすぢに、牢籠せむとおぼしおきつる、いとかしこくかどある事なりとなむ、喜び申されけると、確に人の語り申し侍りしなり」と、いとうるはしき樣に語り申し給へば、げにさは思ひ給ふらむかしと思すに、いとほしくて、源「いとまが〳〵しき筋にも思ひ寄り給ひけるかな。いたり深き御心ならひならむかし。今自から、何方につけても、(七)現ならむことありなむ。(八)思ひぐまなしや」と笑ひたまふ。御氣色はけざやかなれど、(九)なほ疑は多かり。(一〇)大臣も、さ(一一)りや、かく人の推しはかる、(一二)案におつることもあらましかば、いと口惜しくねぢ

しく申し給ふ。源「難しや。(一)我心ひとつなる人のうへにもあらぬを、(二)大將さへわれをこそ怨むなれ。すべて(三)かゝることの心苦しさを見過さで、あやなき人の怨負ふ、かへりては輕々しきわざなりけり。かの(四)母君の、哀に言ひおきし事の忘れざりしかば、心ぼそき(五)山里になむと聞きしを、かの(六)大臣はた、聞き入れ給ふべくもあらずと愁へしに、いとほしくて、かく(七)渡しはじめたるなり。こゝにかく(八)物めかすとて、かの大臣も人めかい給ふなゝめり」と、つき〴〵しく宣ひなす。源「(九)人がらは、宮の御人にて、いとよかるべし。今めかしう、いとなまめきたる樣して、さすがに賢く、過すまじくなどして、あはひは目安からむ。さて又宮仕にも、いとよく足ひたらむかし。容貌よくらう〳〵じきものの、公事などにも(一〇)おぼめかしからず、はか〴〵しくて、(一一)上の常に願はせ給ふ御心には、違ふまじき」など、(一二)宣ふけしきの、見まほしければ、夕「年頃かくてはぐくみ聞え給ひける御志を、(一三)ひがざまにこそ人は申すなれ。かの(一四)大臣もさやうになむおもむけて、(一五)大將のあなたざまの使に、

(一)玉鬘の身の上は我一人の獨斷で計らへるものでもなきに
(二)鬚黒
(三)玉鬘の身の上の氣の毒なるを構はぬ譯にはゆかざりし故、なまじ世話しはじめてつまらぬ人の怨を負ふのは
(四)夕顔
(五)山里に玉鬘が居ると聞きしに
(六)頭中が構はぬとて愚痴をこぼす故
(七)引取りしなり
(八)玉鬘を我が大事にし出したる故
(九)玉鬘の人柄は螢の妻にして適當なるべし
(一〇)覺束なからず
(一一)帝の望通りの人物なるべし
(一二)斯くいふ源の心底を見たくなりて
(一三)玉鬘は源の妾なりなどとんでもない事を申します
(一四)頭中も其積りで
(一五)鬚黒が頭中へ申込みたるにも其趣を以て斷りたり

て覺えし御けはひを、かばかりの物越にても、ほのかに御聲をだに、いかならむ序にか聞かむ、とやすからず思ひつゝ、（一）御前に參り給へれば、出で給ひて、御かへりなど聞え（二）給ふ。源「この宮仕を、しぶ（三）／＼げにこそ思ひ給へれ。宮（四）などのれんじ給へる人にて、いと心深き哀をつくし、いひ惱まし給ふに、心やしみ給ふらむと思ふになむ、心苦しき。されど、大原野の行幸に、上を（五）見奉り給ひては、いとめでたくおはしけりと思う給へりき。若き人は、（六）ほのかにも見奉りて、えしも宮仕のすぢ、もて離れじと思ひてなむ、この事もかくものせし」など宣へば、夕「さても人ざまは、（七）何方につけてかは、たぐひて物し給ふらむ。中宮かく竝なきすぢにておはしまし、又弘徽殿やむごとなく、覺ことにてものし給へば、（八）いみじき御思ありとも、立ちならび給ふこと難くこそ侍らめ。（九）宮はいと懇に思したゝなるを、（一〇）わざとさるすぢの御宮仕にもあらぬものから、ひきたがへたらむさまに御心おき給はむも、さる御中らひにては、いといとほしくなむ聞き給ふる」と。おとなく／＼

（一）源の
（二）夕霧が源に
（三）玉鬘が
（四）其澁々なるは螢兵部卿などが口說上手にて甘い口をきくのに心が移つて居るのであらうと思へば氣の毒
（五）玉鬘が
（六）帝の器量を仄にでも見奉る以上は宮仕を拒む氣にはなり得じと思ひて玉鬘に行幸を見物させたる也
（七）玉鬘の人柄は誰に似て居るならん
（八）帝の如何に寵愛せられても
（九）螢兵部卿は玉鬘を
（一〇）玉鬘の宮仕は尚侍たれば女御更衣の宮仕ではないにせよ、兎に角螢の心を無にしたりとて螢が面白からず思はむ



(一)言ひ出したらば却て
(二)「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はんとぞ思ふ」
(三)柏木の樣子
(四)柏木は兄妹なる事がわかりて以來戀情を除き去りて
(五)兄妹故どうせ末始終親しかるべきを賴みて
(六)我を
(七)玉鬘、既に尙侍になれる也
(八)傍近く居たりとて手は出さぬ我が心中は
(九)夕霧の心

を思ひ知りながら、えしづめ侍らぬ心の中を、いかでか知ろしめさるべき。なか(一)なか思し疎まむが侘しさに、いみじく籠め侍るを、(二)今はたおなじと思う給へわびてなむ。(三)頭中將のけしきは御覽じ知りきや。人の上になど思ひ侍りけむ。身にてこそいとをこがましく、かつは思ひ給へ知られけれ。なか〳〵、(四)かの君は思ひさまして、(五)終に御あたり離るまじき賴に、思ひ慰めたる氣色など見侍るも、いと羨ましくねたきに、(六)哀とだに思しおけよ」など、こまやかに聞え知らせ給ふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。(七)かんの君やう〳〵引入りつゝ、むづかしと思したれば、夕「心憂き御氣色かな。(八)あやまちすまじき心の程は、おのづから御覽じ知らるゝやうも侍らむものを」とて、かゝる序に、今少しも漏らさまほしけれど、玉「怪しく惱ましくなむ」とて、入り果て給ひぬれば、いといたく打ち歎きて立ち給ひぬ。

(九)なか〳〵にも打ち出でてけるかなと、口惜しきにつけても、かの今少し身にしみ

(一)私の心には
(二)喪服の色
(三)夕霧が
(四)蘭はゆかりの色即ち紫色の花なれば斯く言へるなるべし
(五)放さずして
(六)何の考もなく
(七)玉鬘の袖を夕霧が
(八)上句は夕霧と玉鬘と同じく大宮の喪服を著たるをいへり
(九)「東路の道のはてなる常陸帶のかごとばかりも逢はんとぞ思ふ」歌の「かごとばかりも」の縁にて此歌を引きたる也。夕霧の此歌は、かごと計も逢はんの意なるにやと思へば玉鬘が厭はしくなりたりと也
(一〇)他人ならばゆかりの薄きをかこつも尤なれども、我と君とは從兄妹なれば緣の薄きをかこつ筈はなし
(一一)斯く親しく物語するより以上の親しさとは何ぞ
(一二)御察しなされても分りそうな物
(一三)帝が心をかけらるる由は承知して居ながら諦める事の出來ぬ心中を

色なくば、えこそ思ひ給へわくまじかりけれ」と宣へば、玉「何事も思ひわかぬ心(一)には、ましてともかくも思ひ給へたどられ侍らねど、かゝる色(二)こそ、怪しく物哀なるわざに侍りけれ」とて、例よりもしめりたる御氣色、いとらうたげにをかし。かゝる序にとや思ひ寄り(三)けむ蘭の花のいとおもしろきを持給へりけるを、御簾のつまよりさし入れて、夕「これも(四)御覽ずべき故はありけり」とて、頓にもゆるさで(五)持たまへれば、うつたへに(六)、思ひもよらで取り給ふ御袖(七)を、引きうごかしたり。

夕(八)おなじ野の露にやつるゝ藤袴あはれはかけよかごとばかりも

道(九)のはてなるとかや、いと心づきなくうたてなりぬれど、見知らぬ様に、やをら引入りて、

玉(一〇)たづぬるにはるけき野邊の露ならばうす紫やかごとならまし

かやうにて(一一)聞ゆるより、深き故はいかゞ」と宣へば、夕「淺きも深きも(一二)、思しわく方は侍りなむと思ひ給ふる。まめやかには、(一三)いと辱きすぢ

（一）内緒の話があるが此儘では申上げにくし、玉鬘に近づかん爲に詐りていふ也
（二）源の言附でもなき口上を
（三）口上の趣は、帝が心を玉鬘にかけて居らるゝ故其積で居給へといふ樣な事也
（四）玉鬘が
（五）除服の祓する爲に賀茂川原に出給へと源が申されたり
（六）夕霧の一緒に行かるるは仰山なるべし
（七）玉鬘がなぜ大宮の爲に喪服を著て居るかといふ譯を人に知らせたくなしと
（八）戀しき忍び難き祖母の紀念なれば
（九）自分と玉鬘と萬更の他人でもなき關係がよく自分には分らぬ
（一〇）喪服の事

夕「人に聞かすまじと侍ることを聞えさせむに、いかゞ侍るべき」と氣色だてば、近く侍ふ（一）人も、すこし退きつゝ、御几帳の後などに側みあへり。（二）そら消息をつきづきしう取繼けて、こまやかに聞え給ふ。（三）上の御氣色のたゞならぬ筋を、さる御心し給へなどやうの筋なり。答へ給はむこともなく、うち歎き給へるほど、忍びやかに美しういとなつかしきに、なほえ忍ぶまじく、夕「御服もこの月にはぬがせ（四）給ふべきを、日次なむよろしからざりける。十三日には、（五）河原へ出でさせ給ふべきよし宣はせつる。某も御供に侍ふべくなむ思ひ給ふる」と聞え給へば、玉「（六）たぐひ給はむもこと〴〵しきやうにや侍らむ。忍びやかにてこそよく侍らめ」と宣ふ。この御服などのくはしき樣を、人にあまねく知らせじ、とおもむけ給へるけしき、いと勞（七）あり。中將「漏らさじとつゝませ給ふらむこそ心憂けれ。（八）忍びがたく思ひ給へらるゝかたみなれば、ぬぎ捨て侍らむことも、いと物憂く侍るものを。さても、怪しう（九）もてはなれぬことの、又心得がたきにこそ侍れ。この（一〇）御あらはし衣の

(一)夕霧
(二)これも祖母の喪中也
(三)喪中は冠の纓を巻く也
(四)夕霧が玉鬘に
(五)玉鬘が
(六)兄妹ではなき事が分りたりとて急に待遇を變へるも異な事故
(七)簾內にて帳を立て其中に玉鬘が居て外の夕霧に應對する也
(八)源氏
(九)帝より斯く／＼の仰ありとの傳言を夕霧が言ひ附けられて來たる也
(一〇)玉鬘の容姿
(一一)夕霧が
(一二)兄妹の中で戀するはけしからぬと前には思ひしに
(一三)他人と分りてからは只はおけぬ心持がして
(一四)玉鬘宮仕に出でたらば帝がどうせ只は置き給はじ
(一五)帝と玉鬘秋好弘徽殿等の中をいふ
(一六)趣ありて而も面倒なる關係が

いと花やかにもてはやされておはするを、御前なる人々は、うち笑みて見奉るに、又(一)宰相の中將、(二)同じ色の今少しこまやかなる直衣姿にて、(三)纓巻き給へる姿しも、又いとなまめかしく淸らにておはしたり。初より、物まめやかに(四)心よせ聞え給へば、もてはなれて疎々しきさまには、(五)もてなし給はざりしならひに、今、(六)あらざりけりとて、こよなく變らむもうたてあれば、なほ(七)御簾に几帳添ひたる御對面は、人傳ならでありけり。殿(八)の御消息にて、內裏(九)より仰言あるさま、やがてこの君の承り給へるなりけり。御返、おほどかなるものから、いとめやすく聞えなし給ふけはひの、らう／＼じくなつかしきにつけても、かの野分のあしたの御朝顏は、(一〇)心にかゝりて戀しき(一一)を、(一二)うたてあるすぢに思ひしを、(一三)聞きあきらめて後には、なほもあらぬ心地添ひて、(一四)この宮仕を、大方にしも思しはなたじかし、さばかり見(一五)處ある御あはひどもにて、(一六)をかしきさまなることの煩はしきはた、必ず出で來なむかしと思ふに、たゞならず胸ふたがる心地すれど、つれなくすくよかにて、

(一)玉鬘の心
(二)源の世話になりて居るのも
(三)懸想心あるをいふ
(四)源と別れて
(五)人の嫌疑を逃れて潔白を立てたし
(六)源氏
(七)取りしきりて我が娘として呼び迎へ、きつぱりしたる取扱をする譯にもゆかぬ故
(八)どちらつかずにて
(九)實父が出來て後は
(一〇)懸想がましき所置振
(一一)存分に言はずとも
(一二)遠まはしに打明けて言ふべき母も玉鬘には無く
(一三)源も頭中も
㊁夕霧源氏の使とて玉鬘を訪ひ、懸想の心をほのめかす、源と夕霧と玉鬘の談
(一四)喪服なれば也、祖母の喪中

れず物なげかし。(一)さりとて、(二)かゝる有樣も、あしき事はなけれど、この大臣の御心ばへの、(三)むづかしく心づきなきも、いかなる序にかは、(四)もて離れて、(五)人の推し量るべかゝめるすぢを、心清くもありはつべき。實の父大臣も、(六)この殿のおぼさむ所を憚り給ひて、(七)うけばりてとり離ち、けざやぎ給ふべきことにもあらねば、なほとてもかくても見苦しう、(八)かけ〴〵しき有樣にて、心をなやまし、人にもて騒がるべき身なゝめりと、なか〳〵、この(九)親尋ね聞え給ひて後は、殊に憚り給ふ氣色もなき、大臣の君の御(一〇)もてなしを取り加へつゝ、人知れずなむ歎かしかりける。思ふことを、(一一)まほならずとも、片はしにても、(一二)うちかすめつべき女親もおはせず、(一三)何方も〳〵、いと恥かしげに、いとうるはしき御樣どもには、何事をかは、然なむ斯くなむとも聞えわき給はむ。世の人に似ぬ身の有樣をうちながめつゝ、夕暮の空の哀げなる氣色を、端近くて見出し給へるさま、いとをかし。

薄き鈍色の御衣、なつかしき程にやつれて、(一四)例に變りたる色あひにしも、容貌は

藤袴

槩梗

㊀玉鬘の煩悶。㊁夕霧、源氏の使として玉鬘を訪ひ、懸想の心をほのめかす。源氏と夕霧と玉鬘の噂。㊂柏木、父の使として玉鬘を訪ふ。㊃髯黒熱心に玉鬘に懸想す。㊄懸想文、玉鬘の許に集る。

(一)尚侍の御宮仕のことを、誰も〳〵そゝのかし給ふも、(二)如何ならむ、親と思ひ聞ゆる(三)人の御心だに、(四)打解くまじき世なりければ、ましてさやうの交らひにつけて、(五)心より外に便なきこともあらば、(六)中宮も女御も、方々につけて心おき給はば、はしたなからむに、我身は斯くはかなき様にて、何方にも深く思ひとゞめられ奉るほどもなく、(七)淺きおぼえにて、(八)たゞならず思ひ言ひ、いかで人わらへなるさまに見聞きなさむと、うけひ給ふ人々も多く、とかくにつけて、安からぬことのみありぬべきを、(九)物思し知るまじき程にしあらねば、さまぐ〳〵に思ほし亂れ、人知

㊀玉鬘の煩悶
(一)玉鬘の心
(二)宮仕はどうしたものであらうぞ
(三)源氏
(四)源の懸想心あるを云ふ
(五)不慮に帝の御寵愛を受くる事もあらば
(六)秋好も弘徽殿も我に氣まづき樣にならば
(七)人の氣受輕々しく
(八)我を嫉みて人に嘲弄させんと咒ふ者も多く
(九)玉鬘が旣に物のわかる年輩なれば

くかたはなりや。近江「やまと歌は、あやしくも續け侍りなむ。むね〳〵しき方のことはた、殿より申させ給はば、つまごゑ(二)のやうにて、御徳をも蒙り(一)侍らむ」とて、手をおしすりて聞え居給へり。御几帳の後などにて聞く女房、死ぬ(三)べくおぼゆ。物笑に堪へ(四)ぬは、すべり出でてなむ慰めける。女御も御面赤みて、わりなう見苦しと思したり。殿(五)も、「物むづかしき折は、近江の君見るこそ萬まぎるれ」とて、唯笑ひぐさにつくり給へど、世の人は、「恥ぢ(六)がてらはしたなめ給ふ」など、さまざま言ひけり。

(一) 重なる勸の方の事も
(二) 細聲がかりて其御蔭を被る事あるべし、歌を謠ふ時の助聲を「つまごゑ」といひしならんといふ
(三) をかしくて
(四) 我慢のできぬ女は
(五) 頭中
(六) 斯る不肖の娘をもてるを恥かしく思ひながら其娘を嘲弄して恥をかゝするはけしからぬ事

（一）返事の聲
（二）女御に一生懸命に仕へ居る其方の樣子では官女たるには最も適任なるべし
（三）なぜ早く我に言はなかつた
（四）其樣に申上げたかりしかど
（五）飽く迄あてにして居たるに
（六）候補者が他にある樣に聞きし故
（七）夢に金持になりたる
（八）と胸をつきたる
（九）けろりとして居る
（一〇）第一番に候補者として奏請する筈なりしに
（一一）玉鬘
（一二）我が懇願したらば
（一三）帝が
（一四）願書
（一五）詠歌
（一六）帝は人に勝れて情をすてぬ御方なれば
（一七）作者の頭中を評する詞

序に、頭中「いづら、この近江の君、こなたに」と召せば、近江「を（一）」と、いとけざやかに聞えて、出で來たり。頭中「（二）いとつかへたる御けはひ、おほやけ人にて、げに如何にあひたらむ。尙侍のことは、（三）などか己に疾くは物せざりし」と、いとまめやかにて宣へば、いと嬉しと思ひて、近江「（四）さも御氣色賜はらまほしう侍りしかど、この女御殿など、おのづから傳へ聞えさせ給ひてむと、（五）賴みふくれてなむ侍ひつるを、（六）なるべき人ものし給ふやうに聞き給ふれば、（七）夢に富したる心地し侍りてなむ、（八）胸に手を置きたるやうに侍る」と申し給ふ。舌ぶりいと物さわやかなり。（九）笑み給ひぬべきを念じて、頭中「いと怪しう覺束なき御癖なりや。さも思し宣はましかば、（一〇）まづ人のさきに奏してまし。太政大臣の御女、（一一）やむごとなくとも、（一二）ことに切に申さむことは、（一三）聞召さぬやうあらざらまし。今にても申文を取りつくりて、（一四）美美しう書き出されよ。（一五）なが歌などの心ばへあらむを御覽ぜむには、捨てさせ給はじ、（一六）上はその中に情すてずおはしませば」など、いとよう賺し給ふ。（一七）人の親げな

（一）近江君が
（二）此人を迎へたるは成程我が失策なりしと
（三）女御に對する動方の類なきは女御も一方ならず感じ居らるゝ筈
（四）ともかく落着き給へ
（五）その凄じき意氣込では
（六）やがて願の叶ふ時もあるべし
（七）寧ろ天照大神が天の岩戸に籠られし樣に堅く引籠り居る方が無難なるべし、上に「堅き巖云々」といへるは、天照大神は素盞嗚尊を待ち給ふ時の御勢のはげしきを形容せる古事記の文を引きたる形容なる故、其に因みてかくは言へる也
（八）弘徽殿女御
（九）氣輕く小まめに
（一〇）女御が

てるまじき殿のうちかな。あなかしこ〳〵」と、しりへ樣にゐざり退きて、見おこせ給ふ。憎げもなけれど、いと腹惡しげに、眦ひきあげたり。中將は、かく（一）言ふにつけても、げにし誤りたること（二）と思へば、まめやかにて物し給ふ。少將は、「（三）かゝる方にても、類なき御有樣をば、疎にはよも思さじ。御心をしづめ（四）給うてこそは。堅き（五）いはほも沫雪になし給ふべき御氣色なれば、今（六）よう思ひかなひ給ふ時もありなむ」と、ほゝゑみて言ひ居給へり。中將も、「天（七）の岩門さし籠り給ひなむや、めやすく」とて立ち給ひぬれば、ほろ〳〵と泣きて、近江「この君達さへ、すげなうし給ふに、たゞ御前（八）の御心の哀におはしませば侍ふなり」とて、いとかやすく（九）いそしく、下﨟童べなどの、仕う奉りたへぬ雜役をも、立ちはしり易く惑ひ歩きつつ、志を盡して宮仕しありきて、近江「尙侍におのれを申しなし給へ」と責め聞ゆれば、あさましう、いかに思ひていふ事ならむと思す（一〇）に、物も言はれ給はず。大臣この望を聞き給ひて、いと花やかにうち笑ひ給ひて、女御の御方に參り給へる

けり、自然に言ひ漏しつゝ、やう〳〵聞え出でけるを、このさがなものの君聞きて、女御(二)の御前に、中將、少將(三)侍ひ給ふに出で來て、近江(一)「殿は御女設け給へるなり。あなめでたや。いかなる人、二方(四)にもてなさるらむ。聞けば彼も劣り腹な(五)り」と、あうなげ(六)に宣へば、女御かたはら痛しと思して、物も宣はず。中將、「しか册かるべき故こそ物し給ふらめ。さても誰が言ひしことを聞きて、かくゆくりなく打出で(七)給ふぞ。物言ひ(八)たゞならぬ女房などもこそ、耳とゞむれ」と宣へば、近江「あなかま。皆聞きて侍り。尚侍になるべかンなり。宮仕にと急ぎ出でたち侍(九)りし事は、さやうの御顧(一〇)もやとてこそ、なべての女房達だに仕う奉らぬ事まで、おりたち仕う奉れ(一一)。御前のつらくおはしますなり(一二)」と、恨みかくれば、皆ほゝゑみて、「尚侍あかば(一三)、某等こそ望まむと思ふを、非道にも思しかけけるかな」と、宣ふに、腹だちて、近江「めでたき御中に、數ならぬ人(一四)は交るまじかりけり。中將の君ぞつらくはおはする。さかしらに迎へ(一五)給ひて、輕め嘲り給ふ。少々の人(一六)はえ立

(一)近江君
(二)弘徽殿女御
(三)柏木と紅梅
(四)源と頭中と兩方で珍重される
(五)玉鬘も我と同じく母の素姓は賤しきよしなるに
(六)不遠慮に
(七)言ひ出し給ふぞ
(八)口の多い侍女ども
(九)私が宮中の御奉公がしたしと急ぎて弘徽殿へ參りたる趣意は
(一〇)女御が私を尚侍にでもして下さるかと思へばこそ
(一一)進んでつとめたるなれ
(一二)尚侍を人に取られたるは女御が惡いのである
(一三)缺員ならば私どもが願ひてならんと思ふを、嘲弄して言へる也
(一四)私如き
(一五)私を呼取りながら
(一六)私如き卑しき者はとても居たゝまれぬ

(一)玉鬘が

(二)今迄は裳著祝がすまぬに託して婿取を延引もせしが、今はそれも濟みたれば

(三)熱心に玉鬘を懇望すれど

(四)尚侍にせよとある仰を今一度御斷り申上げ、其上の仰次第にて外の相談はすべし

(五)玉鬘を

(六)玉鬘がつまらぬ女ならば源が斯迄大事にする筈はなし

(七)螢の卷にありし事

(八)弘徽殿女御

㊅近江君、尚侍にならん事を望みて人々に嘲弄せらる

(九)世間に評判されまじと

るべき」と申し給へば、頭中「唯御もてなしになむ隨ひ侍るべき。かうまで御覽ぜられ、ありがたき御育にかくろへ(一)侍りけるも、前の世の契おろかならじ」と申し給ふ。御贈物など更にもいはず、すべて引出物、祿ども、しな〴〵につけて例ある事限あれど、又こと加へ二なくせさせ給へり。大宮の御惱に託け給ひし名殘もあれば、こと〴〵しき御遊などはなし。

兵部卿宮、(二)「今は託けやり給ふべきとゞこほりも無きを」と、(三)おりたち聞え給へど、源「内裏より(四)御氣色ある事をかへさひ奏し、また〳〵仰ごとに隨ひてなむ、異ざまの事はともかくも思ひ定むべき」とぞ聞えさせ給ひける。父大臣は、仄なりしさまを、いかでさやかに又見む(五)、(六)なまかたほなる事見え給はば、かうまで事々しくもてなし思さじ、など、なか〳〵心もとなう戀しう思ひ聞え給ふ。今ぞかの御(七)夢も、誠に思し合せける。(八)女御ばかりには、詳なる事のさま聞え給ひけり。(九)世の人聞に暫しこの事出さじと、切に籠め給へど、口さがなきものは世の人なり

(一)返歌も出ぬ故
(二)頭中が顧みぬよるべなき身の詮方なく源の許に身を寄せたり、玉鬘に代りてよめる也
(三)柏木
(四)銘々窃に玉鬘に懸想せしに、實妹なる事わかりたれば恨めしくも又嬉しき感ある也
(五)懸想の心を
(六)源が異樣な好をしたものぢや、他人の子を娘らしくもてなして人に氣をもませたるをいふ
(七)秋好
(八)頭中にいふ也
(九)玉鬘に對する處置につきて注意して
(一〇)輕き身分の人こそ
(一一)どの樣に振舞ひても差支はないが
(一二)我々の身分になれば世間の人が何の彼のと評判すべし、其ではされぬよりは面白からぬ譯なれば
(一三)いつとなく人に知らせて目だたぬ樣にするがよし

ひ、つゝましさに、(一)え聞え給はねば、殿、

源「よるべなみ(二)かゝる渚にうち寄せて海士も尋ねぬもくづとぞ見し

いとわりなき御うちつけごとになむ」と聞え給へば、頭中「いと理になむ」と、聞えやる方なくて出で給ひぬ。御子たち次々の人残るなく集ひ給へり。御懸想人も數多まじり給へれば、この大臣かく入りおはして程經るを、いかなる事にかと思ひ疑ひたまへり。かの殿の君達、中將、(三)辨の君ばかりぞほの知り給へりける。人知れ(四)ず思ひし事を、辛うも嬉しうも思ひなり給ふ。辨は、「(五)能くぞ打出でざりける」とさゞめきて、辨「(六)樣異なる大臣の好どもなゝめり。中宮の御類にしたて給はむとや(七)思すらむ」など、各いふよしを聞き給へど、源「(八)なほ暫しは御心づかひし給ひて、(九)世に謗なき樣にもてなさせ給へ。何事も心安きほどの人こそ、(一〇)亂りがはしく、(一一)ともかくも侍るべかめれ。(一二)此方をも其方をも、さま〴〵の人の聞え惱まむ、たゞならむよりは味氣なきを、(一三)なだらかに、やう〳〵人目をもならすなむ、よき事に侍

しなさせ給へり。(一)げにわざと御心とゞめ給ひけることと見給ふも、辱きものから、(二)様かはりて思さる。亥の時にぞ(三)内に入れ奉り給ふ。(四)例の御設をばさるものにて、内の御座いと二なくしつらはせ給ひて、御さかな参らせ給ふ。大殿油例のかゝる所よりは、(五)少し光見せて、をかしき程にもてなし聞え給へり。(六)いみじうゆかしう思ひ聞え給へど、(七)今宵はいとゆくりかなるべければ、(八)引き結び給ふほど、え忍びたまはぬ氣色なり。あるじの大臣、源「今宵は(九)いにしへ様のことはかけ侍らねば、何のあやめもわかせ給ふまじくなむ。(一〇)心知らぬ人目をかざりて、なほ尋常の作法に」と聞え給ふ。頭中「げに更に聞えさせやるべき方も侍らずなむ」御土器まゐるほどに、頭中「(一一)かぎりなきかしこまりをば、世に例なきことと聞えさせながら、今までかく忍びこめさせ給ひける恨も、いかゞ添へ侍らざらむ」と聞え給ふ。

頭中(一二)うらめしやおきつ玉もをかづくまで磯がくれけるあまのこゝろよ

とて猶つゝみもあへずしほたれ給ふ。姫君は、いと恥かしき御有様どものさし集

(一)源が特に注意してしたる事と頭中が見て取るにつけても
(二)頭中が變な心持がする
(三)頭中を簾内に入れて玉鬘に對面せしむる也
(四)定式の裳着の式の用意は勿論
(五)少しあかるくして、玉鬘を頭中に見せん爲也
(六)頭中が玉鬘を
(七)細かなる話を今夜するのは唐突の嫌ありてする譯にゆかぬ故
(八)裳の腰紐を
(九)昔の關係は一切祕密にしてある故、玉鬘との間に關係ある樣の態度を示し給ふな
(一〇)譯を知らぬ人等の手前をつくろひて
(一一)かく丁寧になし下さるゝは希有なる有難き事と御禮は申上げるけれど
(一二)裳着の祝する今日迄我に隠し居たる玉鬘の心が恨めし

(一)まして今は非常にすくみて
(二)深く彫み込みたる如く
(三)憎しとは思ひながら
(四)侍従なども居らぬ故力にすべき人なくてさぞ困りたるべし
(五)他人は思ひもよらぬ事をせらるゝ御心立こそあらずもがなの事である
(六)歌は末摘が眞面目に好いて居る道故返歌をしてやる也
(七)こんな返歌をやつては馬鹿にして居る樣也
(八)つまらぬ話を多く書きたるよ、作者の自評
(九)玉鬘の素姓を聞きたる後は
(一〇)當前以上に

御手は、昔だにありしを、(一)いとわりなうしゞかみ、(二)彫ふかう、強く固く書き給へり。大臣、(三)にくきものの、をかしさをばえ念じ給はで、源「この歌よみつらむほどこそ。まして今は(四)力なくて、所せかりつらむ」と、いとをかしがり給ふ。源「いでこの御返は、さわがしくとも、我せむ」と宣ひて、

源 あやしう(五)人の思ひ寄るまじき御心ばへこそ、然らでもありぬべき事なれ。

と、憎さに書き給ひて、

源 からころもまたからころもからころもかへすがへすぞから衣なる。

とて、源「いと(六)まめやかに、かの人の立てて好むすぢなれば、物して侍るなり」とて見せ奉り給へば、君いとにほひやかに笑ひ給ひて、玉「あないとほし。弄じたるや(七)うにも侍るかな」と、苦しがり給ふ。(八)よしなしごといと多かりや。内の大臣は、さしも急がれ給ふまじき御心なれど、(九)珍らかに聞き給ひし後は、いつしかと御心にかゝりたれば、疾く參り給へり。儀式など(一〇)あべい限に又過ぎて、珍らしき樣に

の事とは聞き過さむ、と思して、形のごとなむし出で給ひける。哀なる御志なりかし。青鈍の細長一襲、落栗(一)とかや、何とかや、昔の人(二)のめでたくしける色あひしたる、あはせの袴一具、紫のしらきり(三)見ゆる、霰地の御小袿と、よき衣箱に入れて、つゝみいとうるはしうて奉れ給へり。御文には、

末摘「知らせ(四)給ふべき筋にも侍らねば、つゝましけれど、かゝる折は思ひ給へ忍び難くてなむ。これは、いと怪しけれど、人にも賜はせよ。

と、おいらか(五)なり。殿(六)御覧じつけて、いとあさましう例のと思すに、御顔あかみぬ。源「怪しき(七)ふるめき人にこそあれ。かく物づつみしたる人は、引入り沈みいりたるこそよけれ。さすがに恥がましや」とて、源「返事はつかはせ。はしたなく(八)思ひなむ。父みこ(九)のいとかなしうし給ひける思ひ出づれば、人に(一〇)おとさむはいと心苦しき人なり」と聞え給ふ。御小袿の袖に、例の(一一)同じすぢの歌ありけり。

末摘「我身(一二)こそうらみられけれから衣君がたもとになれずとおもへば

(一)落栗色
(二)昔の人の賞玩したる
(三)「しらきり」は白霧なるべし、古くなりて色のさめたる爲上に白き霧のかゝりたる樣に見ゆる也
(四)私を誰と御存知あるべき程の身分でもなければ
(五)穩かなる文言也
(六)源氏
(七)末摘は
(八)返事をやらずば末摘が
(九)故常陸宮の祕藏にせられし事を思へば
(一〇)他人より落して輕く扱ふは氣の毒
(一一)おきまりの唐衣の歌あり
(一二)今迄君に疎遠なるは我身の咎ぞと也

と、いと古めかしうわなゝき書い給へるを、殿も此方におはしまして、事ども御覧じ定むる程なれば、見給ひて、源「古代なる御文がきなれど、いたしや、（一）この御手よ。昔は上手に物し給ひけるを、年にそひて怪しく老いゆくものにこそありけれ。いとからく御手震ひにけり」など、うち返し見給ひて、源「（二）能くも玉匣にまつはれたるかな。三十一字の中に、（三）他文字は少く添へたることの難きなり」と、忍びて笑ひ給ふ。中宮より白き御裳、唐衣、御装束、御髪上の具などいと二なくて、例の壺どもに、唐の薫物、心ことに薫深くてたてまつり給へり。御方々皆心々に、御装束、人々の料に、櫛、扇などまで、とり〴〵にし出で給へる有様、劣り優らず、さま〴〵につけて、さばかりの御心ばせどもに、いどみ盡し給へるは、をかしう見ゆるを、（四）東の院の人々も、かゝる御いそぎは聞き給ひけれども、訪ひ聞え給ふべき（五）數ならねば、たゞ聞き過したるに、常陸宮の御方、怪しう（六）物うるはしう、然るべきことの折過さぬ、古代の御心にて、いかでかこの御いそぎを、餘所

（一）うまいものぢや
（二）此歌はよくも玉匣に縁ある詞ばかり集めたものぢや、「ふた」「身」「かけご」皆縁語也
（三）一首の中他の語は少き程に縁語ばかりを寄せたるは中々出來ぬ藝ぞと冷かしたる也
（四）空蟬等
（五）人數ならぬ身故
（六）物堅く

(一)玉鬘の身の上につきての祕密を源が言ひ聞かせたり
(二)夕霧の心
(三)玉鬘と源と睦まじ過ぎたも尤と
(四)雲井雁よりも玉鬘の方が器量がよかりしを思出して平氣でも居られず
(五)早く玉鬘に言寄ればよかつたと今更馬鹿々々しく思へり
(六)雲井雁といふ女がありながら又玉鬘に懸想するはけしからぬ筋違ひの事ぢやと
(七)裳著祝の當日
(八)尼の身なれば手紙をやるも憚ありと也
(九)我が長命にあやかる處だけを取得に勘辨してくれるかと思ひて此手紙をやる
(一〇)玉鬘の素姓の分りたる上は萬更今よりの祝をかまはずに居るも妙なもの
(一一)御返事次第でどの樣にもすべし
(一二)源の方から言ひても頭中の方から言ひても御身は我が孫ぞと也

親と聞えながらも、ありがたからむをと思すものから、いとなむ嬉しかりける。かくて後は、中將の君にも、忍びて(一)かゝることの心は宣ひ知らせける。(二)あやしの事どもや、(三)宜なりけりと、思ひ合する事どももあるに、(四)かのつれなき人の御有樣よりも、見どころは優りぬべかりしを、なほもあらず思ひ出でられて、(五)思ひよらざりける事よと、しれ〴〵しき心地す。されど、(六)あるまじく、ねぢけたるべき程なりけりと、思ひ返すことこそは、有り難きまめ〳〵しさなゝめれ。

かくて(七)その日になりて、三條の宮より忍びやかに御使あり。御髪の箱など、俄なれど、事どもいと淸らにしたて給ひて、

大宮聞え(八)むにも忌々しき有樣を、今日は忍びこめ侍れど、さる方にても、(九)長き例ばかりを思し許すべくやとてなむ。哀に(一〇)承りあきらめたる筋を、かけ聞えざらむも、いかゞ。(一一)御氣色に隨ひてなむ。

(一二)ふたかたにいひもてゆけば玉くしげ我身はなれぬかけごなりけり

るべきにか、など、（一）ひが心をえつゝ、かゝる筋とは思ひ寄らざりけり。

大臣、（二）うちつけにいといぶかしう、心もとなう覺え給へど、（三）ふと（四）然受けとり親がらむも、便なからむ、（五）尋ね得給へらむ初を思ふに、定めて心清う見放ち給はじ、（六）やむごとなき方々を憚りて、（七）うけばりてその列にはもてなさず、さすがに煩はしう、物のきこえを思ひて、かく明し給ふなゝめり、と思すは口惜しけれど、それを疵とすべきことかは、（八）殊更にもかの御あたりに觸ればはせむに、などか覺の劣らむ。（九）宮仕ざまにおもむけ給へらば、女御などの思さむことも味氣なし、と思せど、ともかくも（一〇）思ひより宣はむ掟を違ふべきことかは、と萬におぼしけり。かく宣ふは、二月朔日ごろなりけり。

十六日彼岸の初にて、いとよき日なりけり。近う又よき日なしと、勘へ申したりけるうちに、（一一）よろしうおはしませば、（一二）急ぎ立ちて、（一三）例の渡り給ひても、大臣に申しあらはしゝ様など、いと細に、あるべき事ども（一四）教へ聞え給へば、（一五）哀なる御心は、

（一）惡く合點して

五 玉鬘裳著祝、末摘花の祝の歌と贈物、頭中將腰結の役に招待せらる

（二）突然なる事故

（三）頭中の心

（四）玉鬘を

（五）源の抑玉鬘を引取りたる動機を思へば、今迄定めし唯は置かざりしなるべし

（六）既に我物にはしたるものの案上などを憚りて

（七）表向他の妻妾と一列には取扱はず

（八）わざ〳〵賴みて源氏の妻妾にしても外聞惡き事はなし

（九）若し源が玉鬘を宮仕に出す様の事あらば弘徽殿女御の手前面白くなし

（一〇）源の

（一一）大宮の容態よき故

（一二）源が御裳著の祝を

（一三）玉鬘方へ

（一四）玉鬘に

（一五）源程の親切は實父と雖もあるまじとは思ふものの、矢張親にあふは嬉し

(一) 歸る氣になれぬ
(二) 葵上
(三) 源の
(四) 引歌未詳
(五) 夕霧
(六) 源が言ひ出さずに仕舞ひたり
(七) 雲井雁一件につきての頭中の仕方が不心得なりと思ふ廉がある故、之に對して口出しするも外聞惡く思ひて言ひ出さず
(八) 源から言ひ出しもせぬに出過ぎた口もきゝ難き故これも言ひ出さず
(九) 突然に私が御供して行きたらば人騷がせなるべければ、今日は御免を蒙り今日の御禮には改めて參上すべし
(一〇) 源が
(一一) 御供の人々の心
(一二) 前に源が關白を頭中に讓りたる事あれば也

給へ出でられて、戀しき事の忍び難きに、立ち出でむ心地もし侍らずこそ」とて、をさ〲心弱くおはしまさぬ六條殿も、醉泣にや、(一)うちしほたれ給ふ。宮はた況いて、姫君(二)の御事を思し出づるに、ありしにまさる御有樣(三)いきほひを見奉り給ふに、飽かず悲しくてとゞめがたく、しほ〲と泣き給ふ。(四)あまごころもは、げに心ことなりけり。かゝる序なれど、中將(五)の御事をば、(六)うち出で給はずなりぬ。ひとふし用意なしと思しおきてければ、口いれむことも人わろく思し留め、かの大臣(七)はた、人の御氣色なきに、さし過し難くて、流石にむすぼほれたる心地し給ひけり。頭中「今宵(八)も御供に侍ふべきを、うちつけ(九)に騷しくもやとて。今日のかしこまりは、殊更になむ參るべく侍る」と申し給へば、さらば、この御惱もよろしう見え給ふを、必ずきこえし日違へさせ給はず、渡り給ふべきよし、聞え(一〇)契り給ふ。御氣色どもよくて、おの〲出で給ふ響いといかめし。君達の御供の人々も、(一一)何事ありつるならむ、珍らしき御對面に、いと御氣色よげなりつるは、又(一二)いかなる御讓あ

(一)「御顧をこそ思ひ給へ知らぬには」とつゞく也
(二)源が玉鬘の事を遠まはしに言ひ出したり
(三)其昔心にかけて玉鬘を尋ねたる事は何かの序に御噂申上げし事ある心地す
(四)近江君などの事をいふ
(五)大勢の子どもを並べて見れば
(六)玉鬘の事が
(七)遠き昔の交

をならべたる數にも侍らで、嬉しき御顧をこそ、(一)はかぐ〵しからぬ身にてかゝる位に及び侍りて、朝廷に仕う奉り侍ることに添へても、思ひ給へ知らぬには侍らぬを、齡のつもりには、げに自らうち緩ぶ事のみなむ、多く侍りける」などかしこまり申し給ふ。その序にほのめかし出で給ひけり。(二)大臣、「いと哀に珍らかなることにも侍りけるかな」と、まづうち泣き給ひて、頭中「當昔いかになりにけむ(三)と、尋ね思ひしさまは、何の序にか侍りけむ、愁に堪へず、漏し聞召させし心地なむし侍る。今かう人數にもなり侍るにつけては、(四)はかぐ〵しからぬ者どもの、方方につけてさまよひ侍るを、かたくなしく見苦しと見侍るにつけても、又さる樣にて、數々(五)に連ねては、哀に思う給へらるゝ折に添へても、まづなむ(六)思ひ給へ出でらるゝ」と宣ふ序に、かのいにしへの雨夜の御物語に、いろ〵なりし御むつごとの定を思し出でて、泣きみ笑ひみ、皆うち亂れ給ひぬ。夜いたう更けて、おのおのあがれ給ふ。源「かく參り來あひては、(七)更に久しくなりぬる世の古事、思ひ



（一）御召がなしとて今日參らずに居たらば爾御不興を被るのであつた
（二）私の方にこそ君の御叱を蒙る事があると見えて君の御仕向に隨分つらい事がある
（三）雲井雁の一條を氣を持たせて源が言はるゝに
（四）頭中が
（五）かはる事はなし
（六）いかめしき御振舞も畢竟御身分柄の事故其筈の事とは思へど
（七）私の如き親しき者に對しては御威勢をしばらく忘れて御訪ね下されてもよい筈と

惡しかりぬべかりけるを、（一）召なきに憚りて、承り過してましかば、御勘事や添はまし」と申し給ふに、源「（二）勘當はこなた樣になむ。からしと思ふ事多く侍る」など、（三）けしきばみ給ふに、この事にやと思せば、（四）煩はしくて、畏まりたる樣にて物し給ふ。源「昔より、公私のことにつけて、心のへだてなく、大小の事も聞え承り、羽をならぶるやうにて、おほやけの御後見も仕う奉らむ、となむ思う給へしを、末の世となりて、當昔思ひ給へし本意なきやうなること、うち交り侍れど、それは内々の私事にこそ。大方の志は、更に（五）うつろふ事なくなむ。何ともなくてつもり侍る年齡にそへては、古の事なむ戀しかりけるを、對面賜はることもいと稀にのみ侍れば、（六）事かぎりありて、世だけき御ふるまひとは思ひ給へながら、（七）親しき程には、その御勢をも引きしじめ給ひてこそは、訪ひ物し給はめとなむ、うらめしき折々侍る」と聞え給へば、頭中「古はげに面馴れて、怪しくたい〴〵しきまで馴れ侍ひ、心に隔つることなく御覽ぜられしを、朝廷に仕う奉りし際は、羽

(一)源はしどけなき姿は却て光を増しこそすれ、頭中の非常に體裁づくりたるに比べて劣らぬ處か水際立ちて優れて居る
(二)二人共頭中の弟
(三)わざ〱呼び集めたる譯でもないに
(四)大宮のすぐれて運のよき事を
(五)離れて居る時こそ
(六)伺候せねばならぬ筈なるか

の御直衣に、今やう色の御衣ひき重ねて、しどけなきおほぎみ姿、いよ〱譬へむものなし。光(一)こそまさり給へ、かうしたゝかに引繕ひ給へる御有様に、なずらひても見え給はざりけり。君達次々に、いと物清げなる御心なからひにて、集ひ給へり。藤大納言(二)、春宮大夫など今は聞ゆる御子どもも、皆なり出でつゝものし給ふ。おのづから、わざともなきに(三)、おぼえ高くやむごとなき殿上人、藏人頭、五位の藏人、近衛の中少將、辨官など、人がら花やかにあるべかしき、十餘人集ひ給へれば、いかめしうつぎ〱の、凡人どもも多く、かはらけ數多度流れ、皆醉になりて、おの〱、かく幸人(四)に勝れ給へる御有様を物語したり。大臣も、珍らしき御對面に昔の事おぼし出でられて、年月の御物語聞え給ふ。よそ〱に(五)てこそ、はかなき事につけて、挑ましき御心も添ふべかゝめれ、さし向ひ聞え給ひては、互にいと哀なる事の數々、思し出でつゝ、例のへだてなく、昔今のことども、年頃の御物語に、日暮れ行く。御土器など進め參り給ふ。頭中「侍(六)はではいと

(一)夕霧と雲井雁との事
(二)源も不承知はなき趣を以て一言口を添へられたらば拒絶する譯にはゆくまじ
(三)中を隔てても夕霧が平氣であせりもせぬを見ては氣がもめる故
(四)大宮と源と腹を合せて此一件を持出すならんと
(五)斷り樣もなけれど又何も必ず負けるにも及ばぬ譯といまだに思ひ切り得ぬは
(六)頭中の心
(七)せい高なるに
(八)横縱釣合よく
(九)重々しく
(一〇)顏附歩み方など
(一一)氣取りたる態度
(一二)源氏

しまはすに、宮もかう御世ののこり少げにて、(一)この事を切に宣ひ、(二)大臣も憎からぬさまに一言うち出で恨み給はむに、とかく申しかへさふ事えあらじかし、(三)つれなくて思ひ入られぬを見るには安からず、さるべき序あらば、人の御言に靡きがほにて、許してむ、とおぼす。(四)御心をさし合せて宣はむ事と思ひより給ふに、いとゞ(五)いなび所なからむが、またなどか然しもあらむと、やすらはるゝ、いとけしからぬ御あやにくゝ心なりかし。(六)されど宮もかく宣ひ、大臣も對面すべく待ちおはするにや、方々に辱し、參りてこそは御氣色に隨はめ、など思しなりて、御裝束心ことに引繕ひて、御前などもことぐしき樣にはあらで渡り給ふ。君達いと數多ひきつれて參り給ふさま、もの〳〵しう賴もしげなり。(七)丈だちそゞろかに物し給ふに、(八)太さもあひて、いと(九)宿德に、おもゝち、あゆまひなど、大臣といはむに足ひ給へり。葡萄染の御指貫、櫻の下襲、(一〇)いと長う尻ひきて、ゆる〳〵と(一一)ことさらびたる御もてなし、あなきら〳〵しと見え給へるに、(一二)六條殿は、櫻の唐の綺

(一)夕霧にすらよくは語らず
(二)頭中
(三)源の
(四)大宮が
(五)自分が特に呼び立てたる樣にせずして來てくれぬか
(六)頭中の心
(七)雲井雁
(八)夕霧が祖母に歎願したるならんかと

がはしく人言ひ傳へ侍らむを、(一)中將の朝臣にだに、まだくはしく辨へ知らせ侍らず。人にも漏させ給ふまじ」と、御口かため聞え給ふ。

内大臣にも、かく三條の宮に太政大臣渡りおはしましたるよし聞き給ひて、頭中(二)「いかに淋しげにて、(三)いつくしき御さまを(四)待ちうけ聞え給ふらむ。御前などもてはやし、御座ひき繕ふ人も、はかぐ\しうあらじかし。中將は御供にこそ物せられつらめ」など驚き給ひて、御子どもの君達、むつまじくさるべきまうち君たちなど奉れ給ふ。頭中「御菓子御酒など、さりぬべく參らせよ。自らも參るべきを、かへりて物騷しきやうならむ」など宣ふ程に、大宮の御文あり。

大宮六條の大臣の訪らひに渡りたまへるを、物淋しげにて侍れば、人目いとほしうも辱うもあるを、(五)ことぐ\しう斯く聞えたる樣にはあらで、渡り給ひなむや。對面に聞えまほしげなる事もあゝなり。

と、聞え給へり。(六)何事にかはあらむ、(七)この姫君の御こと、(八)中將の愁にや、と思ほ

（一）どちらにしても當人の人物次第の事ぞと思ひて尚侍にすべしと思ひ寄りたる序に
（二）此娘は頭中の御世話せらるべき筈なる事がわかりしに
（三）一部始終を頭中に打明くる方便を考へて腰結の役をお頼み申ししに
（四）今は大宮の御病氣もよろしき故
（五）序にかの一條を打明けて仕舞ひたしと思ふ
（六）頭中の處では
（七）玉鬘がどういふ積で筋違ひに源の子と名乘れるならん
（八）誤脫あるべし
（九）此入譯は混雜して居て餘り人柄でもなき事故

ず、あはつけき様に覺えたれど、などか又さしもあらむ、たゞ（一）我身の有樣からこそ、萬の事侍るめれ、と思ひより侍りし序になむ、齡のほどなど問ひ聞き侍れば、（二）かの御たづねあンべい事になむありけるを、如何なるべきことぞとも、申しあきらめまほしう侍る。序なくては、對面侍るべきにもあらず。やがてかゝる事なむと、（三）顯はし申すべきやうを思ひ廻らして、消息申しゝを、御惱に託づけて、物憂げにすまひ給へりしに、實に折しも便なう思ひとまり侍るに、（四）よろしう物せさせ給ひければ、猶かう思ひおこせる序（五）にとなむ思ひ給ふる。さやうに傳へ物せさせ給へ」と聞え給ふ。宮、「いかに〳〵侍りけることにか。（六）かしこには樣々に、かゝる名のりする人を、厭ふ事なくひろひ集めらるゝに、（七）いかなる心にて、斯くひき違へ、かこち聞えらるらむ。この年頃承りて（八）なりぬるにや」と聞え給へば、「さるやう侍ることなり。委しきさまは、かの大臣もおのづから尋ね聞き給ひてむ。（九）くだ〳〵しきなほ人のなからひに似たることに侍れば、明さむにつけても、らう

さるもののくさの少きを、かごとにても、何かはとばかりに思ひ給へ許して、を(一)さをさ睦びも見侍らずして、年月を過し侍りつるを、いかでか聞し召しけむ、内裏に仰せらるゝ様なむある。尚侍(二)の宮仕する人なくては、かの所(三)の政しどけなく、女官なども、公事を仕う奉るに、たづきなく事亂れたるやうになむありけるを、たゞ今上に侍ふ故老の典侍二人、又さるべき人々、さまぐ\に申さする(四)を、はかぐ\しく(五)選ばせ給はむたづねに、類ふべき人なむなきを、なほ家たかう人のおぼえ輕からで、私の(六)家のいとなみたてたらぬ人なむ、古よりなり來にける、したゞかに賢き方の選にては、(七)その人ならでも、年月の勞になりのぼる類あれど、しか(八)類ふべきもなしとならば、大方の(九)覺をだに選ばせ給はむとなむ、内々に仰せられたりしを、似げなきことゝしも、何かは思ひ給はむ。(一〇)宮仕はさるべきすぢにて、上も下も思ひおよび、出でたつこそ心高きことなれ、(一一)おほやけ様にて、さる所の事をつかさどり、政のおもむきを認め知らむことは、はかぐ\しから

(一)世話すべき子が少き故、嘘でも構はぬ子として養はんと思ひて
(二)尚侍になる人無くては、以下帝の仰の趣
(三)内侍所
(四)色々と運動して内侍になりたがれども
(五)然るべき人を撰ばる撰任に相當の人なし
(六)一家の事を顧みずともよき人が古より尚侍には任ぜられたり
(七)身分は高からずとも年の功によりて
(八)現在左樣なる人物もなき樣なれば
(九)一通りの資格ある人を選任したしと思へば玉鬘を尚侍にしては如何と
(一〇)以下源の心、女の御奉公は女御更衣などに望をかけて出仕するのがよき事で
(一一)表向の御奉公で内侍所の事務などに關係するのは

つけて、立ちそめにし名の、取り返さるゝものにもあらず、をこがましきやうに、かへりては世の人も言ひ漏すなるを、など物し(一)侍れど、たてたる(二)所昔よりいと解け難き人の本性にて、心得ずなむ見給ふる」と、(三)かの中將の御事と思して宣へば、うち笑ひ給ひて、源「いふ(四)かひなきに許し捨て給ふこともやと聞き侍りて、こゝにさへなむかすめ申すやうありしかど、いと(五)嚴しく諫め給ふよしを見侍りし後、何にさまで言をも交ぜ侍りけむと、人わろく悔い思ひ給へてなむ。萬の事につけて、清めといふ事侍れば、(六)いかゞはさも、とり返しすゝぎ給はざらむ。とは思ひ給へながら、かう(七)口惜しき濁の末に、待ちとり深くすむべき水こそ出で來難かンべい世なめれ。何事につけても末になれば、落ち行く差別こそ易く侍るめれば、(八)いとほしく聞き思う給ふる」など申し給ひて、源「さるは、(九)かの知り給ふべき人をなむ、思ひまがふる事侍りて、不意に尋ね取りて侍るを、その折は、(一〇)さるひがわざとも明し侍らずありしかば、あながちに(一一)事の心を尋ねかへさふ事も侍らで、唯

(一)頭中に言ひ聞かすれど
(二)思ひ込みたる事は中中思ひ返さぬ昔からの頭中の性質で
(三)源の頭中に話したしといふは夕霧の一條ならんと察して
(四)夕霧雲井雁の事は幼き同志の事と頭中が勘辨して縁を結ばせてくれるかと思ひて私迄が口を添へたりしに
(五)頭中は非常に怒りて居らるゝ様子なりし故、口出しせねばよかりしと後悔して居る
(六)かの一條も清めて綺麗にして仕舞ふ事も出來ぬ事もなからんとは思へど
(七)一旦濁つたあとは中中澄みにくい物
(八)夕霧が頭中に嫌はるるも、源の子となれば既に源より一段おちたる故ならんと夕霧を氣の毒に思ふ
(九)頭中が世話せねばならぬ人を思ひ違へて自分が引取り置きたるを
(一〇)源に引取らるゝは筋違ひなる由を玉鬘が言ひ明しもせざりしかば
(一一)事情を穿鑿もせず

（一）死支度
（二）夕霧が非常に心配して世話し
（三）尤の事なれば
（四）頭中
（五）大宮の見舞に來る事
（六）どういふ筋の事なるか
（七）雲井雁の事
（八）以下大宮が常々頭中に言ひ聞かせ居る趣
（九）今になりて頭中が夕霧につらく當りて逢はせぬとて、一旦立ちたる浮名が取消される譯の物ではなし

く思ひ給へつるを、今日こそ又少し延びぬる心地し侍れ。今は惜みとゞむべき程にも侍らず。さるべき人々にも立ち後れ、世の末に殘りとまるたぐひを、人の上にて、いと心づきなしと見侍りしかば、（一）出でたち急をなむ、思ひ催され侍るに、（二）この中將の、いとあはれに怪しきまで思ひあつかひ、心をさわがい給ふを見侍るになむ、さまぐ\にかけとゞめられて、今まで長びき侍る」と、たゞ泣きに泣きて宣ふ御聲のわなゝくも、をこがましけれど、（三）さる事どもなれば、いと哀なり。御物語ども、昔今の事とり集めて聞え給ふ序に、源「（四）內の大臣は、日隔てず（五）參り給ふこと繁からむを、かゝる序に對面のあらば、いかに嬉しからむ。いかで聞え知らせむと思ひ給ふることの侍るを、然るべき序なくては、對面もあり難ければ、覺束なくてなむ」と聞え給ふ。大宮「公事のしげきにや、私の志の深からぬにや、さしも訪ひ物し侍らず。宣はすべからむことは、（六）何ざまの事にかは。中將のうらめしげに思はれたる（七）ことも侍るを、（八）初の事は知らねど、（九）今はけにくゝもてなすに

（一）源が
（二）大宮が
（三）此御様子では案じる程の事でもないに
（四）夕霧
（五）役人の樣にもなく
（六）我より年長の者も腰の屈めるにも拘はらず出歩く類は多けれど
（七）老病

取りて、三條の宮に御訪がてら渡り(一)給ふ。今はまして、忍びやかにふるまひ給へど、行幸に劣らず裝ほしく、いよ〳〵光をのみ添へ給ふ御かたちなどの、この世に見えぬ心地して、珍らしう見奉り給ふには、いとゞ御心地の惱ましさも、取り捨てらるゝ心地して、起き(二)居給へり。御脇息にがゝりて、弱げなれど、物などいと能く聞え給ふ。源「(三)けしうはおはしまさざりけるを、某(四)の朝臣の心まどはして、おどろ〳〵しう歎き聞えさすめれば、いかやうにものし給ふにかとなむ、覺束ながり聞えさせつる。内裏などにも、特なるついでなき限は參り侍らず。朝廷(五)に仕ふる人ともなくて籠り侍れば、萬うひ〳〵しう、世だけくなりにて侍り。齡(六)などこれより增る人、腰堪へぬまで屈まりありくためし、昔も今も侍るめれど、怪しくおれ〳〵しき本性に添ふ物うさになむ侍るべき」など聞え給ふ。大宮「年(七)のつもりの惱と思う給へつゝ、月頃になり侍りぬるを、今年となりては、たのみ少きやうに覺え侍れば、今一度だに、かく見奉り聞えさする事もなくてや、と心細

年かへりて二月にとおぼす。女は聞高く、名隠し給ふべき程ならぬも、人の女とて、籠りおはするほどは、必ずしも、(一)氏神の御つとめなど、現ならぬ程なればこそ、年月は紛れすぐし給へ、此もし思しよる事もあらむには、春日の神の御心違ひぬべきも、(二)終には隠れて止むまじきものから、味氣なくわざとがましき、後の名までうたてあるべし、なほ〳〵しき人の際こそ、今やうとては、氏改むることの容易きもあれ、など思し廻らすに、親子の御契の絶ゆべき樣なし、同じくば我が心ゆるしてを知らせ奉らむ、など思し定めて、この御腰結には、(三)かの大臣をなむ、御消息聞え給ひけるを、(四)大宮去年の冬つかたより惱み給ふこと、更におこたり給はねば、(五)かゝるに合せて便なかるべきよし聞え給へり。(六)中將の君も、晝夜三條の宮に添ひ侍ひ給ひて、心のそらなく物し給ひて折惡しきを、いかにせましと(七)思す。(八)世もいとさだめなし、(九)宮も亡せさせ給はば、御服あるべきを、知らず顏にて物し給はむ、罪深きこと多からむ、(一〇)おはする世に、(一一)この事顯はしてむと思し

四 源氏、三條大宮の病を訪ひ、頭中將に對面して玉鬘の事を明す

(一)以下源の心、玉鬘の如く世に聞えたる女でも娘分なる間は氏神に詣づるも人にも知られぬ譯なればごまかしもきゝたれど、源の本意の如く尚侍にでもなる樣ならば姓を詐るは氏神への恐あり

(二)何程隠しても遂には知れるものゝ、隠して置きては腹黒き巧でもありし樣に思はれて嫌なり

(三)玉鬘の實父頭中將

(四)頭中の母

(五)此病人騒ぎの中で祝に列席するは都合惡き趣

(六)夕霧

(七)源が

(八)源の心

(九)玉鬘の實の祖母たる大宮逝去あらば玉鬘は忌服を受くるが至當なるに

(一〇)大宮存生中に

(一一)玉鬘の事を知らせて仕舞はん

くておはすれば、こゝながらのおぼえには、便なかるべし。(一)かの大臣に知られても、女御又さて侍ひ給へばなど、思ひ亂るめりしすぢなり。若人の、さも馴れ仕うまつらむに憚る思なからむは、上をほの見奉りて、えかけ(二)離れて思ふはあらじ」と宣へば、紫「あなうたて、めでたしと見奉るとも、(三)心もて宮づかへ思ひたゝむこそ、いとさし過ぎたる心ならめ」とて、笑ひ給ふ。源「いで、(四)そこにしもぞ、めで聞え給はむ」など宣ひて、又御かへり、

源「(五)あかねさす光は空にくもらぬをなどてみゆきに目をきらしけむ

(六)なほ思し立て」など、絶えず勸め給ふ。とてもかくても、(七)まづ御裳著のことをこそはと思して、その御まうけの御調度の、こまかなる淸らども加へさせ給ひ、何くれの儀式も、御心にはいとも思ほさぬ事だに、おのづからよだけく嚴しくなるを、まして、(八)内の大臣にも、やがてこの序にや知らせ奉らまし、など思ほしよれば、いとめでたう所狹きまでなむ。

(一)頭中に事情を知らせて彼の子として入内せしむるとしても、彼には又弘徽殿女御ある故それも面白からずなどと
(二)宮仕して差支なき若き女ならば帝を見て宮仕したく思はぬはあらじ
(三)女の身で自ら進んで宮仕に出るのは出過ぎて居る
(四)そう言ふ其方が一番に惚れ〴〵するならん
(五)あの通り帝の美しさは曇もなかりしに、目がくもりて見えざりしといふは不審也、うそをつき給ふな
(六)宮仕を
(七)玉鬘の裳著の祝をすますが何より先なりと
(八)玉鬘の實父の頭中にも此祝を機會として知らせんかと思ふ故、彌々華麗を盡す事になれり

(一)大原野行幸は昔も例ある事なれど、今日程の立派なる例は曾て無かりしならん
(二)記者が
(三)片端
(四)覺え違があるかも知れぬ

㊀ 源氏玉鬘に入内を勸む、玉鬘裳著の祝の用意

(五)帝
(六)宮仕を我が勸に從ひてする氣になりしや
(七)瞭と帝を見奉る事はなかりしと也、「うちきらし」は打曇りての意、みゆき—み雪、行幸
(八)紫上
(九)宮仕の事を玉鬘に勸めたるが
(一〇)秋好も源の子分故玉鬘が我が子分として寵を受くる事もあらば不都合なるべし

をかしこまり、もてなし給ふ。御かへし、

源 (一)をしほ山みゆきつもれる松原に今日ばかりなる跡やなからむ

など、その頃ほひ聞き(二)し事の、(三)そばく\思ひ出でらるゝは、(四)僻事にやあらむ。

またの日大臣、西の對に、

源 昨日、(五)上は見奉らせ給ひきや。(六)かのことは思し靡きぬらむや。

と聞え給へり。白き色紙に、いと打解けたる御文の、こまかに氣色ばみてもあらぬが、をかしきを見給ひて、玉「あいなの事や」と笑ひ給ふものから、よくも推量らせ給ふものかな、と思す。御かへし、

玉 昨日は、

うちきらし朝ぐもりせしみゆきにはさやかに空の光やは見し

(七)覺束なき御事どもになむ。

とある御かへりを、(八)上も見給ふ。源「(九)しかぐ\の事をそゝのかしゝかど、(一〇)中宮もか

（一）女の樣に美しかれといふは無理な注文なるに
（二）源が尚侍になりて宮仕せよと勸めらるゝがどうしたものならん、以下玉鬘の心
（三）帝の御妾になる事は斷りて、只普通の御奉公申上げるは面白からん
（四）大原野
（五）天幕の中にて食事し
（六）源が今日の行幸に供奉する樣に前々から勅命ありしかば
（七）此御使に對して帝の仰が何とかありし答なるが、其樣な事は記述するも面倒故省く
（八）太政大臣がかゝる行幸に御供する先例ある故今日は參られゝばよかりしに
（九）記者の注釋

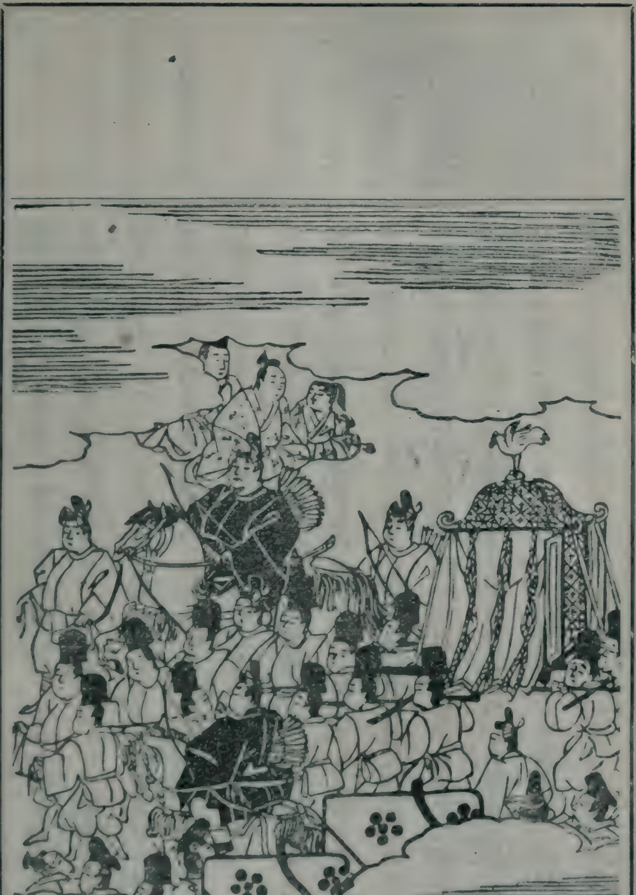
たる顔の色あひには似たらむ。（一）いとわりなきことを、若き御心地には見貶し給ひてけり。大臣の君の思し寄りて宣ふ事を、（二）いかゞはあらむ、宮仕は心にもあらで、見苦しき有樣にもやと、思ひつゝみ給ふを、（三）馴々しき筋などをばもて離れて、大方に仕うまつり御覽ぜられむは、をかしうもありなむかし、などぞ思ひ寄り給ひける。

かくて野（四）におはしまし著きて、御輿とゞめ、上達部の平張（五）にものまゐり、御裝束ども、直衣、狩の御よそひなどに更め給ふほどに、六條院より、御酒、御菓子など奉らせ給へり。（六）今日は仕う奉らせ給ふべく、かねては御氣色ありければ、御物忌のよしを奏せさせ給へるなりけり。藏人の左衞門の尉を御使にて、雉子一枝奉らせ給ふ。（七）仰言には何とかや、さやうの折の事はまねぶに煩はしくなむ。

冷泉　（八）雪ふかきをしほの山にたつ雉のふるき跡をも今日はたづねよ

（九）太政大臣の、かゝる野の行幸に、仕う奉り給へる例などやありけむ。大臣、御使





(一)頭中
(二)頭中が
(三)日頃器量よしと噂して
(四)帝が非常に優れ給へる故ぢや
(五)帝と瓜二つなるが
(六)玉鬘の心
(七)源氏や夕霧
(八)玉鬘が
(九)他の人々の容貌が醜くゝて折角の晴裝束が一向はえぬのかして
(一〇)鬚黑
(一一)厭はしく思はる、
(一二)男の容貌はとても女の化粧した顏の樣にはゆかぬ筈、作者の詞

赤色の御衣奉りて麗しく動きなき御側目に、準ひ聞ゆべき人なし。我が父大臣を人知れず目をつけ奉り給へれど、げにきら〳〵しう物清げに、盛には(一)物し給へれど、限ありかし。いと人に勝れ給へるたゞ(二)人と見えて、御輿の内より外に、目うつるべくもあらず。まして、(三)かたちありやをかしやなど、若き御達などの消えかへり心つくす、中少將、何くれの殿上人やうの人は、何にもあらず消え渡れるは、(四)更に類なくおはしますなりけり。源氏の大臣の御顏ざまは、(五)他ものとも見え給はぬを、思ひなしの今少しいつくしう、辱くめでたきなり。さばかゝる類はおはし難かりけり。(六)あてなる人は、皆物清げにけはひ異なゝべいものとのみ、(七)大臣中將などの御匂に目(八)なれ給へるを、(九)出で消えどものかたはなるにやあらむ、同じ目鼻とも見えず、くち惜しくぞ壓されたるや。兵部卿宮もおはす。(一〇)右大將の、さばかり重りかによしめくも、今日の裝いとなまめきて、胡籙など負ひて、仕う奉り給へり。色黑く髭がちに見えて、いと心づきなし。(一一)(一二)いかでかは女の繕ひたて

御方々ひき出でつゝ見給ふ。卯の時に出で給ひて、朱雀より五條の大路を、西ざまに折れ給ふ。桂川のもとまで、物見車隙なし。行幸といへども、必ず斯うしもあらぬを、今日は親王達上達部も、皆心ことに、御馬鞍を整へ、隨身馬副のかたち丈だち、裝束を飾り給ひつゝ、珍らかにをかし。左右大臣、内大臣、納言より下はた、まして殘らず仕うまつり給へり。(一)青色の袍衣、葡萄染の下襲を、殿上人、五位六位まで著たり。雪たゞいさゝかうち散りて、道の空さへ艶なるに、親王達上達部など、(二)鷹にかゝづらひ給へるは、珍らしき狩の御裝どもを設け給ふ。(三)諸衞の鷹飼どもは、まして世に目馴れぬ摺衣をみだれ著つゝ、いと氣色ことなり。女は委しくも見知らぬかたの事なれど、たゞ珍らしくをかしき事により競ひ出でつつ、(四)その人ともなく、かすかなる脚弱き車など、輪押しひしがれ、哀げなるもあり。(五)浮橋のもとなどにも、好ましう立ちさまよふ、よき車ども多かり。西の對の(六)姫君も立ち出で給へり。若干挑みつくし給へる人の御容貌有樣を見給ふに、帝の、

(一)かゝる場合の晴には皆青色即ち山ばと色の袍を著する也とぞ
(二)日頃鷹狩を嗜める人人は
(三)六衞府の
(四)其れ程の身分でもなく
(五)桂川に渡せる舟橋
(六)玉鬘

行幸

梗槩

一 源氏の玉鬘に對する煩悶。二 大原野行幸。玉鬘見物。三 源氏、玉鬘に入内を勸む。四 源氏、三條大宮の病を訪ひ頭中將に對面して玉鬘の事を明す。五 玉鬘の裳著祝。末摘花の祝の歌と贈物。頭中將、腰結の役に招待せらる。六 近江君、尚侍にならん事を望みて人々に嘲弄せらる。

かく(一)おぼし至らぬ事なく、いかで善からむことはと、(二)思しあつかひ聞え給へど、この音無の瀧こそ、うたていとほしく、(四)南の上の御推量事にかなひて、輕々しかるべき(三)御名なれ。かの大臣、(五)何事につけても、きはぐしく、(六)少しもかたはなる樣の事を思し忍ばずなど物し給ふ御心ざまを、(七)さて思ひぐまなく、けざやかなる御もてなしなどのあらむにつけては、をこがましうもやなど、思しかへさふ。

その年の十二月に、(八)大原野の行幸とて、世に殘る人なく見騷ぐを、六條院よりも

一 源氏の玉鬘に對する煩悶
(一) 源が
(二) 玉鬘の爲によかるべき方法は何でも講じて見たしと
(三) 源が窃に玉鬘に懸想せること、「音無の川とぞ溢に流れいづる言はで物思ふ人の涙は」
(四) どうせ只は置くまじと紫上が推量せし通りで
(五) 頭中、以下源の心
(六) 少しでも曲つた事は容赦せぬ氣象なれば
(七) 自分が玉鬘を手に入れた暁、頭中が玉鬘が自分の娘なる由を悟り、容赦もなく公然と我を娘の聟の樣に扱ふ事もあらば
二 大原野行幸、玉鬘見物、
(八) 京都の西山にある大原野神社の祭禮に行幸ある也

(一)雲井
(二)雲井雁は心からにて常に心配がちらしく
(三)何かにつけて
(四)不相變夕霧と雲井雁との一件につきて心が解けぬらしき口をきく故
(五)大宮が恨めしく思ひて強ひて雲井に逢ひたしとも言はず
(六)ふつゝかなる杯の義歟、或は「不祥」の誤ならんかといふ、娘は近江君をいふ
(七)其方の娘といふ名がありて實際が其樣にけしからぬ者のあるべき筈なし

て、のどやかに御物語など聞え給ふ。大宮「姫君(一)を久しく見奉らぬがあさましき事」とて、たゞ泣きに泣き給ふ。頭中「今このごろの程に參らせむ。心づから(二)物思はしげにて、くち惜しう衰へにてなむ侍るめる。女子こそ、よく言はば、もち侍るまじきものなりけれ。とある(三)につけても、心のみなむ盡され侍りける」など、(四)なほ心解けず思ひおきたる氣色にて宣へば、心憂くて(五)切にも聞え給はず。そのついでにも、頭中「いと不調(六)なる女まうけ侍りて、もて煩ひ侍りぬ」と、うれへ聞え給ひて笑ひ給ふ。大宮「いで、あなあやし。女といふ名(七)はして、さがなかるやうやある」と宣へば、頭中「それなむ見苦しきことに侍る。いかで御覽ぜさせむ」と、聞え給ふとや。

(一)生長と共に一層美しくなりたるならん
(二)前々に見たる紫を櫻、玉鬘を山吹にたとふるならば
(三)夕霧には母又は姉妹なれば一體なら朝夕馴れ親しみて然るべき間柄なるに、源が嚴重に隔ておくが恨めし
(四)眞面目なる夕霧の心もぐらつき出す樣に思はれたり

九 夕霧大宮を訪ふ

(五)夕霧が
(六)頭中

もとなし。薄色の御衣に、髮のまだ丈にははづれたる末の、ひき廣げたるやうにて、いとほそく小き容體、らうたげに心ぐるし。一昨年ばかりは、たまさかにもほの見奉りしに、又こよなく(一)生ひまさり給へるなンめりかし、まして盛いかならむと思ふ。(二)かの見つるさき〴〵の、櫻山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかゝりて、風に靡きたる匂はかくぞあるかし、と思ひよそへらる。かゝる人々を、心に任せて旦暮見奉らばや、さもありぬべき程(三)ながら、隔々のけざやかなるこそつらけれ、など思ふに、(四)まめ心もなまあくがるゝ心地す。

祖母宮の御許に參り(五)たまへれば、のどやかにて御行し給ふ。よろしき若人などは、こゝにも侍へど、もてなしけはひ裝束どもも、盛なるあたりには似るべくもあらず。容貌よき尼君たちの、墨染にやつれたるぞ、なか〳〵かゝる所につけては、さる方にてあはれなりける。(六)内の大臣も參り給へるに、大殿油など參り

り。墨、心とゞめておしすり、筆のさき打見つゝ、細やかに書きやすらひ給へるさまいとよし。されどあやしく(一)定まりて、にくき御口つきこそものし給へ。

夕(二)風さわぎむら雲まよふ夕にもわするゝ間なく忘られぬ君

吹き亂りたる苅萱につけ給へれば、人々、「交野の少將は、(三)紙の色にこそとゝのへ(四)侍りけれ」と聞ゆ。夕「さばかり(五)の色も思ひわかざりけりや。何處(六)の野邊のほとりの花よ」など、かやうの人々にも、言少に見えて、心解く(七)べくももてなさず、いと(八)すぐ／＼しくけだかし。(九)又も書い給ひて、右馬助に賜へれば、をかしき童、又いと馴れたる御隨身などに、うち囁きて取らする(一〇)を、若き人々たゞならずゆかしがる。渡ら(一一)せ給ふとて、人々うちそよめき、御几帳ひき直しなどす。見つる花(一二)のかほども、思ひくらべまほしくて、例は物ゆかしからぬ心地に、あながちに、妻戸の御簾をひき著て、几帳のほころびより見れば、物の側よりたゞはひ渡り給ふはどぞ、(一三)ふと打見えたる。人の繁くまがへば、何のあやめも見えぬほどに、いと心

(一)どういふものか歌はまづい、是作者の暗に自ら謙遜せる也
(二)雲井雁へおくる歌也
(三)此頃の小說中の主人公
(四)艷書の紙の色とつくる折枝の花の色とを一樣にそろへたり
(五)そういふ分別も我にはつかぬ
(六)それなら何處の花につけたらよいのか
(七)心安くなる樣にはせず
(八)眞面目で
(九)別に又一通かきて
(一〇)右馬助が文をわたす、此別の一通は五節の處へやるなるべし
(一一)明石姫君が歸りて來らるゝとて
(一二)花にたとへたる紫上や玉鬘などの容貌と此姫君のと
(一三)簾の後にかくれたる也

ては著せ給はめ。(一)若き人のにてめやすかゝめり」などやうの事を聞え給ひて渡り給ひぬ。

むづかしき方々めぐり給ふ御供にありきて、(二)中將はなま心やましく、書かまほしき文など、日たけぬるを思ひつゝ、(三)姫君の御方に參り給へり。乳母「まだ(四)彼方になむおはします。風に懼ぢさせ給ひて、今朝はえ起きあがり給はざりつる」と、御乳母ぞ聞ゆる。夕「物騷しげなりしかば、宿直も仕う奉らむと思ひ給へしを、(五)宮のいと心苦しう思いたりしかばなむ。(六)雛の殿はいかゞおはすらむ」と問ひ給へば、人人笑ひて、「扇の風だにまゐれば、(七)いみじきことに思いたるを、ほと〳〵しくこそ吹き亂りはべりしか。(八)この御殿あつかひに、わびにて侍り」など語る。夕「ことごとしからぬ紙や侍る。(九)御局の硯」と乞ひ給へば、(一〇)御厨子によりて、紙一卷、御硯の蓋に取りおろして奉れば、夕「いな。これはかたはらいたし」と宣へど、(一一)北のおとゞのおほえを思ふに、少しなのめなる心地して書き給ふ。紫の薄樣なりけ

(一)是等は夕霧の如き若者の著物にして似合はし

❻ 夕霧明石姫君の方に文てを書く、姫君を隙見す

(二)夕霧

(三)明石姫君

(四)紫上の方

(五)夕霧の祖母が心配せし故其方にのみ居たり

(六)姫君の玩物

(七)姫君が非常に心配せらるゝが

(八)雛の御殿の世話でうんざりする

(九)あらば其紙と硯とを下され

(一〇)乳母が姫君の厨子の中なるを取出す也

(一一)姫君は未來の皇后なれば其人の紙硯をつかふは恐ろしく思ひたれども、又明石上の地位を考へれば其程に遠慮せずともと思ひて其紙硯を用ひて文を書く

(一)夕霧にはよくも聞えぬに
(二)源の
(三)ひそかに我に靡きさへすれば風にしをるゝ苦もあるまじ
(四)風になびきて而も折れぬもの也
(五)花散里
(六)淸涼殿の壺前栽の御宴の時に夕霧に著せる積ならんが、此嵐では其御宴も中止になりたるならん
(七)衣服の色
(八)花散が紫にも劣らずと源が感心する

委しくも聞えぬに、うち誦じ給ふをほの聞くに、憎きものをかしければ、なほ(一)見はてまほしけれど、(二)近かりけりと見え奉らじと思ひて、立去りぬ。御かへし、

源「したつゆに靡かましかば女郎花あらき風にはしをれざらまし

なよ(三)竹を見給へかし」など、僻耳にやありけむ。聞きよくもあらずぞ。

(四)東の御方へ、これよりぞ渡り給ふ。今朝の朝寒なるうち解けわざにや、物裁ち(五)などするねび御達、御前にあまたして、細櫃めくものに、綿ひきかけてまさぐる若人どもあり。いと淸らなる朽葉の羅、いまやう色の二なく擣ちたるなど、ひきちらし給へり。源「中將の下襲か。(六)御前の壺前栽の宴もとまりぬらむかし。かく吹き散してむには、何事かせられむ。すさまじかるべき秋なゝめり」など宣ひて、何にかあらむ、樣々なるもの(七)の色どもの、いと淸らなれば、かやうなる方は、南(八)の上にも劣らずかしとおぼす。御直衣からの花文綾を、この頃摘み出したる花して、はかなく染め出で給へる、いとあらまほしき色したり。源「中將にこそ、かやうに

（一）源に
（二）十分狎れ〳〵しきなるべし
（三）夕霧の心
（四）女にかけては少しもすかさぬ源の心にて
（五）我子でも傍で育てぬ娘には矢張懸想するのであらう
（六）是では先程より餘り馴れ〳〵しかりしも其筈の事
（七）夕霧が自ら恥かしき程に感ずる也
（八）假令兄弟でも平生親しく暮さずして其上腹がはり杯でもあらば、隨分懸想もしかねまじき樣子をして居る
（九）紫上
（一〇）紫に
（一一）今は秋なれば、時節にあはぬたとへなれども猶そう思はれる
（一二）こゝ迄夕霧の心
（一三）源が玉鬘に
（一四）風は源、女郎花は玉鬘自身をたとへたり

思ひ給へる氣色ながら、さすがにいと和かなる樣して、寄り（一）かゝり給へるは、こ（二）とと馴れ〳〵しきにこそあめれ、いであなうたて、い（三）かなる事にかあらむ、思（四）ひよらぬ隈なくおはしける御心にて、も（五）とより見馴れおほしたて給はぬは、かゝる御思も添ひ給へるなゝめり、宜（六）なりけりや、あな疎まし、と思ふ心も（七）はづかし。女の御さま、げ（八）に兄弟といふとも、少し立ちのきて、異腹ぞかしなど思はむは、などか心あやまちもせざらむと覺ゆ。昨日見し御（九）けはひには、け劣りたれど、見るに笑まるゝさまは、立（一〇）ちもならびぬべく見ゆ。八重山吹の咲き亂れたるさかりに露かゝれる夕ばえぞ、ふと思ひ出でらるゝ。折にあはぬよそへなれど、なほ打ち覺ゆるやうよ、花は限こそあれ、そゝけたる蘂（一一）などもうちまじるかし、人の御容貌のよきは、譬（一二）へむ方なきものなりけり。御前に人も出で來ず、い（一三）とこまやかに打ち呟き語らひ聞え給ふに、如何あらむ、まめだちてぞ立ち給ふ。女君、

玉　吹（一四）き亂る風のけしきに女郎花しをれしぬべきこゝちこそすれ

輕々しからむ。(一)さりともとまる方ありなむかし。やう〳〵かゝる(二)御心むけこそ添ひにたれ。(三)ことわりや」と宣へば、(四)げにあやしくも、うち思ふまゝに聞えてけるかな、と思して、自らもうち笑み給へる、いとをかしき色あひつらつきなり。酸漿とかいふめる樣にふくらかにて、髮のかゝれるひま〳〵美しう覺ゆ。まみのいと餘り(五)わらゝかなるぞ、いとしも品高く見えざりける。その外はつゆ難つくべうもあらず。(六)中將いと細やかに聞え給ふを、いかでこの御容貌見てしがなと、思ひ渡るこゝろにて、隅の間の御簾の、(七)几帳は添ひながらしどけなきを、やをらひきあけて見るに、紛るゝものどもも取りやりたれば、(八)いとよく見ゆ。かく戯れたまふ氣色のしるきを、(九)あやしのわざや、親と聞えながら、かく懷はなれず、(一〇)物近かるべき程かは、と目とまりぬ。(一一)見やつけ給はむと怖ろしけれど、怪しきに心も驚きて、なほ見れば、柱がくれに少し(一二)そばみ給へりつるを、(一三)引きよせ給へるに、御髮のなみ寄りて、はら〳〵とこぼれかゝりたる程、女もいとむつかしう苦しと

(一)あくがれ出てもどこか落附く處はあるべし
(二)源を厭ふ心
(三)我如き者を厭はるゝは尤也
(四)玉鬘の心
(五)にこやかなるが
(六)夕霧が源の玉鬘と細細と話し込むを聞き居て
(七)几帳が簾に添へて立てありて外から見ゆるを遮りてはあれども
(八)玉鬘の姿が
(九)夕霧の心
(一〇)馴々しくすべき年輩にあらずと
(一一)源に見つけられはせぬかと
(一二)玉鬘が側を向きて居たるを
(一三)源が

(一)衣桁より引きおろして著て、源に對する敬意を見せたる處はえらいものぢや
(二)源が
(三)明石上が不快を感ずるならん

㊆源氏玉鬘を訪ふ、夕霧隙見して兩人の餘り親しきに驚く
(四)玉鬘
(五)玉鬘方へ、わざと物靜にして入るは下心ありて、なるたけ玉鬘方に居るを人に知られじと思へば也
(六)玉鬘が
(七)源が玉鬘に近く
(八)相變らず戀の方へこだわりて
(九)風にさそはれて何處ともなく行つてしまひたかりし

しければ、打ち解けなえばめる姿に、小袿(一)ひきおとして、けぢめ見せたるいといたし。(二)端の方につい居給ひて、風のさわぎばかりを訪らひ給ひて、つれなく立ち歸り給ふも、(三)心やましげなり。

明石「おほかたの荻の葉すぐる風の音もうき身ひとつにしむ心地して

とひとりごちけり。

西の對には、おそろしと思ひ明したまひける名殘に、寢すぐして、今ぞ鏡なども(四)見たまふほどなりける。源「こと〲しく前な逐ひそ」と宣へば、(五)殊に音もせで入りたまふ。屛風なども皆疊みよせ、物しどけなくしなしたるに、日のはなやかにさし出でたるほど、けざ〲と、物淸げなるさまして(六)居給へり。(七)近く居たまひて、例の、風につけても(八)同じすぢに、むづかしう聞え戯れ給へば、堪へずうたてと思ひて、玉「かう心憂ければこそ、今宵の(九)風にもあくがれなまほしう侍りつれ」と、むづかり給へば、いとよくうち笑ひ給ひて、源「風につきてあくがれ給はむや、

ら、(一)氣色づきてぞおはするや」とて、出で給ふに、中將の(二)ながめ入りて、頓にも驚くまじき氣色にて居給へるを、(三)心とき人の御目にはいかゞ見給ひけむ、立ちかへり、女君に、源「昨日の風のまぎれに、中將は(四)見奉りやしてけむ。かの戸の開きたりしよ」と宣へば、面うち赤みて、紫「いかでか然はあらむ。渡殿の方には、人の音もせざりしものを」と聞え給ふ。源「なほ怪し」とひとりごちて渡り給ひぬ。御簾の中に入り給ひぬれば、中將は、渡殿の戸口に人々のけはひするに寄りて、物など言ひ(五)戲るれど、(六)思ふ事の筋々なげかしうて、例よりもしめりて居給へり。

(七)こなたより、やがて北に通りて、(八)明石の御方を(九)見遣り給へば、はか〴〵しき家司だつ人なども見えず、馴れたる下仕どもぞ、(一〇)草の中にまじりてありく。童などのをかしきあこめ姿うちとけて、(一一)心とゞめ取り分きうゑ給ふ龍膽、朝顔の、這ひまじれるませも、皆散り亂れたるを、とかう引き出で尋ぬるなるべし。(一二)物の哀に覺えけるまゝに、箏の琴をかきまさぐりつゝ、端近う居給へるに、御さきおふ聲の

(一)一ふしある所がある
(二)罪の事を思ふ餘りに恍然として急には源の出るにも氣がつかぬ事
(三)敏捷なる源は何と思ひし事やら
(四)其方を
(五)源が
(六)雲井雁や紫上の事
㊅源氏明石上を訪ふ
(七)中宮の所から
(八)明石上の方
(九)源が
(一〇)吹荒されたる前栽などの中を歩む體也
(一一)秋好の
(一二)明石上が

りし花どもの、行方も知らぬやうにて萎れ伏したるを見給ひけり。中將御階に居給ひて、御かへり聞え給ふ。夕(一)「荒き風をも拒がせ給ふべくやと、若々しく心ぼそく覺え侍るを、今なむ慰み侍りぬる」と聞え給へれば、源「怪しくあえかにおはする宮なり。女どちは、物怖ろしく思しぬべかりつる夜の樣なれば、(二)げにおろかなりとも思いてむ」とて、やがて(三)參り給ふ。御直衣など奉るとて、御簾ひきあげて入り給ふに、短き御几帳ひきよせて、はつかに見ゆる御袖口は、(五)さにこそあらめ(四)と思ふに、(六)胸つぶ〳〵と鳴る心地するも、うたてあれば、(七)外ざまに見やりつ。殿御鏡など見給ひて、忍びて、源「中將の朝けの姿はきよげなりな。たゞ今は(八)きびはなるべき程を、かたくなしからずと見ゆるも、心のやみにやあらむ」とて、我が御顏は、古りがたくよしと見給ふべかゝめり。いといたう心けさうし給ひて、源「(九)宮に見え奉るは、恥かしうこそあれ。(一〇)何ばかり現なるゆゑ〳〵しさも、見え給はぬ人の、おく ゆかしく(一一)心づかひせられ給ふぞかし。いとおほどかに女しきものか

(一)秋好の返事を取次ぎて言へる也、源が此方へ來て力になりて下さる歟と思ひて大人げなくも心細く待ち居たるに御使て落附きたり
(二)源の待遇疎かなりと
(三)源が秋好へ
(四)源が
(五)紫ならんと
(六)夕霧が
(七)よそ見して居る
(八)まだ幼稚なるべき年輩なるに、已に整ひたる樣に思はるゝも親の慾目ならんか
(九)秋好に
(一〇)秋好はこゝといひて特に品格ある所も見えねども
(一一)氣がおける

さやかならぬ明けぐれのほど、いろ〳〵なる姿は、いづれともなくをかし。童(一)おろさせ給ひて、蟲の籠どもに露飼はせ給ふなりけり。(二)紫苑瞿麥の濃き薄き衵どもに、(三)女郎花の汗衫などやうの、時に逢ひたるさまにて、四五人ばかりつれて、此處彼處の叢によりて、いろ〳〵の籠どもを持てさまよひ、瞿麥などの、いと哀げなる枝ども取りもて參る、(四)霧のまよひは、いと艶にぞ見えける。(五)吹きくる追風は、侍從の香にことに匂ふ香のかをりも、ふればひ給へる御けはひにやと、いと思ひやりめでたく、心げさうせられて、立出でにくけれど、忍びやかにうち音なひ、歩み出で給へるに、(六)人々けざやかに驚き顏にはあらねど、皆すべり入りぬ。(七)御まゐりの程など、童にて入り立ち馴れ給へれば、女房なども(八)いとけ遠くはあらず。(九)御消息啓せさせ給ひて、(一〇)宰相の君、內侍などのけはひすれば、私事も忍びやかに語らひ給ふ。(一一)これはた、さいへど氣高く住みたるけはひ有樣を見るにも、(一二)さまざま物思ひ出でらる。(一三)南のおとどには、御格子まゐり渡して、昨夜見捨て難か

(一)庭に
(二)色の名、以下童女の衣裳
(三)青黃の表に萠黃の裏をつけたるをいふとぞ
(四)霧の漂ふ中を步み居る樣子は
(五)此處解しにくし、童女等の方より吹き來る風の香がするが、其匂も秋好中宮の移り香ならんかと思へばひとしほよく思はれての意ならん歟
(六)目にたちて
(七)中宮入內の當初抔は夕霧まだ童形にて簾內にも出入りしたれば
(八)近づきなり
(九)源の傳言を秋好に申上げて
(一〇)秋好方の侍女の名
(一一)秋好も又何といふても萬事が上品なるを見て
(一二)夕霧が
(一三)夕霧が復命の爲に再び紫方へ歸り來たれば、此方にては此時已に格子をからりとあけて



やかに、雄々しき方によりて、親などの御孝をも、(一)嚴しき方ざまをばたてて、人にも見驚かさむの(二)心あり。(三)誠にしみて深き所はなき人になむものせられける。(四)さるは心のくま多く、いと賢しき人の、末の世にあまるまで、才たぐひなく、(五)うるさながら、人としてかく難なきことは、難かりける」など宣ふ。源「いとおどろく〳〵しかりつる風に、中宮に、(六)はか〴〵しき宮司など侍ひつらむや」とて、この君して御消息(七)聞えたまふ。夕「夜の風の音は、いかゞ聞し召しつらむ。吹きみだり侍りしに、(八)おこりあひ侍りて、いと堪へがたきに、ためらひ侍る程になむ」と聞え給ふ。

中將おりて、(九)中の廊の戸より通りて、(一〇)參りたまふ。朝ぼらけのかたち、(一一)いとめでたくをかしげなり。(一二)東の對の南の側に立ちて、(一三)御前の方を見遣り給へば、御格子二間ばかりあげて、ほのかなる朝ぼらけの程に、御簾卷きあげて人々居たり。勾欄にもおしかゝりつゝ、(一四)若やかなるかぎり數多見ゆ。(一五)打解けたるはいかゞあらむ、

(一)人の目につく樣な方の事を主として取行ひ
(二)見せて驚かさんの意なるべし
(三)心底から情深き所はなき人
(四)頭中は策略多く賢き人にて
(五)如何にも萬事揃つた人なれども、人として缺點のなきは無ければ頭中も上にいへる如き缺點あり。「かく」といふ詞穩ならねども意は上の如くなるべし
(六)役に立つ
(七)傳言する也
(八)ふく風に引風までがかちあひて
㊄夕霧源氏の名代に秋好中宮を見舞ふ、源氏夕霧の紫上に對する心を看破す、秋好中宮を訪ふ
(九)源の御前より
(一〇)秋好中宮へ
(一一)夕霧の
(一二)秋好の住む寢殿の東に竝べる建物
(一三)中宮の御前
(一四)若々しき女中等ばかり
(一五)打解けて近く見たらばよきか惡きかわからねど

亂りがはし。日の僅にさし出でたるに、うれへ顔なる庭の露きら〳〵として、空はいとすごく霧り渡れるに、そこはかとなく涙のおつるを、押し拭ひ隱して、打ちしはぶき給へれば、源「中將(一)の聲づくりにぞあゝなる。夜はまだ深からむは」とて、起き給ふなり。何事にかあらむ、(二)聞え給ふ聲はせで、大臣打ち笑ひ給ひて、源(三)「いにしへだに知らせ奉らずなりにし、曉のわかれよ。今ならひ給はむに、心苦しからむ」とて、とばかり語らひ聞え給ふけはひども、いとをかし。女の御答は聞えねど、ほの〴〵、かやうに聞え戲れ給ふ言の葉のおもむきに、(四)緩びなき御中らひかなと聞き居給へり。御格子を(五)御手づからひきあげ給へば、(六)氣近きかたはらいたさに、立ち退きて侍ひ給ふ。源「いかにぞ。よべ(七)宮は待ち喜び給ひきや」夕「しか。はかなき事につけても、涙もろにものし給へば、いと不便にこそ侍れ」と申し給へば、笑ひ給ひて、源(八)「今幾許もおはせじ。まめやかに仕う奉り見え奉れ。(九)内のおとゞは、細にしもあるまじうとこそ憂へ給ひしか。(一〇)人がらあやしう花

(一)紫の事を思へるなるべし
(二)紫の話しかくる聲はきこえずして
(三)此頃の男女の語らひに通例なる曉の別を其方ばかりには遂に經驗せしめざりしかば、今更經驗さするは氣の毒ならん
(四)さても中のよい事かな、夕霧の感じ
(五)源が
(六)餘り近い處に居たのがきまり惡くて
(七)大宮
(八)もう長い事はあるまじ
(九)頭中はよく氣をつけて吳れそうもないと大宮がこぼして居られた
(一〇)以下頭中を評する詞

㊃ 夕霧、花散里及び案上を見舞ふ、源氏、頭中將の爲人を評す
(一) 三條宮の人々が六條院の噂をする也
(二) 源の居る御殿の邊にこそ人も大勢居れども、花散里の居る東の郭などでは
(三) 夕霧が
(四) 車内に
(五) 案の事が氣にかゝれる也
(六) 夕霧の心
(七) 案に心をかくるは
(八) 花散里に
(九) 夕霧が
(一〇) 案の方
(一一) 戸もあけずに源が寢て居る
(一二) 階間の前に當れる

ひ續けらる、

曉がたに風少ししめりて、村雨のやうに降り出づ。「六條院には、離れたる屋どもも倒れたり」など人々申す。(一)風の吹きまよふほど、廣くそこら高き心地する院に、人々はた、おはします大殿のあたりにこそ繁けれ、(二)東の町などは、人すくなに思されつらむ、と驚き給ひて、(三)まだほのぼのとするに參り給ふ。道の程、横ざま雨いと冷やかにふき入る。(四)空の氣色もすごきに、怪しくあくがれたる心地して(五)何事ぞや、(六)又我心に思ひ加はれるよと、思ひ出づれば、(七)いと似氣なき事なりけり。あな物狂ほしと、とざまかうざまに思ひつゝ、(八)東の御方に、まづまうで給へれば、憔ぢ困じておはしけるに、(九)とかく聞え慰めて、人召して、所々繕はすべきよしなど言ひおきて、南のおとゞに(一〇)參り給へれば、まだ御格子も(一一)參らずおはしますに、(一二)あたれる勾欄に押しかゝりて見渡せば、山の木ども吹き靡かして、枝ども多く折れ伏したり。叢は更にもいはず、檜皮、瓦、所々の立蔀、透垣などやうのもの

音も、いとうたてあり。大殿の瓦さへ殘るまじく吹き散らすに、(一)かくてものし給へることと且は宣ふ。(二)そこら所せかりし、御勢のしづまりて、この君をたのもし人に思したる、常なき世なり。今も(三)大方のおぼえの薄らぎ給ふことはなけれど、內(四)の大殿の御けはひは、なか〳〵少し疎くぞありける。中將夜もすがら荒き風の音にも、すゞろに物あはれなり。(五)心にかけて戀しと思ふ人の御事はさしおかれて、ありつる御面影の忘られぬを、(六)こはいかに覺ゆる心ぞ、(七)あるまじき思ひもこそ添へ、いと怖ろしき事、と自ら思ひまぎらはし、他事に思ひ移れど、なほ(八)ふと覺えつゝ、(九)來しかた行くすゑありがたうも物し給ひけるかな、かゝる御中らひに、(一〇)いかで東の御方、さるものの數にて立ち並び給ひつらむ、(一一)たとしへなかりけりや、あないとほし、と覺ゆ。(一二)大臣の御心ばへを、ありがたしとおもひ知り給ふ。(一三)人がらのいとまめやかなれば、似氣なさを思ひ寄らねど、(一四)さやうならむ人をこそ、同じうは見て明し暮らさめ、限あらむ命の程も、今少しは必ず延びなむかし、と思

(一)此危き中を此樣に來たる事よと大宮が喜ぶと共にあぶながる
(二)故左大臣の時分はあれほど盛なりし勢衰へて今は夕霧のみを力にして居るとは
(三)大宮に對する世間の氣受は不相變なれども
(四)頭中の大宮に對する態度は疎々しくなれり
(五)雲井雁の事は差當りて思はれず、晝間見たる紫の俤が戀しきを
(六)夕霧の自ら我心を批難する詞
(七)大それた了簡が出そうぢや
(八)思はず又紫の事を思出して
(九)夕霧の心、紫は實に空前絶後の美人なる哉
(一〇)花散里がどうして人並に源の寵を受けて居るならん
(一一)花散と紫とは丸で比較にならぬ
(一二)花散の如き女をも捨てず憐む源の氣象を
(一三)夕霧は眞面目なる性質の人故、紫に對してけしからぬ了簡は起さねども
(一四)同じ事ならあの樣な女を妻に持ちたし

(一)大宮が
(二)大宮の事が心がかりなれば彼方へ參るべし
(三)子供にかへる事
(四)夕霧が居るからと思ひて彼にまかせて御見舞にも參らず
(五)夕霧に言傳してやる也
(六)揉みに揉みて吹く
(七)夕霧は行儀のよき人にて
(八)如何なる日でも御目にかゝらぬ事なし
(九)用事多き中でも
(一〇)六條院に參り、其より三條の宮に廻る也
(目)夕霧三條の宮に風見舞に行く、案上を懼ふ。
(一一)我は此年になれど

む參りて侍りつる。彼處にはまして心ぼそく、風の音をも、今はかへりて、若き(一)子のやうに懼ぢ給ふめれば、心苦しきに、(二)まかでて侍りなむ」と申し給へば、「げに、早まうで給ひね。老いもていきて、また若うなること、(三)世にあるまじき事なれど、げに然のみこそあなれ」と、哀がり聞え給ひて、「かく騷しげにはべるめるを、(四)この朝臣侍へばと、思ひ給へ讓りてなむ」と(五)御消息聞えたまふ。道すがらい(六)りもみする風なれど、(七)うるはしく物し給ふ君にて、三條の宮と六條院とに參りて、(八)御覽ぜられ給はぬ日なし。内裏の御物忌などに、え去らず籠り給ふべき日より外は、いそがしき公事節會などの、暇いるべく、(九)事繁きにおはせても、まづこの(一〇)院に參り、宮よりぞ出で給ひければ、まして今日、かゝる空の氣色により、風のさわぎにあくがれありき給ふもあはれに見ゆ。

宮いと嬉しく頼もしと待ち受け給ひて、大宮「(一一)こゝらの齢に、まだかく騷がしき野分にこそ遇はざりつれ」と、唯戰きになゝき給ふ。大なる木の枝などの折るゝ

るらむを、現にもこそあれ」と聞え給ふを、(一)また寄りて見れば、物聞えて、(二)大臣もほゝ笑みてぞ見奉り(三)給ふ。親ともおぼえず、(四)若く淸らになまめきて、いみじき御容貌のさかりなり。(五)女もねびとゝのひ、飽かぬ事なき御さまどもなるを見るに、身にしむばかり覺ゆれど、この渡殿の東の格子も吹き(六)放ちて、立てる所の現になれば、怖ろしくて立ち退きぬ、今參れるやうにうち聲づくりて、簀子の方に歩み出で給へれば、源「さればよ。現なりつらむ」とて、かの妻戸の開きたりけるよと、今ぞ見咎め給ふ。(七)年頃かゝることの露なかりつるを、風こそげに巖をも吹き上げつべきものなりけれ、(八)さばかりの御心どもをさわがして、珍らしく嬉しきめを見つるかなと覺ゆ。人々まゐりて、「いと嚴しう吹きぬべき風に侍り。(九)艮の方より吹き侍れば、(一〇)この御前はのどけきなり。馬場のおとゞ、南の釣殿などは、危げになむ」とて、とかく事行ひのゝしる。源「中將は何處よりものしつるぞ」夕「三(一一)條の宮に侍りつるを、風いたく吹きぬべしと、人々の申しつれば、覺束なさにな

(一)夕霧が又隙見する也
(二)何か紫と口をきゝて
(三)紫を
(四)夕霧の源を望み見ての感じ
(五)紫上
(六)夕霧が居る間に風が吹き離したる也
(七)夕霧の心、年來紫上を見る事はなかりしに
(八)紫上等の心を風が騒がしたればこそ紫が端居して自分にも隙見されたるよと嬉しく思ふ
(九)東北
(一〇)こゝは風があてぬ
(一一)祖母大宮の方

入れ給へるに、女房あまた見ゆれば、立ちとまりて、音もせで見る。御屏風も、風のいたう吹きければ、押し疊み寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座に居給へる人、(一)物に紛るべくもあらず、氣高く淸らに、さと打匂ふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺櫻の咲き亂れたるを見る心地す。あぢきなく、見奉る我が顏にも移りくる樣に、愛敬は匂ひ散りて、又なくめづらしき人の御樣なり。御簾の吹き上げらるゝを、人々おさへて、(二)如何にしたるにかあらむ、打笑ひ給へる、いといみじう見ゆ。(三)花どもを心苦しがりて、え見捨てて入り給はず。御前なる人々も、さま〲に物淸げなる姿どもは、見渡さるれど、(四)目うつるべくもあらず。(五)大臣のいと氣遠く遙にもてなし給へるは、かく見る人(六)たゞにはえ思ふまじき御有樣を、いたり深き御心にて、若し(七)かゝることもやと思すなりけり、と思ふに、けはひ怖ろしくて、立去るにぞ、(八)西の御方より、うちの御障子ひき開けて渡り給ふ。源「いとうたて、あわたゞしき風なゝめり。御格子おろしてよ。(九)男子どものあ

(一)確に紫上と見えたり
(二)どうした拍子にか紫の笑ひたる樣子、此所すべて夕霧の眼中より寫し出す
(三)花の嵐に損はるゝを紫が氣にして
(四)紫を見た目では一向目うつりがせぬ
(五)夕霧の心、源が從來我を紫の傍に寄せざりしは
(六)惚れ〲せずには居られぬ紫の容貌故
(七)今の樣に見て自分が心を動かす事もあるべきかとの用心であつたわいと思ふと
(八)西の對即ち明石姫君の方から
(九)斯かる時には男も參りてあるべきに、餘り見え通りすぎる



し人々、又ひきかへし(一)うつろふ氣色、世の有樣に似たり。(二)これを御覽じつきて里居し給ふほど、御遊などもあらまほしけれど、八月は故前坊の御忌月なれば、(三)心もとなくおぼしつゝ明け暮るゝに、この花の色まさる氣色どもを御覽ずるに、(四)野分例の年よりもおどろ〳〵しく、空の色變りて吹き出づ。花どものしをるゝを、(五)いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思ひさわがるゝを、まして叢の露の玉の緒亂るゝまゝに、御心惑もしぬべく(六)思したり。(七)掩ふばかりの袖は、秋の空にしもこそ欲しげなりけれ。㊀暮れ行くまゝに、物も見えず吹き迷はして、いとむくつけけれど、(八)御格子など參りぬるに、後めたくいみじと花の上を(九)思し歎く。

(一〇)南のおとゞにも、前栽つくろはせ給ひける折しも、かく吹き出でて、(一一)もとあらの小萩、はしたなく待ちえたる風の氣色なり。(一二)をれかへり、露もとまるまじう吹き散すを、少し端近うて(一三)見給ふ。大臣は、(一四)姫君の御方におはします程に、(一五)中將の君參り給ひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸の開きたるひまを、何心もなく見

(一)秋に心がうつる有樣
(二)秋好が此景色に見とれて
(三)花盛の徒に過ぎん事を危ぶみつゝ
(四)秋の嵐
(五)さ程花などを賞玩せぬ人でも殘酷なる風よと心にかゝるに
(六)秋好が
(七)「大空を掩ふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」
(八)戸締りをしたるに
(九)秋好が
㊀　夕霧六條院に風見舞に行く、紫上を瞥見す
(一〇)紫上の方
(一一)「宮城野の本あらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」本あらの小萩は風を待つものとは言へ餘り荒過ぎる風なれば、はしたなく待ちえたるとはいへり
(一二)幾度も
(一三)紫が
(一四)明石姫君
(一五)夕霧

野分

梗概

㊀秋好中宮の方に多く秋草を植う。野分。㊁夕霧、六條院に風見舞に行く。紫上を隙見す。㊂夕霧三條の宮に風見舞に行く。紫上を懐ふ。㊃夕霧、花散里及び紫上を見舞ふ。源氏、頭中將の爲人を評す。㊄夕霧源氏、の名代に秋好中宮を見舞ふ。源氏、夕霧の紫上に對する心を看破す。秋好中宮を訪ふ。㊅源氏、明石上を訪ふ。㊆源氏、玉鬘を訪ふ。夕霧、隙見して兩人の餘り親しきに驚く。㊇夕霧、明石姫君の方にて文を書く。姫君を隙見す。㊈夕霧、大宮を訪ふ。

(一)中宮の御前に、秋の花を植ゑさせ給へること、常の年よりも見所多く、(二)色種をつくして、よしある黑木赤木の(三)ませを結ひまぜつゝ、同じき花の枝ざしすがた、(四)朝夕露の光も世のつねならず、玉かと輝きて造り渡せる野邊の色を見るには、また春の山も忘られて、涼しうおもしろく、心もあくがるゝやうなり。春秋のあらそひに、昔より秋に心よする人は數增りけるを、名だたる春の御前の花園に心よせ

㊀秋好中宮の方に多く秋草を植う、野分
(一)六條院の内の秋好中宮の方
(二)種類を盡して
(三)ませ垣
(四)朝露夕露の光

められて物する」と宣へれば、うちつれて三人(一)參り給へり。源「風(二)の音秋になりにけりと聞えつる笛の音に、忍ばれでなむ(三)」とて、御琴ひき出でて、なつかしき程にひき給ふ。源中將(四)は、盤渉調にいとおもしろく吹きたり。頭(五)中將(六)心づかひして、出したて難うす。源「遲し」とあれば、辨の少將拍子打ち出でて、忍びやかにうたふ聲、鈴蟲にまがひたり。二返ばかり謠はせ給ひて、御琴は中將(七)に讓らせ給ひつ。げにかの父大臣(八)の御爪音に、をさ〳〵劣らず、はなやかに面白し。源「御簾のうちに、物の音聞き分く人(九)ものし給ふらむかし。今宵は盃(一〇)など心してを。さか(一一)り過ぎたる人は、醉泣のついでに、忍ばれぬこともこそ」と宣へば、姫君もげに哀と聞き給ふ。絶(一二)えせぬ中の御ちぎり、疎なるまじきものなればにや、この君達(一三)を人知れず目にも耳にもとゞめ給へど、かけて(一四)然だに思ひよらず、この中將は、心のかぎり盡して、思ふ筋にぞ、かゝる(一五)序にも、え忍びはつまじき心地すれど、樣よくもてなして、をさ〳〵心解けてもかき(一六)わたさず。

(一)夕霧、柏木、紅梅
(二)前に秋風樂を吹き合せ居たるなるべし
(三)默し居るに忍びずして招きたり
(四)夕霧
(五)柏木
(六)玉鬘に心ある故此方にては謠ひにくがる也
(七)柏木
(八)頭中
(九)玉鬘の居るをいふ
(一〇)酒など出す事はさしひかへよ
(一一)我如き老人は醉ひては怺へずして、腹にある事を言うて仕舞ふものぞ
(一二)兄弟姉妹の緣は流石に疎に思はれぬものにや
(一三)玉鬘が柏木兄弟を
(一四)柏木等は一向氣がつかず
(一五)斯る場合にも玉鬘の事のみ思はれて堪へられぬ心地はすれども
(一六)箏を

（一）源が
（二）篝火の煙は消ゆる時あれども、我戀の烟は消ゆる時なし
（三）夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまで我身下もえにせん」
（四）篝火に立添ふ戀の烟ならば、いつそ篝の烟と共に行方なく其戀の烟をも消して仕舞つて下され
（五）玉鬘がつちがれば・
（六）これは
（七）夕霧の親しき友同士
（八）柏木
（九）上手らしく、「吹きなる」は「吹きなす」の誤なるべし
（一〇）源が
（一一）夕霧へ源が
（一二）篝火の涼しさに引留められて此方に來居る

ありて、御髪の手あたりなど、いと冷やかにあてはかなる心地して、打解けぬさまに、物をつゝましと思したる氣色、いとらうたげなり。（一）かへり憂くおぼしやすらふ。源「絶えず人さぶらひて燈つけよ。夏の、月なきほどは、庭の光なきいとものむづかしく、覺束なしや」と宣ふ。

源「（二）篝火にたちそふ戀のけぶりこそ世には絶えせぬほのほなりけれ

いつまでとかや。（三）ふすぶるならでも、苦しき下燃なりけり」と聞え給ふ。女君、あやしの有様やとおぼすに、

玉「（四）行方なきそらに消ちてよかゞり火のたよりにたぐふ烟とならば

人のあやしと思ひ侍らむこと」と、（五）わび給へば、源「くはや」（六）とて出で給ふに、東の對の方に、おもしろき笛の音、箏に吹き合せたるなり。（七）中將の例のあたり離れぬどち、遊ぶにぞありける。源「（八）頭中將にこそあなれ。（九）いとわざとも吹きなる音かな」とて、（一〇）立ちとまり給ふ。（一一）御消息、源「（一二）こなたになむ、いと陰涼しき篝火に、とゞ



(一)玉鬘に
(二)源はうるさき懸想心はあれども
(三)往生づくめな事などはせず
(四)玉鬘が

● 源氏玉鬘の方にて篝火の歌を詠む、夕霧柏木等琴會して音樂。

(五)「わがせこが衣の裾を吹きかへしうら珍しき秋の初風」
(六)源が玉鬘の方へ行きて日をくらし
(七)源が
(八)歸らんとして
(九)「打松」は「折松」の誤寫なるべしといふ、折松は篝に焚く樣にこなしたる松の木也
(一〇)多過ぎぬ位におきて

(一)聞え知らせけり。にくき御心こそ添ひたれど(二)、さりとて、御心のまゝにおしたち(三)てなどもてなし給はず、いとゞ深き御心のみまさり給へば、やう／＼懐かしう(四)打解け聞え給ふ。

秋にもなりぬ。初風涼しく吹き出でて、(五)せこが衣もうら寂しき心地し給ふに、忍びかねつゝ、いとしば／＼渡り(六)給ひて、おはしましくらし、御琴なども習はし聞え給ふ。五六日の夕月夜は疾く入りて、涼しくもれる氣色、荻の音もやうやうあはれなる程になりにけり。御琴を枕にて、諸共に添ひ臥し給へり。かゝる類あらむやと、(七)うち歎きがちにて夜ふかし給ふも、人のとがめ奉らむことを思せば、(八)渡り給ひなむとて、御前の篝火の少し消えがたなるを、御供なる右近の大夫を召して、燈しつけさせ給ふ。いと涼しげなる遣水のほとりに、氣色ことに廣ごり臥したる、檀の木の下に、(九)打松、(一〇)おどろ／＼しからぬ程におきて、さし退きて燈したれば、御前の方は、いと涼しくをかしき程なる光に、女の御有樣見るかひ

一 源氏近江君の事につきて頭中將を評す、玉鬘やうやく源氏に接近す

(一)近江君が世人の噂の種になれる也

(二)人の見ぬ處に隠れ居たる女子を左様に物々しく取立てゝ假令本氣の沙汰でなくとも人中に出して世間の噂の種になる様な事をするとは氣が知れぬ

(三)頭中は角のある氣象故

(四)深く穿鑿もせずに引取りて

(五)斯くはしたなく取扱ふならん

(六)取扱ひ様で穏やかにすむものぢやと

(七)玉鬘の心、よくこそ實父の方へ行かざりしと思ひて

(八)玉鬘の心、頭中は實父とはいひながら氣象をも知らずに側に居たらば

(九)玉鬘

篝火

梗槩 一 源氏、近江君の事につきて頭中將を評す。玉鬘やうやく源氏に接近す。
二 源氏、玉鬘の方にて篝火の顔を咏む。夕霧柏木等參會して音樂。

この頃世の人の言種に、(一)内の大殿の今姫君と、事に觸れつゝ言ひちらすを、源氏の大臣聞召して、源「ともあれかくもあれ、(二)人見るまじくて籠り居たらむ女子を、なほざりのかごとにても、さばかりに物めかし出でて、かく人に見せ言ひ傳へらるゝこそ、心得ぬことなれ。(三)いときは〲しう物し給ふあまりに、(四)深き心をも尋ねずもて出でて、心にも叶はねば、(五)斯くはしたなきなるべし。萬の事(六)もてなしからにこそ、なだらかなるものなゝめれ」と、いとほしがり給ふ。斯かるにつけても、(七)げによくこそと、(八)親と聞えながらも、年頃の御心を知り聞えず、馴れ奉らましかば、恥がましきことやあらましと、(九)對の姫君はおぼし知るを、右近もいとよく

と(一)あまえたる薫物の香を、返す〴〵焚きしめ居給へり。紅といふもの、いと赤らかにかい附けて、髮梳りつくろひ給へる、さる方に賑はゝしう、愛敬づきたり。(二)御對面のほど、(三)さし過いたることどもあらむかし。

(一)仇々しき
(二)近江君と女御と
(三)出すぎたる擧動

(一)わきから
(二)自分が草書を知らぬ故か知らぬが、此歌は頭も尾もなき樣に見える
(三)此手紙の樣に氣取らなければ
(四)中納言君に
(五)公然とは笑はねども
(六)使の童が
(七)近江君の手紙は引事づくめなれば返事がしにくし
(八)仰を受けたる代筆の樣に見えては氣の毒ならんとて
(九)近處に住む甲斐なき程の御疎遠は恨めし
(一〇)わざと分らぬ歌にて返歌する也、先方の地名を無暗に入れたるを受けて此方も四ケ國の地名をよみ入れたり
(一一)わが歌だと言ひ觸らされてはならぬ
(一二)近江君
(一三)歌の松を「待つ」にかけたりと解したる也

いふ、いと近う侍ひて、そば〳〵見けり。中納言「いと今めかしき御文の氣色にも侍るかな」と、ゆかしげに思ひたれば、(一)女御「草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」とて賜へり。女御「返事(二)、(三)かくゆゑ〳〵しからずば、わろしとや思ひ落されなむや」とて、女御「書き給へ」と(四)讓り給ふ。(五)もて出でてこそあらね、若き人々は、ものをかしうて、皆打笑ひぬ。御返乞(六)へば、中納言「(七)をかしきことの筋にのみまつはれて侍るめれば、聞えさせにくゝこそ。(八)宣旨書めきては、いとほしからむ」とて、たゞ御文めきて書く。

中納言(九)「近きしるしなき、覺束なさは恨めしく、

(一〇)ひたちなるするがの海のすまの浦に浪立ちいでよ箱崎の松

と書きて、讀み聞ゆれば、女御「あなうたて、まことに(一一)自らのにもこそ言ひなせ」と、かたはらいたげに思いたれば、中納言「それは聞かむ人辨へ侍りなむ」とて、押し包みて出しつ。御方(一二)見て、近江「をかしの御口つきや。(一三)まつと宣へるを」と一、い

(一)厭はるゝ程益思ひのまさるといふ道理ならん歟
(二)「言にいでて言はぬ計ぞみなせ川下に通ひて戀しきものを」
(三)譯の分らぬ歌也
(四)「み吉野の大川水のゆほびかに思ふもの故浪の立つらん」
(五)しといふ假名を長く書き
(六)近江君が得意になりて見て
(七)使にやる童也、ひすましは厠の掃除を司る役
(八)新參者
(九)近江君の居所

まことや、暮にも參りこむと思ひ給へ立つは、(一)厭ふにはゆるにや侍らむ。いでやいでや、怪しきはみなせ川(二)にを。

とて、又端にかくぞ、

(三)草わかみひたちの海のいかゞ崎いかでおひ見むたごの浦浪

(四)大川水の。

と、青き色紙一重に、いと草がちに、いかれる手の、その筋とも見えず漂ひたる書きざま、(五)し文字ながに、わりなく由ばみたり。行のほど端樣にすぢかひて、倒れぬべく見ゆるを、(六)打ちゑみつゝ見て、さすがにいと細くちひさく卷き結びて、瞿麥の花につけたり。(七)ひすまし童はしも、いと馴れて淸げなる、(八)今まゐりなりけり。女御の御方の臺盤所に寄りて、童「これ參らせたまへ」といふ。下仕見知りて、(九)北の對にさぶらふ童なりけりとて、御文取入る。大輔の君といふ人持てまゐりて、ひき解きて御覽ぜさす。女御ほゝゑみて打置かせ給へるを、中納言の君と

（一）輕卒なる聲で
（二）言行がすべて下品に見ゆる譯なり
（三）近江君は一體万更の愚物にはあらずして
㊅ 近江君弘徽殿女御に文を贈る、其返事
（四）澁々に參る樣な樣子を見せたらば女御の氣受惡かるべければ今夜直に行かん
（五）どの樣に我を愛されたりとも
（六）女御扱に惱まれたらば到底此御殿で立行くことは出來ぬ
（七）近江君の
（八）「葦垣の」は枕詞
（九）一向參上致さぬは、「立寄らばかげ踏むばかり近き間に逢ひ見ぬ關を誰かすゑけん」
（一〇）「知らねども武藏野といへばかこたれぬよしやさこそは紫の故」私も御同胞の端と申上げては恐多けれども
（一一）無暗に點をうちて、筆勢のことぐ\しきをいふ

居たりとも、よろしき心地あらむとも聞えず、淡つけき（一）聲様に宣ひ出づる詞こはごはしく、言葉だみて、我が儘に誇りならひたる乳母の懐にならひたる様に、もてなしいと怪しきに、やつるゝ（二）なりけり。いと（三）言ふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あはぬ歌、口疾くうち續けなどし給ふ。

さて、近江「女御殿に參れと宣へるを、澁々（四）なるさまならば、ものしうもこそ思せ。夜さりまうでむ。大臣の君、天下（五）におほすとも、この御かたぐ\の（六）、すげなうもてなし給はむには、殿の中には立てりなむや」と宣ふ。御（七）おぼえの程いと輕らかなりや。まづ御文奉れ給ふ。

近江葦垣（八）のまぢかき程には侍ひながら、今まで影（九）ふむばかりのしるしも侍らぬは、勿來の關をやすゑさせ給ひつらむとなむ。知らねども（一〇）、武藏野といへばかしこけれど、あなかしこやく\。

と、點（一一）がちにて、裏には、

も」と宣ひ棄てて渡り給ひぬ。よき四位五位たちの、いつき聞えて、うち身じろき給ふにもいと厳しき御勢なるを見送り聞えて、近江「いで、あなめでたの我が御親や。かゝ(一)りける種ながら、怪しき小家に生出でける事」と宣へば、五節、「あま(二)りことゞゝしう、恥かしげにぞおはする。(三)よろしき親の思ひかしづかむにぞ、尋ね出でられ給はまし」といふもわりなしや。近江「例(四)の君の、人のいふ事破り給ふ。いでめざまし。今(五)はひとつくちに、言葉なまぜられそ。あ(六)るやうあるべき身にこそあゝめれ」と、腹立ち給ふ顔つき、氣近う愛敬づきて、打ち解けそほれたるは、さる方にをかしう罪許されたり。たゞいと鄙びあやしき下人の中におひ出で給へれば、物(七)いふさまも知らず。殊(八)なるゆゑなき言葉をも、のどやかに押ししづめて言ひ出したるは、打(九)ち聞く耳殊に覺え、をかしからぬ歌がたりをするも、聲づかひつ(一〇)きづきしくて、殘(一一)りおもはせ、本末惜みたるさまに打ちずゝじたるは、深(一二)きすぢ思ひえぬ程の打聞には、をかしかゝなりと耳もとまるかし。心(一三)深く由ある事を言ひ

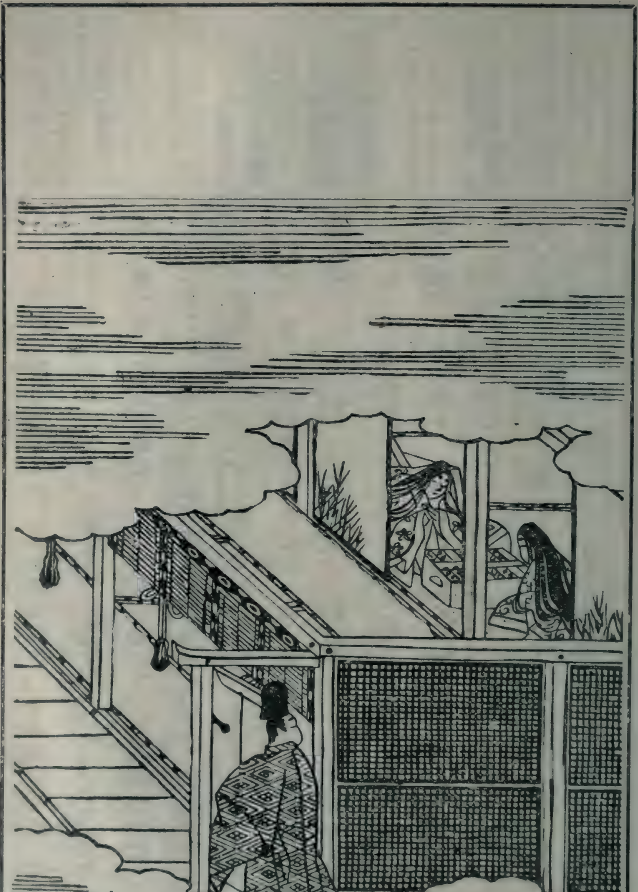
(一)斯る貴人の子でありながら我は
(二)頭中は
(三)寧ろもつと賤しき身分で大事にして呉れる親の方がよし
(四)又お株で
(五)同輩らしき詞づかひはよしてくれ
(六)將來は出世すべきからだぢや
(七)物の言ひ様
(八)格別興味のなき詞でも、以下作者の汎論
(九)格別面白く聞かれ
(一〇)尤らしくて
(一一)餘情を殘し歌の一部分を殘して誦詠しなどすると
(一二)物のよく分らぬ者がふと聞くと
(一三)然るに近江君の様では假令言ふ事の趣意はよくても

(一)弘徽殿女御が宿に下りて居る時分に
(二)不束なる者も人中に交りて巧者になればそれでよくなるものぢや
(三)其つもりで女御に接するがよし
(四)人並に扱はれん事をのみ始終希ひ居る也
(五)年來他に何の望はなし
(六)一層口まめなれば
(七)左樣に手をおろして
(八)女御の處へ
(九)あやかりし僧にさへ遠ざからば、早口さへ直らば
(一〇)父がちやかして仕舞ふをも知らずして
(一一)大抵の人は以前に居るのが恥かしき位なるをもわからず
(一二)よき日を擇んで行く樣にでもせんか
(一三)行きてよしと思はば

た見繼ぎ、言ひ散さむことと、思ひ返し給ふものから、頭中「女御(一)の里にものし給ふ頃、時々わたり參りて、人の有樣なども見なれ給へかし。(二)ことなることなき人も、おのづから人にまじらひ、さる方になれば、さてもありぬかし。(三)さる心して見え奉り給ひなむや」と宣へば、近江「いと嬉しきことにこそ侍るなれ。唯いかでもいかでも、御方々に(四)數まへられ奉らむ事をなむ、寢ても覺めても。(五)年頃何事を思ひ給へつるにもあらず。御ゆるしだに侍らば、水を汲みいたゞきても、仕う奉りなむ」と、いとよげに今少しさへづれば、(六)いふかひなしとおぼして、頭中「いと然(七)おりたちて薪拾ひ給はずとも、參り(八)給ひなむ。唯かのあえものにしけむ法の師だに遠くば」と、(一〇)をこごとに宣ひなすをも知らず、同じき大臣(九)と聞ゆる中にも、いと清げにもの〳〵しく、花やかなるさまして、(一一)おぼろけの人見えにくき御氣色をも見知らず、近江「さていつか女御殿へは參り侍らむ」と聞ゆれば、頭中「よろしき日(一二)などやいふべからむ。よし、こと〴〵しくは何かは。(一三)さもと思はれば、今日にて

(一)自分を立派な者と思ひて人中に交りたらば窮屈ならんが
(二)小便壺の掃除役
(三)今少し物言を靜かにして
(四)へうきんな處ある
(五)私の早口は舌の性質による事ならん
(六)之を苦にやみて
(七)出産の時近江の妙法寺の別當禱祈賴がにまれて來居たる其にあやかりたるなりと母が嘆きたりし
(八)其僧の口早なるは前世に犯したる罪の報なるべし
(九)法華經「若得爲人、聾盲瘖瘂、誹斯經故、獲罪如是」
(一〇)我子ながら恥かしき女御に此樣な不束者をあづくるは恥かし
(一一)詮義もせず

ひさしつる、御氣色の恥かしきも見知らず、近江「何かそは、こと〴〵しく(一)思ひ給へて交らひ侍らばこそ所せからめ。おほみおほつぼとり(二)にも、仕う奉りなむ」と聞え給へば、え念じ給はで、うち笑ひ給ひて、頭中「似つかはしからぬ役なンなり。かくたまさかに逢へる親に、孝ぜむの心あらば、このもの(三)宣ふ聲を、少しのどめて聞かせ給へ。さらば命も延びなむかし」と、をこめい(四)給へる大臣にて、ほゝ笑みて宣ふ。近江「舌の本性(五)にこそは侍らめ。幼く侍りし時だに、故母の常に苦しがり(六)教へ侍りし。妙法寺(七)の別當大德の、産屋に侍りける、あえものとなむ歎き侍りたうびし。げに、いかでこの舌疾さ歇め侍らむ」と思ひさわぎたるも、いと孝養の心深く哀なりと見給ふ。頭中「その氣近く入立ちたりけむ大德こそ、あぢきなかりけれ。唯(八)その罪の報なンなり。瘖瘂(九)とぞ、大乘そしりたる罪にも、數へたンめるかし」と宣ひて、子(一〇)ながら恥かしげにおはする御樣に、見え奉らむこそ恥かしけれ、いかに定めて、かく怪しきけはひも尋ねず(一一)迎へ寄せけむ、とおほし、人々もあま



(一)狎れやすく愛敬あるをいふ歟、以下近江君の容貌をいふ
(二)罪のなさそうなる
(三)額甚だせまきと
(四)此二點でぶちこはして居るらしい
(五)どこといひて格別よい處はなけれど
(六)我子たる事は容貌の上から爭ふべからずと
(七)今の生活は落附かずや肌の合はぬ氣持はせぬか
(八)頭中の
(九)雙六してよき手を打ち得ぬ樣な心持
(一〇)我が小間使にてもせんかと思ひしかど
(一一)普通の奉公人はどの樣なる人物にても
(一二)誰それの娘と知らるゝ位の者になると
(一三)況や我が娘などと名のる者が其方の樣では甚だ困る

とあまへたる様どもしたり。容貌はひぢゝかに(一)、さすがに愛敬づきたる方にて、髪麗しう、(二)罪かろげなるを、(三)額のいと近やかなると、聲の淡つけさとに、(四)損はれたるなゝめり。(五)取りたててよしとはなけれど、(六)こと人とあらがふべくもあらず、鏡に思ひ合せられ給ふに、いと宿世心づきなし。頭中「(七)かくてものし給ふは、つきなく、初々しくなどやある。事繁くのみありて、え訪ひまうでずや」と宣へば、例のいと舌疾にて、頭中「かくて侍へば、何の物思か侍らむ。年頃おぼつかなく、ゆかしう思ひ聞えさせし御顔(八)、常にえ見奉らぬばかりこそ、(九)手うたぬ心地し侍れ」と聞え給ふ。頭中「げに、身に近うつかふ人もをさをさなきに、(一〇)さやうにても見ならし奉らむと、かねては思ひしかど、え然しもあるまじきわざなりけり。(一一)なべての仕う奉り人こそ、とあるもかゝるも、おのづから立ち交らひて、人の耳をも目をも、必ずしも留めぬものなれば、心安かゝべかゝめれ。(一二)それだにその人の女、かの人の子など知らるゝきはになれば、親兄弟の面伏なる類多かゝめり。(一三)まして」と宣

侍らむ。中將(一)などのいと二なく思ひ侍りけむかねごとに堪へずといふばかりにこそ侍らめ。かく宣ひ騷ぐを、はしたなく思はるゝにも、(二)かたへはかゞやかしきにや」と、いと恥かしげにて聞え給ふ。この御さまは細にをかしげにはなくて、いとあてにすみたるものの、懷かしきさま添ひて、おもしろき梅の花の開けさしたる朝ぼらけ(三)覺えて、殘おほかりげにほゝ笑み給へるぞ、人に異なりける、と見奉り給ふ。頭中「中將の、(四)さはいへど、心若きたどりの少きなり」など申し給ふも、いとほしげなる人の(五)御おぼえかな。(六)やがてこの御方の便に、佇みおはしてのぞき給へれば、簾高くおし張りて、五節の君とて、ざれたる若人のあると、雙六をぞ打ちたまふ。手をいと切におし揉みて、近江「(七)せうさい〳〵」といふ聲ぞ、いと舌疾きや。あなうたてと思して、(八)御供の人の先おふを(九)も、(一〇)手かき制し給ひて、なほ妻戸の細目なるより、障子のあきあひたるを見入れ給ふ。(一一)この人もはた氣色はやれる、「御返や〳〵」と、(一二)筒をひねりつゝ、頓にも打出でず。(一三)中に思ひはありやすらむ、い

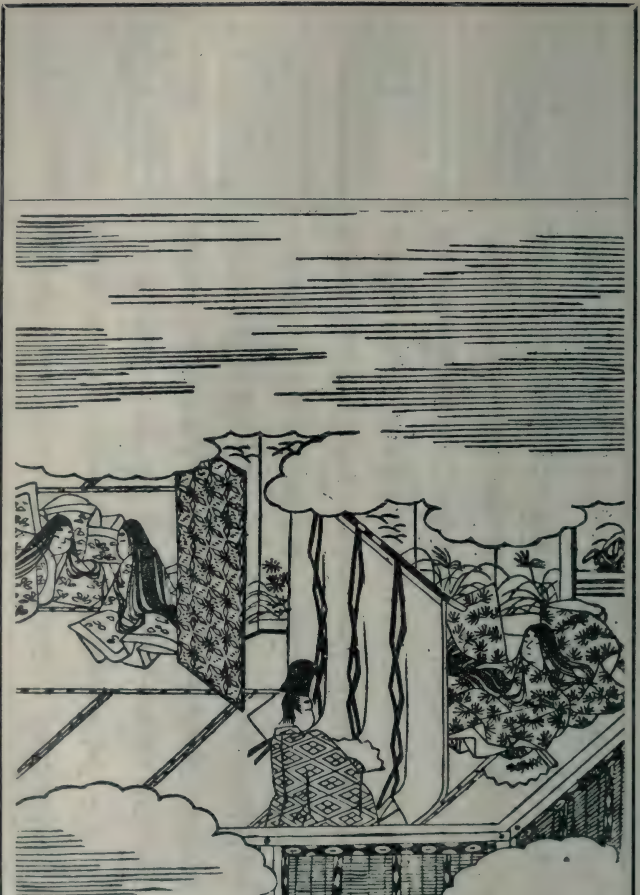
(一)柏木抔が非常に善い樣に前から言ひ程では無いといふ丈の事
(二)當人が恥かしくて閉口したるならん
(三)すました中に
(四)一體此事は何といふても柏木の處の淺きより出たる事也
(五)近江君
(六)女御の處へ來し序に頭中が近江君の處へ行きて
(七)小賽、相手が小き目を振出さんことを望む也
(八)頭中が
(九)人拂するをも
(一〇)手招きして
(一一)五節君も輕卒な樣子にて
(一二)返報に多き目を振出さんと望む意也といふ
(一三)此樣を見て頭中が「さゞれ石の中に思はありながら打出づる事の難くもある哉」の歌を思ひ出したる也

る」など、いとらうたしと思ひつゝ聞え給ふ。(一)昔は何事をも、深う思ひ知らで、なかなか、さし當りて(二)いとほしかりし事のさわぎにも、(三)おもなくて見え奉りけるよと、今ぞ思ひ出づるも胸ふたがりて、いみじう恥かしき。(四)大宮よりも、常に(五)覺束なき事を恨み聞え給へど、かく宣ふがつゝましうて、え渡り見え奉り給はず。

(六)大臣、この北の對の(七)今姫君を、いかにせむ、さかしらに迎へ率てきて、人かう誹るとて還し送らむもいと輕々しく、物狂ほしきやうなり、(八)かくて籠め置きたれば、まことにかしづくべき心あるかと、人の言ひなすなるもねたし、(九)女御の御方などに交らはせて、さる(一〇)鳴呼のものにしないてむ、(一一)人のいとかたはなるものに言ひおとすなる容貌はた、いと然言ふばかりにやはある、など思して、(一二)女御の君に、

頭中「(一三)かの人參らせむ。見苦しからむことなどは、老いしらへる女房などして、つつまず言ひ教へさせ給ひて御覧ぜよ。(一四)若き人々のことぐさには、な笑はせ給ひそ。うたて淡つけきやうなり」と、笑ひつゝ聞え給ふ。女御「などか、いとさ(一五)殊の外には

(一)雲井雁の心
(二)夕霧との中を父に知られし時の騒動
(三)恥かしい顔もせずに父に見えし事よと
(四)夕霧の祖母、葵の母、
(五)雲井雁の無沙汰を恨んで來るけれども、父に叱らるゝに憚りて行きもせず
㊄ 頭中將近江君を持扱ふ。雙六する處に行合せて近江君を教訓す
(六)頭中
(七)近江君、以下頭中の心
(八)此儘養ひ置けば眞實大事にして居る樣に噂されるも殘念
(九)弘徽殿女御
(一〇)笑ひ物にせん
(一一)人が惡くいふ近江君の容貌も評判程にひどくはない
(一二)弘徽殿女御
(一三)近江君を御手許へ差上げん
(一四)噂の種にして
(一五)そう非常に惡くはない



(一)捨鉢なる樣に身を持つは品がわるい
(二)僧が不動の眞言を唱へ印を結んで居る時の樣にかたくなりて居るのも惡い
(三)「うち〳〵の人にも」の誤なるべし、家内の人人にも親まぬ位に構へて居るのも氣高き樣なり、とはいふもの〻奥床しく心美しき仕方とは言はれぬ
(四)明石姫君を仕込む敎は
(五)萬事に通達して一方に偏せず
(六)一方に秀でて其に片寄らせず、又何事にも暗からぬ樣にせんと
(七)ひろき法則を立てられたり
(八)どちらへか傾くは自然の勢なれば
(九)人となれば必ず其人の型がきまるならん
(一〇)明石姫君が成人して
(一一)かねて思ひし如く其方を宮仕に出す事は出來なくなりたれども、人に笑はれぬ樣に身の收まりをつけてやらんと大に心配して居る
(一二)人の氣をひく爲に懸らしくする人(夕霧)の口車には乘るな、我に考がある

女は、身を常に心づかひして守りたらむなむよかるべき。心安く(一)打ち捨てたる樣にもてなしたるは、品なきわざなり。さりとて、いとさかしく身かためて、不動(二)の陀羅尼よみ、印つくりて居たらむもにくし。(三)うつ〻の人にもあまり氣遠く、物隔てがましきなど、氣高きやうとても、人にく〻心美しうはあらぬわざなり。太政大臣の、后がねの姫君(四)ならはし給ふなる敎は、(五)よろづの事に通はしなだめて、(六)かど〳〵しき故もつけじ、たど〳〵しくおほめく事もあらせじ、(七)とゆる〻かにこそおきて給ふなれ。實にさもある事なれど、人として、心にも、するわざにも、立(八)て〻靡く方とあるものなれば、(九)おひ出で給ふ樣あらむかし。(一〇)この君の人となり、宮仕に出したて給はむ世の氣色こそ、いとゆかしけれ」など宣ひて、頭中(一一)「思ふやうに見奉らむと思ひしすぢは、かたきやうになりにたる御身なれど、いかで人笑はれならずしなし奉らむとなむ、人の上のさま〴〵なるを聞くごとに、思ひ亂れ侍り。(一二)試みごとに懸がらむ人のねぎごとに、なしばし靡き給ひそ。思ふさま侍

（一）源が慇懃に口をきゝて懇望せば、それに免ずる樣にして承諾もせんと
（二）夕霧方では一向氣をもまぬ
㊃ 頭中將雲井雁を教訓す、飽くまで夕霧との中を割かんとす
（三）頭中が雲井雁の處へ
（四）雲井雁
（五）髮の先の容態
（六）侍女ども
（七）雲井雁が目がさめず
（八）頭中が
（九）差止めておくのに
（一〇）なぜ無用心な容態で寝て居たのぢや
（一一）けしからん

は、許し難くおほすなりけり。（一）大臣なども懇に口入れかへさひ給はばこそは、負くるやうにても靡かめ、と思すを、（二）男方はた、更にいられ給はず、心やましくなむ。

とかく思しめぐらすまゝに、ゆくりもなく輕らかにはひ渡り給へり。（三）少將も御供に參り給ふ。姫君（四）は晝寝し給へる程なり。羅の單衣を著給ひて臥し給へるさま、暑かはしくは見えず、いとらうたげに小やかなり。透きたまへる肌つきなど、いとうつくし。をかしげなる手つきして、扇を持給へりけるながら、かひなを枕にて、うちやられたる御髪のほど、いと長くこちたくはあらねど、いとをかしき末つ（五）きなり。人々（六）も物の後に寄り臥しつゝ打ち休みたれば、ふともおどろい給はず。（七）（八）扇をならし給へるに、何心もなく見上げ給へるまみ、らうたげにて、つらつきの赤めるも、親の御目にはいと美しくのみ見ゆ。頭中「うたゝねは諫め（九）聞ゆるものを、などか、いと物はかなき（一〇）樣にては大殿籠りける。人々も近く侍らはで、（一一）あやしや。

(一)源の御娘と思ふ故によく思はるゝのぢや
(二)今迄に評判のある筈ぢや
(三)自分の身丈は瑕瑾もなくて今迄全盛なるに
(四)立派な母親の腹に生れて大事に育てられて人よりも奥床しかるらるゝ様な娘のなきは
(五)子縁がなくて
(六)腹は卑しけれど
(七)珍しき幸運で
(八)未來も出世するならんと思はる
(九)玉鬘
(一〇)源は一かどある性質の人故つまらぬ女を勿體つけて居るならん
(一一)玉鬘の縁をどうきめるのか、螢が始終附纒つて終に手に入れるならん
(一二)源と螢と
(一三)どちらも人柄の勝れたる同士で宜しからん
(一四)雲井雁
(一五)玉鬘のやうに
(一六)どうして手に入れんかと人に氣をもません物をと
(一七)夕霧が相當の位に上らぬ限は

頭中「いで、それは、(一)かの大臣の御女と思ふばかりの、覺のいといみじきぞ。(二)人の心皆さのみこそある世なゝめれ。必ずさしも勝れ給はじ。人々しき程ならば、年頃聞えなまし。あたら大臣の、(三)塵もつかずこの世に過ぎ給へる御身のおぼえありさまに、(四)おもだたしき腹に、女かしづきて、げに疵なからむと、思ひやりめでたきが物し給はぬは、大方の(五)子の宿世なくて、心もとなきなゝめりかし。(六)おとり腹なゝめれど、明石の御許の産み出でたるはしも、(七)さる世になき宿世にて、(八)あるやうあらむと覺ゆかし。その(九)今姫君は、ようせずば、實の御子にもあらじかし。さすがにいと(一〇)氣色ある所つい給へる人にて、もてない給ふならむ」と、いひ貶し給ふ。頭中「さて(一一)いかゞ定めらるなる。親王こそまつはし得給はむ。もとより取りわきて(一二)御中もよし、(一三)人がらもきやうざくなる御あはひどもならむかし」と宣ひては、なほ(一四)姫君の御こと、飽かず口惜しく、(一五)かやうに心にくゝもてなして、(一六)如何にしなさむなど安からずいぶかしがらせましものを、と妬ければ、(一七)位さばかりと見ざらむかぎり

れ　おのづから關守強くとも、物の心を知りそめ、いとほしき思なくて、(一)我が心も思ひ入りなば、繁くとも障らじかし、と思しよるも、いとけしからぬ御心なりや。(二)いよいよ心安からず、思ひ渡らむも苦しからむ、(三)斜に思ひ過さむことの、とざまかうざまにかたきぞ、世づかずむづかしき御語ひなりける。

(四)内の大殿は、この今の(五)御女のことを、殿の人も許さず輕め言ひ、世にも(六)ほきたることと、謗りいふと聞き給ふに、少將の、事のついでに、(七)太政大臣のさることやと問ひ給ひし事、語り聞えければ、笑ひ給ひて、頭中「然かし。(八)彼處にこそは、年頃音にも聞えぬ山賤の(九)子迎へ取りて、物めかしたつれ。をさをさ(一〇)人の上、もどき給はぬ大臣の、怪しく、(一一)このわたりの事は、耳とゞめてぞ貶しめ給ふや。(一二)これにぞ覺ある心地しける」と宣ふ。少將、「かの西の對にする給へる人は、(一三)いとこともなきけはひ見ゆるあたりになむ侍るなる。兵部卿の宮など、(一四)いたう心とゞめて宣ひ煩ふとか。(一五)おぼろげにはあらじとなむ、人々推し量り侍るめる」と申し給へば、

(一)自分も熱心に隙を覗ひたらば障は多くとも逢はれぬ事はあるまじ
(二)聟取せば
(三)どちらにしても玉鬘に對する情をよい加減にして係へてゆくのがむつかしき處が
㊂頭中將源氏の玉鬘を冊くを謗る、雲井雁の所置につきての煩悶
(四)頭中
(五)近江君
(六)ぼけたる、迂濶なるの意なるべし
(七)源が左樣の事ありやと尋ねられたりと
(八)源氏の處にこそ
(九)玉鬘をいふ
(一〇)人の惡口をいはぬ源が
(一一)我家のことといへば
(一二)是寧ろ我が名譽なりと思ふ
(一三)玉鬘
(一四)批難すべき點なき
(一五)並大抵の美人ではあるまじと

劣の列にては、何ばかりかはあらむ、(一)我身ひとつこそ人よりは殊なれ、見む人の數多が中にかゝづらはむ末にては、何の覺かはたけからむ、(二)異なることなき納言のきはの、二心なくて思はむには、劣りぬべきことぞと、自らおほし知るに、いといとほしうて、(三)宮、大將などにや許してまし、さてもてはなれ(四)誘ひ取りては、思ひ絶えなむや、いふかひなきにても、さもしてむと思す折もあり。されど渡り給ひて、御容貌を見給ひ、今は御琴敎へ給ふにさへ託けて、近やかに馴れ寄り給ふ。姫君も、初こそ、むくつけく、うたて覺え給ひしか、斯くてもなだらかに、後めたき御心はなかりけりと、やうやう目なれて、いとしも疎み聞え給はず、さるべき御答も、狎れ狎れしからぬ程に聞えかはしなどし給ひて、(五)見るまゝにいと(六)愛敬づき、かをりまさり給へれば、(七)なほさてもえ過すまじく思しかへさる。(八)さばまた、(九)さてこゝながらかしづきすゑて、然るべきをりをりに、はかなくうち忍び、物をも聞えて慰みなむや、(一〇)かくまだ世馴れぬ程の煩はしさこそ、心苦しうはありけ

(一)源自身丈は貴人なれども、源の多くの妻妾中の末席位では何程貴ばれもすまじ
(二)寧ろ平凡な納言位の地位の男に專ら愛せられる方が勝れりと承知して居る故玉鬘が氣の毒で
(三)螢、髭黑
(四)螢などの方へ迎へ取られたらば思ひ切れるかも知れぬ、つまらぬながら左樣にでもせんかと
(五)源が
(六)玉鬘が
(七)此儘奇麗な交ばかりでは滿足出來ぬ樣に
(八)源の心、さらば又
(九)誰か聟をきめて、玉鬘を先方へ渡さず此儘此處におきて
(一〇)玉鬘がまだおぼこなる故に今迄は面倒にも氣の毒にもありたれども、聟取りしての後ならば如何に人目が憚られるにしても女も人情を解し、我が氣の毒に思ふ點もなくなりて

(一)其がうるさき故斯く其方をかくし置きて氣の毒な思をする
(二)「たらちねの親のかふこの繭籠りいぶせくもあるか妹にあはずして」
(三)賤しき私の母如き者の事を誰も尋ぬる人はあらじ
(四)古歌なるべし、未詳
(五)彌まさる戀情は
(六)源の玉鬘を訪ふことが餘り繁く
(七)然るべき用事を拵へて
(八)玉鬘の事ばかり
(九)源の心
(一〇)無理な戀をして
(一一)煩悶を止めんとて心の儘に玉鬘を我物にしたらば
(一二)玉鬘に氣の毒也
(一三)何程玉鬘を愛するとても、紫上と同等に扱はんとは源自身にも思はれず
(一四)紫以下とすればつまらぬ地位也

(一)この事の煩はしさにこそ、(二)繭ごもりも心苦しう思ひ聞ゆれ」と宣ふ。君うちなきて、

玉　(三)山がつの垣ほに生ひしなでしこのもとの根ざしをたれか尋ねむ

はかなげに聞えない給へるさま、げにいと懐かしう若やかなり。源「(四)來ざらましかば」と打ち誦じ給ひて、(五)いとゞしき御心は、苦しきまで、なほえ忍びはつまじうおぼさる。

(六)渡り給ふことも、あまりうち頻り、人の見奉り咎めつべき程は、心の鬼に思しとどめて、(七)然るべきことをし出でつゝ、御文の通はぬをりなし。たゞこの御事のみ、(八)旦暮御心にかゝりたり。(九)何ぞ、(一〇)かくあいなきわざをして、安からぬ物思をすらむ、(一一)さ思はじとて、心のまゝにもあらば、世の人の誹り言はむことの輕々しさを、わが爲はさるものにて、(一二)人の御爲いとほしかるべし、(一三)限なき御志といふとも、春の上の御覺にならぶばかりは、我が心ながらえあるまじく思し知りたり、さてその(一四)

(一)厚かましく誰とでも合奏するがよし
(二)原來玉鬘の和琴は
(三)王孫たる女
(四)玉鬘の心、源が暫時でも彈き給へかし、さすれば聽き覺える事もあるべしと
(五)常はなるべく源に近寄らぬ樣にして居れど
(六)此の如く美しい音が出る事ぞ
(七)よく物を聞分くる人の爲には、源の情を訴ふるには玉鬘の耳を傾けぬを恨む意を含めたる詞
(八)琴を
(九)玉鬘が
(一〇)飽くまで見ずして
(一一)玉鬘の事を頭中に語り出せしも、雨夜の品定の時の事
(一二)昔の噂を
(一三)玉鬘を頭中に見せたらば、彼は定めし夕顔の行衞を聞かんとするならん。

はす人もありけめ。(一)おもなくて彼此にひき合せたるなむよき」と、切に聞え給へど、(二)さる田舍の隈にて、ほのかに京人と名のりける、ふる王(三)女の敎へ聞えければ、ひがごとにもやとつゝましくて、手觸れ給はず。(四)暫しも彈き給はなむ、聞き取ることもやと心もとなきに、(五)この御事によりてぞ、近うゐざり寄りて、玉「いかなる風の吹き添ひて、(六)かうは響き侍るぞ」とて、打ち傾き給へるさま火影にいと美しげなり。笑ひ給ひて、源「(七)耳がたからぬ人のためには、身にしむ風も吹き添ふかし」とて、(八)押しやり給ふ。(九)いと心やまし。人々ちかう侍へば、例の戲言もえ聞え給はで、源「瞿麥を飽か(一〇)でもこの人々のたち去りぬるかな。いかで、大臣にも、この花園見せ奉らむ、世もいと常なきを、と思ふに、いにしへも物の序に(一一)語り出で給へりしも、たゞ今のこととぞ覺ゆる」とて、少し宣ひ(一二)出でたるにも、いとあはれなり。

源「(一三)なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人やたづねむ

(一)和琴は東琴といひて名迄下等に聞ゆれども
(二)帝の御前の音樂にも第一に書司の女官を召して其司れる和琴を取出さしむるは
(三)日本にては和琴を諸樂器の親としてある故ならん
(四)其和琴をひく者の中にて第一に推すべき頭中將に習はゞ格別であらう
(五)頭中が來らるべければ、彼が十分に伎倆を盡して和琴をひく事は滅多にあるまじ
(六)容易に伎倆を示さぬものなり
(七)一本「ことつひになく」いづれにしても解し難し、誤あるべし、「琴つ振二なく」の意ならんといふ說もあり
(八)玉鬘の心
(九)和琴の一事にてさへ待遠に思ひ居れり
(一〇)催馬樂貫河「貫河の瀨々のやはら手枕やはらかに寢る夜はなくて親さくる妻」
(一一)親さくる妻の句の處は、源が玉鬘を實親に逢はせずに置くを思ひ合せてなるべし
(一二)恥かしがりては習ひ得ぬものぢや

て思ひ給へれば、源「然かし。あづま(一)とこそ名も立ちくだりたる様なれど、御前の(二)御あそびにも、まづ書司を召すは、人の國は知らず、(三)こゝにはこれを物の親としたるにこそあゝめれ。(四)その中にも、親としつべき御手よりひきとり給へらむは、心ことなりなむかし。こゝになども、(五)さるべからむ折には、物し給ひなむを、この琴に、手惜まずなど、あきらかに搔き鳴らし給はむことや難からむ。物の上手は、いづれの道も(六)心安からずのみぞあゝめる。さりとも遂には聞き給ひてむかし」とて、しらべ少しひき給ふ。(七)ことつひきびう、今めかしうをかし。(八)これにもまさる音や出づらむと、親の御ゆかしさの立添ひて、(九)この事にてさへ、いかならむ世に、さて打解け彈き給はむを聞かむ、など思ひ居給へり。源「(一〇)貫河のせゞのやはらた」など、いとなつかしう謠ひ給ふ。(一一)「親さくるつま」は、少しうち笑ひつゝ、わざとならず搔鳴らし給へるすがゝきの程、いひ知らずおもしろう聞ゆ。源「いで彈き給へ。ざえは(一二)人になむ恥ぢぬわざなり。想夫戀ばかりこそ、心の中に思ひて、紛ら

(一)端近の處で
(二)和琴は其樣な場合がなつかしく常世風でよい
(三)仰山な奏樂の場合にはだらしのない心地がする
(四)此和琴は他の樂器の調子を整ふる所がえらい
(五)つまらぬ日本の樂器と見せて深き意味をこめて作りたるもの也
(六)他の樂器に合奏して
(七)和琴の彈き樣はどれ程の奧義とてもなけれど
(八)和琴の彈法の名
(九)和琴は玉鬘が僅に習ひたるのみにてどうかして上手になりたしと思ひ居る所故頭く氣になりて
(一〇)六條院で然るべき音樂の催の折に
(一一)和琴を習ふもの多き故誰もやさしいものかと今迄は思ひ居たり

頃思ひおとし聞えけるかな。秋の夜の月影涼しき程、いと奧深く(一)はあらで、蟲の聲にかき鳴らし合せたるほど、氣近う(二)今めかしきものの音なり。ことぐしき(三)調もてなししどけなしや。(四)この物よ。さながら多くの遊びものの音、拍子を整へとりたるなむいとかしこき。(五)和琴とはかなう見せて、際もなくしおきたることなり。廣く他國の事を知らぬ女のためとなむ覺ゆる。同じくば、心とゞめて物(六)などに搔き合せてならひ給へ。(七)深き心とて、何ばかりもあらずながら、又まことに彈き得る事はかたきにやあらむ。たゞ今はこの内の大臣になずらふ人無しかし。たゞはかなき同じすがゝき(八)の音に、萬のものの音こもり通ひて、いふ方もなくこそ響きのぼれ」と語り給へば、ほのぐ(九)心えて、いかでと思すことなれば、いとゞいぶかしうて、玉「このわたり(一〇)にさりぬべき御遊の折などに、聞き侍りなむや。怪しき山賤などの中にも、まねぶもの數多侍ることなれば、おしなべて心安くやとこそ思ひ給へつれ。さは(一一)勝れたるは、樣殊にや侍らむ」とゆかしげに、切に心に入れ

(一)夕霧
(二)夕霧を厭ふは藤原家ばかりの一門の中へ夕霧が獨り王孫にて交るを厭ひてならん歟と
(三)催馬樂我家「わいへんはとばり帳をも垂れたれば大君來ませ聟にせん御肴は何よけんあわび榮螺かかせよけん」
(四)御肴は何よけんとちやはやされたくはなし
(五)幼馴染の戀が遂げず
(六)頭中が若し夕霧を身分卑く聟として貫目が足らぬと思ふならば
(七)我にさへ任せらるならば頭中の心配になる樣な事はせぬ筈
(八)源と頭中と
(九)玉鬘が
(一〇)音樂などは其方は嫌ひかと思ひて

かしげになまめき給へり。源「(一)中將を厭ひ給ふこそ大臣は本意なけれ。まじりもの(二)なく、きら〳〵しかゝめる中に、王だつ筋にて、かたくなゝりとにや」と宣へば、玉「來(三)まさばといふ人も侍りけるを」と聞え給ふ。源「いでその御肴(四)もてはやされむ樣は願はしからず。たゞ幼き(五)どち、結び置きけむ心も解けず、年月へだて給ふ心むけのつらきなり。まだ下﨟なり、世の聞耳輕しと思はれば、知らず顔にてこゝに(七)任せ給へらむに、(六)後めたうはありなましや」など、うめき給ふ。然はかゝる御心(八)の隔ある御中なりけりと、(九)聞き給ふにも、親に知られ奉らむことの何時となきを、哀にもいぶせくもおぼす。

月もなき頃なれば、燈籠に大殿油まゐれり。源「なほ氣近くて暑かはしや。篝火こそよけれ」とて、人召して、「篝火の臺ひとつ、こなたに」と召す。をかしげなる和琴のあるをひき寄せ給ひて、搔鳴らし給へば、律にいとよく調べられたり。音もいとよく鳴れば、すこし彈き給ひて、源「(一〇)かやうの事は御心にいらぬ筋にやと、月

し。(一)この人々は、皆思ふ心なきならじ。(二)なほ〳〵しききはをだに窓の內なるほどは、程に從ひて、ゆかしく覺ゆべかンめるわざなれば、この家のおぼえ、(三)內々のくだ〳〵しき程よりは、いと世に過ぎて、こと〴〵しうなむ言ひ思ひなすべかンめる。(四)方々ものすめれど、さすがに人のすきごと言ひ寄らむにつきなしかし。(五)かくて物し給へば、(六)いかでかさやうならむ人の氣色の、深さ淺さをも見むなど、さうざうしきまゝに願ひ思ひしを、本意なむかなふ心地しける」など、さゞめき聞え給ふ。御前に、亂りがはしき前栽なども植ゑさせ給はず、瞿麥の色をとゝのへたる、唐の倭の、笆(七)いとなつかしく結ひなして、咲き亂れたる夕映いといみじう見ゆ。皆立ちよりて心のまゝにも折り取らぬを飽かず思ひつゝ休らふ。源(八)「有職どもなりな。心もちゐなども、とり〴〵につけてこそめやすけれ。(九)右の中將は、まして少ししづまりて、心恥かしげさまさりたり。いかにぞ(一〇)音づれ聞ゆや。(一一)はしたなくも、なさし放ち給ひそ」など宣ふ。(一二)中將の君は、かくよき中にも、勝れてを

(一)少將等何れも其方に氣のなきは無し
(二)つまらぬ身分の女でも娘の內は相應に奥床しく思はれるものなれば況や
(三)實際はつまらぬ家なれど
(四)明石姫君秋好などあれど、明石は后の候補者秋好は中宮故さすが言ひ寄ることが出來ぬ
(五)然るに其方が居らるる故
(六)どうかして風流才子達の樣子を見たしと兼て思ひし願が叶ひし心地す
(七)ませ垣
(八)少將藤侍從等をほめたる也
(九)柏木
(一〇)柏木から文が來るか
(一一)取合はずして恥をかゝせるな
(一二)夕霧

(一)なまねたしとも、漏り聞き給へかしとおぼすなりけり。かう聞き給ふにつけても、(二)對の姫君を見せたらむ時、又(三)侮らはしからぬ方にても、もてなされなむはや、(四)いと物きら〳〵しく、かひある所つき給へる人にて、善き惡しき差別も、けざやかにもてはやし、又もて消ち輕むることも、人に異なる大臣なれば、いかにものしと思すらむ、覺(五)えぬさまにて、この君をさし出でたらむに、え輕くは思さじかし。いと嚴しうもてなしてむ、とおぼす。夕つけゆく風いと涼しくて、歸り憂く若き(六)人々は思ひたり。源「心安くうちとけやすみ涼まむや。やう〳〵、かやう(七)の中にも厭はれぬべき齢にもなりにけりや」とて、西の對に渡り給へば、君達皆御送に參り給ふ。

黄昏時の(八)おぼ〳〵しきに、同じ直衣どもなれば、何とも辨へられぬに、大臣、(九)姫君を、「少し外出で給へ」とて、忍びて、源「少將侍從など率てまうで來たり。いと(一〇)かけり來まほしげに思へるを、中將のいと實法の人にてゐてこぬ　無心なゝめりか

(一)頭中が我言を漏れ聞きて氣を惡くせよかしと源が思へる也
(二)玉鬘を頭中に見せたらば
(三)「侮らはしからん方」の誤歟、玉鬘をも輕蔑して取扱ふべき歟
(四)頭中は
(五)素姓を知らせずに玉鬘を見せたらば
(六)いかめしく玉鬘を取扱ひて頭中に見せてやらんの意歟
(七)若い者の仲間には

㊀源氏玉鬘を訪ひて和琴を敎ふ、玉鬘に對する煩悶
(八)薄闇きに
(九)玉鬘を呼出して
(一〇)彼等は此處へ飛んでも來たき樣子なるを、夕霧が律義者でつれて來ぬは氣がきかぬ

知り侍らず。げにこの頃珍らしき世語(一)になむ、人々もし侍るなる。かやうのことこそ、人のため自ら、けそんなる(二)わざに侍りけれ」ときこゆ。まことなりけり(三)と思して、源「いと多かゝめる(四)列に離れて後るゝ雁を、しひて尋ね給ふらむが、ふくつけき(五)ぞかし。こゝにこそいと乏しき(六)に、さやうならむもののくさはひ、見出でまほしけれど、名のりも物憂き(七)きはとや思ふらむ、更にこそきこえね。さても、もて離れたる事(八)にはあらじ。亂がはしくとかく紛れ給ふめりし程に、底清く(九)すまぬ水に宿れる月は、曇りなき様のいかでかあらむ」と、ほゝ笑みて宣ふ。中將の君も、委しく聞き給へる事なれば、えしもまめだたず(一〇)。少將と藤侍從(一一)とは、いと辛しと思ひたり。源「朝臣(一二)や、さやうの落葉をだにひろへ(一三)。人わろき名の後の世に(一四)殘らむよりは、同じかざしにて慰めむに、何でふ事かあらむ」と、弄じたまふやうなり。かやうの事にてぞ、うはべはいとよき御中(一五)の、昔よりさすがに隙ありけるに、まいて中將を(一六)いたくはしたなめて、わびさせ給ふつらさを思しあまりて、

(一)世間話
(二)缺損の字音歟、很瑣などの義なるべし
(三)果して噂は僞ならずと源が思ひて
(四)多くある子どもの中にも入りて居らぬ娘を
(五)欲張りすぎる
(六)我こそ子どもが少いに
(七)我如き者の處へは名のり出るのもいやだと思ふのか一向言うて來ぬ
(八)左樣に名乘り出る上は無關係の者には非じ
(九)碌でもなき者の腹に生れたる子ならばよき娘ではあるまじ
(一〇)眞面目に辯解も出來ず
(一一)二人共柏木紅梅等の兄弟
(一二)夕霧をいふ
(一三)其落胤の娘をでも貰へ
(一四)雲井雁を取上げられて外聞惡き名を流さんより、せめて其姉妹を貰ひて心ゆかしにする方が無難であらう
(一五)源と頭中との中
(一六)頭中が夕霧にひどく恥をかゝせて



(一)帯紐も解かず畏りて居るは堪へ難かるべし
(二)來客たちの心
(三)頭中が餘所にて生ませし娘を引取りて
(四)噂する
(五)柏木の弟、紅梅大臣といふ
(六)前巻の末にありし事
(七)此女を近江君と名づく
(八)柏木
(九)汝の言ふ通り我が縁につながる者といふべき證據があるかと

なる今日の暑かはしさかな。無禮の罪は許されなむや」とて、寄り臥し給へり。源「いとかゝる頃は、遊などもすさまじく、さすがに暮し難きこそ苦しけれ。宮仕する若き人々堪へがたからむな、帯紐(一)も解かぬほどよ。こゝにてだに打亂れ、この頃世にあらむことの、少しめづらしく、ねぶたさ醒めぬべからむこと、語りて聞かせ給へ。何となく翁びにたる心地し、世間の事も覺束なしや」など宣へど、珍らしきこととて、うち出で聞えむ物語も、覺えねば、かしこまりたる様にて、(二)皆いと涼しき勾欄に、背押しつゝ侍ひ給ふ。源「いかで聞きしことぞや。(三)大臣のこのごろ外腹の女尋ね出でてかしづき給ふなる、(四)とまねぶ人なむありし。まことにや」と、(五)辨少將に問ひ給へば、辨「事々しう、然まで言ひなすべき事にも侍らざりけり。この春の頃ほひ、(六)夢語し給ひけるを、ほの聞き傳へける女の、(七)我なむかこつべきことあると、名のり出で侍りけるを、(八)中將の朝臣なむ聞きつけて、まことにさや(九)うにも觸ればひぬべきしるしやあると、尋ねとぶらひ侍りける。委しきさまはえ

常夏

梗槪

㊀源氏釣殿の納涼。頭中將の子息等參會。近江君の噂。㊁源氏玉鬘を訪ひて和琴を敎ふ。玉鬘に對する煩悶。㊂頭中將、源氏の玉鬘を冊くを誘る。雲井雁の所置に就ての煩悶。㊃頭中將、雲井雁を敎訓す、飽くまで夕霧との中を絕たんとす。㊄頭中將、近江君を持餘す。雙六する處に行合せて近江君を敎訓す。㊅近江君、弘徽殿女御に文を贈る。其返事。

いとあつき日、東(一)の釣殿に出で給ひて(二)涼み給ふ。(三)中將の君も侍ひ給ふ。親しき殿上人あまた侍ひて、(四)西川より奉れる鮎、近き川のいしぶし(五)やうのもの、御前にて調じてまゐらす。例の大殿の君達、(六)中將の御あたり尋ねて參り給へり。源「さうざうしく眠たかりつる折、よく物し給へる哉」とて、大御酒まゐり、氷水めして、(七)水飯などとり〴〵にさう(八)どきつゝ食ふ。風はいとよく吹けども、日のどかに曇なき空の、西日になるほど、蟬の聲などもいと苦しげに聞ゆれば、源「水の上むとく(九)

㊀源氏釣殿の納涼、頭中將の子息等參會、近江の君の噂
(一)六條院の
(二)源が
(三)夕霧
(四)桂川
(五)はぜに似たる魚
(六)夕霧をたづねて
(七)飯を水にて洗ひて冷汁にて食ふ也とぞ
(八)戲れつゝ
(九)効なき

(一)よく番をして居ねばならぬものぢや
(二)つまらぬ風をして落ぶれて居るかも知れぬ
(三)手がかりさへつかば引取らんと
(四)我背放埒な所行も多かりしが
(五)一通りの浮氣沙汰ではなかりし女の
(六)多くもなき持扱ひぐさ即ち子どもの一人をなくしたるが殘念
(七)人が姫を大事に持扱へるを見て其眞似がしたけれど、それが出來ぬを不足に思ふ也
(八)頭中將が
(九)自分の氣のつかぬ子が人の物になりたるを聞きつくる事抔あるべし

(一)如何にも如何にも目放つまじかりける、さかしらに我が子といひて、怪しき様に(二)てはふれやすらむ、とてもかくても聞え(三)出で來ば、と哀におぼしわたる。君達にも、頭中「もしさやうなる名のりする人あらば、耳とゞめよ。心のすさびに任せて、(四)さるまじき事も多かりし中に、是はいと、然(五)おしなべての際には思はざりし人の、はかなき物倦じをして、かく少(六)かりけるもののくさはひ一つを、失ひたる事の口惜しきこと」と、常に宣ひ出づ。中頃などはさしもあらず、打ち忘れ給ひけるを、人のさま〴〵につけて、女子(七)かしづき給へる類どもに、我が思ほすにしも叶はぬが、いと心憂く本意なくおぼすなりけり。夢(八)見たまひて、いと能くあはするもの召して合せさせ給ひけるに、卜者「もし年頃(九)御心にも知られ給はぬ御子を、人のものになして、聞し召し出づることや」と聞えたりければ、頭中「女子の人の子になることはをさ〳〵無しかし。如何なることにかあらむ」など、この頃ぞおぼし宣ふべかゞめる。

(一)頭中にあやまらせてやらんと
(二)雲井雁
(三)他の人に對しては一向せく氣色を見せず
(四)雲井雁の兄弟
(五)玉鬘を髯黒はきつい執心で
(六)夕霧にどうかしてくれと訴へて來れど
(七)他人の事となると小面倒で世話も出來ぬものぢや、髯黒が其妹の雲井雁と自分との中を骨折らぬに當て附けたる也
(八)源と頭中との間柄に似て居る

七 頭中將、玉鬘を戀しがる、夢見の占

(九)頭中
(一〇)心のまゝにそれぞれ立身させる
(一一)長女の弘徽殿女御も立后の事沙汰やみとなり
(一二)雲井雁も宮仕に出さんと思ひし當がはづれたれば
(一三)玉鬘
(一四)以下頭中の心
(一五)夕顔
(一六)玉鬘

ひし折々、いかで(一)人にもことわらせ奉らむと、思ひ置きし事忘れがたくて、(二)正身ばかりには、疎ならぬ哀を盡し見せて、(三)大かたにはいられ思へらず。(四)兄の君達なども、なまねたしなどのみ思ふこと多かり。(五)對の姫君の御有様を、右の中將はいと深く思ひしみて、言ひよる便もいとはかなければ、(六)この君をぞかこち寄りけれど、夕霧(七)「人の上にては、もどかしきわざなりけり」と、つれなく答へてぞ物し給ひける。昔の(八)父大臣たちの、御なからひに似たり。(九)内の大臣は、御子ども腹々いと多かるに、その生ひ出でたるおぼえ人柄に從ひつつ、(一〇)心に任せたるやうなる、御いきほひにて、皆なしたて給ふ。女はあまたもおはせぬを、(一一)女御もかく思しゝことの滯り給ひ、(一二)姫君もかく事違ふさまにてものし給へば、いと口惜しとおぼす。かの(一三)なでしこを忘れ給はず、物の折にも語り出で給ひしことなれば、(一四)如何になりにけむ、物はかなかりける(一五)親の心にひかれて、らうたげなりし(一六)人を、行方知らずなしにたること、すべて女子といはむものなむ、

(一)源の心、我存生中は同じ事なれど我死後を思へば常に馴れ親しませて置く方が夕霧の姫君に對する情が厚かるべしとて
(二)姫君の方の簾內に入る事を許せり
(三)女中の中へ入る事は
(四)數少き子故夕霧を大事がれり
(五)夕霧の性質
(六)源が明石姫君を夕霧に托したり
(七)姫君の樣
(八)夕霧が雲井雁の昔を思ひ出して
(九)遊相手をする也
(一〇)雲井雁を思出して
(一一)相手にしてもよき女に對しては冗談を言ひかくる事も多けれど
(一二)情人にしてもよいと
(一三)雲井雁を思ふにつけて早く六位の卑き身分を脫れたしと思ふ心のみ強し
(一四)強ひて大騷ぎせば頭中も折れて雲井雁をくれもせんが

聞え給はず、ならはし給ふ。我が世の程は、(一)とてもかくても同じことなれど、なからむ世を思ひやるに、なほ見つき、思ひしみぬる事どもこそ、取りわきては覺ゆべけれとて、南面の御簾の内は許し給へり。(二)臺盤所の女房の中は許し給はず。(三)あまたおはせぬ御なからひにて、いとやむごとなくかしづき聞え給へり。(四)大方の(五)心もちゐるなども、いとものくしく、まめやかに物し給ふ君なれば、後安く思しゆづれり。(六)まだいはけたる、(七)雛遊などのけはひの見ゆれば、かの人の、(八)諸共に遊びて過しゝ年月の、まづ思ひ出でらるれば、雛の殿の宮づかへ、(九)いとよくし給ひて、折々にうちしほたれ給ひけり。(一〇)さもありぬべきあたりには、(一一)はかなしごとも宣ひ觸るゝは數多あれど、頼みかくべくもしなさず、さる方になどかは見ざらむ(一二)と、心とまりぬべきをも、強ひてなほざりごとにしなして、なほかの緑の袖を、(一三)見えなほしてしがなと思ふ心のみぞ、やむごとなき節にはとまりける。あなが(一四)ちになどかゝづらひ惑はば、倒るゝ方に許し給ひもしつべかめれど、つらしと思

かゝめれど、すくよかに言ひ出でたるしわざも、女しき所なかゝめるぞ、(一)ひとやうなゝめる」と宣へば、源「現の人もさぞあるべかゝめる。人々しくたてたるおもむき(二)異にて、善き程に構へぬや。(三)由なからぬ親の心とゞめて生ふしたてたる人の、兒めかしきをいつけるしるしにて、後れたる事多かるは、何わざをしてかしづきしぞと、親のしわざさへ思ひやらるゝこそいとほしけれ。(四)げに然いへど、その人のけはひよと見えたるは、かひあり、面だたしかし。(五)詞のかぎりまばゆく擧め置きたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることの中に、げにと見え聞ゆることなき、いと見劣りするわざなり。すべて、よからぬ人に、いかで人ほめさせじ」など、ただこの姫君の(六)點つかれ給ふまじくと、よろづにおぼし宣ふ。繼母の腹穢き昔物語も多かるを、(七)心見えに心づきなしと思せば、(八)いみじく擇りつゝなむ、書き整へさせ、繪などにも畫かせ給ひける。

(九)中將の君を、此方には氣遠くもてなし聞え給へれど、姫君の御方には、さし放ち

(一)片意地
(二)我をたてゝ調和を求めぬは惡し
(三)身分ある親が注意して育てたる娘が、おぼこな所丈は箱入娘らしくても他に取處のなきは
(四)何というても流石育ちがら丈あると見らるゝ娘は、親も育てがひありて鼻が高い
(五)口をきはめて立派にはめたてゝ置きしに、當人の言行が一向感心せらるゝ處のなきは
(六)明石姫君が批難を受けぬ樣にとのみ
(七)繼母といふものゝ心は斯樣なものとわざわざ教ふる樣にていやな氣持がする故
(八)源が非常に物語の種類を選擇して
㊅　眞面目なる夕霧中將
(九)夕霧を紫の方には親しく立入らせねど、明石姫君の方には親しくさせつけてある

(一)源がじやらつきもせず
㊄明石姫君が繪物語を弄ぶにつきての源氏の注意
(二)明石姫君にねだられたからといふ口實で
(三)此物語今傳はらず
(四)紫上
(五)こまのの物語中に男女幼同士の戀をする事あるなるべし
(六)其に比ぶれば其方の大人になる迄待ちたる我が氣の長さは珍らしくて話の種にもなるべきぢや
(七)作者の源に對する冷評、成程源の「例にしつべく」といふ丈ありて、女にかけては隨分話の種になる珍らしいやり方が多かりし樣なり
(八)男女の情事を說きたる
(九)物語中の不埒をする女の事を見て明石姫君が其をよしと思はぬにせよ
(一〇)玉鬘には自分で戀をしかけながら、實の娘には斯く嚴重に取締る源のわけ隔てが甚しいと玉鬘が思ふならん
(一一)空穗物語の中のあて宮といふ姬君。多くの熱心なる男等を顧みずして終に東宮の妃となれる人

と聞え給ふも、心はづかしければ、いといたくも(一)亂れ給はず。かくしていかなるべき御有樣ならむ。」

紫の上も、(二)姫君の御あつらへにことづけて、物語は捨て難くおぼしたり。(三)こまのの物語の繪にてあるを、紫「いとよく畫きたる繪かな」とて御覽ず。小き女君の、何心もなくて畫寢し給へる所を、昔の有樣思し出でて、(四)女君は見たまふ。(五)源「かゝる童どちだに、いかにざれたりけむ。(六)まろこそなほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」と聞え出で給へり。(七)げに類多からぬ事どもは、好み集め給へりけむかし。源「姫君の御前にて、(八)この世馴れたる物語など、な讀み聞かせ給ひそ。(九)みそか心つきたるものの女などは、をかしとにはあらねど、かゝる事世にはありけりと、見馴れ給はむぞゆゝしきや」と宣ふも、(一〇)こよなしと、對の御方聞き給はば、心置き給ひつべくなむ。上、紫「心淺げなる人まねどもは、見るにも片腹いたくこそ。(一一)空穗の藤原の君の女こそ、いとおもりかにはかゞしき人にて、過な

とつ旨に當りて、菩提(一)と煩惱とのへだたりなむ、この人の善き惡しきばかりのことは變りける。よくいへば、すべて何事も空しからずなりぬや」と、(二)物語をいとわざとのことに宣ひなしつ。源「さてかゝる古事(三)の中に、まろがやうに實法(四)なるしれものの物語はありや。いみじう氣遠き、(五)ものの姫君も、(六)御心の樣につれなく、(七)そらおぼめきしたるは世にあらじな。いざ(八)類なき物語にして、世に傳へさせむ」と、さしよりて聞え給へば、顏をひき入れて、玉(九)「さらずとも、かく珍らかなる事は、世語にこそはなり侍りぬべかゝめれ」と宣へば、源「(一〇)珍らかにや覺え給ふ。げにこそまたなき心地すれ」とて倚りゐ給へるさま、いとあざれたり。

源「思ひ(一一)あまり昔のあとをたづぬれど親にそむける子ぞたぐひなき

不孝なるは、佛の道にもいみじくこそ言ひたれ(一二)」と宣へど、顏ももたげ給はねば、(一三)御髪をかきやりつゝ、いみじう恨み給へば、からうじて、

玉(一四) ふるき跡をたづぬれどげになかりけりこの世にかゝる親の心は

(一)佛教の悟と迷との相違は物語の善き人と惡き人との相違の如し
(二)つまらぬ物語に道理を附けて尤らしきものにして仕舞ひたり
(三)古き物語
(四)律義なる
(五)物語の姫君
(六)其方の如く
(七)空とぼけて人の言ふことを聞かぬ人は
(八)我と君との中を珍らしき物語にして
(九)物語にせずとも
(一〇)其方も我々の中を珍らしく思はるゝか
(一一)例を古に尋ねても親のいふ事をきかぬ子といふものは例がない
(一二)強く戒めたり
(一三)源が玉鬘の
(一四)源の樣にけしからぬ了簡を持ちたる親は仰せの通り昔にも類はなし

り給へば、源「(一)骨なくも聞え貶してけるかな。(二)神代より世にあることを、記し置きけるなゝなり。日本紀などは(三)唯かたそばぞかし。(四)これらにこそ道々しく委しきことはあらめ」とて、笑ひ給ふ。源「(五)その人の上とて、ありのまゝに言ひ出づることこそなけれ。善きも悪しきも、世に經る人の有様の、(六)見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠め難くて、(七)言ひ置き始めたるなり。善きさまに言ふとては、善きことの限をえり出で、(八)人に隨はむとては、又悪しきさまの珍らしきことを取り集めたる、(九)皆かた〴〵につけて、この世の外の事ならずかし。(一〇)人のみかどの才つくりやうかはれる、同じやまとの國のことなれど、(一一)昔今のに變るなるべし。深き事淺き事の差別こそあらめ、ひたぶるに空言と言ひはてむも、ことの心違ひてなむありける。佛の、いとうるはしき心にて說き置き給へる御法も、方便といふことありて、さとりなきものは、(一二)此處彼處違ふ疑を置きつべくなむ。(一三)方等經の中に多かれど、言ひもて行けば、(一四)ひ

(一)成程自分が下手に物語をけなしたるは悪かつた
(二)物語は
(三)一端を記せるのみ
(四)物語にこそ
(五)誰それの傳といひて
(六)作者が見ばなし聞きはなしにして置けぬ事を
(七)作者が書き留めたるが物語とはなりたる也
(八)其人の樣に隨ひて悪しきを悪しきといはんとてはの義なりといふ
(九)どちらにしても必ずある事を書いたものぢや
(一〇)支那の書物も作者の器量に隨ひて作風異なりといふ事歟
(一一)古今によりて相異るべし
(一二)此經の說と後經の說と違ふを見て疑を起すべし
(一三)釋尊五時の說教中方等時に說き給へる說經の中には小乘の方便說が多けれども
(一四)畢竟は大乘の教も小乘の方便說も同じ趣意に歸著して

（一）作り咄とは承知して居ながら
（二）さも實際らしく綴りなしたるは又
（三）心が一部分は引入れられる
（四）仰山に書きなしたるに興味を生じて
（五）冷靜に聞直せばいやにはなれど、初めて聞いた時には面白き處が耳につくもあり
（六）世間には口の上手な即ち文章のうまい奴があると見える
（七）かゝる物語などは
（八）そうでもあるまいか
（九）源の樣に嘘をつきなれた人は其樣に物語の裏面を看破せられるならんが、私共には只實際の事の樣にのみ思はれます
（一〇）かきかけたる畫を置くさしむく樣也

に欺かれむと生れたるものなれ。こゝらの中にまことはいと少からむを、かつ知る知る、かゝるすゞろごとに心を移し、はかられ給ひて、暑かはしき五月雨の（一）、髪の亂るゝも知らで、書き給ふよ」とて、笑ひ給ふものから、又、「かゝる世のふることならでは、げに何をか紛るゝことなき徒然を慰めまし。さてもこの偽どもの中に、實にさもあらむとあはれを見せ、（二）つき〴〵しうつゞけたるはた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、らうたげなる姫君の物思へる見るに、（三）かた心つくかし。又いとあるまじきことかなと見る〳〵、（四）おどろ〳〵しくとりなしけるが目驚きて、（五）靜に又聞く度ぞにくけれど、ふとをかしき節、あらはなるなどもあるべし。この頃幼き人の、女房などに時々讀まするをたち聞けば、（六）物よくいふものの世にあんべきかな。（七）空言をよくしなれたる口つきよりぞ言ひ出すらむと覺ゆれど、（八）然しもあらじや」と、宣へば、（九）「げに偽り馴れたる人や、さまざまにさも酌み侍らむ。たゞいと誠とこそ思ひ給へられけれ」とて、（一〇）硯をおしや

(一)常に自分の臥し慣れたる帳臺を源に譲りて
(二)花散が思切つて居る故
(三)源も共寢を強ひず
㊃六條院の女方に繪物語を玩ぶことはやる、源氏玉鬘に物語の趣意を説き聞かす
(四)繪を明石姫君に贈る
(五)玉鬘は
(六)繪物語などにかけてくらからぬ若き侍女等玉鬘方に多くありて
(七)小説などの人物の身の上話を
(八)玉鬘の心
(九)住吉物語の中の姫君、此物語今傳はらず、今あるは後人假托の作也といふ
(一〇)さし當りてつらき目にあひし折は勿論悲しかりしならんを今考へても特に同情せらるゝに
(一一)主計頭といふ老翁があぶなく姫君の夫にならんとせし時の事に自分が太夫監に取られんとせし時の事を比較して考へる、主計頭の事今の住吉物語にもあり
(一二)源氏
(一三)作り物語に動かされて悲喜するをいふ

て聞えなし給ふ。(一)床をば譲り聞え給ひて、御几帳引き隔てて大殿ごもる。氣近くなどあらむ筋をば、いと似氣なかるべきことに、(二)思ひ離れ聞え給へれば、(三)あながちにも聞え給はず。

長雨例の年よりもいたくして、晴るゝ方なくつれ〴〵なれば、御かた〴〵繪物語などのすさびにて、明し暮したまふ。明石の御方は、さやうのことをも由ありてしなし給ひて、(四)姫君の御方に奉り給ふ。(五)西の對には、まして珍らしく覺え給ふことの筋なれば、旦暮書き讀み、營みおはす。(六)つきなからぬ若人あまたあり、さまざまに珍らかなる(七)人の上などを、實にや僞にや、言ひ集めたる中にも、(八)わが有樣のやうなるはなかりけると見給ふ。(九)住吉の姫君の、(一〇)さしあたりけむ折は、さるものにて、今の世のおぼえもなほ心ことなゝめるに、(一一)主計頭が、ほと〳〵しかりけむなどぞ、かの監がゆゝしさを思しなぞらへ給ふ。(一二)殿は此方彼方にかゝる物どもの散りつゝ、御目に離れねば、源「あなむづかし。女こそ物うるさがらず、(一三)人

つけ、貶しめざまのことといふ人をば、いとほしきものにし給へば、右大將(二)などを
だに、心(一)にくき人にすめるを、何ばかりかはある、近きよすがにて見むは、飽か
ぬ事にやあらむと見給へど、言にあらはしても宣はず。今(三)はたゞ大かたの御むつ
びにて、御座(四)などもこと〳〵にて大殿ごもる。などてかく離れそめしぞと、殿は
苦しがり給ふ。大方、なにや(五)かやともそばみ聞え給はで、年頃かく折ふしにつけ
たる御遊どもを、人傳にのみ聞き給ひけるに、今日珍(六)らしかりつることばかりを
ぞ、この町の覺きら〳〵しと思したる。

花散(七)その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日やひきつる

とおほどかに聞え給ふ。何ばかりのことにもあらねど、哀とおぼしたり。

源(八)にほどりに影をならぶる若駒はいつかあやめにひき別るべき

(九)あいだちなき御事どもなりや。源「朝夕の隔あるやうなれど、かくて見奉るは心安
くこそあれ」と、戯れごとなれど、のどやかにおはする人ざま(一〇)なれば、しづまり(一一)

(一)惡くいふ人を嫌ふ故
(二)以下源の心、髭黒をさへ人は褒めるがどれ程の人柄でもない、玉鬘の聟には不足ならんと思へど
(三)源と花散と今は只一通りの親しき中といふ丈にて
(四)床を別々に歎きて
(五)花散が何につけても不足も言はず
(六)珍らしく花散の方にて催されたるはかりを花散が自分の面目と思へり
(七)人數には數へられぬが名代になりし我が方にて今日の御催ありしは如何なる思召ぞ、「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」
(八)「鳰鳥に」は鳰鳥の如くにの意、若駒は源自身をたとへ菖蒲は花散をたとへて、君と我との中は何時迄もかはらじと戯れたるなるべし
(九)隔なき
(一〇)花散の人柄が
(一一)しんみりと



をなげたる手惑はしなどを、見るぞをかしかりける。南の町もとほして、(一)はる〴〵とあれば、彼方(二)にもかやうの若き人どもは見けり。「打毬樂」「納蘇利」(三)など遊びて、(四)勝負の亂聲どものゝしるも、夜に入りはてて、何事も見えずなりはてぬ。舍人どもの祿品々たまはる。いたく更けて、人々皆あがれ給ひぬ。大臣はこなたに(五)大殿籠りぬ。物語など聞え給ひて、源「兵部卿の宮(六)の、人よりはこよなく物し給ふかな。容貌などは勝れねど、用意氣色など、いと由あり、愛敬づきたる君なり。しのびて見給ひつや。(七)人はよしといへど、なほこそあれ」と宣ふ。花散「御弟(八)にこそものし給へど、ねびまさりてぞ見え給ひける。年ごろ斯く(九)をり過さず渡り睦びきこえ給ふと聞き侍れど、昔内裏(一〇)わたりにてほの見奉りし後、おほつかなしかし。いとよくこそ容貌などねびまさり給ひにけれ。帥(一一)の親王よく物し給ふめれど、けはひ劣りて、(一二)大君の氣色にぞものし給ひける」と宣へば、ふと(一三)見知り給ひにけりとおほせど、ほゝ笑みて、なほ(一四)あるをば、善しとも惡しともかけ給はず。人(一五)の上を難

(一)馬場は紫上の方の郭まで打通しになり居る故
(二)紫方
(三)いづれも樂曲の名
(四)勝負ある度毎鐘太皷にてはやす也
(五)花散里の方に
(六)螢
(七)他人は螢をはむれども螢はまだ足らぬ所あり
(八)螢は源の弟なれども源よりはふけて見える
(九)何ぞの折には必ず螢が訪ひ來て
(一〇)私は昔姉の麗景殿につきて内裏に居し頃ちらと見たばかりで一向御見上げ申さゞりし
(一一)螢の弟
(一二)螢には劣りて孫王の品格也
(一三)源の心、花散が人を見る眼の明かなるよと
(一四)餘人の批評をせずにやめたり
(一五)源の氣風

じ給へ」など聞え給ふ。馬場のおとゞは、此方の廊より見通すほど遠からず。「若き人々、渡殿の戸開けて物見よや。(一)左のつかさにいとよしある官人多かる頃なり。(二)せう／＼の殿上人に劣るまじ」と宣へば、(三)物見むことをいとをかしと思へり。(四)對の御方よりも、童べなど物見に渡り來て、廊の戸口に、御簾青やかに懸け渡して、今めきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童下仕などさまよふ。菖蒲襲の衵、二藍の羅の汗衫著たる童ぞ(五)、西の對のなゝめる。好ましく(六)馴れたるかぎり四人、下仕はあふちの裾濃の裳、瞿麥の若葉の色したる唐衣など、今日のよそひどもなり。(七)こなたのは濃き單襲に、瞿麥襲の汗衫など(八)おほどかにて、おの／＼挑み顔なるもてなし、見所あり。若やかなる殿上人などは、目をたてつゝ氣色ばむ。未の時ばかりに、馬場のおとゞに(九)出で給へり。げに親王達おはし集ひたり。手結ども、公事にはさま變りて、(一〇)すけたちかきつれ參りて、さまことに今めかしく遊び暮し給ふ。女は、何のあやめも知らぬことなれど、(一一)舍人どもさへ艶なる裝束をつくして、(一二)身

(一)左近衛府に
(二)なまじひの
(三)侍女等今日の見物を樂みにして居る
(四)玉鬘よりも
(五)玉鬘方の童
(六)物馴れたる侍女のみ四人
(七)花散方の侍女は
(八)大やうにて、必しも今日の時節に合せんともせぬをいふ
(九)源が
(一〇)近衛の中將少將等打連れ來て
(一一)五月五日武德殿にて騎射を行はるゝ時は騎射終りて競馬あり、舍人等此時は打毬といふ物を著す、今それに擬して打毬を著たるならんといふ
(一二)身を顧みず夢中になりて勝負を爭へる樣を

例（一）にもひき出でつべき根に、結びつけ給へれば、源「今日の御返は」などそゝのかし置きて出で給ひぬ。（二）これかれも「なほ」と聞ゆれば、御心にもいかゞ思しけむ、

玉 あらはれて（三）いとゞ淺くも見ゆるかなあやめもわかず泣かれけるねの若々しく。

とばかり、ほのかにぞあゝめる。手を（四）今少しゆゑづけたらばと、宮は好ましき御心に、いさゝか飽かぬことと見給ひけむかし。藥玉など、えならぬ樣にて、所々（五）より多かり。思し（六）沈みつる年頃の名殘なき御有樣にて、心ゆるび給ふことも多かるに、同じくは人の（七）傷つくばかりのことなくても、止みにしがなと、いかゞ思さざらむ。殿（八）は、東（九）の御方にもさしのぞき給ひて、源「中將（一〇）の今日（一一）のつかさの手つがひの序に、男子（一二）ども引きつれて物すべきさまにいひしを、さる心し給へ。まだ明（一三）き程に來なむものぞ。怪しくこゝ（一四）には、わざとならず（一五）忍ぶることをも、この親王達の聞きつけて、とぶらひものし給へば、おのづから事々しくなむあるを、用意

（一）非常に長き菖蒲の根に文を結附けてよこしたれば、五月の節句には此頃は菖蒲の長き根を賞玩せし也
（二）侍女等も矢張御返事あるがよろしと申す故
（三）今迄は深淺のわからざりし君の御心も打出して却て其深からぬ事が分れり
（四）書を今少し趣あらせたい、玉鬘手は拙き也
（五）方々より玉鬘へ贈り來る也
（六）筑紫にての侘しき生活の傷もなき全盛の有樣にて
（七）源に瑕のつかぬ樣に源との中を始末をつけたいものぢや、と玉鬘が思ふ、此生活をする樣になりしも源の恩なりと思へば也
（八）源氏
（九）花散里
（一〇）夕霧
（一一）五月五日左近衞附の官人ども眞手番とて左右に分れて騎射の試合をする事ある也
（一二）同僚を連れて此方に來る樣に言ひ居し故
（一三）日沒前に
（一四）我邸には
（一五）事々しからぬ内々の催をも

(一)疑はれそうな源の仕打も折々ある譯なれど
(二)源が感心に我慢して
㊂ 六條院の騎射の儀、源氏花散里の方に宿す
(三)六條院の東北の郭、玉鬘の方に近し
(四)源が玉鬘の方へ
(五)螢はあの晩夜更まで居られしか
(六)螢を餘り近附かせぬ樣にせん、彼は隨分無理業もしかねぬ人ぢや
(七)前には螢に近づけといひ、今は餘り近づくな危險なり抔いへば也
(八)源の服裝
(九)面倒な關係がなくて見たらばさぞ美しく見ゆるならんと
(一〇)こゝに寫して書いたのでは
(一一)慰めてくれる人なき我は今日も泣きくらすのみ

りつけば、疑ひ(一)おひぬべき御もてなしなど、うち交るわざなれど、ありがたく(二)思し返しつゝ、さすがなる御中なりけり。

五日には、馬場(三)の大殿に出で給ひける序に、渡り給へり(四)。「いかにぞや。宮は(五)夜やふかし給ひし。(六)いたくもならし聞えじ。煩はしき氣そひ給へる人ぞや。人の心やぶり、物過すまじき人は、難くこそありけれ」など、活け(七)み殺しみ誡めおはする御さま、盡せず若く淸げに見え給ふ。艶(八)も色もこぼるばかりなる御衣に、薄き御直衣はかなく重れるあはひも、何處に加はれる淸らにかあらむ、この世の人の染め出したると見えず、常の色もかへぬ綾目も、今日は珍らかに、をかしうおぼゆるかをりなども、思ふことなくば(九)、をかしかりぬべき御有様かなと、姫君はおぼす。宮より御文あり。白き薄樣にて、御手はいとよしありて書きなし給へり。見る程こそをかしかりけれ、まねび出づれば(一〇)、殊なることなしや。

螢 今日(一一)さへやひく人もなき水がくれに生ふるあやめのねのみ泣かれむ

かさで、軒の雫も苦しさに、ぬれ〳〵夜深く出で給ひぬ。時鳥など必ず打鳴きけむかし。うるさければえこそ聞きもとゞめね。(一)御けはひなどのなまめかしさは、いとよく(二)大臣の君に似奉り給へり、と人々もめで聞えけり。昨夜いと(三)女親だちて、繕ひ給ひし御けはひを、(四)うち〳〵は知らで、哀にかたじけなしと皆いふ。

姫君は、かく(五)さすがなる御氣色を、(六)我が身づからの憂さぞかし、親などに知られ奉り、(七)世の人めきたるさまにて、かやうなる御心ばへならましかば、などかはいと似げなくもあらまし、(八)人に似ぬ有様こそ、遂に世がたりにやならむと、起臥しおぼし惱む。さるは、まことに(九)ゆかしげなき様には、もてなしはてじと、大臣はおぼしけり。なほさる御心癖なれば、(一〇)中宮なども、いとうるはしくやは思ひ聞え給へる。ことに觸れつゝ、(一一)たゞならず聞え動かしなどし給へど、やむごとなき方のおよびなさに煩はしくて、(一二)おり立ち現はし聞え寄り給はぬを、この君は、人の御さまも、氣近く今めきたるに、おのづから思ひ忍び難きに、をり〳〵人見奉

(一)螢の
(二)源に似たりと玉鬘の侍女等が褒めたり
(三)源が母親の役をつとめて取持ちたる様子を
(四)侍女等が源の内心を知らずして
(五)下に野心はありながら上べは流石に態に他人に取持つ源の様子を見て
(六)以下玉鬘の心、是というも我が生得の不幸なり
(七)自分が人並の身の上であつて斯く源に思はるるならば別に不釣合といふでもなし
(八)我が人並ならぬ境遇こそ終には世間の噂の種になるかも知れぬと
(九)我娘として引取りながら妾にして仕舞ふ様なあさましき事は爲すまじと源は思へり
(一〇)秋好中宮などに對しても源は奇麗さつぱり思切つては居ず
(一一)色氣ある仕打をして見すれど、是は偶然たる中宮故手も出しかねて
(一二)立入りて附纏ふ事もせぬが、玉鬘の方は人柄も人なつこく



（一）我方に歸れり
（二）玉鬘の居場所
（三）此位の處と推量したるに、思ひしより近い樣なので
（四）几帳の垂布也
（五）侍女等が螢を取集めて隱したる也
（六）螢の
（七）艶っぽい場合の趣を添へる材料
（八）すらりとしたる玉鬘の姿
（九）源の豫想通り
（一〇）考へて居るのも異なもの故只早いを取得にて
（一一）其樣にすら〳〵と歌が出る樣では君の御志は深からぬなるべし
（一二）遠ざけらるゝつらさを
（一三）此位の中で餘り長居するは餘りでれつく樣なれば

渡り給ひぬ。（一）宮は、（二）人のおはする程、（三）さばかりと推し量り給ふが、少し氣近き御けはひするに、御心ときめきせられ給ひて、えならぬ羅（四）の帷子の隙より見入れ給へるに、一間ばかり隔てたる見わたしに、かくおぼえなき光のうちほのめくを、をかしと見給ふ。程もなく紛はして（五）かくしつ。されど（六）ほのかなる光、艶（七）なる事のつまにもしつべく見ゆ。ほのかなれど、そびやかに（八）臥し給へりつる樣體のをかしかりつるを、飽かずおぼして、げに案（九）のごと御心にしみにけり。

螢「なく聲もきこえぬ蟲のおもひだに人の消つにはきゆるものかは

思ひ知り給ひぬや」と聞え給ふ。かやうの御返を、思ひまはさむ（一〇）もねぢけたれば、疾きばかりをぞ。

玉 こゑ（一一）はせで身をのみこがす螢こそいふよりまさる思ひなるらめ

などはかなく聞えなして、御みづからは引入り給ひにければ、いと遙に（一二）もてなし給ふうれはしさを、いみじく恨み聞え給ふ。（一三）すき〴〵しき樣なれば、居給ひもあ

氣近くだにこそ」など、諫め聞え給へど、いとわりなくて、(一)ことつけてもはひ入り給ひぬべき御心ばへなれば、とざまかうざまに侘しければ、(二)すべり出でて、母屋のきはなる御几帳のもとに、(三)かたはら臥し給へり。何くれと(四)事長き御答聞えたまふこともなく、思しやすらふに、(五)寄り給ひて、御几帳の帷子を一重(六)うちかけ給ふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかと、あきれたり。螢をうすき(七)かたに、この夕つ方いと多く包みおきて、(八)光をつゝみ隠し給へりけるを、さりげなく、とかく引繕ふやうにて、俄にかく掲焉にひかれるに、(九)あさましくて、扇をさし隠し給へるかたはらめ、いとをかしげなり。(一〇)おどろ〳〵しき光見えば、宮も覗き給ひなむ、(一一)我が女と思すばかりのおぼえに、かくまで宣ふなゝめり、人ざまかたちなど、いとかくしも具したらむとは、え推しはかり給はじ、いとよくすき給ひぬべき心惑はさむ、と構へありき給ふなりけり。(一二)實のわが姫君をば、かくしももていで騒ぎ給はじ。うたてある御心なりけり。他方より、(一三)やをらすべり出でて

(一)玉鬘を促すに託して源が這入り込みて行きもしかねまじき様子故
(二)玉鬘がそろりと又出て來て
(三)倚臥したり
(四)螢の長々しき物語に俄に返事も出ず
(五)源が
(六)上の横木に掛くると同時に
(七)「かた」は「かみ」の誤なるべしといふ
(八)源が
(九)玉鬘が
(一〇)以下源の心を説明して此戯の意味を知らする也
(一一)螢が玉鬘に執心なるは只源の娘といふ點よりの事にて玉鬘を是程の美人とは知るまじ、其故玉鬘の器量を見せて浮氣男を悩ましてやらんと巧みたるなり
(一二)是が實の娘ならば此様に見せびらかし騒ぐ事はすまじ
(一三)源が

心にくき程に匂はして、つくろひおはする様、(一)親にはあらで、むづかしき御さかしら人の、さすがに哀に見え給ふ。宰相の君なども、(二)人の御答聞えむことも覺えず、恥かしくて居たるを、(三)埋れたりとひき抓み給へば、いとわりなし。夕晴過ぎて、覺束なき空の氣色の曇らはしきに、(四)打ちしめりたる宮の御けはひも、いと艶なり。内よりほのめく追風も、いとゞしき(五)御匂の立ち添ひたれば、いと深くかをり滿ちて、かねて思しょよりもをかしき御けはひを、(六)心とゞめ給ひけり。(七)うち出でて、思ふ心の程を宣ひ續けたる言の葉おとな〳〵しく、ひたぶるにすき〴〵しくはあらで、(八)いとけはひ殊なり。(九)大臣、いとをかしとほの聞きおはす。姫君は、東面にひき入りて大殿籠りにけるを、宰相の君の御消息つたへに、(一〇)ゐざり入りたるにつけて、(一一)源「いとあまりあつかはしき御もてなしなり。よろづの事さまに隨ひたるこそめやすけれ。ひたぶるに若び給ふべき(一二)様にもあらず。(一三)この宮達をさへ、さし放ちたる人傳に聞え給ふまじきことなりかし。御辭こそ惜み給ふとも、少し

(一)源は玉鬘の實父では無く而も内々野心ある附添人ではあるが、取持つ様は流石に感心に見える
(二)螢への挨拶を甘く取持つ事も出來ず
(三)尻込してはいけぬと源がつめり給へば
(四)靜かにして居る螢の様子も
(五)源の
(六)螢が玉鬘に
(七)螢が打明けて
(八)様子がよい
(九)源氏
(一〇)螢のちかくを離れて玉鬘の方へ入り行く也
(一一)螢の待遇方が餘り尻込みがちなり、萬事は場合により斟酌したるがよし
(一二)もぼこらしくすべき年頃でもない
(一三)螢程の人に丸でかけ離れて居て取次で物を言ふべきでは無い

(一)氣にくはぬ故玉鬘は
(二)玉鬘の侍女には眞目のある人は一人もなし
(三)すべての點に心得ある人なれば
(四)源が宰相の君を呼出して
(五)文句を教へて玉鬘の代筆をさせる
(六)螢が玉鬘に對して何といふかとそれが見たくて、玉鬘に近づくことを許す意味の返事をやるなるべし
(七)玉鬘
(八)源に戀をしかけられて以來は
(九)螢の文を注意して見る
(一〇)別に螢を慕ふ譯ではなく誰か主をきめて源のうるさく附纏ふを避けたしとの考なり
(一一)洒落れたる
(一二)源は玉鬘は何とも思はぬに自分獨り氣込みて螢の態度を見んと待構へ居るを螢は知らずして
(一三)螢が玉鬘方へ
(一四)玉鬘と間近し
(一五)螢が非常に注意して

教へて書かせ奉り給へど、いとゞうたて(一)覺え給へば、みだり心地あしとて聞え給はず。人々(二)も、殊にやむごとなく寄重きなども、をさ〳〵なし。たゞ母君の御伯父なりける、宰相ばかりの人の女にて、心ばせなど口惜しからぬが、世の衰へ残りたるを、尋ねとり給へるぞ、宰相の君とて、手などもよろしく書き、(三)大方もおとなびたる人なれば、さるべきをり〳〵の御返など書かせ給へば、(四)召し出でて、ことば(五)など宣ひて書かせ給ふ。(六)物など宣ふさまを、ゆかしと思すなるべし。(七)正身は、かくうたて(八)ある物なげかしさの後は、この宮などは哀げに聞え給ふ時は、少し見(九)入れ給ふ時もありけり。(一〇)何かと思ふにはあらず、かく心憂き御氣色見ぬわざもがなと、さすがにざれ(一一)たる所つきて思しけり。

殿は、(一二)あいなくおのれ心げさうして、宮を待ち聞え給ふも知り給はで、よろしき御かへりなるを珍らしがりて、いと忍びやかにて(一三)おはしましたり。妻戸の間に御褥參らせて、御几帳ばかりを隔にて、近き(一四)程なり。(一五)いといたう心して、空薫物

かうざまに思し集めつゝ、母君のおはせずなりにけるくち惜しさも、又とりかへし惜しく悲しくおぼゆ。大臣も、(一)うち出でそめ給ひては、なか〳〵心苦しく思せど、人目を憚り給ひつゝ、はかなき事をもえ聞え給はず、苦しくも思さるゝまゝに、(二)しげく渡り給ひつゝ、御前の人遠く、のどやかなる折は、たゞならず氣色ばみ聞え給ふごとに、(三)胸潰れつゝ、(四)けざやかにはしたなく聞ゆべきにはあらねば、たゞ見知らぬさまにもてなし聞え給ふ。

(五)人ざまのわらゝかに、氣近く物し給へば、いたく(六)まめだちたる心地し給へど、なほをかしく愛敬づきたるけはひのみ見え給へば、兵部卿の宮などは、まめやかにせめ聞え給ふ。(七)御勞の程は幾許ならぬに、(八)五月雨になりぬるうれへをし給ひて、螢「(九)少し氣近きほどをだに許し給はば、思ふことをも、(一〇)片端はるけてしがな」と、聞え給へるを、殿御覽じて、源「なにかは、(一一)この君達のすき給はむは、見所ありなむかし。(一二)もてはなれてな聞え給ひそ」と教へて、源「御かへり時々きこえ給へ」とて、

(一)源氏も言ひ出して却て
(二)度々玉鬘の方へ來て
(三)玉鬘が
(四)きつばり跳ねつける譯にもゆかぬ事故
㊁螢兵部卿宮玉鬘を訪ふ、源氏螢の光をかりて玉鬘の容姿を示す
(五)玉鬘の氣風快活にて人なつこいので
(六)眞面目にして居る積でも
(七)まだどれ程長い間の心盡してもないのに
(八)五月は嫁娶を忌む事此頃の風俗也
(九)せめて玉鬘の御側近く行く事を許されなば
(一〇)晴らしたし
(一一)螢の懸想ならば不足はなし
(一二)そつけない挨拶をするな

螢

梗概

㊀ 玉鬘の煩悶。㊁ 螢兵部卿宮、玉鬘を訪ふ。源氏螢の光を假りて玉鬘の容姿を示す。玉鬘の憂愁。㊂ 六條院の馬場にて騎射の催。源氏之に臨みて終に花散里の方に宿す。㊃ 四條院の女方に繪物語を弄ぶ事はやる。源氏、玉鬘に物語の趣意を說き聞かす。㊄ 明石姬君が繪物語を弄ぶにつきて源氏紫上に、注意す。㊅ 眞面目なる夕霧中將。一筋に雲井雁を慕ふ。㊆ 頭中將、玉鬘を戀しがる。夢見の占。

今はかく(一)重々しきほどに、萬のどやかに思し靜めたる御有樣なれば、(二)頼み聞えさせ給へる人々、さま〲につけて、皆思ふさまにさだまり、(三)たゞよはしからで、(四)あらまほしくて過し給ふ。(五)對の姫君こそ、いとほしく、(六)思のほかなる思添ひて、如何にせむと思し亂るめれ。(七)かの監が憂かりしさまには、準ふべきけはひならねど、(八)かゝる筋に、かけても人の思ひより聞ゆべき事ならねば、心ひとつに思しつゝ、さま異に(九)疎ましと思ひきこえ給ふ。何事をも思し知りにたる御齡(一〇)なれば、とざま

㊀ 玉鬘の煩悶
(一) 源が世に重んぜられ萬事は頭中に任せて暇ある故
(二) 源を力にして居る女等
(三) 身が定まり
(四) きまらずに居る者はなく
(五) 玉鬘
(六) 源に戀をしかけられて
(七) 筑紫にて大夫の監に責められしとは比べ物にならねど
(八) 源とは初から父子の關係にて、此樣な事にならんとは誰も思ひ寄らざる事なれば
(九) 源を
(一〇) 玉鬘の年齡をいふ

ね知り給ふにても、(一)まめ〳〵しき御心ばへにもあらざらむものから、ましていとあはつけう、待ちきょ思さむことと、よろづに安げなう思しみだる。宮、大將などは、(二)殿の御氣色、もて離れぬさまに傳へ聞き給ひて、いと懇に聞え給ふ。この(三)岩もる中將も、(四)大臣の御ゆるしをほの聞きて、(五)まことの筋をば知らず、たゞ偏に嬉しくて、(六)おりたち恨み聞え惑ひありくめり。

(一)親切に世話してくれる風でもないらしきに、まして源との關係が今の樣にては實父が聞きて如何に不心得な者と思ふならんと
(二)玉鬘の聟にして差支なく源が思ひ居る樣に聞きて
(三)此頃の小說中の人物の名、境遇の似たるより夕霧を喩へいふなるべし
(四)源が玉鬘に夕霧をよくあへしらへと言ひたる由を聞きて
(五)眞の事情は分らず
(六)熱心に

源「（一）類なかりし御氣色こそ、つらきしも忘れがたう。いかに人見奉りけむ。

（二）うちとけて寢も見ぬものをわか草のことあり顏にむすぼほるらむ

をさなくこそ物し給ひけれ。

と、さすがに親がりたる御詞も、いとにくしと見給ひて、御返事聞えざらむも、人目あやしければ、（三）ふくよかなる陸奥紙に、たゞ、

玉　承りぬ。みだり心地のあしう侍れば、聞えさせぬ。

とのみあるに、（四）かやうの氣色は流石にすくよかなりとほゝゑみて、（五）うらみ所ある心地し給ふも、うたてある御心かな。（六）色に出し給ひて後は、（七）「おほたの松の」と思はせたることなく、むづかしく聞え給ふこと多かれば、いとゞ（八）所せき心地して、おき所なき物思つきて、（九）いとなやましうさへし給ふ。（一〇）かゝる事の心知る人はすくなうて、疎きも親しきも、むげの親ざまに思ひきこえたるを、かうやうの氣色の漏りいでば、いみじう（一一）人笑はれに、憂き名にもあるべきかな、父大臣などの尋

（一）類稀なる其方のつらさこそ
（二）まだ打解けて共寢もせぬに、其方の事あり顏に氣を病むは何事ぞ
（三）厚き
（四）此樣子では玉鬘は流石にしつかりした處があると
（五）恨みをいふにもはりあひがある心地
（六）既に玉鬘への戀を打明けて後は
（七）「戀ひわびぬおほたの松の大方は色にいでてや逢はんといはまし」
（八）玉鬘が窮屈にて
（九）病氣にまでなれり
（一〇）以下玉鬘の心
（一一）源を全くの親の樣にのみ思へるを

(一)人に樣子をけ取られるな
(二)男の味をまだ知らぬといふ内にも
(三)只の添臥より以上男に狎るべきものとも思はず
(四)源氏
(五)此位行届いて御世話はなさるまじ
(六)玉鬘の乳母子
(七)案外にいやらしき源の了簡を
(八)源より玉鬘へ
(九)生眞面目なるに

こよなくも憎み給ふべかゝめるかな」と、歎き給ひて、源「ゆめ(一)氣色なくを」とて出で給ひぬ。女君も、御年こそすぐし給ひにたる程なれ、(二)世の中を知り給はぬ中にも、少しうち世馴れたる人の有樣をだに見知り給はねば、(三)これより氣近きさまにも思しよらず。思の外にもありける世かなと、歎かしきに、いと氣色も惡しければ、人人、御心地惱ましげに見えさせ給ふと、もて騷ぎ聞ゆ。兵「(四)殿の御氣色のこまやかに、辱くもおはしますかな。實の御親と聞ゆとも、(五)更にかばかり思しよらぬことなくは、もてなし聞え給はじ」など、(六)兵部なども忍びて聞ゆるにつけて、いとど(七)思はずに、心づきなき御心の有樣を、うとましう思ひはて給ふにも、身ぞ心憂かりける。

またのあした(八)御文疾くあり。惱ましがりて臥し給へれど、人々御硯などまゐりて、御返疾くと聞ゆれば、しぶしぶに見給ふ。しろき紙の、うはべはおいらかに、(九)すくすくしきに、いとめでたう書い給へり。

(一)涙が
(二)無關係の知らぬ人にも緣次第で女は肌を許すが常なるに
(三)既に年來親み來れる上は
(四)斯くするは只餘りの戀しさを慰めんとての事ぞ
(五)斯かる場合の玉鬘の樣子は夕顏の通りで
(六)此の如き事をするは唐突な無分別な事と分つて居る故
(七)斯く泣いくぢがなく此所まで攻め寄せて手を出さずに居るものではない
(八)それ程情なき御心とは思はざりしに、ひどく我を憎がらるゝ事哉

こぼれ(一)出でつゝ、いと心苦しき御氣色なれば、源「かう思すこそつらけれ。もて(二)はなれ知らぬ人だに、世のことわりにて、皆ゆるすわざなめるを、年經(三)ぬるむつまじさに、かばかり見え奉るや、何の疎ましかるべきぞ。これよりあながちなる心は、よも見せ奉らじ。おぼろげに忍ぶるにあまる程を、慰むるぞや」とて、哀げに懷かしう聞え給ふ事多かり。(四)まして(五)かやうなるけはひは、たゞ昔の心地して、いみじうあはれなり。我が御心ながらも、(六)ゆくりかにあはつけきことと思し知らるれば、いと能く思しかへしつゝ、人も怪しと思ふべければ、いたう夜もふかさで出で給ひぬ。源「思ひ疎み給はば、いと心憂くこそあるべけれ。餘所の人は、(七)かうほれぐ\しくはあらぬものぞよ。かぎりなく、底ひ知らぬ志なれば、人の咎むべきさまにはよもあらじ。たゞ昔戀しきなぐさめに、はかなき事をも聞えむ。同じ心にいらへなどし給へ」と、いとこまやかに聞え給へど、我にもあらぬさまして、いとゞ憂しと思いたれば、源「(八)いとさばかりには見奉らぬ御心ばへを、いと

(一)我が其方に對する戀はよくつゝみ隱し居る故人に知れる氣遣はない
(二)其方も人に隱して我を愛し給へ
(三)今迄も大切に思ひ居たる上に、よい仲となれば又一層の可愛さが增すべければ
(四)鬚黑や螢などより安く思つて貰ひたくなし
(五)我が如く
(六)其方を他人に渡すは氣が氣でない
(七)何といふ氣の偏つた親の了簡であらう
(八)遠慮して
(九)源と玉鬘とは常に逢ふては居れど
(一〇)言ひ出した序に無鐵砲な心が出たのか
(一一)脫ぎすて
(一二)玉鬘の心
(一三)粗末に扱はれるにした處が、此樣なつらい目にはあふまいと

と覺えて、わなゝかるゝ氣色も著ければ、「何かかく疎ましとは思いたる。いとよくもてかくして、人に咎めらるべくもあらぬ心のほどぞよ。(二)さりけなくてあひ(一)思ひ給へ。(三)淺くも思ひ聞えさせぬ志に、又添ふべければ、世に類あるまじき心地なむするを、(四)この音づれ聞ゆる人々には、思し貶すべくやはある。(五)いとかう深き心ある人は世に有りがたかるべきわざなれば、(六)後めたくのみこそ」と宣ふ。(七)いとさかしらなる御親心なりかし。雨はやみて、風の竹に鳴るほど、花やかにさし出でたる月影、をかしき夜の樣もしめやかなるに、人々は、こまやかなる御物語に畏まりおきて、近くも侍はず。常に(九)見奉り給ふ御中なれど、かくよき折しもあ(八)り難ければ、(一〇)言に出で給へる序の御ひたぶる心にや、懷かしき程なる御衣どものけはひは、いとよう紛らはしすべし給ひて、(一一)近やかに臥し給へば、(一二)いと心憂く、人の思はむ事も珍らかに、いみじうおぼゆ。實の親の御あたりならましかば、疎に(一三)は見放ち給ふとも、かくざまの憂き事はあらましやと悲しきに、つゝむとすれど

（一）其方の顔を見て夕顔に思ひなずらふれば更に別人とは思はれぬ
（二）歳月を經ると共に夕顔の事が忘れ難きに
（三）今迄斯く狎れ近づく事はあらざりしに
（四）大やうなる
（五）夕顔に擬せられては我も母と同じく身を徒にする事にもならん歟
（六）戀の心をほのめかしたる也

の、さらに、昔ざまのにほひとも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人も物し給うけるよ」とて、涙ぐみ給へり。箱の蓋なる御菓子の中に、橘のあるをまさぐりて、

源「橘（一）のかをりし袖によそふればかはれる身ともおもほえぬかな

世（二）とともの心にかけて忘れ難きに、慰むことなくて過ぎつる年頃を、かくて見奉るは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」とて、御手をとらへ給へれば、女（三）かやうにもならひ給はざりつるを、いとうたて覺ゆれど、おほどかなるさまにて、（四）

玉（五）袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

むづかしと思ひてうつぶし給へるさま、いみじう懷かしう、手つきのつぶ〳〵と肥え給へる、身なり肌つきのこまやかに美しげなるに、なか〳〵なる物思ひ添ふ心地し給ひて、今日は（六）少し思ふ事聞えしらせ給ひける。女は心憂く、いかにせむ

ひ出でらるゝふし〴〵なくやは」とほゝゑみて聞え給へば、あな心疾(一)とおぼいて、源「うたても思しよるかな。いと見知らずしもあらじ」(二)とて、煩はしければ、宣ひさして、心のうちに、人のかう推し量り給ふにも、いかゞはあるべからむ(三)と思し亂れ、かつは若々しうけしからぬ我が心の程も、思ひ知られ給ひけり。

心にかゝれるまゝに、しば〳〵渡り給ひつゝ見奉り(四)給ふ。雨のうち降りたる名殘の、いと物しめやかなる夕つかた、御前(五)の若楓、柏木などの、青やかに繁りあひたるが、何となく心地よげなる空を見いだしたまひて、源「和して又清し」(六)と誦じ給ひて、まづこの姫君(七)の御さまの、にほひやかげさを思し出でられて、例の忍びやかに渡り給へり。(八)手習などして、うちとけ給へりけるを、起きあがり給ひて、恥らひ給へる顔の色あひ、いとをかし。和かなるけはひの、ふと昔(九)思し出でらるるにも、忍び難くて、源「見そめ(一〇)奉りしは、いとかうしも覺え給はずと思ひしを、怪しうたゞそれかと思ひまがへらるゝ折々こそあれ。哀なるわざなりけり。中將(一一)

(一)氣の早く廻る奴ぢゃと
(二)玉鬘がわからぬ筈なし、其樣な了簡が我にあらば玉鬘が氣がついて我に親まぬ筈
(三)玉鬘との關係はどうなる事であらうと
㊃源氏玉鬘に己の戀を訴ふ、玉鬘の苦悶
(四)源が玉鬘を
(五)源の居間の庭の
(六)白氏文集「四月天氣和又清、綠槐陰合沙堤平」
(七)玉鬘
(八)玉鬘が
(九)夕顔が思ひ出さるゝ
(一〇)はじめて逢ひし當時はさ程夕顔に似て居るとも思はざりしに
(一一)夕霧が丸で母の葵上に似て居ぬに馴れて、子は親に似ぬものと思ひ居しに、斯う似て居る人もあるわい

(一)今更實父にたよるは却て面白かるまじ
(二)玉鬘の心中には必實父に知られじとも思はず
(三)何時實父に打明けたものかと氣懸りで
(四)源氏
(五)實父でも元から傍に居ぬ親は源程手が屆いて世話してはくれぬかも知れぬと
(六)玉鬘の方から進んで實父に打明くる事は出來にくい事と思ふ
(七)源氏
(八)玉鬘の
(九)夕顔は餘りつゝましやか過ぎて居た
(一〇)玉鬘
(一一)源の手を出さずには居られぬ性質を紫は知り居る故氣がついて
(一二)玉鬘は物のわかる人でありながら、何處までも打解けて源を便りにして居るのは氣の毒なものぢや
(一三)私にした所が今迄隨分心配でたまらぬ御仕打が無かつたでは無い

(一)なか〳〵にこそ侍るらめ」と聞え給ふを、いと哀と思しけり。(二)さるは心の中にはさも思はずかし。(三)いかならむ折聞え出でむとすらむと、心もとなく哀なれど、この(四)大臣の御心ばへのいとありがたきを、(五)親と聞ゆとも、もとより見馴れ給はぬは、えかうしも細やかならずやと、昔物語を見給ふにも、やう〳〵人の有様、世の中のある様を見知り給へば、いとつゝましう、(六)心と知られ奉らむことはかたかるべうおぼす。(七)殿は、いとゞらうたしと思ひ聞え給ひて上にも語り申し給ふ。源「怪しう懐かしき人の(八)有様にもあるかな。(九)かの古のは、あまりはるけ所なくぞありし。(一〇)この君は、物の有様も見知りぬべく、氣近き心ざまそひて、後めたからずこそ見ゆれ」など譽め給ふ。(一一)たゞにしも思すまじき御心ざまを見知り給へれば、思しよりて、紫「(一二)物の心えつべくは物し給ふめるを、うらなくしもうちとけ、頼み聞え給ふらむこそ心苦しけれ」と宣へば、源「など頼もしげなくやはあるべき」と聞え給へば、紫「いでや、(一三)我にても、又忍びがたう、物思はしき折々ありし御心ざまの、思

むことは心苦しく」など、いとまめやかにて聞え給へば、苦しうて御答聞えむと
も覺え給はず。いと若々しき(一)もうたて覺えて、玉「何事も思ひ知り侍らざりける
程より、親(二)などは見ぬものにならひ侍りて、ともかくも思う給へられずなむ」と、
聞え給ふ樣のいとおいらかなれば、げにと思いて、源「さらば世の譬の(三)、後の親を
それとおぼいて、疎ならぬ志のほども、見顯しはて給ひてむや」など、うち語ら
ひ給ふ。(四)思すさまの事はまばゆければ、えうち出で給はず。(五)氣色ある詞は時々ま
ぜ給へど、見知らぬさまなれば、すゞろにうち歎かれて渡り給ふ。御前近き呉竹
の、いと若やかに生ひたちて、打ち靡くさま懐かしきに、立ちとまり給ひて、

源「ませ(六)のうちに根深くうゑし竹のこのおのが世々にや生ひわかるべき

思へば恨めしかゞべいことぞかし」と、御簾を引き上げて聞え給へば、ゐざり出で
て、

玉「いまさら(七)にいかならむ世かわか竹のおひはじめけむ根をばたづねむ

(一)玉鬘が若々しく返事せずにも居られず
(二)親といふ者に逢ひし事なき故
(三)世間の諺の通り後の親を親と思ひて我が切なる志をどこ〳〵までも見せさせてくれぬか
(四)玉鬘に對する源自身の戀は氣恥かしくて言ひ出されず
(五)味に氣を持たせた口は時々きくけれども、玉鬘が氣がつかぬ樣子故
(六)我が折角世話する其方も、末は勝手に他人の花になつて行くのであらうか
(七)斯うなる上は何處迄も源を父として身を任すべし、實父にたよる心はなし、源の歌の意味を外へそらして返歌したる也

も、まだかう若々しう何となきほどに、こゝら年經給へる御中にさし出で給はむことはいかゞと、思ひめぐらし侍る。なほ世の人の(一)あゝめる方に定りてこそは、人しう、さるべき序もものし給はめと思ふを、(二)宮は一人物し給ふやうなれど、人柄いといたうあだめいて、通ひ給ふ所あまた聞え、(三)召人とか、にくげなる名のりする人どもなむ、數あまた聞ゆる。さやうならむことは、(四)憎げなうて見直い給はむ人は、いとようなだらかにもて消ちてむ。少し心にくせありては、(五)人にあかれぬべき事なむ、おのづから出で來ぬべきを、(六)その御心づかひなむあるべき。(七)大將は、年經たる人の、いたうねびすぎたるを厭ひがてらに、求むなれど、それも人々煩はしがるなり。(八)さもあゝべいことなれば、樣々になむ人知れず思ひ定めかね侍る。かうざまの事は、親などにも、(九)さわやかに、我が思ふ樣とて、語り出で難きことなれど、さばかりの御齡にもあらず、今はなどか何事をも、御心には(一〇)わい給はざらむ。まろを、昔ざまに準へて、母君と思ひない給へ。(一一)御心に飽かざら

(一)當前に夫がきまりて後に立派に實父に披露する折があらうと思ふが
(二)螢兵部卿宮
(三)妾といふ憎い名のついた女が多くある樣子
(四)人に憎まれずに切廻してゆく事の出來る人はうまくやつてのけられるが
(五)面倒が起つて結局男に捨てられる事になる
(六)螢へ嫁ぐとすれば其邊の用心が肝腎
(七)髯黑は古く連添ふ女房の老込みたるを嫌ひて新らしいのを探して居る譯なるが
(八)人々の批難も尤の事なれば
(九)露骨に自分の了簡を話す譯にはゆかねど、其方もそう若い身ではなし
(一〇)分らぬ筈は無い
(一一)其方の氣のすまぬ事は取計ひにくし

は、聞え傳ふる事侍らず。さきぐ＼も知しめし御覽じたる、(一)三つ四つは、(二)引きかへし、はしたなめ聞えむもいかゞとて、御文ばかり取り入れなどし侍るめれど、御かへりは、(三)更に聞えさせ給ふ折ばかりなむ。それをだに、苦しいことに思いたる」と聞ゆ。源「さてこの若やかに結ぼほれたるは誰がぞ。いといたう書いたる氣色哉」と、ほゝゑみて御覽ずれば、右近「かれは、(四)しうねくとゞめて罷りにけるにこそ。内のおほいとのの(五)中將の、この(六)侍ふみるこを、もとより見知り給へりける(七)傳にてはべりける。(八)又見いるゝ人も侍らざりしにこそ」と聞ゆれば、源「いとらうたきことかな。下臈なりとも、(九)かの主たちをば、いかゞいと然ははしたなめむ。公卿といへど、(一〇)この人のおぼえに、必ずしも竝ぶまじきこそ多かれ。(一一)さる中にも、いとしづまりたる人なり。(一二)おのづから思ひ合する世もこそあれ。(一三)掲焉にはあらでこそ言ひ紛はさめ。見所ある文書かな」など、頓にもうち置き給はず。源「かう何やかやと聞ゆるをも、(一四)思す所やあらむとややましきを、(一五)かのおとゞに知られ奉り給はむこと

(一)髭黒や螢の文は
(二)受附けずに恥をかゝせるのも如何と
(三)特に源から命ぜられた時だけは返事をする
(四)度々返したるを使がしつこく置いて行きたる也
(五)柏木
(六)玉鬘に仕ふる女の名
(七)取次
(八)みるこの外には取持つ人もなかりし也
(九)柏木などを然樣に恥かゝするは然る可らず
(一〇)柏木ほどに重んぜられぬ者が多い
(一一)頭中の子どもの中でも柏木は著實な人物也
(一二)柏木に自然と實際の事情の分る時節もあらう
(一三)目だたぬ樣に今の處はごまかして置くがよし
(一四)其方が何と思ふかと氣がかりなるが
(一五)實父に知らせるにした處が、玉鬘が若く身もきまらぬ中に多年打絕えた父の許へ行くはどうかと思ふ

難とありぬべきわざなり。すべて女の物づつみせず、心のまゝに、物の哀も知り顔つくり、をかしき事をも見知らむなむ、そのつもり(一)味氣なかるべきを、宮大將(二)は、おほな〳〵等閑(三)ごとをうち出で給ふべきにもあらず、又あまり物のほど知らぬやうならむも、(四)御有樣に違へり。(五)その際より下は、志のおもむきに隨ひて、哀をもわき給へ、(六)勞をも數へ給へ」など聞え給へば、君はうち背きておはする、側目いとをかしげなり。(七)なでしこの細長に、(八)この頃の花の色なる御小袿、(九)あはひけぢかう今めきて、もてなしなども、(一〇)さはいへど、田舍び給へりし名殘こそ、たゞありにおほどかなる方にのみは見え給ひにけれ、人の有樣を見しり給ふまゝに、いと樣ようなよびかに、化粧なども心してもてつけ給へれば、いとゞ飽かぬ所なく、花やかに美しげなり。(一一)他人と見なさむは、いと口惜しかるべう思さる。右近もうち笑みつゝ見奉りて、(一二)親と聞えむには、似げなう若くおはしますめり、さしならび給へらむしも、あはひめでたしかし、と思ひ居たり。右近「更に人の(一三)御消息など

(一)其結果は面白からぬものであるが
(二)螢や髭黑は
(三)よい加減な事を言ふ人では無い
(四)玉鬘の人柄に不似合なり
(五)螢髭黑以下の人には相手の心意氣に應じて情らしい返事もし給へ
(六)相手の苦心をも買つてやり給へ
(七)玉鬘の服裝
(八)四月なれば卯花の色をいふ歟
(九)狎れ親むべく
(一〇)何というても移來ての常座田舍風が殘りて繕はずおつとりして見えしが、此頃は他人の樣子もわかつて來し故
(一一)源の心、他人の花にして仕舞ふのは惜しい心持がする
(一二)右近の心、源を玉鬘の親といふは
(一三)夫婦であつてこそ似合なりと

(一)洒落れたり
(二)相手を擇びて玉鬘に返事をさせよ
(三)當世男が不都合の事を仕出來すも、男が悪いのではない女の方の仕向けが悪いのである
(四)女の挨拶によりては男が怨めしく思ふと飛でもない事をし出來す事がある
(五)案外な冷遇を受けたと思ふ樣な相手は餘り際立ちたる仕方と腹も立つが
(六)特に深く思込み居る譯ではなく只時につけて文をよこす位の相手には相手の心をじらす樣にすれば却て相手が熱度を増して來る事もある
(七)じらされて其儘相手がやめて仕舞ひても別に仔細はない
(八)餘り熱心でない相手の口先に釣られて早速に返事をやる杯は後からそうせずともよいにと批難される種になるものぢや

と皆見くらべ給ふ中に、唐の縹の紙の、いとなつかしう、しみ深うにほへるを、いと細くちひさく結びたるあり。源「これは、如何なれば、かく結ぼほれたるにか」とて、引きあけ給へり。手いとをかしうて、

柏木思ふとも君は知らじなわきかへりいはもる水に色し見えねば

書きざま今めかしうそぼれたり。(一)源「これは如何なるぞ」と問ひ聞え給へど、はかばかしうものも聞え給はず。右近召し出でて、源「かやうに音づれ聞えむ人をば、人(二)選して答などはせさせよ。すき〴〵しうあざれがましき、(三)今やうの人の、便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。我にて思ひ知るに、(四)あな情な、怨めしうもと、その折にこそ無心なるにや。(五)若はめざましかるべき際は、けやけうなども覺えけれ、(六)わざと深からで、花蝶につけたる便ごとは、心妬うもてないたる、なか〳〵心だつやうもあり。(七)又さて忘れぬるは、何の咎かはあらむ。(八)物の便ばかりの等閑ごとに、口とう心得たるも、然らでありぬべかりける、後の

かしきを、のどやかにおはしませば、よろづの御遊にて過し給ふに、對(二)の御方に、人々の御文(一)しげくなり行くを、思ひ(三)しことゝをかしうおぼいて、ともすれば(四)渡り給ひつゝ御覽じ、さるべきには御返りそゝのかし聞え給ひなどするを、うち解けず苦しいことに思いたり。兵部卿の宮の、(五)程なくいられがましきわびごとどもを、書き集め給へる御文を御覽じつけて、こまやかに笑ひ給ふ。源「(六)早うより隔つることなう、數多の親王達の御中に、この宮をなむ、(七)かたみにとり別きて思ひしに、ただ(八)かやうの筋のことなむ、いみじう隔て思ひ給ひてやみにしを、(九)世の末にかくすき給へる心ばへを見るが、をかしうも哀にも覺ゆるかな。なほ御かへりなど聞え給へ。少しも故あらむ女の、かの親王より外に、又言の葉をかはすべき人こそ世に覺えね。いと氣色ある人の(一〇)御樣ぞや」と、(一一)若き人はめで給ひぬべく聞え知らせ給へど、(一二)つゝましくのみ思いたり。(一三)右大將の、いと(一四)まめやかに事々しきさましたる人の、(一五)戀の山には孔子のたふれまねびつべき氣色に憂へたるも、さる方にをかし

(一)源がひまなれば
(二)玉鬘
(三)豫期の通り甘くいつたと源が面白く思ひて
(四)玉鬘の方へ行つて人よりの文を見て
(五)まだ何程もたゝぬに早くもあせり氣味の愚痴をならべたる文を
(六)螢と我とは昔からの懇親で
(七)互に相愛したりしに
(八)女にかけては
(九)晩年になりてから
(一〇)螢の容姿
(一一)若い者の惚れ〳〵する樣に
(一二)玉鬘は
(一三)髭黑の大將と名づく、承香殿女御の兄弟、東宮の伯父
(一四)眞面目で尤らしい人でありながら
(一五)此頃の諺、戀故には孔子樣でも失敗をするといふ意

て、人(一)の心へだつべくも物し給はぬ人の様なれば、何方にも皆心よせ聞え給へり。(二)聞え給ふ人、いとあまたものし給ふ。されど、大臣おぼろげに思し定むべくもあらず、(三)我が御心にも、すくよかに親がりはつまじき御心や添ふらむ、(四)父大臣にも知らせやしてましなど、思しよる折々もあり。(五)殿の中將は、少し氣近く、御簾のもとなどにもよりて、御答自ら聞え給ひなどするも、(六)女はつゝましう思せど、(七)さるべき程と人々も知り聞えたれば、(八)中將はすく〳〵しくて思ひもよらず。内のおほいとのの君達は、(九)この君に引かれて、よろづに氣色ばみわびありくを、(一〇)その方の哀にはあらで、したに心苦しうなむ。實の親にさも知られ奉りにしがなと、人しれず心にかけ給へれど、さやうにも漏し聞え給はず、(一一)偏にうちとけたのみ聞え給ふ心むけなど、らうたげに若やかなり。(一二)似るとはなけれど、なほ母君のけはひに、いと能く覺えて、これはかどめいたる所添ひたる。

更衣の今めかしう改(一三)れる頃ほひ、空の氣色などさへ、怪しうそこはかとなくな

(一)人に遠慮させぬ風なれば誰も贔屓する
(二)懸想しかくる人
(三)源の心にも何處迄も堅く親子の關係でばかりは通されぬ樣な浮氣心もあるかして
(四)頭中將にも玉鬘の事を知らせんかと
(五)夕霧
(六)玉鬘は
(七)兄妹なれば此位の事は當前と
(八)正直に兄妹と思ひ居る故懸想など思もよらず
(九)夕霧を手蔓として玉鬘に彼是と懸想らしき素振するを
(一〇)玉鬘は色戀の沙汰ではなく、彼等を眞の自分の兄弟と思へば心苦し
(一一)どこまでも打明けて源をたよりにして居る
(一二)玉鬘が母に
(一三)母に比してしつかりした處がある

(一)前から用意したるものの如くよく場合に相當せり
(二)卷きたる絹布
(三)壁を立てゝ泣きたい程船遊が戀しかりし、「我宿の梅のほつ枝に鶯のねになきぬべき戀もする哉」
(四)其方にて御構さへなくば胡蝶についてなりとも參りたかりし
(五)あれ程物に功者なる方々も歌だけは出來ぬと見えて、思つた程にはなき歌の出來也、實は作者の自ら謙遜せる也
(六)昨日見物に紫の方に行きたる秋好の女官達には紫より贈物ありたり
㊀螢兵部卿、髭黑、柏木等文を贈りて玉鬘を挑む
(七)玉鬘
(八)紫上にも文通す
(九)心の奥底の深淺はとにかく

蝶には山吹襲たまはる。(一)かねてしも取りあへたるやうなり。物の師どもには、白きひとかさね、(二)腰差など、つぎ〳〵に賜ふ。中將の君には、藤のほそなが添へて、女の裝束かづけ給ふ。御かへり、

秋好 昨日は音に(三)泣きぬべくこそは、

(四)こてふにもさそはれなまし心ありて八重山ぶきをへだてざりせば

とぞありける。(五)勝れたる御勞どもに、かやうのことは堪へぬにやありけむ、思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなゝめれ。實や、(六)かのみものの女房達、宮のには、皆けしきある贈物どもせさせ給うけり。さやうの事委しければむづかし。日暮につけても、かやうのはかなき御遊しげく、心を遣りて過し給へば、侍ふ人もおのづから、物思なき心地してなむ、此方彼方にも聞えかはし給ふ。

(七)西の對の御方は、かの踏歌の折の御對面の後は、(八)こなたにも聞えかはし給ふ。(九)深き御心もちゐや、淺くもいかにもあらむ、氣色いと勞あり、懷しき心ばへと見え

て、瓶の櫻少しうち散りまがふ。いとうらゝかに晴れて、霞の間より立ち出でたるは、いと哀になまめきて見ゆ。わざと平張(一)などもうつされず、御前に渡れる廊を、樂屋の樣にして、假に胡床(二)どもを召したり。童べども御階のもとに寄りて、花ども奉る。行香(三)の人々とりつぎて、閼伽(四)に加へさせ給ふ。御消息(五)、殿の中將(六)の君して聞え給へり。

紫　花(七)ぞののこてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ

宮、かの紅葉(八)の御かへりなりけりと、ほゝゑみて御覽ず。昨日(九)の女房達も、げに春の色はえ(一〇)おとさせ給ふまじかりけりと、花にをれ(一一)つゝ聞えあへり。鶯のうらゝかなる音に、鳥の(一二)樂花やかに聞きわたされて、池の水鳥もそこはかとなく囀りわたるに、急に(一三)なりはつるほど、飽かずおもしろし。蝶はまして、はかなき樣に飛びちがひて、山吹のませ(一四)のもとに、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひ入る。宮の亮(一五)をはじめて、さるべき上人ども、祿とりつゞきて、童べに賜ぶ。鳥には櫻の細長、

(一)幄舍、樂屋也
(二)床几を持ち來らせて樂人を坐らせたる也
(三)香を僧衆にくばる役
(四)佛前に供へたる閼伽の具に添へ竝べたり
(五)紫の
(六)夕霧
(七)秋をのみ待たるゝ君は、此花程風情ある胡蝶をも面白くは思はれぬならん
(八)中宮が前に贈りし歌の返報
(九)船遊びしたる中宮方の女宮等
(一〇)恐く仰しやる譯にはゆかぬと
(一一)我を折りて
(一二)迦陵頻
(一三)樂の終にちかくなりて
(一四)ませ垣
(一五)中宮亮



(一)果して君の言の通りであるか無いかしばらく傍を離れず見て居給へ
(二)螢が立去りかねて
㊂秋好中宮の季の御讀經、紫上より佛に花を供す
(三)季御讀經とて春秋二季に僧を招請して大般若經を講讀せしむる儀式
(四)六條院より家に歸らずして
(五)晝の衣裳に
(六)秋好中宮の方に
(七)順に著席す
(八)紫の志として
(九)一部は蝶に一部は鳥に出立ちたる童

ひて、

（源）(一)淵に身を投げつべしやとこの春は花のあたりを立ちさらで見よ

と切にとゞめ給へば、(二)え立ちあがれ給はで、今朝の御あそび、ましていとおもしろし。

今日は、中宮の(三)御讀經のはじめなりけり。やがて(四)まかで給はで、やすみ所とりつゝ、(五)日の御よそひにかへ給ふ人々も多かり。障あるはまかでなどもし給ふ。午の時ばかりに、皆(六)あなたに參り給ふ。大臣の君を初め奉りて、(七)皆着きわたり給ふ。殿上人なども殘なく參る。多くは大臣の御勢にもてなされ給ひて、やむごとなくいつくしき御有樣なり。(八)春の上の御志に、佛に花奉らせ給ふ。(九)鳥蝶にさうぞきわけたる童べ八人、容貌など殊に整へさせ給ひて、鳥には、銀の花瓶に櫻をさし、蝶には、金の瓶に山吹を、同じき花の房もいかめしう、世になき匂を盡くさせ給へり。南の御前の山ぎはより漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹き

ざと思しあがめ聞え給ふ御氣色など、皆世に聞え出でて、(一)思ししもしるく、心なびかし給ふ人多かるべし。我身さばかりと(二)思ひあがり給ふきはの人こそ、便につけつゝ(三)氣色ばみ、言に出で聞え給ふもありけれ、(四)えしも打出でぬ中の思ひに燃えぬべき、若君達などもあるべし。その中に、ことの心を知らで、(五)内のおほいとのの(六)中將などは好きぬべかンめり。(七)兵部卿の宮はた、年頃おはしける北の方も亡せ給ひて、この三年ばかり、獨住にてわび給へば、(八)うけばりて今は氣色ばみ給ふ。今朝もいといたう空亂(九)して、藤の花をかざして、なよびさうどき(一〇)給へる御樣、いとをかし。大臣も、思し(一一)ゝ樣かなふと下には思せど、せめてしらず顔をつくり給ふ。御土器の序に、いみじうもて惱み給うて、螢「思ふ心(一二)侍らずば罷り逃げなまし。いと堪へがたしや」とすまひ給ふ。

螢 (一三)むらさきのゆゑに心をしめたれば淵に身なげむことやをしけき

とて、大臣の君に、「おなじかざしを」(一四)とて奉れ給ふ。いといたうほゝ笑みたま

(一)源の豫期の通
(二)自負して居る
(三)玉鬘に心ある樣子を示し
(四)身分低くて言ひ出せず心中に煩悶すべき、「さざれ石の中に思ひはありながら打出づる事のかたくもある哉」
(五)實際の事情を知らずして、自分と玉鬘とは實の兄妹なるを知らずして
(六)柏木
(七)螢兵部卿宮
(八)大びらに
(九)空醉
(一〇)騷ぎ給へる
(一一)人の心を惹く娘のなきを物足らず思ひしに其不足が補はれたるを滿足せる也
(一二)つとめて
(一三)つながる縁の玉鬘に心をひかされたる身は玉鬘故ならば身を投げても惜からず、玉鬘を源の實子とすれば螢には姪なり、淵ー藤
(一四)「わが宿とたのむ吉野に君入らばおなじかざしをさしこそはせめ」

(一)春の調子なれば也
(二)笛の音の起るを待受けたる
(三)催馬樂安名尊「あな尊今日の尊さやいにしへもはれいにしへも斯くやありけんや今日の尊さ」
(四)呂の調より律の調にうつるをかへり聲といふとぞ
(五)催馬樂青柳「青柳を片絲によりておけや鶯のおけや縫ふてふ笠はおけや梅の花笠や」
(六)案方は何時も春の和氣はあれど、床しがるべき姬君などの無きを物足らず思ふ者もありしに
(七)玉鬘の批難すべき處なき美貌

とに選ばせ給ひて、人の御心ゆくべき手の限を盡させ給ふ。夜に入りぬれば、いと飽かぬ心地して、御前の庭に篝火ともして、御階のもとの苔の上に、樂人召して、上達部親王達も、皆おの〱彈物吹物とり〲にし給ふ。物の師ども殊に勝れたるかぎり、雙調(一)吹きたてて、上に待ちとる(二)御琴どものしらべ、いと花やかにかき立てて、「あなたふと」(三)遊び給ふ程、生けるかひありと、何のあやめも知らぬ賤の男も、御門のわたり隙なき馬車の立處にまじりて、笑みさかえ聞きけり。空の色物の音も、春の調ひゞきはいと殊に勝りける差別を、人々思しわくらむかし。終夜遊び明し給ふ。(四)かへりごゑに、喜春樂たちそひて、兵部卿の宮、「青柳」(五)をりかへしおもしろく謠ひ給ふ。あるじの大臣も言加へ給ふ。夜も明けぬ。朝ぼらけの鳥のさへづりを、中宮は物隔てて、ねたう聞し召しけり。(六)いつも春の光を籠め給へるおほ殿なれど、心をつくる便のまたなきを、飽かぬことに思す人々もありけるに、(七)西の對の姬君、こともなき御有樣、大臣の君も、わ





(一)晉の王質石室山に入りて仙人の碁を圍むに見とれて覺えず數百年を經、氣がつきて見れば携へたる斧の柄朽ちてありしといふ故事

(二)蓬萊山も尋ぬるに及ばず

(三)心を奪はるゝも尤也、「うつす」は、水の面の縁にていふ

もをくひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に紋を交へたるなど、物の繪やうにも畫きとらまほしきに、まことに斧の柄も(一)朽いつべう思ひつゝ、日をくらす。

女房達　風吹けば浪の花さへいろ見えてこや名にたてる山ぶきのさき

春の池や井手のかはせにかよふらむ岸の山吹そこもにほへり

(二)龜の上の山もたづねじ船の中に老いせぬ名をばこゝに殘さむ

春の日のうらゝにさして行く船は竿のしづくも花ぞちりける

などやうの、はかなき事どもを、わが心々に言ひかはしつゝ、行くかたも、歸らむ里も忘れぬべう、若き人々の心を(三)うつすに、ことわりなる水の面になむ。暮れかゝるほどに、皇麞といふ樂、おもしろく聞ゆるに、心にもあらず、釣殿にさし寄せられておりぬ。此處のしつらひ、いとことそぎたる樣に、なまめかしきに、御方々の若き人ども、我もおとらじと盡したる裝束容貌、花をこきまぜたる錦に劣らず見えわたる。世に目なれず珍らかなる樂ども仕うまつる。舞人など、心こ

ついでなくて輕らかにはひわたり、花をもてあそび給ふべきならねば、(一)若き女房達の、物愛でしぬべきを船に乘せ給うて、(二)南の池は、こなたにとほし通はしなさせ給へるを、小き山をへだての關に見せたれど、その山のさきより(三)こぎまひて、東の釣殿に、(四)此方の若き人々集めさせ給ふ。(五)龍頭鷁首を、唐のよそひに、事々しうしつらひて、梶とり棹さす童べ、皆髪ゆひて、(六)唐土だたせて、さる大なる池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ國に來たらむ心地して、哀におもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。中島の入江の岩かげにさし寄せて見れば、はかなき石のたゞずまひも、たゞ繪に畫いたらむ樣なり。此方彼方霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方は遙々と見やられて、色をましたる柳枝を垂れ、花もえもいはぬ匂を散したり。外には盛過ぎたる櫻も、(七)今さかりにほゝゑみ、廊を續れる藤の色も、こまやかに開けゆきけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛なり。水鳥どものつがひを離れず遊びつゝ、細き枝ど

(一)秋好方の侍女等
(二)秋好方の池は紫の方に通ずる樣に造りたるに
(三)漕ぎまはして
(四)紫方の侍女等を
(五)船首に龍頭鷁首を飾りにつくるは唐風也、鷁は水に溺れざる鳥也といふ
(六)唐人じみさせて
(七)前には花の餘所に先だちて咲けるを言ひ、こゝには餘所に後れて櫻の盛なるをいふ、春の御前の名に背かぬを見るべし

胡蝶

梗概

㊀ 紫上の方にて船樂の遊。夜に入りて管絃の遊。㊁ 秋好中宮の季の御讀經。紫上より蝶鳥の裝したる童を遣はして花を佛に奉る。㊂ 螢兵部卿宮、髯黑中將、柏木等文を贈りて玉鬘を挑む。源氏玉鬘に此人々に對する心得方を敎ふ。紫上の心配。㊃ 源氏、玉鬘に己の戀を訴ふ。玉鬘の苦悶。

㊀ 紫上の方にて船樂の遊、夜管絃の遊

(一) 六條院の紫の方

(二) 此所ては已に珍らしくなしと也

(三) 一切の舟裝ひを急がせて

(四) 舟おろしの日は

(五) 秋好

(六) 少女卷に秋好より秋の景色を誇りて紫へ贈れる歌の返歌をするも今なりと紫も思ひ

(七) 源氏

(八) 秋好に紫方の春景色を見せたしと

三月の二十日あまりの頃ほひ、(一)春の御前の有樣、常より殊につくして匂ふ花の色、鳥の聲、(二)外の里にはまだ古りぬにやと、珍らしう見え聞ゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔の氣色など、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる船造らせ給ひける、(三)急ぎさうぞかせ給ひて、(四)おろし始めさせ給ふ日は、雅樂寮の人召して、船の樂せらる。親王達上達部など、あまた參り給へり。(五)中宮この頃里におはします。かの(六)「春まつそのは」と勵まし聞え給へりし御かへりもこの頃やとおぼし、(七)大臣の君も、(八)いかでこの花のをり、御覽ぜさせむと思し宣へど、

(一)我が如き好色の方に片寄りたる癖は無き樣にと願ひしに
(二)矢張内々は浮氣筋があるらしい
(三)落着いてきつぱりしたる上つらの體裁丈は立派なものぢや
(四)八句の詩也、踏歌の人々起行く時に此詩を歌ひ、一句の終ごとに萬春樂と唱ふ
(五)婦人たち
(六)二三月の頃朝廷にて踏歌の後宴ある例也

なむ思ひおきてし。(一)自らのあざればみたる頑しさは、もてはなれよと思ひしかど、(二)なほしたにはほのすきたる筋の心をこそとゞむべかゝめれ。(三)もてしづめ、すくよかなるうはべばかりは、うるさかゝめり」など、いと美しとおぼしたり。(四)萬春樂、御口ずさびに宣ひて、源「(五)人々のこなたに集ひ給へる序に、いかでものの音試みてしがな。(六)私の後宴あるべし」と宣ひて、御琴どもの、麗しき袋どもして祕め置かせ給へる、皆引き出でて、押しのごひて、緩べる緒とゝのへさせ給ひなどす。御かた〴〵、心づかひ痛くしつゝ、心げさうを盡し給ふらむかし。

(一)夕霧
(二)柏木等、此人々踏歌の音頭取なるべし
(三)催馬樂「竹川の橋のつめなるや花園に、花園に我をば放て我をば放てやめざしたぐへて」
(四)身を開きたる舞姿
(五)見物の婦人達
(六)簾外に押出したる侍女等が衣の袖口
(七)前の冠に綿の造花を著けたるを高巾子といふ
(八)踏歌の人々の述ぶるいはひの文句
(九)踏歌の人々が綿を頂戴して引下る也
(一〇)源氏
(一一)夕霧
(一二)頭中將の子、柏木の弟
(一三)實用の材能に於ては勝れても居たりしならんが
(一四)生眞面目なる役人に仕立つる積なりし、「おきてし」は「おきてて」の誤寫なるべし

なり。殿の中將の君(一)、内の大殿の君達(二)、そこらに勝れてめやすく花やかなり。ほのぼのと明け行くに、雪やゝ散りて、そゞろ寒きに、竹川(三)謠ひて、かよれる姿(四)、なつかしき聲々の、繪にも畫きとゞめ難からむこそ口惜しけれ。御方々(五)、いづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたる(六)こちたさ、物の色あひなども、曙の空に、春の錦立ち出でにける霞の中かと見渡さる。怪しく心ゆく見物にぞありける。さるは高巾子(七)の世離れたるさま、壽詞(八)のみだりがはしき、嗚呼めきたることも事々しくとりなしたる、なか〳〵何ばかりのおもしろかるべき拍子も聞えぬものを。例の綿(九)かづき渡りてまかでぬ。夜明けはてぬれば、御かた〴〵歸りわたり給ひぬ。大臣(一〇)の君、少し大殿ごもりて、日たかく起き給へり。源「中將(一一)の聲は、辨の少將(一二)にをさ〳〵劣らざめるは、怪しく有職ども生ひ出づる頃ほひにこそあれ。いにしへの人は、まことに(一三)賢き方や勝れたる事も多かりけむ、情だつ筋は、この頃の人にえしも勝らざりけむかし。中將などをば、すぐ〳〵しき(一四)公人にしなしてむと

今年は男踏歌(一)あり。内裏より朱雀院に參りて、次にこの院にまゐる。道の程遠くて、夜の明方になりにけり。月の曇なく澄みまさりて、薄雪少し降れる庭のえならぬに、殿上人なども、ものの上手多かる頃ほひにて、笛の音もいとおもしろく吹き立てて、この御前は殊に心づかひしたり。(二)御方々物見に渡り給ふべく、かねて御消息どもありければ、左右の對、渡殿などに、御局しつゝおはす。西の對の(三)姫君は、寢殿の南の御方に渡り給ひて、こなたの(四)姫君に、御對面ありけり。上(五)も一處におはしませば、御几帳ばかり隔てて聞え給ふ。朱雀院の大后の宮の御方など(六)廻りける程に、夜もやうやう明け行けば、水驛(七)にて、ことそがせ給ふべきを、例あることより外に、樣異にこと加へて、いみじくもてはやさせ給ふ。影すさまじき曉月夜に、雪はやうやう降り積む。松風木高く吹きおろし、物すさまじくもありぬべき程に、青色(八)のなえばめるに、白襲の色あひ、何のかざりかは見ゆる。挿頭(九)の綿は、匂もなきものなれど、所がらにやおもしろく、心ゆき、命延ぶるほど

目 男踏歌
(一)隔年に行はる、正月十四日四位以下の官人等打揃ひて内裏以下貴顯の邸を廻りて催馬樂を謡ひ舞踏す
(二)紫より踏歌見物に各婦人を案内して招きたる也
(三)玉鬘
(四)明石姫君
(五)紫上
(六)踏歌の連中が
(七)踏歌の人々に勝部を取揃へて饗應するを飯驛といひ、簡單に酒肴を供するを水驛といふ、源の方にては簡單に水驛にしておくが當前なるを
(八)踏歌の人々の裝束、青色は麴塵、山鳩色
(九)綿の造花を冠の上に着くる也

（一）繼子の紀伊守に懸想されて尼になつた來歷
（二）丸で色戀の沙汰は棄てた樣に思はれる丈却て只は置けぬ樣な氣がすれども
（三）末摘花もせめて此位の手答でもあればよいと
（四）末摘花の方
（五）死別といふ事のあるが氣がかりなり
（六）「ながらへば命ぞ知らぬ忘れじと思ふ心はつきそはりつゝ」
（七）高く止まるべき

思ひあはせ給ふ事も、あらじやはとなむ思ふ」と宣ふ。かのあさましかりし世のふることを、聞き置き給へるなゝめりと恥かしく、空蟬「かゝる有様（一）を御覽じはてらるゝより外の報は、いづこにか侍らむ」とて、誠にうち泣きぬ。いにしへよりも、物深く恥かしげさ増りて、かくもて（二）離れたる如く思すしも、見放ち難くおぼさるれど、はかなき事を宣ひ掛くべくもあらず、大方の昔今の物語をし給ひて、（三）斯ばかりのいふかひだにあれかしと、（四）あなたを見遣り給ふ。かやうにても、御蔭に隱れたる人々多かり。皆さしのぞき渡し給ひて、源「覺束なき日數積る折々あれど、心の中は怠らずなむ。たゞ（五）限ある道の別のみこそ後めたけれ。（六）命ぞ知らぬ」など、なつかしく宣ふ。いづれをも程々につけて、哀とおぼしたり。我はと（七）思しあがりぬべき御身の程なれど、さしも事々しくもてなし給はず、所につけ人の程につけつゝ、あまねく懷かしくおはしませば、たゞ斯ばかりの御心にかゝりてなむ、多くの人々年月を經ける。

源 ふるさとの春の木末にたづね來て世のつねならぬ花を見るかな

ひとりごち給へど、聞き知り給はざりけむかし。

空蟬のあま衣にも、さしのぞき給へり。(一)うけばりたる樣にはあらず、かごやかに(二)局住にしなして、佛ばかりに(三)所えさせ奉りて、行ひ勤めけるさま哀に見えて、經、佛のかざり、はかなくしなしたる閼伽(四)の具なども、をかしげになまめかしく、なほ心ばせありと見ゆる人のけはひなり。青鈍の几帳、心ばへをかしきに、いたく居隱れて、袖口(五)ばかりぞ色異なるしも懷かしければ、涙ぐみ給ひて、源「松(六)が浦島を遙に思ひてぞ、止みぬべかりける。昔より心憂かりける御契かな。さすがに斯ばかりの睦は、絕ゆまじかりけるよ」など宣ふ。尼君も、物哀なるけはひにて、空蟬(七)「かゝる方に賴み聞えさするしもなむ、淺くはあらず思ひ給へ知られ侍りける」と聞ゆ。源「常(八)に、をり／＼重ねて、心惑はし給ひし世の報などを、佛にかしこまり聞ゆるこそ苦しけれ。思し知るや。(九)斯くいとすなほにしもあらぬものをと、

(一)事々しく構へては居ず
(二)ちんまりと女中部屋の樣に構へて
(三)場を十分に取らせて
(四)佛に水を奉る具
(五)袖口だけ黑からぬ也、くちなし色の衣を添へて贈りし事衣配りの處に見えたり
(六)來て見れば心も動く故結句來て見ぬ方がよかつた、「音にきく松が浦島今日ぞ見る宜も心あるあまはすみけり」
(七)斯樣な風に御厄介になるにつけて御緣の淺からぬ栞が分ります
(八)一度ならず其方が我に氣をもませた爲に、造つた罪を佛に懺悔するのが苦しい
(九)人は中々源の樣に素直にはあらぬに、源ばかりは有難しと氣が附く事もある筈



くみなえたるこそよけれ。うはべばかり繕ひたる御裝は、あいなくなむ」と聞え給へば、こち〴〵しく(一)さすがに笑ひ給ひて、末摘「醍醐の阿闍梨の君の(二)御あつかひし侍るとて、衣どももえ縫ひ侍らでなむ。裘(三)をさへとられにし後、寒く侍る」と聞え給ふは、いと鼻赤き御兄なりけり。(四)心うつくしといひながら、あまり打ち解け過ぎたりとおほせど、此處にてはいとまめに(五)きすぐの人にておはす。源「裘はいとよし。山伏の(六)蓑代衣に讓り給ひてあへなむ。(七)さてこのいたはり(八)なき白妙の衣は、七重にもなどか重ね給はざらむ。さるべき(九)をり〳〵は、打ち忘れたらむことも、驚かし給へかし。もとよりおれ〳〵しく、たゆき心のおこたりに。まして方方の紛らはしききほひにも、(一一)自ら(一〇)なむ」と宣ひて、向の院の御倉開けさせて、絹綾など奉らせ給ふ。荒れたる所もなけれど、住み給はぬ所のけはひは、靜にて、御前の木立ばかりぞいとおもしろく、紅梅の咲き出でたる匂など、見はやす人もなきを見わたし給ひて、

(一)無骨げに
(二)兄の世話をやくに取紛れて
(三)末摘が貂の裘を著たりし事末摘花の巻にあり
(四)斯かる事まで源に咄すは正直な美しき心ではあるが
(五)源が眞面目に率直な顔をして應對して居る
(六)蓑の代りに著る衣
(七)相當ならん
(八)惜氣なき此著物を十分に重ね著給へ
(九)必要な時には忘れた物は其方から請求して貰ひたし
(一〇)ぼんやり者で
(一一)自ら手が届かぬ勝なれば

いとよくもてなし聞え給ふ。いにしへ盛と見えし御若髪も、年頃に衰へゆき、まして瀧(一)のよどみ恥かしげなる御かたはらめなどを、いとほしと思せば、まほにも(二)向ひ給はず。柳(三)はげにこそすさまじかりけれと見ゆるも、著なし給へる人がらなるべし。光もなく黒き掻練の、さい〴〵(四)しくはりたる一襲、さる織物の袿を著給へる、いと寒げに心苦し。かさねの袿などは、いかにしなしたるにかあらむ。御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじく花やかなるに、(五)御心にもあらず打ち歎かれ給ひて、殊更に御几帳引きつくろひ隔て給ふ。なか〳〵女はさしも思したらず、今はかく哀に長き御心のほどを(六)おだしきものに、うちとけ頼み聞え給へる御樣あはれなり。かゝる方にも、おしなべての人ならず、いとほしく悲しき人の御さまと思せば、(七)哀に、(八)われだにこそはと、御心留め給へるも有難きぞかし。御聲などもいと寒げに、打ちわなゝきつゝ語らひ聞え給ふ。見煩ひ給ひて、源「御衣どものこと、後見聞ゆる人は侍りや。かく心やすき御住居は、たゞいと打ち解けたるさまに、ふ(九)

(一)白髮まじりの髮、「落ちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしな黒き筋なし」
(二)正面から顏を見もせず
(三)柳は源より贈りたる衣の色、それを著て居る也
(四)さら〳〵する樣に
(五)源が思はずため息をついて
(六)安心して源を力にして居る
(七)容貌のみならず心立まで
(八)せめて自分だけも見捨てまいと
(九)ふく〳〵と和らかきがよし

白く、「この殿」(一)うち出でたる拍子、いと花やかなり。大臣も時々聲うち添へ給へる、福草(二)の末つかた、いと懐かしうめでたく聞ゆ。何事も、さしいらへし給ふ御光にはやされて、色をも音をも增すけぢめ、ことになむ分れける。

斯くのゝしる馬車の音をも、物隔てて聞き給ふ御方々(三)は、蓮(四)の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくやと、心やましげなり。まして東の院に、離れ給へる御かた(五)がたは、年月に添へて、徒然の數のみまされど、世(六)のうきめ見えぬ山路に思ひなずらへて、つれなき(七)人の御心をば、何とかは見奉り咎めむ。その(八)外の心もとなく淋しきこと、はた無ければ、おこなひ(九)の方の人は、そのまぎれなく勤め、假字のよろづの草紙の學問、心に入れ給はむ人は、またその願に從ひ、物(一〇)まめやかにははかばかしきおきてにも、たゞ心の願に從ひにたる住居なり。騒がしき日頃過して渡り給へり。

常陸の宮の御方は、人の程あれば、(一一)心苦しくおぼして、人目(一二)のかぎりばかりは、

(一)催馬樂此殿「此殿はうべも富みけりさき草のあはれさき草の花、さきさき草のみつばよつばに殿作りせりや殿作りせりや」
(二)第二節の處
(三)紫以外の婦人達
(四)極樂世界に生れたる者も下品下生に生れたるは永く未開の蓮花の中にありて佛を見ず説法を聞かず等の不足ある也
(五)空蟬末摘花等
(六)「世のうき目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ」
(七)源氏の願みぬをも何とも思はず
(八)源氏が訪來ぬ外には
(九)空蟬など佛いじりをする人は
(一〇)ぢみなる生活上の世話につけても
(一一)身分が身分故
(一二)人前だけはよく取扱ふ

た、なまけやけしとおぼすべかゝめる心の中はかられ給ひて、源「怪しき轉寢をして、若々しかりけるいぎたなさを、さしも驚(一)かし給はで」と、御氣色(二)とり給ふもをかしう見ゆ。ことなる御答もなければ、わづらはしくて、空寢をしつゝ、日高く大殿籠りおきたり。

今日は臨時客(三)の事にまぎらはしてぞ、面がくし(四)給ふ。上達部親王達など、例の殘りすくなく參り給へり。御あそびありて、引出物祿どもなど、二なし。そこら集ひ給へるが、我も劣らじともてなし給へる中にも、少しなずらひなるだに見え給はぬものかな。とりはなちては(六)、有職多く物し給ふ頃(五)なれど、御前にてはけおされ給ふもわろしかし。何の數ならぬ下部どもなどだに、この院に參るには、心づかひことなりけり。まして若やかなる上達部などは、思ふ(七)心など物し給ひて、すずろに心懸想し給ひつゝ、常の年よりも異なり。花の香さそふ夕風、長閑に打吹きたるに、御前の梅やうやうひもときて、(八)あれは誰時なるに、物のしらべども面

(一)おこして呉れらばよかりしに
(二)機嫌を取る
㊂臨時客の賑はしき
(三)攝政關白の家にて正月二日若くは三日に行ふ新年宴會
(四)てれかくしにする
(五)源に由りなりにも比較すべき人がさて無い事かな
(六)源と比較せずに考へれば立派な人物が隨分あれども
(七)今年は玉鬘が居る故野心を懷きて
(八)黄昏

（一）明石姫君の返事を明石上が
（二）古歌
（三）花のねぐらは紫方、古巣は自分の方、鶯は明石姫君
（四）古歌未詳
（五）萬葉「梅の花咲ける岡べに家しあればともしくもあらず鶯の聲」
（六）源が
（七）明石上が
（八）萬事の調子は上品に構へたれども自分の態度は謙遜にて
（九）源が
（一〇）さつぱりして見ゆる位に
（一一）新年早々紫に恨まれる種になるかとびくびくしながらも
（一二）人々明石上の寵勝れたるを目ざましく思ふ也
（一三）紫方
（一四）源が紫方へ歸れり
（一五）明石上が
（一六）待つて居た紫の方でも、此度目立ちて氣まづい仕方と思ひ居る事と察して

書きすさびたり。小松の御返を、（一）めづらしと見けるまゝに、哀なる故事（二）ども書きまぜて、

明石 （三）めづらしや花のねぐらに木づたひてたにのふる巣をとへる鶯

「聲待ち出でたる」（四）などもあり。「咲ける岡邊に家しあれば」（五）など、ひき返し慰めたる筋など書きまぜつゝあるを、取りて見給ひつゝほゝゑみ給へる、恥かしげなり。（六）筆さしぬらして書きすさみ給ふ程に、（七）ゐざり出でて、（八）流石に自らのもてなしは、畏まりおきて、めやすき用意なるを、なほ人よりはことなりと（九）おぼす。白きに、けざやかなる髪のかゝりの、（一〇）少しさはらかなる程に薄らぎにけるも、いとゞなまめかしさ添ひて、なつかしければ、（一一）新しき年の御さわがれもやと、つゝましけれど、此方にとまり給ひぬ。なほ覺ことなりかしと、（一二）かた〴〵心おきて思す。（一三）南のおとどには、ましてめざましがる人々あり。まだ曙の程に（一四）渡り給ひぬ。かうしもあるまじき夜深さぞかしと思ふ（一五）に、名殘もたゞならず哀に思ふ。（一六）待ちとり給へるは

(一)眞底から子の様に源になつかぬ
(二)引取りて未だ何程もたゝねども幾年も同居した様な心持がして
(三)遠慮せずに紫の方へも來給へ
(四)明石姫君をいふ、初事は手ほどきの琴
(五)紫方には氣の置ける無考な女などは居らぬ
(六)然るべき返事
(七)明石の御殿近き
(八)源が
(九)白き唐錦
(一〇)へりとりたる
(一一)未詳
(一二)調合せる薫物の名
(一三)香の名
(一四)書きちらし

給はねば、まほ(一)ならずもてなし給へるもいとをかし。源「年頃(二)になりぬる心地して、見奉るも心安く、本意叶ひぬるを、つゝみなく(三)もてなし給ひて、あなたなどにも渡り給へかし。いはけなき初事(四)ならふ人もあゝめるを、諸共に聞きならし給へ。(五)後めたく、あはつけき心もたる人なき所なり」と聞え給へば、玉鬘「宣はむまゝにこそは」と聞え給ふ。さ(六)もある事ぞかし。

暮方になる程に、明石の御方に渡り給ふ。近き(七)渡殿の戸押しあくるより、御簾の中の追風、なまめかしく吹き匂はして、物より殊にけだかく思さる。正身は見えず。いづらと見まはし給ふに、硯のあたり賑はゝしく、草紙ども取り散したるを取りつゝ見(八)給ふ。唐の東京錦(九)のこと〴〵しき縁(一〇)さしたる褥に、をかしげなるきん(一一)うちおき、わざとめきよしある火桶に、侍從(一二)をくゆらかして、物ごとにしめたるに、衣被香(一三)の香のまがへる、いと艶なり。手習(一四)どもの亂れうち解けたるも、筋がはり、故ある書きざまなり。こと〴〵しく草がちになどもざれ書かず、めやすく

御對面の折々には、まづ我が御心のながさをも、人の御心の重きをも、嬉しく、(一)思ふやうなりと思しけり。細やかにふる年の御物語(二)など、なつかしく聞え給ひて、

(三)西の對へ渡り給ふ。

(四)まだいといたくも住み馴れ給はぬ程よりは、けはひをかしくしなして、をかしげなる童べの姿なまめかしく、人かげあまたして、御しつらひあるべき(五)限なれども、細やかなる御調度は、いとしも整ひ給はぬを、さる方に物清げに住みなし給へり。

正身も、あなをかしげと、ふと見えて、(六)山吹にもてはやし給へる御容貌など、いと花やかに、こゝぞ曇れると見ゆる所なく、隈なく匂ひきら〱しく、見まほしき樣ぞし給へる。物思に沈み給へる程のしわざにや、髮の裾少しほそりて、(七)さはらかにかゝれるしも、いと物清げに、此處彼處いと(八)けざやかなる樣し給へるを、(九)斯くて見ざらましかばと思ほすにつけては、(一〇)えしも見過し給ふまじくや。(一一)かくいと隔なく見奉り馴れ給へど、なほ思ふに、へだたり多く怪しきが、現の心地もし

(一)花散里に
(二)花散里
(三)玉鬘の御殿
(四)西の對の樣、去年十一月より此所に住める也
(五)是非なくてならぬ物は皆調ひたれども
(六)衣配りに玉鬘へは山吹の衣贈りたる也
(七)さつぱりと、さばさばと
(八)くつきりしたる
(九)源の感想、斯く引取らざりしならば殘念なるべし
(一〇)只置く事は出來ぬかも知れぬ
(一一)玉鬘が源に馴れたれども



（一）長い間實母と逢はせざりしは罪な事と氣の毒に思ふ
（二）花散里の御殿
（三）今は此御殿の趣にあはぬ時節故か
（四）源が此方に泊る事などは無き也
（五）源が
（六）花散里が其儘にして居る
（七）前巻衣配りの處に花散里へは淺縹色の衣を贈りたる事見えたり、今其を著て居るを見ての源の感想なり
（八）髮の少くなりたるも強ひて恥ぢ隱すべき程でも無けれど
（九）かもじを入れて
（一〇）花散里が輕薄な女の仲間で我を棄てしならば今はどうであらう

だに、飽かず思ひ聞ゆる御有様を、（一）今まで覺束なき年月の隔たりけるも、罪えがましく心苦しとおぼす。

姫君「ひきわかれ年は經れども鶯のすだちし松の根をわすれめや

幼き御心にまかせて、くだ〳〵しくぞあンめる。

（二）夏の御住居を見給へば、（三）時ならぬけにや、いと靜に見えて、わざと好しきこともなく、あてやかに住みなし給へるけはひ見えわたる。年月に添へて、御心のへだてもなく、哀なる御なからひなり。今はあながちに近やかなる御有様にも、もてなし聞え給はざりけり。いと睦まじくあり難からむ（四）妹夫の契ばかり、聞えかはし給ふ。御几帳隔てたれど、少し押し（五）遣り給へば、（六）またさておはす。（七）縹はげに匂多からぬあはひにて、御髮などもいたく盛過ぎにけり、（八）やさしき方にはあらねど、（九）えびかづらしてぞ繕ひ給ふべき、我ならざらむ人は、見さめしぬべき御有様を、かくて見るこそ嬉しく本意あれ、心輕き人のつらにて、我に背きな（一〇）しかばなど、

（一）源が
（二）子日なれば也、引くとは引抜きて手づから移植する也
（三）面白くて仕様がなさそう
（四）明石上方
（五）菓子杯を取集め入れたる
（六）編み餘りの竹を長く上に延して飾にしたる竹籠
（七）重箱の如き食器
（八）五葉も鶯も共に作りもの也
（九）我子の生長を見たし見たしと待焦れ居る我にせめて一言の返事をも聞かせて呉れよ
（一〇）河海抄「今日だにも初音きかせよ鶯の音せぬ里はすむかひもなし」
（一一）源が
（一二）明石上の情を察しては紫に對する遠慮もそつちのけになるべき源の樣子
（一三）明石姫の容貌

けにめでたき御あはひどもなり。

紫「くもりなき池の鏡によろづ代をすむべきかげぞしるく見えける

何事につけても、末遠き御契を、あらまほしく聞えかはし給ふ。今日は子の日なりけり。げに千年の春をかけて祝はむに、理なる日なり。

姫君の御方に（一）渡り給へれば、童下仕など、御前の山の（二）小松ひき遊ぶ。若き人々の心地ども、（三）おき所なく見ゆ。（四）北のおとゞより、わざとがましくし（五）集めたる（六）鬚籠ども、（七）檜破子など奉れ給へり。えならぬ（八）五葉の枝に、うつれる鶯も、思ふ心あらむかし。

明石「（九）年月をまつにひかれて經る人にけふうぐひすの初音きかせよ

（一〇）音せぬさとの」と聞え給へるを、げにあはれと（一一）思し知る。（一二）言忌もえし給はぬ氣色なり。源「この御かへりは、自ら聞えたまへ。初音惜み給ふべき方にもあらずかし」とて、御硯取りまかなひ、書かせ奉らせ給ふ。（一三）いと美しげにて、且暮見奉る人

つけて、此處彼處に群れ居つゝ、齒固のいはひして、餅鏡をさへ取りよせて、千年のかげにしるき、年の内の祝事ども(一)して、そぼれあへる(二)に、大臣の君(三)さしのぞき給へれば、懐手ひきなほしつゝ、いとはしたなきわざかな(四)と侘びあへり。源「いとしたゝかなる自らの祝事どもかな。皆おの〱思ふ(五)ことの道々あらむかし。少し聞かせよや。我ことぶきせむ(六)」とうち笑ひ給へる御有様を、年のはじめの榮に見奉る。われはと思ひあがれる中將の君ぞ、中將「かねてぞ見ゆるなどこそ、鏡の(七)影にも語らひ侍りつれ。私の祈は、何ばかりの事をか」など聞ゆ。朝のほどは人人參りこみて、物騷しかりけるを、夕つ方、(八)御かた〴〵の參座し給はむとて、心ことに引きつくろひ、化粧じ給ふ御影こそ、げに見るかひあゝめれ。源「今朝この(九)人々の戲れかはしつる、いと羨ましう見えつるを、(一〇)上にはわれ見せ奉らむ」とて、亂れたる事ども少しうちまぜつゝ、祝ひ聞えたまふ。

(一一)源　うす氷とけぬる池のかゞみには世に(一二)くもりなきかげぞならべる

(一)「近江のや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千歳は」「萬代を松にぞ君を祝ひつる千歳のかげにすまんと思へば」此歌をよみて鏡餅に向ふ也とぞ
(二)戲れ合へるに
(三)源氏
(四)恐縮したる也
(五)希望
(六)祝つて遣さん
(七)君の事をこそ祝ひたれ、自分の事はさしたる望もなし
(八)源が方々へ參賀に行かんとて
(九)侍女どもが互に鏡餅を見せ合ひて祝ひたるが
(一〇)紫には我自ら鏡餅を見せん
(一一)眞面目ならぬ戲言
(一二)自ら夫婦の繁昌を祝ひたる也

㊀新年に源氏邸內各婦人の方々をめぐる

(一)言ひ立てんにも
(二)六條院の中の紫上の御殿
(三)紫の養女明石姫君
(四)紫上附の侍女には年長者のみを擇び留めたる也
(五)奧床しく

初音

梗槩 ㊀新年に源氏邸內各婦人の方々をめぐる。明石上と明石姫君との贈答の歌。花散里の方。玉鬘の方。明石上の方。㊁臨時客の賑はしさ。源氏末摘花を訪ふ。空蟬を訪ふ。㊂男踏歌。

年立ちかへる朝の空の氣色、名殘なく曇らぬうらゝかげさには、數ならぬ垣根の中だに、雪間の草若やかに色づきそめ、いつしかと氣色だつ霞に、木の芽もうちけぶり、自ら人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。ましていとゞ玉を敷ける御前は、庭より初め見所おほく、みがき增し給へる、御方々のありさま、まねびたてむも(一)言の葉足るまじくなむ。春のおとゞの御前(二)、とりわきて、梅の香も御簾の內の匂に吹きまがひて、生ける佛の御國とおぼゆ。さすがに打解けて、やすらかに住みなし給へり。侍ふ人々も、若やかに勝れたるを、姫君(三)の御方にと擇らせ給ひて、少(四)し大人びたるかぎり、なか〳〵由々しく(五)、裝束有樣よりはじめて、めやすくもて

からぬ事なり。何事も、いと(一)つきなからむはくち惜しからむ。たゞ(二)心の筋を、漂はしからずもて鎮めおきて、なだらかならむのみなむ、目安かるべかりける」など宣ひて、(三)御返事はおぼしもかけねば、末「返しやりてむとあゝめるに、これより押し返し給はざらむは、ひがくしからむ」とそゝのかし聞え給ふ。(四)情捨てぬ御心にて書き給ふ。(五)いと心やすげなり。

源　(六)かへさむといふにつけてもかたしきの夜の衣を思ひこそやれ

ことわりや。

とぞあゝめる。

(一)丸で心得ぬも殘念
(二)本心は堅固にして上べは穩にして居るのが難がなくてよい
(三)末摘への返事はせんともせぬ故
(四)強ひて其衣は其方に留め給へと云遣らぬは餘りひねくれて居る樣なり
(五)苦心もせぬ樣にすらすらと書けり
(六)かへすをわざと衣を裏返すに取りての返歌也、裏返しに衣を著て寢れば思ふ人を夢に見るといふ俗說あり

(一)昔の懸歌には極つてあだ人といふ詞を入れて
(二)屢ゝ詠みつけたる歌風がどうしてもついて廻つて多分の變化は出來ぬものぢや
(三)末摘の父
(四)薄墨色の紙
(五)末摘が源へ
(六)其草紙には詠歌に關する心得がうるさく書いてありて禁制的の箇條が澤山なりし故
(七)元より歌は拙き我身の其本の通守りては猶一首もよめぬ樣なりし故
(八)此歌は歌學に精しき末摘の歌としては一向珍しくなし
(九)源に笑はるゝのが末摘には氣の毒ぢや、
(一〇)明石姫君
(一一)我手許にも何ぞの中に其種の書物はありしが皆蟲くひたれば
(一二)未詳
(一三)歌學は無用なるべし
(一四)それに耽るは體裁のよくない事ぢや

まとゐはなれぬ三文字ぞかし。(一)昔の懸想のをかしき挑には、あだ人といふ五文字を、やすめどころにうちおきて、(二)言の葉のつゞきたよりある心地すべかゝめり」など笑ひ給ふ。源「よろづの草紙歌まくら、よく案内知り見つくして、そのうちの詞を取り出づるに、(二)よみつきたるすぢこそ、つようは變らざるべけれ。(三)常陸の親王の書き置き給へりける、(四)紙屋紙の草紙をこそ、見よとて(五)おこせ給へりしか。(六)和歌の髓腦いと所せう、病去るべき所おほかりしかば、(七)もとより後れたる方の、いとどなか〳〵動きすべくも見えざりしかば、むづかしくて返してき。(八)能く案内知り給へる人の口つきにては、めなれてこそあれ」とて、(九)をかしく覺したる樣ぞいとほしきや。上いとまめやかにて、紫「などて返し給ひけむ。書きとゞめて、(一〇)姫君にも見せ奉り給ふべかりけるものを。(一一)こゝにも、物の中なりしも、蟲皆そこなひてければ、見ぬ人はた、(一二)心ことにこそはとほかりけれ」と宣ふ。源「姫君の御學問に、いと(一三)用なからむ。すべて女は、たてて好めること設けて(一四)しみぬるは、さまよ

とはたがへ給はず、山吹の袿の、袖口いたくすゝけたるを、(一)うつぼにてうちかけ給へり。御文には、いと香しき陸奥紙の、少し年經厚きが、黄ばみたるに、

末摘 いでや、(二)賜へるは、なかなかにこそ。

(三)きて見ればうらみられけりから衣かへしやりてむ袖をぬらして

御手のすぢ、ことに奥(四)よりにたり。いと(五)ほゝゑみ給ひて、頓にもうちおき給はねば、上、何事ならむと見おこせ給へり。(六)御使にかづけたるものを、いとわびしくかたはらいたしとおぼして、御氣色あしければ、(七)すべりまかでぬ。いみじく、(八)おのおのはさゞめき笑ひけり。かやうに(九)わりなう古めかしう、かたはらいたき所のつき給へるぞ、さかしらにもて煩ひぬべく(一〇)おぼす。源「(一一)恥かしき君なり、古代の歌よみは、(一二)から衣袂ぬるゝかごとこそ離れねな。(一三)まろもその列ぞかし。更に(一四)ひとすぢに纏はれて、今めきたる言の葉にゆるぎ給はぬこそ、ねたきことはあれ。(一五)人の中なることを、をりふしおまへなどの、わざとある歌よみの中にては、

(一)下着もかさねずに使の肩にかけて遣れり
(二)衣を賜へるは辱しけれど、常に來給はずして斯る事のみあるは却て恨めし
(三)此贈物は貰ひても恨の種なれば、わが涙に袖をぬらしたる上にて返しやらん
(四)古風なり
(五)源が
(六)末摘が使にくれたるものを
(七)使に行きし男が
(八)源邸の人々
(九)末摘が
(一〇)源が
(一一)古代の歌よみは恥かしと末摘を嘲弄せる也
(一二)末摘の歌にはいつも唐衣やぬるゝといふ事が附いてまはる
(一三)自分も其の仲間ぢや
(一四)末摘が側目もふらずにいつも同じよみ方を守りて
(一五)此處誤脫あるべし不詳

（一）奥底がある
（二）此衣裳の好みにより其人を思ひやれば氣高き人柄と思はるゝを
（三）源の著料としてある
（四）薄紅
（五）以上の著物をそれぞれ同日に著るべき樣に觸れをまはす
（六）似合ひたるを
（七）六條院には居らず獨離れて二條院に居る事故、御使への祿なども他より一段氣取りて然るべきに
（八）末摘は堅い人で例式をくづさず

見えながら、なまめかしう見えたるかたのまじらぬに、似たるなゝめりと、げに推量らるゝを、色には出し給はねど、殿見やり給へるに、たゞならず。源「いでこの容貌のよそへは、人腹立ちぬべきことなり。よしとても物の色はかぎりあり、人の容貌は、後れたるも又なほそこひある（一）ものを」とて、かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を亂れ織れるも、いとなまめきたれば、人知れずほゝゑまれ給ふ。梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ唐めいたる白き小袿に、濃きが艶やかなる重ねて、明石の御方に、思ひやりけだかき（二）を、上は目ざましと見給ふ。空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけ給ひて、御料（三）にあるくちなしの御衣、（四）ゆるし色なる添へ給ひて。（五）同じ日著給ふべき御消息聞えめぐらし給ふ。げに似げ（六）ついたるども見むの御心なりけり。皆御返どもたゞならず、御使の祿こゝろ〴〵なるに、末摘花東（七）の院におはすれば、今少しさしはなれ、艶なるべきを、（八）麗しくものし給ふ人にて、あるべきこ

此處彼處の擣殿(一)より、參らせたる擣物ども御覽じくらべて、濃き赤きなど、さまざまを選らせ給ひつゝ、御衣櫃衣筥どもに入れさせ給ひて、おとなびたる上臈ども侍ひて、(二)此は彼はと取り具しつゝ入る。上も見給ひて、紫「いづれ劣り勝る差別も見えぬものどもなゝめるを、著給はむ人の御容貌に、思ひよそへつゝ奉れ給へかし。(三)著たるものの人のさまに似ぬは、ひがくしくもありかし」と宣へば、大臣うち笑ひて、源(四)「つれなくて、人の容貌おしはからむの御心なゝめりな。さていづれ(五)をとか思す」と聞え給へば、紫「それも鏡にてはいかでか(六)」と、さすがに恥らひておはす。紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小袿、今樣色のいとすぐれたるとは、こ(七)の御料、櫻の細長に、艶やかなる搔練とり添へては、(八)姫君の御料なり。淺縹の海(九)賦の織物、織りざまなまめきたれど、匂ひやかならぬに、いと濃き搔練具して、(一〇)夏の御方に、曇りなく赤きに、山吹のはなのほそながは、(一一)かの西の對に奉れ給ふを、上は見ぬやうにておぼしあはす(一二)。内の大臣の、はなやかに、あな淸げとは

(一)光澤を出す爲に布を擣つ所
(二)是は誰へ彼は誰へと取そろへて入れる
(三)著物の人柄に似合はぬせ
(四)何くはぬ顏で實は其著物の柄で先の人達の容貌を推測する巧と見える
(五)どれを誰に贈らんと思ふか
(六)自分の推測を標準にしてはしにくし
(七)紫の著料
(八)明石姫君
(九)海邊の樣を摸樣にしたる
(一〇)花散里に
(一一)玉鬘に
(一二)玉鬘の容貌を推測す

(一)特別の係を設けずしては
(二)玉鬘附の
(三)家司になれり
❾ 歳の暮の衣配り、末摘花の唐衣の歌
(四)玉鬘を重々しき人々の格にて取扱へり
(五)玉鬘の人柄はよけれど衣裳抔の方は田舍風なるべしと推測して仕立てたる衣裳をも賜る序に
(六)方々へ恨みこの無い樣に分けてやるがよい
(七)呉服所で仕立てたるも
(八)家の手元で出來た分も
(八)紫は織染などの方にも堪能で
(九)源が感心する

(一)おほぞうなるは事も怠りぬべしとて、(二)こなたの家司ども定め、あるべき事どもおきてさせ給ふ。豊後介もなりぬ(三)。年頃田舍び沈みたりし心地、俄に名殘なく、いかでか、假にても立出で見るべきよすがなく覺えし大殿の内を、朝夕に出入りならし、人をしたがへ、事行ふ身となれるは、いみじき面目と思ひけり。大臣の君の御心おきての、細にありがたうおはします事、いと辱し。

年の暮に御しつらひの事、人々の裝束など、(四)やむごとなき御列に思しおきてたり。(五)かゝりとも田舍びたることやと、山賤の方に侮り推し量り聞え給ひて、調じたるも、奉り給ふついでに、織物どもの、我も〳〵と、手を盡し織りつゝもてまゐれる、細長、小袿の、いろ〳〵樣々なるを御覽ずるに、源「いと多かりけるものどもかな。(六)かた〴〵に、羨なくこそものすべかりけれ」と、上に聞えたまへば、(七)御匣殿に仕う奉れるも、こなたにせさせ給へるも、皆とうでさせ給へり。(八)かゝるすぢはた、いとすぐれて、世になき色あひ匂を染めつけ給へば、(九)ありがたしと思ひ聞え給ふ。

源「戀ひわたる身はそれながら玉かづらいかなるすぢを尋ね來つらむ

あはれ」(一)とやがてひとりごち給へば、げに深くおぼしける人の名殘なゝめりと見給(二)ふ。

中將の君にも、(三)源「かゝる人を尋ね出でたるを、用意して睦びとぶらへ」と宣ひければ、こなたにまうで給ひて、(四)夕「人數ならずとも、かゝる者さぶらふと、まづ(五)召寄すべくなむ侍りける。御わたりのほどにも、(六)參り仕う奉らざりけること」と、いとまめ〳〵しう聞え給へば、かたはらいたきまで、心知れる人は思ふ。(七)心のか(八)ぎり盡したりし御住居なりしかど、あさましう田舍びたりしも、たとしへなくぞ思ひくらべらるゝや。(九)御しつらひ(一〇)より初め、今めかしうけだかくて、親兄弟(一一)とむつび聞え給ふ御樣かたちよりはじめ、目もあやに覺ゆるに、今ぞ三條(一二)も、大貳をあなづらはしく思ひける。まして監(一三)がいきざしけはひ、思ひ出づるもゆゝしきこと限なし。豐後介の心ばへを、ありがたきものに君も思し知り、右近も思ひ言ふ。

(一)夕顏を戀しく思ふ我は昔の我身なれど玉鬘は何と思ひて我方には來れるならん、實父にこそ過ひたかるべきに
(二)葉が
(三)夕霧
(四)玉鬘の方に夕霧が
(五)私を第一に御呼び下さるべきであつた
(六)御引移の時にも
(七)實際の事情を知れる人は、玉鬘の從者等をいふ
(八)玉鬘の筑紫にての住居は、以下從者等の心
(九)雲泥の差なりと思ふ
(一〇)六條院の樣
(一一)玉鬘の親兄弟たる人々の御樣子よりはじめ
(一二)前に玉鬘をせめて大貳の北方にと佛に願ひたる人
(一三)筑紫の大夫の監の風采

（一）我が外に同情する者はあらじ
（二）玉鬘の性質を此答によりて判斷せる也
（三）源が歸れる也
（四）どの位みじめな樣にそだち居るならんと思ひしに
（五）氣をもませてやりたい
（六）女の好きな奴等が我家へは眞面目腐つて來るのも此樣な娘などの類がない故ぢや
（七）大に玉鬘を大事がらん
（八）何時迄も眞面目で居られぬ人々の樣子を見くらべてやらん
（九）娘を引取る早々人の氣をそゝる事を考へる
（一〇）我が昔今の了簡を持て居たらば其方を玉鬘の樣に見せびらかして人を釣つて見るのであつたに、心なく我物にして仕舞つて後悔

も、今はまた（一）誰かは」とて、（二）心ばへいふかひなくはあらぬ御答とおぼす。右近に、あるべき事宣はせて、（三）わたり給ひぬ。

めやすくものし給ふを、嬉しくおぼして、上にも語り聞え給ふ。源「さる山賤の中に年經たれば、（四）いかにいとほしげならむと侮りしを、かへりて心恥かしきまでなむ見ゆる。かゝるものありと、いかで人に知らせて、兵部卿の宮などの、この籬の中好ましうし給ふ（五）心みだりにしがな。（六）すきものども、いとうるはしだちてのみ、このわたりに見ゆるも、かゝるもののくさはひのなき程なり。（七）いたうもてなしてしがな。（八）なほうちあらぬ人の氣色見集めむ」と宣へば、紫「あやしの人の親や。（九）まづ人の心はげまさむことをおぼすよ。けしからず」と宣ふ。源「（一〇）まことに君をこそ、今の心ならましかば。さやうにもてなして見つべかりけれ。いと無心にしなしてしわざぞかし」とて、笑ひ給ふに、面赤みておはする、いと若くをかしげなり。硯ひきよせ給ひて、手ならひに、

わりなく恥かしければ、そばみておはする(一)容體など、いとめやすく見ゆれば、うれしくて、源「今少し(二)光見せむや。あまり心にくし」と宣へば、右近挑げて少し寄す。源「(三)おもなの人や」と少し笑ひ給ふ。(四)げにと覺ゆる御まみの恥かしげさなり。いさゝかも(五)他人と隔あるさまにも宣ひなさず、いみじく親めきて、源「年頃御行方も知らで、心にかけぬひまなく歎き侍るを、かうて見奉るにつけても、夢の心地して、過ぎにし方の事ども取り添へ、忍びがたきに、(六)えなむ聞えられざりける」とて、御目おしのごひ給ふ。まことに悲しう(七)おぼし出でらる。(八)御年の程數へ給ひて、源「親子の中の、かく年經たる類あらじものを、契つらくもありけるかな。今は物うひ〳〵しく、若び給ふべき御程にもあらじを、年頃の御物語なども聞えまほしきに、などか覺束なくは」と恨み給ふに、聞えむ事もなく恥しければ、玉鬘「(九)足立たず沈みそめ侍りにける後、何事もあるかなきかになむ」と、ほのかに聞え給ふ聲ぞ、(一〇)昔人にいとよく覺えて若びたりける。ほゝゑみて、源「沈み給へりけるを哀と

(一)玉鬘の
(二)あかるくしないか
(三)恥かしがる人哉
(四)成程夕顔によく似て居ると思はるゝ
(五)他人がましい隔のある様な口はきかずに
(六)口もきけぬ
(七)夕顔在生の當時を
(八)玉鬘の年を
(九)三四歳にて田舍に埋もれし後は、「かぞいろは如何にあはれと思ふらん三歳になりぬ足立たずして」日本紀竟宴歌の中蛭子をよめる歌也
(一〇)夕顔

かな」とおいらかに宣ふ。源「かの親なりし人は、心なむ、ありがたきまで善かりし。(一)御心も後安く思ひ聞ゆれば」など宣ふ。花散里「つきぐ\しく(二)後見む人などもことにおほからで、徒然に侍るを、嬉しかるべきことになむ」と宣ふ。殿のうちの人は、御女とも知らで、「何人を又尋ね出で給へるならむ。(三)むづかしきふるものあつかひかな」と言ひけり。御車三つばかりして、(四)人の姿どもなど、右近あれば、田舍びずしたてたり。殿よりぞ、綾何くれと奉り給へる。

その夜やがて、(五)大臣の君渡り給へり。昔光源氏などいふ名は、(六)聞き渡り奉りしかど、年頃の(七)うひ／＼しさに、さしも思ひ聞えざりけるを、ほのかなる大殿油に、御几帳のほころびより、はつかに見奉る、いとゞ怖ろしくさへぞ覺ゆるや。渡り給ふ方の戸を、右近かい放てば、源「(八)この戸口に入るべき人は、心ことにこそ」とうち笑ひ給ひて、廂なる御座につい居給ひて、源「(九)火こそいと懸想びたる心地すれ。(一〇)親の顔はゆかしきものとこそ聞け。さも思さぬか」とて、几帳少し押し遣り給ふ。

(一)其方も心立がよき故安心して頼むのぢや
(二)自分が世話すべき人が少くて
(三)碌でもない古物を掘出して珍重せらるゝ事哉
(四)御供の人の
(五)源が玉鬘の方へ來たり
(六)玉鬘方の女中達が
(七)物の分らぬ中はそれ程にも思はざりしに
(八)此處から入るは特別の人なるべし
(九)此燈火は暗くてどうやら濡の幕でもありそうぢや
(一〇)親の顔は見たいものぢやそうな御側によりて見給へ、どこ迄も實父子の體にもてなす也

(一)置いて來たる故
(二)出入の女商人などが探して來る也
(三)侍女をさがすに此方の素姓をあかさぬ也
(四)源が花散里に頼む
(五)其女に幼き子のありしが
(六)其娘が成人するまで
(七)とんでもない處から聞附けて尋ね出したり
(八)引取るなり
(九)夕顔を其方に托せしも其方の爲に惡くはなかりしなれば、今度も亦同じ樣に玉鬘を世話してくれ
(一〇)明石姫君が一人きりにて淋しきに

よりちりぼひ來たるなどを、便につけて呼び集めなどして侍はせしも、俄に惑ひ出で給ひしさわぎに、皆おくらかして(一)ければ、また人もなし。京は自ら廣き所なれば、市女(二)などやうのもの、いとよく求めつゝ率て來。その人の御子などとは知らせざりけり。右近が里の五條に、まづ忍びて渡し奉り(三)て、人々擇りとゝのへ、裝束とゝのへなどして、十月にぞ渡り給ふ。大臣(四)、東の御方に聞えつけ奉り給ふ。源「哀と思ひし人の物うんじして、はかなき山里に隱れ居にけるを、幼き(五)人のありしかば、年頃も人知れず尋ね侍りしかども、え聞き出でで、女(六)になるまで過ぎにけるを、覺え(七)ぬかたよりなむ。聞きつけたる時にだにとて、うつろ(八)はし侍るなり。母もなくなりにけり。中將(九)を聞えつけたるに、惡しくやはある。同じごと後見給へ。山賤めきて生出でたれば、鄙びたること多からむ。さるべく事に觸れて敎へ給へ」と、いとこまやかに聞え給ふ。花散里「げにかゝる人のおはしけるを、知り聞えざりけるよ。姫君(一〇)の一所ものし給ふがさう〴〵しきに、善き事

「にはことに思ひ聞ゆれ」とて、いと哀げに(一)おぼし出でたり。源「人の上にてもあまた見しに、いと思はぬ中も、女といふものの心深きをあまた見聞きしかば、(二)更に(三)すきずきしき心はつかはじとなむ思ひしを、(四)自らさるまじきをも数多見し中に、哀とひたぶるにらうたきかたは、(五)又類なくなむ思ひ出でらるゝ。世にあらましかば、北の町にものする(六)人の列には、などか見ざらまし。人の有様とりどりになむありける。かどかどしう、をかしき筋などは後れたりしかども、あてはかにらうたくもありしかな」など宣ふ。紫「さりとも(七)明石の波には、たちならべ給はざらまし」と宣ふ。(八)なほ北の御殿をば、めざましと心おき給へり。(九)姫君の、いとうつくしげにて、何心もなく聞き給ふが、らうたければ、(一〇)又ことわりぞかしと思しかへさる。

かくいふは、九月のことなりけり。(一一)わたり給はむこと、すがすがしくもいかでかはあらむ。よろしき童若人など求めさす。筑紫にては、くち惜しからぬ人々も京

(一)夕顔を
(二)他人の身の上でも
(三)格別相愛の中でなくても女は執念深いものといふ事が解りし故
(四)自らそう言うてばかり居られぬ關係もありて多くの女を相手にした中にも
(五)此夕顔が一番に
(六)明石上
(七)明石上と同格には思召すまじ
(八)紫は矢張明石上をけぶたく思ふ
(九)明石姫君
(一〇)源の明石上を特に愛せらるゝも道理と紫が思ひかへす

❽ 玉鬘六條院に移る

(一一)玉鬘引移の事はおいそれとはゆかぬ

うばしき取り出でて、書かせ奉る。

玉鬘　数ならぬみくりや何のすぢなればうきにしもかく根をとゞめけむ

とのみ仄(一)かなり。手ははかなだちてよろぼはしけれど(二)、あてはかにてくち惜しからねば、御心おちゐにけり。

住み給ふべき御かた御覽ずるに、南(四)の町には、いたづらなる對どもなどもなし。(三)勢ことに住みみち給へれば、顯證(五)に人しげくもあるべし、中宮(六)のおはします町は、かやうの人も住みぬべく、のどやかなれど、さて(七)侍ふ人のつらにや聞きなさむと思して、少し埋れたれど、丑寅(八)の町の西の對、文殿にてあるを、他方へ移してとおぼす。あひずみ(九)も、忍びやかに心よくものし給ふ御方なれば、うち語らひてもありなむ、と思しおきつ。上にも、今ぞ(一〇)かのありし昔の世の物語聞え出で給ひける。かく(一一)御心にこめ給ふことありけるを、うらみ聞え給ふ。「わりなしや(一二)。世にある人の上とてや、問はずがたりは聞え出でむ。かゝる(一三)序にへだてぬこそ、人

(一)自分はどういふ因縁で斯く生ひ出でて世にさすらふるならん、みくり―三稜草、身、うき―游泥、憂き
(二)ひよろ／＼して居れど
㊆　玉鬘の引取の準備
(三)玉鬘の住むべき
(四)紫の方
(五)人の目につき易く
(六)秋好の方、西南
(七)こゝに置きては玉鬘が中宮の侍女の樣に思はれる恐あり
(八)花散里の方
(九)同居する花散里もしめやかな氣立のよい人故
(一〇)夕顔との關係
(一一)今迄祕密にして居たるを紫が恨む
(一二)夕顔位の女の事を歴々の人の事の樣に態々話す事も無いでは無いか
(一三)此樣な序に打明けるのが其方を特別扱にするといふ物ぢや

(一)知らずとも尋ねてしらむみしまえに生ふる三稜のすぢは絶えじを

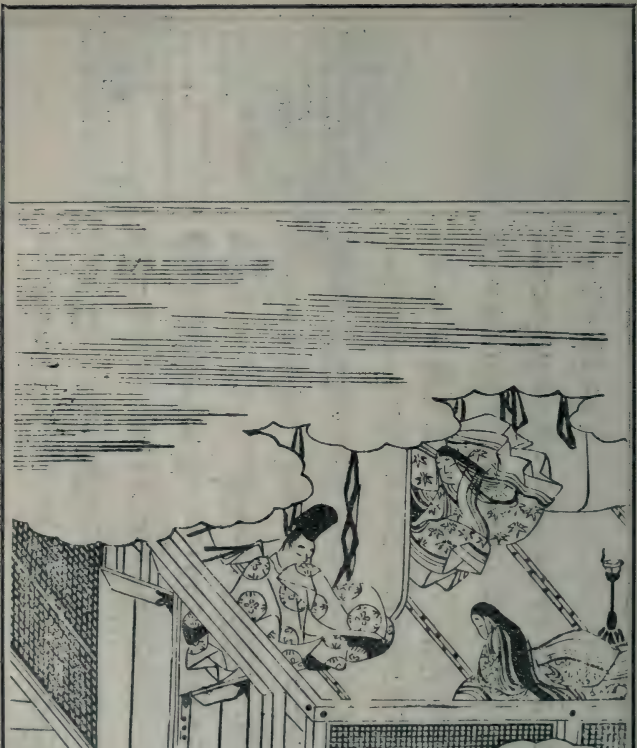
となむありける。(二)御文、自らまかでて、宣ふさまなどきこゆ。(三)御装束、人々の料などさま〴〵あり。(四)上にも語らひ聞え給へるなるべし、御匣殿などにも、まうけの物召し集めて、色あひしざまなど、(五)殊なるをと撰らせ給へれば、田舎びたる目どもには、ましで珍らしきまでなむ思ひける。(六)正身は、たゞかごとばかりにても、實の親の御けはひならばこそ嬉しからめ、いかでか知らぬ人の御あたりにはまじらはむ(七)とおもむけて、苦しげにおぼしけれど、(八)あるべきさまを、右近聞え知らせ、人々も、「おのづから、さて(九)人だち給ひなば、(一〇)大臣の君も尋ね知り聞え給ひなむ。親子の御契は、(一一)絶えて止まぬものなり。右近が、(一二)かずにも侍らず、いかでか御覽じつけられむと思ひ給へしだに、佛神の御導き侍らざりけりや。まして誰も〳〵、平かにおはしまさば」と、皆聞えなぐさむ。まづ御返をと、責めて書かせ奉る。いとこよなく田舎びたらむものをと、(一三)恥かしくおほいたり。唐の紙のいとか

(一) 其方では御承知なくとも此方では知りて御世話すべし、つながる縁の其方なれば
(二) 右近が自身御手紙を使に取次ぎて源の仰の趣を傳ふ
(三) 玉鬘の着料
(四) 紫にも源が相談しての事であらう
(五) 特別なる品を撰びて贈りたる事なれば
(六) 玉鬘の心、假初にても實父からの便ならば嬉しからんが
(七) との趣意で
(八) 斯かる場合には斯くするものと右近が言ひきかせ
(九) 人らしくなり給ひなば
(一〇) 玉鬘の實父
(一一) 絶えて仕舞ふものではない
(一二) 數ならぬつまらぬ身分で
(一三) 玉鬘が

(一)源が言はなければ外に頭中に知らせる人なし
(二)横死を遂げし夕顔の代りには
(三)玉鬘を扶助するのが罪ほろぼし
(四)ひどく因縁をつけるでは無いか
(五)夕顔と我との中を
(六)女等
(七)夕顔に對して程深く打込んだ事は無かりしに
(八)女どもの中には長命で自分の相變らぬ惠に浴して居る者も多きに夕顔はつまらぬ事になりて
(九)其樣な遺子があるなら

うもてなさむ」など語らひ給へば、かつぐヽいと嬉しく思ひつゝ、右近「たゞ御心になむ。大臣に知らせ奉らむとも、誰(一)かは傳へほのめかし給はむ。(二)いたづらに過ぎ物し給ひしかはりには、(三)ともかくもひき助けさせ給はむ事こそは、罪かろませ給はめ」と聞ゆ。源「(四)痛うもかこちなすかな」とほゝ笑みながら、涙ぐみ給へり。源「(五)哀にはかなかりける契となむ、年頃思ひわたる。かくて集へるかたぐ(六)ヽの中に、(七)かのをりの志ばかり思ひとゞむる人なかりしを、(八)命長くて、我が心ながさをも、見果つる類多かゝめる中に、いふかひなくて、右近ばかりをかたみに見るは、口惜しくなむ思ひ忘るゝ時なきに、(九)さてものし給はば、いとこそ本意かなふ心地すべけれ」とて、御消息奉り給ふ。かの末摘花のいふかひなかりしをおぼし出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人の有樣、うしろめたくて、まづ文のけしきゆかしう思さるゝなりけり。ものまめやかに、あるべかしく書き給ひて、はしに、

源かく聞ゆるを、



(一)雛位の美しさぞ。紫とどちらが善い
(二)どう致しまして其程では御座いませぬ
(三)其様にいふと紫が増長するであらう
(四)玉鬘を實子と紫に思はせんとして斯く言ふ也
(五)右近を別間に呼びて
(六)行方を失ひし事を
(七)實父の頭中には知らせる必要なし
(八)多くの娘どもの花やかなる中へ田舍娘がぽつと出て立交りたらば、却つて引取られぬが増しな事もあらう
(九)案外な處からさがし出したる我娘なりと言ひ觸さん
(一〇)浮氣な奴等に氣をもませる種に大に大事がらう

に。聞き入るべくもあらぬものを」とて、御袖して御耳塞ぎたまひつ。源「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」など宣へば、右近「必ずさしもいかでか物し給はむと思ひ給へりしを、こよなうこそおひまさりて見え給ひしか」と聞ゆれば、源「をかしのことや。(一)誰ばかりとか覺ゆ。この君と」と宣へば、右近「(二)いかでかさまでは」と聞ゆれば、源「(三)したり顏にこそ思ふべけれ。(四)我に似たらばしも、後やすしかし」と、親めきて宣ふ。

かく聞きそめ給ひて後は、(五)召しはなちつゝ、源「さらばかの人、このわたりに渡い奉らむ。年頃もののついでごとに、(六)口惜しう惑はしつることを思ひ出づるに、いと嬉しく聞き出でながら、今までおぼつかなきも、かひなき事になむ。(七)父大臣には何か知られむ。(八)いと數多もてさわがるめるが、數ならで、今はじめ立ち交りたらむが、なか〳〵なる事こそあらめ。我は斯うさう〴〵しきに、(九)覺えぬ所より尋ね出したるとも言はむかし。(一〇)すきものどもの心盡さするくさはひにて、いといた

(一)紫も互に老年になりて無遠慮にならば矢張我をいやがるかしら、隨分いやがりかねぬ方故あぶないものなりなど
(二)源の樣子
(三)右近の如き年寄
(四)修行者とは餘りひどい、其樣なものでは御座りませぬ
(五)今迄は
(六)昔仕へし人々も一部分は相變らず猶仕へ居たる故
(七)悲しさ堪へ難く
(八)前からの事情を知らぬ紫には聞かせぬがよしと

ばむづからむ。うるさき戲言いひかゝりたまふを、煩はしきに」などいひあへり。源「(一)上も年經ぬるどちうちとけ過ぎば、はたむづかり給はむとや。さるまじき心と見ねば、あやふし」など、右近に語らひて笑ひ給ふ。(二)いと愛敬づき、をかしきけさへ添ひ給へり。今は公に仕へ、いそがしき御有樣にもあらぬ御身にて、世の中のどやかに思さるゝまゝに、たゞはかなき御戲言を宣ひ、をかしく人の心を見給ふあまりに、(三)かゝるふる人をさへぞ戲れ給ふ。源「かの尋ね出でたりけむや、何樣の人ぞ。たふとき修行者語らひて、率て來たるか」と問ひ給へば、右近「あな(四)見ぐるしや。はかなく消え給ひにし夕顏の、露の御ゆかりをなむ、見給へつけたりし」と聞ゆ。源「げに哀なりけることかな。(五)年頃は何處にか」と宣へば、ありのままには聞えにくゝて、右近「怪しき山里になむ。(六)昔人もかたへは變らで侍りければ、その世の物語し出で侍りて、(七)堪へ難く思ひ給へりし」など聞え居たり。源「よし、(八)心知り給はぬ御あたりに」と、かくし聞え給へば、上、紫「あなわづらはし。眠たき

(一) 山あるき
(二) 右近の心
(三) 紫に
(四) 特に源にのみ申上げたらば
(五) 紫が
(六) 源と紫と
(七) しばらく見ざりし間に又美しくなられたと
(八) 玉鬘を
(九) やはり紫の美しさは格別なるに
(一〇) 違ふ筈ぢやわいと見くらべて右近が思ふ
(一一) 足をさすらする也
(一二) 足をさすることを嫌がる様子ぢや
(一三) 使はるゝをいやがる者は誰も無いけれど

つらむ」など、例のむづかしう、戲言など宣ふ。右近「まかでて七日に過ぎ侍りぬれど、をかしき事は侍りがたくなむ。山踏(一)し侍りて、哀なる人をなむ見奉りつけたりし」源「何人ぞ」と問ひ給ふ。(二)ふと聞え出でむも、まだ上(三)に聞かせ奉らで、(四)とりわき申したらむを、後に聞き給ひ(五)てば、隔て聞えけりとや思さむ、など思ひ亂れて、右近「今聞えさせ侍らむ」とて、人々參れば聞えさしつ。大殿油などまゐりて、(六)うちとけ竝びおはします御有樣ども、いと見るかひ多かり。女君は、廿七八になり給ひぬらむかし、盛に淸らにねびまさり給へり。少し程經て見奉るは、又(七)この程にこそにほひ加り給ひにけれと見え給ふ。(八)かの人をいとめでたく、劣らじと見奉りしかど、思ひなしにや、(九)なほこよなきに、幸のあるとなきとは、隔あ(一〇)るべきわざかな、と見合せらる。大殿籠るとて、右近を(一一)御脚まゐりにめす。源「若き人は、苦しとて(一二)むづかるめり。なほ年經ぬるどちこそ、心かはして睦びよかりけれ」と宣へば、人々しのびて笑ふ。女房達「さりや、(一三)誰かその使ひならひ給はむを

(一)右近

(二)日かげ者も力がつきたり

六 右近源氏に玉鬘の事を告ぐ、源氏より玉鬘に消息

(三)匂はせて御話し申す

(四)數ならぬ身で斯る處へ來るは

(五)右近をいふ

(六)いつもに變りて若がへる事もある事ぢや、何か面白い筋の事でもあつたのであらう

られて、人泣々ならむことも有りがたきことゝ思ひ沈みつるを、(一)この人の物語の序に、父大臣の御有様、腹々の何ともあるまじき御子ども、皆物めかしなしたて給ふを聞けば、かゝる下草(二)たのもしくぞ思しなりぬる。出づとても、互にやどる所も問ひかはして、もし又おひ惑はしたらむ時と、危く思ひけり。右近が家は、六條院近きわたりなりければ、程遠からで、言ひかはすもたづき出來ぬる心地しけり。

右近は大殿にまゐりぬ。この事をかすめ(三)聞ゆる序もやとて、急ぐなりけり。御門ひき入るゝより、けはひことに廣々として、まかで參る車多くまよふ。(四)數ならで立出づるも、まばゆき心地する玉の臺なり。その夜は御前にも參らで、思ひ臥したり。又の日、よべ里より參れる上臈若人どもの中に、取りわきて右近召出づれば、おもだたしく覺ゆ。大臣も御覽じて、「などか里居は久しくしつる。例ならず、やもめ人(五)の、(六)ひきたがへ、こまがへる樣もありかし。をかしき事などあり

一日、昔物語念誦などしつゝ。參り(一)集ふ人のありさまども見下さるゝ方なり。前より行く水をば、初瀨川といふなりけり。右近、

「ふたもとの(二)杉のたちどを尋ねずば布留川のべにきみを見ましや(三)嬉しき瀨にも」ときこゆ。

玉鬘(四)初瀨川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀨に身さへ流れぬ

とうち泣きておはする樣、いとめやすし。(五)容貌はいとかくめでたく淸げながら、田舍び(六)こち〴〵しうおはせましかば、いかに玉の瑕ならまし、いであはれ、いかで斯くおひ出で給ひけむ、(七)とおとゞを嬉しく思ふ。(八)母君は、たゞいと若やかにおほどかにて、やは〳〵とぞたをやぎ給へりし、(九)これは氣高く、もてなしなど恥かしげに、よしめき給へり。(一〇)筑紫を心にくゝ思ひなすに、皆見し人は里びにたるを、心得がたくなむ。暮るれば御堂に上りて、またの日も行ひ暮し給ふ。秋風、谷より遙に吹きのぼりて、いと肌寒きに、(一一)物いと哀なる心どもには、よろづ思ひ續け

(一)長谷寺に
(二)此初瀨に參詣せずば玉鬘に遇ひ奉る事はあらじ、「初瀨川ふる川のべに二本ある杉、年をへて又も逢ひ見ん二本ある杉」
(三)「祈りつゝ頼みぞわたる初瀨川嬉しき瀨にも流れあふやと」
(四)昔の事は知らねども今日の嬉しさは涙身を流すばかり也
(五)右近の心
(六)無骨に
(七)乳母
(八)夕顏は、右近の心
(九)玉鬘は
(一〇)筑紫そだちは皆斯くよきものかと筑紫を床しく思ひて見れば他の人人は田舍びたれば
(一一)玉鬘主從のめいりたる了簡には

（一）源氏
（二）我を
（三）玉鬘は如何になりしかと右近が言出すを源が氣にとめて
（四）我に知らせよと
（五）源氏
（六）源と夕顔との關係
（七）夕顔の代りに玉鬘を世話すべし
（八）我が實子を尋ね出した樣にして玉鬘を引取るべしと
（九）自分が年若にて萬事に恥かしく行屆かぬ時分の事で
（一〇）玉鬘の行方を尋ねもせず
（一一）乳母の夫が
（一二）御暇乞に
（一三）あぶなく田舍人になつて御仕舞ひなさる所であつた

て、後むき給へり。右近「いでや、身こそ數ならねど、殿（一）も御前近く召しつかはせ給へば、物の折ごとに、（三）如何にならせ給ひにけむと聞え出づるを、聞し（二）召し置きて、我いかで尋ね聞えむと思ふを、聞き出で奉りたらば（四）となむ、宣はする」といへば、乳母「大臣（五）の君は、めでたくおはしますとも、さるやむごとなき御妻どもおはしますなり。先づ實の親とおはする大臣にを知らせ奉り給へ」などいふに、（六）ありし様など語り出でて、右近「世に忘れ難く悲しきことになむ思して、（七）かの御かはりに見奉らむ、子も少きがさう〴〵しきに、（八）我が子を尋ね出でたると人には知らせてと、そのかみより宣ふなり。（九）心の幼かりけることは、よろづに物つゝましかりし程にて、（一〇）え尋ねも聞えで過しゝ程に、（一一）少貳になり給へるよしは、御名にて知りにき。（一二）まかり申しに、殿に參り給ひし日、ほの見奉りしかども、え聞えで止みにき。さりとも姫君をば、かのありし夕顔の五條にぞとゞめ奉り給へらむとぞ思ひし。あないみじや、（一三）田舍人にておはしまさましよ」など、うち語らひつゝ、日

ず、姫君は淸らにおはしませど、まだ片なりにて、おひさきぞ推しはかられ給ふ。(一)上の御容貌は、なほ誰かならび給はむとなむ見給ふ。(二)殿も勝れたりと思したゞめるを、言に出でては、何かは數のうちには聞え給はむ。(三)我にならび給へるこそ、君はおほけなけれとなむ、戲れ聞え給ふ。見奉るに、(四)命のぶる御有樣どもを、又さる類おはしましなむや、となむ思ひ侍るを、(五)いづくか劣り給はむ。物は限あるものなれば、勝れ給へりとて、(六)いたゞきを離れたる光やはおはする。(七)たゞこれを、勝れたりとは聞ゆべきなゝめりかし」と、うち笑みて見奉れば、老人もうれしと思ふ。乳母「かゝる御樣を、ほと〱怪しき所に沈め奉りぬべかりしに、(八)あたらしく悲しうて、家竈をも捨て、男女の賴むべき子どもにも引別れてなむ、かへりて知らぬ世の心地する京にまうで來し。あが御許、はや宜きさまに導きこえ給へ。高き宮仕し給ふ人は、おのづからゆき交りたる便ものし給ふらむ。(九)父大臣に聞し召され、數まへられ給ふべきたばかり、思し構へよ」といふ。(一〇)恥かしうおほい

(一)紫上
(二)紫上が一番と心には思はるゝ樣なれど
(三)我が妻となれるが其方には過分なりと源が常に紫上に戲れる
(四)源夫婦、藤壺、明石姫君などをいふ
(五)此玉鬘はかの人々に比べて劣る所なし
(六)楞嚴經「世尊頂放二百寶無畏光明一」
(七)玉鬘などを
(八)惜しく
(九)頭中が聞附けて我子として引取らるゝ樣の計畫を立てゝ下され
(一〇)玉鬘は

見奉り出でたる。その願もはたし奉るべし」といふを、聞くもあはれなり。法師「いとかしこき事かな。たゆみなく祈り申し侍るしるしにこそ侍れ」といふ。いと騒しう夜一夜行ふなり。

明けぬれば、知れる(一)大徳の坊におりぬ。物語心やすくとなるべし。姫君のいたくやつれ給へる、恥かしげにおぼしたる様、いとめでたく見ゆ。右近「覚え(二)ぬたかきまじらひをして、多くの人をなむ見あつむれど、(三)殿の上の御容貌に、似る人はおはせじとなむ。年頃見奉るを、又おひ出で給ふ(四)姫君の御さま、いと理にめでたくおはします。かしづき(五)奉り給ふさまも、ならびなかゝめるに、かう(六)やつれ給へるさまの、劣り給ふまじく見え給へば、ありがたうなむ。(七)大臣の君、父帝の御時より、そこらの女御后、それより下はのこりなく見奉り集め給へる御目にも、當帝、御(八)母后ときこえしと、(九)この姫君の御容貌とをなむ、よき人とはこれをいふにやあらむと覺ゆると聞え給ふ。見奉りならぶるに、かの(一〇)后の宮をば知りきこえ

(一)右近の懇意なる僧坊、長谷寺の寺中
(二)思の外なる高貴の方方に立交りて
(三)紫上
(四)明石姫君
(五)紫上が此姫君を大事がらるゝ事も無類なるに
(六)やつれたる玉鬘が器量は明石君に劣らぬ様に見えるを驚く
(七)源氏
(八)藤壺
(九)明石姫君
(一〇)藤壺

(一)御禮參り
(二)頭中將今の内大臣、玉鬘の實父
(三)立派なる中に
(四)玉鬘
(五)太宰大貳の妻
(六)玉鬘
(七)願文
(八)僧は常の事にて委細を心得居れば
(九)例の通り
(一〇)玉鬘を假に斯く名づけていふ也

他事も申さじ。あが姫君、大貳の北の方ならずば、當國の受領の北の方になし奉らむ。三條らも、隨分に榮えてかへり申(一)は仕うまつらむ」と、額に手をあてて念じ入りて居り。右近、いとゆゝしくも言ふかなと聞きて、右近「いといたくこそ田舍びにけれな。(二)中將殿は、昔の御覺だに如何おはしましゝ。まして今は天の下を御心にかけ給へる大臣にて、いかばかり(三)いつかしき御中に、(四)御方しも、受領の妻にて、品定りておはしまさむよ」といへば、三條「あなかま、給へ。大臣たちも暫し待て。(五)大貳の御館の上の、清水の御寺の觀世音寺に參り給ひしいきほひは、帝の御幸にやは劣れる。あなむくつけや」とて、なほ更に手をひき放たず、拜み入りて居り。(六)筑紫人は、三日籠らむと志し給へり。右近はさしも思はざりけれど、かかる序にのどかに聞えむとて、籠るべきよし、大德呼びていふ。(七)御あかし文など書きたる心ばへなど、(八)さやうの人はくだくだしう辨へければ、右近「常のことにて、(九)例の(一〇)藤原の瑠璃君といふが御爲に奉る。能く祈り申し給へ。その人この頃なむ



いとさわがしく、人詣でこみてのゝしる。右近が局は、佛の右の方に近き間にしたり。この御師は、まだ(二)深からねばにや、西の間に遠かりけるを、右近「なほ此處におはしませ(一)」と尋ねかはして言ひたれば、(三)男どもをばとゞめて、介に斯う〳〵といひ合せて、こなたに(四)移し奉る。右近「かく怪しき身なれど、たゞ今の大殿に(五)なむ侍ひ侍れば、斯くかすかなる(六)道にても、らうがはしきことは侍らじと頼み侍る。田舍びたる人をば、かやうの所には、善からぬ生者どもの、侮らはしうするも、辱きことなり」とて、物語いとせまほしけれど、おどろ〳〵しき(七)行のまぎれに、騷がしきに催されて、佛を拜み奉る。右近は心のうちに、右近(八)「この人をいかで尋ね聞えむと申し渡りつるに、かつ〴〵かくて見奉れば、今は思のごと、大臣の君の、尋ね奉らむの御志深かめるを、知らせ奉りて、幸(九)あらせ奉り給へ」など申しけり。國々より、田舍人多く詣でたりけり。(一〇)この國の守の北の方も詣でたりけり。嚴しく勢ひたるを羨みて、この三條がいふやう「大悲者(一一)には、

(一)玉鬘の方の祈禱僧は
(二)昨今の事故まだ馴染もなきにや
(三)玉鬘の供人は元の儘にして置きて
(四)右近の方に
(五)源氏に仕ふる故
(六)見すぼらしき旅中にても
(七)やかましき佛前の勤行にまぎれて
(八)玉鬘を、佛に申す詞
(九)玉鬘の身の上に
(一〇)大和守
(一一)觀音樣には別に願もかけぬが

の身の残り留まりたるもいと心憂けれど、うち捨て奉り給へる若君の、らうたく哀にておはしますを、冥途のほだしにもて煩ひ聞えてなむ、(一)瞬き侍る」と言ひつづくれば、昔そのをり、(二)いふかひなかりし事よりも、答へむ方なく煩はしと思へども、右近「いでや聞えてもかひなし。(三)御方は早ううせ給ひにき」と言ふまゝに、三人ながらむせかへり、いとむづかしく、せきかねたり。

日暮れぬと(四)急ぎたちて、燈明のことどもしたゝめ出でて急がせば、なか〳〵いと心あわたゞしくて立ちわかる。(五)「諸共にや」といへど、互に供の人のあやしと思ふべければ、この介にも事の樣だに言ひ知らせあへず、我も人も(六)ことに恥かしくはあらで、皆下り立ちぬ。右近は、人知れず目とゞめて見るに、中に美しげなる(七)うしろでの、いといたうやつれて、卯月の單衣めくもの著こめ給へる髮のすきかげ、いとあたらしくめでたく見ゆ。心苦しう悲しと見奉る。少し足なれたる人は、疾く御堂に著きにけり。(八)この君をもて煩ひ聞えつゝ、初夜行ふ程にぞ上り給へる。

(一) 生きて居ります
(二) 夕顔頓死の際の當惑よりも
(三) 夕顔
(四) 玉鬘方の人々が參詣を急ぐ也
(五) 一所に參詣せんかと相談したれど
(六) 互に舊知の中なれば也
(七) 玉鬘のうしろ姿
(八) 玉鬘に世話がやけて

(一)夕顔
(二)三條の若盛を見馴れし當時を思ひ出せば
(三)乳母
(四)夕顔の事は
(五)三條等があつけなく思ひて力を落すならんと分別して
(六)口に出すも忌々しく
(七)夕顔を連出して行方を失はしめたるは右近なれば、乳母等は右近をつらく思ひ居る也
(八)乳母
(九)夕顔

出でたり。この女手を打ちて、三條「吾が御許にこそおはしましけれ。あな嬉しとも嬉し。何處より參り給ひたるぞ。(一)上はおはしますや」と、いとおどろ〳〵しく泣く。(二)若きものにて見なれし世を思ひ出づるに、隔て來にける年月數へられて、いとあはれなり。右近「まづおとゞ(三)はおはすや。若君はいかゞなり給ひにし。あてきと聞えしは」とて、(四)君の御ことは、はかなき世を思ふに、(五)あへなくもや言はむとて、(六)かけむもゆゝしくて言ひ出でず。三條「皆おはします。姫君もおとなに成りておはします。まづおとゞにかくなむと聞えむ」とて入りぬ。皆驚きて、「夢の心地もするかな。(七)いとつらくいはむ方なく思ひ聞ゆる人に、對面しぬべきことよ」とて、この隔に寄り來たり。けどほく隔てつる屛風だつもの、名殘なくおしあけて、まづ言ひやるべき方なく泣きかはす。(八)老人は、たゞ、「(九)我が君はいかゞなり給ひにし。こゝらの年頃、夢にてもおはしまさむ所を見むと、大願を立つれど、遙なる世界にて、風の音にても聞き傳へ奉らぬを、いみじく悲しと思ふに、老



けば、此男の顔見し心地す。誰とはえ覺えず。いと若かりし程を見しに、ふとり(一)黑みてやつれたれば、多くの年經たる目には、ふとしも見わかぬなりけり。豐後「三(二)條こゝに召す」と呼びよする女を見れば、また見し人なり。(三)故御方に、下人なれど、久しく仕う奉りなれて、かの隱れ給へりし御住處まで在りしものなりけりと見なして、いみじく夢のやうなり。(四)主とおぼしき人は、いとゆかしけれど、見ゆべくもかまへず。思ひわびて、(五)この女に問はむ、(六)兵藤太といひし人も、これにこそあらめ、姫君のおはするにや、と思ひ寄るに、いと心もとなくて、(七)この中隔なる三條をよばすれど、食物に心入れて、とみにも來ぬ、いと憎しと覺ゆるもうちつけなりや。辛うじて來て、三條「(八)覺えずこそ侍れ。筑紫の國に、二十年ばかり經にたる下種の身を、知らせ給ふべき京人よ。人たがひにや侍らむ」とて寄り來たり。田舍びたる搔練にきぬなど著て、いといたう太りにけり。(九)我が齡もいとゞ覺えて恥かしけれど、右近「なほさし覗け。我をば見知りたりや」とて、顏をさし

(一)豐後介が
(二)侍女の名
(三)夕顔の手許に
(四)主人らしき人卽ち玉鬘が見たけれど
(五)右近の心、此三條と呼ばれたる女に問ひて見んと決心したる也
(六)豐後介の昔の名を思ひ出したる也
(七)軟障の蔭に居て、右近の方と玉鬘の方との隔になれる也
(八)此處で人に呼ばるべしとは思も寄らず
(九)右近が三條の衰へたるを見て彌自分の年寄りたるを思ひ知りて恥しけれど

(一) 此家に泊るべき客人等
(二) ひどく此人々を泊めたく思ひて當惑す
(三) 體裁惡く
(四) 殘りの一部分の人々は片隅によりて間をあけて新來の客を宿したる也
(五) 幕の類
(六) 後から來れる旅客
(七) 靜にし
(八) 此後から來れる客が即ち夕顔に舊召使はれし右近なりし也
(九) 食物をすゝむると見えて
(一〇) 玉鬘に差上げよ
(一一) 調はずして
(一二) 我々以上の貴人なるべしと右近が思ひて

ざましく聞く程に、げに人々來ぬ。(一)これも徒歩よりなゝめり。よろしき女二人、下人どもぞ、男女かず多かゝめる。馬四つ五つ牽かせて、いみじく忍びやつしたれど、清げなる男どもなどもあり。法師は、(二)せめて此處に宿さまほしくして、頭搔きありく。いとほしけれど、又宿りかへむも(三)樣あしく、煩はしければ、人々は奥に入り、外に隱しなどして、(四)かたへは片つ方によりぬ。軟障(五)などひき隔てておはします。(六)この來る人も恥かしげもなし。いたう(七)かいひそめて、互に心づかひしたり。(八)さるは、かの夜と共に戀ひ泣く右近なりけり。年月に添へて、はしたなき交ひの、つきなくなり行く身を思ひ惱みて、この御寺になむ度々詣でける。例ならひにければ、かやすく構へたりけれど、徒歩より歩み堪へがたくて、寄り臥したるに、この豐後介、隣の軟障のもとに寄り來て、(九)參りものなるべし、折敷手づから取りて、豐後「これは(一〇)御前に參らせ給へ。御臺など(一一)うちあはで、いとかたはらいたしや」といふを聞くに、(一二)我がなみの人にはあらじと思ひて、物のはざまより覗

まに、物も覺えで歩み給ふ。(一)いかなる罪深き身にて、かゝる世にさすらふらむ、(二)我が親世になくなり給へりとも、我を哀とおぼさば、(三)おはすらむ所にさそひ給へ、もし世におはせば、御顏見せ給へ、と佛を念じつゝ、(四)ありけむさまをだに覺えねば、たゞ親おはせましかばとばかりの悲しさを、歎きわたり給へるに、斯くさしあたりて、身のわりなきまゝに、(五)とりかへしいみじく覺えつゝ、辛うじて、(六)椿市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせで往き著き給へり。歩むともなく、とかく(七)つくろひたれど、足のうら動かれずわびしければ、せむ方なくて休み給ふ。このたのもし人なる(八)介、弓矢持ちたる人二人、さては下なる者、童など三四人、女ばらあるかぎり三人、(九)つぼ裝束して、(一〇)ひすましめくもの、ふるき下種女二人ばかりとぞある。いとかすかに忍びたり。(一一)おほみあかしの事など、此處にて(一二)しくはへなどする程に日暮れぬ。(一三)家あるじの法師、(一四)「人やどし奉らむとする所に、何人の物し給ふぞ。怪しき女どもの、心に任せて」とむづかるを、め

(一)玉鬘の心
(二)夕顏
(三)あの世に迎へ取りてくれよ
(四)母の容貌も記憶して居らぬ故
(五)今更の樣に痛切に愁を感じつゝ
(六)長谷詣する人の必ず泊る宿場なりしとぞ
(七)手當したれど
(八)豐後介
(九)裾のはしを折りて市女笠を被りたる旅裝束
(一〇)廁の掃除を司る下女
(一一)觀音へ奉る燈明
(一二)用意して來りたる上に更に手を加へたる也
(一三)椿市にて休みたる家の主人の法師
(一四)別に宿泊せしむべき客のあるに、誰が勝手に泊らんとするぞ

豐後「何か、この身(一)はいとやすく侍り。人ひとりの御身にかへ奉りて、いづちもいづちも罷り失せなむに咎あるまじ。我等(二)いみじき勢になりても、若君(三)をさるものの中にはふらかし奉りては、何心地かせまし」と語らひ慰めて、豐後「神佛こそは、さるべき方にも導き奉り給はめ。近き程に、八幡(四)の宮と申すは、彼處にても參り祈り申し給ひし、松浦箱崎同じ社なり。かの國を離れ給ふとても、多くの願立て申し給ひき。今都にかへりて、斯くなむ御驗を得てまかり上りたると、早く申し給へ」とて、八幡にまうでさせ奉る。そのわたり知れる人にいひ尋ねて、(五)五師とて、早く親の語らひし大德の殘れるを呼びとりて、まうでさせ奉る。

豐後「打次ぎては、佛の御中には、長谷なむ、日の本の中には、あらたなる驗顯はし給ふと、唐土(六)にだに聞えあンなる。まして(七)我國のうちにこそ、遠き國のさかひとても、年經給ひつれば、若君をばまして惠み給ひてむ」とて、出し奉る。殊更(八)に徒歩よりと定めたり。(九)ならはぬ心地に、いとわびしく苦しけれど、人のいふま

(一)自分丈は安心して居る

(二)玉鬘の爲に流浪するは少しも恥かしからず

(三)玉鬘を九州の田舍者の中に落ぶれさせる事は出來ぬ

(四)男山八幡宮

(五)八幡宮附の僧官の五人あるなるべし、其中の一人を故少貳が知りたりし也

(六)新羅國王の皇后長谷の觀音を念じて死すべき命助かりし話今昔物語十六にあり、是などにや

(七)況や是は我が日本の内の事也、遠國には居たれども年來觀音を信じて來りし事なれば

(八)信心の深きをあらはす爲に

(九)玉鬘が

(一) 京都
(二) 玉鬘一人
(三) 何といふ分別も出ぬ
(四) 玉鬘
㊄ 玉鬘初瀨詣、椿市の宿にて右近と邂逅す
(五) 九條は都の內なれども場末なれば也
(六) 緣を求めて

たがひて逃げ出でにしを、いかに思ふらむと、樣々思ひつゞけらる。かへる方(一)とても、その所と行き著くべき故鄕もなし、知れる人と言ひ寄るべきたのもしき人も覺えず、たゞ一所(二)の御爲により、許多の年月住みなれつる世界を放れて、浮べる波風に漂ひて、思ひめぐらす(三)方なし、この人(四)をも、いかにしなし奉らむとするぞ、とあきれて覺ゆれど、如何はせむとて、急ぎ入りぬ。

九條に、昔知れりける人の殘りたりけるを訪ひ出でて、その宿をしめおきて、都(五)のうちといへども、はか〴〵しき人の住みたるわたりにもあらず、怪しき市女商人のなかにて、いぶせく世の中を思ひつゝ、秋にもなり行くまゝに、來し方行くさき悲しき事多かり。豐後介といふたのもし人も、たゞ水鳥の陸に惑へる心地して、徒然にならはぬ有樣のたづきなきを思ふに、歸らむにもはしたなく、心をさなく出で立ちにけるを思ふに、從ひ來たりし者どもも、類(六)に觸れて逃げ去り、本の國に歸り散りぬ。住みつくべき樣もなきを、母おとゞ日暮歎きいとほしがれば、



ぬ。ひゞきの灘もなだらかに過ぎぬ。「海賊の船にやあらむ、ちひさき船の、飛ぶ樣にて來る」などいふ者あり。(一)海賊のひたぶるならむよりも、かの怖ろしき人の追ひ來るにやと思ふに、せむ方なし。

玉(二)憂きことに胸のみ騷ぐひゞきにはひゞきの灘も名のみなりけり

(三)川尻といふ所近づきぬといふにぞ、少し息出づる心地する。例の船子ども、「唐(四)泊より、川尻おすほどは」と謠ふ聲の情なきもあはれに聞ゆ。豐後介、哀に懷かしく謠ひすさびて、(五)「いとかなしき妻子も忘れぬ」とて、思へばげにぞ皆打捨て(六)てける、(七)いかゞなりぬらむ、はかぐ\しき身のたすけと思ふ郞等どもは、皆率て來にけり。(八)我を惡しと思ひて追ひまどはして、如何しなすらむ、と思ふに、(九)心をさなくも顧せで、出でにけるかなと、少し(一〇)心のどまりてぞ、あさましきことを思ひ續くるに、心弱く打泣かれぬ。(一一)「胡の地の妻兒をば空しくすてゝつ」と誦するを、兵部の君聞きて、(一二)げにあやしのわざや、年頃從ひ來つる人の心にも、俄に

(一)海賊の只怖ろしき一方なるよりも監の方が却て厭はしき也
(二)胸の動氣の高きに比べては名に負ふ響の灘の響も無きが如し
(三)淀川尻、攝津
(四)備前
(五)豐後介が謠ふ歌の文句、此歌を謠ふにつけて筑紫に殘し來たる妻子を思ふ也
(六)妻子を
(七)豐後介の心、妻子は如何なりしならん
(八)大夫監が我を惡む餘りに、殘り留れる我が妻子を放逐して
(九)後事を考へず一圖に思切りて出發したるは幼稚な仕方なりしよと
(一〇)氣が落着いて始めて
(一一)白氏文集、縛戎人「凉源鄕井不ㇾ得ㇾ見、胡地妻兒虛棄捐」胡國を征伐する漢の軍に從軍せる者囚はれて胡地に留り妻子を儲けたりしに、後又漢軍の胡國を攻破りたるに過な妻子を棄てゝ漢軍に從ひ歸りしに、胡人なりとて故國にて容れられざりし趣をつくれる詩の句
(一二)我々兄妹は變な事を仕居るものかな

み給へる、理と覺ゆれば、いみじき事を思ひ構へて出立つ。妹たちも、年頃經ぬるよるべを捨てて、この御供(一)に出立つ。あてきといひしは、(三)今は兵部の君といふぞ、(二)添ひて夜逃げ出でて船に乗りける。大夫の監は、肥後に歸りいきて、四月の二十日のほどに日取りて來むとするほどに、かくて逃ぐるなりけり。姉おもとは、(五)類廣くなりてえ(四)出立たず。互にわかれ惜みて、あひ見むことのかたきを思ふに、年經つる故郷とて、殊に見捨てがたきこともなし。たゞ(六)松浦の宮の前の渚と、かの姉おもとの別るゝをなむ、顧せられて、悲しかりける。

兵部　浮島を漕ぎ離れても行く方やいづくとまりと知らずもあるかな

玉鬘　行くさきも見えぬ波路に船出して風にまかする身こそ浮きたれ

いと跡はかなき心地して、うつぶし伏し給へり。かく逃げぬるよし、おのづから言ひ出でつたへば、まけじ魂にて(七)追ひ來なむと思ふに、心も惑ひて、早船といひて、樣異になむ構へたりければ、(八)思ふ方の風さへ進みて、危きまで走りのぼり

(一)一生懸命に支度して
(二)夫
(三)昔はあてき今は兵部の君といふ娘が玉鬘に附添ひて船に乗りたる也
(四)よき日を撰びて玉鬘の迎へに來んと支度して居る中に
(五)子どもなど多きなるべし
(六)景色のよきを棄て難く思ふ也
(七)大夫の監が
(八)順風

(一)玉鬘が片輪なる故監がそれを嫌ひたらばつらかるべしといふ意味を耄碌したる母が詠みそこなひたるならんと

(二)乳母の歌を褒めたる也

四　少貳の長子豐後介玉鬘を奉じて京に上る

(三)乳母の心、二男が監の味方になりたるを怖しく思ひて長男の豐後介に上京を催促すると

(四)自分が監に同意せずとて

(五)敵にせられては

來たるけはひに、おびえて、おとゞ色もなくなりぬ。女たちは、さはいへど心強く笑ひて、娘「この(一)人の樣ことに物し給ふを、ひき違へ侍らば、つらく思はれむを、なほぼけ〴〵しき人の、神かけて聞えひがめ給ふなゝめりや」と解き聞かす。監「お(二)い、然り〳〵」とうなづきて、監「をかしき御口つきかな。某ら田舍びたりといふ名こそ侍れ、口惜しき民には侍らず。都の人とても何ばかりかあらむ。皆知りて侍り。な思しあなづりそ」とて、又詠まむと思へれども、堪へずやありけむ、往ぬめり。

(三)次郎が語らひとられたるも、いと怖ろしく心憂くて、この豐後介をせむれば、豐後「いかゞは仕うまつるべからむ。語らひおはすべき人もなし。まれ〴〵の兄弟は、(四)この監に同じ心ならずとて、中違ひにたり。この監に(五)あたまれては、いさゝかの身じろきせむも、所せくなむあるべき。なか〳〵なる目をや見む」と思ひ煩ひにたれど、姫君の人知れず思いたる樣のいと心苦しくて、生きたらじと思ひ沈

（一）私が直して上げませう
（二）監が幾日々々に玉鬘を引取らんといふ故
（三）少貳の忌なるべし
（四）監が歸りぎはに
（五）藤原廣嗣を祭りたる社にて殊に威靈ありしといふ
（六）よく出來たりと思ひます
（七）乳母があつけに取られたる也
（八）思ふ通を歌にする也
（九）我年來の願空しくて監如き奴に姫を取られたらば我は鏡の神を恨むべし
（一〇）不意に

れば、心苦しう見給へ煩ひぬる」といふ。監「更になおぼし憚りそ。天下に目つぶれ、足をれ給へりとも、某（一）は仕うまつり止めてむ。國のうちの神佛は、己になむ靡き給へる」など誇り居たり。その（二）日ばかりといふに、この月は忌の果（三）なりなど、田舍びたることを言ひのがる。下り（四）て行くきはに、歌よまゝほしかりければ、やゝ久しう思ひめぐらして、

監「君にもしこゝろたがはば松浦なる（五）かゞみの神をかけて誓はむ

この和歌は、（六）仕う奉りたりとなむ思ひ給ふる」と、うち笑みたるも、世づかずうひうひしや。（七）我にもあらねば、返しすべくも思はねど、女どもに詠ますれど、嫗「まろは、まして物も覺えず」とて居たれば、いと久しきに思ひ煩ひて、（八）うち思ひけるまゝに、

乳母（九）年を經ていのる心のたがひなばかゞみの神をつらしとや見む

とわなゝかし出でたるを、監「まてや、こはいかに仰せらるゝ」と、（一〇）ゆくりかに寄り

隱れたるをこそ、よばひ(一)とはいひけれ、様かへたる春の夕暮なり。秋ならねども、(二)「あやしかりけり」と見ゆ。心(三)を破らじとて、祖母(四)おとゞ出であふ。監「故少弐のいと情び、きらく〵しく物し給ひしを、いかでかあひ(五)語らひ申さむと思ひ給へしかども、さる志をも見せ聞えず侍りしほどに、いと悲しくて隱れ給ひにしを、そのかはりに、いかうに(六)仕う奉るべくなむ。志をはげまして、今日は、いとひたぶるに、強ひてさぶらひつる。このおはしますらむ女君、筋(七)ことに承れば、いとかたじけなし。たゞ某(八)らが、私の君と思ひ申して、頂になむ捧げ奉るべき。おとゞ(九)も澁々におはしげなることは、善からぬ女ども、あまた相知りて侍るを、聞し召し疎むなゝなり。さりとも、其奴ばらを、齊しなみにはし侍りなむや。我が君をば、后の位におとし奉らじものをや」など、いとよげに言ひつゞく。乳母「如何は。斯く宣ふを、いと幸ありと思ひたまふるを、宿世(一〇)つたなき人にや侍らむ、思ひ憚る事侍りて、いかでか(一一)人に御覧ぜられむと、人知れず歎き侍るめ

(一)よばひといふ位で夜來るが當前なるに
(二)「いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり」の句を意味をかへて用ひたる也
(三)監の機嫌を惡くすまいとて
(四)乳母
(五)御懇意にしたしと思ひしかど
(六)一向に、專心
(七)特別の御血筋と聞き及べば
(八)私共の
(九)乳母も玉鬘を我に嫁する事を不承諾なるは、我が他に女を多く持てるを嫌へるならん
(一〇)玉鬘は運の無いのであらう、遠慮すべき仔細あつて
(一一)男を持つ事は出來ぬと

(一)運なればこそ斯かる田舍にも下られしならん
(二)何程の效能あらん
(三)大夫の監が怒りたらば飛でも無い事をしてかすかも知れぬ
(四)長男
(五)玉鬘を監に取持つは甚だ失禮にて勿體なき事なり
(六)娘どもの心、母君は夕顏
(七)せめて玉鬘を人並の生活をする樣にして上げたしと思ふに、あんな奴等に遣つて仕舞ふ事かと
(八)大夫の監が
(九)紙に香をつけて、
(一〇)訛りたり
(一一)手紙をよこしたるのみならず、自身訪ひ來れる也
(一二)氣のせいかして氣にくはず
(一三)血色

(一)然るべきにてこそは、かゝる世界にもおはしましけめ。逃げ隠れ給ふとも、何の(二)たけき事かはあらむ。負けじだましひに怒りなば、(三)爲ぬことどもも爲てむ」といひ威せば、いといみじと聞きて、中の(四)兄なる豊後介なむ、豊後「なほいとたい〳〵(五)しくあたらしき事なり。故少貳の宣ひし事もあり。とかく構へて京に上げ奉りてむ」といふ。女どもも泣き惑ひて、(六)母君のかひなくてさすらひ給ひて、行方をだに知らぬかはりに、人なみ〳〵(七)にて見奉らむとこそ思ふに、さるものの中に交り給ひなむこと、と思ひ歎くをも知らで、(八)我はいと覺高き身と思ひて、文など書きておこす。手などきたなげなう書きて、唐の色紙かうばしき香に(九)入れしめつゝ、をかしく書きたりと思ひたる、言葉ぞいとだみたりける。(一〇)(一一)自らもこの家の次郎を語らひとりて、うちつれて來たり。年三十ばかりなる男の、丈高くもの〳〵しくふとりて、穢げなけれど、(一二)思ひなし疎ましく、荒らかなるふるまひ、見るもゆゝしくおぼゆ。(一三)色あひ心地よげに、聲いたう枯れてさへづり居たり。懸想人は夜に

なむ。

大夫の監とて、肥後の國に族廣くて、彼處につけてはおぼえあり、勢厳しき(一)兵ありけり。むくつけき心の中に、いさゝか好きたる心のまじりて、容貌ある女を集めて見むと思ひける。この姫君を聞きつけて、監「いみじきかたはありとも、我は見隠して持たらむ(二)」と、いと懇に言ひかゝるを、いとむくつけく思ひて、「いかで、かゝることを聞かで、尼になりなむとす」と言はせたりければ、いよ〳〵危がりて、おして(三)この國に越え來ぬ。(四)この男子どもを呼びとりて語らふことは、監「(五)思ふ様になりなば、同じ心に勢をかはすべき事」など語らふに、(六)二人はおもむきにけり。二人「しばしこそ似げなく(七)哀と思ひ聞えけれ、おの〳〵我身のよるべと頼まむに、(八)いとたのもしき人なり。これに悪しくせられては、(九)この近き世界には廻らひなむや。(一〇)よき人の御筋といふとも、親に數まへられ奉らず、世に知られでは何のかひかはあらむ。この人のかく懇に思ひ聞え給へるこそ、今は御幸なれ。

㊂ 大夫の監迫りて玉鬘を得んとす
(一) 監は太宰太監、通常は六位の官なれども、特に從五位下に叙せられたるを大夫の監といふ
(二) 片輪が人に知れぬ様にして世話してやらん
(三) 押しかけて肥前へやつて來りたり
(四) 少貳の遺子
(五) 我が望を叶へてくれたらば萬事汝等の尻押をしてやるべし
(六) 三人の子どもの中二男三男は承諾したる也
(七) 似合はぬ縁組にて玉鬘の爲に氣の毒とも思ひしが
(八) 大夫の監は
(九) 筑紫では立行くことが出來ぬ
(一〇) 玉鬘は貴人の胤ではあれど

（一）乳母の一家の人々誰も相手になりて取次がず
（二）わが孫の玉鬘は器量はよけれど非常なる片輪の處ある故
（三）我が一生は手元に置かん
（四）玉鬘の幼時頭中が可愛がりし故
（五）筑紫にて緣附き嫁取りなどして尻が落附きたり
（六）乳母が上京を急げども
（七）玉鬘が物心つくにつれて
（八）正五九月の長精進

ゆゝしくめざましく覺ゆれば、（一）誰も〳〵聽き入れず。乳母「（二）容貌などはさても在りぬべけれど、いみじきかたはのあれば、人にも見せで尼になして、（三）我が世の限は持たらむ」と言ひ散したれば、「故少貳の孫は、かたはなむあゝなる。あたらものを」といふ。聞くもゆゝしく、乳母「如何樣にして、都に率て奉りて、父大臣に知らせ奉らむ。いときなき程を、（四）いとらうたしと思ひ聞え給へりしかば、さりとも疎には思ひ捨て聞え給はじ」など言ひ歎く。佛神に願を立ててなむ念じける。女どもも男子どもも、（五）所につけたるよすがども出で來て、住みつきにけり。心のうちにこそ（六）急ぎ思へど、京の事はいや遠ざかるやうに隔たりゆく。（七）物おぼし知るまゝに、世をいと憂きものにおぼして、（八）年三などし給ふ。二十ばかりになり給ふまゝに、生ひ整ほりて、いとあたらしくめでたし。この住む所は、肥前の國とぞいひける。そのわたりにもいさゝか由ある人は、まづこの少貳の孫のありさまを聞きつたへて、なほ絶えず音づれ來るも、いといみじう耳かしがましきまで

(一)玉鬘が斯かる片田舍に育ち給ふも勿體なく思へど
(二)筑紫に居た儘に我が命の盡くるが殘念なり
(三)我が死後の追善供養などは心配するな
(四)玉鬘を頭中の子とは知らせず
(五)上京の用意ばかりにかゝつて居れども
(六)聞きつぎつゝ、聞き傳へつゝ

少貳「我さへうち捨て奉りて、いかなる樣にはふれ給はむとすらむ、(一)怪しき所におひ出で給ふも、辱く思ひ聞ゆれど、いつしかも京に率て奉りて、さるべき人人にも知らせ奉りて、御宿世に任せて見奉らむにも、都は廣き所なれば、いと心安かるべしと思ひ急ぎつるを、(二)此處ながら命さへ堪へずなりぬる事」と、うしろめたがる。男子三人あるに、少貳「唯この姫君京に率て奉るべき事を思へ。(三)我身の孝をば、な思ひそ」となむ言ひ置きける。(四)その人の御子とは、館の人にも知らせず、たゞ孫のかしづくべき故あるとぞ言ひなしければ、人に見せず限なくかしづき聞ゆる程に、俄に亡せぬれば、哀に心細くて、(五)たゞ京の出立をすれど、この少貳の中惡しかりける國の人多くなどして、とざまかうざまに憚ち懼りて、我にもあらで年を過すに、この君ねび整ひ給ふまゝに、母君よりも勝りて淸らに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高く美しげなり。心ばせおほどかにあらまほしう物し給ふ。(六)聞きついつゝ、好いたる田舍人ども、心かけ消息がるいと多かり。



(一)「千早振かねの御崎を過ぐれどもわれは忘れずしかのすめ神」夕顏を忘れざるに寄せたる也
(二)玉鬘を大事にして
(三)乳母の夢に夕顏が
㊂少貳の死去、玉鬘の美貌に懸想する田舍人多し
(四)少貳位の官吏は費用のかゝるを恐れて出發を見合せ居る中に
(五)少貳が

けり。

船人もたれを戀ふとかおほ島のうらがなしげにこゑのきこゆる

來し方も行方も知らぬ沖に出でてあはれいづくに君を戀ふらむ

ひなの別に、おのがじし心をやりていひける。金の御崎を過ぎて、「我は忘れず」(一)など、夜とともの言ぐさになりて彼處に到り著きては、まいて遙なる程を思ひやりて、戀ひ泣きて、この(二)君をかしづきものにて明し暮す。夢などに、いとたまさかに見え給ふ時などもあり。同じさまなる女など、添ひ給うて見え給へば、名殘心地惡しく(三)惱みなどしければ、なほ世になくなり給ひにけるなゝめりと思ひなるも、いみじくのみなむ。

少貳任はてて上りなむとするに、遙けき程に、異なる(四)勢なき人は、たゆたひつつ、すがくしくも出で立たぬ程に、重き(五)病して、死なむとする心地にも、この君の十歳ばかりにもなり給へるさまの、ゆゝしきまでをかしげなるを見奉りて、

(一)筑紫へ玉鬘が下る事の悲しさ
(二)頭中
(三)夕顔の行方も分らぬ故、若し頭中に聞かれたらば何と答へん、以下乳母が家人抔と談合する趣
(四)玉鬘が頭中を見知らぬに
(五)頭中が知つた上は
(六)玉鬘の容貌
(七)玉鬘が
(八)少貳の娘等
(九)不吉なりと少貳などが叱る也
(一〇)乳母の心、夕顔は若々しき氣立の人なりし故此様な處を御目に掛けたし
(一一)少貳の二人の女といふ説と少貳夫婦といふ説とあり、共に穩ならず

身に添へたてまつりて、(一)遙なる程におはせむ事の悲しきことなどを、(二)父君にほのめかさむと思ひけれど、さるべき便もなきうちに、(三)「母君のおはしけむ方も知らず。尋ね問ひ給はば、いかゞ聞えむ。まだよくも(四)見なれ給はぬに、幼き人をとゞめ奉り給はむも、後めたかるべし。(五)知りながらはた、率て下りねと、許し給ふべきにもあらず」など、己がじし語らひあはせて、いと美くしう、(六)たゞ今から氣高く清らなる御様を、殊なるしつらひなき船にのせて、漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむ覺えける。(七)幼き心地に、母君を忘れず、折々に、玉鬘「母の御許へ行くか」と、問ひ給ふにつけて、涙絶ゆる時なく、(八)女どもも思ひこがるゝを、(九)船道ゆゝしとかつは諫めけり。おもしろき所々を見つゝ、(一〇)心若うおはせしものを、斯かる道をも見せ奉るものにもがな、おはせましかば、我等は下らざらまし、と京の方思ひやらるゝに、かへる波も羨ましく心ぼそきに、船子どもの荒々しき聲にて、「うらがなしくも遠く來にけるかな」と、謠ふを聞くまゝに、(一一)二人さし向ひて泣き

聞えわたし給ひし程より、(一)そなたに侍ふ。(二)心よくかいひそめたるものに、女君も思したれど、(三)心のうちには、(四)故君ものし給はましかば、明石の御方ばかりの覺には劣り給はざらまし。(五)さしも深き御志なかりけるをだに、(六)おとしあぶさず、取りしたゝめ給ふ御心ながさなりければ、まいて、(七)やむごとなき列にこそあらざらめ、この御殿うつりの數の中には交らひ給ひなまし、と思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。かの西の京にとまりし(八)若君をだに、行方も知らず、偏に物を思ひつつみ、又今更にかひなき事によりて、(九)「わが名漏すな」と、口がためたまひしを、憚り聞えて、尋ねても音づれ聞えざりしほどに、その御乳母の夫、(一〇)少貳になりて往きければ、(一一)下りにけり。かの若君の四つになる年ぞ、筑紫へは行きける。(一二)母君の御行方を知らむと、よろづの神佛に申して、晝夜泣き戀ひて、さるべき所々を尋ね聞えけれど、遂にえ聞き出でず。(一三)さらばいかゞはせむ、若君をだにこそは、御かたみに見奉らめ、怪しき

(一)紫に仕へて居る
(二)右近は氣立よく落附きたる女と紫も思ひて好遇すれど
(三)右近の腹では
(四)夕顔が生きて居たら
(五)源の性質をいふ
(六)見放さず始末をつけてやる
(七)夕顔は重んぜらるゝ女の中には入らずとも
(八)夕顔と頭中との間に生れし姫君、玉鬘と名づく
(九)「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へてわが名漏すな」源が右近を誡めて夕顔の事を人に知らせじとせし故に玉鬘を尋ねもせざりし間に
(一〇)太宰少貳
(一一)乳母が
(一二)乳母が夕顔の行方を知りたしと思ひて
(一三)乳母の心

❶ 夕顔の遺孤玉鬘太宰少貳の妻となれる乳母に伴はれて筑紫に赴く
（一）源が夕顔上を忘れず
（二）十人十色なる女の様子を
（三）夕顔が生きて居たらばと
（四）夕顔の侍女
（五）故參の女中の中にて
（六）紫上

玉鬘

梗概

❶ 夕顔の遺孤玉鬘、太宰少貳の妻となれる乳母に伴はれて筑紫に赴く。乳母夫婦玉鬘を傳育す。❷ 太宰少貳の死去。少貳の孫として生長せる玉鬘の美貌。懸想する田舍人多し。❸ 大夫の監、迫りて玉鬘を得んとす。❹ 少貳の長子豐後介、玉鬘を奉じて京に上る。乳母及其娘どもも共に上る。途中の恐怖。❺ 玉鬘初瀨詣。椿市の宿にて右近と邂逅す。參籠。來方行末の物語。❻ 右近、源氏に玉鬘の事を告ぐ。引取の相談。源氏より玉鬘に消息。❼ 玉鬘引取の準備。紫上との打明話。❽ 玉鬘六條院に移る。源氏玉鬘を花散里に託す。從者等の滿足。❾ 歳暮の衣配り。末摘花の唐衣の歌。

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を（一）つゆ忘れ給はず、（二）心々なる人の有樣どもを見給ひ重ぬるにつけても、（三）あらましかばと、哀に口惜しくのみおぼし出づ。（四）右近は何の人數ならねど、猶其かたみと見給ひて、らうたきものに思したれば、（五）ふる人の數に仕う奉り馴れたり。須磨の御うつろひの程に、（六）對の上の御方に、皆人々

さししぞきて(一)、花の陰に立ち隠れてこそ、強きことは出で來め(二)」と聞え給ふも、いと若やかにつきせぬ御有様の、見所おほかるに、いとゞ思ふやうなる御住居にて、聞え通はし給ふ(三)。大堰(四)の御方は、かう方々の御うつろひ定りて、數ならぬ人(五)は、いつとなく紛らはさむ、と思して、神無月になむ渡り給ひける。御しつらひ、ことの有様劣らずして渡し奉り給ふ。姫君(六)の御爲をおぼせば、大方の作法も、差別こよなからず、いと物々しくもてなさせ給へり。

(一)一歩を譲りて
(二)立派な口がきける
(三)紫秋好等がも互に音づれあふ
(四)明石上
(五)物數ならぬ自分は目立たぬ様に引移らんと
(六)源が我娘の爲と思ふ故、明石上の引移の行裝を他の人と餘り厚薄なき様に立派にしたり

の、濃き袙、紫苑の織物かさねて、赤朽葉の羅の汗衫、(一)いといたうなれて、廊渡殿の反橋を渡りてまゐる。(二)うるはしき儀式なれど、童のをかしきをなむ、え思し捨てざりける。(三)然る所に侍ひなれたれば、もてなし有樣外のには似ず、好ましうをかし。御消息には、

秋好　こゝろから春まつ園はわが宿の紅葉を風の傳にだに見よ

(四)若き人々、御使もてはやす樣どもをかし。御かへりは、この御箱の蓋に苔敷き、(五)巖などの心ばへして、五葉の枝に、

紫　(六)風に散る紅葉はかろし春のいろを岩ねの松にかけてこそ見め

この岩根の松も、こまかに見れば、(七)えならぬつくりごとどもなりけり。斯くとりあへず思ひより給へる、(八)故々しさなどを、をかしく御覽ず。御前なる人々もめであへり。大臣、源「この紅葉の御消息、(九)いとねたげなゝめり。春の花盛に、この御いらへは聞え給へ。(一〇)この頃紅葉を言ひくたさむは、立田姫の思はむこともあるを、

(一)著ならしたるを著て
(二)しかつめらしき仕方なれど、使の童の姿が氣に入りたり
(三)使の童の擧動をいふ
(四)紫方の侍女どもが使の童をもてなす
(五)殿の作物を載せて
(六)秋好の歌に己の園の紅葉の美を誇りたるに對して之を反駁したる也
(七)精巧なる作り物
(八)殿に松の作り物の趣あるを秋好が感心して見る
(九)だまつてけ居られぬ
(一〇)秋の頃紅葉を誇るは



（一）今の時節には相應せねど
（二）花散里
（三）夕霧
（四）花散里の方を世話する故
（五）侍女等の局々
（六）こまわけ、細分
（七）宮中を退出して六條院に移る
（八）何と云ひても仰山也
（九）秋好の幸運なるは勿論
（一〇）秋好の方は秋の趣を主としたれば
（一一）秋好より紫に

ろひ給ふ。春の御しつらひは、この頃にあらねど(一)いと心殊なり。御車十五、御前四位五位がちにて、六位殿上人などは、さるべき限を擇らせ給へり。こちたき程にはあらず。世のそしりもやと省き給へれば、何事もおどろ〳〵しう厳しきことはなし。今一方(二)の御氣色も、をさ〳〵おとし給はで、侍従の君(三)添ひて、そなたは(四)もてかしづき給へば、げに斯うもあるべき事なりけりと見えたり。女房(五)の曹司町ども、宛々のこまげ(六)ぞ、大方の事よりもめでたかりける。五六日過ぎて、中宮(七)まかでさせ給ふ。この御儀式はた、さはいへど(八)いと所せし。御幸(九)の勝れ給へりけるをばさるものにて、御有様の心にく〻重りかにおはしませば、世に重く思はれ給へる事勝れてなむおはしましける。この町々の中の隔には、塀ども廊などを、とかく行通はして、氣近くをかしき間にしなし給へり。九月になれば、紅葉むらむら色づきて、宮の(一〇)御前えも言はずおもしろし。風うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋に、いろ〳〵の花紅葉をこきまぜて、此方に(一一)奉らせ給へり。大きやかなる童



（一）形なしに壓倒されたる
（二）花散里住む方
（三）飼ひ立てたり
（四）北側を塀にて隔てゝ
（五）紅葉を誇り顔なる
◉源氏夫妻、花散里、秋好等六條院に移る
（六）皆一時に移徙すべしと
（七）穩やかにして氣取らぬ

大堰のわたりの野山、（一）むとくにけおされたる秋なり。（二）北の東は、涼しげなる泉ありて、夏のかげによれり。御前近き前栽、吳竹、下風涼しかるべく、木だかき森の樣なる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯花垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、瞿麥、薔薇、木丹など樣の、花のくさ〴〵を植ゑて、春秋の木草、その中に打交ぜたり。東面は、分けて馬場の殿つくり、埒結ひて、五月の御遊所にて、水のほとりに菖蒲植ゑしげらせて、むかひに御厩して、世になき上馬どもを（三）とゝのへ立てさせ給へり、西の町は、（四）北面築きわけて、御藏町なり。隔の垣にから竹うゑて松の木しげく、雪を玩ばむ便によせたり。冬のはじめ、朝霜むすぶべき菊の籬、（五）われはがほなる柞原、をさ〳〵名も知らぬ深山木どもの、木深きなどをうつし植ゑたり。

彼岸のころほひ渡り給ふ。（六）一度にと定めさせ給ひしかど、騷がしきやうなりとて、中宮は少し延べさせ給ふ。例の（七）おいらかに氣色ばまぬ花散里ぞ、その夜添ひて移



(一)忌々しくのみ
(二)我娘の女御の宮仕につきて源の冷淡なるを怨むなるべし
●六條院の四區劃
(三)一區劃
(四)秋好の舊邸故矢張秋好が住むなるべし
(五)源氏
(六)花散里
(七)つくり樣
(八)住む人々の希望通りに
(九)源氏の方即ち紫の住む方

は、心ゆかずものし(一)とのみ思したり。女御の御まじらひの程などにも、大臣の御用意なきやうなるを、いよ〳〵怨めし(二)と思ひしみ給へるなるべし。

八月にぞ、六條の院造りはてて渡り給ふ。未申の町(三)は、中宮(四)の御ふる宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿(五)のおはすべき町なり。丑寅は、東の院の住み給ふ對(六)の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせ給へり。もとありける池山をも、便なき所なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のおきて(七)をあらためて、さま〴〵に、御方々(八)の御願の心ばへを造らせ給へり。南の(九)東は山高く、春の花の木、數をつくして植ゑ、池の樣おもしろく勝れて、御前近き前栽に、五葉、紅梅、櫻、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をば、むら〳〵仄に交ぜたり。中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを植ゑ、泉の水遠くすまし、遣水の音優るべき岩をたて加へ、瀧おとして、秋の野を遙に作りたる、その頃にあひて、盛に咲亂れたり。嵯峨の



（一）同じ事ならば新宅にて擧行せん
（二）精進落、賀の祝の時法會を催して將來の福を祈る事ある故行終りて精進落の饗宴ある也
（三）紫上
（四）花散里も分擔して準備を調ふる事あり
（五）紫と花散との
（六）式部卿宮の五十賀は天下を擧げての騷なるを
（七）以下式部卿宮の心、從來源は惠を普く施せども、式部卿に對しては何かにつけてつらく當りたる故
（八）感情を害したる事あるならんと
（九）源の關係の女多き中に我娘の紫が寵を專にしたるを、其お陰は自分には及ばねども名譽としたりしに、
（一〇）此度の賀の企は我晩年の榮譽なりと
（一一）紫の繼母

やうの御いそぎも、（一）同じくば珍らしからむ御家居にてと、いそがせ給ふ。年かへりては、ましてこの御いそぎの事（二）御としみのこと、樂人舞人のさだめなどを、御心に入れて營み給ふ。經佛法事の日の裝束、祿どもなどをなむ、（三）上は急がせ給ひける。（四）東の院にも、分けてし給ふことどもあり。（五）御なからひ、ましていとみやびかに聞えかはしてなむ過し給ひける。（六）世の中響きゆすれる御いそぎなるを、式部卿の宮にも聞召して、（七）年頃世の中にはあまねき御心なれど、このわたりをばあやにくに情なく、事に觸れてはしたなめ、宮人をも御用意なく、憂はしきことのみ多かるに、（八）つらしと思ひ置き給ふこととこそはありけめと、いとほしくも辛くも思しけるを、（九）かくあまたかゝづらひ給へる人々多かる中に、取りわきたる御思勝れて、世に心にくゝめでたきことに、思ひかしづかれ給へる御宿世をぞ、我が御家までは匂ひこねど、面目におほすに、又（一〇）かく此世にあまるまで、ひゞかしいとなみ給ふは、覺えぬ齡の末のさかえにもあるべきかな、とよろこび給ふを、（一一）北の方

(一)我が權勢ありし昔にかへしたく
(二)朱雀院も相手になりにくゝもて餘したり
㊃ 夕霧進士及第、侍從に任ぜらる
(三)夕霧
(四)今の高等文官試驗及第者の如き資格
(五)夕霧と同時の受驗者には
(六)夕霧位をすゝめられて
(七)雲井雁
(八)父の監督の嚴重なるが恨めしくて強ひて逢はんともせず
㊄ 源氏六條院を經營す
(九)同じ作るならば廣く趣ある樣に拵へてあちこちに居る妻妾等を集めんと思ひて
(一〇)明石上
(一一)秋好の舊邸
(一二)紫の父
(一三)紫上
(一四)源氏

官年爵、何くれのことに觸れつゝ、御心に叶はぬ時ぞ、命長くてかゝる世の末を見ることと、(一)取りかへさまほしう、萬を思しむづかりける。老いもておはする儘に、さがなさも增りて、(二)院もくらべ苦しう堪へがたくぞ、思ひ聞え給ひける。

かくて(三)大學の君、その日の文うつくしう作り給ひて、(四)進士になり給ひぬ。(五)年積れるかしこき者どもを擇らせ給ひしかども、及第の人僅に三人なむありける。秋の司召に、(六)かうぶりえて、侍從に成り給ひぬ。(七)かの人の御こと、忘るゝ世なけれど、(八)大臣の切にまもり聞え給ふもつらければ、わりなくてなども對面し給はず。御消息ばかり、然りぬべき便に聞え給ひて、互に心苦しき御中なり。

大殿、靜かなる御住居を、(九)同じくば廣く見所ありて、こゝかしこにて(一〇)覺束なき山里人などをも、集へ住ませむの御心にて、六條京極わたりに、(一一)中宮の古き宮のほとりを、四町を占めて造らせ給ふ。(一二)式部卿宮、明けむ年ぞ五十になり給ひけるを、御賀のこと、(一三)對の上おぼし設くるに、(一四)大臣もげに過し難き事どもなりと思して、さ

ざらむも、情なければ、かへさに渡らせ給ふ。(一)大臣(二)も諸共にさぶらひ給ふ。后待ちよろこび給ひて、御對面あり。いといたうさだすぎ(三)給ひにける御けはひにも、故宮を思ひ出で聞え給ひて、かく長くおはします類もおはしけるものをと、口惜しう思ほす。大后「今はかく古りぬる齢に、よろづの事忘られ侍りにけるを、いと辱く渡りおはしまいたるになむ、更に昔の御世の事思う出でられ侍る」と、うち泣き給ふ。冷泉「(四)さるべき御蔭どもにおくれ侍りて後、春のけぢめも思う給へわかれぬを、今日なむ慰め侍りぬる。(五)また〳〵も」と聞え給ふ。大臣もさるべき様に聞えて、源「(六)殊更にさぶらひて」など聞え給ふ。(七)のどやかならで歸らせ給ふひゞきにも、后の、なほ胸うち騒ぎて如何に思し出づらむ。世をたもち給ふべき御宿世(八)は、けたれぬものにこそと、いにしへを悔いおほす。(九)尙侍の君も、のどやかに思し出づるに、哀なること多かり。今も然るべき折、風の傳にもほの(一〇)めき給ふことと絶えざるべし。(一一)后はおほやけに奏せさせ給ふことある時々ぞ、(一二)御たうばりの年

(一)冷泉が訪問す
(二)源氏
(三)年よりたる弘徽殿を見るにつけ源が藤壺を思出して
(四)桐壺帝、藤壺などに死別れて後
(五)此後又參るべし
(六)又特に訪問して萬事を承らん
(七)落着きても居ずに歸り行く源の羽振のよさを見聞するにつけても
(八)源の運のよさは人力の如何ともし難きものぞと
(九)朧月夜
(一〇)源と朧と情交を通ずること
(一一)弘徽殿大后
(一二)己が受くべき俸祿

(一)帥の宮ときこえし、今は兵部卿にて、今の上に御土器まゐり給ふ。

鶯(二)いにしへを吹き傳へたる笛竹にさへづる鳥の音さへ變らぬ

(三)あざやかに奏しなし給へる、用意ことにめでたし。(四)取らせ給ひて、

冷泉うぐひすの昔を戀ひてさへづるは木傳ふ花の色やあせたる

と宣はする(五)御有樣、こよなく故々しくおはします。(六)これは御わたくし様に、うちうちの事なれば、數多にも流れずやなりにけむ。又書き落してげるにやあらむ。樂所遠くて覺束なければ、御前に御琴ども召す。兵部卿宮琵琶、內の大臣和琴、箏の御琴院の御前にまゐりて、琴は例の太政大臣賜はり給ふ。さるいみじき上手の勝れたる御手づかひどもの、盡し給へる音は譬へむ方なし。(七)唱歌の殿上人あまた侍ふ。「安名尊」(八)あそびて、次に「櫻人」(九)、月朧にさし出でてをかしき程に、中島のわたりに、こゝかしこ篝火ども燈して、大御遊は歇みぬ。

夜更けぬれど、かゝる序に、(一〇)大后の宮おはします方を、(一一)よぎて訪ひ聞えさせ給は

(一)螢兵部卿
(二)音樂も昔を傳へて春鶯囀の妙曲古の如し
(三)御代を祝ひてうつくしく
(四)盃を
(五)己の治世は何事も古に及ばずと卑下したる也
(六)此詠歌は帝源などの間にのみ詠みかはして公にせぬ事故、餘人の歌はなきならん
(七)歌をうたふ役をつとむる殿上人
(八)催馬樂「あな尊今日の尊さやいにしへも斯くやありけん今日の尊さ」
(九)催馬樂「櫻人其船ちぢめ島つ田を十町つくれる見て歸りこんやそやよ明日歸り來んやそよや、言をこそ明日とも言はめ遠方に妻さるせなれば明日もさね來じやそよやし明日もさねこじやそよや」
㊂ 源氏弘徽殿大后を訪ふ
(一〇)弘徽殿皇后、朱雀母
(一一)素通りして

(一)專門の詩人
(二)式部省の文章生の試驗の題
(三)夕霧
(四)臆病なる學生等
(五)學生等一人づつ船に乘りて詩を作る也、人と相談などするを避くる爲
(六)強ち學問をせずとも貴紳の交は出來る身分なるに
(七)花の宴の巻の事
(八)あれ程の面白き事
(九)源が
(一〇)春鶯囀の曲は昔の如くなれども昔にかはれる事のみ多し
(一一)宮中を離れたる我棲所にも春鶯囀は春の來れるを告ぐる今日の面白さ

まめきたる方にすゝませ給へり。今日はわざとの文人(一)も召さず、たゞその才かしこしと聞えたる學生十人を召す。式部の司の試の題(二)を擬へて、御題たまふ。大殿の太郎君(三)の試み給ふべき故なゝめり。臆(四)だかき者どもは、物もおぼえず。つな(五)がぬ船に乘りて池にはなれ出でて、いと術なげなり。日やうやうくだりて、樂の船ども漕ぎまひて、調子ども奏する程の山風の響、おもしろく吹き合せたるに、冠者の君は、かう(六)苦しき道ならでも交らひ遊びぬべきものを、と世の中恨めしう覺え給ひけり。「春鶯囀」舞ふほどに、昔の花の宴(七)の程思し出でて、院の帝、「又さ(八)ばかりの事見てむや」と宣はするにつけて、(九)その世の事哀に思しつゞけらる。舞ひはつるほどに、大臣、院に御土器參りたまふ。

源　鶯(一〇)のさへづる春はむかしにてむつれし花のかげぞかはれる

院の上、

(一一)九重をかすみ隔つるすみかにも春とつげくるうぐひすの聲

變ることのみ増りゆくに、命長きも怨めしきに、生ひさき遠き人(一)さへ、斯くいささかにても、世を思ひしめり給へれば、いとなむ萬恨めしき世なる」とて、泣きおはします。

朔日にも、大殿(二)は御ありきしなければ、のどやかにておはします。良房の大臣と聞えける、いにしへの例になずらへて、白馬(三)ひき、節會の日は、内裏の儀式をうつして、昔の例よりも事そへて、いつかしき(四)御有樣なり。二月の廿日餘、朱雀院に行幸あり。花盛はまだしき程なれど、三月は故宮(五)の御忌月なり。疾くひらけたる櫻の色もいとおもしろければ、院にも御用意殊につくろひ磨かせ給ひ、行幸に仕うまつり給ふ上達部、親王たちよりはじめ、心づかひし給へり。人々皆青色(六)に、櫻がさねを著給ふ。帝は赤色の御衣奉れり。召ありて太政大臣(七)參り給ふ。おなじ赤色を著給へれば、いよ〳〵ひとつもの(八)と耀きて見えまがはせ給ふ。人々の御裝束用意、常よりことなり。院もいと淸らにねびまさらせ給ひて、御さま用意、な

(一)夕霧
⑪ 朱雀院へ行幸、觀櫻の宴
(二)源は太政大臣故參賀もせざる也
(三)正月七日白馬の節會に源邸へも白馬を引來て萬事朝廷に擬したる也
(四)鄭重なる
(五)藤壺
(六)麴塵、山鳩色
(七)源氏
(八)冷泉と源と

(一)我を六位などと
(二)卑しきも暫時の間の事と
(三)夕霧の祖父
(四)源は實の親なれど
(五)改りて他人の樣に思ひ居る故
(六)二條東院
(七)花散里は我を憐みくれる
(八)葵上存命ならば
(九)運次第で成人さへすれば侮る人もなき物故氣にかけずに居よ
(一〇)夕霧の保護者としては源も故祖父も同じ樣に力にはなるものの
(一一)頭中の大宮への仕向けが、故祖父の存生中の樣にはゆかぬ樣になりゆく故

れ。餘りしめやかに、斯くな物し給ひそ。何かかう眺めがちに思ひ入れ給ふべき。ゆゝしう」と宣ふ。夕霧「何かは。(一)六位など人の侮り侍るめれば、(二)暫しの事とは思う給ふれど、内裏へ參るも物憂くてなむ。(三)故大臣おはしまさましかば、戲にても、人には侮られ侍らざらまし。(四)物隔てぬ親におはすれど、(五)いとけゝしうさし放ちて思いたれば、おはしますあたりに、たやすくも參り馴れ侍らず。(六)東の院にてのみなむ、御前近く侍る。(七)對の御方こそ哀に物し給へ。(八)親今一所おはしまさましかば、何事を思ひ侍らまし」とて、涙のおつるを紛らはし給へる氣色、いみじう哀なるに、宮はいとゞほろ〳〵と泣き給ひて、大宮「母に後るゝ人は、程々につけて、さのみこそ哀なれど、(九)自ら宿世々々に、人と成りたちぬれば、疎に思ふ人もなきわざなるを、思ひ入れぬさまにてを物し給へ。故大臣の今しばしだに物し給へかし。(一〇)限なきかげには、同じことと頼み聞ゆれど、思ふにかなはぬことの多かるかな。内の大臣の心ばへも、なべての人にはあらずと、世の人もめでいふなれど、昔に(一一)

(一)尼ではあれど
(二)夕霧が
(三)花散の
(四)年よりたる
(五)譏りたき
(六)祖母大宮は一心に夕霧の世話のみやく
(七)幾かさねも
(八)夕霧が
(九)雲井雁
(一〇)身分卑しき者でも

もてなし紛はし給ふめるも、宜なりけり、と思ふ心のうちぞ恥かしかりける。大宮の容貌(一)ことにおはしませど、まだいと淸らにおはし、こゝにもかしこにも、人は容貌よきものとのみ目馴れ(二)給へるを、(三)もとより勝れざりける御容貌の、やゝさ(四)だ過ぎたる心地して、やせ〳〵に御髪ずくななるなどが、かく譏(五)らはしきなりけり。

年の暮には、正月の御裝束など、宮(六)はたゞ、この君一所の御ことを、まじること無う急ぎ給ふ。あまた(七)くだりいと淸らにしたて給へるを、見(八)るも物憂くのみ覺ゆれば、夕霧「朔日などには、必ずしも內裏へ參るまじう思ひ給ふるに、何にかく急がせ給ふらむ」と聞え給へば、大宮「などてか然もあらむ。老いくづほれたらむ人の樣にも、宣ふかな」と宣へば、夕霧「老いねどくづほれたる心地ぞするや」と、ひとりごちて、打ち涙ぐみて居給へり。かの(九)事を思ふならむと、いと心苦しうて、宮もうち顰み給ひぬ。大宮「男は、(一〇)口惜しききはの人だに、心を高うこそつかふな

⓫夕霧の花散里に對する批評、大宮に身の不幸を喞つ
(一)夕霧は雲井雁へ手紙もやれず
(二)惟光の娘よりは立勝れる雲井雁
(三)再び逢ふ事なく此儘に別れるのかと
(四)祖母大宮
(五)雲井雁の
(六)源氏
(七)花散里に夕霧を託したり
(八)大宮の死後
(九)斯く夕霧の幼き時分から馴らし置きて永く世話せよ
(一〇)源の言ふなり次第になる花散故
(一一)夕霧が花散を
(一二)夕霧の心、花散の不器量なる事よ
(一三)源氏
(一四)雲井雁
(一五)夕霧の心、されば とて不器量にて見た目のわるきも面白からず
(一六)花散は源に捨てられねども、源が花散の器量をもて心をも合點して心からの愛情を注がぬもあの器量では尤もなり
(一七)「み熊野の浦の濱木綿百重なす心は思へどただに逢はぬかも」

(一)かの人は、文をだにえやり給はず、(二)立ちまさる方の事し心にかゝりて、程ふるままに、わりなく戀しき面かげに、(三)又あひ見でやと思ふより外のことなし。(四)宮の御もとへも、あいなく心憂くて參り給はず。(五)おはせし方、年頃馴れ遊びし所のみ、思ひ出でらるゝこと增れば、里さへ憂く覺え給ひつゝ、また籠り居給へり。(六)殿は(七)この西の對にぞ、聞えあづけ奉り給ひける。源「大宮の御世の殘り少げなるを、(八)おはせずなりなむ後も、(九)かく幼き程より見ならはして、後見思せ」と聞え給へば、唯宣ふまゝの(一〇)御心にて、懷かしう哀に思ひあつかひ奉り給ふ。ほのかになど見(一一)奉るにも、(一二)容貌のまほならずもおはしけるかな、かゝる人をも、(一三)人は思ひ捨て給はざりけり、など、我が、あながちに(一四)つらき人の御容貌を、心にかけて戀しと思ふも味氣なしや、心ばへのかやうに柔和ならむ人をこそあひ思はめ、と思ふ。又、(一五)向ひて見るかひなからむもいとほしげなり、(一六)かくて年經給ひにけれど、殿のさやうなる御容貌、御心と見給ひて、濱ゆふばかりの隔さしかくしつゝ、何くれと

やありけむ、をかしと見けり。緑(一)の薄様の、好ましきかさねなるに、手はまだいと若けれど、生ひさき見えていとをかしげに、

夕霧日(二)かげにもしるかりけめやをとめ子があまの羽袖にかけし心は

二人見るほどに、父主(三)ふと寄り來たり。怖ろしうあきれて、え引き隱さず。惟光「なぞの文ぞ」とて取るに、面赤みて居たり。惟「よからぬわざしけり」と憎めば、兄逃げていくを、呼びよせて、惟「誰がぞ」と問へば、童「殿の冠者の君の、しかぐ\宣ひて賜へる」といへば、名殘(四)なくうち笑みて、惟「いかに美しき君の御ざれ心なり。(五)きんぢらは、同じ年なれど、いふかひなくはかなかゝめり」など讃めて、母君(六)にも見す。惟「この君達の、(七)少し人數に思しぬべからましかば、おほぞうの宮仕よりは奉りてまし。殿(八)の御心おきてを見るに、見そめ給ひてむ人を、(九)御心とは忘れ給ふまじきにこそ、いと頼もしけれ。(一〇)明石(一一)の入道の例にやならまし」などいへど、(一二)皆急ぎ立ちにけり。

(一)緑は六位の袍の色なれば用ひたる也
(二)君の舞容に思附きたる我心は、君が頭にかざせる日陰(日影)によりても明かに分りたるならん
(三)惟光
(四)今迄の怒は消えて
(五)汝等は夕霧と同年なれど
(六)惟光の妻
(七)夕霧などが我娘を人がましく思ひ下さらば、尋常の宮仕をさするより は之に奉るがましなり
(八)源の心立
(九)自分の方からは
(一〇)夕霧も父に似るべければ
(一一)我娘を夕霧に奉らば
(一二)娘も童も

(一)頭中の弟
(二)實子ならぬ女
(三)惟光
(四)典侍缺員ある故娘を採用せられたし
(五)願の如くにしてやるべき歟と
(六)夕霧
(七)夕霧の心
(八)深く思ひ込み居る事にはあらざれども
(九)雲井雁の事に附帶して
(一〇)舞姬の兄
(一一)汝が
(一二)男の兄弟なりとて私を近づけねば
(一三)童の心
(一四)強ひて
(一五)惟光の娘が

に參らすべきよし奏せさせ給ふ。(一)左衛門督、(二)その人ならぬを奉りて、咎ありけれど、それもとゞめさせ給ふ。(三)津のかみは、「(四)典侍あきたるに」と申させたれば、(五)さもや勞らましと、大殿も思いたるを、(六)かの人は聞き給ひて、いと口惜しと思ふ。(七)我が年の程位など、かく物げなからずば、乞ひ見てましものを、思ふ心ありとだに知られでやみなむ事と、(八)わざとの事にはあらねど、(九)うちそへて涙ぐまるゝ折々あり。(一〇)兄の童殿上する、常にこの君に參り仕うまつるを、例よりも懷かしう語らひ給ひて、夕霧「五節はいつか内裏へは參る」と問ひ給ふ。童「今年とこそは聞き侍れ」と聞ゆ。夕霧「顏のいと美かりしかば、すゞろにこそ戀しけれ。(一一)ましが常に見るらむも羨ましきを、又見せてむや」と宣へば、童「いかでか然は侍らむ。心に任せてもえ見侍らず、(一二)男兄弟とて近くもよせ侍らねば、ましていかでか君達には御覽ぜさせむ」と聞ゆ。夕霧「さらば文をだに」とて賜へり。(一三)前々かやうの事は忌むものをと苦しけれど、(一四)責めて賜へばいとほしうてもて往ぬ。(一五)年の程よりはざれて

(一)五節の節會の當日
(二)源より筑紫の五節へ
(三)汝も年寄れるならん汝の舊友たる我も斯く老年になりたれば
(四)五節の心に
(五)噂をされるにつけて我が五節の舞姫たりし昔君に逢ひ奉りし事も今の樣に思はる、日蔭蔓は舞姫の頭に戴く首飾
(六)青地に蠟にて紋形を置きたる紙、辰日は青色の服を著る故折に合ひたる也
(七)夕霧
(八)惟光の娘が目につきたる故
(九)娘の方で
(一〇)折目正しく
(一一)物恥かしき子供心
(一二)惟光の娘の容貌
(一三)雲井雁の我につらきに悶ゆる心の慰に此娘を見んかと、「見るわざしてむや」誤あるべし
(一四)舞姫を
(一五)良清の娘
(一六)惟光の娘
(一七)節會の後齋に就する也
(一八)按察大納言も己の奉れる五節を一旦退出させて改めて參內せしむべき旨奏せる也

しいづ。(一)辰の日の暮つかた(二)つかはす。御文のうち思ひやるべし。

源 (三)をとめ子も神さびぬらし天津袖ふるき世の友よはひ經ぬれば

年月のつもりを數へて、うち思しける儘のあはれを、え忍び給はぬことの、をかしう(四)思ゆるもはかなしや。

五節 (五)かけていへば今日の事とぞ思ほゆる日蔭の霜の袖にとけしも

(六)青摺の紙よくとりあへて、まぎらはし書いたる濃墨、薄墨、草がちにうちまぜ亂れたるも、人のほどにつけてはをかしと御覽ず。(七)冠者の君も、(八)人の目とまるにつけても、人知れず思ひありき給へど、あたり近くだに(九)寄せず、(一〇)いとけゝしうもてなしたれば、(一一)物つゝましき程の心には、歎かしうて止みぬ。(一二)容貌はしもいと心につきて、(一三)つらき人のなぐさめにも、見るわざしてむやと思ふ。

やがて(一四)皆とゞめさせ給ひて、宮仕すべき御氣色ありけれど、この度はまかでさせて、(一五)近江のは辛崎の祓、(一六)津のかみは難波といどみて(一七)まかで出ぬ。(一八)大納言も殊更

(一)例の化粧に今一度手を入れるとて
(二)六位の卑き地位が不快なれば、淺黃は六位の袍の色
(三)五節の日は特に官位相當の服を著せず、直衣にて參內するを許さるゝ也
(四)夕霧の容貌
(五)年よりはませて
(六)夕霧を愛する事
(七)どの舞姫も優劣なく
(八)大やうに
(九)五節の舞姫位の品格には見えず
(一〇)どの舞姫も例年のよりは大人らしくて、五節終りて引續き宮中に奉仕すべき豫定なれば也
(一一)筑紫の五節

なされず、なまむづかしきに、(一)化粧じ添ふとて騒ぎつる後見ども、近うよりて、人騒がしうなれば、いと口惜しうて立ち去り給ひぬ。(二)淺黃の心やましければ、內裏へ參り給ふこともせず、物憂がり給ふを、(三)五節にことづけて、直衣などさま變れる色ゆるされて參り給ふ。(四)きびはに淸らなるものから、(五)まだきにおよずけて、ざれ歩き給ふ。帝よりはじめ奉りて、(六)思したるさまなべてならず、世に珍らしき御おぼえなり。

五節のまゐる儀式は、(七)いづれともなく、心々に二なくし給へるを、舞姫のかたち、大殿のと大納言殿のとは勝れたりとめでのゝしる。げにいとをかしげなれど、(八)こゝしう美しげなることは、なほ大殿のにはえ及ぶまじかりけり。物淸げに今めきて、(九)そのものとも見ゆまじう、したてたる樣體などの、有難うをかしげなるを、かう譽めらるゝなゝめり。(一〇)例の舞姫どもよりは、みな少しおとなびつゝ、げに心ことなる年なり。殿參り給ひて御覽ずるに、(一一)昔御目とまり給ひし少女の姿をおほ



臥し給へるを、心もや慰むと、立ち出でて紛れ歩き給ふ。様容貌はめでたくをかしげにて、靜やかになまめい給へれば、若き女房などは、いとをかしと見奉る。上(一)の御方には、御簾の前にだに物近うもてなし給はず、我が御心ならひ(二)、如何に思すにかありけむ、疎々しければ、御達なども氣どほきを、今日は物のまぎれに入立ち給へるなゝめり。(三)舞姫かしづきおろして、妻戸の間に屏風など立てて、かりそめのしつらひなるに、やをら寄りて覗き給へば、なやましげ(四)にて添ひ臥したり。たゞかの(五)人の御程と見えて、今少しそびやかに(六)、様體などのことさらび(七)、をかしき所は優りてさへ見ゆ。暗ければこまやかには見えねど、程のいとよく思ひ(八)出でらるゝ様に、心移るとはなけれど(九)、たゞにもあらで(一〇)、衣の裾を引きならし給ふ。何心もなくあやしと思ふに(一一)、

夕霧(一二)「あめにますとよをかびめの宮人もわが志すしめを忘るな

みづがきの(一三)」と宣ふぞ、うちつけなりける(一四)。若う(一五)をかしき聲なれど、誰ともえ思ひ

(一)紫上には簾を隔てて逢ふ事をさへ夕霧に許さず
(二)源自身が繼母の藤壺に戀せし覺えのある故か夕霧を紫上より遠ざけてのみありたれば侍女も夕霧には親まざるに
(三)試演の爲に來れる舞姫と附添人と車より降りて
(四)惟光の娘がくたびれた様子で
(五)雲井雁位の年輩で
(六)せい高く
(七)氣取りて
(八)雲井雁が思出さるゝ
(九)惚れぬでもなく
(一〇)惟光の娘の
(一一)娘が
(一二)汝舞姫よ汝を我物と思へる我志を忘るゝ事勿れ、神樂歌みてぐらはわがには非ず天にます豐をか姫の神のみてぐら」
(一三)「少女子が袖振る山のみづ垣の久しき世より思ひそめてき」
(一四)唐突
(一五)惟光の娘の心

（一）攝津守兼左京大夫惟光の娘
（二）五節などには出し難しと惟光迷惑がりたれど
（三）大納言の妾腹の娘さへ出るなれば惟光の愛女を出すも恥ならず
（四）責むる故
（五）出す位ならば其儘內裏に留めて奉公させんと
（六）惟光の自邸にて
（七）娘の附添人
（八）當日の夕方になりて
（九）源邸
（一〇）源が
（一一）帝の御覽に入るゝ前の下稽古の爲源の前にて試演せしむべしと
（一二）どれも棄難ければいつそ今二人分の舞姫を我方より出したし
（一三）容貌は一樣に勝れたる故樣子の勝れたるを採れる也
（一四）夕霧
（一五）食ひ得ず
（一六）ふさぎ込みて

く、仰言ことなる年なれば、女をおのく奉り給ふ。殿の舞姫は、惟光の朝臣の、攝津守（一）にて左京大夫かけたる女、容貌などいとをかしげなる聞あるを召す。からいことに思ひたれど、惟光（二）「大納言の外腹の女を奉らるなるに、朝臣のいつき（三）女出したてたらむ、何の恥かあるべき」（四）とさいなめば、わびて、おなじくば宮仕（五）やがてせさすべく思ひおきてたり。舞習はしなどは、里（六）にていと善うしたてて、かしづきなど、したしう身に添ふべきはいみじう選り整へて、その日（八）の夕つけて參（七）らせたり。殿（九）にも、御方々の童、下仕のすぐれたるをと、御覽じくらべ（一〇）、えり出でらるゝ心地どもは、程々につけて、いとおもだたしげなり。御前に召して（一一）御覽ぜむうちならしに、御前を渡らせてと定め給ふ。捨つべうもあらず、とりぐなる童の樣體容貌を思し煩ひて、源（一二）「今一所の料を、これより奉らばや」など笑ひ給ふ。たゞもてなし（一三）用意によりてぞ選に入りける。

大學（一四）の君胸のみ塞がりて、物など見入れ（一五）られず、屈し（一六）いたくて、書も讀まで眺め

かして、霜のいと白きに急ぎ出で給ふ。うち腫れたるまみも、人に見えむが恥かしきに、宮(一)はた召しまつはすべかゝめれば、心やすき(二)所にとて急ぎ出で給ふなりけり。道のほど、人やりならず(三)、心ぼそく思ひ續くるに、空の氣色もいたう曇りて、まだ暗かりけり。

夕霧　霜氷うたてむすべる明けぐれ(四)の空かきくらし降るなみだかな

大殿(五)には今年五節(六)奉りたまふ。何ばかり(七)の御いそぎならねど、童(八)の裝束など、近うなりぬとて急ぎせさせ給ふ。東の院(九)には、參り(一〇)の夜の人々の裝束せさせ給ふ。殿には、大方のことども、中宮よりも、童下仕の料まで、えならず奉れ給へり。過ぎにし年五節(一一)などとまりしが、さうぐしかりし積も取り添へ、人の心地も、常よりもはなやかに思ふべかゝめる年なれば、所々いどみて、いといみじくよろづを盡し給ふ聞えあり。按察の大納言、左衞門督、うへの五節(一二)には、良淸、今は近江の守にて左中辨なるなむ奉りける。(一三)皆とゞめさせたまひて宮づかへすべ

(一)大宮に呼びつけられそうなれば
(二)窮屈ならぬ處へ逃出さんとて
(三)これも己の心がらとて
(四)夜あけ前のくらさ
(十)惟光の娘五節の舞姫をつとむ、夕霧の懸想
(五)源氏
(六)五節の舞姫は每年然るべき家々より奉る習慣なり
(七)格別の用意といふ程の事でもなけれど
(八)舞姫に隨從の童
(九)二條東院の花散里
(一〇)舞姫參内の當夜
(一一)藤壺の喪中故
(一二)舞姫四人、二人は公卿より出し二人は殿上人又は受領より出す、殿上人より出すを上の五節といふ
(一三)本年の五節の舞姫は其儘宮中に留めて女官たらしむべき旨特に仰ありしかば

る世かな。殿の(一)思し宣ふことは更にも聞えず。大納言殿にもいかに聞かせ給はむ。(二)めでたくとも、物の(三)初の、「六位宿世よ」とつぶやくもほの聞ゆ。たゞこの屏風の(四)うしろに尋ねきて、歎くなりけり。をとこ君、我をば位なしとてはしたなむるなりけりと思すに、世の中怨めしければ、哀も少しさむる心地してめざまし。夕霧「かれ聞き給へ。

(五)くれなゐの涙にふかき袖の色をあさみどりとやいひしをるべき

はづかし」と宣へば、

雲井「(六)いろ／＼に身のうきほどの知らるゝはいかに染めける中の衣ぞ

と宣ひはてぬに、殿入り給へば、わりなくて渡り給ひぬ(七)。男君は、立ちとまりた(八)る心地も、いと人わろく胸塞がりて、我が御方に(九)臥し給ひぬ。御車三つばかりに(一〇)て、忍びやかに急ぎ出で給ふけはひを聞くも、しづ心なければ、宮の御前より參(一一)り給へとあれど、寝たるやうにて動きもし給はず。涙のみとゞまらねば、歎きあ

(一)頭中の怒は勿論按察大納言も聞きて何と思はるゝならん
(二)いくら結構な人でも
(三)嫁入の初に當りてけちな六位で居る様な聟は眞平御免
(四)夕霧等の居る所の
(五)紅は五位の袍の色、淺緑は六位の袍の色、我衣は血涙に紅なるものを淺緑なりと言ひくさす者は誰ぞ
(六)何かにつけて身の薄命のかこたるゝは一體如何なる緣ならん、いろい ろ―種々、各種の色
(七)雲井雁が己の室に歸る
(八)取殘されたる
(九)己の室に
(一〇)頭中が雲井雁を連れて行く也
(一一)夕霧を呼びによこしたる也

(一)見咎めらるゝも一通りの時こそ恐しけれ、今の場合はそれ處ではなく
(二)どさくさまぎれ
(三)夕霧を雲井雁に
(四)思ひ切らんと思へど
(五)頭中内裏より退出する様子
(六)仰山に人拂ひする
(七)其ぞや
(八)どうにでもなれと度胸をすゑて女の逃げんとするを許さず
(九)雲井雁の
(一〇)乳母が此場の様子をけどりて
(一一)乳母の心
(一二)之を以て觀れば兩人の中は大宮も御承知ぢやわいと

まに言ふ。冠者の君、物の後に入り居て見給ふに、人の(一)咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、いと心ぼそくて、涙おし拭ひつゝおはする氣色を、御乳母いと心苦しう見て、宮にとかく聞えたばかりて、夕間暮の人のまよひに(二)、對面せさせ(三)給へり。互に物恥かしく胸つぶれて、物もいはで泣き給ふ。夕霧「大臣の御心のいとつらければ、さばれ思ひ止みなむ(四)と思へど、戀しうおはせむこそわりなかるべけれ。などて、少し隙ありぬべかりつる日頃、餘所に隔てつらむ」と宣ふさまも、いと若う哀げなれば、雲井「まろも然こそはあらめ」と宣ふ。夕霧「戀しとは思しなむや」と宣へば、少しうなづき給ふさまも、をさなげなり。大殿油まゐり、殿まか(五)ンで給ふけはひ、こちたく(六)追ひのゝしる御前の聲に、人々「そゞや」(七)など怖ぢさわげば、いと怖ろしと思してわなゝき給ふ。男はさもさばれと(八)、ひたぶるに許し聞え給はず。御乳母(九)參りてもとめ奉るに(一〇)、氣色を見て、あな心づきなや(一一)、げに(一二)宮知らせ給はぬことにはあらざりけり、と思ふにいとつらく、乳母「いでや、憂かりけ

(一)身支度して
(二)我側を放さず
(三)其方と別れ居て
(四)命の亡くなる方をこそ心配せしに
(五)我が引取らるゝも夕霧との關係故と
(六)夕霧
(七)雲井雁をも我主人と思ひしに
(八)往って仕舞はれて殘念
(九)他の人へ嫁せしめんと思ひ給ふとも聞入れ給ふな
(一〇)面倒な事をいふな運命は分らぬものなれば
(一一)頭中の處置は夕霧を輕蔑しての事ならんが、實際夕霧が人に劣れりや否やを聞き定めて貰ひたし

ば、いとをかしげに引き(一)繕ひて渡り給へり。十四になむおはしける。かたなりに見え給へど、いと兒めかしうしめやかに、美しきさまし給へり。大宮「(二)側さけ奉らず、旦暮のもてあそび物に思ひ聞えつるを、(三)さう〴〵しくもあるべきかな。殘りすくなき齡の程にて、御有樣を見はつまじき事と、(四)命をこそ思ひつれ。今さらに見捨てゝうつろひ給ふやいづちならむ、と思へば、いとこそ哀なれ」とて泣き給ふ。姫君は(五)恥かしきことを思せば、顏ももたげ給はで、たゞ泣きにのみ泣き給ふ。(六)をとこ君の御乳母、宰相の君出で來て、宰相「(七)同じ君とこそ頼み聞えさせつれ。(八)口惜しく渡らせ給ふこと。(九)殿はことざまに思しなる事おはしますとも、さやうに思し靡かせ給ふな」など、さゞめき聞ゆれば、いよ〳〵恥かしとおぼして、物も宣はず。大宮「いで、(一〇)むづかしき事な聞えられそ。人の御宿世々々のいと定め難く」と宣ふ。宰相「いでや、(一一)物げなしと侮り聞えさせ給ふに侍るめりかし。さりとも、げにわが君や人に劣り聞えさせ給ふと、聞しめしあはせよ」と、なま心やましきま

給ふ事懇なれば、(一)その御子どももさまざま參り給へど、(二)この君に似る匂ひなく見ゆ。大宮の御志も、(三)なずらひなく思したるを、たゞこの(四)姫君をぞ、氣近うらうたき物に思しかしづきて、(五)御側さけず、うつくしきものに思したりつるを、かくて(六)渡り給ひなむが、いとさうざうしきことを思す。殿は、今のほどに内裏に參り侍りて、夕つ方迎に參り侍らむ」とて出で給ひぬ。(七)いふかひなきことを、なだらかに言ひなして、然てもやあらましと思せど、猶いと心やましければ、(八)人の御程の少しものものしくなりなむに、かたはならず見なして、(九)そのほど志の深さ淺さのおもむきをも見定めて、(一〇)ゆるすとも、殊更なる樣にもてなしてこそあらめ、制し諫むとも、(一一)一所にては、幼き心のまゝに、見苦しうこそあらめ、宮もよもあながちに制し宣ふ事あらじ、と思せば、女御の御徒然にことづけて、(一二)此處にも彼處にもおいらかに言ひなして、渡し給ひけり。(一三)宮の御ふみにて、大臣こそ恨みもし給はめ。君は、さりとも(一四)志のほど知り給ふらむ。(一五)渡りて見え給へ」と聞え給へれ

(一)左衛門督權中納言等の子供
(二)夕霧に勝る男振はなし
(三)最も夕霧を愛せしに
(四)雲井雁を大宮が
(五)離さず
(六)雲井雁の分れ行くのが
(七)頭中將の心、取返しのつく事ならねば穩便に計らひて、雲井雁は夕霧に嫁せんかと思へど氣がすまぬ故
(八)夕霧が稍貫目がついて一廉の人物になりたるを見定めて
(九)雲井雁に對する愛情の深淺をも確めて
(一〇)假令結婚せしむるにしても新に娶はすといふ風にしたし
(一一)二人を一所に置いては勝手な眞似をして見苦しかるべし
(一二)雙方へ穩かなる口實を設けて
(一三)雲井雁へ
(一四)我が其方に對する志
(一五)逢ひに來てくれ

(一)弘徽殿を慰めよと思ひて暫く雲井雁を呼びたるのみ
(二)雲井雁を養育せられし御恩は
(三)一旦呼ぶと決したる以上は
(四)夕霧や雲井雁の心にも
(五)夕霧や雲井雁は左樣なるも致方なしとしても
(六)手許に引取りたりとて、我許に置くよりも安心といふ譯には行くまじ
(七)大宮の處へ立廻る
(八)間が惡くて
(九)自分の居間
(一〇)簾中に入ることを許されず
(一一)大宮には繼子なれど
(一二)故左大臣の仕向を受繼ぎて

ふるを、諸共にあそびわざをもして慰め(一)よと思ひ給へてなむ、あからさまに物し侍る」とて、「はぐくみ(二)、人となさせ給へるを、疎にはよも思ひ聞えさせじ」と申し給へば、斯う思し(三)立ちにたれば、とゞめきこえ給ふとも思しかへすべき御心ならぬに、いと飽かず口惜しうおぼされて、大宮「人の心こそ憂きものはあれ。とかく幼(四)き心どもにも、我に隔てて疎ましかりける事よ。又(五)、さもこそはあらめ、大臣の、物の心を深う知り給ひながら、我を怨じて、かく(六)率て渡し給ふ事、かしこにて、これより後安きこともあらじ」と打ち泣きつゝ宣ふ。

をりしも冠者の君參り給へり。もし些の隙もやと、この頃は繁う(七)ほのめき給ふなりけり。内の大臣の御車のあれば、心の鬼(八)にはしたなくて、やをら隠れて、(九)我が御方に入り居給へり。内の大殿の君達、左の少將、少納言、兵衛佐、侍從、大夫などいふも、皆こゝには參り集ひたれど、(一〇)御簾の内はゆるし給はず。左衛門督、權中納言なども、(一一)異御腹なれど、(一二)故殿の御もてなしのまゝに、今も參り仕うまつり

(一)頭中が
(二)弘徽殿にいふ詞
(三)雲井雁を呼びて
(四)雲井雁を
(五)猪子才にこましやくれたる人、夕霧をさす
(六)夕霧と親しくするも不似合なる年輩に雲井雁がなりたれば
(七)雲井雁を父の手許に引取る
(八)葵上
(九)老後の退屈
(一〇)頭中が我を疎外するがつらし
(一一)不平は不平として申上げしのみ、疎外する譯ではなし
(一二)内裏に居る弘徽殿が
(一三)宿下り中なるが

苦しうのみわぶめるに」と宣ひて、俄にまかでさせ奉り給ふ。御暇も許されがたきを、打ちむづかり(一)給ひて、上はしぶ〳〵に思し召したるを、しひて御迎し給ふ。頭中「つれ〴〵(二)に思されむを、姫君(三)わたして、諸共にあそびなどし給へ。宮に(四)あづけ奉りたる、後やすけれど、いとさくじり(五)およずけたる人立ちまじりて、自らけぢかき(六)も、あいなき程になりにければなむ」と聞え給ひて、俄に渡し(七)聞え給ふ。宮いとあへなしと思して、大宮「ひとり物せられし女子なくなり給ひて後、いとさう〴〵しく心ぼそかりしに、嬉しうこの君をえて、生ける限のかしづきものと思ひて、旦暮につけて、老のむづかしさ(九)も慰めむとこそ思ひつれ。思の外に(一〇)へだてありて思しなすも、つらくなむ」と聞え給へば、うち畏まりて、頭中「心に飽(一一)かず思う給へらるゝことは、然なむ思ひ給へらるゝとばかり聞えさせしになむ。深くへだて思う給ふることはいかでか侍らむ。内裏にさぶらふが、(一二)世の中恨めしげにて、この頃(一三)まかで出て侍るに、いと徒然に思ひて屈し侍れば、心苦しう見給

(一)朝早く
(二)雲井雁の方
(三)身の成行も人の手前も考へず
(四)乳母等などの彼是相談するを聞きても別にいやな事とも思はず
(五)乳母等が嚴しく折檻する故
(六)夕霧と文通も出來ず
(七)大人ならば隙を求める智慧もあるべきが
(八)夕霧
九 頭中將雲井雁と夕霧との中を隔てんとす
(九)大宮の所へ
(一〇)秋好のはでやかにて入内ありし爲弘徽殿がふさぎ込み居るのが氣の毒故
(一一)弘徽殿方の侍女等

うて、我が御方に疾く(一)出でて、御文かき給へれど、小侍從にもえ逢ひ給はず、かの御方(二)ざまにもえ往かず、胸潰れて覺え給ふ。女はた、騒がれ給ひし事のみはづかしうて、我が(三)身や如何あらむ、人やいかゞ思はむとも深く思し入れず。をかしうらうたげにて、打(四)ち語らふ樣などを、疎ましとも思ひ離れ給はざりけり。又かく騒がるべき事とも思さざりけるを、(五)御後見どももいみじうあばめ聞ゆれば、え言(六)も通はし給はず。大人(七)びたる人や、さるべき隙をも造り出づらむ、をとこ君(八)も、今少し物はかなき年の程にて、只いと口惜しうのみ思ふ。

大臣はそのまゝに參り(九)給はず、宮をいとつらしと思ひ聞え給ふ。北の方には、斯かることとなむと、氣色も見せ奉り給はず。たゞ大方いとむづかしき御氣色にて、

頭中「中宮のよそほひ殊にて參り給へるに、女御の世の中思ひしめりて物し給ふを、(一〇)心苦しう胸いたきに、まかでさせ奉りて、心やすくうち休ませ奉らむ。さすがに上につと侍はせ給ひて、晝夜おはしますめれば、(一一)ある人々も心ゆるびせず、

(一)堅く鎖して
(二)「霧深き雲井の雁もわがごとや晴せず物の悲しかるらん」
(三)小侍從は雲井雁の乳母の娘なり、記者の自注
(四)夕霧に聞かれたるを雲井雁が恥かしく思ひて
(五)雁の友呼ぶ事も悲しきに、荻の上風までが人の哀を催す
(六)大宮が
(七)夕霧が
(八)夕霧がわけもなく恥かしくて

て、人しづまる程に、中障子をひけど、例はことに鎖し固めなどもせぬを、つと(一)さして、人の音もせず。いと心ぼそく覺えて、障子によりかゝりて居給へるに、女君も目をさまして、風の音の竹に待ちとられて、うちそよめくに、雁の鳴きわたる聲のほのかに聞ゆるに、幼き心地にも、とかく思し亂るゝにや、雲井雁(二)「雲井の雁もわがごとや」と、ひとりごち給ふけはひ、若うらうたげなり。いみじう心もとなければ、夕霧「これ開けさせ給へ。小侍從やさぶらふ」と宣へど、音もせず。御(三)乳母子なり。獨語を聞き(四)給ひけるもはづかしうて、あいなく御顔を引き入れ給へど、哀は知らぬにしもあらぬぞ憎きや。乳母達など近く臥して、打ち身じろくも苦しければ、かたみに音もせず。

夕霧(五)さ夜中に友呼びわたるかりがねにうたて吹きそふ荻のうは風

身にもしみけるかなと思ひ續けて、宮の御前にかへりて歎きがちなるも、御目覺(六)めてや聞かせ給ふらむと(七)つゝましく、みじろき臥し給へり。(八)あいなく物はづかし

❽ 夕霧雲井雁の幼き戀
(一) 夕霧が大宮へ
(二) 雲井雁に
(三) 今夜は眞面目にて
(四) 其方の事にて
(五) 面白くもない事をしでかして他人に心配をかけてくれて困る
(六) 言はぬ積では居れど此樣な事とも御存じあるまいと思へば言ふぞ
(七) 學問所に閉籠りし以來
(八) 夕霧の心
(九) 食はず、夕霧が

かく騷がるらむとも知らで、冠者の君參り給へり。一夜も人目しげうて、思ふことをもえ聞えずなりにしかば、(一)常よりも哀に覺え給ひければ、夕つ方おはしたるなるべし。(二)宮、例はいひ知らずうち笑みて、待ち喜びきこえ給ふを、(三)まめだちて物語など聞え給ふ序に大宮「御事(四)により、内の大臣の怨じて物し給ひにしかば、いとなむいとほしき。(五)ゆかしげなきことをしも思ひそめ給ひて、人に物思はせ給ひつべきが心苦しきこと。(六)かうも聞えじと思へど、さる心も知り給はでやと思へばなむ」と聞え給へば、心にかゝれる事の筋なれば、ふと思ひよりぬ。面赤みて、夕霧「何事にか侍らむ。(七)靜なる所に籠り侍りにし後、ともかくも人にまじる折なければ、怨み給ふべきこと侍らじとなむ思う給ふる」とて、いと恥かしと思へる氣色を、哀に心ぐるしうて、大宮「よし、今よりだに用意し給へ」とばかりにて、他事に言ひなし給ひつ。(八)いとゞ文なども通はむことの難きなめりと、思ふにいと歎かし。物まゐりなどし給へど、更に(九)まゐらで、寢ね給ひぬる樣なれど、心もそらに

（一）父がいくら折檻しても
（二）頭中が
（三）どうして雲井雁の身の納りをつけんかと
（四）夕霧に對する愛は
（五）雲井雁を愛する心
（六）頭中が無情にも之を以ての外の不埒の様にいへるが氣に入らず
（七）大宮の心
（八）頭中は元來餘り雲井雁を愛せず
（九）我が大事にし出したればこそ春宮妃にせん抔も思附きたり
（一〇）其希望が外れて臣下へ嫁ぐとせば夕霧以上の聟はあらじ
（一一）夕霧には雲井雁以上の皇女でも相當と思ふ位ぢや
（一二）己の夕霧を思ふの深ければにや
（一三）頭中に

にても直人のすぢは、何の珍しきにか思う給へかけむ」と聞ゆ。姫君はいと幼げなる御さまにて、（一）よろづに申し給へども、かひあるべきにもあらねば、（二）うち泣き給ひて、（三）如何にしてか徒になり給ふまじきわざはすべからむと、忍びて然るべきどち宣ひて、大宮をのみ恨み聞え給ふ。宮はいといとほしと思す中にも、（四）男君の御かなしさは勝れ給ふにやあらむ、（五）かゝる心のありけるも、美しう思さるゝに、（六）情なくこよなき事のやうに思し宣へるを、（七）などか然しもあるべき、（八）もとよりいたう思ひつき給ふ事なくて、かくまで冊かむとも思したらざりしを、（九）我が斯くもてなしそめたればこそ、春宮の御事をも思しかけたゝめれ、（一〇）とりはづしてたゞ人の宿世あらば、この君より外に優るべき人やは、容貌有様よりはじめて、等しき人あるべきかは、（一一）これより及なからむ際にもとこそ思へと、（一二）我が志のまさればにや、大臣をうらめしう思ひ聞え給ふ御心の中を、（一三）見せ奉りたらば、ましていかに恨み聞え給はむ。

(一)譴責するに
(二)媒する者の隙を窺ひて取持つが常の事
(三)夕と雲との中は
(四)年來起居を共にせしかば
(五)我々も夕と雲とはまだ子供なれば祖母の御扱振に邪魔を入れて二人を遠ざくるでもなしと油斷したりしに
(六)大宮の御扱振がちがつて來りしに
(七)少年と雖も人によりてはこそ〳〵と色めかしき擧動もするものなるに夕霧は生眞面目なる故斯かる事あらんとは夢にも思はざりき
(八)注意して噂を打消せ
(九)雲井雁をやがて我手に引取るべし
(一〇)大宮の御料簡がけしからぬ、汝等はよもや斯る事になれかしとは思はざりしならん
(一一)雲井雁の繼父按察使大納言への聞えもあれば
(一二)夕霧は立派な人とは言へ、臣下へ雲井雁の嫁せらるゝは不贊成

なかりけれ」とて、御乳母どもをさいなみ給ふに、聞えむ方なし。乳母等「かやうの事は、限なき帝の御いつき女も、(一)自らあやまつ例、昔物語にもあゝめれど、氣(二)色を知り傳ふる人、さるべき隙にてこそあらめ。(三)これは、(四)明暮立ちまじり給ひて年頃おはしましつるを、(五)何かはいはけなき御程を、宮の御もてなしよりさし過しても、隔て聞えさせむと、うちとけて過し聞えつるを、一昨年ばかりよりは、(六)けざやかなる御もてなしになりにて侍るめるに、(七)若き人とてもうち紛ればみ、いかにぞや、世づきたる人もおはすべかゝめるを、夢に亂れたる所おはしまさざゝめれば、更に思ひよらざりけること」と、おのがどち歎く。頭中「よし、暫かゝる事漏さじ。隠れあるまじきことなれど、(八)心をやりて、あらぬ事とだに言ひなされよ。(九)今かしこに渡し奉りてむ。(一〇)宮の御心のいとつらきなり。そこたちは、さりとも、いとかゝれとしも思はれざりけむ」と宣へば、いとほしき中にも、嬉しく宣ふと思ひて、乳母等「あないみじや。(一一)大納言殿に聞き給はむことをさへ思ひ侍れば、(一二)めでたき

(一)其様な事あらば我こそ第一に困らねばならぬ
(二)兩人に我をまきぞへして
(三)雲井雁を引受けし以來
(四)御身の考へぬ所までも注意して
(五)いくら可愛がるとてまだ子供なる彼等に淫行を勧める様の事はせぬ
(六)事を荒立てて
(七)冤罪を蒙らせて夕霧等の名を傷けてはならぬ
(八)彼の夜陰口きゝし侍女等は
(九)打解話
(一〇)頭中が
(一一)いくら若いとて其方の思慮足らざるを知らで其方の行末出世を望みしは我が無智なりし

む知り侍らざりける。げにいと口惜しきことは、(一)こゝにこそまして歎くべく侍れ。(二)諸共に罪を負せ給ふは、恨めしき事になむ。(三)見奉りしより、心殊に思ひ侍りて、(四)そこに思し至らぬことをも、勝れたる様にもてなさむとこそ、人知れず思ひ侍れ。(五)物げなき程を、心の闇に惑ひて、急ぎ物せむとは思ひよらぬことになむ。さても、誰かは斯かる事は聞えけむ。善からぬ人の言につきて、(六)きはだけく思し宣ふも味氣なく、(七)空しきことにて、人の御名や穢れむ」と宣へば、頭中「何の浮きたる事にか侍らむ。侍ふ人々も、かつは皆もどき笑ふべかゝめるものを、いと口惜しく、安からず思ひ給へらるゝや」とて、立ち給ひぬ。心知れる人は、いみじういとほしく思ふ。(八)一夜のしりうごとの人々は、まして心地も違ひて、何にかゝる(九)睦物語をしけむと、思ひ歎きあへり。姫君は、何心もなくておはするに、(一〇)さし覗き給へれば、いとらうたげなる御様を、哀に見奉り給ふ。頭中「(一一)若き人といひながら、心幼く物し給ひけるを知らで、いとかく人なみ〳〵にと思ひける、我こそ優りてはか

（一）雲井雁は從來母上の御手元に預け置きて私は自身世話もせず
（二）手近き弘徽殿の御奉公が思ふ樣にゆかぬにのみ氣を取られて
（三）雲井雁は母上の御世話にて人となるならんと安心し居たるに、案外なる事の出來したるは殘念なり
（四）夕霧は天下無雙の俊才なれど
（五）親族間の結婚は奥床しからぬ樣につまらぬ身分の者にありてすら言ふ事なるに
（六）夕霧の爲にも此結婚は不名譽也
（七）緣もゆかりもなき立派なる家に聟となりて珍重せらるゝのがよき也
（八）夕霧を我聟にしては親族關係が面倒になり過ぎて源の思わくも面白からず
（九）假に聟に取るにしても先づ斯く〳〵と母上から私に御話し下されて改まりたる取扱にし體面を繕ひて聟にもすべし、ずる〳〵べつたりでは困る
（一〇）兩人の關係は大宮夢にも知らざる故
（一一）夕霧雲井雁の內心

のもしき御かげに、（一）幼き者を奉りおきて、自らはなか〳〵幼くより見給へもつかず。まづ目に（二）近きがまじらひなど、はか〴〵しからぬを見給ひ歎きいとなみつつ、（三）さりとも人となさせ給ひてむと、頼みわたり侍りつるに、思はずなることの侍りければ、いと口惜しうなむ。まことに（四）天の下ならぶ人なき有識には物せらるめれど、（五）親しきほどに斯かるは、人の聞き思ふ所も、（六）あはつけき樣になむ、何ばかりの程にもあらぬ、なからひにだにし侍るを、かの人の御ためにも、いとかたはなる事なり。（七）さし離れ、きら〳〵しう珍らしげあるあたりに、今めかしうもてなさるゝこそをかしけれ。（八）ゆかりむつび、ねぢけがましき樣にて、大臣も聞きおぼす所侍りなむ。（九）さるにても、かゝる事なむと知らせ給ひて、殊更にもてなし、少しゆかしげある事をまぜてこそ侍らめ。幼き人々の心に任せて御覽じ放ちけるを、心憂く思う給ふる」など聞え給ふも、（一〇）夢にも知り給はぬことなれば、あさましう思して、大宮「げに斯う宣ふもことわりなれど、かけてもこの（一一）人々の下の心な

(一)圭角ある性質

七 頭中將雲井雁の事によりて母大宮を恨む

(二)頭中が大宮へ

(三)切下げ髮を調へ

(四)頭中の人柄

(五)面と向つて顏をあはせず

(六)爰に來るも間が惡く、雲井雁の事を根に持ちて言へる也

(七)雲井雁といふ碌でもなき娘の身の上につきて

(八)此如く怨まじと一方には思へど我慢が出來ぬ

(九)あきれたる貌

(一〇)我に恨を抱かるらむぞ

いひし氣色を、めざましう妬しと思すに、御心動きて、少し男々しう(一)あざやぎたる御心には、しづめがたし。

二日ばかりありて參り給へり。(二)しきりに參り給ふ時は、大宮もいと御心ゆき、嬉しきものに思いたり。(三)御尼額引きつくろひ、うるはしき御小袿など奉りそへて、子ながらも恥かしげにおはする人樣なれば、(五)まほならずぞ見え奉り給ふ。大臣御けしき惡しくて、頭中「(六)こゝに侍ふ(四)もはしたなく、人々いかに見侍らむと心おかれにたり。はかぐ\しき身に侍らねど、世に侍らむかぎりは、御めかれず御覽ぜられ、覺束なき隔なくとこそ思ひ給ふれ。(七)善からぬもののうへにて、怨めしと思ひ聞えさせつべき事の出でまうで來たるを、(八)かうも思う給へじと且は思う給ふれど、なほしづめ難く覺え侍りてなむ」と、涙おし拭ひ給ふに、宮けさうじ給へる御顏の色たがひて、御目(九)もおほきになりぬ。大宮「如何やうなる事にてか、今更の齡の末に、(一〇)心おきては思さるらむ」と聞え給ふも、流石にいとほしけれど、頭中「た

程にうちたゆみて、世は憂きものにもありけるかな、と(一)氣色をつぶ〳〵と心え給へど、音もせで出で給ひぬ。御前おふ聲の嚴しきにぞ、女房達「殿は今こそ出でさせ給ひけれ。いづれの隈におはしましつらむ。今さへかゝる御あだけこそ(二)」といひあへり。さゞめきごとの人々は、「いとかう(三)ばしき香のうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしましつるとこそ思ひつれ。あなむくつけや。しりうごと(四)やほの聞し召しつらむ。煩はしき(五)御心を」とわびあへり。(六)殿は道すがらおぼすに、いと(七)口惜しく惡しきことにはあらねど、珍らしげなきあはひに、世の人も思ひいふべきこと、大臣の(八)、強ひて女御をおししづめ給ふもつらきに、(九)わくらばに、人に優ることもやとこそ思ひつれ、妬くもあるかな、とおぼす。(一〇)殿の御中の大かたには、昔も今もいと善くおはしながら、かやうの方にては、挑み聞え給ひし名殘も思し出でて、心憂ければ、寢覺(一一)がちにて明し給ふ。大宮(一二)も、さ(一三)やうの氣色は御覽ずらむものを、世になくかなしうし給ふ御孫にて、まかせて見給ふならむと、人々の(一四)

(一)事情がぼつ〳〵分つたけれども
(二)今だにやまぬ御浮氣沙汰よ
(三)今迄よき香のしたるを夕霧とのみ思ひしに
(四)我々の陰口を頭中に聞かれたかしら
(五)頭中は氣のおける性質の人なるに
(六)頭中
(七)夕霧と雲非雁との戀は
(八)源が秋好の肩を持ちて弘徽殿を壓倒するも不快なれば
(九)萬一雲非雁が次代の皇后になり得んかと樂みに思ひしに、其も畫餅になりて殘念
(一〇)源と頭中との交情は
(一一)頭中が
(一二)頭中の心
(一三)夕霧と雲非雁との中は知り居るならんに、祕藏の孫の事故勝手にさせてあるならんと
(一四)侍女等の言を顧みて怪しからず殘念に思ひ

頭中「大殿(一)も、かやうの御遊に心とゞめ給ひて、いそがしき御政事どもをば、遁れ給ふなりけり。げに味氣なき世に、心のゆくわざをしてこそ、過し侍らなましけれ」など宣ひて、御土器まゐり給ふに、暗うなれば、大殿油まゐり、御湯漬菓子など、誰も〳〵聞し召す。(二)姫君はあなたに渡し奉り給ひつ。強ひて氣遠く(三)もてなし給ひ、御琴の音ばかりをも聞かせ奉らじと、今はこよなくへだて(四)聞え給ふを、「いとほしき(五)事ありぬべき世なるにこそ」と、近う仕うまつる大宮の御方のねび人どももさゞめきけり。

大臣出で給ひぬる様にて、(六)忍びて人に物宣ふとて立ち給へりけるを、やをらかい(七)細りて出で給ふ道に、かゝるさゞめき言をするに、怪しうなり給ひて、御耳とゞめ給へば、わが御上をぞいふ。女房達「(八)かしこがり給へど、人の親よ。(九)自らおれたることこそ出でくべかゝめれ。子を知るはといふは、空言なゝめり」などぞつきしろふ。(一〇)あさましくもあるかな、さればよ、(一一)思ひよらぬ事にあらねど、(一二)いはけなき

(一)源氏
(二)雲井雁を其居間へ歸らしめたり
(三)夕霧と近づかしめぬ様にし
(四)頭中が二人の中を
(五)此結果は氣の毒な事になるであらう
(六)侍女の中に頭中の手をつけたるがあるなるべし
(七)密會の後身を細める様にして忍びて歸る道に
(八)頭中自ら賢明に誇れど親馬鹿は免れず
(九)あの様な事をして居ては馬鹿げた結果になるべし、子を知るは親に如かずといふは嘘らしい
(一〇)頭中の感
(一一)夕霧と雲井雁との間に戀の成立つべしとは
(一二)まだ子供と油斷して

ほろ〳〵と残らぬに、老御達など、涙おとしつゝ、こゝかしこの御几帳の後に頭をつどへたり。頭中(一)「風の力けだし寡し」と、うち誦じ給ひて、頭中(二)「琴の感ならねど、怪しく物あはれなる夕かな。(三)なほ遊ばさむや」とて、秋風樂にかき合せて、唱歌し給へる聲いとおもしろければ、皆さま〴〵、大臣をもいと美しと思ひ聞え給ふに、(四)いとゞ添へむとにやあらむ、(五)冠者の君參り給へり。こなたにとて、(六)御几帳隔てて入れ奉り給へり。頭中「をさ〳〵對面もえ賜はらぬかな。などかく、(七)この御學問のあながちならむ。(八)才のほど〳〵より餘りぬるも味氣なきわざと、大臣も思し知れることとなるを、かくおきて聞え給ふ、樣あらむとは思う給へながら、斯う籠りおはすることなむ、心苦しう侍る」と聞え給ひて、頭中(九)「時々はことわざもし給へ。笛の音にも古事は傳はるものなり」とて、御笛奉り給ふ。いと若うをかしげなる音に吹きたてて、いみじうおもしろければ、御琴どもをば暫しとゞめて、大臣は拍子おどろ〳〵しからず、うち鳴し給ひて、(一〇)「萩が花ずり」など謠ひ給ふ。

(一)文選豪士賦序「落葉俟二微飈一以隕、而風之力蓋寡、孟甞遭二雍門一而泣、琴之感以末」
(二)上の文選の句を取りていふ
(三)雲非雁に尙ひけと勸むる也
(四)今夕の興を
(五)夕霧
(六)雲非雁の居處と几帳にて隔てゝ
(七)無暗に學問に御精の出る事哉
(八)學才の餘り過ぎたるもよからぬ事は源も承知の筈なるに、斯迄勉學を強ひらるゝは仔細ある事と思へど
(九)學問以外の事
(一〇)催馬樂「衣がへせんやさ君達やわが衣は野原篠原萩の花ずりやさ君達や」

いかで思ふ様に見なし侍らむ。(二)東宮の御元服たゞ(三)今のことになりぬるをと、人知れず思ひ(一)給へ志したるを、かういふさ(四)いはひ人の腹の后がねこそ、又おひすがひぬれ。立ち(五)出で給へらむに、ましてきしろふ人ありがたくや」とうち歎き給へば、大宮「などか然しもあらむ。この家に(六)さる筋の人いで物し給はで止むやうあらじ、と故大臣の思ひ給ひて、女御(七)の御事をも、ゐたち急ぎ給ひしものを、おはせ(八)ましかば、かくもて僻むる事もなからまし」など、この御事にてぞ、太政大臣を(九)恨めしげに思ひ聞え給へる。姫君(一〇)の御樣の、いときびはに美しうて、箏の御琴弾き給ふを、御髪の下端、釵などの、あてになまめかしきをうちまもり(一一)給へば、恥ぢらひて少しそば(一二)みたまへるかたはらめ、面つき美しげにて、取由(一三)の手つきいみじう、つくり(一四)たる物の心地するを、宮(一五)も限なくかなしと思したり。掻き合せなど弾きすさび給ひて、押しやり給ひつ。大臣(一六)和琴ひき寄せ給ひて、律の調のなかなか今めきたるを、さる(一七)上手の亂れてかい弾き給へる、いとおもしろし。御前の梢

(一)思通りに出世させて見たし
(二)冷泉
(三)近々の事なれば其時は雲井雁を后にと窃に思へるに
(四)明石上腹の明石姫が春宮の后の候補者として競爭者の地位にあり
(五)明石姫入内したらば勢を爭ひ得る者あらじ
(六)皇后の出ぬ筈はなし
(七)弘徽殿女御の世話をも非常に心配してしたりしに
(八)故大臣さへ存命ならば秋好に壓倒される筈はなし
(九)源を恨めしく思ふ
(一〇)雲井雁
(一一)頭中が見つめ
(一二)側を向ける
(一三)左手にて琴の緒を押ふる手つき
(一四)人形のやうな
(一五)祖母も可憐に思へり
(一六)頭中
(一七)頭中をいふ

里にこめ置き給へる人(一)こそ、いと上手と聞え侍れ。物(二)の上手の後には侍れど、末になりて、山賤にて年經たる人(三)の、いかでさしも引き勝れけむ。かの大臣、いと(四)心ことにこそ思ひて宣ふ折々はべれ。他事よりは、あそび(五)の方の才はなほ廣うあはせ、彼此に通はし侍るこそかしこけれ。ひとりごとにて、上手となりけむこそ、珍らしきことなれ」など宣ひて、宮(六)にそゝのかし聞え給へば、大宮「(七)柱さすこと初初しくなりにけりや」と宣へど、おもしろう彈き給ふ。頭中「幸(八)にうち添へて、なほ怪しうめでたかりける人なりや。老(九)の世にもたまへらぬ女子を設けさせ奉りて、身に添へてもやつし居たらず、やむごとなきに讓れる心おきて、事もなかるべき人なりとぞ聞き侍る」など、かつ御物語聞え給ふ。頭中「女は唯心ばせよりこそ、世に用ゐらるゝものに侍りけれ」など、人の上宣ひ出でて、頭中「女御(一〇)を、けしうはあらず、何事も人に劣りてはおひ出でずかし、と思ひ(一一)給ひしかど、思はぬ(一二)人におされぬる宿世になむ、世は思の外なるものと思ひ侍りぬる。この(一三)君をだに、

(一)明石上
(二)明石入道が延喜帝の正統を傳へたるをいふ
(三)明石上
(四)源も彼人の琵琶を特に感心して
(五)音曲は合奏してこそ上手にもなるに、獨奏にて上達せるは珍らし
(六)彈き給へと
(七)左手にて押すこと
(八)明石上は運上きのみならずけしからずよき人と見ゆ
(九)源が年たけて迄持たざりし女子を生みて自身育てゝ卑しくするを嫌ひ紫に讓れる仕方など如何にも批難なき人物と聞く
(一〇)弘徽殿
(一一)「思ひ給へしかど」の誤なるべし
(一二)秋好に壓倒されたる運の惡さに
(一三)雲非雁

(一)まだ子供らしくは見ゆれど何をしたか知れたものでは無い
(二)兩人共逢はれぬを歎くならん
(三)よくも整はず成熟の後はさぞと思はるゝ書風にて
(四)夕霧と雲井雁と
(五)斷々と誰も訴へ出る者はあらず、見て見ぬ振するなるべし
●頭中將雲井雁と夕霧との仲を悟る
(六)源や頭中の就任披露の宴會
(七)秋はなほ夕まぐれこそ唯ならね荻の上風萩の下露
(八)頭中
(九)雲井雁を呼びて
(一〇)大宮、雲井の祖母
(一一)奥床しき
(一二)琵琶の彈法を正しく傳へたる人

なめ聞えむ、と見るに、女君こそ何心なく幼くおはすれど、男は、さこそ物げなき程と見聞ゆれ、おほけなくいかなる御中らひにありけむ。餘處々々(一)になりては、(二)これをぞしづ心なく思ふべき。まだ片(三)おひなる手のおひさき美しきにて、書(四)き交し給へる文どもの、心幼くて、おのづから落ち散る折あるを、御方の人は、ほのぼの知れるもありけれど、何(五)かは、斯くこそと誰にも聞えむ、見かくしつゝあるなるべし。

(六)所々の大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬる頃、時雨うちして、荻(七)の上風もたゞならぬ夕暮に、大宮の御方に、內(八)の大臣參り給ひて、(九)姫君わたし聞え給ひて、御琴など彈かせ奉り給ふ。宮(一〇)はよろづの物の上手におはすれば、いづれも傳へ奉り給ふ。頭中「琵琶こそ、女のしたるに憎き樣なれど、(一一)らうらうしきものに侍れ。今の世(一二)に實しう傳へたる人、をさをさ侍らずなりにたり。何の親王、くれの源氏」など數へ給ひて、頭中「女の中には、太政大臣の、山

餘人、大人びつゝ物し給ふも、次々になり出でつゝ、劣らず榮えたる御家のうちなり。(一)女は女御と今一所となむおはしける。(二)わかんどほり腹にて、あてなる筋は(三)劣るまじけれど、その母君、按察の大納言の北の方になりて、さし向ひたる子どもの數多くなりて、(四)それにまぜて後の親に讓らむ、いとあいなしとて、とり放ち聞え給ひて、(五)大宮にぞ預け聞え給へりける。(六)女御には、いとこよなく思ひおとし聞え給へれど、人がらかたちなど、いと美しうぞおはしける。(七)くわざの君ひとつ所にて生ひ出で給ひしかど、おの〳〵十に餘り給ひて後は、(八)御方ことにて、睦じき人なれど、男子にはうちとくまじきものなり、と父大臣聞え給ひて、氣遠くなりにたるを、幼心地に思ふ事なきにしあらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊の追從をも、(九)懇切にまつはれありきて、志を見え聞え給へば、いみじう思ひかはして、(一〇)けざやかには今も恥ぢ聞え給はず。(一一)御後見どもも、何かは、若き御心どちなれば、年頃見ならひ給へる御あはひを、俄にも、いかゞはもて離れはした

(一)其中女子は、雲井雁と名づく
(二)雲井雁の母は王孫にて
(三)弘徽殿に
(四)頭中の娘を繼父たる按察大納言の手にかくるは快からずとて
(五)葵の母
(六)父が雲井雁を弘徽殿よりは輕く思へど
(七)夕霧
(八)別々の住居にて
(九)夕霧が雲井に附纏ひて
(一〇)強ちに對面せざるにもあらず
(一一)兩方の侍女等も子供心に睦じくし來れるを俄に引離すでもあるまいと

㊄ 秋好中宮となる、雲井雁と夕霧との相思
(一) 皇后冊立あるべき所
(二) 秋好
(三) 藤壺も秋好に冷泉の世話を賴み置きし事もあれば、其を口實に秋好皇后たるべしと源も推薦す
(四) 藤壺と秋好引續き
(五) 皇后たるべき順序なるに其沙汰なきは如何と
(六) 紫の父
(七) 前々よりの志望にて女御として入內せり
(八) 女王の女御、秋好も式部卿の女も共に
(九) 式部卿方にて皇后たらん事を主張する理由
(一〇) 同じ王女御を皇后にする位ならば藤壺の緣ある者を取るが至當
(一一) 秋好皇后となる
(一二) 今迄と打て變りて
(一三) 源氏
(一四) 頭中
(一五) 源が頭中に
(一六) 頭中は
(一七) 榊卷にあり

かくて、后居給ふべきを齋宮(二)の女御をこそは、母君(三)も御後見とゆづり聞え給ひしかばと、大臣(一)も託け給ふ。源氏(四)のうちしきり后に居給はむこと、世の人免し聞えず。弘徽殿の、まづ人(五)より先に參り給ひにしも如何など、うち〳〵に、此方彼方に心よせ聞ゆる人々、覺束ながり聞ゆ(六)。兵部卿宮と聞えし、今は式部卿にて、この御時にはましてやむごとなき御覺にておはする御女(七)、本意ありて參り給へり。同じごと王女御(八)にて侍ひ給ふを、同じくは(九)、御母かた(一〇)にて親しくおはすべきにこそ、母后のおはしまさぬ御かはりの、後見にとことよせて、似つかはしかるべくと、とり〴〵に思し爭ひたれど、なほ梅壺(一一)居給ひぬ。御幸の、かく引きかへ(一二)勝れ給へりけるを、世人驚き聞ゆ。大臣(一三)、太政大臣にあがり給ひて、大將(一四)、內大臣になり給ひぬ。世の中の事どもまつりごち給ふべく、讓り(一五)聞え給ふ。人柄(一六)いとすくよかに、きら〳〵しくて、心もちゐなどもかしこく物し給ふ。學問を立ててし給ひければ、塞韻(一七)には負け給ひしかど、公事にかしこくなむ。腹々に御子ども十

に身(一)をかへたると思へば、まして行くさきは、竝(二)ぶべき人なき御覺にぞあらむかし。

大學(三)に參り給ふ日は、寮門に、上達部(四)の御車ども數しらず集ひたり。大方世に殘りたる人あらじと見えたるに、(五)またなくもてかしづかれて、繕はれ入りたまへる冠者の君の御樣、げに(六)かゝる交らひには堪へず、あてに美しげなり。例(七)の怪しき者どもの立ち交りつゝ來居たる座の末を、辛しと思すぞ、いと理なるや。こゝにても、又(八)おろしのゝしる者どもありて、めざましけれど、少(九)しも臆せず讀み果て給ひつ。(一〇)昔覺えて大學の榮ゆる頃なれば、上中下の人、我も〳〵とこの道に志し集まれば、いよ〳〵世の中に、才(一一)ありはかゞ〳〵しき人多くなむありける。文人(一二)擬生などいふなる事どもよりうちはじめ、すが(一三)〳〵しうしはて給へれば、偏に心に入れて、師も弟子もいとゞ勵みまし給ふ。殿(一四)にも文作りしげく、博士才人ども所えたり。すべて何事につけても、道々の才の程、顯るゝ世になむありける。

(一)今でさへ生れ變りたる樣に思へば
(二)大內記の御覺は無雙なるべし
(三)寮試の當日
(四)列席の爲
(五)非常に大事にされて扶け導かるゝ夕霧の樣
(六)學生の仲間たるには不似合に
(七)風采卑陋なる儒者等の末座に就くを夕霧が不平に思ふも尤なり
(八)儀式を亂る者を叱る者ども
(九)夕霧が
(一〇)今は昔の大學の盛時にも劣らぬ程大學の繁榮する時なれば
(一一)學問ありて役に立つ人
(一二)文章生と擬文章生
(一三)早速に資格を得て通過したれば
(一四)源邸に詩會度々催されれ

(一)源の前にて
(二)頭中將
(三)試驗官の儒者に試問せらるべき
(四)多岐なる意義を辨解し
(五)試問の箇所一つも殘らず試問の箇處には是から是迄としるしをつけ置く也
(六)天才なり
(七)我父存命ならば如何に嬉しかるらん
(八)今迄人の老い行くを笑ひしに、子の生長につれて親の耄碌するは手もなく今の我身の上ぢや
(九)涙を
(一〇)大内記が醉ばらひたる顏
(一一)大内記はすね者にて
(一二)源が見込む所ありて

て、(一)まづわが御前にて試せさせ給ふ。例の(二)大將、左大辨、式部の大輔、左中辨などばかりして、御師の大内記を召して、史記の難き卷々、寮試受けむに、(三)博士のかへさふべき節々を引き出でて、一わたり讀ませ奉り給ふに、至らぬ隈なく、(四)かたがたに通はし讀み給へる樣、(五)爪じるし殘らず、あさましきまで有難ければ、(六)然るべきにこそおはしけれと、誰もゝゝ涙おとし給ふ。大將はまして、(七)「故大臣おはせましかば」と、聞え出でて泣き給ふ。殿も心強うもてなし給はず、源「(八)人の上にてかたくなりと見聞き侍りしを、子の大人ぶるに親の立ちかはり痴れ行くことは、幾許ならぬ齡ながら、かゝる世にこそ侍りけれ」など宣ひて、(九)おし拭ひ給ふを見る御師の心地、嬉しく面目ありと思へり。大將盃さし給へば、(一〇)いたう醉ひしれてをる顏つき、いと瘦々なり。(一一)世のひがものにて、才の程よりは用ゐられず、助なくて身貧しくなむありけるを、(一二)御覽じうる所ありて、かく取分き召し寄せたるなりけり。身に餘るまで御顧みを賜はりて、この君の御德に、たちまち

(一) 知りもせぬ事口眞似するは憎らしければと

四 入學、寮試 ●

(二) 命名式に引續きて大學に入學せしめ
(三) 二條東院内に夕霧の部屋をあてがひ
(四) 夕霧が
(五) 源が斯く計らひたる趣意を説明す、大宮が夕霧を寵愛して
(六) 大宮の處へ
(七) 夕霧が引込り居る故退屈して父を恨みて
(八) 夕霧の心
(九) 此樣な苦をせずとも
(一〇) 夕霧は一體の人柄眞面目にて
(一一) 我慢して
(一二) 人交
(一三) 大學寮の試驗、之に及第すれば擬文章生になる

て誦じさわぎしかど、女のえ知ら(一)ぬことまねぶは、憎きことをと、うたてあれば漏しつ。

うちつゞき(二)、入學といふ事させ給ひて、やがてこの院(三)の内に御曹子作りて、まめやかに才深き師にあづけ聞え給ひてぞ、學問せさせ奉り給ひける。大宮の御許にも、をさ〳〵參う(四)で給はず。晝夜(五)うつくしみて、なほ兒のやうにのみもてなし聞え給へれば、彼處にては、え物習ひ給はじとて、靜なる所に籠め奉り給へるなりけり。月に三度ばかりを參り(六)給へとぞ、許し聞え給ひける。つと(七)籠り居給ひて、いぶせきまゝに、殿を、(八)つらくもおはしますかな、(九)かく苦しからでも、高き位にのぼり、世に用ゐらるゝ人はなくやはある、と思ひ聞え給へど、(一〇)おほかたの人柄まめやかに、あだめきたる所なくおはすれば、いと能く念じて、(一一)いかで然るべき書ども疾く讀みはてて、まじらひ(一二)もし、世にも出でたゞむと思ひて、たゞ四五月の中に、史記などいふ書は、讀みはて給ひてけり。いまは寮試(一三)うけさせむと

む」と宣ひて、御簾の内に隱れてぞ御覽じける。數定まれる座に着きあまりて、(一)歸りまかゞづる大學の衆どもあるをきこしめして、釣殿の方に召しとゞめて、殊に物など賜はせけり。事果ててまかゞづる博士、才人ども召して、又々文(二)作らせ給ふ。上達部殿上人も、(三)さるべき限をば、皆とゞめ侍はせ給ふ。博士の人々は四韻、(四)ただの人は、大臣をはじめ奉りて、絶句作り給ふ。興ある題の文字選りて、文章博士奉る。短きころの夜なれば、明けはててぞ講ずる。(五)左中辨講師仕う奉る。容貌いと淸げなる人の、聲づかひ物々しく神さびて讀みあげたる程、いとおもしろし。おぼえ心ことなる博士なりけり。(六)かゝる(七)高き家に生れ(八)給ひて、世界の榮花にのみ戲れ給ふべき御身をもちて、窓の螢をむつび、枝の雪をならし給ふ、志の勝れたるさまを、萬の事によそへ擬らへ(九)て、心々に作り集めたる、句ごとに面白く、唐土にも持てわたり傳へまほしげなる世の文どもなりとなむ、その頃世に賞でゆすりける。大臣の御(一〇)はさらなり。親めき哀なる事さへ勝れたるを、涙おとし

(一)座席不足して
(二)詩
(三)詩文の嗜ある人々
(四)律詩、八句の詩
(五)披講とて讀みあぐること
(六)左中將は人望特に重き儒者
(七)今夜の賀詩の趣
(八)夕霧が
(九)螢雪の苦學を敢てする志
(一〇)源の御作は勿論傑作なり



とえり出して、瓶子なども取らせ給へれど、筋異(一)なりけるまじらひにて、右大將、民部卿などの、おふな〳〵(二)土器とり給へるを、(三)あさましう咎め出でつゝおろす。儒者「(四)おほし垣下あるじはなはだ非常に侍りたうぶ。(五)かくばかりのしるしとある某を知らずして、朝廷には仕う奉りたうぶ。甚だ鳴呼なり」などいふに、人々皆ほこ(六)ろびて笑ひぬれば、また、儒者「鳴高し。(七)鳴止まむ。はなはだ非常なり。(八)座をひきて立ちたうびなむ」など、威しいふもいとをかし。見ならひ給はぬ人々は、珍らしく興ありと思ひ、(九)この道より出で立ち給へる上達部などは、したり顔にうち微笑みなどしつゝ、(一〇)かゝる方ざまを思し好みて、志し給ふがめでたき事、と限なく思ひ聞え給へり。(一一)いさゝか物いふをも制す。無禮なりとても咎む。かしがましうのゝしり居る顔ども(一二)も、夜に入りてはなか〳〵、今少し掲焉なる(一三)火影に、猿樂がまし(一四)くわびしげに人わろけなるなど、樣々に、げにいとなべてならず、樣異なるわざなりけり。大臣は、源「いとあざれ(一五)、かたくななる身にて、けうさうし惑はされな

(一)慣れぬ式作法故
(二)辛うじて盃を受くる
(三)儒者が見咎めて叱る
(四)總ての主人方の取持の人々甚だけしからぬ、「たうぶ」は「給ふ」の轉
(五)斯程光榮ある拙者を知らずして各方は朝廷に仕へらるゝか
(六)相好をくづして
(七)やかましい
(八)退去せよ、「たうび」は「給ひ」
(九)大學出身の公卿は
(一〇)源が學問を好みて
(一一)儒者が人の話するを叱る
(一二)儒者の
(一三)晝よりも明なる
(一四)滑稽に卑陋に醜く見ゆるなど
(一五)我如き不眞面目にて我儘なる者は叱り飛ばされるに違なし、「けうさう」は「警策」の轉音なるべし

(一)大將、左衛門督の子どもなどを、我よりは下﨟と思ひ貶したりしだに、皆各加階しのぼりつゝ、およずけあへるに、淺黃をいと辛しと思はれたるが、心苦しう侍るなり」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、源「いと(二)およずけても恨み侍るなりな。いとはかなしや。(三)この人のほどよ」とて、いとうつくしと思したり。源「學問などして、少し物の心も得侍らば、その恨はおのづから解け侍りなむ」と聞え給ふ。

(四)字つくることは、(五)東の院にてし給ふ。東の對をしつらはれたり。上達部殿上人、(六)珍らしくいぶかしき事にして、我も〳〵と集ひ參り給へり。(七)博士どももなか〳〵臆しぬべし。源「憚る所なく、例あらむに任せて、(八)なだむることなく、嚴しう行へ」と仰せ給へば、(九)強ひてつれなく思ひなして、(一〇)家より外に求めたる裝束どもの、うちあはず頑しき姿などをも、恥なく、面もち、聲づかひ、(一一)うべ〳〵しくもてなしつゝ、座に就き竝びたる作法より初め、(一二)見も知らぬ樣どもなり。若き君達は、え堪へずほゝゑまれぬ。(一三)さるは物笑などすまじく、すぐしつゝ、靜まれる限を

(一)頭中將兄弟の子等を前には夕霧が下輩と侮り居しを何れも出世して大人びたるに、自分が六位なるをつらく思へるが可愛そう
(二)高慢ちやくれて
(三)彼の年輩では分らぬも尤

㊂ 字つくる式

(四)夕霧に
(五)二條東院
(六)字を附くる事は普通は儒者の家に限りてする事なればなり
(七)命名式を行ふ爲に呼ばれたる儒者等
(八)源の子なりとて容赦せず式通りに行へ
(九)儒者等が平氣を裝ひて
(一〇)借著の不揃にて變ちきなる姿をも恥ぢず
(一一)尤らしく構へて
(一二)見た事もない儀式
(一三)此儀式に與る役人としては皆眞面目にて年寄れる人々を擇びて酌をもさせたれども

きて侍る。高き家の子として、官爵心にかなひ、世の中盛に驕りならひぬれば、學問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむ覺ゆべかめる。戲遊を好みて、心のまゝなる官爵に上りぬれば、時に隨ふ世の人の、下には(一)鼻まじろきをしつゝ、追從し、氣色とりつゝ隨ふほどは、おのづから(二)人と覺えて、やむごとなき樣なれど、時うつり、(三)然るべき人に立ち後れて、世衰ふる末には、人に輕め侮らるゝに、(四)かゝり所なきことになむ侍る。なほ(五)才を本としてこそ、(六)大和魂の世に用ひらるゝ方もつよう侍らめ。さし當りては、(七)心もとなき樣に侍りとも、終の世のおもしとなるべき心おきてを習ひなば、侍らずなりなむ後も、後安かるべきによりなむ、たゞ今は、(八)はかぐしからずながらも、かくて育み侍らば、せまりたる大學の衆とて、笑ひあなづる人もよも侍らじと思う給ふる」など聞え知らせ給へば、うち歎き給ひて、大宮「(九)實にかくも思し寄るべかりけるを、この大將なども、あまりひき違へたる御事なりと、傾き侍るめるを、この幼心地にもいと口惜しく、

(一)身を動かす事無、嘲笑の意なるべし
(二)人物らしく思はれ
(三)己を保護する人に死なれて
(四)頼み所なき
(五)學問
(六)學問以外の智能
(七)差當りまだるき樣なれども、やがては大臣たるべき器量を養ふ方我死後も安心と思ふ故
(八)不行届ながら我が世話する故、夕霧を貧乏書生と侮る人もあらじと思ふ
(九)成程よき御考なるに倅の頭中將抔も六位は餘りひどいと不賛成なる故夕霧も殘念に思ひ

(一)夕霧未幼稚なるに今己の權勢あるに任せて不次の叙位を行ふも珍しからずとて見合せたり
(二)夕霧元服して六位にて殿上に還り參るを、淺黃は六位の著る袍の色
(三)大宮が源に不足をいひしに
(四)此句よく分らず、誤寫あるべき歟
(五)夕霧を大學にて修業せしめんと思ふ故
(六)むだにする積で
(七)朝廷の御用に立つ樣になれば直に出世すべし
(八)私は
(九)父帝の側に居て
(一〇)延喜帝傳來の琴の道さへ
(一一)智識の狹き間は
(一二)愚父に賢き子あるは
(一三)段々末にならば如何に愚昧にならんかと將來が心配故斯樣に決心いたしました

むと思し、世の人も然ぞあらむと思へるを、まだいときびはなる程を、我が心に任せたる世にて、然ゆくりかならむも、なかなか(一)目馴れたる事なりと思しとゞめつ。(二)淺黃にて殿上に還り給ふを、大宮は飽かずあさましき事と思したるぞ、理にいとほしかりける。御對面ありて、(三)この事聞え給ふに、源「たゞ今かう強にしも、(四)まだきにおひつかすまじう侍れど、思ふ樣侍りて、(五)大學の道に、暫しならはさむの本意侍るにより、今二三年を(六)いたづらの年に思ひなして、おのづから(七)朝廷にも仕う奉りぬべき程にもならば、今人となり侍りなむ。(八)みづからは九重の内に生ひ出で侍りて、世の中の有樣も知り侍らず、(九)晝夜御前に侍ひて、僅になむはかなき書なども習ひ侍りし。たゞ(一〇)畏き御手より傳へ侍りしだに、(一一)何事も廣き心を知らぬ程は、文才をまねぶにも、琴笛の調にも、音足らず、及ばぬ所の多くなむ侍りける。(一二)はかなき親にかしこき子の勝る例は、いと難きことになむ侍れば、まして次々傳はりつゝ、(一三)隔たりゆかむほどの、行くさきいと後めたきによりなむ、思ひ給へお

んごろに聞え給ふも、さるべきにもあらむとなむ思ひ侍る」など、いと古代に(一)聞え給ふを、心づきなしと思して、「槿故宮にも、しか心ごはきものに思はれ(二)奉りて過ぎ侍りにしを、今更に又世に靡き侍らむも、いとつきなき事に(三)なむ」と聞え給ひて、恥かしげなる御氣色なれば、强ひてもえ聞えおもむけ給はず。(四)宮人も上下皆心がけ聞えたれば、世の中いと後めたくのみ思さるれど、(五)かの御自らは、我が心をつくし哀を見え聞えて、人の御氣色の、うちも動がむ程をこそ待ちわたり給へ、(六)さやうにあながちなる樣に、御心破り聞えむなどは思さざるべし。

大殿ばらの若君の、(七)御元服のこと思し急ぐを、(八)二條院にてとおぼせど、(九)大宮の(一〇)いとゆかしげに思したるも理に心苦しければ、なほやがてかの殿にてせさせ奉り給ふ。(一一)右大將殿をはじめ聞えて、(一二)御伯父の殿ばら、(一三)皆上達部のやむごとなき、御覺殊にてのみ物し給へば、(一四)あるじ方にも、我も〳〵とさるべき事ども、とりどりに仕う奉り給ふ。大かた世ゆすりて、(一五)所狹き御いそぎの勢なり。(一六)四位になして

(一)古風に
(二)父にも強情者と思はれて通り來りし位故
(三)不似合なる
(四)勸めず
(五)槿の侍女等も皆源贔屓なれば彼等が源の爲に無理な取持をも試みんかと槿は恐るれども
(六)源は心意氣を見せて槿の心の動くを待つのみにて、無理をして槿の心を破らんとは思はず

◯夕霧の元服

(七)夕霧
(八)源が
(九)源は二條邸にて儀式を擧げんと思へど
(一〇)夕霧の祖母
(一一)左大臣邸
(一二)頭中將
(一三)葵の兄弟
(一四)左大臣邸にても此伯父に當る人々爭ひて世話をやく
(一五)元服式の準備にて大騷ぎなり
(一六)源は夕霧を四位に叙せんと思ひて、親王の子元服すれば從四位下に叙す、之に準ぜんかと思へる也

(一)表向の見舞杯は丁寧にし來りたる間柄なれば
(二)返すべき口實なし
(三)源が機會をはづさず音信する故
(四)女五が權に逢ふ時は
(五)源に靡けと權に勸むる也
(六)源の懸想は事新しき事に非ず
(七)權の父も源が人の聟になりしを嘆きては、是も我が思附に權が無暗に反對せし故ぞと言ひて
(八)葵上存生中は葵の母に憚りて我は口出しせざりき
(九)動す可らざる人、葵上
(一〇)權が源の本妻になりても惡い事はあらじ
(一一)再び昔に返りて源がしつこく權を口説くも緣のあるのであらう

頃も、(一)おほやけざまの折々の御訪などは、聞えならはじ給ひていとまめやかなれば、(二)いかゞは聞えも紛らはすべからむと、もて煩ふべし。女五の宮の御方にも、かやうに(三)折過さず聞え給へば、いと哀に、女五「この君の、昨日今日の兒と思ひしを、かく大人びて訪ひ給ふ事、容貌のいとも清らなるに添へて、心さへこそ人には殊に生出で給へれ」と、譽め聞え給ふを、若き人々は笑ひ聞ゆ。(四)こなたにも對面し給ふ折は、女五「(五)この大臣の、かく懇に聞え給ふめるを、何か、(六)今始めたる御志にもあらず、(七)故宮も、筋異になり給ひてえ見奉り給はぬ歎をし給ひては、思ひ立ちしことを強にもてはなれ給ひし事、など宣ひ出でつゝ、悔しげにこそ思したりし折々ありしか。されど(八)故大殿の姫君物せられし限は、三の宮の思ひ給はむことのいとほしさに、とかく言添へ聞ゆる事も無かりしなり。今はその、やむごとなく(九)えさらぬ筋にて物せられし人さへ亡くなられにしかば、實になどてかは、(一〇)さやうにて御座せましも惡しからまし、とうち覺え侍るにも、(一一)さらがへりて斯くね

(一)侍女等が槿の加茂の齋院たりし當時を思ふ也
(二)源より
(三)今は齋院を退きたれば
(四)今年は祭の禊に引替へて藤衣(喪服)のやつれを改むべき禊をする事にならんとは去年は思はざりき、ふぢ—藤、淵
(五)堅くるしくて
(六)淵(藤)は瀬にかはるの意
(七)源が
(八)除服につきて源が槿の衣裳を結構に拵へて侍女の許迄屆けたるを、槿は外聞を憚れども
(九)艶書でも添へて來たらば斷り様もあるべきが

はつれ〴〵と眺め給ふ。御前なる桂の下風、懐しきにつけても、若き人々は(一)思ひ出づる事どもあるを、(二)大殿より、「(三)御禊の日はいかにのどかに思さるらむ」と、とぶらひ聞えさせ給へり。

源 今日は、

(四)かけきやは川瀬の波もたちかへり君がみそぎのふぢのやつれを

紫の紙、(五)立文すくよかにて、藤の花につけ給へり。折のあはれなれば、御かへりあり。

槿 ふぢ衣著しは昨日とおもふまに今日はみそぎの(六)瀬にかはる世を

はかなく。

とばかりあるを、(七)例の御目とゞめ給ひて見おはす。(八)御服なほしの程などにも、宣旨のもとに、所狭きまで思しやれる事どもあるを、院は見苦しき事に思ほし宣へど、をかしやかに、(九)氣色ばめる御文などのあらばこそ、とかくも聞えかへさめ、年

❶ 源氏、文を槿に贈る
(一)三月藤壺の一週忌
(二)喪服を常服に改めて
(三)四月の初に行ふ
(四)加茂祭、四月中酉日
(五)槿

少女

梗概

❶ 源氏、文を槿の前齋院に贈る。女五宮、源氏に靡かん事を前齋院に勸む。❷ 夕霧元服。夕霧に學問せさすべき源氏の志。❸ 字つくる式。をかしき儒者。❹ 夕霧入學。源氏の面前に於ける寮試の下稽古。寮試。❺ 秋好、中宮となる。源氏太政大臣に、頭中將内大臣に任ぜらる内大臣の女雲井雁と夕霧との相思。❻ 内大臣(頭中將)母大宮を訪ひ、人の噂を立聞して、雲井雁と夕霧との仲を悟る。❼ 内大臣雲井雁の事によりて母大宮を恨む。母子の間の感情の衝突。❽ 夕霧及雲井雁の幼き愁。❾ 内大臣弘徽殿女御を里に下らしめ、雲井雁を其處に同居せしめて、夕霧との中を隔てんとす。幼き離愁。❿ 惟光の娘五節の舞姫をつとむ。夕霧の懸想。惟光の喜。⓫ 夕霧の花散里に對する批評。夕霧、祖母大宮に身の不幸を喞つ。⓬ 朱雀院へ行幸。觀櫻の宴。⓭ 源氏、弘徽殿大后を訪ふ。⓮ 夕霧進士及第。侍從に任ぜらる。⓯ 源氏、六條院を經營す。式部卿宮五十の賀の準備。⓰ 六條院の四區劃(春の御方、夏の御方、秋の御方、冬の御方。⓱ 源氏夫妻、花散里、秋好等六條院に移る。

年かはりて、宮の御はて(一)も過ぎぬれば、世の中色(二)あらたまりて、更衣(三)のほどなども今めかしきを、まして祭(四)の頃は、大かたの空の景色心地よげなるに、前齋院(五)に

（一）一蓮托生とは墓へども藤壺の在處も知らぬ三途川のはとりにて途方にくれる事なるべし、水の瀬―三の瀬（三途の川を三瀬川といふ）

源　なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬ水の瀬にやまどはむ（一）

と思すぞ憂かりけるとや。

みじく口惜しく、胸のおき所なくさわげば、おさへて、涙も流れ出でにけり。(一)今もいみじく濡らし添へ給ふ。女君、如何なる事にかと思すに、うちもみじろかで臥し給へり。

源 とけて寝ぬねざめ淋しき冬の夜に結ぼほれつる夢のみじかさ

なか〳〵飽かず悲しと思すに、疾く起き給ひて、(二)然とはなくて、所々に御誦經などせさせ給ふ。(三)苦しきめ見せ給ふと恨み給へるも、さぞ思さるらむかし、行をしたまひ、よろづに罪かろげなりし御有樣ながら、此一事にてぞ、この世の濁をすゝぎ給はざらむと、物の心を深く思したどるに、いみじく悲しければ、(四)何わざをして、(五)しるべなき世界におはすらむを、とぶらひ聞えにまうでて、罪にもかはり聞えばやなど、つく〴〵とおぼす。(六)かの御爲に、とり立てて何わざをもし給はむは、人とがめ聞えつべし。(七)内裏にも、御心の鬼に思す所やあらむ、と思しつゝむほどに、阿彌陀佛を心にかけて、念じ奉り給ふ。(八)おなじ蓮にとこそは、

(一)夢中にも涙を流したりし也
(二)誰の爲とは言はずに
(三)源の心、藤壺が死後に苦を受くるを恨みしも尤も也、生前佛の勸に身は入れても源と密通の一條によりて解脱も出來ぬならん
(四)どうかして
(五)藤壺は獨り助けてくれる者もなき冥土に暮せるならんに
(六)特に藤壺の爲とてしたらば、何事をしても人怪むべし
(七)冷泉も氣がとがめて思ひ當るならんと憚る故
(八)藤壺と一蓮托生とならん人を慕へどもと歌につゞく

(一)頭をかしげ
(二)髮つき顏つき
(三)藤壺
(四)似たりと思はれて
(五)權に少し分くる愛情
(六)色々の事を思出して昔戀しき雪夜に鴛鴦の音がいよいよ我悲を増す
六 源氏夢に藤壺を見る
(七)藤壺
(八)源が藤壺の姿を
(九)藤壺が
(一〇)源との祕密を源は人に言はじといひしに
(一一)藤壺が死後苦を受くるにつけても
(一二)源が返事をして居ると思ふ中にうなされる心持して
(一三)目さめて

にとりつゝ見そめしより、同じやうに世をつゝましげに思ひて過ぎぬるよ。今はた、互に背くべくもあらず、深うあはれと思ひ侍る」など、昔今の御物語に夜ふけゆく。月いよいよ澄みて、靜かにおもしろし。女君、

紫 こほりとぢ石間の水はゆきなやみ空すむ月のかげぞながるゝ

外を見出して、少し傾き給へる(一)ほど、似る物なく美しげなり。(二)かんざし面樣の、(三)戀ひ聞ゆる人の面かげにふと覺えて(四)、めでたければ、(五)いさゝかわくる御心もとりかへしつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

源(六) かきつめてむかし戀しき雪もよに哀をそふるをしのうきねか

入り給ひても、(七)宮の御事を思ひつゝ大殿籠れるに、夢ともなく(八)ほのかに見奉るを、いみじく(九)怨み給へる御氣色にて、藤壺「もらさじと(一〇)宣ひしかど、うき名の隱なかりければ、恥(一一)かしう苦しきめを見るにつけても、つらくなむ」と宣ふ。(一二)御答聞ゆとおぼすに、おそはるゝ心地して、女君の「こはなど斯くは」と宣ふに、(一三)驚きて、い

（一）朧月夜
（二）輕卒なる事はなき筈の人なるに、源と浮名を立てられたるは怪むべし
（三）朧月夜は
（四）朧月夜の事を然思ふにつけて我が過去を顧れば後悔すべき事多き哉
（五）仇々しき浮氣者は
（六）我は比較的おとなしき男と思ひしに其さへ此の如し
（七）朧月夜
（八）御身が輕蔑する明石上
（九）譯は分つて居そうなれど
（一〇）身分の高下は如何ともすべからざる物なれば
（一一）明石上の氣位高きは疵なりと思ふ
（一二）一向つまらぬ女は我は關係したる事なければ知らず
（一三）花散里
（一四）不相變可憐なり
（一五）あの樣にも又ありにくきもの
（一六）あゝいふ種類の了簡の美しき女として我が惚込みし以來いつも同じ樣に遠慮勝に暮して居る

うざうしきに、何となくとも聞え合せ、我も心づかひせらるべき御あたり、たゞこの一所や、世に殘り給へらむ」と宣ふ。紫「（一）倘侍こそは、らう〳〵しく故々しき方は人にまさり給へれ。（二）あさはかなる筋など、もてはなれ給へりける人の御心を、怪しくもありける事どもかな」と宣へば、源「然かし。なまめかしう容貌よき女の例には、（三）なほ引き出でつべき人ぞかし。（四）さも思ふには、いとほしく悔しきことの多かるかな。まいて、（五）うちあだけ好きたる人の、年積り行くまゝに、いかに悔しきこと多からむ。（六）人よりはこよなき靜けさと思ひしだに」など、宣ひ出でて、（七）かんの君の御事にも、涙少しはおとし給ひつ。源「この、（八）數にもあらず貶しめ給ふ山里の人こそは、身の程にはやゝうち過ぎ、（九）物の心など得つべけれど、（一〇）人により異なるべきものなれば、（一一）思ひあがれる樣をも見けちて侍るかな。（一二）いふかひなき際の人はまだ見ず。人は勝れたるは難き世なりや。（一三）東の院にながむる人の心ばへこそ、（一四）古りがたくらうたけれ。（一五）然はた更にえあらぬものを、（一六）さる方につけての心ばせ人

(一)慾ばれども
(二)一部の童女等は
(三)常に語る詞
(四)藤壺
(五)雪の山は珍らしからぬものなれど
(六)藤壺の人となりが思出されて
(七)藤壺は引込勝で
(八)藤壺が内裏に在りし頃我を頼りにせられたり
(九)我も藤壺を力にして
(一〇)相談せしに
(一一)藤壺が表立ちて才能を現はしたる事は無けれど
(一二)物怖ろしがる風なれど
(一三)何というても藤壺の姪だけに性質藤壺に似ては居れど
(一四)やかましい所
(一五)きかぬ氣の勝つて居るので困る
(一六)種の性質は又別也
(一七)寂しき時の話相手にし、我も彼も互に氣を張りて趣味ある交際をすべき女は今では此人だけなるべし

轉ばさむと、(一)ふくつけがれど、えも押し動かさで侘ぶめり。(二)かたへは、東の妻戸などに出で居て、心もとなげに笑ふ。

源「(三)一年、(四)中宮の御前に雪の山造られたりし、(五)世に古りたることなれど、なほ珍らしくもはかなき事をしなし給へりしかな。何の折々につけても、(六)口惜しう飽かずもあるかな。(七)いと氣遠くもてなし給ひて、くはしき御有樣を見馴らし奉りし事はなかりしかど、(八)御まじらひの程に、後やすきものには思したりきかし。(九)うち頼み聞えて、とある事かゝる折につけて、何事も聞え通ひしに、(一〇)もて出でて、らうらうじき事も見え給はざりしかど、いふかひありて、思ふ樣に、(一一)はかなき事わざをもしなし給ひしはや。世に又さばかりの類ありなむや。やはらかに(一二)おびれたるものから、深う由づきたる所の、ならびなく物し給ひしを、君こそは、(一三)さいへど紫のゆゑこよなからず物し給ふめれど、(一四)少し煩はしき氣そひて、(一五)かど〱しさのすゝみ給へるや苦しからむ。(一六)前齋院の御心ばへは、又樣ことにぞ見ゆる。(一七)さ



日慰め聞え給ふ。

雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつゝ、松と竹との差別(一)をかしう見ゆる夕暮に、(二)人の御容貌も光まさりて見ゆ。源「時々につけても、人の心をうつすめる、花紅葉の盛よりも、冬の夜のすめる月に雪の光りあひたる空こそ、怪しう色なきものの身にしみて、此世の外の事まで思ひ流され、面白さも哀さも残らぬなりなれ。(四)すさまじき例に言ひ置きけむ人の心淺さ(三)よ」とて、御簾巻きあげさせたまふ。月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、しをれたる前栽のかげ心(五)苦しう、遣水もいといたう咽び(六)て、池の氷もえもいはず凄きに、童おろして、雪まろばしせさせ給ふ。をかしげなる姿、頭つきども、月にはえて、大きやかに(七)馴れたるが、さまぐ〳〵の衵(八)亂れ著、帯しどけなき宿直姿なまめいたるに、こよなう(九)餘れる髪のすゑ、白き庭には、ましてもてはやしたる、いとけざやかなり。小き(一一)は、童げて喜びはしるに、扇なども落して(一〇)、うちとけ顔をかしげなり。いと多う

㊄ 雪轉ばし、源氏藤壺以下の人柄を評す
(一) 雪に埋れて其特色を發揮したるが面白き也
(二) 源氏
(三) 思ひやられ
(四) すさまじき物は老女のけはひ冬の月」の諺
(五) 可愛そうにて
(六) 氷りて流れ兼たる様
(七) なり大きく物馴れたる童が
(八) 童女の衣
(九) 丈よりも長き
(一〇) 見ばえある
(一一) 小き童は子どもらしく

源「宮(一)亡せ給ひて後、上のいとさう〳〵しげにのみ世を思したるも、心苦しう見奉り、太政大臣(二)も物し給はで、見ゆづる人なき事しげさになむ。この程の絶間などを、見習はぬこと(三)に思すらむも理に哀なれど、今は(四)さりとも心のどかにおぼせ。大人び給ひたゞめれど、まだいと思ひやりもなく、人の心も見知らぬ様に物し給ふこそらうたけれ」など、まろがれたる(五)御額髪ひきつくろひ給へど、いよ〳〵背きて物も聞え給はず。源「いといたく若び給へるは、誰(六)がならはし聞えたるぞ」とて、常(七)なき世にかくまで心おかるゝも味氣なのわざや、と且はうちながめ給ふ。源「齋院(八)にはかなしごと聞ゆるや、もし思し僻む方ある。それはいと持(九)て離れたることぞよ。(一〇)おのづから見給ひてむ。昔よりこよなう氣遠き(一一)御心ばへなるを、さうざうしき折々、(一二)たゞならで聞えなやますに、彼處もつれ〴〵に物し給ふ所なれば、たまさかの御答などし給へど、まめ〳〵しき(一三)様にもあらぬを、斯くなむあるとしもうれへ聞ゆべき事にやは。後(一四)めたうはあらじとを思ひ直し給へ」など、日一

(一)藤壺
(二)葵上の父も歿して公務を任すべき人なく忙しき故繁々外泊もする
(三)ついぞ無き事と
(四)いくら家をあけても安心して居れ
(五)涙にかたまりたる紫の髪を源が直してやる
(六)誰の仕込ぞ
(七)源の心、何時迄連添へるか知れぬ此世で、紫に斯迄恨まれてはつまらぬ
(八)槿に冗談をいふのを勘違へをして居るのか
(九)色戀には縁遠き
(一〇)自然と分る事ぢや
(一一)ひどく遠慮深い
(一二)色氣を見せてからかふに
(一三)本氣の沙汰では無いのに、斯樣々々と其方に話すでも無い
(一四)氣遣はなしと

(一)立派な源が權に親切をつくす故

四　紫上の嫉妬、源氏の機嫌取

(二)權が戀しくてたまらぬといふに非ざれども
(三)權の強情が忌々しく
(四)源の身の上が
(五)酸いも甘いも嚙みわけて功を經たりと自ら信ずる故
(六)今更の浮氣沙汰は恥辱の種とは知れども、此儘指をくはへて引込むも器量が惡し
(七)每夜留守にするを
(八)紫は棄て置かれぬと思ふ
(九)紫が情を押へ居ても
(一〇)源が紫の

御心づかひし給ひつゝ、やうく御行をのみし給ふ。御兄弟の君達数多ものし給へど、ひとつ御腹ならねば、いと疎々しく、宮の内いと幽かになりゆくまゝに、(一)さばかりめでたき人の、懇に御心を盡し聞え給へば、皆人心をよせ聞ゆるも、ひとつ心と見ゆ。

大臣は、(二)あながちに思し入らるゝにしもあらねど、(三)つれなき御氣色のうれたきに、負けて止みなむも口惜しく、げにはた(四)人の御有樣の、世のおぼえ殊におらまほしく、物を深く思し知り、世の人の(五)とあるかゝる差別も聞き集め給ひて、昔よりもあまた經まさりて思さるれば、(六)今さらの御仇氣も、かつは世のもどきをも思しながら、空しからむはいよく人わらへなるべし、如何にせむ、と御心動きて、二條院に(七)夜がれかさね給ふを、(八)女君は、戯れにくゝのみ思す。(九)忍び給へど、如何うちこぼるゝ折もなからむや。源「怪しく例ならぬ御氣色こそ、心得がたけれ」とて、(一〇)御髪をかきやりつゝ、いとほしと思したる樣も、繪に畫かまほしき御あはひなり。

(一)飽迄振附けられて一つ話にもされさうな我身の上を人に漏すこと勿れ
(二)「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へて我名漏すな」「いさら」は「いさや」の誤歟
(三)槿はなぜあの樣にすげなく應答するならん
(四)源が輕々しく無理な所業はせぬ人なるに
(五)槿の心、源の人となりをも心をも知らぬに非ざれども、靡く樣に返事せば通常の女の源に惚れると同樣に見られるならん
(六)我心の輕い處を源に見つけられさうで
(七)色よい返事をする氣になれぬ
(八)一通りの源の手紙に對する返事は怠らずし、談話も取次に言はする位の事はすべし
(九)齋院として佛に遠ざかりし罪
(一〇)源の戀に對して振りもぎる樣な態度を示すも却て目だちて人の噂に上るかも知れぬと

て出で給ふも、いと若々しき心地し給へば、源「いと(一)かく世の例になりぬべき有樣、漏し給ふなよ、ゆめ〳〵。(二)いさら川なども馴れ〳〵しや」とて、切にうち囁き語らひ給へど、何事にかあらむ。人々も、「あなかたじけな。(三)あながちに情後れても、もてなし聞え給ふらむ。(四)輕らかにおし立ちてなどは見え給はぬ御氣色を、心苦しう」といふ。げに人の程のをかしきにも、哀にも思し知らぬにはあらねど、物思ひ知る樣に見え(五)奉るとて、おしなべての世の人の、めで聞ゆらむつらにや思ひなされむ、かつは(六)輕々しき心の程も見知り給ひぬべく、恥かしげなめる御有樣をと思せば、(七)懷かしからむ情もいとあいなし、(八)餘所の御返などはうち絶えで、覺束なかるまじき程に聞え給ひ、人傳の御答はしたなからで過してむ、年頃(九)しづみつる罪失ふばかり御行を、とは思し立てど、俄にかゝる(一〇)御事をしも、もてはなれ顏にあらむも、なか〳〵今めかしき樣に見え聞えて、人のとりなさじやはと、世の人の口さがなさを思し知りにしかば、かつは侍ふ人にもうちとけ給はず、いたう

（一）眞面目に口說きて
（二）憎いとても直接に言ひてくれなば其を思切るしほにすべし
（三）眞劍に
（四）權の心
（五）權も源も
（六）權の父式部卿が源に嫁せしめん積なりしを
（七）色戀の沙汰は不似合な晩年の今更になりて
（八）源が
（九）丸で振附けなどはせず、人傳に返事をするので氣がもめる
（一〇）君が昔つれなかりしに懲りぬ我心を泣つらく思ふ
（一一）「戀しさも心づからのわざなれば置所なくもてぞ煩ふ」
（一二）言ひ捨つる
（一三）權の返事せぬは傍で見て居られぬと侍女等返事をすゝめる
（一四）君も舊の如く我に心をかけらるゝ由なれば我も今更心を改めて君に從ふべきに非ず

思し出でられてをかしくなむ。今宵はいとまめやかに聞えたまひて、源「一言、（一）憎しなども、人傳ならで宣はせむを、思ひ絶ゆる節にもせむ」（二）と、おり立ちてせめ聞（三）え給へど、昔（四）我（五）も人も若やかに罪免されたりし世にだに、故宮（六）などの心よせ思したりしを、猶あるまじく恥かしと思ひ聞えてやみにしを、世（七）の末にさだすぎ、つきなき程にて、一聲もいとまばゆからむ、と思して、更に動きなき御心なれば、あさましうつらしと思ひ聞え給ふ。（八）さすがにはしたなく、さし放ちてなどはあらぬ、（九）人傳の御返などぞ心やましきや。夜もいたう更け行くに、風のけはひ烈しくて、まことにいと物心ぼそく覺ゆれば、樣よき程におし拭ひ給ひて、

源「つれなきをむかしにこりぬ心こそ人のつらさに添へてつらけれ（一〇）

心づからの」（一一）と宣ひすさぶるを、（一二）げにかたはらいたしと人々例の聞ゆ。（一三）

權「あらためて何かは見えむ人のうへにかゝりと聞きし心ばかりを

昔に變ることは習はず」（一四）と聞え給へり。言ふかひなくて、いとまめやかに怨じ聞え

すら亡くなり給ひ、あるはかひなくて、(一)はかなき世にさすらへ給ふもあンべかンめり、入道の宮などの御齢よ、(二)あさましとのみ思さるゝ世に、(三)年のほど身の残すくなげさに、心ばへなども、物はかなく見えし人の、いきとまりて、のどやかに行をもうちして過しけるは、なほすべて定なき世なり、と思すに、物哀なる御氣色を、(四)心ときめきに思ひて、若やぐ。

内侍 年經れどこのちぎりこそ忘られね(五)親のおやとかいひし一言

と聞ゆれば、疎ましくて、

源 (六)「身をかへて後も待ち見よこの世にて親を忘るゝ例ありやと

たのもしき契ぞや。(七)今のどかにぞ聞えさすべき」とて立ち給ひぬ。

西面には(八)御格子參りたれど、厭ひ聞えがほならむもいかゞとて、一間二間はおろさず。月さし出でて、薄らかに積れる雪の光にあひて、なか〳〵いと面白き夜の樣なり。ありつる老らくの(九)心げさうも、(一〇)よからぬものの世のたとひとか聞きしと、

(一)つまゝぬ暮をする
(二)若死せし事の淺ましく思はるゝ世に
(三)源内侍の如き年もより心もつまらぬ女が却て生き殘り
(四)内侍は我を思ひての事と胸をゝどらせて
(五)「親の親と思はましかばとひてましわが子の子にはあらぬなるべし」の詞によりて祖母殿の仇名を思ひて言へるなるべし、この一子の、此の
(六)子が親を忘るゝ事は無きもの故死後にも必ず逢ふべし
(七)やがて緩々御目にかゝるべし
(八)槿の方は既に戸締りしたれど、源を厭ふ樣に見えては惡しとて
(九)源内侍の
(一〇)枕冊子に、「すさまじき物、老女のけはひ冬の月」といへるは、當時の諺なりしなるべし

(一)源が
(二)源內侍なり
(三)我が此處にあるを御存じならんと
(四)人數に思召し下さらぬは恨めし
(五)私に名をつけて
(六)桐壺帝時代の事は
(七)「しなてるや片岡山の飯に飢ゑてふせる旅人あはれ親なし」源の父母なきよりいふ
(八)源內侍が
(九)齒のまばらなる
(一〇)あまえたる物言ひ
(一一)ふざけんと
(一二)引歌未詳、人の老をのみ言ひ居る中に我身の老となりたるを嘆く意なるべし
(一三)氣恥かしさよ
(一四)源の心、假に年がよつたでもあるまいに
(一五)以下源の心、源內侍の若盛の頃

ふほどもなく、鼾とか、聞き知らぬ音すれば、(一)喜びながら立出で給はむとするに、又いと古めかしき咳嗽うちして、(二)參りたる人あり。內侍「かしこけれど、(三)聞召したらむと賴み聞えさするを、(四)世にある者とも數まへさせ給はぬになむ。院の上は、(五)祖母殿と笑はせ給ひし」など、名のり出づるにぞ思し出づる。源內侍のすけといひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にて行ふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知り給はざりつるを、あさましうなりぬ。源「(六)その世の事は、皆昔語になり行くを、遙に思ひ出づるも心細きに、うれしき御聲かな。(七)親なしにふせる旅人とはぐくみ給へかし」とて、寄り居給へる御けはひに、(八)いとゞ昔思ひ出でつゝ、古りがたくなまめかしき樣にもてなして、いたう(九)すげみにたる口つき思ひやらるゝ聲づかひの、さすがに(一〇)舌つきにて、(一一)うちざれむとは猶思へり。內侍「(一二)いひこし程に」など聞えかゝる(一三)まばゆさよ。(一四)今しも來たる老のやうになど、ほゝゑまれ給ふものから、ひきかへこれも哀なり。(一五)このさかりにいどみ給ひし女御更衣、あるはひた



(一)西門が正門なれば
(二)源は來ちじと
(三)せき込みて出て來り
(四)源の心
(五)又「三年」ともあり、何れにしても何を感慨せるにや不詳
(六)我は此世を棄て得ず
(七)引いたりしやくつたりして
(八)女五宮方に
(九)女五宮が
(一〇)源が耳にも留らず
(一一)宵の内から睡がること

ぞ、あたら御疵なゝめる。輕々しきことも出で來なむ」などつぶやきあへり。宮には、北面の人繁き方なる御門は、入り給はむも輕々しければ、(一)西なるが事々しきを、人入れさせ給ひて、宮の御方に御消息あれば、今日しも(二)渡り給はじと思しけるを、驚きてあけさせ給ふ。御門守寒げなるけはひ、(三)うすゞき出で來て、頓にもえ開けやらず。これより外の男はた無きなるべし。ごほ／＼と引きて、錠のいといたく銹びにければ、開かず」と憂ふるを、あはれと聞しめす。(四)昨日今日と思す程に、(五)三十年のあなたにもなりにける世かな、斯かるを見つゝ、(六)かりそめの宿をえ思ひすてず、木草の色にも心をうつすよ、と思し知らる。口ずさびに、

源　いつのまに蓬がもととむすぼほれ雪ふる里と荒れしかき根ぞ

やゝ久しくひこじろひ(七)開けて入り給ふ。(八)宮の御方に、例の御物語聞え給ふに、古事どものそこはかとなきうちはじめ、(九)聞え盡し給へど、(一〇)御耳も驚かず、ねぶたきに、宮も欠伸うちし給ひて、女五(一一)「宵まどひをし侍れば、物もえ聞えやらず」と、宣

惱ましくし給ふなるを、訪ひ聞えになむ」とて、つい居給へれば、(一)見もやり給はず。若君をもてあそび紛はしおはする、(二)そばめのたゞならぬを、源「怪しく御氣色の變れる頃かな。(三)罪もなしや。(四)しほやき衣のあまり目馴れ、見立なく思さるゝにやとて、(五)とだえ置くを、又いかゞ」など聞え給へば、紫「(六)馴れ行くこそげに憂き事多かりけれ」とばかりにて、うち背きて臥し給へるは、見捨てゝ出で給ふ道物憂けれど、(七)宮に御消息聞え給ひてければ、出で給ひぬ。(八)斯かりける事もありける世を、(九)うらなくて過しけるよと、思ひ續けて臥し給へり。(一〇)鈍たる御衣どもなれど、色あひ重り好ましくなかく〳〵見えて、雪の光にいみじく艶なる御姿を(一一)見出して、(一二)まことに離れまさり給はばと、忍びあへず思さる。御前など(一三)忍びやかなるかぎりして、源「(一四)内裏より外のありきは物憂き程になりにけりや。桃園の宮の心細きさまにて物し給ふも、(一五)式部卿の宮に年頃は讓り聞えつるを、(一六)今は賴むなど思し宣ふも、理にいとほしければ」など、人々にも宣ひなせど、(一七)「いでや(一八)御すき心のふり難き

(一)紫が
(二)横顏の樣子穩ならぬ
(三)怒られる覺は無い
(四)「須磨の蜑の鹽燒衣馴れゆけば疎くのみこそなり勝りけれ」
(五)わざと內裏に泊りなどするのに、其を又不快に思ふか
(六)前の引歌の詞を直に用ひたり、仰の通り馴れ行けば次第につらき事が多くなる
(七)女五宮に訪問の約束せし故
(八)紫の心
(九)今迄何の隔なく思ひて暮せし事よ
(一〇)源の服裝、喪服
(一一)紫が見遣りて
(一二)實際源が我方に寄附かぬ樣にならば如何に悲しからん
(一三)內々の供する者のみを連れて
(一四)參內以外の出あるきは
(一五)今迄は女五宮の世話を任せおきしに
(一六)源を賴むと女五が
(一七)人々の私語
(一八)御浮氣のやまぬのが

はしたなくもあゝべいかなと、(一)年頃の御もてなしなどは、立並ぶ方なく、さすがにならひて、人に押し消たれむことなど、人知れず思し歎かる。(二)かきたえ名殘なき樣にはもてなし給はずとも、いと物はかなき樣にて、見馴れ給へる年頃のむつび、侮らはしき方にこそはあらめなど、樣々に思ひ亂れ給ふに、(三)よろしき事こそ、うち怨じなど憎からず聞え給へ、(四)まめやかにつらしと思せば、色にも出し給はず。(五)端近うながめがちに、內裏住繁くなり、役とは御文を書き給へば、(六)げに人の言は空しかるまじきなゝめり、(七)氣色をだにかすめ給へかしと、疎ましくのみ思ひ聞え給ふ。

冬つ方、(八)神事などもとまりてさうざうしきに、徒然と(九)思し餘りて、五の宮に例の近づき參り給ふ。雪うち散りて艶なる黄昏時に、なつかしき程に馴れたる御衣どもを、いよいよ(一〇)たきしめ給ひて、心ことにけさうじ暮し給へれば、(一一)いとゞ心弱からむ人はいかゞと見えたり。さすがに(一二)まかり申し、はた聞え給ふ。源「女五の宮の

(一)年來第一に重んぜられ來りて今更他人に蹴落されるは殘念
(二)紫の心、其既には源に丸て我を棄てられずとも、つまらぬ狀態になり年來馴染みたる丈に輕んぜらるゝならんなどと
(三)一通りの事は愛婿を失はず悋氣もすれど
(四)槿の事は心からつらく思ふ故
(五)源の樣子
(六)紫の推量
(七)夫となくても知らせてくれればよいに
㊂ 源氏又槿齋院を訪ふ
(八)諒闇中故十一月の神事廢められて
(九)源が槿の事を
(一〇)香を
(一一)愈美しくて心弱き人は靡かずには居られぬ
(一二)單に暇乞だけはする

（一）平凡なる男にさへ直に靡く權の侍女等は、源をば自分の方から挑み兼ぬ位に褒めちぎれども
（二）權は
（三）雙方とも色戀など不似合の年齡地位にて
（四）場合をはづさぬ御返事さへ
（五）權が
（六）昔も今も同樣なる權の心強さを
（七）源が
（八）人の噂する詞、源は權を口説く爲に女五宮にも好意を表する也、源と權は似合の中ならん
（九）紫上
（一〇）源が我に打明けぬ筈なし
（一一）注意して見ると源の樣子のそは〳〵したるに心配になり
（一二）眞實の戀なるを殊更に戲の樣に源がごまかしたるならんと
（一三）權と紫と異腹の姉妹
（一四）權は地位重ければ
（一五）源の心權に傾かば

迎へつゝ語らひ給ふ。（一）侍ふ人々の、さしもあらぬ際の事をだに靡きやすなるなどは、あやまちもしつべくめで聞ゆれど、（二）宮はそのかみだにこよなく思し離れたりしを、今はまして、（三）誰も思ひなかるべき御齡おほえにて、はかなき木草につけたる（四）御かへりなどの折過さぬも、輕々しくやとりなさるらむなど、（五）人の物いひを憚り給ひつゝ、うちとけ給ふべき御氣色もなければ、（六）古りがたく同じさまなる御心ばへを、世の人にかはり、珍らしくも、（七）ねたくも思ひ聞え給ふ。世の中に漏り聞えて、「（八）前齋院に懇に聞え給へばなむ、女五の宮などもよろしく思したゝなり。似げなからぬ御あはひならむ」など言ひけるを、（九）對の上は傳へ聞き給ひて、暫しは、然りとも然樣ならむこともあらば、（一〇）隔てては思したらじと思しけれど、うちつけに（一一）目とゞめ聞え給ふに、御氣色なども、例ならずあくがれたるも心憂く、（一二）まめまめしく思しなるらむことを、つれなく戲れにいひなし給ひけむよと、（一三）同じすぢには物し給へど、（一四）覺ことに、昔よりやむごとなく聞え給ふを、（一五）御心などうつりなば、

(一)年來戀ひ慕ふ我心を察しては下さるならん
(二)源の手紙の趣
(三)返事せぬも情知らずの樣なるべしと
(四)返事を勸むる故
(五)我は晩秋に凋落せる朝顏の花に似たり
(六)御文に甘く比較されたりと思ふにつけても
(七)源が手を離し難く
(八)喪中の手紙、青黑色の紙に書きたる也
(九)墨色だけは
(一〇)飾られて
(一一)平常時はよく思はれる手紙も、語り傳ふるに及びては眞相を失ふ事もありて書き損ひよく分らぬ事も多し
(一二)源の心
(一三)艶書を書く事も不似合
(一四)槿が丸で相手にならぬでもなく從ひもせぬを
(一五)逆戻りして熱心に挑む
(一六)二條院の
(一七)槿の侍女

年頃(一)のつもりも哀とばかりは、然りとも思し知るらむやとなむ、かつは。

など聞え給へり。大人び給へる御文(二)の心ばへに、(三)おぼつかなからむも見知らぬ樣にやと思し、人々も御硯とりまかなひて聞ゆれば(四)、

槿(五)「秋はてて霧の籬にむすぼほれあるかなきかにうつるあさがほ

似(六)つかはしき御よそへにつけても、露けく。

とのみあるは、何のをかしき節もなきを、如何なるにかおき(七)難く御覽ずめり。(八)青鈍の紙のなよびかなる墨(九)つきはしも、をかしく見ゆめり。人の御ほど、書き樣などにつくろ(一〇)はれつゝ、(一一)その折は罪なきことも、つきづ\しうまねびなすには、ほほゆがむ事もあゝめればこそ、さかしらに書き紛らはしつゝ、覺束なき事も多かりけり。立ち(一二)かへり今更に若々し(一三)き御文書なども、似げなき事と思せど、猶かく昔よりもて(一四)はなれぬ御氣色ながら、口惜しくて過ぎぬるを、思ひつゝえ歇むまじく思さるれば、更(一五)がへりてまめやかに聞え給ふ。東(一六)の對に離れおはして、宣旨(一七)を



るを」など、淺はかならず打歎きて立ち給ひつ。源「齡(一)のつもりには、面なくこそなるわざなりけれ。(二)世に知らぬやつれを、(三)今ぞとだに聞えさすべくやは、もてなし給ひける」とて出で給ふ名殘、(四)所狹きまで例の聞えあへり。大方の空もをかしき程に、(五)木の葉の音なひにつけても、(六)過ぎにしものの哀とり返しつゝ、その折々、をかしくもあはれにも、深く見え給ひし(七)御心ばへなども思ひ出で聞えさす。(九)心やましくて立ち出で給ひぬるは、まして寢覺がちに(八)思し續けらる。疾く御格子(一〇)まゐらせ給ひて、朝霧を(一一)ながめ給ふ。枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに蔓ひ纒はれて、あるかなきかに咲きて、匂も殊にかはれるを、折らせ給ひて奉(一二)れ給ふ。

源「(一三)けざやかなりし御もてなしに、人わろき心地し侍りて、うしろでいとゞいかゞ御覧じけむとねたく。されど、

(一四)見しをりの露忘られぬあさがほの花のさかりは過ぎやしぬらむ

(一)年をとると恥をかゝせられるものぢや
(二)君故に例なき迄やつれし此姿を出て見給へと申上ぐる事さへ出來ぬ疎々しき御もてなし
(三)君が門今ぞ過ぎ行く出でて見よ戀する人のなれる姿を
(四)侍女等がうるさく譽めあへり
(五)九月末なれば風の音の寂しき也
(六)過去を思出して
(七)源の
(八)權が
㊁源氏之を權に贈る、紫上の嫉鬪
(九)物足らずして歸りたる源は
(一〇)上げさせて
(一一)源が
(一二)權へ
(一三)きつぱりと他人向きなる御待遇に見つともなき心持してすご／＼歸りたる後姿を何と見られしかと
(一四)昔見て以來今に忘れ得ぬ君は今如何、早く逢ひ見たし

勞(一)などはしづかにや定め聞えさすべう侍らむ」と、聞え出し給へり。(二)實にこそ定(三)め難き世なれど、はかなき事につけても思しつゞけらる。

源「人知れず神のゆるしを待ちしまにこゝらつれなき世をすぐすかな(四)

今(五)は何のいさめにかかこたせ給はむとすらむ。なべて世に(六)煩はしきことさへ侍りし後、樣々に(七)思ひ給へあつめしかな。いかで片端をだに(八)」と、あながちに聞え給ふ。御用意(九)なども、昔よりも今少しなまめかしきけさへ添ひ給ひにけり。さるはいといたう過し給へど、(一〇)御位の程にはあはざめり。

槿「なべて世のあはればかりをとふからに誓ひしこ神いとやさとめむ(一一)

とあれば、源「あな心憂。(一二)その世の罪は、皆科戸の風にたぐへてき」と宣ふ愛敬もこよなし。源「みそぎを神はいかゞ侍りけむ(一三)」など、はかなき事を聞ゆるも、まめやかにはいとかたはらいたし。(一四)世づかぬ御有樣は、年月にそへても、物深くのみひき入り給ひて、え聞え給はぬを、(一五)見奉りなやめり。源「すきずきしき樣になりぬ(一六)

(一)年來の御心盡の價値は追て定むべきものならん
(二)取次に言はせたり
(三)源の心
(四)槿が齋院をやむる時を待つ内に、強ひて何氣なき顏をして經る月日が多くたつた事ぢや
(五)齋院をやめたる今は何の故障に託して免れんとするぞ
(六)須磨へ退去せし事
(七)色々と煩悶せり
(八)一端でも漏したし
(九)源の
(一〇)年はとりたれども位に合せては若々し
(一一)只一通りの御見舞に來て下されし譯なるに、其樣な仰ならば神の咎を受くべしといふ意歟
(一二)昔の齋院時代の我罪は既に滅したり
(一三)「戀せじとみたらし川にせし御禊神は受けずもなりにける哉」
(一四)色氣はなれたる槿は
(一五)源に返事せぬを侍女どもが扱ひにくがれり
(一六)今日の御見舞は色戀の意味ではなかりしに

親しく見奉り給ふを羨み侍る。(一)この亡せ給ひぬるも、さやうにこそ悔い給ふ折々ありしか」と宣ふにぞ、少し耳とまり給ふ。源「(二)さも侍ひ馴れなましかば、今に思ふさまに侍らまし。皆さし放たせ給ひて」と、うらめしげに(三)氣色ばみ聞え給ふ。(四)あなたの御前を見遣り給へれば、枯れ〲なる前栽の心ばへも殊に見渡されて、のどやかに眺め給ふらむ御有様容貌もいとゆかしく哀にて、(五)え念じ給はで、源「かく侍ひたる序を過し侍らむは、(六)志なき様なるを、(七)あなたの御とぶらひ聞ゆべかりけり」とて、やがて(八)簀子より渡り給ふ。暗うなりたる程なれど、(九)鈍色の御簾に、黒き御几帳の透影あはれに、追風なまめかしく吹きとほし、けはひあらまほし。(一〇)簀子はかたはらいたければ、南の廂に入れ奉る。(一一)宣旨對面して、(一二)御消息きこゆ。源「(一三)今さらに若々しき心地する御簾の前かな。(一四)神さびにける年月の勞數へられ侍るに、今は内外も許させ給ひてむとぞ頼み侍りける」とて、飽かず思したり。(一五)權「ありし世は皆夢になして、今なむ醒めてはかなきにやと、思ひ給へ定め難く侍るに、

(一)式部卿宮も權を源に嫁すればよかりしと時々後悔せり
(二)權を妻にしたならば今も慕ふ儘に親しくすべきに、此方の人々は誰も誰も我を疎みなされたればつらし、權への恨を含めたり
(三)意味を籠めて
(四)權の室
(五)趣も特に面白く思はれ
(六)權に對して薄情なる
(七)權を御見舞申すべきであつた
(八)廊下つゞきにて
(九)喪中なれば也
(一〇)源を縁に置くは氣の毒なれば
(一一)侍女
(一二)權の詞を取次ぐ
(一三)我如き年輩の者は簾中に入れらるべき筈なるに
(一四)年來の心盡しを思へば奥まで自由に出入するを許さるゝならんと思ひたり
(一五)父を失ひし悲に昔は夢の如く、今は現なりや辨へ難き所故

めなき世を同じさまにて見給へすぐす、命長さのうらめしき事多く侍れど、かくて(一)世に立ちかへり給へる御悦になむ、ありし年頃を見奉りさしてましかば、口惜しからましと覚え侍る」と、うち戦き給ひて、女五「(二)いと清らにねびまさり給ひにけるかな。童に物し給へりしを見奉りそめし時、世にかゝる光の出でおはしたること驚かれ侍りしを、時々見奉るごとに、ゆゝしく覚え侍りてなむ。(三)内裏の上なむいとよく似奉らせ給へると、人々聞ゆるを、(四)さりとも劣り給へらむとこそ、推し量りはべれ」と、長々と聞え給へば、ことに(五)斯くさし向ひて人の譽めぬわざかな、とをかしく思す。源「(六)山賤になりて、いたう思ひくづほれ侍りし年頃の後、こよなく衰へにて侍るものを、内裏の御容貌は、古の世にも竝ぶ人なくやとこそ、(七)ありがたく見奉り侍れ。(八)怪しき御おしはかりになむ」と聞え給ふ。女五「(九)時々見奉らば、(一〇)いとゞしき命や延び侍らむ。今日は老も忘れ、うき世のなげき皆醒めぬる心地なむ」とても、又泣い給ふ。女五「(一一)三の宮羨ましく、(一二)さるべき御ゆかりそひて、

(一) 源の再び世に出でたるを悦ぶにつけて、源が落魄中に自分が死したらば遺憾なりしと思ふ
(二) 年とりて段々美しうなられた
(三) 冷泉がよく源に似たりと
(四) 何というても源には劣れるならんと思ふ
(五) 面と向つて褒める人も無いものぢやと
(六) 年來田舍者になりて愚痴になりて以來
(七) 珍らしく
(八) 我に劣れりとはけしからぬ御推量
(九) 源を
(一〇) 老迫れる命
(一一) 葵上の母
(一二) 姪の聟といふ縁で源に親しきを

給ひける。程もなく荒れにける心地して、哀にけはひしめやかなり。宮對面し給ひ(一)て、御物語聞え給ふ。いと舊めきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。このか(二)みにおはすれど、故大殿の宮(三)は、あらまほしく古り(四)がたき御有樣なるを、もては(五)なれ、聲ふつゝかに、こち〴〵しく(六)覺え給へるもさるかたなり(七)。女五「院(八)の上崩れ給ひて後、よろづ心ぼそく覺え侍りつるに、年の積るまゝに、いと涙がちにて過しはべるを、この宮さへ(九)かく打棄て給へれば、いよ〳〵あるかなきかにとまり侍(一〇)るを、かく立寄り訪はせ給ふになむ、物忘れしぬべく(一一)侍る」と聞え給ふ。かしこくも古り給へるかなと思へど(一二)、うち畏まりて、源「院崩れ給ひて後は、樣々につけて、同じ世のやうにも侍らず。覺えぬ罪にあたり侍りて、知らぬ世(一三)に惑ひ侍りしを、たま〳〵おほやけに數まへられ(一四)奉りては、又とりみだり(一五)暇なくなどして、年頃も、參りていにしへの御物語をだに聞え承らぬを、いぶせく思ひ給へ渡りつゝなむ」など聞えたまふを、女五「いとも〳〵あさましく、何方(一六)につけても定

(一)女五が源に
(二)女五には姉なれども
(三)葵上の母、桐壺帝第三女
(四)若々しき
(五)女三は打て變りて
(六)無骨に
(七)其は其で又一種の人物
(八)桐壺帝
(九)式部卿宮薨去
(一〇)生き殘れるを
(一一)憂を忘るべし
(一二)非常に年寄られし事かなと
(一三)見た事もなき田舍
(一四)人がましく朝廷に召されて後は
(一五)取紛れ
(一六)樣々の變遷を我は不相變の樣にて傍觀し來れる

槿

梗概

㊀源氏、女五宮を訪ふに託して槿の前齋院を訪ふ。源氏の懸想。㊁源氏文を槿に贈る。紫上の取越苦勞。㊂冬の夜、源氏又女五宮を訪ふに託して槿の前齋院を訪ふ。源内侍の尼になれるに遇ふ。㊃紫上の嫉妬。源氏の御機嫌取。㊄雪轉ばし。源氏紫上と、藤壺、槿、朧月夜、明石上、花散里の人柄を評す。㊅源氏夢に藤壺を見る。

㊀源氏槿の前齋院を訪ふ
(一)槿の齋院、父式部卿宮の喪によりて解職
(二)一旦思ひかけたる女を思切らぬ癖
(三)槿
(四)源がうるさく附纏ひし事を
(五)源が
(六)槿の自邸
(七)故式部卿の同胞、槿の伯母
(八)女五宮の見舞を口實に源が出かける
(九)女五宮等
(一〇)源が此人々と
(一一)槿と女五宮と

齋院(一)は、御服にて下り居給ひにきかし。大臣、(二)例の思しそめつること絶えぬ御くせにて、御訪などいとしげう聞え給ふ。宮、(三)煩(四)はしかりしことを思せば、御返りもうちとけて聞え給はず。いと口惜しと思(五)しわたる。九月になりて、桃園(六)の宮に渡り給ひぬるを聞きて、女五(七)の宮の其處におはすれば、そ(八)なたの御訪に託けてまうで給ふ。故院の、この(九)御子たちをば心殊にやむごとなく思ひ聞え給へりしかば、今(一〇)も親しくつぎ／＼に聞えかはし給ふめり。同じ寢殿の西東にぞ住み(一一)

（一）源に逢へば稀の逢瀨のつらいなりに流石縁の薄からぬを思ひて
（二）明石上が愁に堪へぬ
（三）源も手こずる
（四）大堰川の鵜船の篝火
（五）明石にて斯かる景色に馴れざりしならば
（六）明石の漁火を思出さしむる彼の篝火は、我身の憂きを名に負へる浮船がどこ迄も我身に附纏ふなるべし
（七）明石の漁火と思ひ違へる
（八）其方が頻ち嘆くは我が深き心を知らざるならん
（九）「うたかたも思へば悲し世の中を誰憂きものと知らせそめけん」「誰憂きものと」とありしを下の「と」脫ちたるなるべし
（一〇）嵯峨の御堂の佛事
（一一）大堰に長逗留になりたれば明石上も稍愁を忘れしならん

ひぬべし。まして見奉るにつけても、（一）つらかりける御契の、さすがに淺からぬを思ふに、なかなかにて（二）慰め難き氣色なれば、こしらへかね給ふ。（三）いと木しげき中より、（四）篝火どものかげの、遣水の螢に見えまがふもをかし。源（五）「かゝる住居にしほじまざらましかば、珍らかに覺えまし」と宣ふに、

明石（六）「いさりせしかげ忘られぬかゞり火は身のうきふねや慕ひ來にけむ

（七）思ひこそまがへられ侍れ」と聞ゆれば、

源「淺からぬしたのおもひを知らねばや（八）なほかゞり火の影はさわげる

（九）誰憂きもの」とおしかへし恨み給ふ。大かた物靜に思さるゝ頃なれば、（一〇）たふとき事どもに御心とまりて、（一一）例よりは日ごろ經給ふにや、すこし思ひまぎれむとぞ。

り顔に、答へ聞えけるも悔しう恥かしと、(一)御心ひとつに物むづかしうて惱ましげにさへし給ふを、(二)いとすくよかにつれなくて、常よりも親がりありき給ふ。(三)女君に、源「女御の秋に心をよせ給へりしもあはれに、君の、春の曙に心しめ給へるも理にこそあれ。時々につけたる木草の花によせても、御心とまるばかりの遊びなどしてしがな。公私の營しげき身こそ(四)ふさはしからね、いかで思ふ事してしがなと、(五)たゞ御ためさうぐしくやと思ふこそ、心苦しけれ」など語らひ聞え給ふ。

(六)山里の人も、いかになど絶えず(七)思しやれど、(八)所せさのみまさる御身にて、渡り給ふ事いとかたし。(九)世の中を味氣なく憂しと思ひ知る氣色、などかさしも思ふべき、(一〇)心やすく立ち出でて、おほぞうの住居はせじと思へるを、おほけなしとは思すものから、いとほしくて、(一一)例の不斷の御念佛にことづけて(一二)渡り給へり。(一三)住み馴るゝ儘に、いと心すごげなる所のさまに、(一四)いと深からざらむことにてだに、あはれ添

(一)煩悶して病氣の樣にさへなれるを
(二)源は氣強く平氣に構へて
(三)紫上
(四)斯かる企には不適當なれども
(五)是も其方が寂しからんと氣の毒に思ふ故なり
(六)明石上
(七)源が
(八)物事手重くばかりなる身の上故
(九)源の心、明石上は身を恥ぢて悲觀して居る樣なるが、其樣な筈は無い
(一〇)氣輕に出かけて平凡に取扱はれて居るのはいやと明石上が思へるはしやらくさいとは思へども
(一一)嵯峨の御堂の
(一二)源が大堰へ
(一三)大堰邸の樣
(一四)此體を見ては愛情の薄き中にても情が加はる筈

(一)秋好が疎ましく思ふ
(二)秋好がそろ〳〵と逃込む
(三)斯うは無いものぢや
(四)憎まれたらば
(五)退出
(六)源の
(七)秋好が
(八)戸締して
(九)梅が香を櫻の花に匂はせて柳が枝に咲かせてしがな」
(一〇)紫の方
(一一)源の心、無理なる戀に心を苦しむる癖が今にやまぬ事よと
(一二)源の心、秋好を戀するは不似合の事也
(一三)青年時代の戀は
(一四)自ら慰むる
(一五)戀路につきては前後を思慮する分別が附いて來たわい
(一六)秋好

なまめかしきも、心づきなう(一)ぞ思しなりぬる。(二)やはらづつひき入り給ひぬる氣色なれば、源「あさましうも疎ませ給ひぬるかな。まことに心深き人は、(三)斯くこそあらざンなれ。よし、今より憎ませ給ふなよ。(四)つらからむ」とて(五)渡り給ひぬ。うちしめりたる御(六)にほひの留りたるさへ、(七)疎ましく思さる。人々御格子など(八)參りて、「この御裀の移香、言知らぬものかな。いかでかく取り集め、(九)柳が枝にさかせたる御有樣ならむ。ゆゝし」と聞えあへり。

(一〇)對にわたり給ひて、頓にも入り給はず、いたうながめて、端近う臥し給へり。燈籠とほくかけて、近く人々侍はせ給ひて、物語などせさせ給ふ。(一一)かうあながちなる事に胸塞がるくせの、猶ありけるよと、我ながら思し知らる。(一二)これはいと似げなき事なり、怖ろしう罪深き方は、多く勝りけめど、(一三)いにしへの好は、思ひやりすくなき程のあやまちに、佛神も免し給ひけむと(一四)思しさますを、(一五)なほこの道はうしろやすく、深き方のまさりけるかなと思し知らせ給ふ。(一六)女御は秋のあはれを知

(一)趣を解し得る位に
(二)春秋何れを好み給へるぞ
(三)私如き者が
(四)「いつとても戀しからずはあらねども秋の夕は怪しかりけり」
(五)故母御息所逝去の時節なれば秋がなつかしく思はる
(六)わざと理窟を避けてつまらぬ事を據にして秋の優れる由をいふも
(七)君も秋を好むならば人知れず秋を非常に哀がる我心を察し給へ、戀情をほのめかせる也
(八)秋好が何と返事の仕樣がなし
(九)默するに忍びず、昔戀の叶はざりし恨を言ふ
(一〇)今一歩踏込みたる擧動もし兼ねざれども
(一一)女がけしからん事と思ふも道理なり

狹き垣根の内なりとも、その折々の心見知る(一)ばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘りうつして、徒なる野邊の蟲をも棲ませて、人に御覽ぜさせむと思ひ給ふるを、(二)いづかたにか御心よせ侍るべからむ」と聞え給ふに、いと聞えにくき事と思せど、無下に絶えて御答聞え給はざらむもうたてあれば、秋好「(三)まして如何思ひわき侍らむ。げに何時となき中に、(四)あやしと聞きし夕こそ、(五)はかなう消え給ひにし露のよすがにも、思ひ給へられぬべけれ」と、(六)しどけなげに宣ひ消つもいとらうたげなるに、え忍び給はで、

源「(七)君もさはあはれをかはせ人知れず我身にしむる秋のゆふかぜ

忍び難きをり〳〵も侍りかし」と聞え給ふに、(八)いづこの御答かはあらむ。心得ずと思したる御氣色なり。このついでに、(九)え籠め給はで恨み聞え給ふ事どもあるべし。(一〇)今少しひがごともし給ひつべけれども、(一一)いとうたてと思いたるもことわりに、我が御心も若々しうけしからず、と思しかへして、うち歎き給へる樣の、物深う

(一)我が一門を秋好の力にて繁昌せしめて、秋好の腹に皇子を多く生みてなどの意なるべし
(二)我が死後も遺族を顧み給へ
(三)心をとられて
(四)重大なる望はさて置き
(五)愉快と思ふ事がありたし
(六)「ころ」は「こと」の誤ならんといふ
(七)成程と思はれる位にはつきりしたる判定
(八)「逢春不遊樂、恐是無心人」白樂天の句
(九)「春は唯ひとへに花の咲くばかり物の哀は秋ぞまされる」

ひ紛はし給ひつ。源「今はいかで長閑やかに、生ける世のかぎり、思ふこと殘さず、後の世のつとめも心に任せて、籠り居なむと思ひ侍るを、この世の思ひ出にしつべき節の侍らぬこそ、さすがに口惜しう侍りぬべけれ。數ならぬ幼き人の侍る、生先いと待遠なりや。辱くともなほ(一)この門廣げさせ給ひて、(二)侍らずなりなむ後にも、かずまへさせ給へ」など聞え給ふ。御答はいとおほどかなる樣に、辛うじて一言ばかりかすめ給へるけはひ、いとなつかしげなるに、(三)聞きつきて、しめじめと暮るゝまでおはす。源「(四)はかばかしき方の望はさるものにて、年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空の氣色につけても、(五)心の行く事も侍りにしがな。春の花の林、秋の野のさかりをなむ、昔よりとりどりに人爭ひ侍りける、その(六)ころの(七)げにと心よるばかり、あらはなる定こそ侍らざなれ。唐土には、(八)春の花の錦に如くものなしと言ひ侍るめり、やまと言の葉には、(九)秋のあはれをとり立てて思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目うつりて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へ侍らね。

あまだ侍りし中に、遂に心も遂げず、(一)むすぼほれて止みぬる事二つなむ侍る。まづ一つは、この過(二)ぎ給ひにし御事よ。(三)あさましうのみ思ひつめて止み給ひにしが、永き世のうれはしき節と思ひ給へられしを、(四)斯うまでも仕う奉り御覽ぜらるゝをなむ、なぐさめに思う給へなせど、(五)燃えし煙のむすぼほれ給ひけむは、なほいぶせうこそ思ひ給へらるれ」とて、今一つは(六)宣ひさしつ。源「中ごろ身(七)の無きに沈み侍りし程、(八)かたゞゝに思ひ給へしこと、かたはしづつ叶ひにたり。東の院にものする(九)人の、(一〇)そこはかとなくて、心苦しう覺え渡り侍りしも、(一一)穩しう思ひなりにて侍り。(一二)心ばへの憎からぬなど、我も人も見給へあきらめて、いとこそ爽かなれ。かく立ちかへり、(一三)おほやけの御後見仕う奉る喜びなどは、さしも心に深く染まず。かやうなる好がましき方は、しづめ難うのみ侍るを、(一五)おぼろげに思ひ忍びたる御(一四)後見とは、思し知らせ給ふらむや。哀とだに宣はせずば、いかにかひなく侍らむ」と宣ふ。(一六)むづかしうて、御答もなければ、源「さりや。(一七)あな心憂」とて、他事に言

(一)胸が晴れずして
(二)六條御息所
(三)御息所が源を恨みつめて死したるが盡きぬ遺憾なりしに
(四)斯く秋好の世話をするをせめての慰と思へど
(五)「結ぼほれ燃えし烟をいかゞせん君だにかけよ長き契を」
(六)言ひかけてやめたり、秋好に心をかけて遂げざりし事なるべし
(七)見る影もなく須磨に流離せし時
(八)色々と
(九)花散里
(一〇)便りなくて
(一一)今は安心せり
(一二)花散の氣立のよきは誰もよく理解して
(一三)冷泉の後見役をつとめる
(一四)秋好入内の世話はせずには居られぬ
(一五)大抵の我慢でする世話ではなきを知り給へりや、我が最初思ひ懸けたる女なれば也
(一六)秋好が面倒に思ひて
(一七)果して然り

もかき續け思し出でられて、御袖もぬれつゝ、女御の御方にわたり給へり。(一)こまやかなる鈍色の御直衣姿にて、世の中の騷がしきなど託け給ひて、(二)やがて御精進なれば、珠數ひきかくして、御樣よくもてなし給へる、盡せずなまめかしき御有樣にて御簾の内に入り給ひぬ。御几帳ばかりを隔てて、(三)みづから聞え給ふ。源「前栽どもこそ殘りなくひもとき侍りにけれ。(四)いと物すさまじき年なるを、心やりて(五)時知り顏なるも、あはれにこそ」とて、柱により居給へる夕ばえ、いとめでたし。昔の御事ども、かの野の(六)宮にたち煩ひし曙などを、聞え出で給ふ。いと物哀と思したり。宮も「かくれば(八)」とにや、少し泣き給ふけはひ、いとらうたげにて、う(七)ち身じろき給ふ程も、あさましくやはらかに、なまめきでおはすべかゝめる。(九)見奉らぬこそ口惜しけれと、胸うちつぶるゝぞうたてあるや。(一〇)源「過ぎにし方、(一一)殊に思ひ悩むべきこともなくて侍りぬべかりし世の中にも、なほ心から、すきずきしき事につけて、物思ひの絶えずも侍りけるかな。(一二)さるまじき事どもの心苦しきが、

(一)源が
(二)實は藤壺の爲に引續きての精進
(三)秋好と直接の對話
(四)花咲き
(五)花のみは
(六)源が秋好を野宮に尋ねし時の事、榊の卷に出づ
(七)源が
(八)我が思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖の先づしをるらん」
(九)源の心
(一〇)記者の評語
(一一)別に心配もなくて居られた時分にも、心から女に附ての心配が多かつた
(一二)無理な戀路の氣がもめるのが多かりし中に

なほ思しめぐらすに、故宮(二)の御ためにもいとほしう、又上のかく思し惱めるを、
見奉り(一)給ふもかたじけなきに、誰かゝる事を漏し奏しけむと、あやしう思さる。
(三)命婦は御匣殿のかはりたる所(四)にうつりて、曹司賜はりて參りたり。大臣對面し給ひて、源「(五)この事を、もし物のついでに、露ばかりにても漏し奏し給ふ事やありし」と、(六)案内し給へど、命婦「更にかけても(七)聞し召さむことを、いみじき事に思召して、(八)かつは罪獲ることにやと、上の御ためを、なほ思し召し歎きたりし」と聞ゆるにも、(九)一方ならず心深くおはせし御有樣など、盡せず戀ひ(一〇)聞え給ふ。

(一一)齋宮女御は、思しよもしるき御後見にて、やむごとなき御おぼえなり。御用意ありさまなども、思ふ樣にあらまほしう見え給へれば、辱き(一二)ものにもてかしづき聞え給へり。秋のころ二條院(一三)にまかで給へり。(一四)寢殿の御しつらひ、いとゞかゞやくばかりし給ひて、今は(一五)むげの親ざまにもてなして、あつかひ聞え給ふ。秋の雨いと靜に降りて、御前の前栽のいろ／＼亂れたる露のしげさに、(一六)いにしへの事ど

(一)源が
(二)冷泉が彼の祕密を知れりとすれば藤壺の爲にも氣の毒也、冷泉の苦悶を見るも勿體なし、一體誰が密奏したるならん
(三)王命婦
(四)跡に移りて
(五)例の祕密を藤壺が
(六)問へども
(七)一寸でも冷泉に知られん事を藤壺が恐れ
(八)一面には冷泉に知らせずして、冷泉をして親子の禮を失ふの罪を犯さしむるに當るとて
(九)藤壺の思慮深きを
(一〇)源が
(九)秋好の宿下り、源氏春秋の優劣を秋好に問ふ
(一一)秋好は源の推測通りよき冷泉の世話役にて寵遇厚し
(一二)源が
(一三)秋好が
(一四)秋好を置く爲に
(一五)全くの親氣取で
(一六)御息所や秋好との従來の關係など

秋の司召に、(一)太政大臣になり給ふべき事、うち〳〵に定め申し給ふ序になむ、帝思し寄するすぢの事、漏し聞え給ひけるを、大臣いとまばゆく怖ろしう思して、(二)更にあるまじきよしを申し返し給ふ。源「故院の御志、あまたの御子達の御中に、取りわきて思召しながら、位を譲らせ給はむ事をば思しめし寄らずなりにけり。(三)何か、その御心改めて、及ばぬ際にはのぼり侍らむ。たゞ(五)もとの御掟のまゝに、おほやけに仕う奉りて、(四)今少しの齢かさなり侍りなば、(六)のどかなる行に籠り侍りなむと思ひ給ふる」と、(七)常の御言の葉にかはらず奏し給へば、いと口惜しうなむ思しける。太政大臣になり給ふべき定あれど、(八)しばしと思す所ありて、たゞ(九)御位そひて、牛車ゆるされて参りまかでし給ふを、帝飽かず辱きものに思ひ聞え給ひて、なほ親王になり給ふべきよしを思し宣はすれど、(一〇)世の中の御後見し給ふべき人なし。(一一)権中納言、大納言になりて、右大将かけ給へるを、(一二)今ひときはあがりなむに、何事も譲りてむ、さて後に、ともかくも(一三)靜なるさまに、とぞ思しける。

(八) 冷泉帝位を源氏に譲らんとす、源氏の疑惑
(一) 源が
(二) 源に位を譲らんと思へる旨を漏したるに
(三) 特に御寵愛はありながら
(四) 至尊の位に上らんや
(五) 桐壺の定められし如く
(六) 出家して靜に佛いじりを仕事にせん
(七) いつも言ひ居る通りに
(八) 今暫く元の儘にてと
(九) 陞位して牛をかけたる儘内裏の門迄車を寄する事を許されて
(一〇) 親王は太政大臣たる資格なければ也
(一一) もとの頭中將、以下源の心
(一二) 頭中が今一階昇進したらば政務一切を任せん
(一三) 我は閑地に就かん

だ大方の事どもを、常より殊に懐かしう聞えさせ給ふ。(一)うちかしこまり給へる樣にて、いと(二)御氣色ことなるを、かしこき人の御目には、あやしと見奉り給へど、いと斯く(三)さだ〳〵と聞し召したらむとは思さざりけり。(四)上は、王命婦に委しき事問はまほしう思し召せど、(五)今更に、(六)しか忍び給ひけむ事知りにけりと、かの人にも思はれじ、たゞ大臣にいかでほのめかし問ひ聞えて、前々(七)斯る事の例はありけむや問ひ聞かむとぞ思せど、更に序もなければ、いよ〳〵御學問をせさせ給ひつつ、樣々に書どもを御覽ずるに、唐土には、顯はれても忍びても、(八)亂りがはしき事いと多かりけり。日本には、さらに御覽じ得る所なし。たとひ有らむにても、かやうに忍びたらむ事をば、いかでか傳へ知る樣のあらむとする。(九)一世の源氏、又納言、大臣になりて後に、更に(一〇)親王にもなり、(一一)位にも卽き給へるも、あまたの例ありけり、(一二)人がらのかしこきにことよせて、さもや讓り聞えまし、などよろづにぞ思しける。

一 冷泉の態度が
(二)常とは樣子が違ふを聰明なる源は怪み思へど
(三)冷泉が確に祕密を知れりとは思ひ寄らず
(四)冷泉
(五)冷泉の心
(六)我かの祕密を知れりと王命婦にも知らせたくなし
(七)我が今の場合に適應すべき先例
(八)王者の系統の正しからぬ事
(九)皇子にて源姓を給はりし人
(一〇)是忠親王、兼明親王などの例
(一一)光仁天皇、桓武天皇などの例
(一二)源の人物賢明なりとの廉にて帝位を源に讓らんかなど。

は盡きぬるにやあらむ、物心ぼそく例ならぬ心地のみなむするを、天の下も斯くのどかならぬに、よろづ(一)あわたゞしくなむ。(二)故宮の思さむ所によりてこそ、世の中のことも思ひ憚りつれ、今は(三)心安きさまにても、過さまほしくなむ」と語らひ聞え給ふ。源「いとあるまじき御事なり。世の靜ならぬことは、必ず政事の(四)直くゆがめるにもより侍らず。(五)さかしき世にしもなむ、善からぬことども侍りける。聖の帝の世にも、よこざまの亂出で來ること、唐土にも侍りける。我國にも然なむ侍る。まして(六)理の齡どもの、時至りぬるを思し歎くべき事にも侍らずなど、すべて多くの事どもを聞え給ふ。(七)片端まねぶもいとかたはらいたしや。常よりも黑き御よそひに、やつし給へる御容貌、(八)違ふ所なし。上も年頃(九)御鏡にも思しよる事なれど、聞し召しゝ事の後は、又細に見奉り給ひつゝ、まことにいとゞ哀に思しめさるれば、(一〇)いかでこの事をかすめ聞えばやと思せど、(一一)流石にはしたなくも思しぬべき事なれば、若き御心地に(一二)つゝましくて、ふともえ(一三)打出で聞え給はぬ程は、た

(一)心安からず
(二)從來故宮の思はくを憚りて讓位も申出でざりしが
(三)退隱して氣樂に暮したし
(四)正しきと邪なると
(五)賢明なる帝の世
(六)死ぬべき老人の時節到來して死にたるを
(七)其一端を書述ぬるも
(八)源と冷泉と
(九)源と我と容貌の似たりと氣附かぬに非れども
(一〇)僧都に聞きし事を源にほのめかしたし
(一一)源が極り惡く思ふべき事なれば
(一二)言ひ出しにくゝて
(一三)言ひ出さぬ中は

つる程こそ侍りつれ、やう〳〵御齢足りおはしまして、何事も辨へさせ給ふべき時に至りて、咎(一)をも示すなり。よろづの事、(二)親の御世より始まるにこそ侍るなれ。何の罪とも知ろしめさぬが恐ろしきにより、(四)思ひ給へ消ちてし事を、更に心より(三)出し侍りぬること」と、泣く〳〵聞ゆるほどに、明けはてぬれば(五)まかで〻ぬ。

上は、夢のやうに、いみじき事を聞し召して、いろ〳〵に思し亂れさせ給ふ。(六)故院の御ためもうしろめたく、(七)大臣の斯くたゞ人にて世に仕へ給ふも、哀に辱かりける事、かた〴〵思し惱みて、日闌くるまで出でさせ給はねば、(八)斯くなむと聞き給ひて、大臣も驚きて參り給へるを、御覽ずるにつけても、いとゞ忍び難く思し召されて、御涙のこぼれさせ給ひぬるを、(九)おほかた(一〇)故宮の御事を、(一一)ひるよなく思召したる頃なればなゝめりと、見奉り給ふ。その日(一二)式部卿の親王亡せ給ひぬるよし奏するに、いよ〳〵世の中の騷がしきことを(一三)歎き思したり。かゝる頃なれば、大臣は里にもえまかで〻給はで、(一四)つと侍ひ給ふ。しめやかなる御物語の序に、(一五)「世

(一)天が
(二)天變も親の御世の事に起因せり
(三)然るに此天變は何の爲といふことを御存知なきが
(四)一旦口に出ざしと決心せし事を
(五)僧都退出
(六)桐壺帝
(七)源氏
(八)冷泉御不例と
(九)源の心
(一〇)藤壺
(一一)涙の乾く時なく
(一二)槿齋院の父
(一三)冷泉が
(一四)內裏に詰切り
(一五)我命數の盡きしにや

事ありて、御(一)祈仕う奉らせ給ふ故なむ侍りし。委しくは法師の心にえ悟り侍らず。事(二)のたがひめありて、大臣横ざまの罪にあたり給ひし時、(三)いよ〳〵懼ぢ思しめして、重ねて御祈ども承(四)り侍りしを、大臣も聞しめしてなむ、又(五)更に事加へ仰せられて、御(六)位に即きおはしましゝまで、仕う奉る事ども侍りし。その(七)承りしやう」とて、委(八)しく奏するを聞し召すに、あ(九)さましう珍らかにて、恐ろしうも悲しうも、さま〴〵に御心亂れけり。とばかり御答もなければ、僧都、進み奏しつるを便(一〇)なく思召すにやと、煩はしう思ひて、やをら畏まりてまかり出づるを、召し留めて、冷泉「心に知らで過ぎなましかば、後(一一)の世までの咎あるべかりける事を、今(一二)まで忍び籠められたりけるをなむ、かへりて後めたき心なりと思ひぬる。又(一三)この事を知りて、漏し傳ふる類やあらむ」と宣はす。僧都「更に某(一四)と王命婦とより外の人、この事の氣色見たる侍らず。然るによりなむ、いと恐ろしう侍る。天變頻にさとし、世の中靜ならぬは、このけ(一五)なり。幼(一六)く、物の心知ろしめすまじかり

(一)私に命じて
(二)事變の爲
(三)藤壺が
(四)私が
(五)一層嚴重に祈禱を命ぜられて
(六)冷泉が
(七)祈禱を命ぜられし趣意は云々
(八)源と藤壺との關係を
(九)冷泉の心
(一〇)不埒と冷泉が思召すのかと
(一一)死後までも
(一二)今迄汝が隠し居たるを水くさく思ふ
(一三)汝の外に此事を知れる者ありや
(一四)私と
(一五)此故なり
(一六)冷泉が幼時はさも無かりしが

されぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひ給へらるゝ事を、心(一)にむせび侍りつゝ、命終り侍りなば、何の益かは侍らむ。佛も(二)心ぎたなしとや思し召さむ」とばかり、奏しさして(三)、えうち出でぬことあり。上、(四)何事ならむ、この世に恨残る(五)べく思ふことやあらむ、法師は聖といへども、あるまじき横ざまのそねみ深く、うたてあるものを、と思して、冷泉「いはけなかりし時より、隔て(六)思ふことなきを、そこに(七)は斯く忍び殘されたる事ありけるをなむ、つらく思ひぬる」と宣はすれば、僧都「あなかしこ。更に佛のいさめ(八)守り給ふ眞言の深き道をだに、隱しとゞむることなく、廣め(九)仕うまつり侍り。まして心にくま(一〇)あること、何事にか侍らむ。これは來し方行くさきの大事(一一)と侍ることを、過ぎおはしましにし院后の宮(一二)、たゞ今世をまつりごち給ふ大臣(一三)の御ため、すべて、かへりて(一四)善からぬ事にやもり出で侍らむ。かゝる老法師の身には、たとひうれへ(一五)侍りとも、何の悔か侍らむ。佛天の告あるによりて奏し侍るなり。我君(一六)はらまれおはしましたりし時より、故宮(一七)の深く思し歎く

(一)胸に秘して
(二)念を殘して死にたらば
(三)奏しかけて言ひ兼ねたる
(四)冷泉の心
(五)念の殘る程に思込みたる
(六)汝には隱す事なきに
(七)汝が隱しだてするは恨めし
(八)佛の祕せと戒めたる
(九)傳授し奉れり
(一〇)隱すこと
(一一)一大事なるが
(一二)死なれたる桐壺帝藤壺
(一三)源氏
(一四)後に外より漏れたらば却て不爲なるべし
(一五)之によりて難儀に及ぶとも
(一六)冷泉の藤壺の胎に宿りし時より
(一七)藤壺

源　入日さす峯にたなびくうす雲はものおもふ袖に色やまがへる

人聞かぬ所なればかひなし。(一)

(二)御わざなども過ぎて、事どもしづまりて、帝物心ぼそく思したり。この入道の(三)宮の御母后(四)の御世より傳りて、御祈の師にて侍ひける(五)僧都、故宮(六)にもいとやむごとなく親しきものに思したりしを、おほやけにも重き御おぼえ(七)にて、厳しき御願ども多くたてて、世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、今は終の行(八)をせむとて籠りたるが、宮(九)の御事によりて出でたるを、内裏より召ありて、常に侍はせ給ふ。(一〇)この頃は猶もとの如く参り侍はるべきよし、大臣(一一)もすゝめ宣へば、僧都「今は夜居(一二)などいと堪へ難う覺えはべれど、仰言のかしこきにより、ふるき御(一三)志をそへて」とて侍ふに、靜なる曉に、人も近く侍はず、あるは退出などしぬる程に、古代(一四)にうちしはぶきつゝ、世の中の事ども奏し給ふ序に、僧都「いと奏し難く、かへりて(一五)は罪にもやまかり當らむと思ひ給へ憚る事多かれど、知ろしめ(一六)

(一)歌よみても

(七)夜居の僧、源氏が帝の實父なる由を奏す

(二)法事

(三)藤壺

(四)桐壺の前の帝の后

(五)宮中に伺候せる

(六)藤壺

(七)冷泉も篤く信仰して

(八)最後の勤行

(九)藤壺

(一〇)宮中に

(一一)源も僧都に

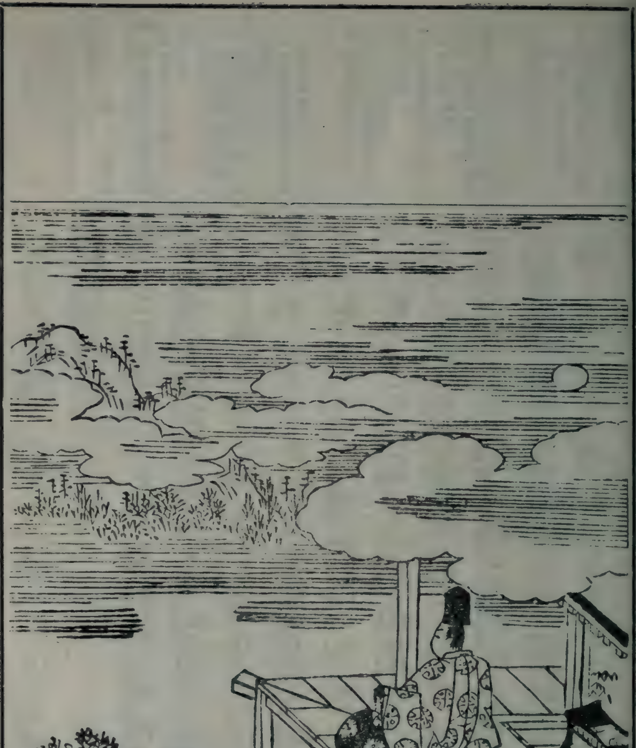
(一二)寢ずの番

(一三)藤壺の篤き思召をも思ひて勤むべし

(一四)老人らしく

(一五)奏したらば却て

(一六)御存亡なき故に帝の罪重く



どの、世のためにも普く哀に(一)おはしまして、豪家(二)にことよせて、人の愁とあることなども、おのづからうちまじるを、聊もさやうなる事の亂なく、(三)人の仕う奉ることをも、世の苦とあるべき事をばとどめ給ふ。(四)功德の方とても、(五)勸むるにより給ひて、嚴しう珍らしうし給ふ人など、昔の賢しき世にも皆ありけるを、これはさやうなる事なく、たゞもとよりの寶物、(六)え給ふべき年官、年爵、御封のもの、(七)さるべき限して、まことに心深き事どもの限をしおかせ給へれば、(八)何とわくまじき山伏などまで惜み聞ゆ。(九)をさめ奉るにも、世の中ひゞきて悲しと思はぬ人なし。殿上人など、なべて(一〇)ひとつ色に黑みわたりて、物の榮なき春の暮なり。二條院の御前の櫻を御覽じても、(一一)花の宴の折など思し出づ。源「(一二)今年ばかりは」とひとりごち給ひて、人の見咎めつべければ、御念誦堂に籠り居給ひて、日一日泣き暮し給ふ。夕日花やかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄く渡れるが、(一三)鈍色なるを、(一四)何事も御目とゞまらぬ頃なれど、いと物あはれに思さる。

(一)誰にも恩深く
(二)權貴を憑みて動もすれば人の迷惑を顧みず恣なる事は一般の習なるに
(三)人のしてくれる事も
(四)佛いじり
(五)人の勸に乘りて大層なる事をする人多かりしを、諸帝は然らず
(六)當然給せらるゝ
(七)支出して差支なき分だけを功德の方に遣ひて
(八)分別もあるまじき
(九)葬式にも
(一〇)喪服を著て
(一一)源が
(一二)「深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」堀川の大臣逝去の時、上野岑雄のよめる歌
(一三)鼠色
(一四)悲の爲何も目につかぬ

く人々おほかり。女院「院(一)の御遺言にかなひて、内裏(二)の御後見仕う奉り給ふ事、年(三)頃思ひ知り侍る事多かれど、何につけてかは、その心よせ異なるさまをも漏し聞えむとのみ、長閑に思ひ侍りけるを、今なむ哀に口惜しく」と、ほのかに宣はするも、ほのぐ\聞ゆるに、御答も聞えやり給はず、泣き給ふ様いといみじ。(四)など斯うしも心弱き様にと、人目を思しかへせど、いにしへよりの御有様を(五)、大方(六)の世につけても、あたらしく惜しき人の御ありさまを、心(七)に叶ふわざならねば、かけ留め聞えむ方なく、いふかひなく思さるゝ事限なし。源「はかぐ\しからぬ身ながらも、昔より、御後見(八)仕う奉るべき事を、心の至るかぎりは、疎ならず思ひ給ふるに、太政大臣のかくれ給ひぬるをだに、世の中心あわたゞしく思う給へらるるに、又斯く(九)おはしませば、よろづに心亂れ侍りて、世(一〇)に侍らむ事も殘なき心地なむし侍る」と聞え給ふ程に、燈火などの消え入るやうにてはて(一一)給ひぬれば、いふかひなく悲しき事を思しなげく。(一二)かしこき御身の程と聞ゆる中にも、御心ばへな

(一)源にいふ詞
(二)源が
(三)感謝し居る事多けれども、其心を申上ぐるをりなきに苦みて心永く機會を待ち居しに
(四)源の心、斯う心弱くてはならぬ
(五)「御有樣を」の下に「思しつゞくるに」抔の句あるべき歟
(六)普通の人情から云ひても
(七)人の命は
(八)冷泉の
(九)藤壺危篤なれば
(一〇)我命も長からぬ心地
(一一)藤壺が逝去し
(一二)貴人といふ中にも、以下藤壺の性行をいふ

(一)冷泉が
(二)藤壺
(三)以下藤壺の心、運のよさ
(四)不滿に思ふ事も亦人に勝れたる身
(五)冷泉が一向源と藤壺との關係を知らぬを
(六)藤壺が
(七)氣のすまぬ
(八)死後迄念が殘る
(九)表向にも
(一〇)思切りて久しくなれる情交
(一一)藤壺の
(一二)病中も佛の勤を怠らざりし疲勞がこうじて非常に弱られたるに
(一三)手もつけず

ば、程(一)なく還らせ給ふも、悲しきこと多かり。宮(二)いと苦しうて、はかぐ〜しう物も聞えさせ給はず。御心の中に思しつゞくるに、高(三)き宿世、世の榮も竝ぶ人なく、心(四)の中にあかず思ふことも、人にまさりける身と思し知らる。上(五)の、夢の中にも、かゝる事の心を知らせ給はぬを、さすがに心苦し(六)う見奉らせ給ひて、これのみぞ、後めたくむすぼほれ(七)たる事に、思し置かるべき心地し給ひける。大臣はおほやけ(九)方樣にても、斯くやむごとなき人(八)の限、うち續き失せ給ひなむことを、思し歎く。人知れぬあはれはた限なくて、御祈など思し寄らぬことなし。年頃(一〇)思し絶えたりつる筋さへ、今一度聞えずなりぬるが、いみじく思さるれば、近き御几帳(一一)のもとによりて、御有樣などさるべき人々に問ひ聞き給へば、親しきかぎり侍ひて細に聞ゆ。女房「月頃(一二)惱ませ給へる御心地に、御行を時の間もたゆませ給はず、せさせ給ふつもりの、いとゞいたうくづほれさせ給へるに、此頃となりては、柑子などをだに、觸(一三)れさせ給はずなりにたれば、頼み所なくならせ給ひにたる事」と、歎

(一)冷泉が桐壺に別れし時は
(二)此度は分別もつきたれば
(三)死を
(四)大病にも非りし故
(五)死期を前知せる顔をするも
(六)死後の冥福を祈る佛事供養なども常なみにしたり
(七)參内して冷泉に對面して
(八)心のたしかな時
(九)腹に思ふのみにて
(一〇)冷泉が
(一一)冷泉の心
(一二)氣分すぐれずして
(一三)冷泉が萬事に手をつくす
(一四)此頃になりて源も心配す

行幸などあり。(一)院に別れ奉らせ給ひし程は、いといはけなくて、物深くも思されざりしを、(二)いみじう思し歎きたる御氣色なれば、宮もいと悲しく思し召さる。藤壺「今年は必ず(三)遁るまじき年と思う給へつれど、(四)おどろ〳〵しき心地にも侍らざりつれば、(五)命のかぎり知り顔に侍らむも、人やうたて事々しう思はむと憚りてなむ、(六)功徳の事なども、わざと例よりも取り別きてしも侍らずなりにける。(七)參りて心のどかに昔の御物語も、など思ひ給へながら、(八)うつしざまなる折少く侍りて、口惜しう(九)いぶせくて過ぎ侍りぬること」と、いと弱げに聞え給ふ。三十七にぞおはしましける。されどいと若く盛におはします樣を、惜しく悲しと(一〇)見奉らせ給ふ。(一一)愼ませ給ふべき御年なるに、(一二)晴々しからで月頃過ぎさせ給ふことをだに、歎きわたり給ひつるに、御つゝしみなどをも常よりも異にせさせ給はざりけること、といみじう思召したり。たゞこの頃ぞ、驚きて、(一三)よろづの事せさせ給ふ。月頃は常の御惱とのみうちたゆみたりつるを、(一四)源氏のおとゞも深く思し入りたり。限あれ

(一)辭表を出せし時の事
(二)太政大臣に押附けて
(三)十五歳
(四)源が心配するには及ばれども
(五)冷泉の後見役を誰に讓りて出家の願を遂げん
(六)葬式法事
(七)太政大臣の子や孫よりも
(八)朝廷に怪異多く
(九)雲の樣子に怪むべき處あり
(一〇)陰陽博士天文博士等の意見書
(一一)源氏
(一二)胸に當る事、冷泉の實はわが子なる事
(一三)藤壺重病、次いで逝去

し歎く。暫し籠り(一)給へりし程をだに、天の下のさわぎなりしかば、まして悲しと思ふ人多かり。源氏の大臣も、いと口惜しう、よろづの事押し譲り(二)きこえてこそ、暇もありつるを、心細く事繁くも思されて、歎きおはす。帝は、御年(三)よりはこよなう大人々々しうねびさせ給ひて、世のまつりごとも、(四)後めたく思ひ聞え給ふべきにはあらねども、又とりたてて御後見し給ふべき人もなきを、(五)誰に譲りてかは、靜なる御本意もかなはむと思すに、いと飽かず口惜し。(六)後の御わざどもにも、(七)御子ども孫に過ぎてなむ、こまやかに訪ひあつかひ聞え給ひける。その年おほかた世の中騒がしくて、おほやけざまに物のさとし繁く、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月日星の光(八)見え、雲(九)のたゝずまひありとのみ、世の人驚く事多くて、(一〇)道々の勘文ども奉れるにも、怪しう世になべてならぬ事どもまじりたり。内の大臣(一一)のみなむ、御心の中に煩はしく思し(一二)知らるゝ事ありける。

(一三)入道后の宮、春の初より惱み渡らせ給ひて、三月にはいと重くならせ給ひぬれば、

(一)源が食ふ
(二)明石邸へは嵯峨の寺桂殿等へ行くに託してのみ行き、わざわざ行く事はなけれど
(三)目に見えて明石上を輕々しく扱ふ事はせぬのが明石上が重んぜられる驗の樣に見える
(四)過分と源に思はれる樣な擧動はせず
(五)違背する事無く
(六)源が立派な女の處でさへ我許にての樣には打解けぬと明石上が兼々聞居たれば
(七)二條東院へ徙りては輕蔑を招く種なるべし
(八)特に訪れ來られる處に誇がある
(九)入道も氣強く言切りはしたものの、源の我娘に對する仕向を知りたく
(一〇)使だけは度々よこして問合せ
㊄ 太政大臣薨去
(一一)葵上の父
(一二)柱石たりし人
(一三)朝廷

ばかりは(一)聞し召す時もあり。(二)近き御寺、桂殿などにおはしまし紛らはしつゝ、いとまほには亂れ給はねど、又(三)いとけざやかにはしたなく、おしなべての樣にはもてなし給はぬなどこそは、いと覺殊には見ゆめれ。女もかゝる御心の程を見知り聞えて、(四)過ぎたりと思すばかりの事はしいでず、又いたく卑下せずなどして、御心おきてにも(五)もて違ふことなく、いと目やすくぞありける。(六)おぼろげにやむごとなき所にてだに、斯ばかりもうち解け給ふ事なく、氣高き御もてなしを聞き置きたれば、(七)近き程にまじらひては、なかなかいと目なれて、人あなづられなる事どもぞあらまし、たまさかにてもかやうに(八)ふりはへ給へるこそたけき心地すれ、と思ふべし。(九)明石にも、さこそいひしか、この御心おきて有樣をゆかしがりて、(一〇)おほつかなからず人は通はしつゝ、胸つぶるゝこともあり、又おもだたしく、嬉しと思ふことも多くなむありける。

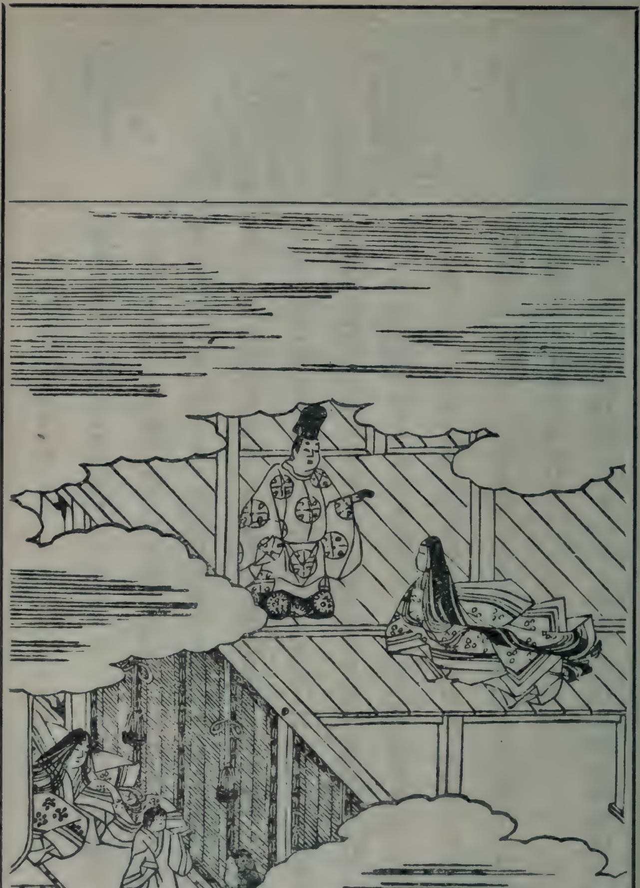
その頃(一一)太政大臣亡せ給ひぬ。(一二)世のおもしとおはしつる人なれば、(一三)おほやけにも思

はいでや」など語らひあへり。

彼所には、（一）いとのどやかに、心ばせあるけはひに住みなして、家の有様も様はなれて珍らしきに、（二）みづからのけはひなどは、（三）見る度ごとに、やむごとなき人々に劣る差別こよなからず、容貌用意あらまほしうねびまさり行く。（四）たゞ尋常のおぼえにかきまぎれたらば、さる類なくやはと思ふべきを、世に似ぬひがものなる親の聞えなどこそ苦しけれ、（五）人の程などはさてもあるべきものを、など思す。わづかに飽かぬ程にのみあればにや、（六）心のどかならず立ちかへり給ふも苦しくて、（七）「夢のわたりの浮橋か」とのみうち歎かれて、箏の琴のあるを引き寄せて、かの明石にて小夜ふけたりし音も、（八）例の思し出でらるれば、琵琶をわりなく責め給へば、少しかき合せたる、（九）いかで（一〇）斯うのみひき具しけむと思さる。若君の御事など、こまやかに語り給ひつゝおはす。

こゝは（一一）斯る所なれど、かやうに立ちとまり給ふ折々あれば、はかなき菓物、強飯

（一）大堰邸
（二）都と一風かはりて
（三）明石上の容姿
（四）源の心、明石上の身元が尋常の國守などならば其が出世して貴人の間に交るも有勝と思ひてすむべきを、父親の頑固が知れ渡り居る丈に人に注目されて困る
（五）女の人柄に不足は無いが
（六）明石上の處にはいつも滿足する程居た事なき故か忙しく歸るのが嫌で
（七）「世の中は夢のわたりの浮橋か打渡しつゝ物をこそ思へ」
（八）源が
（九）明石上が
（一〇）どうして斯ろ何につけても缺點のなきならん
（一一）源が



しめ裝束き給ひて、(一)まかり申し給ふさま、くまなき夕日に、いとゞしく淸らに見え給ふを、女君(二)たゞならず見奉り送り聞え給ふ。姫君はいはけなく、御指貫の裾にかゝりて、(三)慕ひ聞え給ふほどに、(四)外にも出で給ひぬべければ、(五)立ちとまりて、いと哀と思したり。(六)こしらへ置きて、源「(七)明日かへり來む」と口ずさびて出で給ふに、渡殿の口に待ちかけて、(八)中將の君して聞え給ふ。

紫(九)船とむるをちかた人のなくばこそあすかへりこむ夫とまち見め

いたう馴れて聞ゆれば、いと匂ひやかにほゝゑみて、

源(一〇)行きて見てあすもさねこむなか〳〵にをちかた人は心おくとも

何事とも聞きわかでざれ歩き給ふ人を、(一一)上はうつくしと見給へば、(一二)遠方人のめざましさも、(一三)こよなく思し免されにたり。(一四)いかに思ひおこすらむ、我にてはいみじう戀しかりぬべき樣をと、(一五)うちまもりつゝ、懷に入れて、美しげなる御乳をくゝめ給ひつゝ、戲れ居給へる御さま見所多かり。御前なる人々は、(一六)「などか。同じく

（一）紫に暇乞する
（二）源のおめかしを氣にかけて
（三）源の跡を追ふ
（四）顯の外泊も
（五）源が
（六）姫をだまして置きて
（七）催馬樂「櫻人その船ちゞめ島つ田を十町作れる見て歸り來んやそよや明日歸り來んやそよや」
（八）紫附の侍女
（九）向ふに明石上といふ女なくばこそ明日の御歸をも期すべきが中々そうはゆかじ、催馬樂の詞によりてよめり
（一〇）明石上が機嫌惡くするとも明日は歸るべし上の催馬樂の第二段「言をこそ明日とも言はめ遠方に妻さるせなれば明日もさね來じやそよやしあすもさね來じやそよや」
（一一）明石姫
（一二）紫上
（一三）明石上の怪しからぬも免す事が出來た
（一四）明石上は姫の身上をさぞ案じて居るならん是が自分ならば堪へられぬ悲しさならんに
（一五）姫を見つめつゝ
（一六）なぜ紫には御子が無いぞ、同じ物なら御實子でありたい

ぎの人も、心の中には思ふ事もやあらむ、うはべは、誇りかに見ゆる頃ほひなりかし。東の院の(一)對の御方も、有様は好ましう、あらまほしき樣に、侍ふ人々童の姿など、(二)うちとけず心づかひしつゝ過し給ふに、(三)近きしるしはこよなくて、長閑なる御暇の隙などには、(四)ふとはひ渡りなどし給へど、夜立ち泊りなどやうに、(五)わざとは見え給はず。たゞ、(六)御心ざまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめ、と思ひなしつゝ、ありがたきまで後やすく、のどかに物し給へば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御有樣に劣るけぢめ、こよなからずもてなし給ひて、侮り聞ゆべうはあらねば、(七)おなじごと、人も參り仕う奉りて、別當家司どもも事怠らず、なか〳〵亂れたる所なく、めやすき御有樣なり。

(八)山里の徒然をも絶えず思しやれば、公私物騷しき程過して、渡り給ふとて、常より殊に(九)うちけさうじ給ひて、櫻の御直衣に、えならぬ御衣ひき重ねて、(一〇)たき

(一)花散里
(二)しだらくならぬ樣常に注意して
(三)源の近處に居るお蔭はありて
(四)源のひよつくり來る事あれど
(五)わざ〳〵は來ず
(六)花散の氣立温順にて何事も我身の運と諦らめ何處迄も氣がおけぬ穩かさに、源も萬事の仕向けを緊に目立ちて劣る樣にはせず人に侮られぬ樣に待遇する
(七)紫の方と同樣に
㊃源氏大堰の邸に行く
(八)源が明石上の退屈さを
(九)めかし給ひて
(一〇)香を衣裳に

(一)平日も絶間なき來客故
(二)此寂しさも我心からぞと明石上が後悔する也
(三)前に養子にやれと勸めはしたれども
(四)姫にとては身を卑下して却て何一つ贈らず、奉公の人々に珍らしき色合の衣裳を贈りたり
(五)明石上が待遠にして殊に姫をやりて後は果して來なくなれるよと思はんも氣の毒故
(六)源が大堰へ
(七)明石姫
(八)源が明石上へ
(九)紫上も姫君に免じて悋氣もせず
(目)新年
(一〇)源の
(一一)年賀の人々は年始の禮に子どもなど引連れて二條院へ伺候せり

給へる客人ども、たゞ旦暮の(一)差別しなければ、あながちに目もたゞざりき。たゞ姫君の襷引結給へる胸つきぞ、美しげさ添ひて見え給へる。大堰には、盡きせず戀しきにも、身の(二)おこだりを歎き添へたり。然こそ(三)いひしか、尼君もいとゞ涙もろなれど、斯くもてなしかしづかれ給ふを、聞くは嬉しかりけり。(四)何事をかはなかなか訪ひ聞え給はむ。たゞ御方の人々に、乳母より初めて、世になき色あひを思ひ急ぎてぞ、贈り聞え給ひける。(五)待遠ならむも、いとゞさればよと思はむに、いとほしければ、年の内に忍びて(六)渡り給へり。いとゞ淋しき住居に、旦暮の(七)かしづきぐさをさへ離れ聞えて、思ふらむことの心苦しければ、(八)御文なども絶間なく遣す。女君(九)も、今は殊に怨じ聞え給はず、うつくしき人に罪免し聞え給へり。

年もかへりぬ。うらゝかなる空に、思ふ事なき(一〇)御有様はいとゞめでたく、磨き改めたる御よそひに、參り集ひ給ふめる人の、(一一)おとなしき程のは、七日の御悦などし給ふ引連れ給へり。若やかなるは、何ともなく心地よげに見えたり。つぎつ

(一)明石姫
(二)紫上の室にて姫に
(三)さがして
(四)泣顔をする故
(五)源の心、明石上は姫を手放して一層手持無沙汰ならんと思へば氣の毒なれど
(六)紫が明暮思の儘に姫を育てたらば自ら似合はしき心地するならん
(七)人の批難すべき所なき紫の子は生れずして殘念、紫の實子ならば批難もなかるべきが、養子なれば其處が噂の種にもなるべしと也
(八)姫が誰彼を探して
(九)姫の性質
(一〇)紫上に馴染みて
(一一)紫が
(一二)紫が
(一三)乳母を今一人抱へたる也
(一四)特に準備といふ程の事もなけれど
(一五)袴著の祝當日に

小き御調度ども、美しげに整へさせ給へり。乳母の局には、西の渡殿の、北に當れるをせさせ給へり。(一)若君は道にて寢給ひにけり。抱きおろされて、泣きなどはし給はず。(二)此方にて御菓子まゐりなどし給へど、やう／＼見廻らして、母君の見えぬを(三)もとめて、らうたげに(四)うちひそみ給へば、乳母召し出でて、慰めまぎらはし聞え給ふ。(五)山里のつれ／＼、ましていかにと思しやるはいとほしけれど、(六)旦暮思す樣にかしづきつゝ見給ふは、物あひたる心地し給ふらむ。いかにぞや(七)人の思ふべき瑕なきことは、このわたりに出でおはせで、と口をしく思さる。暫時は(八)人もとめて泣きなどし給ひしかど、おほかた心安くをかしき(九)心ざまなれば、(一〇)上にいとよくつき睦び聞え給へれば、いみじう美しき物得たりと(一一)思しけり。(一二)他事なく抱きあつかひ翫び聞え給ひて、乳母もおのづから、近う仕う奉り馴れにけり。又やむごとなき人の乳ある、(一三)添へて參り給ふ。御袴著は、何ばかり(一四)わざと思し急ぐ事はなけれど、氣色ことなり。御しつらひ、雛遊の心地してをかしう見ゆ。(一五)參り

(一)車を
(二)明石姫が母の袖を
(三)何時此子の出世を見得る事ぞ
(四)源の心
(五)我と君と契深き中に生れし此子なれば終には我と君と相並びて此子の榮ゆる生先を見るべし、武隈の松は二本並びたる陸奧の名木
(六)氣を長くして待て
(七)明石上が氣を取直せども
(八)侍女の名
(九)小兒の側に飾置く人形、後世の犬張子の類
(一〇)副車
(一一)明石上を氣の毒に思ひて罪な事をしたと源が思ふ
(一二)二條院に
(一三)附添來れる女等の
(一四)斯る處の奉公は極りが惡いと思ひしが
(一五)別に明石姫の室として修飾して

り。姫君は何心もなくて、御車に乗らむことを急ぎ給ふ。(一)寄せたる所に、母君みづから抱きて出で給へり。片言の、聲はいと美しうて、(二)袖をとらへて、乘り給へと引くもいみじう覺えて、

明石　末とほき二葉の松にひきわかれ(三)いつか木だかきかげを見るべき

えも言ひやらず、いみじう泣けば、(四)然りや、あな苦し、とおぼして、

源「(五)おひそめし根も深ければたけくまの松に小松の千代をならべむ

(六)のどかにを」と慰め給ふ。然ることとは(七)思ひしづむれど、えなむ堪へざりける。乳母、(八)少將とてあてやかなる人ばかり、御佩刀、(九)天兒やうの物取りて乘る。(一〇)人だまひによろしき若人、童など乘せて、御送にまゐらす。道すがら、(一一)留りつる人の心苦しさを、いかに罪や得らむと思す。

(一二)暗うおはし著きて、御車寄するより、花やかにけはひ異なるを、(一三)田舍びたる心地どもは、(一四)はしたなくてや交らはむと思ひつれど、(一五)西面を殊にしつらはせ給ひて、



（一）我住所は山里故雪に鎖されて路嶮くとも何卒音信してくれよ、ふみ―踏み、文
（二）假令雪深き吉野山の奥なりとも尋ねて御音信は必ず申上ぐべし
● 明石姫君紫上方に引取らる
（三）源が大堰邸へ
（四）姫を連れに來れるならんと思へば
（五）是も畢竟我が仕出來したる事と後悔す
（六）明石上の心、我了簡でどうにもなる事、否といふを強て連引く事あらじ、遣るのはつまらぬ
（七）今になりて斷るは
（八）姫が
（九）源が
（一〇）此子の生れたは大抵の因縁とは思はれぬ
（一一）のばす姫の髮
（一二）切下げ尼の髮位の長さにて
（一三）此子を人の物にして案じ暮す親の心は嘸と
（一四）繰返し言ひきかす
（一五）卑しき腹に生れし子ぞと輕蔑せられぬ樣にさへして下さらば滿足

明石「（一）雪ふかき深山のみちは霽れずともなほふみかよへ跡たえずして

と宣へば、乳母うち泣きて、

乳母「（二）ゆきまなき吉野の山をたづねてもこゝろのかよふ跡たえめやは

と言ひ慰む。

この雪少し解けて（三）渡り給へり。例は待ち聞ゆるに、（四）さならむと思ふ事により、胸うちつぶれて、（五）人やりならず覺ゆ。（六）わが心にこそあらめ、否び聞えむを強ひてやは、あぢきな、など覺ゆれど、（七）輕々しき樣なりと、せめて思ひかへす。（八）いと美しげにて、前に居給へるを（九）見給ふに、（一〇）疎には思ひ難かりける人の宿世かなと思ほす。この春より（一一）生ほす御髮、（一二）尼そぎの程にて、ゆらゆらとめでたく、頰つきまみの薫れる程など、いへば更なり。（一三）餘所の物に思ひやらむ程の、心の闇推しはかり給ふに、いと心苦しければ、（一四）うちかへし宣ひ明す。明石「何か、かく（一五）口惜しき身の程ならずだに、もてなし給はば」と聞ゆるものから、念じあへずうち泣くけはひ哀な

(一)乳母に泣別れては彌便なき
(二)緣でがなあらう、不圖御奉公申上げて
(三)是ぎりといふ事はあるまじ
(四)本意ならぬ人交り
(五)明石上が
(六)明石姫
(七)明石上が
(八)如何なる貴人と雖も此位なものならんと思はる
(九)姫を手放して後此樣な天氣の日などは

に、いとゞ(一)たづきなき事をさへ取添へ、いみじう覺ゆべきことと君も泣く。乳母も、「さる(二)べきにや、覺えぬさまにて見奉りそめて、年頃の御心ばへの、忘れ難う戀しう覺え給ふべきを、(三)うちたえ聞ゆることはよも侍らじ。終にはと頼みながら、暫しにても餘所々々に、(四)思のほかのまじらひし侍らむが、安からずも侍るべきかな」など、うち泣きつゝ過す程に、十二月にもなりぬ。

雪霰がちに心細さ増りて、怪しくさま〴〵に物思ふべかりける身かなと、(五)うち歎きて、常よりもこの(六)君を撫でつくろひつゝ居たり。雪かきくらし降り積るあした、來し方行くさきの事、殘らず(七)思ひつゞけて、例はことに端近なる出居などもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよゝかなる數多著て、ながめゐたる容體、頭つき、うしろでなど、(八)限なき人と聞ゆとも、かうこそおはすらめと見ゆ。おつる涙をかい拂ひて、明石「か(九)やうならむ日、まして如何に覺束なからむ」と、らうたげに打泣きて、

(一)何かにつけて大事にされてこそ人に重んぜられぬ種ともなる
(二)どの樣に取扱はれるか見て居よ
(三)尼公などの賢き思慮を聞きてもトなどさせて見ても養子にやるが得策なりとのみいふ故、明石上も其氣になる
(四)源氏
(五)明石上の心が氣の毒
(六)どうしたら宜からう
(七)腑甲斐なき私の側に姫を置きては
(八)姫の爲に氣の毒に
(九)養子にあげたらば又若し姫が人に笑はれる事もやと心配
(一〇)吉日を擇ばせて
(一一)明石姫引取の用意
(一二)明石上の心
(一三)明石姫
(一四)乳母にも別れるのが悲し
(一五)乳母と語り合ひて

る人出でものし給はば、こよなく消たれ給ひなむ。程々につけて、親にもひとふしもてかしづかれぬる人こそ、やがて貶しめられぬはじめとはなれ。(一)御袴著のほども、いみじき心をつくすとも、かゝる深山がくれにては何の榮かあらむ。たゞ任せ聞え給ひて、(二)もてなしきこえ給はむ有樣をも聞き給へ」と敎ふ。(三)さかしき人の心のうらどもにも、物問はせなどするにも、なほ渡り給ひては勝るべしとのみいへば、思ひよわりにたり。(四)殿も然思しながら、(五)思はむ所のいとほしさに、強ひてもえ宣はで、源「御袴著の事(六)いかやうにか」と宣へる、御返に、明石「よろづの事、(七)かひなき身にたぐへ聞えては、げに生先も(八)いとほしかるべく覺え侍るを、(九)たちまじりて、いかに人笑へにや」と聞えたるを、いと哀におほす。(一〇)日など取らせ給ひて、忍びやかに、(一一)さるべき事など宣ひおきてさせ給ふ。(一二)放ち聞えさせむことは、なほいと哀に覺ゆれど、(一三)君の御爲によかるべき事をこそは、と念ず。(一四)乳母をもひき別れなむこと、明暮の物思はしさ、つれ〴〵をも(一五)打ち語らひて慰めならひつる

生先遠き人の御上も、(一)遂にはかの御心にかゝるべきにこそあゝめれ、然りとならば、げに斯う何心なき程にや讓り聞えまし、と思ふ。又手を放ちて(二)うしろめたからむこと、徒然も慰む方なくては、いかゞ明し暮すべからむ。何につけてか、(三)たまさかの御立寄もあらむ、など樣々思ひ亂るゝにも、身の憂き事かぎりなし。尼君思ひ(四)やり深き人にて、「あぢきなし。(五)見奉らざらむことは、いと胸いたかりぬべけれど、(六)遂にこの御爲によかるべからむ事をこそ思はめ。(七)淺く思して宣ふ事にはあらじ。(八)たゞうち頼み聞えて、渡し奉り給ひてよ。母方がらこそ、(九)帝の御子もきは〳〵におはすめれ。(一〇)この大臣の君の、世に二つなき御有樣ながら、(一一)世に仕へ給ふは、(一二)故大納言の、今ひときざみなり劣り給ひて、更衣腹といはれ給ひし差別にこそおはすめれ。ましてたゞ人はなずらふ(一三)べき事にもあらず。又親王(一四)たち大臣の御腹といへど、なほさし向ひたるおとりの所には、人も思ひおとし、親の御もてなしも、え齊しからぬものなり。ましてこれは、(一五)(一六)やむごとなき御方々にかゝ

(一)明石姫の將來も紫の了簡次第なるべければ、成程頑是なき中に紫の養子にやるが得策ならん歟
(二)手放しては氣懸り
(三)源も稀にも立寄らじ
(四)思慮深き人
(五)姫に別れて暮すは
(六)末始終此子の爲になる工夫が肝腎
(七)源が
(八)源に任せて姫を遣れ
(九)皇子と雖も母の貴賤によりて身分が違ふ
(一〇)源氏
(一一)臣列に在るは
(一二)桐壺更衣の父が他の妃の父より身分劣りたる爲更衣が女御たり得ざりし故なり
(一三)猶更の事
(一四)親王大臣の娘にて本妻ならぬ女の腹に生れたる子をば身分劣れる本妻の子よりも他人も輕蔑し父も輕視す
(一五)明石姫は
(一六)明石上以上の貴き御妾に子が生れたら頭があがらぬ筈

見ならはせて、袴著のことなども、人知れぬ樣ならずしなさむ、となむ思ふ」と、まめやかに語らひ給ふ。然思すらむと思ひ渡る(一)事なれば、いとゞ胸つぶれぬ。明石上「改めて(二)やむごとなき方にもてなされ給ふとも、人の漏り聞かむことは、なかなかにやつくろひ難く思されむ」とて、(三)放ち難く思ひたり。源「理にはあれど、(四)後安からぬ方にやなどは、な疑ひ給ひそ。(五)かしこには、年經ぬれどかゝる人も無きがさうざうしく覺ゆるまゝに、前齋宮のおとなび物し給ふをだにこそ、あながちにあつかひ聞ゆめれば、ましてかく(六)惜み難げなゝめる程を、疎には思ひ放つまじき心ばへになむ」と、女君の御有樣の思ふ(七)やうなる事も語り給ふ。(八)げに古は、いかばかりの事に定り給ふべきにかと、傳にもほの聞えし御心の、名殘なくしづまり給へるは、おぼろげの御宿世にもあらず、(九)人の御有樣も、こゝらの御中に勝れ給へるにこそはと、思ひやられて、(一〇)數ならぬ人のならび聞ゆべき覺えにもあらぬを、(一一)さすがに立出でて、人も目ざましと思すこともやあらむ、我身はとてもかくても同じ事、

(一)明石上が前から推測せる
(二)紫の養子にして重く扱ひても、内實を聞きて兎や角噂する人の口に戸は立てられじ
(三)娘を手放し難く
(四)養母の扱振につきての心配は無用
(五)紫には今に子のなきが寂しくて、大人の秋好をさへ強ひて子供扱ひにして居る位故
(六)憎みたくても憎まれぬ愛らしき此子を
(七)源の氣に入りたる
(八)明石上の心、どの位の人を本妻にはする事ぞと噂された源が紫で浮氣をやめたるは
(九)紫の人となりが人に勝れたるなるべし
(一〇)卑しき自分如きが肩を並べる譯にはゆかぬのに
(一一)自分が出舍張りたらば紫が感情を惡くすべし

薄雲

梗槩

❶ 源氏、養女の事を明石上に謀る。明石上の煩悶。養女の話纏まる。❷ 明石姫君、紫上方に引取らる。實母の悩。❸ 新年。花散里の靜なる生活。❹ 源氏大堰の邸に行く。明石上の身を省みたる分別。❺ 太政大臣(葵上の父)薨去。天變。❻ 藤壺重病。次いで逝去。源氏の深き悲。❼ 夜居の僧、冷泉帝に源氏が帝の實父なる事を奏す。帝の煩悶。❽ 冷泉帝、位を源氏に讓らんとす。源氏の疑惑。❾ 秋好の宿下り。源氏、秋好を訪ひ、春秋の優劣を問ふ。秋に心を寄する秋好。秋好に猶心ある源氏の自省。源氏大堰の邸に行く。

❶ 源氏、養女の事を明石上に謀る、養女の事纏まる
(一) 大堰川に臨める明石上の邸
(二) 落着かぬ心地
(三) 源氏
(四) 二條東院に移るべく決心せよ
(五) 明石上の心、「宿かへて待つにも見えずなりぬればつらき處の多くもある哉」
(六) 慰める餘地のなき
(七)「恨みての後さへ人のつらからば如何に言ひてか音をも泣くべき」
(八) 明石姫
(九) 此儘置くは不都合
(一〇) 此子の將來につきては窃に期する所あり、此儘に育つるは勿體なし
(一一) 紫が聞きてほしがり居る故姫を暫時紫に馴染ませて袴著の祝を公に立派にせんと思ふ

冬になり行くまゝに、(一)河づらの住居いとゞ心細さまさりて、(二)うはの空なる心地のみしつゝ、明し暮すを、(三)君も、「なほ斯くてはえ過さじ。(四)かの近き所に思ひ立ちね」と勸め給へど、(五)つらき所多く試みはてむも(六)殘なき心地すべきを、(七)いかに言ひてか、などいふ樣に思ひ亂れたり。源「さらば(八)この若君を、(九)斯くてのみは便なきことなり、(一〇)思ふ心あればかたじけなし、(一一)對に聞き置きて常にゆかしがるを、しばし

て、源「まことは、(一)らうたげなるものを見しかば、(二)契浅くも見えぬを、さりとて(三)物めかさむ程も憚多かるに、思ひなむ煩らひぬる。(四)同じ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定め給へ。いかゞすべき。(五)こゝにて育み給ひてむや。(六)蛭の子が齢にもなりにけるを、罪なき様なるも思ひすて難うこそ。(七)いはけなげなる下つかたも、紛らはさむなど思ふを、(八)目ざましと思さずば、ひき結ひ給へかし」と聞え給ふ。紫「(九)思はずにのみとりなし給ふ御心のへだてを、せめて見知らずうらなくやはとてこそ。(一〇)いはけなからむ御心には、いとよう叶ひぬべくなむ。いかに美しき程に」とて、少しうち笑み給ひぬ。(一一)兒をわりなうらうたきものにし給ふ御心なれば、得て抱きかしづかばやと思す。(一二)いかにせまし、(一三)迎へやせましと思し亂る。(一四)渡り給ふこといとかたし。嵯峨野の御堂の念佛など待ち出でて、月に二たびばかりの御契なゝめり。(一五)年のわたりには、立ちまさりぬべかゝめるを、(一六)及びなきことと思へども、なほいかゞ物思はしからぬ。

(一)明石姫
(二)我子と思へば可愛きに
(三)腹が卑しき故鄭重に育てもならぬ故
(四)我と一緒に心配してくれぬか
(五)其方が養子にしてくれぬか
(六)三歳、蛭子神三歳にして足立たず岩楠船に載せて放たる神代史の傳説
(七)三歳なれば袴着の祝もさせたく思ふが
(八)けしからん事をさせられると思はぬならば祝の時に袴を著せる役をしてくれぬか
(九)貴方が人の氣も知らずにわけ隔をなさる故私も其を知らぬ振して打解けても居られねば悋氣もすれ實は左程にも思はぬ
(一〇)其子の機嫌はよく取り得べし、どんなに美しからん
(一一)紫は子ずき故
(一二)源の心
(一三)明石姫を
(一四)源が大堰へ
(一五)七夕の一年一度の契よりはましなれども
(一六)是以上の事は叶はぬ事と明石上が諦めては居るものゝ

ひ留めしにひかされて、今朝はいとなやまし」とて、大殿ごもれり。(一)例の心とけず見え給へど、見知らぬやうにて、源「(二)なずらひならぬ程をしひて思しくらぶるも、わろきわざなゝめり。我はわれと思ひなし給へ」と、教へ聞え給ふ。暮れかゝる程に、内裏に參り給ふに、(三)ひきそばめて急ぎ書き給ふは、かしこへなゝめり。側目こまやかに見ゆ。(四)うちさゞめきてつかはすを、御達など憎み聞ゆ。その夜は(五)内裏にも侍ひ給ふべけれど、解けざりつる御氣色とりに、夜更けぬれどまかで給ひぬ。(六)ありつる御かへりもて參れり。え引き隱し給はで御覽ず。(七)殊に憎かるべきふしも見えねば、源「これ破り隱し給へ。むづかしや。かゝるものの散らむも、今はつきなき程になりにけり」とて、御脇息に寄り居給ひて、御心のうちには、(九)いと(八)哀に戀しう思しやらるれば、火をうちながめて、殊に物も宣はず。文はひろごりながらめれど、女君見給はぬやうなるを、源「(一〇)せめて見隱し給へ。御まじりこそ煩はしけれ」とて、うち笑み給へる、御愛敬所せきまでこぼれぬべし。さし寄り給ひ

(一)紫は不機嫌なれど源は知らぬ顔にて
(二)比較にもならぬ明石上を強ひて自分に比較して悋氣するはくだらぬ事ぢや
(三)隱して源が手紙かくは明石上へやるならん、側から見て大分懇な手紙らしい
(四)内證で言附けて遣るを
(五)内裏に宿直もすべきなれど、紫の不機嫌を取直さんとて遲くなりたれど歸れり
(六)明石上への手紙の返事
(七)紫に見せても憎まれそうな文面もなき故紫に渡して
(八)不似合な年輩
(九)明石上が
(一〇)せめて此手紙を隱してでもくれ、其目附が氣がかりぢや

りけり。

右大辨(一)雲の上のすみかをすてて夜半の月いづれの谷にかげかくしけむ

心々に數多あンめれど、うるさくてなむ。(二)氣近ううちしづまりたる御物語、少しうちみだれて、(三)千年も見聞かまほしき御有樣なれば、(四)斧の柄も朽ちぬべけれど、(五)今日さへはとて急ぎ歸り給ふ。物ども(六)品々にかづきて、霧の絶間に立ちまじりたるも、前栽の花に見えまがひたる色あひなど、殊にめでたし。(七)近衞寮の名高き舍人、(八)物の節どもなどさぶらふに、さうざうしければ、(九)「その駒」など亂れ遊びて、(一〇)ぬぎかけ給ふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと見ゆ。のゝしりて歸らせ給ふ響を、大堰には物隔てて聞きて、名殘さびしうながめ給ふ。(一一)消息をだにせでと、大臣も御心にかゝれり。

(一二)殿におはして、とばかりうちやすみ給ふ。山里の御物語など(一三)聞え給ふ。源「(一四)暇聞えし程過ぎつれば、いと苦しうこそ。(一五)このすきものども尋ね來て、いといたう強

(一)夜半の月は桐壺を喩へたり、桐壺の崩御を悼める也
(二)源の態度、打和らぎてしめやかなる
(三)千年でも此儘に居たしと人々が思ふ
(四)きりが無さそうなれど、晉の王質石室山にて仙人の圍碁を見歸らんとして立てば腰かけたりし斧の柄朽ちてありしといふ故事
(五)今日まで居續ける譯にはゆかぬ
(六)階級に隨ひて頂戴して
(七)近衞寮の舍人は職務上神樂催馬樂をよくす
(八)近衞寮の舍人中東遊に達したる者
(九)神樂歌「其駒ぞや我に我に草乞ふ草は取飼はん轡取り草は取飼はん水は取飼はんや」
(一〇)人々のぬぎて舍人に與ふる衣の色々
(一一)明石上に斷もせずして歸るを源も心掛りに思ふ
●明石姫君を紫上の養女にすべき相談
(一二)二條院
(一三)紫に
(一四)約束の日限延びし故
(一五)彼の好事なる人々

ごささへ添へたる物の音をめでて、また醉ひ加はりぬ。こゝには、(一)まうけの物も侍らはざりければ、大堰に、「(二)わざとならぬまうけのものや」と、言ひ遣したり。(三)とりあへたるに從ひて參らせたり。衣櫃二荷にてあるを、御使の辨は疾くかへり參れば、女の裝束(四)かづけ給ふ。

源　(五)久かたのひかりに近き名のみしてあさゆふ霧も晴れぬやまざと

行幸まち聞え給ふ御心ばへなるべし。源「(六)なかに生ひたる」とうち誦じ給ふついでに、かの淡路島をおぼし出でて、躬恒が「(七)處がらかも」と、(八)おぼめきけむ事など宣ひ出でたるに、物哀なる醉ひ泣きどももあるべし。

源　めぐりきて手にとるばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月

(九)頭中將、

(一〇)うき雲にしばしまがひし月影のすみはつるよそのどけかるべき

右大辨、(一一)すこしおとなびて、故院の御時にも、むつまじう仕うまつりなれし人な

(一)使に賜ふべき物
(二)仰山らしからぬ有合の引出物ありや
(三)有合せたるものを
(四)辨に
(五)名は桂とて月に緣ある立派な名なれども霧のみ深くて光もなし、あはれ行幸もありて光を添へ給へやの意を含む
(六)「久方の中におひたる里なれば光をのみぞ賴むべらなる」
(七)「淡路にてあはと遙に見し月の近き今宵は處がらかも」
(八)疑ひけん
(九)今都に歸りて恋に見る此清光は果して明石にて見しと同じ月なる歟
(一〇)暫しの厄難晴れての今後は源の繁榮長久なるべし
(一一)記者の注、此人は老人にて桐壺に昵近の人なり

出でらる、野(一)に泊りぬる君達、(二)小鳥しるしばかりひき附けさせたる荻の枝など、土産にして參れり。御酒(三)あまた度順ながれて、川のわたり危(四)ふげなれど、醉に紛れておはしましくらしつ。おの〳〵絶句など作りわたして、月花やかにさし出づる程に、(五)大御遊はじまりて、いと今めかし。ひきもの、琵琶、和琴ばかり、笛ども上手のかぎりして、折にあひたる調子吹きたつる程、川風吹き合せておもしろきに、月高くさしあがり、よろづの事澄める夜のやゝ更くる程に、殿上人四五人ばかり(六)連れて參れり。(七)上に侍ひけるを、御遊ありけるついでに、冷泉「今日は六日(八)の御物忌あく日にて、必ず參(九)り給ふべきを、如何なれば」と仰せられければ、こゝに斯う泊らせ給ひにけるよし聞召して、(一〇)御消息あるなりけり。御使は藏人の辨なりけり。

冷泉「(一一)月のすむ河のをちなる里なればかつらの影はのどけかるらむ

羨ましう」とあり。(一二)かしこまり聞えさせ給ふ。(一三)上の御遊よりも、なほ所がらのす

(一)前に鷹狩の爲後れたりと噂されし人々が昨夜野宿したる也
(二)鷹狩したりといふ申譯程小鳥をつけたる
(三)幾度も盃が廻りて
(四)醉ひて
(五)音樂
(六)相伴ひて
(七)此人々は殿上に伺候して居しに、帝の御前にて音樂ありし序に
(八)六日間の謹愼
(九)源が參內すべき筈なるに來ざるは如何
(一〇)冷泉より
(一一)源が
(一二)名に負ふ桂川の向なれば桂里の月影はさぞ面白かるべし、桂の里を月の桂にかけたり
(一三)御使の人達が御所の音樂よりも此所のは又ひとしほ感心して



たり。人影(一)を見つけて、靱負「來し方の物忘れし侍らねど、かしこければ(二)えこそ。浦風(三)覺え侍る曉の寢覺にも、驚かし(四)聞えさすべきよすがだになくて」と、氣色ばむを、女房「八重(五)たつ山は、更に島がくれにも劣らざりけるを、松も昔のとたどられつるに、忘れぬ人ものし給ひけるに、頼もし」などいふ、こよなしや(六)、我も思ひなきにしもあらざりしを、など、あさましう覺ゆれど、今殊更に(七)と、うちけざやぎて參りぬ。いとよそほしく(八)さし歩み給ふ程、かしがましう追ひ拂ひ(九)て、御車のしりに、頭中將、兵衞督のせ給ふ。源「いとかる〴〵しき隱所、見顯されぬること妬う」と、いたう辛がり(一〇)給ふ。頭中將等「昨夜の月に、口惜しう御供に後れ侍りにける、と思ひ給へられしかば、今朝霧をわけて參り侍る。山の錦(一一)はまだしう侍りけり。野邊(一二)の色こそ盛に侍りけれ。なにがしの朝臣の、小鷹(一三)にかゝづらひて立ち後れ侍りぬる、如何なりぬらむ」などいふ。「今日はなほ桂殿に」とて、其方ざまにおはしましぬ。俄なる御饗應(一四)しさわぎて、鵜飼(一五)ども召したるに、海士(一六)のさへづり思し

(一)明石時代の知合の侍女を見附けしなり
(二)憚りて何も申上げず
(三)明石を思出す
(四)御音信申す便もなく
(五)雲深き此山里の寂しさは明石にも劣らぬに
(六)案外な挨拶
(七)追附け態々訪問すべしと思ひてわざといそいそとして源の御伴せり
(八)源が立派に
(九)人拂ひして
(一〇)痛み入られる
(一一)紅葉はまだ早し
(一二)秋草
(一三)小鷹狩をし居し爲に後れしが
(一四)後を慕ひ來たる殿上人等に對する饗應
(一五)桂川は鵜飼の名所
(一六)須磨明石の事

(一)源の
(二)暫時の別もつらい
(三)明石上は何處ぞ
(四)別を
(五)出て別を惜んでくれたらば
(六)乳母が
(七)明石上は
(八)餘りに上流婦人らしき態度と源が思ふ
(九)明石上が
(一〇)横顔
(一一)皇女と言ひても不足なし
(一二)隔になれる几帳の垂布を源が引上げて顔見合はして
(一三)明石上があれ程落附いて見せたけれども
(一四)源の姿
(一五)ひよろ高かりしが
(一六)釣合の取れる
(一七)買冠りの贔負目なるべし
(一八)源の連坐に藏人を免職せられし男も復職せり
(一九)五位に叙せられたり
(二〇)昔とかはりて

て、(一)立ち給へるを慕ひ給へば、つい居給ひて、源「怪しう物思ひ絶えぬ身にこそありけれ。(二)しばしにても苦しや。(三)いづら。など諸共に出でては(四)惜み給はぬ。(五)さらばこそ人心地もせめ」と宣へば、(六)うち笑ひて、女君にかくなむと聞ゆ。(七)なかなか物思ひ亂れて臥したれば、とみにしも動かれず。(八)あまり上手めかしと思したり。人もかたはら痛がれば、(九)しぶしぶに膝行出でて、几帳にはた隱れたる(一〇)かたはらめ、いみじうなまめいて、由あり、たをやぎたるけはひ、(一一)御子達といはむにも足りぬべし。(一二)帷子引きやりて、こまやかに語らひ給ふ。出でたまふとて、とばかり顧み給へるに、(一三)さこそしづめつれ、見送り聞ゆ。(一四)いはむ方なき盛の御容貌なり。いたう(一五)そびやき給へりしが、(一六)少しなりあふ程になり給ひにけり。御姿など、かくてこそ物々しかりけれと、御指貫の裾まで、なまめかしう愛敬のこぼれ出づるぞ、(一七)あながちなる見なしなるべき。(一八)かの解けたりし藏人もかへりなりにけり。靫負の尉にて、(一九)今年かうぶり得てけり。(二〇)昔にあらため、心地よげにて、御佩刀取りに寄り來

しと思ほせど、又思はむ事いとほしくて、(一)えうち出で給はで、涙ぐみて見給ふ。(二)幼き心地に、少し恥らひたりしが、やうやううち解けて、物いひ笑ひなどして、(三)むつれ給ふを見るまゝに、にほひ勝りてうつくし。(四)抱きておはする樣、見るかひありて、(五)宿世こよなしと見えたり。

またの日は京へ歸らせ給ふべければ、少し大殿籠り過して、やがて(六)これより出で給ふべきを、桂の院に人々多く參り集ひて、(七)こゝにも殿上人あまた參りけり。御裝束などし給ひて、源「(八)いとはしたなきわざかな。かく見顯はさるべき隈にもあらぬを」とて、さわがしきに引れて出で給ふ。(九)心苦しければ、さりげなく紛らはして、立ちとまり給へる戶口に、乳母、若君懷きてさし出でたり。哀なる御氣色にかき撫で給ひて、源「(一〇)見ではいと苦しかりぬべきこそ、いとうちつけなれ。いかゞすべき。(一一)いと里遠しや」と宣へば、乳母「(一二)遙に思う給へたりつる年頃よりも、今からの御もてなしの覺束なう侍らむは、心つくしに」など聞ゆ。若君手をさし出で

(一)明石上の心中も可愛想で言出し得ず
(二)明石姫
(三)源に親しむ
(四)源が
(五)明石姫の運のよさが思はれる
㊄歸途桂殿に寄す
(六)大堰邸から歸るべきを
(七)大堰邸へも
(八)甚だ極りが惡い
(九)殊に暇乞もせぬが明石上に氣の毒なれば
(一〇)現金なれど此子を見ずに居るは苦痛に感ずる
(一一)「里遠み如何にせよとか斯くのみは暫しも見ねば戀しかるらん」
(一二)明石に遠く離れ居し今迄は兎に角、是からの御無沙汰は却て氣がもめる

（一）多くの人に割附けらる
（二）大堰邸に
（三）明石にて明石上に逢ひし夜の事
（四）明石上が
（五）源が
（六）昔を思出して
（七）約束通り琴の調子が變りて居らぬを以て我心の變らぬを察し給へ
（八）松風に聲を和して泣き暮しつる事よ
（九）不釣合に思はれぬは明石上の果報といふべし
（一〇）年と共に美しくなれる明石上を見れば迚も棄つる氣にはなれず、明石姫も可愛ゆくて何時迄も見つめて居る
（一一）源の心
（一二）明石姫が日陰者で育つのが
（一三）紫の子にして十分に育てたらば將來皇后にもせん時に批難なかるべし

釋迦の念佛の三昧をばさるものにて、又々加へ行はせ給ふべき事、定め置かせ給ふ。堂のかざり、佛の御具など、（一）めぐらし仰せらる。月の明きに（二）歸り給ふ。（三）ありし夜の事思し出でらるゝ折過さず、かの琴の御琴（四）さし出でたり。（五）そこはかとなく物哀なるに、え忍び給はでかきならし給ふ。まだ調も變らず、（六）ひきかへし、そのをり今の心地し給ふ。

源　（七）契りしにかはらぬ琴のしらべにて絶えぬこゝろのほどは知りきや

女、

明石　かはらじと契りしことをたのみにて（八）松のひゞきに音をそへしかな

と聞えかはしたるも、（九）似げなからぬこそは、身に餘りたる有樣なめれ。（一〇）こよなうねびまさりにける容貌けはひ、え思ほし棄つまじう、若君はた、盡きもせずまもられ給ふ。（一一）如何にせまし、（一二）隱ろひたるさまにて生出でむが、心苦しう口惜しきを、（一三）二條院にわたして、心の行くかぎりもてなさば、後のおぼえも罪免れなむか

(一)入道は
(二)感想色々なり
(三)子故の心配を御察し下されたれば生甲斐あり
(四)明石姫
(五)腹が賤しき故其が妨になりはせぬかと色々に心配する
(六)品格ある故
(七)尼の祖父中務卿宮が此邸に住みし時の事を尼に語らせて聞く
(八)手入したる
(九)昔住みし我は却て此邸不案内にて、庭の清水の方が主人らし
(一〇)仰山に歌はず
(一一)古井は舊を忘れざるべきが昔の主なる君は成程顏違ひもしたるならん、いさらゐは小井
(一二)尼が感嘆する
(一三)十四日普賢、十五日阿彌陀、晦日釋迦の念佛常行三昧

彼處には、如何に留りて思ひおこせ給ふらむと、様々になむ(二)」と、いとなつかしう宣ふ(一)。尼「捨て侍りし世を、今さらに立歸り思ひ給へ亂るゝを、推しはからせ給ひ(三)ければ、命ながさのしるしも思ひ給へ知られぬる」と、うち泣きて、尼「荒磯かげに、心苦しうおもひ聞えさせ侍りし二葉の松(四)も、今は頼もしき御生先と、いはひ聞えさするを、淺き(五)根ざしゆゑや如何と、かたぐ\心盡され侍る」など、聞ゆるけはひ由なからねば(六)、昔物語に、親王(七)の住み給ひける有様など語らせ給ふに、(八)つくろはれたる水の音なひ、かごとがましう聞ゆ。

尼「住み馴れし人はかへりてたどれども清水ぞやどのあるじがほなる(九)

わざとはなくて言ひ消つさま(一〇)、みやびかによしと聞き給ふ。

源「いさらゐ(一一)ははやくのことも忘れじをもとのあるじや面がはりせる

あはれ」とうち眺めて立ち給ふ姿にほひ、世に知らずのみ思ひきこゆ(一二)。

御寺に渡り給ひて、月ごとの十四五日つごもりに、行はるべき普賢講(一三)、阿彌陀、

(一)源が前に披露したりし故
(二)庭石
(三)趣ある樣に拵へたらば
(四)一時の假住居を念入に手入するはつまらぬ事ぢや
(五)其儘居著く事もならねば
(六)明石時代の事
(七)遣水の模樣
(八)源の
(九)尼の心
(一〇)佛に水を奉る具
(一一)源が尼を
(一二)其ならば我姿が餘りしだらくであつた
(一三)尼の
(一四)明石姫がよく育ちたるは尼君の祈念疎ならぬ故と感謝する
(一五)棄果てし浮世に歸りてくれたる御志有難し

る。桂の院に渡り給ふべしと(一)ありければ、近き御庄の人々、參り集りたりけるも、皆尋ね參りたり。前栽どもの折れ伏したるなど、つくろはせ給ふ。源「こゝかしこの立石(二)どもも、皆轉び失せたるを、情(三)ありてしなさば、をかしかりぬべき所かな。(四)かゝる所をわざと繕ふも、あいなきわざなり。(五)さても過しはてねば、立つ時物憂く、心とまる、苦しかりき」など、(六)來し方の事ども宣ひ出でて、泣きみ笑ひみうちとけ給へる、いとめでたし。尼君のぞきて見奉るに、老も忘れ物思も晴るゝ心地して、うち笑みぬ。東の渡殿の下より出づる(七)水の心ばへ、つくろはせ給ふとて、いとなまめかしき袿姿(八)、うちとけ給へるを、(九)いとめでたう嬉しと見奉るに、(一〇)閼伽の具などのあるを見給ふに、(一一)思し出でて、源「尼君は此方にか。(一二)いとしどけなき姿なりけりや」とて、御直衣召し出でて奉る。(一三)几帳のもとに寄り給ひて、源「(一四)罪輕くおふし立て給へる人の故は、御行のほど哀にこそ思ひなし聞ゆれ。いといたく思ひすまし給へりし御住所を捨てて、(一五)うき世に歸り給へる志淺からず。又

渡り給ひぬ。たそがれ時におはしつきたり。狩の御衣にやつれ給へりしだに、世(一)に知らぬ心地せしを、まして然る(二)御心して引繕ひ(三)給へる御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば、(四)思ひ咽びつる心のやみも晴るゝやうなり。珍らしう哀にて、(五)若君を見給ふも、いかゞ淺くはおぼされむ。今まで隔てける年月だに、あさましく悔しきまで思す。(六)大殿ばらの君を、美しげなりと世人もて騒ぐは、なほ(七)時世によれば、人の見なすなりけり、(八)かくこそは優れたる人の山口はしるかりけれと、うち笑みたる顔の何心なきが、愛敬づき匂ひたるを、いみじうらうたしと思す。(九)乳母の、(一〇)下りし程は衰へたりし容貌、ねびまさりて、月頃の御物語など馴れて聞ゆるを、哀にさる(一一)鹽屋の傍に過しつらむことを、おぼし宣ふ。源「こゝにも、いと里離れて、(一二)渡らむことも難きを、なほ彼の本意ある所にうつろひ給へ」(一三)と宣へど、明石「いと初々しき程過して」と聞ゆるも、理なり。夜一夜、よろづに契り語らひ明し給ふ。繕ふべき所、所のあづかり、今加へたる家司などに仰せら

(一)明石時代の源の服裝
(二)無比の美しさと思ひしに
(三)めかす積で裝ひたる
(四)明石上等の
(五)明石姫君を源が
(六)葵上腹の夕霧、以下源の心
(七)母方の權勢に心惑かれて然思ふのぢや
(八)眞の美人となるべき人の芽ばえは斯くの通りよく分るものぢやと源が思ひて
(九)明石姫の
(一〇)源が下せし乳母
(一一)漁村の事に
(一二)尋ねて來るのがむつかしいから
(一三)我が望の所、二條東院



（一）明石なる親を慕ひて戀を琴に托する其音を聞き知る者もあらじ、こと—言、琴
圖　源氏明石上を訪ふ
（二）大堰邸へ源が訪問
（三）紫には確に知らせざりしが、跡での嫉妬を恐れて知らせる
（四）行くべき用事あるに
（五）尋ねてやる約束の人まで
（六）彩色せぬ佛なるべし
（七）紫の心、桂院は源の別莊にて明石邸とも御堂とも別なるを紫がよく知らずして一つに思ふ也
（八）明石上を
（九）不快なれば
（一〇）何時歸られる事やら、晉の王質石室山に入り斧に腰かけて仙人の圍碁を見る、歸らんとして起てば斧の柄既に朽ちたり、驚いて家に歸れば七世の孫に遇へり
（一一）調子の合せにくき
（一二）昔の浮氣は影も無いと世間でも言ふのに

御かた、

明石（一）故里に見し世の友を戀ひわびてさへづることをたれかわくらむ

かやうに物はかなくて明し暮すに、大臣、なか〳〵しづ心なく思さるれば、人目をもえ憚りあへ給はでわたり（二）給ふを、（三）女君には、斯くなむと確に知らせ奉り給はざりけるを、例の聞きもやあはせ給ふとて、消息聞え給ふ。源「桂に見る（四）べき事侍るを、いさや心にもあらで程經にけり。（五）とぶらはむと言ひし人さへ、かのわたり近く來居て待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、（六）かざりなき佛の御とぶらひすべければ、二三日は侍りなむ」と、聞え給ふ。（七）桂の院といふ所、俄に作らせ給ふと聞くは、（八）そこにすゑ給へるにやと思すに、（九）心づきなければ、紫「斧の（一〇）柄さへ改め給はむほどや、待遠に」と心ゆかぬ御氣色なり。源「例のくらべ苦しき（一一）御心かな。いにしへの有樣名殘なしと世の人もいふなるものを」と、（一二）何やかやと御心とり給ふ程に、日たけぬ。忍びやかに、御前疎きはまぜで、御心づかひして

(一)幾秋を明石に過して今我は都に歸るならん、浮木は船
(二)順風
(三)都に
(四)簡單に
(五)大堰邸の
(六)明石に似たれば
(七)十分手が届いて造りては無けれど、居馴染めば居られそうなり
(八)源が
(九)到着の饗筵
(一〇)源自身の訪問
(一一)明石上が都に來て却て心配多く
(一二)源に貰ひし琴
(一三)場合が非常に悲を誘ひて堪へ難き故
(一四)一人生れ變りて歸りたる思する故郷に

明石 (一)いくかへり行きかふ秋を過しつゝ浮木にのりてわれかへるらむ

(二)思ふ方の風にて、限りける日違へず(三)入り給ひぬ。人に見咎められじの心あれば、道の程も(四)輕らかにしなしたり。(五)家の様もおもしろうて、(六)年頃經つる海面に覺えたれば、所かへたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、哀なること多かり。作り添へたる廊など、故ある様に、水の流もをかしうしなしたり。(七)まだ細やかなるにはあらねど、住みつかば然てもありぬべし。親しき(八)家司に仰せ給ひて、(九)御まうけの事せさせ給ひけり。(一〇)渡り給はむことは、とかう思したばかる程に、日頃經ぬ。(一一)なか〳〵物思ひつゞけられて、棄てし家居も戀しうつれ〴〵なれば、(一二)かの御かたみの琴をかきならす。(一三)折のいみじう忍び難ければ、人離れたる方に打解けて少し彈くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君物悲しげにて寄り臥し給へる、起きあがりて、

尼 (一四)身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松かぜぞ吹く

ば、暫しかゝる(一)山がつの心を、亂り給ふばかりの御契こそはありけめ。天に生るる人の、あやしき三つの途に歸るらむ一時に思ひ擬へて、今日長く別れ奉りぬ。(二)(三)命盡きぬと聞召すとも、後の事思ほしいとなむな。さらぬ別に御心動し給ふな」など、言ひ放つものから、入道「(四)煙ともならむ夕までは、若君の御事をなむ、六時のつとめにも、なほ心ぎたなく(五)うちまぜ侍りぬべき」とて、これにぞうちひそみぬ(六)る。御車はあまた續けむも所せく、かたへ(七)づつ分けむも煩はしとて、御供の人々も、あながちに隱ろへ忍ぶれば、船にて忍びやかにと定めたり。辰の時に船出し給ふ。昔の(八)人も哀といひける浦の、朝霧隔たり行くまゝに、いと物悲しくて、入道は、心すみ(九)はつまじく、あくがれて眺め居たり。こゝら(一〇)年を經て今更に歸るも、なほ思ひつきせず、尼君は泣き給ふ。

尼(一一)　かのきしに心よりにし海士船のそむきしかたに漕ぎかへるかな

御かた、

(一)我を斯く惑ますべき前世の約束なるべし
(二)天人果報盡きて餓鬼畜生地獄の三惡道に歸る時
(三)我死せりと聞きても法事も營むな、死別を悲むな
(四)死ぬまでは
(五)思切惡く佛に願ふ事の一にせん
(六)泣面する
(七)一部分づつ
(八)「ほの〳〵と明石の浦の」の歌などを思へるならん
(九)煩惱が斷ちきれそうにもなく
(一〇)尼君が
(一一)彼岸の淨土に往かん事を望みて都を離れしに、棄てたる都に又立歸る事よ、海士―尼



らるゝ事多かりしかば、更に都に歸りて、(一)古受領のしづめる類にて、(二)貧しき家の蓬葎の、もとの有樣あらたむる事もなきものから、公私にをこがましき名をひろめて、親の御なきかげを、はづかしめむことのいみじさになむ、やがて世を捨てつる首途なりけりと、人にも知られにしを、(三)その方につけては、よう思ひ放ちてけりと思ひ侍るに、(四)君のやう〳〵おとなび給ひ、物思ほし知るべきに添へて、などかう(五)口惜しき世界にて錦をかくし聞ゆらむと、心の闇晴間なく歎きわたり侍りしまゝに、佛神を頼み聞えて、さりとも、斯う拙き身に引かれて、山がつの庵にはまじり給はじと、思ふ心一つに頼み侍りしに、(六)思ひより難くて、嬉しき事どもを見奉りそめても、(七)なか〳〵身の程をとざまかうざまに悲しう歎き侍りつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに、(八)かゝる渚に月日を過し給はむも、いとかたじけなう。(九)契ことに覺え給へば、(一〇)見奉らざらむ心惑はしづめ難けれど、この身は長く世を捨てし心侍りき。君達は、世を照し給ふべき光著けれ

(一)國守の古手などと言はれて公私につけて侮られ親を辱むるに忍びず、出家して都を出しは即ち世を捨てし也と人にも思はれしが
(二)貧しき……ものから」插入文
(三)一身の進退に就ては自ら思切よしと思ふに
(四)明石上が物心つくに隨ひ
(五)つまらぬ田舍であたら娘を日陰者にするのかと
(六)思も寄らず源に奉る事を得ても
(七)又却て自分の賤しきを悲みたれど
(八)明石姫が
(九)姫は其樣な運命の人では無く思はるれば
(一〇)姫を見ぬ我悲は忍び難ければど

(一)將來の幸福を祈る別れに臨みて
(二)都を出し時は夫と一緒なりしに、歸る今は夫に別れて路にも迷ふべし
(三)尼君の心、年來連添ひし事を思へば
(四)明石上
(五)今別れては再會は期もなきに、何を當に再會を契るべき
(六)見送りにでも一緒に出發し給へ
(七)色々の點からそう出來ぬ趣を入道が言ひて
(八)入道が氣懸りに思ふ
(九)他國に
(一〇)明石上の爲に
(一一)と思ひて來りし譯なるが

まなど、ゆゝしきまで、かく人に違へる身を、いま〱しく思ひながら、片時見奉らでは、いかでか過さむとすらむと、つゝみあへず。

入道「行くさきをはるかに祈る(一)別れ路にたへぬは老の涙なりけり

いともゆゝしや」とて、おし拭ひかくす。尼君、

もろともに都はいできこのたびやひとり野中の道にまどはむ

とて泣き(二)給ふ様、いと理なり。(三)こゝら契りかはして積りぬる年月の程を思へば、斯う浮きたる事を頼みて、捨てし世にかへるも、思へばはかなしや。(四)御かた、

明石「いきて又あひ見むことをいつとてか限も知らぬ世をば頼まむ(五)

(六)おくりにだに」と、切に宣へど、かたぐ〱につけて、(七)え然るまじき由を言ひつゝ、さすがに道のほども、いとうしろめたき(八)氣色なり。入道「世の中を捨て始めしに、かゝる人の(九)國に思ひ下り侍りしことも、たゞ君の(一〇)御ため思ふやうに旦暮の御かしづきも心に叶ふやうもや、(一一)と思ひ給へ立ちしかど、身の拙かりける際の、思ひ知

（一）夫の入道と同居せず
（二）娘が居なくなる以上は誰にひかされて留り居らんや
（三）一時の浮氣で逢ふ中さへ別れは悲しきに
（四）「みなれ木のみなれそなれて離れなば戀しからんや戀しからじや」
（五）偏屈な夫の容貌氣象は嬉しくもなけれど
（六）此處を死所として餘生を送る積で諸共に住み來りしに
（七）京より來て怨み居たる人々は
（八）又來て見る事はなるまじと
（九）今日出發といふ當日
（一〇）蟲の音まで忙しく思はれるに
（一一）明石上が
（一二）後夜の佛前の勤から直に起き居て
（一三）緣喜をいはへども
（一四）悲が
（一五）入道の心、明石姫は
（一六）我を見馴れて纏ひつき給へる此姫君を片時も見ずには是から居られまじと思へば涙を包みきれず
（一七）「心ざま」より「思ひながら」まで挿入文、性質抔が非常に人と違ひたる自分を忌むべき物に思ひながら

きか」と言ふよりほかの事なし。母君もいみじう哀なり。年頃だに、（一）同じ庵にも住まずかけ離れつれば、（二）まして誰によりてかはかけ留らむ。唯、（三）あだにうち見る人の、淺はかなる語らひだに、見なれそなれて（四）別るゝ程は、たゞならざめるを、まして（五）もて僻めたる頭つき、心おきてこそ頼もしげなけれど、又さる方に、（六）これこそは世を限るべき住家なゝめれと、ありはてぬ命を限に思ひて、契り過し來つるを、俄に行き離れなむも心細し。（七）若き人々のいぶせう思ひ沈みつるは、嬉しきものから、見捨て難き濱のさまを、（八）又はえしもかへらじかしと、寄する波に添へて、袖濡れがちなり。秋の頃ほひなれば、物のあはれ取重ねたる心地して、（九）その日とある曉、秋風涼しくて、（一〇）蟲の音もとりあへぬに、（一一）海の方を見出して居たるに、入道、例の後夜より（一二）深う起きて、鼻すゝりうちして、行ひいましたり。いみじう（一三）言忌すれど、誰も〱（一四）いと忍びがたし。若君は、（一五）いとも〱美しげに、夜光りけむ玉の心地して、袖より外に放ち聞えざりつるを、（一六）見馴れてまつはし給へる、（一七）心ざ

(一)大堰邸の邊は景色よくて海邊に似たり
(二)源の心、其樣な住居には明石上の人柄相應すべし
(三)瀧を控へたる建物
(四)大覺寺に
(五)明石上の邸は
(六)無造作に建てたる
(七)手を省きたる
(八)惟光見分の後は室内の裝飾まで源が工夫す
目　明石上大堰の邸に移る、大堰の寂しき住居
(九)迎の爲明石へ
(一〇)明石上が彌々上京と思ふと
(一一)我はどうして斯く心配が絶えぬ樣に出來て居るのであらうと源に關係なき人が羨しく思はる
(一二)娘と離れて暮す氣がかりさが

る人なれば、遣して、さるべき樣に此處彼處の用意などせさせ給ひけり。惟光「(一)あたりをかしうて、海面に通ひたる所のさまになむ侍りける」と聞ゆれば、(二)さやうの住居に、よしなからずはありぬべしと思す。造らせ給ふ御堂は、大覺寺の南にあたりて、(三)瀧殿の心ばへなど、(四)劣らずおもしろき寺なり。(五)これは川面に、えもいはぬ松蔭に、(六)何のいたはりもなく建てたる、寢殿の(七)ことそぎたる樣も、おのづから山里の哀を見せたり。(八)内のしつらひなどまで思し寄る。

親しき人々、いみじう忍びて(九)くだしつかはす。(一〇)遁れ難くて今はと思ふに、年經つる浦を離れなむことあはれに、入道の心ぼそくて一人留らむことを思ひ亂れて、よろづに悲し。すべてなどかく心づくしになり始めけむ身にかと、露のかゝらぬ類うらやましく覺ゆ。(一一)親達も、かゝる御迎にて上る幸は、年頃寢てもさめても願ひわたりし志の叶ふと、いと嬉しけれど、(一二)あひ見で過さむいぶせさの、堪へ難う悲しければ、晝夜思ひほれて、同じ事をのみ、「さらば若君をば見奉らでは侍るべ

のいたづらに荒れ侍りしかば、故民部大輔(一)の君に申し賜はりて、さるべき物など奉りてなむ、領じつくり侍るを」など、そのあたりの貯(二)の事どもを危げに思ひて、鬚がちにつなし(三)憎き顔を、鼻などうち赤めつゝはちぶき(四)いへば、入道「更にその田など様の事は、(五)こゝには知るまじ。唯年頃のやうに思ひてものせよ。券(六)などはここになむあれど、すべて世の中を捨てたる身にて、年頃(七)ともかくも尋ね知らぬを、そのことも今委しく(八)認めむ」などいふにも、大殿(九)のけはひをかくれば、煩はしく、その後物など多く受取りてなむ、急ぎ造りける。かやうに思ひ寄らむ(一〇)とも知り給はで、上らむ事を物憂がるも心得ずおぼし、若君(一一)のさてつく〴〵と物し給ふを、後の世に人の言ひ傳へむ、今ひときは人わろき疵にやと思ほすに、造り(一二)はててぞ、しか〴〵の所をなむ思ひ出でたると聞えさせける。人(一三)にまじらはむ事を吝しげにのみものするは、かく思ふなりけりと心得給ふ。口惜しからぬ心の用意の程かな、と思しなりぬ。惟光朝臣、例(一四)の忍ぶる道は、いつとなく、いろひ仕う奉

(一)中務宮の子孫なるべし、此人に私が上申して相續の代價を拂ひて我物とし作り居りますが
(二)所有物を取上げられはせぬかと危みて
(三)つんとしたるの意歟
(四)蜂を吹きて防ぐ様に空嘯き
(五)我は構はぬ故今迄通りと心得よ
(六)田畑の證書は我手にあれども
(七)其地所の事を僉議もせざりしが
(八)追てよく整理せん
(九)源の風を吹かせるので預も事面倒と思ひて
(一〇)入道が思附を源は知らずして
(一一)明石姫の田舍に寂しく成長するは外の聞えも宜しからじと思ひ居しに
(一二)大堰邸の修繕終りて、事の次第を入道が源に通知せり
(一三)源の心、明石上が人中に出るを嫌がるは
(一四)源の秘密にはいつも携はる人なれば

(一)見限りて
(二)急に人中に出ては間が惡く
(三)舊緣の所を便りて其處に落著かんと
(四)入用の物は明石から廻送する故
(五)形の如く住み得る樣に修繕してくれぬか
(六)私は
(七)源氏
(八)大井川附近が
(九)閑靜が御望ならば其點で當がはづれるならん
(一〇)其も差支なし、源の保護の下に立ちてと思ふ事ある故
(一一)家の内のこまかき手入
(一二)私の外に彼の邸を相續し居る持主なき故、のんきな田舍の事とて私が年來隱居し居たる譯也

人を、呼び取りて語らふ。入道「世の中を今はと思ひはてて(一)、かゝる住居に沈み初めしかども、末の世に思ひかけぬ事出できてなむ、更に都の住處覓むるを、俄に(二)まばゆき人中いとはしたなく、田舍びにける心地も靜なるまじきを、舊き所尋ねて(三)となむ思ひ寄る。然るべき物は(四)あげ渡さむ。修理などして、かたのごと(五)人住みぬべくは繕ひなされなむや」といふ。あづかり、「この年頃領ずる人ものし給はず、怪しき藪になりて侍れば、下屋(六)にぞ、繕ひて宿りはべるを、この春の頃より、(七)内の大殿の造らせ給ふ御堂近くて、かのわたり(八)なむ、いと人氣騷しうなりにて侍る。嚴しき御堂ども建てて、多くの人なむ造りいとなみ侍るめる。靜なる(九)御本意ならば、それや違ひ侍らむ」入道「何かそれも(一〇)。かの殿の御かげに、かたかけてと思ふことありて。おのづから追々に内の事ども(一一)はしてむ。まづ急ぎて大方の事どもを物せよ」といふ。預「自ら領ずる所に侍らねど、又知り(一二)傳へ給ふ人もなければ、かごかなる習ひにて、年頃かくろへ侍りつるなり。御庄の田畑などいふこと

しも、懐しう見所ありて細かなり。寝殿は(一)ふたけ給はず、時々渡り給ふ御休所にして、さる方なる御しつらひどもし置かせ給へり。

明石には御消息絶えず、今は(二)猶上り給ひぬべきことをば宣へど、女は猶我身の程を思ひ知るに、(三)こよなくやむごとなき際の人々だに、なか〳〵さてかけはなれぬ御有様のつれなきを見つゝ、物思ひまさりぬべく聞くを、(四)まして何ばかりの覚なりとてか、さし出でまじらはむ、(五)この若君の御面伏に、数ならぬ身の程こそあらはれめ、(六)たまさかに這ひ渡り給ふ序を待つことにて、人笑へにはしたなき事如何にあらむ、と思ひ亂れても、また、さりとて(七)斯かる所にて生ひ出で数まへられ給はざらむも、いとあはれなれば、ひたすらに(八)もえ恨み背かず。親達もげに理と思ひ歎くに、なか〳〵(九)心も盡きはてぬ。(一〇)昔母君の御祖父、中務の宮と聞えけるが、領じ給ひける所、大堰河の邊にありけるを、(一一)その御後、はか〴〵しうあひ繼ぐ人もなくて、年頃荒れ(一二)惑ふを思ひ出でて、かの時より傳はりて、宿守の様にてある

(一)あけ置きて源の休息所に宛て、其積の装飾を施す

㊀ 明石入道大堰の邸を修理す

(二)明石上の上京を促せども
(三)明石上の心、ずっと勝りたる身分の女でも棄つるでもなく寵するでも無き源の仕方に心配が絶えぬといふ噂なるに
(四)我如き者がどれ程の寵あればとてあの人々の中に顔を出されやう
(五)上京せば馬脚を露はして此子の恥になる計
(六)上京しても源の稀に來るを待つ位なもので、外聞惡く極り惡さはどの様ならん
(七)此子が田舎に育ちて人らしくも思はれぬのも可愛そうなれば
(八)源の招に
(九)途方にくれた
(一〇)明石上の母の祖父
(一一)其子孫
(一二)入道夫婦がなるべし

㊀花散里、六條東院に移る

(一)六條東院、源の別邸

(二)引取る

(三)事務所

(四)明石上の住居と定む

(五)幾つにも區劃して作りたるが

源氏物語

松風

梗槩

㊀花散里、六條東院に移る。㊁明石入道大堰の邸を修理して明石上を移らしめんとす。㊂明石上、母の尼、明石姫君と共に大堰の邸に移る。父との別。大堰の寂しき住居。㊃源氏明石上を訪ふ。邸内を修理せしむ。㊄　に歸らんとして桂殿に宴す。㊅歸京。紫上の嫉妬。明石姫君を紫上の養女にすべき相談。

東(一)の院つくり立てて、花散里と聞えし、(二)うつろはし給ふ。西の對、渡殿などかけて、政所(三)、家司など、あるべき樣にし置かせ給ふ。東の對は、明石の御方と思(四)しおきてたり。北の對は、殊に廣く造らせ給ひて、かりにても、哀と思して行末かけて契りたのめ給ひし人々の、集ひ住むべき樣に、隔(五)て〲しつらはせ給へる

源氏物語 貳 目錄

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

源氏物語

二

